
時の秒針

†HYUGA†

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

時の秒針

【Nコード】

N1965M

【作者名】

THYUGA+

【あらすじ】

“能力者”それは世界人口のほんの少数だけ占める特殊な体質を持った人類。“魂狩”ソウルテイカーそれは能力者にのみ現れる武器へと具現化される魂の総称。自ら過去の記憶を消し去った少年“不知火日向”だが世界は彼を再び闘いの運命へと連れ戻す。【時】の能力者として目覚めた少年の幼馴染の少女は世界から狙われる存在となる。そして少年は決意する。彼女を守るために自らの魂を振りかざすことを

【第1章：時の番人編】

第1章 “時の番人編” プロローグ〔とある戦争〕

これはとある戦争から始まる物語。

この戦争により多くの人が死に多くの人が裏切った。

世界を叫喚させるほど激しい戦争は約10日ほどで終戦を迎え多くの人間がその終戦を喜び合う。

だがこの戦争で得られた物はどこの人々にも何もなかった。

ただ残虐に人が死に多くの子ども達を苦しめ地獄へと突き落とす。それだけの無慈悲な戦争であったのだ。

そしてここにもまた1人の苦しむ少年がいた。黒髪に黒い瞳を持つ日本人の少年。彼の名前は

??side

ダッ………！！！！！！！！！！

耳の中から頭全体を揺さぶるような建物が崩れる音が耳に響いてくる。

その音にギリギリの所で頭を覚醒させた俺は確かめるように手を二三回ギュッギュッと握りしめた。

あれから何分　　いや。何時間たったかはわからない。

しかしそれでもまだ自分の生命の灯火が消えてないことは確信することができた。

それは両足が折れた痛みによる確信か。はたまた額の傷から流れ落ちた血が目染みた感覚による確信か……。

だが一番確信を得ることが出来る感覚はそんな悲痛なものではなく温かい背中感覚だった。

誰に運ばれてきたのはわからない。

もしかしたらそれは自分の作り出した妄想かもしれない……。

だが【俺】は気がついたときには誰も聞いてないかもしれないのに自分をここまで運んでくれた人物へと感謝の言葉を口にしていただけだった。

「ありがとうございます……」

俺のその声に反応したかのようにカツンツと脚が石に当たったような音がするが【彼】が気付くことはなかった

ガララッ……！！！！

不意にその瞬間。俺は後ろから瓦礫が崩れる音を耳にして慌てるように体を反応させる。

もしこの状態で敵に見つかったら確実に殺されてしまう。

そう思った俺は最早振るうこともできない刀を構える。

しかし俺の前に現れたのは俺の信頼する仲間の一人で音楽が好きな少年だった。

「【…な…】か？」

最初の言葉は俺の耳がよく聞こえないから何を言ったのかわからなかった。だがおそらくあれは俺の名前を言ったのだろう。

そう思った俺はその人物の期待のこもった言葉に答えるかのように少し微笑みながら口を開くのであった。

「【音弥^{おんいち}】さん??……無事だったんですね」

俺の口からはつきりと放たれたその名前に出てきた人物　音弥さんは安心したかのように深く息を吐き出していた。

「……ああ。何回か死にかけたがピンピンしてるよ。お前の方も無事で本当によかった。どこか致命傷になるような怪我とかはしてないか??」

「……はい。脚は両方折れてますけど特に問題はありません。……ただ意識は今にも飛びそうなんで意識無くなったらよろしくお願いします」

「ん。そうか……」

俺の状態を知った音弥さんはそう呟くとどこか悲しげな顔で空を見上げる。

でも確かにこんな死と隣り合わせみたいな赤い空だったら悲しくなったりもするな。そう思いながら俺は音弥さんと同じ様に真っ赤な空を見上げる。

”あの人”と同じ名前のあね赤い【空】を

『』……………『』

一時の沈黙が流れる。それはとても心地よいとは言い難いような沈黙であったが俺は嫌いにはなれない沈黙であった。音弥さんが俺を守っているかのようなそんな感じの沈黙が

だが自分はこの沈黙を破って聞かなければならないことがある。

そしてそのタイムリミットは少しずつ迫ってきていた。俺の意識がなくなりつつあるのだ。

完全に意識が消える前に……俺は聞かなければ。

そこまで考えた俺は朦朧とした意識の中。空間にひびをいれるかのように口を開いた。

「音弥さん……聞きたいことが……あるのですが」

「ん??なんだ??」

だけどそのときついにタイムリミットが訪れる。あたりの景色は赤から黒に変わりだし頭がなにも考えられなくなっていく。

だけど俺はそれでもその9つの言葉を絞り出すために唇を開く。確かめるためにしっかりと

「あに…きは…ぶじ…です…か？」

聞こえるか聞こえないか。そのはざまを行き来するような声でやつと9つの言葉を出せた。

そして音弥さんはすっかりその言葉を聞き取ってくれたようで俺の頭に手を置きポンポンと軽く2回優しく叩きニツコリと微笑みを浮かべた。

「ああ。心配いらない。だからお前はもうゆっくりと休め……」

安心できる優しい包み込むような言葉。その言葉を聞いた瞬間に俺

の意識はブラックアウトしていったのであった

音弥 s i d e

「……おやすみ。いい夢見るよ」

俺の目の前に横たわっている少年。その少年に優しく言葉をかけると俺はゆっくりと体を落ち着かせる。

少年のほうは俺の言葉に安心したのか気を失い今は安らかに寝息をたてている。

その表情はとてもあの少年だとは思えないほどだ。

しかし少年の安らかな眠りとは裏腹に俺は強い罪悪感を持たずにはいられなかった。

なぜなら俺はこの少年に嘘を付いたのである。

「【兄貴】……か」

意識を失う前に彼の口から放たれた確かなその言葉。それは彼が懐いてやまなかつた彼の兄貴分のことを示している。

そしてその男の死体を俺この目ではつきりと目にした。

腹のあたりにどす黒い血の後を残した俺の親友である少年の姿を

とても痛々しかった。

だが不思議と彼のするその顔は満足そうに安らかであった。

何かをやり遂げたような柔らかな顔。それが彼の兄貴であり俺の親友の死に顔だった。

なんであんなに安らいだ顔で逝ったんだ？何に満足したんだ？

俺は頭の中で数々の思考を巡らす。だが目の前の少年とは違い俺の頭はいたって普通。何も思い浮かばない。

だがこれだけは俺の平凡な頭でも分かることがあった。それは少年の兄貴分であり俺の親友である少年は最後は笑って逝ったということである。

バラバラバラバラ……

俺がそう物思いいふけたとき遠くから聞き慣れたエンジン音が聞こえてくる。

それは間違いなく俺達がここへ来たときに乗っていたヘリコプターの音だった。

そしてその音は時間をおうごとに増し最終的には肉眼でも見える位置に来ていた。

「【時の番人^{クロノス}】のへりか……」

へりの扉から顔を出す仲間の一人を見てそれが時の番人^{じふんたち}のへりだと確信を得た。

相変わらず無表情な仲間の一人である水城^{みづき}の顔……だがその顔は安心したと書いてある。おそらく、長い付き合いの自分たちにしかわからないであろう顔……少なくとも俺には安心感を感じる顔だった。

「—安心って所かな」

そう言うと俺は【彼】を抱え上げた。

軽い……。

少年を持ち上げた瞬間。俺の頭にはその一言だけがポツリと浮かぶ。まだ成長期も終わっていない【彼】の体は驚くほどに軽かった。

「ふうー……」

つつい出てしまった深いため息。それはこの不条理な世界に対する批判を込めている。

だから俺はその不条理を正すために呟いた。この間違った現状。それを自分に。それに世界に言い聞かせるために。

そして願わくば自分が抱え上げたこの軽い いや。この軽すぎる少年がもう一生。闘わないでいい世界で生きてほしいから

「なんでこいつが闘わなくちゃいけないんだよ……こいつは 【

日向】はまだ9歳なんだぞ　こんな世界は絶対間違ってる。俺の親友を奪い親友の忘れ形見であるこいつが闘わなくちゃいけない世界なんてな　」

それは14歳の俺の大人ぶった独り言であつた。

??? side (4年後)

「ZZZ……」

ああ……安眠の時間って幸せだ……。

こんな当たり前のことを考えながら貴重な朝の時間をベッドに張り付けてるのは俺こと

【不知火日向しほひな】

今年で中学3年生になった14歳だ。さっそくだが朝の俺の楽しみ

を教えようと思う。

まず1つ目はさっき書いたとおり朝のギリギリの時間まで延ばしにのばしてベッドに張り付き続けるこの”惰眠”そしてもう1つは

コンコン……ガチャッ

「……【ヒナ君】朝だよ起きて」

「うん。知恵理あと5分。あと5分だけでいいから俺に睡眠時間を」

「もう。だめだよヒナ君。朝ご飯出来てるんだから」

「……マジかよ。はあ……わかったよ知恵理。起きるから問題no
thing」

そう言いながら俺はノロノロとまだ暖かく名残惜しいベッドから起き上がる。そして起き上がった俺の目の前には1人の少女。俺は彼女にまだ少し眠たい目をこすりながら柔らかな微笑みを向けた。

「おはよう”知恵理”」

すると目の前の少女は俺の方にもう一度振り向くとそのアイドル顔
負けの太陽のような笑顔で応えてくれた。

「おはようヒナ君」

さて。じゃあそろそろ俺のもう1つの楽しみと目の前の少女につい
て説明しよう。

まず目の前にいる少女　彼女は

【姫ノ城知恵理】
ひめのじょうちえり

俺の幼馴染で今は家の隣に住んでいる少女である。

純粹な日本人には珍しい銀色の髪にまるで天に愛されたような絶世
の容姿。少し　いやかなり天然な性格の美少女である。

そして俺の楽しみは毎朝彼女に起こされることだ。

どうだ？美少女な幼馴染に毎朝起こされるなんてある意味男の夢だ

る？

はっはっはっ！！羨ましいだろ！！

「ヒナ君！！急いで！！早くしないと学校に遅れるよ！！」

「問題nothing！！すぐ行くから！！」

じゃあ知恵理が呼んでるからまたあとで。

「ヒナ君！！早く！！」

タッタッタッタ……

思えばこのときは俺は気付いていたのかもしれない。

これが俺の運命を変える いや。俺の正しい運命の路線へと戻される1日の始まりだったことを。

休暇のように過ごしてきた今までの4年間を終わらせる最後の平和な朝だったことを。

第1話 LAST MORNING

”朝”それは何気ない普通の時間。あるいは平和の象徴とも言うていい。

戦争から4年。このころ世界には朝を迎えられない子供達が何人もおりそれは確実に現在進行形をし続けている。

朝。一緒にご飯を食べたのに夕方には一緒にご飯を食べていない。そんなことが当たり前前の世の中であった。

そしてここにこの世界において比較的幸せであろう2人がいる。

一緒に笑ったり。一緒に悲しんだり。一緒に怒ったり。一緒に遊んだり。何気ない1日をともし過す2人がいた。

だがこの2人の平和は偽りの平和。かつて少年が創り出した疑似の平和ではない。なぜなら2人はこれまでも これから先も抗う事の出来ない【運命】という鎖に縛り付けられているからである。

したがってこのとき2人は知らなかった。この平和が崩れ去る日が今日であることを

この朝が何もかも忘れてしまっていていられる最後の平和な朝であることを

日向 side

……ガチャッ！！！！

「…知恵理。遅刻まであと15分だ」

「…ごめんなさい」

玄関の扉を勢いよく開きながら俺はこの状況を分かりやすく幼なじみの少女へと言い渡す。

さて皆さん。いきなりですまないが現在遅刻ギリギリだ。

だがちょっとしたいいわけはさせてくれ

日向 side (5分前)

「着替えたよ」知恵理」

俺は制服への着替えを済ませてそう言いながら我が家はなはずなのに既に知恵理の城と化したキッチンへと足を踏み入れる。

そしてそこで俺を待ち構えているのは可愛いフリフリのピンクのエプロンをした知恵理。そして知恵理作の温かな料理の数々である。

思わず生唾がでそうだ。

少し余談だが実は俺と知恵理には親がない。記憶の上ではおぼろげに顔をかたどることができるがすべては思い出せない。

そのため俺と知恵理は親がない子ども達が集められる場所。所謂孤児院の出身である。

寂しいといえば寂しいさ。

だがそれを押し余るくらいの幼馴染と親友(詳しくは後で)達がいるからまあ結構楽しく人生を遅らせて貰っている。

ちなみにもう1つ余談として俺は一切合切家事ができない!! 威張って言うことではない。

だから俺は家事を全面的に隣に住んでいる知恵理に任せているのだが

なんて知恵理は家事の天才だっただ！！

いやこれには本当にびっくりだよ。一度食べたものならほぼ再現できるし掃除は一時間もすれば両家（家は違うから間違はなく）ともチリ一つなしおまけにそれを何の苦もなくやるのだ。

化け物じみてね。

まあそういうことだから俺は家事一切をしてない状況に陥ってしまった訳だ。

うーん。自分で言っておきながら情けない……。

こほん 話がずれたな。

簡単に言っただけじゃあええ俺は今知恵理の朝ご飯の前にいる。

はしょったったとか気にすんな。俺は気にしない。

「いつもながらすげーな」

こんな言葉がでるのも必然である。

「ふふふ ありがとう。まだ一時間近く時間あるからゆっくりたべてね」

そういうことなら遠慮なく………ん？

そのとき俺はある違和感に気がついた。

まず学校は7時には出ないと間に合わないから今の時刻は7時の一時間前。つまり6時だということだ。

だが外を見れば日は6時にしては高すぎるような………。

まさか………な。

でも確認する必要がある。なぜなら向かい合わせに座った幼なじみは何が楽しいのか終始笑顔のまま。

だが忘れてはいけないのがこいつが超天然のポンコツだと言つこと。

俺は一度ゴクリと唾を飲み込み。彼女にそれを確認するために口を開くのであった。

「…なあ。知恵理??」

「なぐに??」

知恵理は可愛らしく首を傾げる。その仕草。確かにかわいいけど今はそれどこれではない。

俺は再び唾を飲み込むとジッと彼女を見つめ問いかけるのだった。

「今何時だ??」

「え??」

「……………」

「……………(腕時計を見る) ああ〜!!」

やっぱりか。

どうやら俺の予想は完全に大当たりしてしまったらしい。

結論。やっぱりこいつは今までに類を見ないポンコツだ。

「はあ……」

「今。7時だ……」

「だろうと思ったよ」

まったく本当に知恵理はたまにというか1日1回は何かやってくれるよ。

俺はため息を吐きながら目の前の幼なじみのスキルを再確認する。

そして“両手”に箸を持ち大きく深呼吸をすると自らに与えられた朝飯を見据え宣言するのだった。

「……1分で食べるよ」

こうして今の状況になったわけ。はい回想終了。

日向 side (5分後)

「ヒナ君早く!!」

玄関を閉めるために鍵をポケットから出す俺を知恵理が急がせる。

いや。まあ起こされておいて言うセリフじゃないと思うが

「知恵理。確かに俺も悪いけどお前も主犯の1人であること忘れ
な???」

「はう〜ごめんなさい…」

ああそんな悲しい顔されるとこっちが悲しくなってくるよ。

「いや……マジで起こさせてしまっている俺も悪いし寧ろお前には

感謝してるんだからさ知恵理……だからそんな顔すんなよ……」

そう言いながら俺は知恵理の髪を撫でる。

昔から知恵理が好きな動作の一つがこれ。知恵理の長い白銀の髪はみていてあきないし触るとサラサラと気持ちいいから俺もこれは好きなんだ。

知恵理の方も撫でられたからか今では「えへへ」と笑顔さえ見せている。

その幸せそうな顔に俺も思わず笑みをこぼしてしまつたのであった。

とこんなことしている場合じゃなかった。

「知恵理。行くぞ!!」

「えへへ……うん ヒナ君。早く行かないと学校遅刻しちゃうもんね」

頭から手を離れたとき少し残念そうな顔をした知恵理だが俺が手をつかむと再び笑顔が返り咲いた。

だがそんな知恵理の手を引こうとしたそのとき。

ゾクッ！！

背中にとてつもないくらいの悪漢が走った。

まるで何か鋭いナイフに刺されたようなそんな感覚である。

…視線か？

そう思った瞬間に俺は真後ろにあるおおきなビルを眺めていた。

高い高い……そう屋上のほうだ。

だが眺めた先が遠すぎることもあり何も見当たらない。

そして気がついたときにはいつのまにかさっきまでの視線は感じなくなっていた。

気のせいか…？

「ヒナ君?？」

そのとき知恵理が俺の方をキョトンとした顔で眺める。その表情には俺を心配するような眼差しもあった。

そんな顔をされたら俺の方が悲しい。こいつにはいても笑顔でいてほしいからな。

そう思った俺はその顔に一度微笑みを見せると知恵理の手を引いて一気に駆け出すのだった。

「ぎゃあ!?!」

「ごめんな。そろそろマジでヤバいから全力疾走で行くぜ!?!」

「待ってよー。もう少しスピード緩めて〜」

結局俺はその視線を気のせいだと思い込むことにした。

そう自分で納得させないと自分自身。あの視線に。そしてあの視線の主が辿っている世界に巻き込まれてしまいそうな気がした。

このときすでに手遅れであったことも知らずに。

???side

俺はあの2人が立ち去るのをビルの最上階から見下ろしていた。

“あいつ”が白銀の髪をした少女の手を引いて走っていつている姿を。

だがそれはあいつが望んだこと……。

あいつが選び行った「平和」という名の道を進んでいる証拠であった。

そして俺はそれを壊す者。

離れたとはいえあいつの体に眠る戦いの記憶は衰えてない。俺の視線を読み取ったその瞬間に俺はそう感じていた。

まさかさっきの視線だけでこちらの存在に気づくとは正直想定外だった。

だがあいつはまだまだ使える。あいつがまだ戦いを忘れていないと分かっただけよししよう。

「……次に会うときには目覚めてもらうぞ。かつての仲間【紅翼の天使】」

バサツ!!

俺は俺の特徴である長い黒髪と死神を思わせる黒い表装を揺らしながらビルから飛び降りる。

だがそれで俺は慌てることはない。なぜならこれはこれまで様々な戦場をくぐり抜け闘いぬいてきた俺が手に入れた力。

4年前の戦争ですらくぐり抜けた俺の魂の力であるからだ。

「……LAST MORNING・精々最後の平和な1日を楽しめよ 日向」

そう言って黒ずくめの男 【時雨水城】はその場を立ち去って
く。

十四階だてのビルの目の前から……。

第1話 LAST MORNING (後書き)

作者(以下”作”)「どうも初めまして。作者の+HYUGA+です」

日向(以下”日”)「同じく初めまして。主人公の不知火日向だ」

作「まず最初に読者のみなさん。この小説を読んでいただいております。ありがとうございます。で、ここは一応あとがきという形で次回予告のコーナーとしていこうと思っております」

日「ストーリーに乗せろなかった情報。隠れ情報や雑談を主にしたコーナーというわけだ」

作「はい。ちなみに今回は顔見せということこれで終わりです。

ですが次回からはさらに多くのキャラを乗せていきたいと思えます」

日「楽しみにしてくれ」

作「では、次回予告行きます。時の秒針次回は

学校へと走り着いた日向と知恵理。クラスメートは毎朝のことなのでそんな2人を気にすることはない。

そんな中、日向達に近づいてくる3人。バカとロリと眼帯。果たして彼らと日向達との関係は？

そして、日向は転校生の存在を知る。果たして転校生の介入により

物語はどう動くのか？

次回【中国人の転校生】

日「問題nothingだぜ!!」

作「なんでそこで日向が出てくるんだ？」

日「最後に主人公の口癖が絶対はいつてくるアニメの次回予告とかあるだろ？あれのマネだつて」

作「…まさか、これから毎回やるのか？」

日「たぶんね」

次回に続く!!

第2話 中国人の転校生

日向side

ガヤガヤ……

朝のホームルーム直前のこの時間。各教室から聞こえてくる様々な声が耳に入ってくる。

だが俺と知恵理にはそんなことどうでもよかった。

タッタッタッタ……!!

「後少し!!」

知恵理の手を引いた俺こと不知火日向は今教室の目の前まで来ている。

だがしかし問題は始業まであと一分もないのだ。

知恵理の体力にあわせつつも全力でざわつく教室を繋ぐ廊下を駆け抜ける。そして一昨日の始業式から通い詰めている3年の教室を見据えた。

「うおりゃ〜!!」

ガラッ……!!!!

雄叫びをあげながら教室に入ったからか教室の視線が痛い感じがしない。いや。気にする暇すらないくらい俺達は朝の運動に疲れ切っていた。

……。まあ。家から学園まで全力疾走してきたら当たり前なのだがな

『はあ…はあ…はあ…』

教室に俺と知恵理の荒い息づかいが広がるとさっきまでの刺すような視線はいつの間にか消えていた。

寧ろこんな日常茶飯事と言わんばかりに教室にいる人間は普通に昨日のドラマやら学校の可愛い女の子の話などで談笑を再開している。

ある意味この教室　もといこの学園ではこれが普通なのだ。

「たつく。今朝はなんでまたこんなことになってんだよこのバカップルは……」

「愚問ねバカ弟。そんなことも分からないの???どうせ日向が寝坊したからに決まってんじゃない」

「あははは　ナギリ。僕としてはチエリンが朝からやっちゃったに一票したいかな」

そんな空気の中でその空気に逆らうように俺達に近づいてくる3人の男女。

「ははは!!!日向。朝からきつそうだな」

「大丈夫???知恵理???……ちょっと日向!!!もう少し知恵理の事を考えなさいよ!!!」

「まあまあ落ち着いてナギリ。ヒナタンだって必死だったんだから」

三者三様の返しで返してくる彼らは俺と知恵理の親友に当たるバカとロリと眼帯だ。

「はあ…はあ…おはよう。真備。凧。輝喜」

「はあ…はあー…おはよう ナギちゃん マキ君 コウ君」

俺は凧の発言に少しむっとしながら知恵理は満面の笑顔で挨拶する。

だが確かに今回のことには俺にも非はあるが元はと言えば 1人で起きることができない俺が悪いですね。すみません。

俺はそう思うと凧の言うとおりだと表情にこそ出さないが心の中で苦笑いしてしまう。

だがそんな俺の葛藤を知らない目の前の3人は俺と知恵理の挨拶にそれぞれ笑顔で返してくるのだった。

「おう!!日向も知恵理も2人ともおはよう!!」

「おはよう知恵理。あとついでにおはよう日向」

「くすくす はい。ヒナタンもチエリンもおはようございます」

さてではここでさっきから出てきている俺と知恵理の親友達について紹介しよう。

ちなみにバカとロリと眼帯は冗談ではなく事実だからそこは気にしないで進めていきたいと思う。

まず1番最初に話しているのは

【羽前真備】うぜんまきひ

おおざっぱで大胆な性格の持ち主でも友達思いな奴だ。だがさつきから言ってる通り頭がすこぶる悪いのがたまに傷である。

茶髪の短めな髪にガツチリと引き締まった体。スポーツマンを思わせる爽やかさがあるイケメン（イメキャラはとある魔術の上条当麻）である。

さて2番目に話しているのは真備の双子の姉

【羽前凧】うぜんなぎ

真備と同じ茶髪のセミロングの美少女（イメキャラはとある魔術の御坂美琴）。ちなみにツンデレだ。

さらに上げるとしたらその体格。身長149？しかないそのロリな体系は彼女の唯一にして絶対の弱点である。

そして最後に話しかけているのは

【美濃輝喜】

凧や真備とはちがい中学からの付き合いだが俺達にとっては大切な親友だ。

俺と同じ黒髪に黒瞳（イメキャラは11eyesの皐月駆）だが彼の1番の特徴は右目にかかった眼帯だ。だけど輝喜は悲観したことはない。寧ろ彼は

「ほらヒナタンもチエリンも急いで！！早く席に着かないと梅ちゃんが来ちゃうよー！！」

上記のセリフの通りなぜか異常に高いテンションと俺達に妙なあだなをつけたがる性格の持ち主だ。

だが俺は輝喜のそんな性格がとても気に入っていたりする。

「はいはい。わかってるよ輝喜」

まあこれが俺の親友達だ。クラスにもそれなりに仲がいいやつはいるが親友と呼べるのは知恵理を含めたこの4人だけだ。

たぶんこの関係は生涯変わらないものだと俺は思っている。

「あ。そうだ日向！！ビッグニュースだぜ！！」

俺が席につくと前の席の真備がいつになくハイテンションで話しかけてきた。

ちなみに後ろの席には輝喜がいる。つまり真備 俺 輝喜の順に一列に並んでいることになっている。

「ん？何がビッグニュースなんだ？」

俺は心底不思議そうに首を傾げると今度は常時ハイテンションな輝喜が話に入ってきた。

「ふふふ そついえばヒナタンはまだ知らないんだつたよね」

「だからなにをだよ？」

話がさっぱり掴めない俺。とりあえず話の根本的な部分を教えてほしい。

バカな真備ならともかく輝喜はたぶんワザとこうしてるんだと思う。なんせこいつは1番敵に回したくない男だからな。

「はあ……お前ら。まずは話の大まかな流れ3000字で簡潔に言いやがれ」

「いや……まず3000字は簡潔じゃねーよ……」

真備がそんなことをいっているが軽くスルーすることにした。

これは俺達の中では暗黙の了解みたいなものだから誰も気にはしない。

「……で。輝喜なにがいたんだ??」

「……おい日向。てめー無視すんじゃねー」

「うーん……3000字までってことは別に3文字でもかまいませんよね」

「おい!!輝喜まで無視すんじゃねーよ!!つか3文字って逆に無理じゃねー??」

「お前なら問題nothing!!俺は信じてる!!!!!!」

「おい……なんでそこで俺の肩に手をおく!?!絶対におかしいだ!?!……くはっ!?!?」

そこまで言っつて真備は俺の前から消え失せた。

なぜなら「ドゲシ!!」という常人には耳慣れない音。だが俺達には耳慣れた音が響き渡ったからである。

「うるさいわよ馬鹿弟!?!?!騒ぐんなら時と場合を考えなさい!?!?!?!」

それは約教室の反対側にいる凧によって投げられた理科の教科書。

凧の手から放たれた弾丸とも言えるその一撃は見事に真備の頭を捉え床と口付けさせたのだった。

「……いや。これ最早殺人兵器の領域だろ」

「はははは 死なないでね…マ〜キ〜ビン」

そんな悲劇（喜劇？）的な情景に俺と輝喜はそう言いながら胸の前で十字をきるのだった。

キリスト教じゃないけど。

「な…なに…すんだ…よ…あね…き…」

「ふん！！別にあなたがうるさかったからじゃないんだからね！！」

「く…くたば…りやがれ…ロリ萌やるー」

「… どうやらさらなるお仕置が必要みたいね」

反対側にいるのに風の稟とした声はしつかり聞こえてくる。

そんな可愛らしい天使のような声に俺と輝喜 いや。天然記念物な知恵理を除いたクラス全員が同じことを思っていた。

あれは 地獄から出てきた鬼の声だ……と。

「ひゃふえひい。ふあんへんひいへふへ（姉貴。勘弁してくれ）」

そんな地獄のお迎えを前にしたからか真備の顔にも焦りだす。だが最初の一撃で出た鼻血のせいでうまく呂律がまわっていない。

でもそんなことは風にとってみれば問題 nothing! まったく関係ないのだった。

「言い訳していいわけ!？」

さすが双子。呂律回ってないのに通じたよ。おまけに数学と国語の教科書を取り出すサービス付き。

俺はあれほどまでにいらなサービスみたことない。

やっべ…下手すりゃ俺も危険かも……。

俺はそんなことを思いながらふと風の後ろの席の知恵理を見てみる。

あゝだめだありゃ。知恵理のやっ後ろの女子に髪型変えられて遊ばれてる。

まあ知恵理の髪は確かに銀髪でサラサラだから触りり心地いいけど空気読もうよ後ろの女子。

ちなみに今の知恵理の髪型は三つ編みだ。うんなんか銀髪の三つ編みってフル？タルパニックを思い出すな。

俺は知恵理の新たな一面にうんうんと頷きながら早足でその場を退避していった。

もちろん最初の一撃で動けず床にはいつくばったままの芋虫の真似をした真備を無視して。

さっき言ったがこれが俺達の常識なのだ。

「さあ…観念しなさい…！」

しかもあんな鬼の顔した口リ体系のお前の姉貴に勝てるわけねーだ
ろ。

だからすまん真備。俺と輝喜は席から避難させてもらう。

…。
そんな悲しい顔するなよ真備。爪垢はあとで拾ってやるから…

「骨すら残らないのかよ!?!… って姉貴。ま… 待て。話し合い
はいつの時代も必要なわけでして… や… やめて… そこだけは!!
?!?!… ギャ ツ!!…!!」

真備の断末魔は俺には一切聞こえなかった ことにしよう。

?????side

ここは桜時市郊外の洋館。

所謂暗く不気味な森の中にあり密室殺人なんかがおきそうなそんな
雰囲気のある洋館である。

そんな洋館の廊下を歩く黒の長髪の男が1人いた。

コツコツコツ……

男の足音が暗い廊下に響き渡る。そしてその足音が止まった先には長髪の男は1つの大きな扉の前に立ち。

……キ ツ！！！！！

そして自らの長髪を1回靡かせるとその大きな扉に手を着け押し開くのだった。

建て付けがわるいのか扉を開ける音はとても不気味だ。ここから先には恐ろしい何かがありそうな雰囲気。

だがしかし男が扉を開けてから最初に飛び込んできたのはそんな恐ろしいものとは無縁そうな可憐な1人の少女であった。

「……ん。やっと帰ってきたのか水城^{みずぎ}」

「……まあな」

男を迎えたのは水色の長い髪を持つ明らかに欧米の血が入っていると思われる美少女。

だがその容姿とは裏腹に少女はたった1人その部屋にいたからか少女の周りには大量のお菓子の袋が散らばり少女の可憐な雰囲気をおち壊しにしていた。

男はそんな彼女の姿に深いため息をつくのだった。

「……刹那せつなあれほどここに私物を持ち込むと言っただろう」

「え〜いいじゃん!!だって”この時代”のお菓子って美味しいんだもん!!」

少女 ”刹那”の周りにはまだまだ開封前の多種多様なお菓子の山。最早その量は1人の少女が食べるには明らかに食べすぎのよう
に思えた。

しかし男 水城はそんなお菓子の山より刹那の子供っぽい性格に頭を抱えてしまう。

紛いなりにも彼女のことを気にする彼にとってそれはこれまでですっと思ってきた疑問であった。

「パリパリ…それより…パリパリ…水城…パリパリ…天使の方は…パリパリ…どうだった？」

「……まずお前はその手に持った袋を置け」

おそらく先程開けたばかりであろうスナック菓子の袋を抱えながら問いかけてきた刹那に水城はたまらずそう指示する。

すると刹那はさすがに悪いと思ったのかはたまた水城の強い叱咤にビックリしたのか大人しく手に持ったその袋を手放す。

それを見て水城はやっと話を進めていくのだった。

「……」 奴”を見た感想だが最初は見事に民間人になっていたと思つて失望しそうになった……だが” 奴” はいまだに戦いをわすれてない。【紅翼の天使】の名前は伊達じゃないということだ」

「……つまり天使の力は4年たった今でもヤバいってことか」

さっきまでお菓子を取られたからか機嫌が悪かった刹那の顔に少しだけ興味を持ったの薄く笑みが浮かぶ。

そんな刹那に今度は水城が別に行われている計画について尋ねた。

「…………刹那。例の計画はすすんでいるか？」

「ん??あゝあいつはうまく学校に潜入しているよ」

「…………そうか。さすがはコードネームとはいえ夜の天使の名前を持つてるだけはあるな…………」

男 水城は最後に「…………まあ。あいつなら当然か」と付け加え再び黒い長髪を靡かせる。

だがそれでも整った水城の顔の表情が崩れることはなかった。

日向side

「転校生？」

「うん。大正解」

すっとんきょんな俺の言葉に輝喜は肯定の意味を込めニコニコと笑みを浮かべながら頷く。

「うう……。すみませんもう二度としません。もう二度としません……」

ついで言うと横で意味不明なことをほざきながらうなされている力はいつもながら無視だ。だってそれが俺達の常識なんだからな。

てか「もう三度もしません」って一体全体どういう意味だよ……。

俺は凧の攻撃で屍と化した真備を横から眺めつつ輝喜の説明に再び耳を傾ける。

「でも本当に3文字で説明するなんてな……」

「ふふふ　それが僕のクオリティーです」

何が嬉しいのかとびっきりの笑顔を浮かべる輝喜に俺は苦笑いしてしまつ。

ちなみに今は普段ならホームルームが行われているはずなのだが我がらが担任こと”梅ちゃん”が来ないから話をしていられる。

さらに付け加えると今の知恵理の髪型はツインテールだ。うん。小悪魔な知恵理も似合うな。

「で…朝からこんなににぎやかなのか」

俺はこつちに満面の笑みを見せるツインテールな知恵理に軽く手を振りながら辺りの様子を察する。

よくよく耳をすましてみれば男か女かとか。カッコいいか可愛いかなどといった様々な憶測がたっている。でもそれも仕方がないことだ。

だがしかし

「……ちょっと騒ぎが大きすぎじゃないか?」

「うん。確かにヒナタンの言つとおりだね」

そうなのだ。いくら転校生が珍しいとはいえ教室の中はちょっとにぎやかすぎるのだ。

ここは桜時市あつじ東日本の首都【帝都】と西日本の首都【古都】の次に大きい街。その唯一の学校であるこの学校への転校生はそんなに珍しくない。

実際昨年ことごとも転校生は俺達の学年だけでも10人は来ていたはずだ。

だがここまで騒がれることはそうそうなかったはず　でもこの騒ぎにはちゃんとした理由があった。

「でもねヒナタン　この騒ぎも仕方ないと僕は思った　だって
」

「だって…??」

そのとき俺は尋常ならぬ寒気を感じる。だけど一瞬だったため輝喜には気付かれることはなかった。

だが俺はこの寒気の正体を知っている。なぜならこの寒気は昔どこかで感じたことあるような　そんな悪寒であったからだ。

まるで俺のことを敵視しているような明らかな殺気を感じ。そんな恐怖感がある悪寒であった。

「転校生が外国人なんだって噂なんだよ」

「ああ……なるほどな」

幸にも輝喜の表情を詠むからには問題ないみたいだ。俺は少し片言になりがちな言葉でそう応えながら安心の息を吐き出した。

だがこのとき俺は気付いてなかった。

倒れた真備の体が僅かに動いたことにも知恵理の髪弄りに混じった凧の表情が微妙に強ばったことにも輝喜の机の下の拳が常に震えていたということにも

「ああ納得だな。そんな理由だったら俺も断然興味がわいてきたな」

「あははは 実は僕も気になったりしてるんだ」

憶測が憶測を呼ぶ教室。俺も輝喜もその空気に簡単に飲み込まれていった。

さっきの悪寒に頭を悩ませながら

ガララ……！！

「はい。席つけ」

そのときナイスタイミングで1人の男が入ってくる。

ボサボサにした黒い髪の毛にヨレヨレでしわだらけのスーツ。そして何よりあの怠慢そうな顔は完全に整った顔を潰していた。その姿は間違いなく俺達の担任である梅ちゃんである。

このタイミング。ある意味どんぴしゃだった。

ああそういえば梅ちゃんの説明してなかったな。

梅ちゃんの本名は

【松竹梅太郎】
しょうちくけいめいたろう

さつきから言ってる通り俺達の担任だ。あんななりでもフレンドリーな性格が相成って人気のある先生（イメキヤラはBLACK CATのジェノス「ハザード」）である。

実は3年間ずっと俺達の担任だったから俺達は敬意をもって【梅ちゃん】と呼んでいるのだ。

そして梅ちゃんと一緒に入ってきた見た目日本人の少年　長い黒髪を後ろで束ねた感じのイケメン（イメキャラはBLACK・CATのリン＝シャオリー）だった。

「初めまして中国からきました【李・悶^{り・もん}】よろしくお願いします」

これが運命は変えられないという俺に対する最終勧告であった

第2話 中国人の転校生（後書き）

作「こんにちはは作者です。今回は【桜時学園】^{オウジカクエン}についての説明をしていきたいと思います」

日「俺達を通ってる学園の話だな」

作「まずは桜時市の話から【桜時市】^{オウジシ}は今作品において東日本の首都【帝都】^{テイト}西日本の首都【古都】^{コト}の次、日本で三番目に大きい町です。場所は名古屋あたりにあると思ってください」

日「ちなみに帝都と古都は東京と京都のことだからな」

作「そして、その街に唯一ある学園。それがこの桜時学園です。小等部から高等部まであり、街に住む子供全てが通うかなりのマンモス校です」

日「未だに知らない場所とかあるからな、真備なんか俺達と一緒にやないと未だに迷うしな」

作「まあぶっちゃけるとどうでもいい情報ですけどね。じゃあ次回予告。」

街へと来た日向達一向。だがそこに待ち受けていたのは転校生だった。

だがそんなとき事件が起こる。果たして日向達はこれをどう解決す

るのか？

次回【街での事件】」

日「問題nothingだぜ!!」

日「ところでほかの奴らは来ないのか？今回の話で主要人物はほぼ出てきたのに…」

作「確かにそろそろ2人じゃ厳しくなってきたな。じゃあ次回はほかの奴にでもらうか」

次回に続く!!

第3話 街での事件

知恵理 s i d e

私の目の前には大量の物騒な武器を持ったいわゆる不良と呼ばれる人達がいる。

そしてそれに敵対するように 私を守るために対峙する私の大親友もいました。

「あんだ達なんか絶対手を出させないんだから!!」

ナギちゃんはそう言って私に近づいてくる人達を次々と殴って倒していく。

女の子のさらに小さな体系のナギちゃんが私のために……。

なんで。なんでこんな事になったんだろう

日向side（1時間前）

「あれ？あれって確か今日転校してきた……」

放課後。街に遊びに来た俺達は知恵理のその声に反応し立ち止まる。そして俺は立ち止まった知恵理の視線が正面ではなく別の方向を見ていることに気がついた。

「知恵理？？どうかしたのか？ビキニの姉ちゃんでもいたのか？」

「…あんだ。そんなにあたしのビキニが見たかった？引くわ……」

「あははは〜マキビンは近親相姦が好きだったんですか〜引いちゃいますね〜」

「問題nothing。俺はお前がどこへ行っても友達だから……ちよつと引いちゃったけど……」

真備がおそらく知恵理を真っ赤にさせるため（天然な知恵理はこんな明らかな嘘でも信じる）がある（に言ったであろう冗談）。

だがそんなことをすると俺達が黙っていないのだ。全員で真備から
一歩横にズレドン引きした振りをする。

すると撒き餌をした魚はすぐにかかってしまうのであった 捕獲
完了。

「だ〜！！！！！！！！！なんで俺が姉貴のビキニ姿を見たいってことにな
ってんだよ!?!」

「なんですかマキビン??見たくないんですか美少女のナギリンの
ビキニ??」

「俺はロリに興味はねーよ!?!」

それは決して言うてはならない失言だった。

「…あんだ。言うてくれるじゃない??まさか1日に2回もロリ扱
いされるなんて…屈辱だわ…!!」

「へ???待て姉貴。その手錠はどこから取り出した!?!?ていうかそ
れで俺をどうするつもりだ!?!?…待て。早まるな……ギャッ
！！！！！！」

そして本日2回目となる真備の地を割るような叫び声が轟くのだ
た。

まあもちろん無視したが。だってそれが俺らの文化だもん！

「……………結局。チエリンは何を指さしたんですか??」

なぜかめちやくちや葛藤したらしい輝喜の問い。まあ今日の前で起
こっている惨状（スリーパーホールド??）を見たら仕方ないよう
な気もするけど

とにかく。冷や汗が止まらない輝喜の問いに今まで呆然としてしま
っていた知恵理は細い指である一点を指差した。

俺と輝喜はその指につられるように瞳をそちらに向ける。

するとそこには

「長いしっぽ頭？」

「違いますよヒナタン。あれは今日転校してきた”李・悶君”です」

俺の繰り出したボケにすかさずつつこんでくる輝喜。さすがに3年の付き合いは伊達じゃない。

俺と知恵理はそんな輝喜に思わずいつの間にか拍手してしまっていた。

「まったく。何やってんのよあいつ……まるで変出者じゃない……」

そのとき不意に第4の声である風の綺麗なが聞こえてくる。どうやら真備に対する折檻は終わったようだな。

向こうにて地面にゴミのように棄てられている真備も見えないし南無南無。

「俺はまだ死んでねー!?!?」

うーん。”げんきのかけら”で何かが復活したような気がするがきつと気のせいだろう。

俺はそう思い込むことにした。めんどくさいし。

さて話を戻そう。

俺達の目線の先。そこには確かに普通の人ならただキョロキョロしている変人に見えるだろう転校生”李・悶”がいる。

でも彼は転校生 いや。初めてこの桜時市に来た人間がどうなってしまうのかが分かる俺ならあの状態も領けてしまう。

なぜならここは桜時市。日本で3番目に大きい町であるここに唯一ある繁華街である【街】と呼ばれるここはとにかく広いのだ。

少なくとも方向云々の問題ではない。故に

「迷ってるな……あれ？」

「でしょうね。まあ初めてこの街に来た人なら当然の反応よね」

俺の言葉にこの4人の中で唯一俺並みに頭が回る凧が同意してくれる。

でも凧は元々この街の出身だからそこまで彼の気持ちは分かっていると思う。現にちょっと不思議そうな顔してるし。

ちなみに残りの3人はというと

知恵理は手をポンと叩き納得といった顔でうんうん頷いていて。

真備は頭の上に？マークを浮かべながらうねっており。

輝喜は相変わらずニコニコと笑みを浮かべ何を考えているんのか分からない。

俺。本気でこいつらの将来が心配だわ。

「でっどっすんの日向??」

羽前凧さんよ。このタイミングでそれ訊くか？案外鬼畜なんですね。

あまりにキョロキョロしすぎて半径3メートル以内に誰も近付かなくなってる人間をどうするか??

もちろん答えは決まってるんだろ

「あれを無視しろっていつのか？鬼畜先生？」

「誰が鬼畜よ!?あんたも真備みたいになりたいの!？」

すいません。今度からは自分の言う言葉には気をつけます。

「まあ当然よね」

それは彼を助けるのが当然だということか？それとも俺の心の
中の呟きに対してなのか？

分かん。

「それじゃ！！決断即行動」

結局俺の心の中の疑問は解けることなく凧はそう宣言するとずんず
んと彼の方に向かって進んでいった。

やっぱ凧はなかなかの姉御肌だな。今度から姉さんって呼んでみよ。

そう思いつつ俺も凧を追いかけるのだった。

「ちょっとそこのあんた!!」

あたしは彼の目の前に仁王立ちしてきつめの言葉でそう呼びかける。

あたしの声に反応した李君は始めあたしが声をかけたことに気がついてないらしくスルーした。

ちなみに李君は小学校にあがるまで日本に住んでいたらしくて実は日本語がペラペラだから日本語で話しかけも問題ないみたい。

それにそもそも中国語なんて知らないからどうしようもないんだけどね。

あたしは彼の反応に思わずため息し。そして今度は分かりやすいように彼の肩を叩いてもう一度呼びかけた。

「ちょっと。無視すんじゃないわよあんた。あたしが呼んでるのは目の前にいる【李・悶】て中国人なの」

「え…それって僕？」

「そうよ。あんたのこと。ちなみにあたしのこと覚える？」

「あ…え〜えと。確か同じクラスだったと…」

彼は少し考えるような仕草をし。そして何か思い出したようにあなたの方を再び向き直すのだった。

「同じクラスの…羽前さん？」

「そ。大正解。でも名字で呼ばれると馬鹿弟と同じに思われているみたいで嫌なの。だからあたしの事は凧と呼ぶこと？分かった？」

「あ。はい分かりました凧さん」

「うんよろしい。あたし物わかりがいい奴は案外好きよ【悶】」

「え…今僕の名前を…？」

「あら？悪いことしちゃった？なんかあたしだけ名前呼びじゃ不公平でしょ？だからあなたの名前をあたしが呼ぶときは悶と呼ぶわ」

「う…うん。わかったよ」

少し弱腰だけど悪い奴じゃなさそうね。あたしは初めて接触した悶のことをそう評価しながら悶と握手するのだった。

するとそのときやつと日向達がやってくる。まったくおそいのよ。

あたしはノロマなあたしの親友達に文句を言いたくなる。その心を抑えて彼にあたしの親友達を紹介するのだった。

「悶。紹介するわあたしの親友の知恵理。日向。輝喜。馬鹿弟よ！
」

「ちょっと待て姉貴！！俺だけどう考えてもおかしかっただろ！？」

「あら？あたし何か間違ってたかしら？」

あたしは真備以外の3人の方を向く。

すると3人のうちあたしと合わせて腹黒い3人組と呼ばれる2人（日向と輝喜）はそれぞれ顔を見合わせると「ニヤリ」と怪しい笑みをする。

それはあたしたちにとっての了解したという意味の合図であった。

もしかしたらこの「ニヤリ」が中等部の生徒に腹黒トリオと呼ばれる原因かもしれない。まあ楽しいからどうでもいいけどね！！

「問題 nothing。俺は真備の事をちゃんと分かってるから」

「日向：お前それほどまでに俺のこと」

「呷！！真備が馬鹿なのは学校中の常識だろ！！いまさら言わせんなよ！！」

グサッ！！

あゝあ。真備が真正面から日向の赤い槍に突かれたわ。

最初に真備に安心させといて一気に突き落とす。さすがは日向。学年で唯一あたしと張り合う学力を持つだけあるわ。

「違うよヒナタン。僕達なら分かるでしょ マキビンはみんなが考える以上の馬鹿の逸材だよ」

グササッ！！

あゝ輝喜がニコニコとまるで聖母マリアのような笑顔（男の子なのになんであんな笑顔できるのよ??）を浮かべながら容赦なく白い

槍で真備を貫いたわ。

輝喜に到ってはなに考えてんのかさっぱりだから逆に怖いのよね

輝喜。恐ろしい子!?

「もうヒナ君もコウ君も…言い過ぎだよ?」

あら?知恵理?

まあ知恵理の性格ならここは真備の味方をするでしょうね。

知恵理が【ド天然】じゃなければ真備にとって救世主なのに

「そ…そうか。知恵理は俺のことをわかって」

真備。我が最愛なるバカな弟。きっとあなたの考えているそれは違うは……。

たぶん知恵理はあんたをどん底のどん底。地球の反対側まで落とす最終兵器よ。

だから真備。あたし達のは気にしなくていいから 逝ってこい。

「まったくみんなそんなこと言っちゃだめだよ！確かにマキ君は馬鹿だけどもっともいい人なのよ！確かにテストの成績は万年最下位だけど私達のことをしっかり考えてくれてるし。いつも何かバカなことするけど友情を誰よりも重んじるし。クラスのみんなからモバカな扱いされるけど…あれ？どうかしたのマキ君？」

「頼む。知恵理…許してくれ…」

あはははは！もう最高！！

真備の奴。知恵理の桜色の槍で「ズガガガガ」ってとどめをさされたわ！！

知恵理の攻撃は悪意がないぶん効果2倍ね……哀れだわ……。

そんなあたし達の会話にほら悶も自然と笑顔になって打ち解けていく。まあここは真備に感謝

「あははは……よろしくお願いします。知恵理さん。日向さん。輝喜さん……馬鹿弟さん！！」

スパアアアアン!!

想定外だったわ。

まさか…まさか…ここで悶が乗ってくるなんて…!?

その突然の乱入者にあたし達。通称”腹黒トリオ”は呆然となってしまう。

今までは知恵理までの3コンボが最高だったけど4コンボしたらどうなるのかしら？

おそらく今の真備には日向の赤い槍。輝喜の白い槍。知恵理の桜色の槍。そして…悶の黄金の槍がささっているはず。まあ少なくとも崩れ落ちているでしょうね

振り返ったら。真備が立ったまま気絶していた。

あんた。そこまでショックだったのね。

「わお見てヒナ君。マキ君が立ったまま気絶してるよ…どうしよう？」

「…俺に聞くな知恵理。さすがにこれは問題nothin'noは言えないからな」

「…1発なぐればいいんじゃない？」

そう言っただけは拳を作るが

「待て尻！！瀕死のやつにとどめさしてどうする！？」

「そつだよナギちゃん！！そんなことしたらマキ君が死んじゃうよ」

日向と知恵理が必死になって止めに入った。

よく見てみれば後ろでは悶と輝喜が殴る以外の方法で冷や汗をかきながら必死に真備を起こそうとしている。

それを見たあたしは「…分かったわ」と言って渋々 本当に渋々とその場をひいたのだった。

日向 side (30分後)

「で。この結果か…」

俺の隣の風が哀愁を漂わせつつ呟く。だがそれも仕方のないことだ。

まずはここまでの経緯を聞いてくれ。その後俺達はなかなか目覚めない真備を放置して悶に”街”を案内した。

ちなみにさつきから出て来ている”街”というのは桜時市にある繁華街の通称だ。さつきも言ったと思うけどここがまたハンパなくでかい。

元々別の町にあった孤児院出身の俺と知恵理も初めてここに来たときはあまりのスケールの大きさに思わず呆然としてしまったくらいである。

でも桜時市に住む以上この繁華街”街”は絶対に離れられない存在だ。

なぜなら生活必需品を買う施設や娯楽施設。それに学校へ行くため

電車の駅も全部ここにある。

だから俺達は真備が起きるまでの間その”街”を悶に案内したんだけど どころやらその間に真備が目覚めて行方不明になったみたいである。

「どうするんですか？」

「ちゅー」

凧が悶の質問に肩をすくめてみせる。その表情はかなり面倒くさげだ。

なぜならあいつには”普通”の創作が出来ないからである。

「マキ君はね。機械音痴だから携帯持ってないの」

「おまけにマキビンは方向音痴だからここに戻ってくる確立もno thingです」

まあこういうことだ。ちなみにこれまであいつの迷子のせいで放課後遊べなくなった回数 計測不能。

それほどまでにあいつは何度も何度も何度も迷子になってるのだ。

あいつって友達としてはいいやつだけど人間としては最低だったんだな。

はあ…鬱になりそうだ。

「しょうがない。手分けして探すか…」

俺の提案に4人は黙って頷くだけだった。

今俺は悶と一緒に行動している。

組み合わせ決めはさして問題なかった。

携帯を持つ俺が持たない悶と組み。輝喜が1人で行動。女子で体力がない知恵理と凧が最初の場所に待機となった。

そして今現在。俺は悶と2人で街の南の方に向かっていく道を歩いている。

人混みが多すぎて迷ってしまいそうだが俺達はその中で真備を探す。しかも厄介なことに今は放課後。俺達と同じ制服を来たやつがうじゃうじゃいた。

これは今回もまた真備を探し出すのに苦労しそうである。

「すみません日向さん」

「どうした悶？真備が見つかったか？」

悶は突然意味深な笑みを漏らしながら俺を呼び止める。その笑みはどこか不気味に感じる。

そして不思議な顔をしている俺にさらに悶は続けた。

「いえ…まだ見つかってませんが…。僕はみなさんがとても仲がいないあとを思いまして」

「はあ〜？」

俺は一瞬間が何を言ったのかわからなかった。そんな唐突な話をされても俺の方が困る。

思わず今度は顔を歪めてしまう。謂わば「こいつ何言ってるの??」って顔である。

だが唐突な事で混乱した俺は改めて頭を冷やして言葉の意味を考え直してみる。するとそれは俺達には当たり前前のことだった。

「…ああ。知恵理や真備。凧に輝喜のことか…まあな。なんていうか出会い方が出会い方だったからな…繋がりは大いんだよ」

そう言っている俺の顔はこれでもかかってくらい優しくなっているだろうな。

「出会い方？」

「詳しいことは避けたいんだがまさに偶然の産物だと言ったらいいのかな??」

まあそんな生易しい言葉なんかじゃないけど。

真備も凧も俺達と出会った時は酷かった。それを知恵理が救い出してやったんだっとな。まああんなドタバタ劇はもう一生やりたくないけど。

輝喜に至っては逆に俺達が助けられた。でもあの事件は極力忘れない。忘れられないけど…な。

ふと真備。凧。輝喜との出会いを思い出していたときふとある言葉が浮かんできた。それは俺にとって一番嫌いで一番好きな言葉

「【運命】」

「運命??」

「ああ。臭いこと言うかもしれないけど俺達の出会いはまさにそれだと思う。別に宿命だろうが天命だろうが変わらないけど…あの出会いはいなければ今の俺達はいないよ」

そう。もし真備と凧。2人と出会ったとき　初めてクラスが一緒

になったとき【とある理由】により虐められていた2人に同じく銀髪だと虐められていた知恵理が声をかけなければ

もし輝喜と出会ったとき 中等部の入学式の時。あの場でナンパされた知恵理が輝喜に助けられずそのまま連れ去られていれば

俺達はきつと別々の道を歩いていたと思う。

そうあれは運命だった。運命的な出会いなんかではない。俺達は

「俺達は 運命を切り開いて出会ったんだ」

真っ直ぐと悶の顔を見据えた俺は悶にそう宣言する。そのとき俺は周りの音なんて聞こえてなんてない。

俺達の横を行き交う人の声や渋滞した車のクラクション。それらの音がその瞬間止まったように感じた。

まるで時が止まったかのように。

「…なるほど。それがあなた達の原点なのですね」

「…あぁ」

そして時は動き出す。どうやら俺達の時間を示す時計はまだ壊れていなかったらしい。

悶の言葉が止まった時計を動かす鍵となり。電池となり。ゼンマイとなる。

そして再び新たな時を刻むために秒針は進み出したのだった。

『……………』

お互いに何も言わず対峙する俺達。街を歩く人はそんな俺達を気にも止めない。

賑やかな周りに反して静かになる俺と悶。そんな静寂とも言える空間はまるで夜のようだ。

そして遂に静寂は破られる。夜のような闇のような声によって

「…運命を切り開いた。僕はそうは思いません」

それは俺の言葉を真つ向から否定する悶の言葉であった。

それは本意なのか不本意なのかは分からない。だけど若干顔に影がかかっているのはきつと気のせいではないと思う。

「どづいつことだ？」

それに対して俺は悶の返しに驚きつつ若干ムキになってそう返した。

自分の言った言葉を　しかも親友たちとの出会いの言葉を否定されたのだから当然である。

だが悶はそんな少しきつめの俺の言葉にも慌てず冷静に言葉を繋いだ。

「…人との出会いに偶然なんてない。あるのは必然のみ…それこそ運命なんて存在しない。あるのは地球という惑星の意志…」

「…地球の意志……………」

悶の口から次々と出てきた言葉に俺はゴクリと唾を飲み込む。圧倒されたのだその雰囲気にも。

「これは僕が信仰している宗教の教典に載っているある一文を僕なりに解釈したものです」

「…宗教。仏教じゃないよな??」

「ええ。残念ながら宗教にあまり関心のない日本人の方々にはあまり分からないかもしれませんが」

確かに。現代の日本人はあまり宗教に関心がないと言われてい

る。ヒンドゥー教やイスラム教みたいに守るべき会則はないし。クリスマスやお正月をやったりするのもそうだ。

このとき俺はつくづく変わった国に生まれちゃったと苦笑いしてしまつのであつた。

「…こうして考えてみると僕とあなたの考えは似ているかもしれませんがね」

その言葉に俺は「似ている…??」と疑問符を浮かべてしまう。

そんな俺に悶はニッコリと知恵理や輝喜並みの見ほれてしまいそんな笑顔を見せると俺の胸の中心に指を指した。

「日向さん。あなたが考えるのは【運命という言葉を否定してその先に運命以外の結末を創る】ということ」

そして今度はゆっくりと自らの胸に手のひらを当て目を閉じてまるで瞑想するかのような体制となる。

それはある意味笑顔よりも美しい人間の姿なのかもしれないように思えた。

「僕が信仰している宗教が考えるのは【運命という言葉の存在自体を否定して全ての出会いは地球が司っている】という考え」

最後に再び瞳を開けると彼は俺に向かってゆっくりと胸に当てていた手を差し出した。

その真意は定かではない。けどこの握手を求める手。これに触れるのと触れないのではこれから先が大きく変わるように思えた。

「…日向さん。僕達は結果としてお互いに【運命】を否定している。僕達は似たもの同士なんです」

その言葉は俺の頭の中にまるでトンカチで叩かれたかのように響いてくる。

それは何かしらの誘惑のよう。それは何かしらの幻想のよう。そしてそれは何かしらの愛情のように俺の右手を彼の右手に惹きつかせる。

そして今度は俺が笑顔を見せる番だった。

「…なあ悶。言っておくけど…俺は別に【運命】を否定してるわけではないんだ」

「え???でも運命を切り開いてきたとさっき」

「…確かに俺はこれまで運命を切り開いてきた。それは自分で望んだことだからそれについても否定はしない。…それに確かに俺は【運命】という言葉が大嫌いだ」

【運命】それは俺を苦しめる1番の言葉。

【運命】なんてものがなければ真備は”あの家”に生まれることなく虐められることもなかった。

【運命】なんてものがなければ風が今でも夜に恐怖することはなかった。

【運命】なんてものがなければあの日 【あの人】が死ぬこともなかった。

「…だけど。それでも俺は【運命】という言葉信じてるし。【運命】という言葉が 大好きなんだ」

「…!?!? 【運命】を信じると言っんですか」

心の底から驚いたという感じの悶の表情。俺はそんな彼に突きつける。俺が運命を信じる理由を

「…悶。俺はさっきあいつらとの出会いは偶然の産物だって言ったよな???…実は1人だけそれに当てはまらない奴がいるんだよ」

そう1人だけ。あいつら4人の中で唯一自ら運命を切り開いたのではなく出会った奴。

運命を【受け入れた】結果出会った”幼馴染”がな。

「…その名前は知恵理。姫ノ城知恵理。俺とあいつの出会いが運命を切り開いたわけでも。ましてや必然なんかじゃない。…俺とあいつは【運命】だったんだよ」

だってそうだろ??同じ孤児院に引き取られ。孤児院が無くなったときもお互いに引き取り手がなかったから同じ街の同じマンションで暮らし。隣室同士。

結果的に今では半同棲みたいな暮らしときた。

これを運命と言わずに何という。全てがまるで磁石のように俺はあいつから離れられない。

たぶん俺がこれまで過ごしてきた人生の半分はあいつのものだと断言できる。そしてあいつの人生も半分俺の物だったと。

だから俺はこれからもあいつを

「だから俺は【運命】という言葉嫌いにはなれないんだ」

俺のその言葉に悶は押し黙ってしまっ。

だがそれから数秒も立たないうちに出しっぱなしにしていた手を降ろす。

そしてさっきと同じ笑顔を浮かべると口を開くのだった。

「…まあ人の考えは森羅万象。宇宙のように数多くあり…宇宙のよ
うに謎に満ちてますからね…」

悶side

”俺は”目の前を歩く日向に目を向けながらさっきの会話を思い出している。

あのととき あの日向の考えを聞いたときもしかしたらと考えたがやはり日向を取り込むのは不可能だったみたいだな。

でもまあいい。チルドレンは5人揃ってるし問題ないか。

そう考え俺は前を歩く日向に気付かれないように路地裏へと姿を隠していく。

この人混みだ。後ではぐれたとでも言っておけばいいだろう。

路地裏へと続く暗い湿っぽい不気味な道。そこを歩きながら俺はおもむろにポケットから携帯を取り出しボタンを押していった。

p i p i p i p i p i ……

「……ああ俺だ。こちらの問題は片付いた……ああ……じゃあ予定通りに頼んだぞ」

…… P i

「さて見ものだな日向。…お前は大事なものを失ってしまいそうになったときどう踊るんだ??」

知恵理 side

「…はあ。何でこんな事になったのよ…」

桜時市の路地裏に響くナギちゃんの弦き。薄暗く湿っぽいそこに私は連れ込まれていました。

ことの始まりは少し前の話です。

私とナギちゃんはヒナ君がここにいと駅前噴水広場に居たんだけど ナンパされちゃいました。

いつもならヒナ君やナギちゃんが追い払うんだけど今回の相手はしつこかったらしくそのまま路地裏へと強引に連れて行かれました。

でも。ナギちゃんはそれが狙いだったらしく路地裏に着いた瞬間私に一言入れると拳を構え

「さああなた達！！片っ端からかかってきなさい!？」

そして冒頭に戻る。

第3話 街での事件（後書き）

作「こんにちはは！！前回日向に指摘を受けたので今回は別の奴に来てもらいました」

知恵理（以下”知”）「こんにちはは〜ヒナ君の代わりにきました知恵理です。よろしくお願いします」

作「では、せっかく知恵理が来たので今回は知恵理への質問コーナーとしたいと思います」

知「よろしくおねがいます」

作「じゃあさっそく質問を…まずは日向との同棲生活はどうですか？」

知「ふえ？いや…／／／そんなこと…そもそも同棲してないし…／／／なんで最初の質問がそれなんですか？」

作「個人的な質問です。ではどうぞ！！」

日「何がどうぞだ！！この腐れ作者がああああああ！！！！！！」
作「ぎゃあああああ！！？」

日「知恵理！！大丈夫か？作者に何もされなかったか？」

知「う…うん。だいじょぶだよヒナ君」

日「よ…よかった知恵理。さあ、こんなとこいないでさっさと帰ろうぜ?」

知「うん 早く帰らないと夕飯の支度ができないからね」

作「あ…あの。俺のことは無視ですか?あの…ああ行っちゃった。でもこれで2人もハッピーだと分かったな。じゃあ次回予告。

知恵理と凧に訪れたピンチ。だが凧は慌てることはない。

不良達に立ち向かう凧。まさにその姿は喧嘩の達人だった?

次回【喧嘩の達人?】

日「問題 nothing だぜ!」

日「さくくしゃくさん あっそびーましょ?」

作「あれ?日向は知恵理と帰ったはずじゃあ…」

凧「そ。だからこれは日向と繋がった携帯電話よ?もちろん日向から事情は聞いたわ。だから…あたしと遊びましょか作者さん?」

作「へ?い…いや…出来れば遠慮したいかな…なんて…や、やめて!…お願い!…ぎゃああああ!」

次回に続く!!

第4話 喧嘩の達人？

bedside

「さああんた達！！片っ端からかかってきなさい！！？」

あたしは目の前にいるあたしと知恵理をナンパしようとした男。 2
人にそうつげながら拳を構える。

体つきがよく眼もとがつり上がった男とメガネをかけたインテリ系の男。 どちらもニコニコしてて気持ち悪い…。

でもあの様子を見る限りこっちの挑発にもあいつらは乗る気がないみたい。 案外落ち着いた性格なのかしら？

でもここで手をゆるめるあたしではない。 だからあたしはさらに口撃を加えていった。

「どうしたの？あなたたち腰抜け？まさかこんなか弱い女の子相手に怯えるなんてとんだチキンハートの持ち主よね？」

あたしは今できるかぎり最高で最悪の罵倒言葉で2人を挑発する。

さあ来なさい!!こっちはいつでもOKよ!!

『……………』

ただどあたしの安っぽいけどあたしが選んだ相手がムカつく言葉だけで構成された挑発にまったく動じることはなかった。

ここまで来るとさすがのあたしもイライラしてきた。こいつらしい加減あたしに本性見せなさいっての!?

あゝもう何なのよ!!来るなら早く来なさいよ

ていうかここまで挑発しといてなにも感じないなんてこいつらバカ!?!知恵理は見た目からして喧嘩するような奴じゃ100パーセントないし。

あたしにいたっては いたっては

あーもう!!なんで自分で自分のコンプレックスを言わなきゃいけないのよ!!

そうですねー!!あたしは背が低いから中学生に見られないですよー!!なんか文句ありますかー!!?

なんかムカついてきたわね。あつちから来ないんならこつちから行くかうかしら。

あたしは思わずその考えが頭の中へと過ぎる。これでも喧嘩なら得意分野なあたし。こんな奴ら相手なら勝てる自信はあった。

それにぶつちやけるとあたし目の前にいるこいつら好みじゃないのよね…

よし決めた。もう待つのはやめた!!さっさとやってやるつもりがない!!

他人の知らないところであたしはそう決心を固めるのだった。

こつちからしてみたら我慢の限界なんだから!!

「…どうやら来ないみたいね?だったらこつちから行くわ」

P i P i P i …… P i P i P i ……

そのとき。まるで図ったかのように携帯の着信音が響き渡った。その音に出鼻を挫かれたあたしはいつものノリで思わず転けてしまいそうなる。

な…何よ都合悪いわねあたしの決断を出鼻から挫いちゃって…。

こう言ったらあれだが1人コントみたいで案外恥ずかしいんだからね…!!

… P i

「【叶琉】かなる」

そしてその携帯の着信音を止めた携帯の持ち主は携帯を耳に当ててその自らの名前だけを告げるのだった。

「（コクリ）分かった」

そこから電話の持ち主であたしの目の前にいるインテリ系の男は領
き必要最低限のことだけを伝える。

そしてそこに居たのはさつきあたしたちをナンパしようとした、い
やらしい笑顔のチャライ男ではなく完全に大人な顔をした1人の男
だった…。

「（コクリ）では…」

…p.1

携帯を切ると同時にインテリ系の男はもう1人の男に耳打ちをする。

さつきからあたし達の存在忘れてないあいつら。

「ねえ。ナギちゃん…」

「何？知恵理…あたし今すごく機嫌悪いから近づかないほうがいい
わよ…？」

少しだけ動揺しているのか拳動不審な小動物みたいな知恵理。

普段なら抱き締めてしまいそうな彼女のその愛らしい姿。

ただ無視されてイライラの限界に近付き、爆発まで秒読みに入りつつあるあたしは舌打ちをしまいそうになった。

でも知恵理の次の言葉に現実を突きつけられる。

「ごめんね知恵理。お願いだからほんの少しの間だけ黙っててくれない？」

「…ナギちゃん。私もお願い…周りを見て」

知恵理の雰囲気にとこまで来てあたしはやっと気がつく。だからあたしは言つとおりは周りを見渡してみた。するとそこには…いるやいるや危険な道具を持った不良がゴロゴロと…。

気づかなかったわ…

今度こそあたしは舌打ちをしまっていた。

「ちょっとあんた達!! どういうつもり!?!」

あたしは周りを一通り見回すと目の前にいる2人をキツと睨みつけながら弾圧するように言葉を放つ。

「…うん…。どういうつもりと言われてもな…。俺達はただある人”に頼まれただけだから」

するとここにきてやっとつり目の男が口を開くのだった。

まったく…見た目通り下素な声なこと…。

「ふん!! あたしが言いたいのはなんであたし達みたいな少女相手にこんな人を集めたということよ!!」

「これは失礼しました」

語尾を妙に伸ばす独特のしゃべり方はあたしのイライラを増幅させる。

「まずは自己紹介から。僕はこの不良グループのリーダーをしてます。【駿河正臣】すのがまさおみと言います。で、こっちにいるのが。」

「参謀【因幡叶琉】いなはかなる」

「うん。相変わらず静かだね。叶琉君。」

余計にムカつくしゃべり方のつり目　正臣に比べて、要点だけを簡潔に告げるインテリ系　叶琉。

いい加減こいつらに付き合つのに腹が立ってきたあたしは苛立ち含みの口調で口を開いていた。

「…で？なんであたし達みたいな女の子相手になんでこんなに集めたのよ？」

「…簡単なことだよ。僕達はあなたの本性を知っているからだよ。」

「…本性ですって？」

正臣の言葉にあたしは反射的に呟く。そんなあたしの呟きに叶琉は自分が持っていたパソコンを見せてくる。

でもそれは少なからずあたしを　あたしと知恵理を驚愕させるものだった。

【桜時学園喧嘩の強いやつランキング第4位】

【 ”羽前風” 】

嘘っ！？あの記録まだ残ってたの！？

そこに記してあったのはあたしたちの地塗られた記憶の断片だった。

あたしの【大事な弟】を未だに傷つけ続けるあの地塗られた事件の

「…そのデータをどこで手に入れたの？」

「高等部の裏掲示板」

あたしの震えているような声で聞いたその問いに簡潔に応えたのはやはり叶琉であった。

高等部の掲示板か…やっぱり高等部の連中にははまだあたしたちのことを悪く言うやつが居るのね…。

こんなものさつさと消したいのに…入学式のとくに暴れた副産物でも言おうか…輝喜と出会った【あの事件】の記憶が蘇ってくる。

「…なるほどね。だからこんな人数になって完全装備で出陣てわけか…」

あたしは自分の周りにいる十数人の不良を見渡す。

どいつもこいつもあたしと知恵理のことを下素な目でみてやがる。ここまで嫌な空気久し振りだわ。

アウエーのこの状況。それにこの人数も含めてみると最悪な状況ね。でも

「はぁー…」

あたしは一度空気を吐くと再びを見据える。

そして彼らに。彼らの考えの間違いを指摘してやるのだった。

「はつきり言うけどね…あたし達のことを舐めすぎよ…人数不足だわ！！」

ガ
ンッ！！！！！！！

あたしはその言葉と同時に知恵理に触れようとした不良をぶっ飛ばした。

本能のまま、怒りにまかせた拳だった。

「ふん！！ストリートの喧嘩であたしとやるうってんなら、せめて3ダースは用意しなさい！！」

ガ
ンッ！！！！！！！

宣言しながらさらに近くのパイプを持った男の顔に拳を放つ。

そう…家柄上【戦闘訓練】を受けているあたしにはこんなやつらただの雑魚でしかない。たとえこれだけの人数を集めていても勝負は見えていた。

『うおりゃー！！！！！！！！！！』

『はぁー！！！！！！！！！！』

『死ねやー！！！！！！！！！！』

相手の力量もはからずに 馬鹿なやつらね。今の状況を見てなかったのかはたまたま3人ならいけると思ったのかあたしに武器を振りかざす不良達。

まったく…こいつらに比べたら真備の方が数倍頭がいいわ…。

ドグシッ！！ダグシッ！！ズベシッ！！

突っ込んできた3人を1人ずつ丁寧に沈めていく。最初の男は跳び

膝蹴りでノックアウト、2人目はその勢いで顔に拳をめり込ませ、3人目は2人目の顔にめり込ませた拳を軸にして回し蹴り。

あたしのこの一連の動作に周りにいた連中が戦慄する。

どうやらここまで来てやつとあたしに恐怖を抱いたようね…。

あたしはそこで思わず腹の底からどす黒い笑みが浮かんできた。こいつらの恐怖する姿を楽しむような…そんな笑みが。

「…ははは。あはははは」

口から出てきたその笑みは間違いない。あたしは今、最高にハッピーだった…これが【羽前家の血】

人を 自らの大切なものを守ることを生業とする我が愛しき光の血であり闇の血というわけね。

…いいわ。最高よ。もっとあたしを…

「もっと…あたしを楽しませなさい！！あんだ達いいいいいいいい！！！！！！」

「…狂ってる」

誰が言ったのか、その言葉はその場にいた不良たち全員のあたしに対する心の言葉だった。

でも今のあたしには最高のほめ言葉。あたしの空虚な心を埋める最高の言葉。

あたしの実家である羽前家の特殊な【羽前家の血】と呼ばれる本能によって、あたしは今猛烈なるリビドーを感じていた。”知恵理を守る”という最高の使命を授かったあたしを止められるのは最早この場にはいない。

あたしはもしかしたらあたし自身すら傷つけてしまうかも。

そう思えるくらいにあたしは覚醒していた。

…ガバツ！……！！

「ナギちゃん…」

でも世の中はうまくいかないものなのよね。ほら、今回だって

結局またこの子に止められちゃう。

あたしは唐突に何か温かいものに包まれていた。

まるで花のようないい香りがする。嘗て家柄の　羽前家に生まれ
たせいで、イジメられていたあたしと真備を救ってくれた彼女の手
によって。

「…知恵理」

そして彼女の名前を呼ぶ。その瞬間にあたしの覚醒した血は一気に
鎮静化していった。

なぜなら【羽前家の血】は人を守るための本能。守っている者が望
まなければ…それに従ってしまうのだ。

「…知恵理」

「………」

無言であたしを抱きしめる知恵理。その力のはっきり言ってすぐに
でも振り払えてしまうほどひ弱ですぐに壊れてしまいそうに思える。

でもそこに腕力ではなく彼女自身にある力が加わったらどう？心とか思いとかそんなんじゃない。言うなれば【知恵理の力】とでも言うのかしら。

少なくともあたしにはこの力以上の力を持たないわ…。

本当に…彼女には適わないわね…。

「…もういいわ知恵理。もう…大丈夫よ」

安心させるようにそっと呟く。後ろから抱きしめられている今のあたしにはそれしかできなかつた。

でも、あたしの思いはちゃんと彼女に届く。あたしの声に知恵理は安心したのかゆっくりと腕を緩めていった。

「…うん、早く帰ろうナギちゃん。じゃないとヒナ君たちが怒っちゃうよ？」

「そうね、あいつら案外心配性だからあたし達がいなかったら心配するからね」

知恵理の腕から解放されたあたしは知恵理の方へ振り返りにっこりと微笑む。

それに吊られたのか知恵理もあたしに微笑み返してくる。むう／＼なんでこの子の笑顔はこんなにも綺麗なのかしら？

…ま、いつか。

「じゃあ、そういうことだからあんだ達。あたし達帰るわね？」

知恵理の手を取り、あたしは不良どもに笑顔でそう言う。

不良どもは最初あたしたちの行動に呆然としていたがあたしの言葉に弾かれたように動き出した

「ちょっと待ってほしいかな／＼僕達としては／＼このまま去られたら／＼困るんだよね／＼」

「…何よあんだ。まだ居たの？はつきり言ってあたし存在すら忘れてたわよ？」

「それは／＼非道いな／＼」

あたし達の退路を断つように男が現れる。不良のリーダー【駿河正臣】だ。

「…で。あんた何？あたし達にまだ用があんの？」

「いや〜これでも【雇われた】身だからね〜逃がすわけには〜いかないんだよ〜」

「…なんですって」

あいつの言葉の中にある聞き捨てならない言葉にあたしは目元に力をいれる。

「用。お前じゃない。用ある。この女」

…シヤキッ

そして、そのときあたしは目の前にいる駿河しか目に入ってなかったから後ろから近付いてくるそいつに気がつかなかった。

「な…ナギちゃん…」

「動く。危険。ナイフ。刺さる。痛い」

握った知恵理の手に力が入る。なぜならあたしが振り返るとそこには折られたみ式のナイフを知恵理の首に突きつける片言しゃべりの【因幡叶瑠】がいたからだ。

「…あんだ。自分が何してんのか分かってんの？」

「分かる。これは脅し。違う」

睨みつけ問い掛けたあたしの言葉に叶瑠は即答する。

相変わらず彼の話す言葉は単語だけの必要最低限の言葉だけの羅列。だがその言葉だけであたしの不利さは伝わってきた。

今にも泣きそうな顔の知恵理の手をあたしはただ無言で握り締める。

歯を噛みしめすぎてギリギリと鳴るのが分かる。

あたしにできるのはただ知恵理から絶対に離れないという決意のもと手を握り続けることだけだった。強くても構わない。絶対離れないように強く

知恵理 side

「お前。邪魔。離せ」

「…いやよ。知恵理をあんたと一緒にさせるなんて、死んでもいや」

そう言つてナギちゃんは私を挟んで私にナイフを突きつける因幡さんを睨みつけました。

「脅し。違う。俺。刺す」

「あ…あら、刺せるのかしらあんたなんか。そんな脅し通じないわよ?」

「叶瑠、別に殺さないなら顔とか傷つけでもいいからな」

「（コクリ）了解。正臣」

「くっ…！？あんだ達、どこまで外道なのよ…！！」

さんの言葉にナギちゃんは唇を噛み締めるのが分かった。でも私は怖くて動けません。

喉に付けられたナイフ。その冷たさが肌を伝って私の思考の流れを止めてしまっていました。

私にはもうなすすべがありませんでした…。

「どっする。手。離す。それとも。顔。傷つく」

そう言いながら私の肌を伝うように喉から顔へと冷たい感触が移り変わっていく。この動作に私は反射的に目を閉じた。

「……………分かったわ」

でもそれと同時にナギちゃんの声が私の耳を震わす。そして手にあった温もりが私の元を離れるのを感じました。

私を安心させてくれる最後の寄りどころ。それを失った私は反射的に目を見開きました。

そして私の目に映ってきたのは　悲しそうな、悔しそうな、そんな顔をするナギちゃんが後ずさるように私から離れていく姿。

「…知恵理。ごめんね。本当に…ごめんね」

ナギちゃんは最後にそう言うと顔を俯かせ私と駿河さんのちょうど真ん中くらいの間で立ち止まりました。

血が出るくらいまで拳を握りしめ、前髪で目元に影が差すほど俯いたナギちゃんの姿を私はただ見つめることしかできませんでした。

でもそうしてるうちに残った不良さん達がナギちゃんに近付いていく。私が嫌いな目をしながら

「さてお前ら俺達の仕事は殺さずにその女を連れて行く」ということだったけど」

そして駿河さんの方も私が嫌いな目をしながらゆっくりとナギちゃんに近付いていく。そのとき私は最悪の事態が頭に過ぎりました。

そうであってほしくない。そうであってほしくないと心の中で祈る私。

でも現実はそのうまいものではありませんでした。

「俺達は別にこのうちの女をどうしようが構わないとい
うわけだよな」

『ギヤハハハハハ！！』

辺りに響く不良さんたちの笑い声。その声に私の予想は確信に変わった。

この人たちはナギちゃんを…ナギちゃんを…。

そう思った私はいてもたってもいられずにただ叫びました。私の親友を守るために

「やめて！！！！！」

私の声に今まで騒いでいた不良さん達の笑い声が止まる。みんな私が叫ぶなんて思ってもなかったみたい。

でも何より驚いていたのは不良さん達の中心にいるナギちゃんでした。ナギちゃんの目は大きく見開き驚きの表情が見える。

でもそれに気を取る余裕は私にはもうありませんでした。だから叫びます。

ナギちゃんのために。

「やめて！！ナギちゃんを…ナギちゃんに…ナギちゃんに何もしないで！！」

気付いたときには私の頬を何かがつたつていました。それは多分不良さん達に対する恐怖で流れ出てきた涙なんだと思う。

でも、それでも私の叫びは止まりませんでした。

「お願い！！お願いだからナギちゃんを傷つけないで！！私が何で

もするから…何でもするから…だからナギちゃんに触らないで！」

「知恵理…」

涙を流して必死に悲願する私を見たからか、いつの間にかナギちゃんも涙を流していた。

大丈夫。ナギちゃんが守ってくれたように今度は私がナギちゃんを守るから

そして私はナギちゃんに笑いかけました。最後にナギちゃんを安心させるために。

「問題 nothing だぜ知恵理。そして俺がお前を守るからな」

そして…いつも私を見守ってくれる私の大切な人の声が聞こえてきました。

目の前で綺麗な涙を流しているナギちゃんの目が大きく開く。私もその声が信じられませんでした。

ガ
ンッ！！！！！！

刹那、私の耳元に何かを打つような音が聞こえてきました。それが何の音だったのが最初、私には分かりませんでした。

でも、それも束の間。気がつくと私の後ろにいた因幡さんが地面に倒れる。そこでやっと私は気がつきました。

「…女の子を2人も泣かすなんて、なかなかの色男ぶりだなお前ら」

これは、因幡さんが殴られた音なんだと。

そしてこれを行った犯人。それは私をまたぐように夕陽で長く延びた私の見慣れたその影なんだということに。

「…ぶふっ！何言ってるのよあんた、キャラ違うじゃない！！だいたい、あんたがこんな可愛い女の子を2人もほったらかしにしたのが悪いんでしょ？……遅刻ギリギリ、本日2回目よ」

その陰の登場に安心したのかなギちゃんはず吹き出しちゃってました。各上私も、似合わないなーなんて思ったのは内緒。

「まったく、人がせつかく決めてんのにノリ悪いな」

「ふふふ でも本当にキャラじゃなかったよ？一瞬誰だけ分からなかったもん」

「げえええ〜知恵理にまでそんなこと言われるなんて…俺ショックだわ…」

「あははは ごめんね」

あれ、思わず本音が出ちゃった(テヘ)

でもたった1人、この場に登場しただけでこんなにこの場の空気が変わるなんて…。やっぱりすごいな…。

私はこの影の正体。その人物を思い、頬を緩ませてしまいます。でもそれは当たり前。だって彼は

私は振り返る。その影の主を見るために

「ヒナ君！！！！」

だって彼は　私が大好きな幼馴染【不知火日向】。

その彼が私の後ろでパイプを持って不適に笑っていました。

第4話 喧嘩の達人？（後書き）

凧「やつほー！今回はあたしがあとがきをやることになったわ！
！となわけであたしの歌を聞け〜！！！！！」

真備（以下”真”）「ばっ…！？姉貴何やってんだよ！？さっさと
屋根から降りてこい！！！」

輝喜（以下”輝”）「あははは〜 ナギリンたらパンツ丸見えです
よ〜」

作「…なんだこのカオス」

日& amp ;知『『あははは…』』

凧「いえええええい！！！」

真「誰かあそこにいるロリ萌ヤローを止めてくれー！！！！！」

しばらくお待ちくださいm（ ）（ ）m

凧「あーすつきりしたわ。じゃあ時間もないしさっさと次回予告し
なさい作者？」

作「…あの〜つかぬことお聞きしますが、その右手から落ちてるものは…?」

輝「あははは〜 マキビンは天の海に召されましたか〜」

日「いい奴だった。いい奴だったのに…なんで先に逝っちまったんだ!?!」

知「マキ君…ぐすつ。マキ君のこと…絶対に忘れないからね?うわああああん!?!」

凧「さ・く・しゃ?さつさと次回予告しなさい?じゃないと…」

作「時の秒針。次回は

知恵理と凧のピンチに現れた日向。彼の登場に不良達は戦慄する。

そしてそんな彼らを見下ろす3つの影が…。

次回【知られざる陰謀】」

日「くつ…問題…nothingだぜ…」

真「…ジュース買ってきたけど何この状況?」

凧「あんたがあたしのジュースを落としたのが悪いんでしょ!?!責任取りなさい!?!」

真「い…いや!?!だから代わりのジュース買ってきたじゃん!?!」

凧「問答無用！！！！」

真「ぎゃああああ！？」

作「お前ら…マジでなんでそんなにノリがいいんだ？」

日&mp;知&mp;輝『『慣れてますから』』

次回に続く！！

第5話 知られざる陰謀

日向side

「ヒナ君!!!!!!」

知恵理の声に俺は不適な笑みを作りながら「よお」と片手を上げた。

「よお。知恵理。問題nothingだったか？」

「うん!!!大丈夫だよ!!!」

俺の言葉に笑顔で応える知恵理。だがその頬にはまだ真新しい涙が流れたような後がある。

泣いてたのは分かってたけど、その顔を見た俺は思わず舌打ちしなくなった。

「あんた遅すぎんのかよ？罰金つけるわよ？」

「そう言うなよ。これでもお前ら探すのに結構苦労したんだから…」

俺は凧の言葉にさっきまでのことを回想していく。悶が勝手にどっか行っちゃったからとりあえず知恵理達の所に戻ろうと思って戻ってきたら影も形もなし。

慌ててみんなに連絡入れようと思ったら悶は出会ったばかりで番号しらないし、機械音痴の真備は携帯持ってないし、輝喜には通じないで大変だったんだからな。

「はあー…」

「どうかしたのヒナ君？なんでため息ついてるの？」

「…気にするな」

俺の苦労は知らないほうがいいのさ

「さてと。それはともかくとして…凧。俺達がこれからしなくちゃ

いけないことはなんだ？」

「…ふん！！日向。そんな決まりきったこと言われなくても分かっているわ」

そこまで言うと俺と凧はゆっくり息を吐く。たぶんここからは知恵理にはちよつと厳しい映像かもな

でも、知恵理にまで手を出さなければここまですることはなかったのに…知恵理に手を出したのが運の尽きだったな。

凧の言葉の後、俺は持っているパイプを凧は自分の指を突きつける。これは俺達の決めゼリフ、知恵理に手を出した罪をつくなくてもらうためのな！！

『断罪！！！！』

その言葉と共に俺はパイプを握りしめ、凧は拳を堅く締め付け、俺達という恐怖に震える不良達のもとへ向けて一気に駆け出していた

水城 side

「……おおくやつと始まったな」

隣にいる刹那はそう言つと楽しげに笑みを浮かべる。

俺達は今、不知火日向と羽前凧が喧嘩をしている様子が見えるビルの上。つまり桜時市の【街】と呼ばれる繁華街の一角にある裏路地がよく見えるビルの上にいる。

そしてこの場にいる俺と刹那、それともう一人フードを被った男が日向と羽前凧という少女の喧嘩を見下ろしていた。

フードの男については学校に潜入させた作業員だから日向達の前で誤って本名を呼ばないように俺達はあえてコードネームで呼ぶ。そして、彼のコードネームは【レリエル】だから、俺達はこの作戦中のみ彼をレリエルと呼ぶ。

「……レリエル」

「何ですか？水城」

「……お前から見てこの喧嘩どうなると思つ？」

俺がそう問いかけるとレリエルはいつときじつと喧嘩をみた後深いため息と一緒に答える。

「あれはもう大人と子供の喧嘩ですね。日向はともかく風のほうもあれは戦闘訓練を受けた人間の動きです。すぐに決着つきますよ」

そしてレリエルはさも当たり前のようにしてそう答えた。

……だがまあ妥当な答えだな。

俺の目から見てもあれは見ていて馬鹿馬鹿しく思うほど実力に差がありすぎる。

あの羽前風の動きにはくるいはない。完全に喧嘩なれしている者の動きだ。

そしてもう1人。不知火日向の方は

「……長めの棒を武器にするとやはり刀の感覚は抜けてないようだな……日向」

俺の独り言を聞くとレリエルは「フッ」と一回鼻で笑うと黒のフードが外れないように軽やかに立ち上がり、ビルの角へと歩いていく。その動きに刹那が唇を震わせた。

「どうしたんだ？レリエル？」

「そろそろ終わりそうですから戻るんですよ」

「そっか……」

刹那はさも興味なさげにそう呟くと再び下（日向達）を向く。しかしレリエルは再びこちらに振り返り。

「そっだ刹那……」

「ふえ？」

彼の顔を隠すフードにより表情こそ見えないがその雰囲気でレリエルはニヤリとした顔なのが分かる。

そしてその視線は刹那のある部分に注がれていたのだった

「あまりお菓子ばかり食べてると太りますよ？」

レリエルの言葉にきよとんとした刹那の周りにはスナック菓子の山。それを見てレリエルはもう一度鼻で笑うとビルから飛び降りた。

「うるせー！！俺の勝手だろー！！」

刹那の叫びを聞きながら俺は相変わらずレリエルは刹那の扱い方をうまいと思っていた。

「これで最後っどー!!」

ダ
ンッ!!!!!!!!!!

俺はリーダー格と思われる2人を除いた不良の最後の1人の背中に
回ると首の後ろの急所を的確にパイプで打ちつける。

…バタッ

その音と共に男は他の気絶している不良達と同じ運命をたどる。

そして、これにて俺のノルマは達成したということだ。

「遅いわよ日向。待ちくたびれたじゃない…」

一足先に自分のノルマを終えた凧はリーダー格だと思われる男を逃
がさないように警戒しながらそう口を動かす。

それに対して俺は1回深く息を吐くとそれに応えるのだった。

「しょうがないだろ。俺の方がノルマ多かったんだから…」

「あら日向？何か文句あんの？あたしは女の子なんだからそんなの当たり前でしょ？あんた頭いいんだからそれくらい分かるでしょう？」

「少なくとも大の男相手に回し蹴りやら飛び蹴りやらするやつがい
うセリフではないよな？」

目をひきつらせながら風の方に転がった不良達の末路を見て俺
はそう呟く。少なくともお前に関してはもう少し女の子らしくなっ
た方がいい。内面的にも【外見的】にも…。

そう思った瞬間。絶対零度のような寒気と殺気を風の方から感じた
のはきつと気のせいだろう…。

俺は後ろで睨む風を無視する。だってあの目、滅茶苦茶怖いんだも
ん。

「ヒナ君大丈夫？どこか怪我してない？」

そのとき知恵理が心配そうに駆け寄って来る。俺は安心させる意味も込めて知恵理の頭を撫でる。

知恵理の銀色の髪はとても撫でやすくサラサラだ…。知恵理の方も「えへへ…」と嬉しそうに笑顔を見せている。

だがそのとき、俺はこの行動の浅はかさを知る。ここは街の中。百歩譲ってそこまではいい。よくはないがそこはいい。

しかしこの場にやつがいることを忘れていたのだ…。

「さて、問題 nothing に事件が終わったが…」

「…日向。いくら冷静に誤魔化してもあたしはちゃんとあんたらのラブコメーションを見たからね?」

「うつ!?! やつぱりですか…!」

真っ赤になる俺。知恵理の方も恥ずかしいのか顔をうつむかせてしまっている。

そして俺も自分の顔が赤くなっているのを誤魔化すために一度大きく咳払いをするのだった。

「じほん。その話はおいといて…」

「おいといて」

俺の言葉に知恵理が続ける。真つ赤な顔で精一杯苦笑いを作り、そう誤魔化す俺達。

それに凧は一瞬呆れた顔をするもどこか諦めた感じでポツリと呟やくのだった。

「ま、いいか…」

そして、俺と凧はリーダー格男に向き直った。

知恵理は思わず俺の学ランの袖を握りしめてしまったようだ。まあ怖い思いしたんだから当然か……。

「さて駿河正臣さん。先ほどのお話を教えて頂きましょうか？」

凧の勝ち誇ったような顔にその男 駿河正臣は少し脅えた表情となる。

だがそこはさすがに俺達を毎回折檻しているDsの姐さん（あねさん）。そして俺と輝喜と合わせて腹黒3人組と呼ばれる羽前さんちの凧さん。

ニヤリとイヤらしい笑みを浮かべると駿河の前で腕を組み仁王立ちした。

「…ああーあ。駿河正臣とやら…」愁傷様」

そしてその姿を見た俺も動き始める。凧が腕を組み仁王立ちしたということは、これから何が起こるか分かった俺はすぐさま行動を始めたのだ。

「ちゅえ〜りゅ〜ちゃん。いい子だからこっちに来ましょ〜ね〜」

「ふえ！??ヒナ君どうしてそんな風に指をワキワキさせてこっちに来るの!??」

突然の俺の奇行におびえ気味に後ずさりする知恵理。でもそんなこ

「…で？しゃべる気になったかしら？」

「ガタガタガタガタ…」

あれから数分。俺はたった今、目の前で起こった情景へと指で十字をきっていた。

ちなみに前にも言ったが俺は決してクリスチャンではない。そのところは忘れないでいただきたい。

「むう…ヒナ君。そんな事してないでちゃんとこっちを見なさい！」

ちなみに俺は、目の前で唇を尖らせて唸りながらそっぽを向いている幼馴染に頭を下げている。

知恵理は俺　　というか俺達の母親みたいな存在だから…。だから俺はどうしても知恵理には頭が上がらないわけだ。

「まったく。分かったヒナ君？これからはあんなことしたらダメだからね？」

「問題nothing。これからは気をつけます…」

そこに来てやっと俺は頭を上げる。そこには腰に左手を当てて右手の人差し指だけを俺の顔の前に持ってきている知恵理の姿。マジで母親みたいだな…。

しかも知恵理のやつ。あまりに似合いすぎだろ。

そう思い俺は思わず苦笑いをしてしまった。やっぱりこうなのは俺のせいなのかね…？

「…まあ分かったなら良いんだけど…。ねえヒナ君？ナギちゃん、駿河さんに何したの？」

知恵理の視線が凧と駿河の方へ移る。でも確かに俺に耳と目を封じられた知恵理には不思議でたまらないと思う。

「ただ、俺の目的はそれだったから何の問題もない。だって俺は見せられるものじゃないから…。だから」

「知恵理。俺はいつまでも今のままの君でいてほしいよ」

「…ヒナ君。なんでそんな優しい目をしてるの?」

「問題 nothing。気にするな」

そこまで言っただけ俺は凧と駿河に顔を向けた。

「…で。もう一度聞くけどなんであたし達を襲ったのよ?」

「あはは〜…いや〜…僕達は頼まれたんですよ〜…あの〜…」

未だに脅えているのか言葉がうまく出て来ない駿河。でもしっかりと聞き取れる言葉が返ってきたのだった。

「あの〜…フードを〜…被った〜…男に〜…」

【フードを被った男】確かに聞こえたその言葉に俺達は眉を歪める。初めはふざけてるのかと思った。だが駿河の様子をみる限り、そんな風にはとうてい見えない。

駿河は話を続ける。

「あの男が…依頼…したのは…その女を…誘拐紛い…するという…依頼だった…」

「つまり知恵理を連れてこいってことね」

「でも…下調べで…調べてるうちに…あんたたちの…ことを知った」

その言葉は聞き捨てならなかった。

俺の頭の中にあのときの情景が浮かぶ。輝喜と出会い…真備が傷ついたあのとき…3年前のあの日の情景が。

「ちょっと待て。それはつまり学園の新聞部が作ってるランキングのことか？それとも…【あの事件】のことか？」

俺は思わず凧と駿河の間に入り込みそう問う。こればかりは聞き流すことができなかつたからだ。

俺の質問の意味。それは知恵理にも凧にも分かっている。俺達はなるべくこのことを知られたくなかつた。

【あの事件】で一番傷ついている俺と知恵理の親友で凧の”大事”な弟であるあいつに…。

「…いや、俺達が調べたのは、ランキングのことだよ、あの事件なんて言われても、分からない」

返ってきた言葉に俺は少しだけ安心した息を吐き出す。だが完全に安心できなかつた。

ランキングの方もあの事件の副産物には変わらない。結局俺達はまだあの事件に縛り付けられているのだ。

「…ランキングの方ということは確かさっき言ってたわよね？分かってるのはあたしが4位だということだけ？」

話の腰を折った俺を咎めることなく、凧は駿河に問いかける。

ランキングの4位って…そこまで分かっているのか？ということとはたぶん俺の事も…そしてあいつらの事も。

このときの俺の予想は当たっていた。凧の言葉に駿河はゆっくり首を横に振る。その動作に俺は確信した。

「俺が知ってるのは…そこにいる【不知火日向】が…喧嘩の強い奴ランキングの…1位だということも…それと後の2人も…知ってます…」

「コウ君とマキ君のことも…」

知恵理にもあの記憶はつらいと思う。知恵理は確かにランキングには入ってはいない。でもあの事件の根本的原因是知恵理にあるとも言えるからだ。

「…で。話を戻すけど結局、あんた達を焚き付けたのは誰なわけ？」

「それは…」

話の流れが確実に俺達をネガティブにしていく。そう思ったのか風が話を戻す。

でも確かにそこが俺達にとって最大の疑問だ。誰がどんな理由で知恵理を連れ去ろうとしたのか。それは確認しなかった。

だけど駿河は風の鋭い視線に目を背けるばかり。おそらくフードの男というくらいだ。雇っただけのこいつらに正体を明かしてるわけがない。

風の方もたぶんそれは分かっているはずだ。だから無理やり聞き出すとはしないのだろう。

行き止まりかと俺達は考える。だが思いも寄らぬところから声がかかった。

「…じゃあ駿河さん。その人との合流地点はどこでしたか？」

「……！？」

唐突に聞こえてきた知恵理の真剣な声。それは風にとって盲点だったらしく「はっ」とした顔になる。

「…そうか。少なくとも知恵理を連れ去った後に知恵理を引き渡すためにもう一度どこかで会うということね！！知恵理！！あんた天才だわ！！」

「えへへ」

凧の言葉に知恵理はニコニコと笑顔を浮かべる。…辛いな。この顔を見てると。

「…残念だけど知恵理。それはたぶんできない」

だけと言わなければならない。知恵理の案に対する否定の言葉を

「どっぴいっことよ日向？」

再び刺すような睨みが今度は俺に向けられる。だけど俺はひるむことはなかった。

俺は一瞬だけ知恵理の不安そうな表情にこのことを言うか迷いが生じる。でもこれではだめなんだと最後には口を開いていった。

「…いいか2人と。こいつらの依頼者はフードを被って顔を隠すほど用心深い男だ。そんな男が失敗時のパターンを考えてなかったと思うか？たぶんヤツはこういう時のために、集合場所は後で連絡するように知らせてあるはずだ…違うか？」

流れるような俺の言葉に駿河は一回だけ頷いた。

「なるほどね…敵はなかなか頭がいいというわけか…」

「…ごめんねヒナ君。役に立てなくて」

心底残念そうな顔の知恵理。俺はそんな知恵理の頭をポンポンと2回撫で、駿河に向き直した。

「…じゃあ駿河正臣。あんたが知ってることはもうないのね？」

凧の問いかけに駿河はコクリと頷く。

だがその瞬間だった。

…ガ　　ンッ！……！！

駿河に正面から近づいていた風のボディブローが綺麗に彼の体をとらえる。

そんな綺麗すぎるボディブローのせいかな駿河はゆっくりとその瞼を閉じていくのであった。

こうして【街】での事件は終息する。だがこのときすでに新たな火種が俺達を手招きしているは考えてもいなかった。

新たな出会い。そして俺達の【運命】を根本的に変えるほどの新たな火種が

第5話 知られざる陰謀（後書き）

作「…え、前は何かとすみませんでした。あの後、凧と真備にはきつくいつておきましたので」

日「確かに前はあれだったしな…凧自身かなり反省してたし…」

輝「というより落ち込んでたよね？なんかだいぶキャラ崩壊しちゃってたもん」

作「いや、あれは最早キャラ崩壊どころの問題じゃなかったような気がするんだけど…」

日「問題nothing。とは言えないよな…」

輝「ナギリ。どんまいですね」

作「今回はここまで。次回の時の秒針は

街での事件が終結する。だが、それはまた新しい事件への布石だった。

夜、真備と凧の2人と別れる日向と知恵理の前に墮天使が降り立つ。果たして墮天使の正体とは？

次回【墮天使レリエル】

日「問題nothingだぜ!!」

凧「あたしったら…いったい何を…?」

真「落ち着けて姉貴。次回は俺達が主役の部分もあるんだしさ…」

凧「でもあたしのトラウマに関することでしょ?もうあたし鬱だわ…」

真「…頑張ろうぜ姉貴」

次回に続く!!

第6話 墮天使レリエル

日向 side

「はあ。結局何も分からねーなー…」

俺は気絶している2人。駿河と因幡を見ながらそう呟いた。

不良達を伸した後、俺達はそれなりに思考を巡らせて今回の事件について考えてみた。

だけどやはら情報が足りなさすぎる。分かっていることと言えば、今回の事件は【フードの男】が首謀者だったこと。それとその男がかなり用心深いということだけ。

完全な手詰まりだった。

『はあ…』

「どづしたんですか皆さん？揃ってため息なんてして？」

唐突に聞こえる声。俺は聞こえてきたその声について愚痴ってしまう。

「いや…な。ここまで派手に喧嘩したのに得たものが何もなかったんだよ…」

「得たもの？」

「ああ…得たものは何もなかったよ…」

「…そんなことないと思いますよ皆さん。だってあなた方は知恵理さんを守れたんじゃないありませんか」

「ん。…そう言ってもらうとありがたいな…少しは気持ちが悪くなった気がするよ…はははは…」

なんかそう言ってもらえると本当に助かる。

その言葉は俺の心を癒やす特效薬みたいに俺の中へと浸透してくる。

【あの事件】以降、喧嘩なんて久しぶりだったしな…。

本当に…ありがとうよ。

俺は“誰かは知らない”その声に感謝の言葉を告げるのだった。

「ん？あれ…なんか…」…日向も気づいた？」

「ヒナ君とナギちゃんも？実は私も…」

俺達はそこに来てやっと謎の声に疑問を抱く。聞き覚えがあるような…ないような…そんな声に。

そして俺達は俺と話してた声のほうに顔を向けた。するとそこには

「も…悶！？」

そこには…黒髪の長いしっぽ髪をなびかせる中国からの転校生。【李・悶】がいた。

どつりでどこか曖昧な声だと思ったぜ…。今日会ったばかりだから声の聞き覚えが曖昧になるのは当然だよ…。な…。

「もももも…悶！？ああああ…あんたいつから、そそそそ…そこにいたのよ!？」

「落ち着いて下さい凧さん。実は最初からいたんですよ…」

凧の動揺した問いに苦笑いしながら悶は応えた。それにしても凧。動揺しすぎだろ…。

「さ…最初から？モン君…どこにいたの？」

「ええ、実は日向さんがくる前からその物陰に隠れていました…僕。基本的に喧嘩は苦手なものでして…」

少し、しゅんと落ち込んだようにしながら悶が答える。でも、まあ…それなら仕方ないか…。

「はあ…まあ良いけどね…」

凧の一言でとりあえず悶の突然の登場はなかったことになった。

だけど、ふと俺はそこで疑問に思った。

あれ？悶って俺や凧に気配も感じさせずに近づいたよな…と。

我流で喧嘩術をやってきた俺ならともかくとしてだ。家柄上”戦闘訓練”をしてきた凧にも気付かれてなかったんだぜ？その証拠に悶の接近に気付けなかった凧が無茶苦茶動揺してたじゃないか。

こいつ…本当に素人なのか？

「…とりあえず。今はこいつらが起きる前に移動しましょ」

俺は周りに倒れている不良達を見渡しながら言った凧の言葉に、思考を止める。確かに…今は凧の言うとおりに動いた方がいいな…。

「問題 nothing。確かにその通りだな…」

そして、俺達は裏路地を出たのであった

知恵理 side

「あれ？なんでお前らそこから出てくるの？」

路地を出た瞬間。ちょうど裏路地の入り口の目の前にマキ君とコウ君がいました。

コウ君…マキ君を見つけられたんだ。

「その辺りは気にしないで2人とも。気にしたら負けだと思っときなさい」

「…？…よく分からないけど、姉貴がそう言うならそう言うことにしとくぜ」

「あははは どうせみんなでマキビンを探してただけでしょうからね」

ナギちゃんの、ちょっと無理があるようなその言葉にマキ君とコウ

君はなんとか納得したみたい。

いえ。納得した振りをしてみたんだ。

私にはその辺は分からないけど、長年のつきあいだから2人の雰囲気です。何となくそう感じました。やっぱりマキ君もコウ君も優しいな……。

「輝喜：お前携帯どうしたんだ？」

「ヒナタン携帯って？」

そのときどこか顔をしかめたヒナ君が話に割り込んできました。携帯って何なんだろう？

私がそんな疑問を持っているとヒナ君はまた深くため息をして頭を抱えながら語り出しました。

「俺。何回かお前に連絡したんだぞ…俺達”ちょっと”困ったことになってたんだから…」

私はその発言を聞いて納得しました。

なるほど…私達を探すためにコウ君に連絡いれたのか…と。

ヒナ君の言葉にでコウ君は「うーん…」と何か考え込むような仕草をします。でもそれから数秒もするとポンツと手を叩きました。

「あ…!あのとときか…!」

どうやらコウ君には何か思い当たる節があるみたいで、1人うんうんと頷いていました。

「あのととき?」

ヒナ君が顔をしかめつつそう聞き返します。

でもコウ君の答えは私達の予想の斜め上を行っていました…。

「うん。ちょっと下水道にいたときに…」

…え？コウ君？それはもちろん冗談だよな？

コウ君の予想外すぎる応えに私達は目が点になりました。

下水道って…コウ君…どうやって入ったの？　そこが問題ではない。

「…なんで、下水道なんかに行ったんだよ？」

「そんなの決まってるでしょヒナタン　マキビンを探すためだよ」

心の底から楽しそうなコウ君の言葉。確かにマキ君が方向音痴なのは分かるよ？

でも…い、いくらなんでも…そんな所には…。

「はぁ…あのね輝喜…うちの馬鹿弟がいくら方向音痴だからといっても、さすがにそんなところにいるわけがないでしょ！！もう少し人間の常識考えなさいよ！？人間の常識を！！」

スパアアアン!!!!!!!!!!

ナギちゃんの咎めるような言葉が終わった瞬間。どこからか刀で斬られたような音が聞こえてきた。

もしかして今の音は…？

「ま、まさかね…いや。いくら真備でも人間の常識的にそんなことが…」

「呟。現実には甘くないと言っことだ…」

どこか悲壮感が漂うヒナ君の眩き。そのヒナ君の視線を追うように私達はマキ君のほうを向きました。

するとそこには

「……………（ズ～～ン）」

コウ君以外の全員が言葉を失ってしまいました。そしてコウ君は苦笑いをする。

そう、そこには緑色の槍に突かれ、地面に崩れ落ちたマキ君がいたのです。

「…輝喜、うちの馬鹿弟…いたのね」

「…うん。残念ながら」

わ…わお。これでマキ君が筋金入りの方向音痴だって証明されちゃった…。

「なにか…人間的にすごいですね…」

「悶。残念ながらそれは一切慰めの言葉にはなっていないからな…?」

モン君とヒナ君のやり取りはたぶん無情にマキ君の耳に入ったんだと思いました…。

真備side

「じゃあな日向。知恵理」

「See you . Bye!! 2人ともまた明日ね!!」

帰り道。俺と姉貴は日向と知恵理に精一杯手をふり別れの言葉を送る。すると向こうもしっかりと手を振り、それぞれの帰路についていった。

「帰るわよ。真備」

「ああ…」

でも、ここから俺はもう1つ仕事をしなければいけない。時間はこの道から家につくまでの時間。

さて…ここからは俺の仕事だ。今日こそは…。

今日こそは姉貴の心の壁を砕かなければ。

コツ…コツ…コツ…

俺達は家へと足を進める。暗くなったからか辺りが一層静かに感じる。

だけど、それも当然のこと。俺達の家はとある理由により街から離れた山中にあるため、帰りはこんな人通りが少ない道を歩かなければいけないのだ。

でも人に聞かれたくない話をするには最適の場所だ。

コツ…コツ…コツ…

辺りが林だらけ木しかみえないような道に入る。最早、ここまで来ると俺と姉貴の足音だけが唯一の音となっていた。

そろそろ…いいかな。

「…姉貴」

俺は家に帰る途中のこの森林道で姉貴に声をかける。もう、これも慣れてしまったものだ。

そして急に呼びかけたにも関わらず姉貴も落ち着いている。あつちももう慣れたということか…。

「…何よ真備。またなの？」

姉貴は少し呆れたような顔をするが、その目の中に隠れる恐怖の色は誤魔化されていなかった。

「そつだ。今日もだ」

「もう…あなたは気にしすぎよ真備。大丈夫。最近は本当にあまり観てないから…」

「ウソだな」

俺は姉貴の言葉を挫く。その瞬間、姉貴の顔は一気に変わった。

「ウソって…どういふことよ？」

姉貴は少し声を強めて口走る。瞳の方もいつもより鋭いのはおそらく気のせいじゃないだろう。

だけとそれも至極当然のことだ。いつも、冗談で俺を折檻しているときは訳が違う。確かに姉貴はその”ロリ”な見た目がコンプレックスだ。

だけどそれと今回の話は違う。違いすぎる。今回の話はコンプレックスなんて生易しいものじゃない。

今回の話は…姉貴の抱え込む【トラウマ】の話だから

「…最近。増えてるんだろ？」あれ”を見る機会が「

「…っ!？」

俺の言葉に姉貴は目を見開く。その仕草に俺は「…やっぱりか」と

確信をした。

昨日までとは違う。姉貴のトラウマに触れないように言ってきた昨日までの言葉とは違う対応に姉貴は押し黙る。

「気にするなどは言えない。だけどこれは【羽前家】に生まれた俺達の宿命なんだ…」

ついに姉貴は目を伏せて小刻みに震える始めていた。それほどまでに姉貴にとってあれは”恐怖の象徴”なのだ。

だけど、俺は続けられないといけない。

姉貴を救うなんておこがましいことじゃなく。弟として 【羽前家】の次期当主として、姉貴の近くに居るために

「だから…」

「あんたに何がわかるのよ!?!」

… やっちまったか。

「あんに…あんなんかにあたしの苦しみの何がわかるのよ!!」

姉貴の声が森中に響き渡る。近くの木に止まっていた鳥が一齐に飛び立つほどのその声に、俺は齒ぎしりをした。やっぱり俺の力ではどうしようもできないのか?と…。

一瞬の静寂が、この森のすべての時を止めたかのように感じる。その中で向かい合う俺と姉貴。

だが、またすぐに時は動き出した…。

「あんたが不幸じゃないなんて言わないわ。あんたは覚えてないかもしれないけどあんたの力はあたし以上に危険なものだから…」

それは俺が忘れてしまった記憶。だけど今はそんな事関係ない。

姉貴の独白は続く…。

「でも、あんたはまだましかもしれないわよ。だって…自分に授け

られた力を知らないじゃない…。力を使ったときの事を忘れてるじゃない…」

姉貴の心の傷が露わになったような気がした。

触れれば壊れそうなほどの弱い心の中の傷が…。

「でも、あたしは望まない未来を毎日のように観てしまうの。観たくもない明日を観てしまうの！！あたしは…あたしは【予知夢】なんて力いらないわ！！！！」

姉貴の心を覆っていた棘が全て露わになる。他人から身を守るために張り巡らせ自らをも傷つけてしまうその棘が。

姉貴が観てしまう【夢】それは危険な未来を映し出してしまう。近い未来に起こりうる可能性がある危険な未来を“強制的”に見せるのだ。その未来を回避させるために…。

故に【予知夢】姉貴は生まれたその瞬間からその力を与えられたのだ。

でも、そんな夢をずっと見てきたらどうだ？大人ならともかく、

まだ乳臭いガキがそんな夢を見ていたとしたら？

姉貴はそんなガキのころからそんな怖い夢を観ているのだ。それは夢を見るたびに怖かったと思う。

だから、姉貴にとってそれは【トラウマ】となっている。それとそれが原因で姉貴は、夢を見ることを “夜” になることを恐怖するようになった。

それを俺は子ども心に可哀想だと思っていたんだと思う。そしてたぶん中学生になった今も…。

だから、俺は呼ぶ。俺が本当に姉貴を呼ぶときの呼び方で…。

「…ナギねえ」

ピタリと姉貴。いや、ナギねえの動きが止まる。

この呼び方をするのも何年ぶりかな？少なくとも輝喜と出会ってからは一度も呼んでなかった気がする。

普段は恥ずかしくって呼べないが、俺にはこっちの方がどうもしくりくる。そしてたぶん姉貴の方も

「真備？」

これが本当にさっきまで時を止めるような叫びをしていた人かと疑うほど小さな声だった。

今にも消えそうな気がした。今にも失いそうな気がした。それほどナギねえを脆く感じた。だから俺は…ナギねえを抱きしめた。

ガバツ…！！！！！！

「あ…」

「ナギねえ。我慢する必要はないんだ…泣きたいときは泣けばいい…その間中俺が抱きしめておくから…」

そして、俺の言葉にナギねえの瞳は決壊した

「ヒナ君…」

悲しげな顔をしながら切なげに俺の名前を呼ぶ知恵理。だが、知恵理が言いたいことは聞かずとも分かっていた。

「ああ。凧のやつ…まだ夜が怖いんだな…」

「…うん」

凧は俺達と別れるとき必ず一日で一番元気になる。だけど、俺も知恵理もそれが空元気だと知っていた。

おそらく輝喜も気づいてるはずだ。凧には悪いが生憎、隠し通せるほど俺達の仲は浅いものではない。

でも俺達にはどうしようもできない。それが歯がゆかった。

「…ヒナ君。ナギちゃんの“あれ”どうしようもないのかな？」

「…正直無理だろうな。理由云々の問題以前に凧　　というか人間

は寝ることを拒絶できないから…」

「…そう。そうだよな」

しょんぼりと俯いてしまふ知恵理に俺は何も言えなかった。

それにそもそも、凧は俺達が【予知夢】について知っていることを知らない。なぜなら【予知夢】のことを教えてくれたのは真備だからだ。

凧を“夜”から救い出したい。そう言ってきた真備に俺達は何の助言もしてあげられなかった。

それを思うと今でも悔しさがにじみ出てくる。

「…ねえヒナ君。じゃあ明日。ナギちゃん学校に来てくれるかな？」

知恵理が不安そうな声で再び俺にそう聞いてくる。

おそらく知恵理は俺より悔しさは上だと思う。それは知恵理にとって凧は唯一無二。そして最初にできたの親友だからだ。だから俺は

「…ああ。問題 nothing。きっと明日も来るぞ」

たぶん今日の中で一番いい微笑みを浮かべながら俺は知恵理のためにそう言うのだった。

ちよつと日が沈んで薄暗いのが残念だけだな。

そして俺の微笑みを見て安心したかのように知恵理が微笑み返してきた。だがそのときだった

「お2人とも。いい笑顔ですね…」

その声はどこからともなく聞こえてきた。とても優しい口調で。

それはまるで天から降ってきたように感じた。

「…だれ？」

知恵理の言葉と同時に後ろから気配がする。突然現れたその気配、まるで本当に天から降りてきたようにも思える。

後ろを振り返るのが怖かった。振り返ったら戻れなくなるのでは？そう考えた。でも俺はゆっくりと…そう。スローモーションのように振り返っていく。

そして、俺が振り返った先には

「こんばんは」

1人の人物が立っていた。

その人は全身を黒いマントで覆い、フードを被っていたためよく顔が見えない。

体格は男なら細め、女なら太めの体。声は変声器を使っているのか、かすれかすれ。はっきり言って男か女かわからなかった。

「…誰だ？」

「そうですね。まずは自己紹介からしましょうか。俺は【レリエル】時の番人に所属する能力者です」

【時の番人】^{クロノス}に【能力者】わからない単語の羅列ばかりだ。

だけど、2つの単語は頭のどこかに引っかかる。

何か忘れているような……。そんな風に。

「やっぱり忘れてるんですね。日向」

忘れる？何を？

俺の頭の中が渦を巻く。俺は動揺していた。理由は分からないが、何かに動揺 いや。脅えていた。

思い出してはならない。そう頭の中で誰かが必死に語りかけ続ける。それは知恵理でも、俺自身でもない。俺の体の奥底にある何かがある語りかけていた。これは…【魂】とでも言うのか？そう【魂】が思い出すことを拒絶していたのだ。

そんな俺に目の前の男 レリエルが微笑んだように思えた。顔は見えないが、彼が確かに微笑んだように感じたのだ。

「でも心配いりません…すぐに思い出してもらいますから…」

「な、何を…ですか？」

俺の体の中に熱い物がたぎる。体全体が熱くなっていく。今では知恵理のその声ですら遠くに感じた。

だが、レリエルは…俺達を待つてはくれなかった。ゆっくりと右手を前に出し、俺達に向かって指を向けるように構える。

初めは何をしてるのか分からなかった。それほど不思議な構えだったのだ。

レリエルのその眩きを聞くまでは

「来てください【恍穿弓】」

ピカアアアアア！……！！……！！

ただレリエルがそう眩いた瞬間、激しい光が起こる。神聖な光と

という言葉が似合うその光が。

俺達の周りを完全に包み込んだのだ。

「くそっ！！なんだ!？」

「きゃああああ！！！！」

俺と知恵理は一斉に叫ぶ。いままでに見たことのない光に動転してしまっただ。光が強すぎて目は開けられなかった。

そしてこのとき俺はこの光。見覚えはないけど見たことがある。そう思っていた。

シュー…

機械を冷やしたような音がした。それと同時に俺達は目を開ける…。

「…は?」

目を開けたと同時に俺は少しまぬけな声を出してしまう。

なぜなら、レリエルの手にはさっきまでなかったものが握られていたからだ。

「…弓？」

「そうです日向。アーチェリー。それが俺の魂である【魂狩】ソウルテイカーの形状です…」

【魂狩】その言葉に俺の頭は張り裂けんばかりの叫び声をあげた。

「アーチェリーの”魂狩”。【コウセンキョウ 恍閃弓】これが俺の力…そして、あなたが忘れてしまった力です…！日向…！」

第6話 墮天使レリエル（後書き）

作「今回はついに双方が接触する話でした!!」

日「謎の男レリエル。誰だか分からないがなかなか侮れない奴だ」

凧「ついでにあたしのトラウマについての話があったわね？まさかあたしが真備なんかに抱きしめられるなんて…」

知「でもマキ君カッコ良かったよ？ナギちゃんもそう思ったでしょ？」

凧「…まあね」

作「実は真備は【誰よりもカッコ悪く。誰よりもカッコ良く】をコンセプトに創ったキャラクターなんです。だから真備にはこれからどンドン活躍させて行きたいと思います」

真「ヨッシャー!!!!!!」

凧「調子に乗るんじゃないの!!」

作「さて、じゃあそろそろ次回予告に行きたいと思いまーす。今回の時の秒針は

レリエルの持つ武器、魂狩。日向はこの武器を前に謎の頭痛に苛まれる。

頭痛に苦しむ日向。そんな日向にレリエルは恍惚弓の弦を引く。

次回【恍惚弓の脅威】「

日「問題nothingだぜ!」

輝「ところで俺はどこに行っただんですか?」

日「輝喜。そのうちいいことあると思うからそれまで我慢しとけ」

輝「はい」

次回に続く!!

第7話 光穿弓の脅威

日向 side

ソウルテイカー
「魂狩」

俺はレリエルが言った言葉をオウム返しのようにそのまま繰り返す。

頭は張り裂けんばかりに痛みが生じ、胸は引き裂けんばかりに鼓動が脈打つ。それほど【魂狩】という名前が俺の中に革命を起こしていた。

ここまで体が反応してしまっていると、最早俺はあの”魂狩”というものを知っていると思うようになっていた。だけど、どこで知ったのかは分からない。

少なくとも、”魂狩”に関する【記憶】がないからだ。

「キレイ……」

そのときレリエルが持つ弓。いや、アーチェリーの形状をした”魂狩”【恍閃弓】を見て眩く知恵理の声に俺は意識を連れ戻す。

いつもなら誰より先に俺の異変に気がつくはずの知恵理。確かに、あの知恵理が俺を忘れて見惚れるくらいにあのアーチェリーは美しく見える。

レリエルの不気味で暗い格好と相反する神聖な魅力。俺はそれをあの弓に感じたのだ。

「…魂狩。いつたい何なんだそれは」

「それはお教えできませんね。知りたくばあなた自らが思い出してはください」

鳴り響く声。かすれかすれだが辺りが静かすぎて俺達にもはっきり聞こえた。

「…レリエルさん、でしたか？すみませんレリエルさん。それはどういうことなんですか？その弓とヒナ君が何か関係あるんですか？」

「ええ。大有りですよ知恵理。この弓とは直接的な繋がりはありませんが日向はこの”魂狩”と密接な関係を持っています」

はつきりと告げられたその言葉。だけどさっきほど動揺は起こらなかった。おそらく頭があれを知っていると認知したんだと思う。

まだ頭には鈍い痛みが残っているが胸の鼓動は治まっていた。だが、滲んでくる頭の痛みで気分が悪い…俺はそれを我慢しつつレリエルに問いかけた。

「いつつ…。レリエル。はあ…はあ…なんでお前が、そんなことを…はあ…知ってるんだ？俺は…」記憶喪失”なんかじゃない…はあ…はあ…だけど、お前はなんでそれを知っている？…俺は、お前を知らない。俺は、魂狩を知らない。矛盾じゃないか…」

「いいえ。間違っただけじゃない。あなたの持つ記憶は確かにあなたのものです。ですが、必ずしもそれが正しい記憶だとは限らないということですよ」

「な…に…」

頭に入ってきたその情報に、俺は再び張り裂けんばかりの痛みが頭の中で生じる。

【正しい記憶】その言葉に確かに俺の頭が反応した。でも、魂狩のことは認めてもそれだけは認めたくない。なぜならこれを認めると、

これまでの俺を　俺の築いてきた物を否定することに繋がるから。

真備と凧の2人と初めて出会い、本当の友達になるまでの寂しい記憶。

中等部への入学式の時、知恵理に手を出した奴らとの間にあった
”あの事件”の辛い記憶。

”あの人”が　俺と知恵理の前から姿を消し、光となって”空”
の向こうの遠い世界に行ってしまった悲しい記憶。

俺がとつさに浮かんできたのはなぜかそんなネガティブな記憶ばかりだった。だが、それは”としてポジティブな記憶へと繋がる道でもあった。

真備と一緒に保健の教科書を見て、青い春を感じたあのときや。

それを凧に見つかって追い回された挙げ句、関節を2・3本はずされかけたこと。

輝喜と一緒に真備を女子更衣室に閉じ込めたときにお互いイヤらしく顔を見合わせた瞬間や。

休日、知恵理に無理やり叩き起こされて買い物に連れ回され、実は

最高の幸せを噛みしめたあの瞬間。

確かに、俺は普通とはちょっと辛い記憶を持っているかもしれない。だがそれと同じくらい笑顔溢れる記憶もたくさん持っている。

だからレリエルの言葉に俺はそれらの記憶を

完全否定された気がした。だから認めない。俺は絶対にレリエルの言葉を認めたくなかった。

「…日向。あなたは今、何を思っているのかは俺には分かりませんが、あなたの記憶は偽りです。それに俺達は、あなたに正しい記憶を思い出して頂かないといけませんから」

そこまで呟くとレリエルは一旦言葉を止め、ゆっくりと右手に持ったアーチェリーの弓を構えていく。ちょうど矢先が俺の方を向いた頃合い、レリエルの動きが止まる。

そしてじっくり狙いを定めるように弓の弦を引いていく。ただし、俺へと向ける矢はセットせずに。だけどまるでそこに矢があるかのようだった。

俺達はゴクリと唾を飲み込んだ。

「ふふふ…残念ですが、どうやらおしゃべりの時間はここまでですよですね」

「…どういことだ？」

悪ふざけとしか思えないその動作。だがそのとき事態は一変する。
俺達にとって最悪な方へ

…ザンツ！！！！！！！

その音はまるで何かを貫いたような音だった。

そして、その音と一緒にアーチェリーの 恍閃弓の矢が現れた。
まるで神々が放つ絶対に外れることのないと言われる、神聖なる輝
き“サジタリウスの矢”のような

光り輝く【光の矢】が。

「な…なんだ!？」

俺は光り輝くその矢を見て思わず呟く。だけど仕方なかった。皇后しく可憐に輝く光　光閃く” 恍閃” まさにそれだった。

俺は戦慄する。

「…すみません」

「え？」

レリエルが何かを呟いたような気がした。だけど俺にはそれを聞き取れなかった。そして、聞き取れる余裕もなかった…。

パチンッ！！ザンッ！！

レリエルの声に少しだけ弓にセットされた光の矢から意識を手放したその刹那、レリエルが矢を持つ指を鳴らす。

物静かなその夜。その音は予想以上に響きわたるのだった…。

ザンッ！！！！！

「…くっ…！？」

本能的に顔を右にそらす俺。だけど少しだけ行動が遅かったようで矢は僅かに俺の左頬をかすめ遙か彼方へと飛んでいった。

頬に痛みが走る。

「ぎゃっ！！！」

知恵理が思わず両手で口元を塞ぎ、驚きと焦り混じりの瞳が見開く。だが俺はおそらくそれ以上に焦りを感じていた。愕然としてしまったのだ。

唐突に訪れた命の危険に。

ツウー…

俺の頬に出来た傷から血が一滴流れる。

頭の痛みより遥かに軽いはずの頬の痛み。だが、頭のそれ以上に衝撃すぎる頬のその痛みは頭の痛みを完全に消してしまっていた。

それほど衝撃だったのだ。

『 …… 『

沈黙の時間が流れる…いや、時間が止まったと言った方がいいかもしれない。とても居心地の悪い嫌な空気だった。

風が俺の頬に当たり、頬から滴る血の流動の方向を変える。いつの間にか口元まで流れてきた流血。俺は知らず知らずにそれをペロリと口に含んだ。

「…知ってる味だ」

血の鉄臭い味だがどこかで舐めたことのあるようなその味に俺は驚愕した。

「…その身のこなし。そして舌に触れた血の味。…どうやら頭ではなく体の方はしっかり覚えていてるみたいですね？」

おそらくフードの下では、きつとほくそ笑んでいるであろうレリエルのかすれかすれな声に俺は、はっとした。

「な…何なんだ今のは。俺はいつたい何を…？」

「日向。どうやらまだ、あなたは目覚め切れていないようですね…」

再び響くかすれかすれで無機質な変声機の声。その声の主を俺は睨みつける。俺はここに来てやっと理解したのだ。

あそこにいる【レリエル】　夜の天使という名前を持つ、あの人物は敵なのだということに。

「てめー何すんだよ!？」

俺はこの嫌な空気を打ち破るように言葉を放った。無機質な声ではない。俺のその声が辺りに響き渡った。

だがレリエルは慌てることはない。いや、むしろこの状況を望んでいる？そう思えるほど冷静に、ゆっくり落ち着いた風に口を開いた。

「何って…あなたの記憶を戻すお手伝いを…」

さも当然のようにそう答えるレリエル。俺は耳を疑った。

そりゃ弓に　　恍閃弓に光り輝いていて、変わっているとはいえ矢をセツトし、それを相手に向かって放つ。これを攻撃以外に言い方があるだろうか？

俺はレリエルの言葉に唇を噛み締める。そう、もうこれはお遊びではすまなくなっていたのだ。

「ヒナ君。血が…」

「…問題 nothingだ知恵理。こんなの舐めとけば治る。それより」

バキッ！！！！

「…少し離れてろ」

「ヒナ君…気をつけてね」

俺は今にも涙を流してしまいそうな知恵理に少しだけ軽くほほえむとゆっくりと近くの木から折り取った枝を構えた。

「日向。まさかそんなもので俺の”恍閃弓”の攻撃を止められるなんて思っではいませんよね？」

「問題 nothing。お前にはこれで十分だ…」

挑発にも似たレリエルの言葉に俺は棒切れを持つ手に力を入れながら、強がりだと分かる言葉で返す。

だが実際問題、さっきの矢の威力を見て戦力の差は一目瞭然だった。

でも、最低でも知恵理だけでも逃がさなければ。その思いが俺を突き動かす。幸いレリエルの瞳には俺しか写ってない。これは…チャンスだ。

「はぁぁぁあ！！！！」

レリエルと俺がいる道路は一本道。幸いなのが最悪なのが、人が住む家がないこの道に俺達を邪魔するものはいない。

俺は手に持った棒切れを振り上げながら一気にレリエルへと駆け出した。

「なるほど。俺に矢を構えさせる時間を与えない作戦ですね。なかなか筋が通った作戦です」

レリエルは鬼気迫る勢いで駆ける俺に対して、至って冷静にそう思案する。だが確かにレリエルの言うとおり俺はそのことを踏まえて先制攻撃を仕掛けていていた。だけど

「…ですが、サジタリウスの矢は決して外れません」

パチンッ!!ザンッ!!

気がついたときには、俺が持っていた棒切れは根元からポツキリと打ち砕かれ、右手からポタポタと血が滴り落ちていた。俺はただただ、呆然としてしまっしかなかった。

「…ウソ…だろ」

「嘘ではありません。それが現実です。俺が恍惚弓に矢をセツトしてから放つまでに要する最速の時間は…約3秒」

パチンッ!!ザンッ!!

「くっ…!?!」

そのときさらにレリエルの手から矢が放たれ、俺の肩を射抜く。刺さったままの光の矢、その痛みに耐えきれず、思わず俺は両膝を地

面へとつけていた。

「はあ…はあ…はあ…」

痛みのせいか息使いが荒い。いつの間にかあの頭の痛みも戻ってきている。

まさしく絶体絶命のこの状況に俺は為すすべがなかった。

「……………」

「そう睨まないでください日向…と、言っても無理でしょうね」

最後の抵抗とばかりに睨みつける俺にレリエルは構うことなく4本目の矢を構える。

どことなく寂しげに矢を構えるレリエル。フードのせいもあり、俺はレリエルの顔を見ることはできない。

ただ俺はこのとき直感的にこう思ってしまった。こいつは…もしかしたら…。

「俺だってこんなことしたくありませんでしたよ……」

たぶん、俺が聞くであろう最後の言葉　それはレリエルの本音なのかもしれない…そんな言葉。

その言葉に俺は確信をする。こいつは、レリエルは…本当は心優しい奴なのかもしれないと。奴の哀愁漂う姿に俺はついそう思ってしまった

そして俺はゆっくりと瞳を閉じていった。

パチンツッ！！

闇夜に響く指を鳴らす音。その音に俺は自分の死すら覚悟した。

心残りといえば知恵理。あいつはうまく逃げ切れたのだろうか？レリエルもたぶん知恵理には手を出さないと思うからその辺は大丈夫か…。

死を前にした意識の中、俺はそんなことを思っていた。だが

あれ？俺って…死んだよな。じゃあ、なんで痛みを感じるんだ？

いくら待っても矢は俺の元には飛んでこない。一瞬だけ、死ぬ瞬間は痛みがないのか…とか思ったがどうやらそれも違うみたいだ。

だから俺はもう一生開くはずがないと思ったまぶたを開く。人通りがなくほぼ真っ暗なこの道、射し込む光は皆無に等しかった。

だがそこには

「知恵理？」

俺の目の前には両手を広げて立つ知恵理…。

なんで？なんて言葉が出そうになる。だがその言葉が俺の口から出ることはなかった。

なぜなら俺がそう咳こうとした。そのとき

トサッ…！

知恵理は俺の上に倒れ込んできた。俺は反射的に知恵理を抱きしめる。

「お、おい！！知恵理！！」

倒れ込んできた知恵理。その顔は俺のいる位置からは確認できない。だが俺は知恵理の肩を抱いたとき違和感を感じた。

ネチャ…

その聞き慣れない音に俺は右肩に触れた手を見る。日は完全に沈みきった暗闇な上、さっきも言ったがここは人通りが少ない道路、外灯もほぼない。

だが俺はその「ネチャ…」としたものが何だったのかは分かった。黒く…ねっとりとした生暖かい液体…。

そう、それは紛れもない知恵理自身の流れ滴る【血】だった。

知恵理に刺さる一本の矢。それに日向の理性は完全に崩壊する。

知恵理を射抜いたことで焦るレリエル。心が乱れた日向はここからどうなるか？

次回【桜散り心乱れ】

日「問題nothingだぜ!!」

凧「あたし的にこの作品で一番キャラが分からないのは知恵理と輝喜なのよね…」

日「諦める。相手はド天然とニコニコ眼帯だ。あいつらには常識なんて通じない」

凧「それもそうね…」

知&輝『なんで?』

次回に続く!!

あ……!!」

血を流す知恵理の肩を抱きながらこれ以上にないくらいに叫ぶ日向。

だめです。俺にはその光景を直視できませんでした。

たとえ日向の腕を狙った矢でも。たとえ日向を殺すつもりがなくても……。

俺が知恵理を殺してしまったことには変わりにはありませんから……。

でも、今の日向は俺の言葉には聞く耳をもたないでしょう。それほどまでに今の日向は見られない状態でした。

「う……う……くっ……!!」

「……」

俺はただ黙って事の成り行きを見るしかありませんでした。だけど

ただ1つ分かること。

それは俺もとてつもなく悲しいという事でした。

日向side

俺は　なんで泣いてるんだ？

俺は　なんで悲しいんだ？

俺は　なんでこんなに憎しみを持つてるんだ？

俺は　いったい誰を抱きしめてるんだ？

俺は　なんでこんなに手を黒くしてるんだ？

俺は　なんでこの子を見て悲しんでるんだ？

憎いならどつすればいいんだ？

そうか あいつを殺せばいいんだ。

でもどつやって殺す？

あいつは強い。

でもなぜ強い？

なぜこの子を殺せた？

なぜ俺を傷つけられた？

日向は俺の声に反応しません。ただただ俺のことをひたすら睨みつけるのみ。そんな復讐しか考えられない機械のようになってしまいました。

そして、日向がゆっくりと知恵理を体から下ろして立ち上がる。その瞳はずっと真っ直ぐ俺を見たまま。

だがその刹那　　！！

ダンッ！！！！！！

「なっ…速いつ…！」

俺が気がついたときには日向は俺のすぐ目の前。俺から見たのはいつのまにか俺に向かって尋常ならざる攻撃を放ってきた日向の拳だけでした。

さっきまでのスピードとはケタ違い。俺はそのスピードに瞳を見開きました。

「ぐっ…！！！！！！」

とっさに顔の前で腕をクロスさせ、ガードの体制を取り俺は後ろ跳びで日向の攻撃をかわす。

しかし日向はひるみませんでした。すぐに間合いを詰めて右蹴りを繰り出す。

ガッ!!!!!!

その蹴りを右手で受け止め、さらに臨戦態勢を作るためになるべく間合いを取ろうと俺は後ろにフードが取れないように気をつけながら日向から距離をとった。

「…日向」

フードを被っていたのが救いか…。どうやら日向には俺の表情は読み取れていないようだ。いや、どのみち今の日向には俺の表情を気にかける余裕なんてありませんか…。

まさかフードの下でこんなに悲しみに暮れているなんてきつと予想

もしてないでしょうね…。

「……せ」

「え？」

そのとき不意に日向が何かを呟きます。唐突に反応したその声に俺は少し驚きまじりの声を出してしまいました。

相変わらず分かりやすく殺気を俺に向ける日向。その日向の地鳴りのような声に恐怖してしまったのです。

「日向。今いったい何を言ったんですか…？」

「…」せ」

俺の問いを無視するかのようにもう一度日向は何か呟きます。ただどまた俺には聞き取れませんでした。

「…日向。あなたはさっきからいったい何を」

「…」

だめです。やはり日向は俺の話に耳を貸したりはしないみたいです
ね。本当に日向は何を言ってるんでしょうか…？

だけど俺の疑問はすぐに解けるのです。

「それを…よこせ…！」

今までの声より一層と激しく大きな叫び声。その叫び声に俺は日向
が何を言って、そして何を求めているのかを知りました。

そうですか。日向の目的は閃閃弓ですか…。でも、それは

「日向…！落ち着いて…！俺の話を聞いてください…！」

「よこせ…！よこせ…！よこせ…！よこせ…！よこせ…！よこせ…！
よこせ…！よこせ…！よこせ…！よこせ…！よこせ…！よこせ…！
よこせ…！よこせ…！よこせ…！よこせ…！よこせ…！よこせ…！
よこせ…！よこせ…！よこせ…！よこせ…！よこせ…！よこせ…！
よこせ…！よこせ…！よこせ…！よこせ…！よこせ…！よこせ…！
よこせ…！よこせ…！よこせ…！よこせ…！よこせ…！よこせ…！
よこせ…！よこせ…！よこせ…！よこせ…！よこせ…！よこせ…！
よこせ…！」

ですが俺の思いは届くことはありませんでした。日向の拳が俺の顔を叩きつけます。その力に俺は1メートルは飛ばされました。

「ぐっ…!!」

カランカラン…

そしてその拍子に俺は恍閃弓を日向の足元近くへと放り投げてしまいました。あまりに唐突、あまりに好都合に訪れた機会。日向からしてしまえばこれはチャンスだったでしょう。

ですが俺は慌てることはありません。俺は飛ばされた場所からゆっくりと立ち上がり「ポフポフ」と服についた土汚れを叩きました。

その間も恍閃弓へと腕を伸ばしていく日向。汚れを払い終わった俺はその様子を傍観してました。なぜなら

「魂狩…」

日向が恍閃弓を拾おうとする。だけど

バチッ!!

「…っ!!??」

日向が恍惚弓に触れた瞬間。まるで静電気のような音と共に恍惚弓を落としてしまいました。

俺はそれを見て思います。やはりそうなりますか…と。

「日向。聞いてください」

地面に膝と手をついて涙をポロポロと流す日向に近づき俺は日向のすぐ目の前の恍惚弓を拾う。そして告げます。ことの真相を。

「日向。魂狩はその持ちである主人にしか使えないんです。つまり、恍惚弓は俺にしか使えない。そういうことになります…」

そう日向に俺は告げる。日向は一瞬目を見開くがすぐに絶望的な目をしてその場に腰を落としました。

そしてさっきよりさらに多くの水滴が彼の瞳から流れ始めた。

「…なんでだよ」

拳を地面に打ち付け始める日向。「ガン！！ガン！！」と聞いているだけで拳が痛そうな音が俺の耳に入ってきます。

いつの間にか日向の右手にはさっき俺の矢で傷つけた血とはまた違う血が流れ始めていました。

「なんで…なんで…」

完全に心が折れてしまった日向。俺は日向のそんな姿を見たくありませんでした。

「なんで…なんでだよ…なんで…こんなことになっちまったんだよ

…」

「日向…」

俺にはもう攻撃する気はありませんでした。いえ、攻撃出来なかったのです。

こんな状態の日向に矢を放つ気には…。こんな状態の日向に俺は弦を引けませんでした…。

日向side

「なんで…なんで…」

なんで 俺は魂狩を使えないんだ。

なんで 俺はあいつを殺せないんだ。

なんで…なんで…？

「知恵理を殺したやつが憎いか？不知火日向…」

は？なんだ…？

「もう一度だけ問う。お前は知恵理を殺したやつが憎いか？不知火日向」

な…なんだ？口が勝手に…勝手に動く…。

「どうなんだ？」

な、何なんだよ。そもそも俺が力を望んだからってどうなるんだよ？

「簡単な話だ。お前が望むなら…俺はお前に協力するぜ。なんて俺

は お前なんだから…」

…それはいったいどういう意味なんだよ？お前は俺って…。

「それは今のお前にはどうでもいいことだろう？そんなことより今のお前にはもっと大事な事があるはずだ」

…俺のやるべきこと？あいつにこの子の…この子の仇を討つことか？

「…まあ、そうだな。だけど最初に言っておくが今のお前は間違っている。もし知恵理の復讐を望むなら…後で絶対お前自身が後悔することになる。それでも…望むか？」

…そんなの決まってるんだろ。【望む】方に。

「…そうか。それがお前の望みなんだな？だったら俺からはもう何も言えない…な」

「…日向？さっきからいつたいどうしてしまったんですか？」

「だったら力を与えてやるよ日向。そして精一杯後悔しろ日向。だけど願わくば…お前が正気に戻ることを祈ってる…」

その瞬間。俺の意識は光から遠ざかっていった。

レリエル slide

あれから何かに取り付かれたかのように口を開いていた日向はそう
言つと目をつむりました。

そして唱えたのです。驚きの言葉を

「来い！！俺の大空を駆ける紅き翼【紅翼】こうよく！！！」

第8話 桜散り心乱れ（後書き）

作「第8話。ついに日向の魂狩が登場しました」

日「まだまだ俺の武器の形状、能力、その他もろもろ何にも分かってないけどな？」

知「そうだね〜日向君の武器早く見てみたいな〜。あ！！それと私いつの間にか死んじゃいましたね！！」

日「いや、そんな大喜びな顔で言うセリフじゃないだろ？…でも確かにな…」

知「…どうしたのヒナ君？」

日「ああ。なあ作者？今回のタイトルなんで桜なんだ？散ったのは桜じゃなくて知恵理だろ？」

作「はい。実は今回のタイトルは知恵理の名前の由来である桜を使ってみたんですよ〜」

日& amp ;知『『名前の由来？』』

作「でもその前に次回予告行きます。時の秒針、次回は

その者。赤き刃を携えて戦場を駆け抜ける姿、天使のごとく。

4年の時を超えて、再び天使が天駆ける翼を広げる。

次回【紅き翼の発動】

日「問題nothingだぜ!!」

知「ねーねー作者さん!!私の名前の由来ってなんなの?」

作「はい。じゃあ知恵理って10回言ってみましょう!!さんはい!!」

日&知『知恵理。知恵理。ちえり。ちえり。ちえり。チエリ。チエリ。チエリー?』

作「まあそういうことですね。知恵理の名前の由来は【チエリー（桜）】ということですよ」

日&知『ダジャレかよ（ですか）!?!』

次回に続く!!

第9話 紅き翼の発動（前書き）

日向の魂狩、紅翼登場！

第9話 紅き翼の発動

レリエル side

「来い！！大空を駆ける俺の紅き翼【紅翼】！！」

こうよく

ポ ツ！！！！！！！！！！

その言葉を叫ぶと同時に日向の周りが激しい業火に包まれました。
この光景は…間違いありません。

どうやら…日向は魂を

【魂狩】ソウルテイカーを発動させたみたいです。

でも、なんでこのタイミングで？それにさっきの目…あれは一体何
だったのでしょうか？

ポ ツ！！！！！！！！！！

炎はさらなる広がりを見せる。絶つことのないような激しすぎる烈火のごとく。それはまるで日向の叫びのように思えました。

そしてその日向の周りには彼を囲むように炎柱が立ち上ります。そのため日向自身の姿を確認することはできません。

「一体日向の魂狩は…？」

激しすぎる炎に俺は今いる場所より先には行けません。ですが俺の咳きに反応したのか、日向は自分の周りの炎を一気に切り裂きました。

ザシュッ！！！！！！！！！！

炎を引き裂いて現れた日向。その姿に俺は不覚にも見とれてしまいました。

銀色に光り輝くその刃には未だに炎が灯っていた影響が火花がパチパチとほとばしっています。

これが日向。これが日向の魂。これが…日向の刃。なるほどこれが

日向の魂狩ソウルレイカーですか…この形状は

「日本刀」の魂狩【紅翼】」

日本刀。それは確かに日向に1番ピッタリな武器でした。

銀色に輝く刀身。漆黒に闇に堕ちる柄。そして太陽のように燃えたぎる紅蓮の炎…。

それらすべてに俺は日向の面影を見た気がしました。

銀色の刀身は彼の研ぎ澄まされたカリスマを。紅蓮の炎は彼の静かに熱く燃えたぎる心を。そして漆黒の柄は…忘れてしまった彼の過去を正確に表している。

そう思ってしまった。

「日本刀とは…まるであなた自身ですね」

「…そうだな。お前の言うとおりだよレリエル」

俺の言葉に日向は日本刀 【紅翼】をゆっくりと逆の手に持った鞘へとおさめます。「キンッ！」と音をたてる【紅翼】そのときやっと日向は顔を上げました。

「…っ！？日向…あなたその瞳はどうしたんですか！？」

「…どうかしたかレリエル？俺の瞳って…ああ！！そういうことか…」

驚きに満ちた俺の言葉に日向は一瞬キョトンとした顔になりました。ですがすぐに何のことに気付いたようでニッコリと微笑むと嬉しそうに自らの瞳を指差しました。

「こいつ。綺麗だと思わないかレリエル？」

本当に嬉しそうにそう言いながら日向は指さし続けました 【赤い瞳】を。

さっきまで我を忘れて襲いかかってきていたときの日向の瞳は、まるで今宵のような月のない漆黒の夜のような黒いものでした。

ですが今の日向の瞳は違います。今の日向の瞳は夜とは真逆、まるで昼間の太陽のような紅蓮に似た【赤い瞳】でした。

そしてその赤い瞳。それは俺の警戒心を強めるには十分すぎました。

「…あなた。あなたはいったい誰ですか？」

ギリギリ…!!

俺はとつさの少し距離を開き、恍閃弓に光の矢をセットします。ですが日向の姿をした何者かはそんな俺の姿に動じることはありませんでした。

しかしその刹那

シャキンッ…!!…!!

「…そう警戒するな。俺は別にお前や”こいつ”をどぶついでようというわけではない」

「…いつの間に!？」

まさしく一瞬というほどの時間で俺は喉に日向の姿をした何者かに日本刀を突きつけられていました…。

あまりの事態に俺は頭の思考が追いついてません。ですがこれは紛れもない事実、俺は「ゴクリ」と唾を飲み込むと思考を再開しました。

今、俺自身になにができるかを考えます。考えて考えて…そして、今の俺にとっての最善の行動を実施しました…。

「…あなたは。あなたはいったい誰なんですか？」

俺が考えた最善の行動。それはこの人の正体を知ることでした。

さっきと同じ質問を俺はもう一度繰り返します。さきほどとは違い、明らかに俺の方が不利な状況。ですが日向の姿をした何者かはさきほどと同じ笑顔のままでした。

ニッコリとした笑顔のまま…俺に紅翼を突きつけていたのです…。

「…何者か…か。確かにお前からしてみたら俺は誰だって思つかもしれないな…」

俺の問いに日向の姿をした何者かは今度はニヤリとした妖しい笑みを浮かべました。そして「ザンツ！」と恍惚弓にセットした光の矢を斬ると紅翼を降ろします。

俺自身もここまで近寄られてしまえば恍惚弓を武器として扱えないので弓を降ろしました。

「だけど俺の出現はお前も望んでいたはずだぜ？うんにゃ寧ろお前が望んだからこそ俺が出てきたといってもいいかな…」

「俺が…望んだですか？」

日向の姿をした何者かはその言葉に俺は1つの言葉が蘇りました。

《何って…あなたの記憶を戻すお手伝いを…》

それはさっき初めて日向に向けて矢を向けたときに俺自身が言った言葉。そのことを思い出した俺ははっとしました。

「まさかあなたは」

「そうだぜ。俺はお前の思ってるとおりの存在だ。俺は…ぐうつ！？」

そのとき突然日向の姿をした何者が いや。日向は右目を抑え、屈み込んでしまいました。

その姿は明らかに苦しそうに見えます。

「どうしました！…日向！…！」

「寄るな！…！」

突然の事態に驚いた俺は思わず日向のもとに駆け寄っていきましました。ですがその前に響いた日向の叫びに俺は足を止めてしまいます。

「はあ…はあ…はあ…いいかよく聞け…“こいつ”は今自分を失ってやがる。だから、次俺が目覚めたときは絶対にお前に襲いかかると思っ…」

「………」

俺は静かに話を聞きました。

「これからのことで…どうしても魂狩が必要になるから発動させたんだけど…はあ…たぶん、そのせいでこれから俺が”こいつ”に意識を返した後で、お前にとってかなり厳しいものになると思う…」

さらに日向の話は続きます。

「だけど…いや、だからこそ“こいつ”の自我をなんとか取り戻させる。…俺”と”チエ”のことを頼んだ」

「…はい。確かに受け取りました」

最後に日向は再びニヤリと笑みを浮かべるとゆっくり目を閉じていきました

日向 side

う…うん？俺はいつたい何をしてるんだ…。ゆっくりと目を開けた俺は真っ暗な暗闇に目を羽ばたかせた。真っ暗な世界に俺は一瞬何が起こったのか分からなかった。

だが時間が過ぎるに連れて俺の頭の中がスッキリしていく。そしてそれと同時に

そうか…俺は…。

「…殺す…！！！」

俺の頭の中にあつた殺意が一気に開花した。今の俺にあるのはただ目の前にいるフード姿の男に対する憎悪だけだった。

「死ね…!!」

俺は怒りにまかせて刀を振るう。すると紅翼に灯っていた炎の塊がレリエルを襲った。

「くっ!？」

レリエルは俺の攻撃を上へと跳んで避ける。だが俺はひるまない。

「はあああああ!!!!!!!!」

さっきよりさらに巨大な炎の塊をレリエルに飛ばす。うまく固まった炎の弾なんかじゃない。完全なる力のみを主とした巨大な炎の塊を。

空中を跳んでいるレリエルは今度は避けることはできないはず…。

「…っ!!仕方ありません」

パチンッ！！ザンッ！！

レリエルは恍閃弓の弓から光の矢を放つ。だがあれだけの炎に矢一本だけでは到底足りない。

そして俺の予想通りレリエルの光の矢は俺の炎を前に完全にその姿を消した。

「…やはり1本だけでは力不足のようですね」

でも、レリエルもひるむことはなかった。そしてブツブツと呟くようにそう言つと再び恍閃弓を構え弦を引いた。

再度光の矢が現れる恍閃弓。だがしかしその様子がおかしかった。

「行ってください！！我が光の槍【神聖の槍】セイクレッド・スピア！！！！！！」

パチンッ！！ザンッ！！

レリエルはそう叫び1本の矢を放つ。ただし、さときまでとは違う何本にも折り重なった光の矢を。

だが俺の疑問はすぐに解決する。なぜなら発射された矢が1本…2本…3本。そして何十本もの矢へと枝分かれしていったのだった。

ズサ
ンッ!!!!!!!!!!

そして俺の炎とレリエルが放った数十本の矢。2つが衝突したことにより激しい衝撃波が巻き起こり辺りを嵐にしていた

レリエル s i d e

「はあ…はあ…はあ…」

地面へと着地した俺は、俺の矢と日向の炎の塊で巻き起こった衝撃

波に絶えきれず思わず座り込んでしまいました。

息が果てしなく荒く、途切れ途切れとなっています。

ですがまさか日向の力がこんなに強いとは…。もちろん日向の過去を考えれば力が大きいことは容易に想像つきました。

ですけれども記憶がない今の状態でこれほどの力になるとは…想定外にもほどがあります。おそらくこの戦いでは使わないと思っていた【神聖の槍】まで使ってしまったし…。

最早日向の力は無視できるものではありませんか…。

「はあ…はあ…ふうー」

だいぶ息も整ってきました。だからそろそろ日向を警戒しませんが…。向こうもそれなりにダメージを受けていると思えますが…!!？

シャキンッ！！！！！！！

「…っ！？しまった!？」

俺がふと気づけばいつの間にか近づいてきたのか日向は俺の目の前にいました。どうやら俺は過ちを犯してしまったみたいですね…どうやら日向の体力を見くびりすぎたみたいです。

「…死ね!」

ですが、無情にも日向は紅翼を振り上げる。その瞳には光も濁りも混ざっていない完全なる無の状態に見えました。

238

ヒュンッ!…!…!…!…!

そして俺は日向が紅翼を振り落とすと同時にすかさず目を閉じる。

俺の瞳に最後に残されていたもの。それは炎の灯った日向の魂狩である日本刀の紅翼の刃と、少し遅れて出てきた日向の後ろで輝く月。そしてヒラヒラと舞い落ちる桜の花びらだけでした

ですから気づきませんでした。日向のそのまた後ろ、もう1人の【桜】が再び咲いたことに

う…うーん。あれ？私どうしちゃったの…？

気付いたとき私の辺りはこれ以上ないほど静寂に包まれていました。夜人通りが少ないということもありますが、それを抜きにしてもこの静寂は異常に思えるほど静かな静寂に

最初は…自分はこの様な所で何をやっているのだろうか？と混乱してしまいました。

だけど私の頭の中に走馬灯のようにあの映像が巻き戻されてきました。あのヒナ君を守ろうと必死にもがいた瞬間が。

「そ、そうだ！！私…」

ヒナ君を庇って矢に打ち抜かれて死んだはずじゃあ…？

でも息はできる。それに周りもはっきり見えるし…。どうして…？

「いたっ!!」

意識がはつきりしたからか突然の痛みが私に訪れました。私は射抜かれた右のほうを向きます。

するとそこには予想通り私を撃ち抜いたと思われる光り輝く純白の矢がありました。そしてそこから流れ出てくる痛々しい私自身の血でも

「…肩？」

そう、私を殺したと思っていた矢は私の胸ではなく肩を射ていたのです。

それはつまり

「私…生きてる」

私がポツリとそう呟いたとき、私はふとあることに気づいた。

それは私が必死になって守ろうとした大事な大事な幼馴染の男の子……。その彼がいないということです。そして私とヒナ君に矢を向けた張本人であるフード姿の人。レリエルさんの姿も

「ヒナ君！！」

私は必死に目を凝らしてヒナ君を探す。

夜のせいか辺りは真つ暗闇……。だけど私はすぐにヒナ君を見つけたことができました。

それは他の何よりも灯火を放っている場所が一カ所だけあったからです。その場所によく目を凝らしてみると……。

いた。10メートルくらい先にヒナ君とレリエルさんがいる。そしてヒナ君の持つ銀色に輝くもの。それから私を導いてくれた灯火が燃えていました。

……。何か様子がおかしい……。

レリエルさんは片膝を立てて…そう、言うなれば立ち上がるつもりで止まったような状態。

対してヒナ君は立ちあがりレリエルさんにあの燃えたぎる銀色の何かをつきつけている。

あれは…剣？

私がそう考えたときレリエルさんが語り出した。

「なんで…殺さないんですか？」

その言葉に私は自分の耳を疑ってしまいました。

「…殺す！？それってどっいっこと！？」

「……」

「何かしゃべってください。日向？ではもう一度だけ問います。なぜ殺さないんですか？」

再度来たレリエルさんの問いかけ。でもヒナ君はそれでも押し黙っていました。

遠くて表情はわからない。けどたぶんヒナ君の表情は固まっていると思いました。

「俺は…知恵理を殺したんですよ？」

わ…私を殺した？

「どづしたんです？日向？早く殺してください！！」

驚きで固まってしまふ私。でもそんな私の様子を知らないレリエルさんはさらに強引な言葉でヒナ君を攻め立てました。そしてその言葉でやっと、ヒナ君は応えました。

「お前…なんで震えてるんだ？」

そう言ったヒナ君の声もどこか震えていました。私はその言葉を聞いたとき途端に一気に2人のもとへと走り出していました。

「ヒナ君!!!!!!!!!!」

日向side

その声は俺にとってはもう二度と聞けないものだと思っていた声だった。その声に俺は唇を震わせて彼女の名前を呼ぶ。

「知恵理？」

その声に俺は思わず目を見開き、声がる後ろを一気に振り返る。

そして振り返った先。そこには知恵理が光の矢が刺さったままの部分を押さえながらこっちに駆けてくるのが見えた。幽霊でも天使でもない。そこにいたのは紛れもない知恵理だった。

「…よかった」

不意に咳かれたレリエルのその声を聞いたとき、俺はやっと自我を取り戻した。

「ち…知恵理！？生きてたのか!？」

「うん 肩は痛いけどぜんぜん元気だよ」

そう言うと知恵理はいつものような笑顔を見せる。

「よ、よかった…」

それを見て俺は緊張から解放されて「ドサッ」と地面に腰を落とす。そして、どうやら腰が抜けてしまったみたいだな…。

「はははは…」

思わず苦笑いが出てきてしまう。そんな俺に知恵理は優しく微笑みかけてくれた。やっぱり俺にはこの笑顔がないとダメだな…。

彼女の笑顔を見ながら俺はただただ、そう思っただけであった。

【よかった】

そのとき不意にさっきのレリエルが放った言葉が俺の頭に蘇ってくる。俺と同じ言葉、本当に安心したといった言葉…俺はその言葉を聞いた瞬間にさっきまでの憎しみは消えていた。

「あ…そうだヒナ君」

「ん、なんだ？」

知恵理は何かを思い出したかのように言葉を繋ぐ。

「その人を…レリエルさんを殺しちゃだめ!!その人は怖がってるんだよ?…震えてるんだよ?だから…殺しちゃだめ!!」

その言葉を聞いたとき俺はすでに決心していた。

「問題nothing。分かってる…それにもうそんな気はとつにないよ…」

その言葉を聞いて驚いたのはレリエルだった。

「日向。俺を許してくれるんですか?」

「いや、許さない」

間も入れずに俺は言う。

「お前が俺と知恵理を傷つけたのは事実だ…だから、許す気はない」

レリエルは顔を伏せる。その姿にはどこか哀愁があるような気がした。

だから俺はさらに言葉を撃いでいく。こいつが納得して、俺が納得して、知恵理が納得する言葉を。

「でも…さっきまでの俺ならともかく今の俺にはお前が悪い奴には見えない」

「え？」

俺の言葉のあとすぐレリエルは再び顔を上げる。フードで顔は見えないがその様子から察するに「信じられない…」といった信条なのだろう。

そんな様子で、レリエルは口を開いた。

「…どうしてです？」

純粹な疑問なのだろうその言葉。俺はレリエルの言葉の応えをゆっ

くりと返していった…。

「…お前のさつき知恵理を見たときの言葉【よかった】あれは本心からとしか思えない」

俺の言葉にレリエルは一切反応しない。そう育てられたのか、はたまた流されないのか…。

とにかくレリエルは俺の言葉にはまったく動じはしなかった。だから俺も気にすることなく言葉を続けていった

「俺をはじめに攻撃したときもそうだ。お前はあのとち【すみません】で謝ってた…だから、今回のことはお前の本意とはどうしても思えないんだよ…」

レリエルはじつとこっちを見据える。俺の言葉の真意を確かめようとしているのかその姿はかなり真剣だ。だから俺もレリエルの目に応えるようにじっくりレリエルを見つめる。

そして俺は最後のだめ押しの言葉を押すのだった。

「どうだ？レリエル。俺の言ってること何か間違ってるか？」

俺の言葉にレリエルは完全に押し黙ってしまふ。俺の言葉に答えられないのか、もしくは応えるきがないのか。でもレリエルの顔で唯一見える口元。そこにはニヤリとした笑みが浮かんでいた…。

そしてレリエルはやがて1回鼻で笑うとどこか諦めたような口調で口を開くのだった。

「…まったく、あなたにはかないませんよ日向」

そう言うとレリエルは立ち上がり。手に持った恍穿弓をフツと消した。

それと同時に俺と知恵理の肩にあった光の矢も跡形もなく消え去る。

「…え？」

「恍穿弓は弓矢で一つの魂狩…だから弓を消すと矢も消えるんですよ」

顔は見えないが、俺は初めてレリエルが本当の笑顔を見せたと思った。

「武器はなし…日向。知恵理。少しでも俺と話をしてませんか？」

その言葉に俺達に異論はなかった。

第9話 紅き翼の発動（後書き）

日「いや〜一時は俺どうなるかと思ったけど最後はうまくおさまってよかった」

レリエル（以下”レ”）「そうですね。俺も何度死にかけたことがわかりませんでした」

知「そ・れ・に 私も生きてたしね〜」

日&レ『軽すぎね（ませんか）！？』

作「まあまあ。三人とも無事だったんだからよかったじゃない」

日「まあ。そうだな」

レ「ええ。日向の中の人にも会えましたから俺も満足ですね」

知「ひよ？レリエルさん。ヒナ君の中の人って誰のことですか？」

日「そういえば本文で何かに気付いたっぽいリアクションしてたけど…あれはいつたい？」

レ「それはまだ秘密ですね。でも近いうちに明かされると思うので楽しみにしてください」

作「はい。ということで次回予告に行きたいと思います。時の秒針、

今回は

身体には世界中に存在するさまざまな属性を秘めた能力が…。

魂には能力を持つ人間すべてが具現化できる武器が…。

明かされる”魂狩”の正体。それはいったい？

次回【SOUL&BODDY】

曰「問題nothingだぜ!!」

知「そういえばあれだけ炎や光の矢やらがバッキンバッキンしてたのに結局レリエルさんのフードとれなかったね？」

レ「その辺はあれなんでしょうねきつて。いわゆるご都合主義ってやつですよ」

曰「ああ。アニメのパンチラシーンでスカートの中がブラックホールになってるあれだな」

レ「いえ、それとはまた別物のような気がします…」

次回に続く!!

第10話 SOCIAL&APP・BODY(前書き)

説明ですわ

第10話 SOUL&BODY

日向side

「まずは日向。魂狩の仕舞いはわかりますか？」

近くに腰を落ち着かせるとさっそくレリエルは話を進めていく。

その言葉に俺は思わず苦笑いを浮かべ、レリエルへと無言の助けを求めた。

「…どうやら、その顔はわからないみたいですね」

「ははは…すまん。レリエル。魂狩の仕舞い方を教えてくれないか？」

「…はあー…まったく仕方ありませんね…来い。」 恍閃弓」

俺の顔にあきれ半分、諦め半分のような様子のレリエルはそう言つと再び恍閃弓を取り出した。

「日向。ついでだからまずは魂狩の説明をしますね」

そして俺と知恵理はレリエルの話を聞き入る。

「…まず、これは俺達の生命の源…まあ言ってしまうえば【魂】ですね」

「魂？」

レリエルの言葉に首を傾げる知恵理が聞き返す。確かに唐突に言われたら信じられない話かもしれない。

だが俺にはレリエルの話を信じられる要素があった。それはあのときの頭痛だ。たぶんあれは恍惚弓を見た俺の魂が反応したものだと思う。

だからあのとき【魂】という言葉が浮かんだのだと俺は考えていた。

「ええ。こいつは俺達の命とも言ってもいいですね…だから俺が死ぬと当然恍惚弓も消える…つまり命とほぼ表裏一体のものなのです

ね

「ほぼ？」

俺はレリエルの言った言葉の中から気になったその言葉を聞き返す。

「逆はありなんですよ。魂狩を壊されても死にはしません。ですけども魂狩を壊すことができるのも魂狩だけ…だから魂狩（魂）を狩る者【魂狩】ソウルテイカーと言っんです」

そう言うとレリエルは再び恍惚弓を消す。

「魂狩はこうして、心で念じると消すことができ…心で念じると呼び出せます」

そして三度恍惚弓を出した。一瞬にしてパツパツと消えたり現れたりするその情景に俺は納得する。だがここでふとある疑問が俺の中で生まれた。

「…ちょっと待て。でもお前は最初に出したときも、さっきも呼ぶみたいに声に出してなかったか？」

「ん〜あれはなんとなくですよね…というより大抵はそうしますね。理由は知りませんが」

「あ…そう…」

あまりに拍子抜けな言葉に俺は何ともいえない表情になった。

俺もそうしたほうがいいのか？

「続けますよ？俺はさっき魂狩は魂だと説明しましたね？」

「ん…ああ」

俺はレリエルの言葉にこっち側に引き戻され知恵理は無言でコクリと頷く。

「…ですが魂狩は誰にもあるものではないんですよ」

「…は？」

レリエルの言葉に俺はそんなスットンキョんな声を出してしまった。けどそれも仕方のないことだ。

レリエルの言葉。それはつまり誰にも魂狩 魂がある訳じゃないということだと思った…。だが俺の表情を見たレリエルはヤレヤレという具合に言葉を繋げた。

「…日向。何か勘違いしてるようですけど…誰にだって魂はあります。俺や日向はもちろん、知恵理にだってしっかりありますから…」

まるで心を読んだかのような確なレリエルのツッコミに俺は動揺してしまった。

…はははは…そりゃそうだよ…。レリエルの話を聞く限りそうじゃないと生きてないもんな。

俺は少しだけ反省をするのだった。

「…まあいいですけど。続けますよ？俺が言いたいののは”魂”を”魂狩”に出来る人がいないって意味です」

「…どういことですか？」

知恵理が目をパチクリと瞬きさせながらそう問いかけると、レリエルは立ち上がりゆっくり俺達に見えるように右手をかざした。

「実際に見たほうが早いですね…ふっ！！」

まるで力を込めるようにそう言うとレリエルは見て分かるほどに右手を力ませる。その行為に少し疑問を抱くも俺達の疑問はすぐに解決された。

「…わお。ヒナ君、すっごく綺麗だね」

「そっだな…」

レリエルの手の先。そこにはプカプカと浮かぶ明るくて、光り輝く光の玉ができていた。

「レリエル。それはなんなんだ？」

「…これは【能力】俺達はそう呼んでいます」

レリエルは冷静にそう言うと手の中にあつた光の玉をゆっくりと握りつぶす。

パリンッ！！！！

そんなガラスを割つたような音と共に光の玉は崩れさり、辺りには再び夜の暗さが戻ってきた。レリエルの話は続く。

「…日向。これが魂を魂狩にするために必要な条件です。魂を魂狩に変換させる為には【身体】に【能力】が宿ってないといけないんですよ」

「【身体】に【能力】それは魂狩とは別物なのか？」

「ええ。そもそも身体に能力を持つのはごく限られた人間だけなん

です。これを俺達は【能力者】と呼んでいます」

「【能力者】…？」

そこまで言うとレリエルは今度は俺達の後ろを指差す。そしてそのレリエルの指につられるように俺達も後ろを振り返った。

するとそこには何かに焼かれたような酷く焦げ付いた後がかなりの広範囲で広がっているが見える。あれは確かさっき俺が暴れた後だったような

「あれは何？」

「…知恵理。あれがおそらく日向の【能力】ですよ」

レリエルから知恵理へと向けたその言葉に俺は納得する。確かに俺は紅翼で炎を飛ばしたり灯したりしていた。

たぶん俺の【能力】は

「おそらく…【炎】といったところですかね。日向の能力は」

俺の能力は【炎】。

状況を見てこれは間違いないみたいだ。だから炎を灯したり飛ばしたりできたわけだな…。

俺がそう納得しているとレリエルは言葉を繋げた。

「…世界には様々な力があります。【炎】【水】【風】【光】【闇】これら全てが能力者1人1人の力となっています。ですが【魂狩】はそれよりもさらに希少な存在。先天的な能力者が世界のごく僅かだとしたら、魂狩を使える能力者はその中のごく僅か…そういうことです」

「…なるほど。だいぶ話が繋がってきた」

つまり【能力者】はレリエルがさっきやったみたいに【能力】を体から出すことができる。

だけど【能力者】の中のさらに希少な魂を変換させて【魂狩】を使える人間は魂狩から【能力】を放てる。だがこれができる能力者はごく僅かだけ。

こういうことか。

「能力は世界でたった1つ。魂狩も同じです。その人が死なない限り同じ能力も魂狩も現れません。つまり、その人の持つ能力も魂狩もその人だけのものということですよ」

「…ということは俺は世界でただ1人の【炎】の能力者で【日本刀】の形状をした魂狩の使い手ということだな」

「そうなりますね」

レリエルはそこまで言うと、今度は近くの桜並木の枝へと向かって跳んでいった。高さはだいたい3メートルくらいか？そんな”あたりまえ”の高さの枝に跳んでどうしたんだ？

「…そしてこれが能力者に備わるもう1つの利点です。日向、分かりますか？」

…え？なにがだ？

俺は桜の木に跳び移ったレリエルに疑問を抱く。なぜなら俺達にとつてそれは”当たり前”だったからだ。

俺達全員。運動音痴の知恵理以外は4人ともそれくらい簡単なのだ。

「はあ…あなた達は分かってないようですね…」

心底不思議そうな顔をする俺と知恵理。お互いに顔を合わせて首を傾げる俺達にレリエルは深くため息をついて呆れたようにそう言う。
そしてすぐにレリエルは隣の桜の木へと飛び移った。

「いいですか2人とも？こんなこと」

さらに次の木に

「普通の人間には絶対に」

さらに次の木に

「出来ません」

そして最後にまるで体操の選手のように綺麗な形で飛び降りた。

シュタツ！！！！！

着地するとき少しだけひねりを加えたレリエル。そんなレリエルの言葉に俺達はさらに頭に？を浮かべた。

「能力者のもう一つの利点、それは…驚異的と言えるほどの【身体能力】です」

「驚異的…？レリエル。何バカなこと言ってんだよ？そんなこと俺達簡単にできるぞ？」

「…それはあなた達4人を基準にして見るからですよ。風も真備も輝喜も、そして日向。あなたも普通の人から見ればかなり異常なんです」

「異常…？」

レリエルの口から出た言葉に俺は近くの木を思いっきり殴りつけた。

ガ　ンツ！！！！！！！！

俺の本気の拳にその木の幹には皮がはがれて見事に俺の拳の後がつく。

俺だからこれくらいで済んだもの。俺より拳の喧嘩が強く、さらに力が有り余るほどに強い真備が殴ったら、下手すりゃ小さな木1本なら軽々と倒れてしまつかもしれないんだぞ？

これは異常なのか？俺は頭の中でその言葉がループしていった。

「…異常なんですよ日向。いくら誤魔化してもあなた方は異常なんです。それを今ここでわかってください」

「…っ！？」

レリエルのどこか叱りつけるようなその言葉に俺は言葉を失ってし

まう。

だが、ここまで来ると俺もさすがに自覚が出てきてしまっていた。確かに俺は異常なのもかもしれないという自覚が

「…どうやら自覚したみたいですね日向」

「…っ！ああ。確かにな。どうやら俺は異常みたいだったみたいだな」

「そうです。あなた方は異常なんです。そして…俺も異常なんです…」

そう言うとレリエルは再び桜の木に飛び移る。

さっきの言葉。俺はどこか哀愁漂うその言葉が気になった。けどどうしてかは分からないがレリエルはそのことについて応えてくれないような気がした。

ただの俺の感だが、レリエルには触れてほしくないこと。そんな気がしたのだった。

「さて。俺が教えられることはここまでです…」

そう言うとレリエルはバサツとその体に纏った黒い装束を翻す。

その動作に俺はとっさに声を張り上げて引き留めようと声を出そうとするも、その前にレリエルを引き止める声が響きわたった。

「待つて！！！！！」

張り上げられたその声　知恵理の声にレリエルは振り返る。

知恵理の方はそんなレリエルを恋人が立ち去るときの表情みたいな切なげな表情で見つめていた。

そして、知恵理はその潤んだ唇をゆっくりと震わせていくのだった。

「…また、会える？」

知恵理の言葉。それはふつ々に考えたらかなり難しいことのように思えた。

だがレリエルはいつとき考え込む仕草を見せるも、すぐに「ふふっ」

と笑みを浮かべ言葉を出していった。

「ええ。きっとまた会えますよ。必ず…」

どこか優しいレリエルのその言葉。それを聞いた俺はレリエルが振り返る前に急いで言葉をかけていた。

「…俺もお前に1つ。いや2つ聞きたいことがある」

「…何ですか日向？」

レリエルは知恵理のときと同じように優しい声で俺の声に応える。

その声はやはり変声器を使ってるせいかどこかかすれかすれで聞き取りにくい。だがその声にはどこか安心感を与えてくれる。そんな温かさがあった。

だから俺もその声に応えるように穏やかに口を動かしていった。

「…今更だが。レリエル、お前はどこで俺達のことを知ったんだ？俺と知恵理の名前だけじゃない。凧や真備、輝喜の名前も知ってるみたいだったけど？」

レリエルはため息をつく。顔のパーツで唯一見える唇を横に広げ、苦笑いをしたみたいに答えてくれた。

「まったく本当に今更ですね日向。…でも、そうですね。本当はあまり俺の口から言いたくないのですが…俺はずっとあなた達を見してきました。ここに来る前からずっと…」

「…そうか。お前は俺達が知らなかったただけですつと俺達の近くにいたんだな」

「…もう一つは何です？」

急かすようなレリエルの言葉。そしてそれに応えるように俺は今までの中で一番の謎を聞いた。

そう。今日1日の中で一番の謎で一番気になっていたその事を

「…レリエル。お前はいつたい誰なんだ？」

俺の言葉に知恵理が凍りついたように俺をみてる。どうやら知恵

理はまさか俺がこの事を聞くとは思ってもなかったみたいだ。

そしてそれに対してレリエルも押し黙る。そう思った。だがレリエルの反応は俺の期待を見事に裏切ってくれたのだった

「…誰って”俺”ですよ？」

その言葉に俺と知恵理は啞然としてしまう。だけどそんなことを気にすることなくレリエルは再び立ち去ろうと俺達に背を向けた。

だが、そのときレリエルは俺達に背を向けたまま忠告のように語りだした。

「…これは俺の独り言なのですが。双子の所にも1人能力者が行っています。彼女は俺と違って喧嘩っ早いですから急いで向かった方がいいかもしれませぬ…」

レリエルのその言葉に俺達はまたもや戦慄した。

双子。双子ってまさか…！！

「真備と凧!」

「ナギちゃんとマキ君!」

俺と知恵理は顔を見合わせて同時にそう叫んだ。俺達の知り合いに双子なんてあいつらしかいない。

そのことをもう少し詳しく知ろうと俺は再びレリエルのほう向く。
だが

「…レリエル」

さっきまでレリエルが立っていた桜の枝。そこには月明かりに舞い散る桜の花びらしかなかった…。

第10話 SOUL & a m p · B O D Y (後書き)

日「説明重視の話だったな」

知「うん そうだねヒナ君 でも私にはちょっと難しかったな…」

作「まあその辺はしかたありませんよ。実は俺も書いてるうちに何がなんだか分からなくなった部分がありましたしね」

日「いや！！それはダメだろ！？」

知「そういえば。最後にナギちゃんとマキ君が出て来たよね？」

日「知恵理。せめて話の脈略はちゃんとしてくれ…」

作「ええ。実は今回は日向と知恵理からはいったん離れて、真備と凧の話になっていきます」

日「…なんか俺空気ジャネ？」

作「はい。日向が空気になって「やっぱり俺空気なのかよ！？」しまう前に次回予告行きたいと思います。

月明かりが照らし出す夜。抱き合う双子の前に謎の少女が現れる。

彼女の出現に凧と真備は困惑し、彼女の纏う羽衣に2人は見とれてしまっ。

次回【美しき雪化粧】」

日「問題nothingだぜ!!」

凧「今回は久しぶりにあたしたちの出番てわけね!!」

真「おう!!日向と知恵理には悪いが次回からはいったん空気になつてもらつからな!!ハツハツハツハツ!!」

日&凧「調子に乗るなあああああ!!!!」

真「ひでぶつ!!!!??」

輝「あれ?本当に俺にも出番くるのかな?」

知「あはははは…」

次回に続く!!

第11話 美しき雪化粧（前書き）

二人に近づく影・・・

第11話 美しき雪化粧

真備 side

「ぐすっ…ぐすっ…」

あれからどれくらいたったかはわからない。そんな長い間俺はナギねえを抱きしめ続けていた。

でも、辺りもだいぶ闇に染まってきたときナギねえはだいぶ落ち着いてきたようだ。

まだ俺の胸の中で涙を流してるけど、もうそろそろ終わると思う。

「ぐすっ…真備？」

「…なんだ？ナギねえ？」

「…ありがとう」

ふう…まったく。ナギねえがこんなに素直に謝るなんていつ以来かな…？

やべー覚えてねえ…。

「真備…本当にありがとう。もう大丈夫よ…」

まあいつか。

俺はナギねえの言葉に反応してナギねえを抱きしめる手を離す。だがその瞬間。

ドゴッ…!!…!!…!!

「ぐはっ…!!」

俺は激しい痛みを腹に感じるのだった。なんだ？何が起こったんだ？

あまりの痛さに思わず膝を付いてしまう。俺は一瞬にして頭がこんがらがってしまっていた。

だがそのとき腹を抱えるように地面に丸々俺の目の前に俺を見下ろすかのように仁王立ちする影が現れる。見たことある影だった。

というよりこの影の正体は俺がさっきまで抱きしめていた

「あんたがあたしを励まそうなんて100年早いのよ!!」

「……【姉貴】……」

その衝撃の正体はナギねえ いや。姉貴が繰り出した激しいボディーブローをだった。何で俺がこんな目に…?俺はその痛みに耐えながらフラフラの状態で立ち上がる。そしてそんな腹を抱えて少しだけ屈んだ状態の俺よりさらに小さい彼女を思いつき睨みつけた。

「姉貴…テメー!!! いったい何しやがる!!!」

「あら?そんなことも分かんないの?あたしなりのお礼に決まってるでしょ!!!」

ええええええええ！？それってものすつごく…。

「理不尽だああああああああああああ！！！」

俺の心の底からの叫び声は俺達がいる森全体に響き渡った。でも俺は後悔なんてしてない。こんな理不尽な扱いでも、これが俺と姉貴との普段のコミュニケーションだからだ。その証拠に

「…まったく。あんたがあたしを抱き締めるなんてどれだけおこがましいことか分かってんの？」

…こんな風に口では文句を言っている姉貴。だがその文句を言っている口元はうれしそうに笑っていた。

「うつせーなクソ姉貴。だいたい俺はロリには興味ねーんだよ。バカバカ」

だから俺も口ではこんな風に姉貴の悪口を言いまくる。だが内心で

「！」

鬼の形相で追いかけてくる姉貴に俺は颯爽と笑いながら駆け出す。ただ今回”も”俺は姉貴の追跡から逃れるつもりはない。

なんせ。姉貴がこんなに夜がふけて暗くなってから笑みをこぼすのはこれが始めてだからな…。

俺はそのことをうれしく思っていた。だから俺はその雰囲気壊さないためにあえて道化を演じる。それが俺の行く我道だから

「はあ…さて。久々に思いっきり泣いて思いっきり笑ったしとつとと家に帰るわよ！！馬鹿弟！！」

あれから数分。俺達は走りまくった。その間に俺はボディーパーをくらったり、跳び蹴りをくらったり、スリパーホールドされたりといういろいろあったが…まあよしとするか。

「ちえ。わあーたよ」

俺はしぶしぶといった具合でそう言う。でもここまで清々しい気持ち
ちは久しぶりだ。

日向と知恵理に会うまでは毎日が地獄だった。毎日毎日：昼には学
校で虐められ、夜には姉貴の苦しむ姿を見る。そんな毎日だった。
だが日向達に会ったあとも夜は地獄だった。

姉貴と俺は夕方まで日向達とぐったりするまで遊びまくる。だが夕
方、日向達と別れたあとはまたあの地獄に苛まれる【予知夢】とい
う名前の地獄から…。

だが、今日は違った。こんなに夜に気持ちがいいのは久々　いや。
初めてかもしれない。

このまま進めばどれだけよかったか。このまま終わればどれだけよ
かったか。だが【運命】の鎖は俺達を逃がすことはなかった

「いい関係だな…」

その声はまるで闇夜に響く鈴の音のようだった…。

風side

「…誰？」

唐突に響いてきた鈴の音のような綺麗なソプラノの声。あたしはその綺麗なソプラノの声を放った人影を追う…。

そしてその声に合わせるようにして1人の少女が木の影から姿を現した。

綺麗な子だ　　彼女を見た最初の感想は【綺麗】ただそれだけだった。

ポニーテールにくくりあげられた水色の長い髪。蒼いサファイヤのような瞳。そして月明かりを受けて青白く発光する白い肌　さらにそれを全て凌駕する繊細で整った顔立ち。

まさしく美少女だ。

余談だがあたしの周りにはなぜか美形が集まっている。

日向や知恵理。輝喜はともかくとして真備だつてスポーツマンのよ
うな爽やかな所が印象的な美形の少年だ。

そして、かくうえあたしも背が低いとはいえ…整った顔立ちだと自
覚している。

だけどそんなあたしでもこの子は綺麗に感じる。いや。綺麗すぎる
のだ。

それほどまでに完璧な存在だった

「姉弟愛か…俺が一番欲しかったものだな…」

そう呟くように言つと少女はこっちを向いた。

「はじめまして。時の番人クロノスに所属する能力者の1人【刹那】と言
います!!よろしく!!」

ニコニコと可愛らしい笑顔を浮かべながら、その可憐な体のどこか
ら出すの…?そう思えるくらいに元気な声でハキハキとした紹介文
だった。その元気よさはまるで子供のように感じる。

「はあ…刹那…さん？ですか？」

「刹那です」

あたしが情景反射で返した名前に少女はかんぱついれず応える。

どうやら名前の呼び捨てを「所望のようだ。

「…刹那？」

「よし！！OK！！」

あたしが再び名前の呼び捨てで呼ぶと刹那と名乗った彼女はそう切り返した。どうやら正解だったようね…。

「…で？クロノスが能力者が何か知らないけど俺達になんか用か？」

そのときここまですっと黙ってた真備が声を出す。どこか警戒心があるそんな声。

だが真備の問いに返ってきた言葉はあたし達にとってかなり衝撃的なものだった。

「いえ。ただちょっと」

刹那がそこまで言ったとき彼女の目が一気に鋭くなった。気づけばさっきまでのフレンドリーな雰囲気はなくなりあたし達ですら寒気を感じるほどの殺気がほとばしる…。

「襲いにきました」

その言葉にあたし達は耳を疑った。

「…知ってるか？中国では俺みたいな雪を操る少女のことを雪の女神【青女】と呼ぶんだぜ？そして彼女が起こす雪害を…人々は悪魔のよつな雪【白魔】と呼ぶんだ…」

すると刹那は右手と左手を手のひらを上に向けた状態で前に差し出した。

「…来い【雪化粧】」

ヒュオオオオオオオ!!!

その瞬間。刹那の周りはまるで暴風雪のようにまいあがり。一瞬にして凍てついた。そしてその嵐が去ったとき。彼女の差し出された両手には一枚の布が乗っていたのだ…。

「羽衣の魂狩【雪化粧】」

これがあたしの忘れられない夜の始まりだった。

第11話 美しき雪化粧（後書き）

日「…こんにちは。本日も始まりました桜時ステーション。アナウンサーの不知火日向です」

輝「同じく美濃輝喜です」

日「本日は知恵理アナウンサーが風邪で休みということなのでこの2人で進めていこうと思います」

備「よろしくお願いします」

日「さて。では本日最初のニュースです。

【やっぱり近親相姦？怪しい双子の関係！？】

最近学校で噂になっている双子の姉弟【羽前真備】と【羽前凧】が学校帰り抱きしめあっていたのが目撃されました」

輝「学校でも人気が高い2人。その2人の大スクープなのか？それではどうぞ」

凧& amp; 真「…って！？おーい！！！！」

日「ちつ。何だようっさいな近親相姦カップル。今ニュース流してんの分かる？ニュース！？」

凧「知らないわよ！？だいたい何！？この【報道ステーション】み

たいなセツトは!？」

輝「前に知恵理が言ってたじゃないですか?ここは異次元みたいなものだから何でもありなんですよ?」

日「そういうことだ。だからお前らは気にせずラブラブしてこい。そうしないとスクープにならないんだからな」

凧& amp; 真『『そんな事実はないわあああああああああああああああ!!!!!!!』』

作「はい。何か知らない展開ですが次回予告行きます。時の秒針。次回は

突如現れた謎の少女刹那。彼女と雪化粧の力を目の当たりにした真備と凧。

そんな2人はついに羽前家に隠された力を使う決意をする。

次回【羽前家の秘密】」

日「問題nothingだぜ!!」

日「だ〜か〜ら〜!!もつと近づけよ!!ラブラブしろよ!!じゃないとスクープにならないの?分かる?」

真「知るかポケ!?!なんで俺が姉貴とラブラブしなきゃいけないんだよ!?!俺はロリコンじゃねーよ!?!」

凧「何よ!?!あたしだって誰がこんな馬鹿弟とラブラブしなきゃい

けないのよ!?!虫ずが走るわ!?!」

真& a m p ; 凧 『 上等だ(じゃない)!!面にてろやあああ
あああああ!?!?!? 『 』

日& a m p ; 輝 『 : 仲いいな 『 』

次回に続く!!

第12話 羽前家の秘密（前書き）

真備と凧の家の秘密とは？

第12話 羽前家の秘密

真備 side

「魂狩…」

最初にその映像。その言葉を聞いたとき、俺は聞いたことがない単語だ。そう思った。

だが刹那が持つあの羽衣を見たとき、俺は”あれ”はヤバいものと本能で感じ取っていた。たぶん俺の体に流れる羽前の血がそうさせたのだろう。

いままでだってこんなことがあった。でもここまで羽前の血が騒ぐことはなかったような気がする。

悦んでるのか？そう思えるほど騒ぐ血。まるで全身の血が沸騰したみたいに体が熱くなる…こんな感覚。初めてだぜ

「…あれは。そうか今日だったのね」

そのとき姉貴が何か納得したみたいにそう頷く。その声に俺はチラリと姉貴のほうを覗きみる。

「……………」

無言で刹那を見る姉貴。だがその目にはなにかしらの恐怖があることを俺は見逃さなかった。

「…姉貴」

「…真備。最初に忠告しとくは。最近あたしが見てた夢の支配者はあの武器。魂狩よ」

姉貴の眩き。それは俺にとってみれば驚きに値する衝撃だった。

なぜなら【夢】その単語が出てきた時点で俺はただごとじゃないと悟ったからだ。

「…マジが。だけどあれはいつたい何なんだ姉貴？」

「分からないわ。ただ言えるとしたら…あれは危険なものだということね。あんただって騒いでるんでしょ？羽前の血が」

「…ああ」

淡々と必要なことだけをつげあうように行われる俺達の言葉のやりとりに刹那は反応しない。

だが、そのときこれまで黙っていた刹那の口元がわずかに動く。風一つなく静寂に包まれた森のなかその声は俺達の耳にも確かに届いてきた。

「魂狩…俺の魂…」

どこか虚ろにそう言う刹那。だがそれからすぐに前にいる俺達を見据えると語り出すのだった。

「ターゲット1”羽前真備”。ターゲット2”羽前凧”確認。これより戦闘を開始する」

その言葉を発すると同時だった。一瞬にして刹那は俺達の視界から消える。

ダ　　ンッ！！！！！！！

「ぐはっ！！」

「…っ！？真備！？」

一瞬。俺は何が起こったのかわからなかった。感じるのは腹に感じる激痛…。

姉貴のボディブローとはまた違う。姉貴のボディブローは何だかんだ言いつつも後々ダメージにならないように手加減はしてある。だがこの一撃は違った。

この一撃は俺への気遣いなんてない。完全に俺へダメージを与えるために放たれた一撃だった。

「ぐう…何なんだ…」

状況を素早く判断した俺は目の前にある顔を見る。

「……………」

悲しげな……。だけでもどこか楽しげな顔をした刹那の顔がそこにはあった。

そう…。刹那は戦闘訓練を受けた俺と姉貴が反応できないほどのスピードで俺の腹に膝蹴りを繰り返したのだ。

でも…。俺達を見くびらないでほしいぜ。

ガシッ……………!!

「姉貴!!」

「分かってる!!任せなさい真備!!」

俺の腹に刺さる刹那の脚。俺はそれを離さないようにガツシリと掴む。

そしてそれと同時に姉貴は刹那に拳を繰り出す。強くもなく弱くもない、日向達と出会う前は毎日のように。そして今は土日だけやる戦闘訓練により手に入れたその適度な一撃を

「…ちっ！！」

対して刹那は俺の肩に手を置きそのまま俺の頭に頭突きを繰り出す。

ガツンッ！！

鈍い音がこだますると俺は刹那の膝を離してしまっ。いってー…なんだこいつ…無茶苦茶石頭じゃねーか。

スカッ！！

当たり前だが俺の拘束から逃げ出した刹那は姉貴の拳をかわす。だがその方法に俺は驚きで目を見開いた。

まず膝蹴りしたとき俺の肩に置いた手。それをつかってそのまま俺の肩に逆立ちをする。そしてその勢いでそのまま反対側に降り立つ。そんな奇想天外な攻撃をされたらさすがの姉貴の拳も勢よく空を切るに決まっている。

その運動能力　いや。刹那のその戦闘センスに俺達は驚きを隠せなかった…。

「…舞え。雪化粧」

「…なっ!？」

だがそこから俺はさらに困惑する。それはいつの間にか俺の脇の下を通って肩に巻き付いていた羽衣のせいだ。

いったいいつやったんだ…?そんな疑問が頭に過ぎり繰り返される。

だが今の彼女　刹那にそんなこと関係ない。刹那は俺に考える暇すら与えることなくその羽衣を　一気に引っ張った。

シュルシュル…!!ザシュツ!!

「ぐっ…!!」

激しい痛みが俺の右肩にかかる。これはもう羽衣という布の痛みなんかではない。

【雪化粧】という武器が生み出した刺すような…斬りつけるような…そんな痛みだった。

プシャアアアア…!!

「ぐあああああ…!!」

「真備…!!」

一刻の時を置いて俺の肩から大量の血潮が噴き出す。ちくしょー!!
ちよういてーじゃねーかよ…!!

制服を突き破って肩口の傷から噴き出す血…。こいつは本当にシヤシになんねえ…!!

「…鮮血の赤い薔薇。なるほどこれが羽前の血か」

「ぐぐぐぐぐぐ…!!…!!」

綺麗すぎるその声。俺は大量の血が溢れてくる肩口を抑えつけゆっくりと振り返った。

「…ぴちやあ…くちや…ちゅばあ…ちゅばあ…くちや…」

な…何なんだこの映像。

振り返った俺はまずそう思った。そして全身が固まってしまった。

なぜなら…俺が振り返ると白い着物が真っ赤に染まるほど血を浴びた刹那が 指について俺の血をペロペロと舐めてたからだ。おいしそうに。

「ん…ちゅぱあ…はあ…まさかこんなに美味しいなんて思いもしなかった…」

指についた血を全部舐め終わった刹那はそう言って、なんとも官能的な表情をする。

幸せそうにとろけきつた顔。そんな顔にも飛沫を浴びたかのように俺の血がところどころに付いていた。だが俺はそれすらも彼女を幸せそうにする要因に思えてくるのであった。

「あの子…何者？」

「ぐうぐう…いつ…分からねえ…だけど姉貴…あいつは異常だ…」

痛みに耐え俺は着ていた学ランを脱ぎ捨てると肩口の傷を庇うように立ち上がる。基本的に羽前の血の力でケガの治りが早い俺達。すでに肩口から血はそこまで流れなくなっていた。

「…真備。大丈夫なの？」

「ああ。俺のことはいい。羽前の血の力でもう血は止まっている。そ

れに俺は頑丈だからこれくらいなんともないさ」

嘘だった。本当はものすつごく痛いし頭もボーっとしてきている。ただ姉貴のあんな悲しげな顔を見たらそう言わざるを得なかった。やせ我慢のせいか額から玉のような汗が湧き出てくる。それに目がかすむせいかすぐそこにいる刹那の姿すらかすんで見える。

このままだったら俺はあと何分も立ってることは不可能だろう。だけれどもしそうなったら…姉貴だけであいつと対峙しなければいけなくなる。それだけは避けたかった。

だから俺は決心する。今まで使わなかった力を使う決心を

「姉貴…」

「何？」

なるべく平常心を保ちつつ俺は姉貴の名前を呼ぶ。

これは…俺にとって賭けだった。姉貴を　ナギねえを救うために俺は…隠してきた力を使う。

「【羽前家】の力を使う」

俺の一言に姉貴は完全に固まった。だが俺はそれを気にする暇すらない。

自分でも冷静じゃないことは分かっていた。でもだからこそ俺は姉貴が何か言い出す前に呪文が書かれた紙を取り出す。頭が冷静じゃないと認識しているうちに

「おい！！刹那！！」

煌々とした表情の刹那が俺の言葉にこちらを向く。俺の持つ紙。それを見た刹那はどこか不思議そうな純粹無垢な瞳で俺を見てくる。

さっきまでとは違い子供っぽいその顔に俺は思わずたじろいでしまう。だがすぐにその思いを振り切る。

「本気で行く」

真剣な目つきで俺は刹那を見つめると本来利き手のはずのだからと下がった右手の代わりに左手に持った紙を構える。

羽前家の力。今ここで人前にさらすことをお許しください！！親父！！お袋！！

「【羽前流式紙術】」

その名前は

「 【壊虫】
” かいちゅう ”
」

そのかけ声と共に俺は手に持った紙を勢いよく刹那に向かって投げつける。

すると俺の手から放たれた紙はみるみるうちにその姿を変えていった。

まるで刃物のように鋭くとがり、だけど虫のように複雑な体のつくりをしている。そんな姿へと

「ひっ！！虫っ！？」

刹那はそれを確認するやいなや必死の形相で羽衣 雪化粧で俺の繰り出した式紙【壊虫】を切り裂いた。

ザシュッ！！！！

気持ちのいい切り音に俺の繰り出した懐虫は真つ2つになり紙に戻る。俺の攻撃ではダメージを与えられなかったみたいだ。

「な…何？今の変な形の虫。気持ち悪…」

でもどうやら精神的攻撃にはなったようである。

普通の人間なら壊虫を破壊するなんてまず不可能なのに…。やっぱりこいつはヤバいかもな…。

ガ
ンッ！！！！！！！

「いてえええええっ！！」

そのとき俺の頭にさつき肩に受けたとき並みの痛みが訪れた。だが刹那は俺の壊虫を見たさつきから俺の目の前で悶えている。基本的にこんな時間ここを人が通るはずがない。ということは

俺は恐る恐る後ろを振り返る。どこか鬼気迫るその気迫を感じてしまったのだ。こんな威圧を出せるやつは奴しかいない。後ろを振り返った先そこには

「まっきびびび！！！！！！」

鬼の形相と化した我が愛しの姉上がおられました。

お姉さま。あなた様の御頭の上に見えていらっしやるその角は俺の幻想でありますよね？

俺の願いは儚く消え去るのであった

「あんだ…ばつかじゃないのおおおおお！？」

耳をつんざく姉貴の声に思わずたじろぐ。そんなに強く言っなよ。

「式紙使って…もし他の人に見られたらどうするつもりだったのよ！？」

ああー耳が痛い…。これでも俺なりに考えているんだからな…。

「…いいわ真備。お父様に言いつけるわ」

ああああ！？

それはマズい！！かなりマズい！！何としてもそれだけは回避しなければ…！！

「や…やめてくれ姉貴。そ…そんなことしたら俺の飯が野菜ステイックだけになっちまうっうっうっ！！」

俺は必死になって悲願する。あれだけは。あの地獄だけはもう見たくない！？

だが姉貴は聞く耳を持たなかった。ずっとそっぽを向いまま我関せずといった感じでツーンとしている。ああもう！！なんで姉貴はツンデレなんだよ！？

今日ほど姉貴のツンデレを恨んだことはない。

くっそー俺の飯…。覚えてやがれよクソ姉貴。いつかひざまづかせてやる…！！

俺は密かに心の中でそう意気込む。姉貴のあれは最早病気みたいなもんだからな…。

幼稚園あたりまでは「まーくん大好き!!」なんて言ってたのに。
なんでいきなり…そうか。俺が背を抜いたあたりか!!なんだあの
やろっ!!結局八つ当たりじゃねーか!?

ちつくつしょー!!だから姉貴なんて…!!姉貴なんて…!!姉貴
なんて

「……………」

あれ?姉貴なんて大嫌いになってもおかしくないはずなのに…なん
で?なんで俺は姉貴を嫌いになれない。

姉貴は意地っ張りで…すぐ殴るし…体小さい癖に威張り散らかすし
…ガキ大将みたいに我が侂で自分を世界の中心みたいに思ってる…
なのに

「…逃げる姉貴。ここは俺が何とかする。だから逃げてくれ…姉貴」

なのに 姉貴を必死に守ろうとする俺がいる。俺は…姉貴が
ナギねえが大切な存在なんだ。

結局。簡単な話なわけだ。俺は分かってるんだ。いくら横暴でも…

いくら暴力的でも…ナギねえは

「…っ！？ふざけたこと言わないで！！あたしがあんなだけ残していくとでも思ってたの！？バカ真備！！」

「ナギねえ…」

「あんたを…あんたを置いてくなんてあたしには出来ない。あんたを置いて逃げるらいなら…あたしは家の錠なんてどうでもいいんだから…」

ナギねえは 誰よりも俺のことを心配してくれて。誰よりも俺のことを大切にしてくれる

「だから…もうそんなこと言わないでよ…バカ真備。あんたはあたしの…あたしの…片割れなんだから…」

「ナギねえ…」

最高の姉（相棒）なのだから。

そんなナギねえを助けられるんなら飯抜きでも…俺は一向に構わな
い。

「…ああ。分かった姉貴。俺は絶対に裏切らない。俺の片割れであ
るナギねえを…絶対にな」

「…バカ。そんなの当たり前じゃない。双子なんだから」

そう言うと俺は 俺達は再び紙を取り出すのだった。

俺達は…生まれたときから半分の存在。 2人で1人の双子なんだか
ら

「さあ…平安時代から代々続く【陰陽師】羽前家の力。しっかり見
せてあげましょ！！バカ真備！！」

「おう！！へマすんじゃねーぞナギねえ！！俺達は…最高の双子陰
陽師なんだからな！！」

第12話 羽前家の秘密（後書き）

日「…ヤンデレが出て来たな」

輝「あはは ヤンデレがでてきたね」

知「ふえ？ヒナ君。コウ君。ヤンデレってなーに？」

輝「あはは そういえばチエリンはそういうことに疎そうですね」

日「…自分で言うのもあれだけど。知恵理はほぼ毎日俺の家の家事全般やつてるからそういうの見るくらいなら料理番組とか見てるもんな」

知「ひよ？ヒナ君のことを思って頑張ってる料理の勉強してるのそんなに悪いことなの？私。これでも頑張ってるんだよ ヒナ君がずっとずっとす〜と私のことだけを見てくれるようにね」

日&輝「……………」

輝「…ヒナタン。俺はちょっと言ちゃいことがあるんだけど…いい？」

日「みなまで言うな輝喜。分かっている。言いたいことはよく分かっている…でも知恵理のあれは決してヤンデレなんかじゃない。あれは知恵理の地の性格だ」

輝「そんなこと分かってるよヒナタン 俺が今一番言いたいののはね
…」

作「リア充死ねだ！！！！コンチクシヨー！！！！！」

日& amp ;知& amp ;輝『うわあああ！？』

知「さ…作者さん！！居たんですか！？」

輝「あははは、ここ最近で次回予告しか出て来なかったからてっ
きり影になっちゃったかと思ってましたよ」

作「ふざけんな！！誰の小説だと思ってやがるんだ！？」

日& amp ;知& amp ;輝『俺（私）達』

作「そっだよ！！そっですよ！！あんたらが主役の小説ですよこん
にやる！！じゃあ次回予告！！」

双子として生まれたときから 生まれる前から一緒にいた2人。

そんな2人は特殊な人間だった。人を守ることを家訓にする2人の
家。

今。お互いを守るために2人の陰陽師がその力を開花させる

次回【双子陰陽師】

日「問題nothingだぜ！！」

刹那（以下”刹”）「やつほー！！俺。登場だぜ！？」

日&mp;輝『あ。ヤンデレ娘』

刹「は？俺がヤンデレ？笑わせんなよな。2人とも。俺はただ血が好きなだけで別にヤンデレじゃないぜ？」

日&mp;輝『へ？そうなの？』

刹「そもそも俺は誰にデレればいいんだよ？相手いないぜ？」

日&mp;輝『確かに…』

次回に続く！！

第13話 双子陰陽師（前書き）

真備と凧のコンビネーションが炸裂！

そしてあの人が再登場！

第13話 双子陰陽師

????side

真備と凧の宣言から数分。刹那は必死になって攻撃を避けていた。ただどただの攻撃ではない。2人係だが芸術性のある乱れのない連続攻撃だ。すごい連携プレーであった。

「真備！！次は右蹴りから左アッパー！！」

「おう！！了解だ姉貴！！」

真備はその指示通りに拳を動かさない。

「うおおおおらあああああ！！くらええええええ！！」

「…っ！！ややこしいんだよ！！」

雄叫びをあげながらくる真備の攻撃。刹那はそんな真備が放った右

蹴り　ではなく左手から放たれたストレートを俺は紙一重のところで避ける。

「まだまだああああああ!!」

「くっ…!?!」

ガ　　ンッ!!!!!!

さらに迫ってきた左アッパー　ではなく右脚から放たれた膝蹴りを刹那は避けきれなかったからか、雪化粧を二枚重ねにして受け止める。

「ふう…ふう…ふう…」

乱れのない真備の攻撃。刹那はまさかここまでやるとは思わっていなかった。

凧の言葉に惑わされることなく繰り出された攻撃の数々はもう俺の攻撃パターンを完全に狂わせている。ただでさえ凧の言葉に悩まさ

飛んできた五体の壊虫。それを最早、刹那は発狂しながら切り裂く。

「虫…!!虫…!!虫…!!殺す…!!殺す…!!殺す…!!」

どこか完全にいつてしまっている刹那は雪化粧を構えると壊虫の発信源。つまり真備に切りかかる。だがしかし、その前に立ちふさがるのは

「そうはさせないわよ!!羽前流式紙術!!」

ザ ツ!!!!!!!!!!

攻撃した後、無防備な真備の前に小さいな何かが地面を滑るようにして現れる。その手には真備の壊虫と似通った呪文が書かれた紙。

だがそんな突然の乱入者にも刹那の攻撃は止まることはない。虫を見て発狂してしまった今の彼女。そんな彼女にあるのはただ1つの言葉。

「な…なにつ…！」

「そこだ…！！“懐虫”…！！」

突如として現れた謎の壁。それに気を取られた刹那の隙を真備は見逃さなかった。目の前に現れた心強い味方の風。

そんな風と風が創りだした壁　結界を飛び越えようと、真備は新しい式紙を放つのだった。

「もう…いやだあああああああああああああああああああああ
あ…！！！！！！」

完全に発狂してしまっている刹那は叫びながら雪化粧を二枚、三枚と舞うように重ねていく。その姿はまさしく天女のような美しさであった。

ガキンッ！！

まるで金属と金属がぶつかり合ったような音がする。その後、破虫はただの紙へと戻っていく。

ハラハラと舞い落ちる式紙。それを見ながら刹那は涙目で呟くのだった。

「うう…もういやだ…」

風side

「…なんて硬さなの？」

あたしはさっきから目の前で起こっている光景に驚かされてばかりだった。

懐虫はもともとナイフが変化した式紙だ。普通なら布はもちろん、鋼鉄すらズタズタに切り裂くことが可能なほどの破壊力を持つ。

だけどそれをあの子は雪化粧　羽衣でふさぎきっていたのだ。驚くなど言われるほうが難しい。

あたしは背中に冷や汗が流れるのを感じる。やっぱりあたしたちは今危ない所に立っているのだ。

「…姉貴」

「わかってるわ…あたしが隙を作る」

鋭い真備の言葉。あたしはその言葉に應えるように頷くと式紙を取り出して一気に駆け出した。

「“虚空”！！」

あたしの言葉と共にあたしの目の前に壁に似た結界　虚空が現れる。そしてあたしはそのまま刹那に向かって突撃していった。

「…っ！！なめるなああああああああ！！！！！！」

対して刹那は雪化粧を構える。そうね…そこなくっちゃ！！

める。じゃないと負けてしまいそうだった。

でも…まだあたしは負けられない。まだ負けるわけには…いかないんだからあああああ！！

「くそっ！！いい加減に…諦め…やがれ…！！往生際…悪いぞ…！？」

「はん…！！あんだこそ…さつさと…降参…しなさい…！！痛い目見るわよ…！！」

お互いに苦しそうにそう言い合うあたしと刹那。透明な結界に何度も何度も薄い羽衣を打ちつける刹那。相手の表情ははつきりと見えた。

そっか…向こうも苦しいのね…だったら行けるわ　あたしは刹那の顔を見ながらも周りの気配にも気を配る。そう…真備と立てた作戦の進行具合を確かめるために…。

もう少しね

「いやよ…あたしはあんに絶対勝つんだから…！！」

真備の動きを確認。よしあと…5秒。

「ふざけんな！！俺が勝つに決まってるだろ！！」

そう言っでられるのもあと少しよ？あと…4秒

「あたしは いや。あたしたちは勝つわ」

大丈夫。あたしたちならできる。あと…3秒

「何で！！何でだ！！その自信はどこから来るんだ！！？」

さすがに焦ってきたわね刹那？あと…2秒

「自信？そんなもんないわよ。あたし達にあるのは確信。それだけよ…だってね刹那」

そう…あと1秒だけ持てばあたしの勝ち。だってあたしは2人で1人。最高の双子陰陽師なんだから。だから…あたしたちの勝ちまであと1秒

「この押し合いはね…もう終わるからよ」

ガバツ！！！！！！！！

ニヤリと笑みを浮かべたあたしは“虚空”の結界を消すと同時に横飛びをして刹那との押し合いから離脱した。

「う…うわっ…！？」

すると刹那は見事にあたしのいたほうに倒れ込む。まさかここまで作戦通りになるなんてね。自分でも高笑いしてしまいそうだね。

「いつて…何すんだ!!」

でもあたしは哮るその思いを押さえ込んで、冷静に告げる。

この勝負の決着を

「刹那。風払わせてもらおうわ…あなたの意識をね」

あたしがそう呟いたとき近くの木のてっぺんから何かが飛び出す。

それは鳥ではない。鳥なんかより何倍も大きくて、鳥みたいに蒼空
なんか飛べやしない。だけど鳥みたいに可憐な美しさはないけど
勇ましい力強さがあるその姿。

そしてその何者かの右手には“壊虫”とはまた別の術式が書かれた
式紙。それが握られていた

「いつけええええええええええええ!!!!真備!!!!」

「羽前流式紙術!!!!」

あたしの声に応えるように真備はその式紙を投げた。これが真備とあたしの持つ式紙の中でも最も攻撃力がある式紙。

ただその性質上高いところからしか攻撃できない式紙の切り札とも呼べる式紙。

その名は

「 【鉄槌】 」

“ てっつい ”

ドカアアアアアアアアアアアアアンツ!!!!!!!!!!!!!!

そして真備が繰り出した紙は巨大な拳となる。その一撃は地をも叩き割り、その一撃は森をも引き裂く轟音を轟かす。

そんな一撃が刹那のほうに落ちていった。

真備 side

俺たちの作戦はこうだった。刹那の羽衣　雪化粧を打ち破るにはそれなりの攻撃力がある。

だから俺の攻撃の中でかなり高い攻撃力を持つ鉄槌を出すことにした。

だけど鉄槌は上空から落とさなければいけない式紙。そのため俺はなるべく上になるべく高いところに移動しなければいけなかったのだ。

姉貴の役目はその間の時間稼ぎと刹那の目を俺から放さすこと。そして作戦は成功した。

「…真備。終わったの？」

「…たぶんな」

心配そうな姉貴の声。俺はその声にそう答えたがはつきり言って刹那を倒した確証はなかった。

なぜなら鋼鉄を引き裂く懐虫を防いだやつだ。それに鉄槌を実際に使うなんて初めて。どうなってるかなんてわからない。

俺は怖かった。仕留めたとしても、仕留められなかったとしてもあの拳の先に待ち受けるものが

「そろそろ下ろすか。警戒しろ姉貴」

「…そうね。分かったわ」

俺は警戒しつつも鉄槌を解除しよう近づく。緊張の一瞬。だがその緊張は崩れ去るのだった

ピシッ!!--ピシッ!!--

「…っ…っ…っ…っ?」

「…っ!!--姉貴!!--下がれ!!--」

叫んだ。俺はただひたすら叫んだ。鉄槌にひびが入ったその瞬間に驚きを隠せなかった俺は叫ぶことしかできなかった。

ドガシャ　　ン!!!!!!!!!!

そして鉄槌は崩れ去る。拳の形を維持できなくなった鉄槌はもとの紙へと戻る。バラバラに散りゆく紙。その中央にて羽衣を構える美少女がいた。

「……………」

刹那の目はすわっていた。その可憐な体にはかすり傷がちらほら見えるが俺の肩ほどの深いものはない。

俺は恐怖した。刹那のその乱れた姿に

「お前ら……」

刹那の声は最初のフレンドリーさはなかった。いや。もうあれは声なんてものじゃない…あの声はあるのは

「許さない…鮮血を散らして…死ね」

“殺意” だけだった。

「【静寂の雪 風花】！！」

“かざはな”

シュルシュル…！！

刹那はその言葉を唱えると羽衣を 雪化粧を体に巻きつける。真
つ白な雪化粧に俺の血がついた刹那の服に覆い被さる。
すると

「…っ！？消えただと！？」

俺の目の前にいた刹那は跡形もなく消え去り見えなくなったのだ。

俺と姉貴は慌てて辺り一面を見渡す。だが刹那の姿はなかった。消えたのだ本当に。

姿だけじゃない。走るときの音。刹那にある気配。それにさっきまでビンビンと伝わってきていた殺気。それすらも感じなくなった。

そこにあっただのはただ静かな“静寂した空間”それだけだった。

「…逃げたのか？」

あまりにも何も感じない。本当に最初から何もなかったかのようなその空間。だが俺がそう呟いたそのときだった。

「きゃあああああああああああ………!!!」

姉貴の叫び声が俺の耳をつんざいたのは。

「あ…姉貴！？」

俺は急いで姉貴がいる後ろを振り向く。そしてそこにいたのは

「1人…鮮血の血。いただきました…」

目がいってしまつてペロペロと指について血を妖美な表情で舐める刹那と…。

「姉貴…ナギねえ…!?!」

左肩から血を流して膝を付くナギねえだった。

風side

「くっ…!?!」

油断した。気配がなくなったあたしは油断していた。だけどそこに刹那が現れた。

ただ一度の気配もなく。ただ一度の影もなかった。それでも彼女は突然現れたのだ。あたしのすぐ目の前に

「ナギねえ!!」

真備があたしの名前を叫びながら刹那に殴りかかる。でも少しだけ遅かった。

「…【風花】」

刹那は再び雪化粧を身にまとう。すると彼女はまたしてもその姿を消し去るのだった。

ブンッ!!!!!!!!!!!!!!

「くっ!!」

真備の拳が空を切る。本気の攻撃だったのか真備が空を切る音はとてつもなく激しかった。

そして真備は攻撃を外した勢いそのままあたしのほうに近づいてくる。

「ナギねえ!!」

あたしに寄ってきた真備は大声であたしを呼ぶ。だけどそんな隙はない。

あたしはその声に少し微笑むと真備に活を入れた。

「真備!!あたしは心配いらぬから、早く警戒しなさい!!早く!!」

叫ぶあたし。だがそこであたしは体が凍りつく。なぜならあたしの警告は無駄になったからだ

ヒュウウウウウ...

風がふく。森の木々が一齐にざわめき始めた。それと同時に真備の首もとに一枚の布がかかる。

そう...それは雪化粧。そしてその布の端をを持つのはもちろん

「もう一人...」

真備の背後に現れた刹那。彼女は完全に無機質な 無表情な顔で真備の首にかかった雪化粧を握る。

だ...だめ...

あたしは知っていたあの動作。刹那がそのまま真備の首にかかった布を引けば真備の首から血が吹き出すことを...

い...いやあ...

そして刹那の持つ手に力が入るのが見える。あたしは…もう我慢できなかつた。

「やめて…お願い…やめてええええええええええ!!!!!!!!!!」

あたしは必死になって叫んだ。叫んでも無駄だと思った。けど叫ばずにはいられなかつた。

絶望の中。あたしの叫びは無情にも響いていく

だけどあたしの声は………届いたのだった。

パチンツッ！ザンツッ！

指を鳴らす音。それと何かが空気を斬る音が森中に響き渡った…。

ガンツッ！

そして何か光るものが雪化粧を木に打ちつける。

それはあたし達の救世主となる希望の光なのか？それともさらなる試練を知らせる絶望の光なのか？まったく分からなかった。

「…何をやってるんですか…刹那！！」

そのかすれかすれの声にあたしは振り返る。灯りがない森の中。その姿を見つけるのは難しそうに思えた。

だけど…あたしはすぐにその姿を見つけられた。なぜならその声の持ち主は

「…っ！？なんでお前がここにいるんだ…レリエル…！」

その声の持ち主は　　光り輝く“弓”を持っていたからだ。

第13話 双子陰陽師（後書き）

作「さて今回はちょっとした小話をお送りしたいと思います。題して

第1回【時に至る軌跡】

この作品は俺。作者の提供でお送りしまーす!！」

日「わーわー!!! イエーイ!!! パフパフ!!! ってなんで俺1人なんだよ!？」

作「いや待て日向!!! 今回はぶっちゃけると日向メインだから日向しか呼べなかつたんだよ!？」

日「は?なんで?」

作「はい。実は今回は第1回ということでこの作品に至るまでの経緯をお送りするからでーす!！」

日「...で。それが何で俺しか呼べない理由なの?」

作「まあ理由はいろいろありますけど。一番の理由はこの作品全てにおいて最初に考えたのが主人公の”不知火日向”だからです」

日「...なるほど。つまり今回話すのは時の秒針を考えるまでの経緯。そしてそれ〓俺という人物像ができるまでの経緯ということか」

作「はい。ということでしたっそく行きたいと思いまゝす。

最初にこの作品。というより日向の設定を考えたのは自分が部活中にランニングしてる時でした」

日「なんでそんなときに考えてんだよ!？」

作「で。中学剣道部だった俺はとりあえず刀使いの中学生ということとを妄想しました。これが日向の始まりです」

日「相変わらず。こつこつというのは安易だよな……」

作「まあその辺は気になさらず。でも最初は日向もいろいろ違ったんだ。」

例えば名前。最初の日向の名前は【飛渡日向】ちなみに”ヒュウガ”と呼ぶほつだったんだ」

日「へーそうだったのか」

作「でも一番の違いはやっぱり口癖かな？」

日「問題nothingか？」

作「そう。実はこの口癖。このサイトに書き始めてからつけた設定なんです」

日「なななんだってー!?!じゃあその前の俺は」

作「キャラとしてはつきり言って薄かったな」

日「（　　）!？」

作「じゃあ日向が言葉を思わず絵文字にしてしまうほどショックを受けたところで次回予告いきます。時の秒針。次回は

レリエルの登場により真備と凧。それに刹那の間に嵐が吹き荒れる。

“風”は舞い上がり禁断の花園へと誘い。

“雷”はただひたすら破壊し続け大地を引き裂く。

次回【風神と雷神】」

日「問題nothingだぜ!!」

日「うん。次の設定は誰について話すんだ？」

作「はい。今回はメインヒロインの知恵理の設定をお送りしていきます」

知「うん。よろしくね」

次回に続く!!

第14話 風神と雷神（前書き）

はあゝ・・・そろそろ感想がほしいです・・・

真備と凧の魂狩が登場！

第14話 風神と雷神

レリエル side

「レリエル…てめー！！なにしやがる…！？」

刹那が俺に抗議の声をあげる。だけど俺はその罵声を冷静に対処しました。

「刹那：あれほど私情に走るなど言いましたよね？あなたのやるべきことを忘れないください」

俺はゆっくりと落ち着かせるように刹那に語りかけます。

ですが俺の言葉に刹那はギロリと俺を睨みつけ、さらに反論してきました。

「ふん！！私情に走るなだつて？そう言ってるけど一番私情に走っ

てるのはお前だろ！！レリエル！？」

その言葉は少し聞き捨てなりませんでした。

「…刹那。それはいったいどういう意味ですか？」

少しイライラとしながら俺は刹那の次の言葉を待ちます。

ですがやはり刹那の口から出てきた言葉は俺の何かに触れるものでした。心の底　魂の何かに触れるような何かに…。

「はあ？そんなのも分からないのか？潜入した瞬間にこいつらと仲良くなっちまって…お前はあいつらを騙して　」

パチンツ！！ザンツ！！

刹那が言葉を最後まで言い終わる前。俺は刹那の頬ギリギリのところを閃光の光の矢でかすませました。黙らせるためです。

なぜなら刹那の言葉は今の俺には一番の禁句でしたから…。

「…っ!？」

刹那の頬から日向と同じ様に「ツウー…」血が流れ落ちていきます。

「勘違いするしないでください刹那。俺は…俺はこれまでも…そしてこれからもずっと…1人です」

自分でも分かるくらいに冷たい声。俺はこのとき頭に血が昇ってしまっていました。ですがこれが本来の俺。本来の姿。

“10歳以前の記憶を持たない”俺はずっと1人で生きてきました。だから俺は永遠に孤独であり続ける。そう決めたのです。

あのとき…あの時間…あの瞬間…俺の人生はスタートしたのですから…。

「…レリエル」

刹那は少し悲しげな顔を浮かべながら俺の今の名前を呼びました。

ですが次の瞬間。刹那はいつも通りのどこか鋭い笑みを浮かべます。

まったく…本当に表情豊かですね…刹那は…。

「…そういえばレリエル。何でお前ここにいるんだ？お前は天使の担当だろ？」

「決まっています。もう終わったからです」

まあちよつと死にかけましたんですけどね…。

「で？暇つぶしにこっちに来たってわけか？」

「ええ…そうなりますね。ですから俺は何もしません。当初の通り一人で事に当たってください」

「ちえ。分かったよ。にしてもねえ…そう。そっか…そうなのか…」

どこか釈然としないという表情が見え隠れする刹那だったが、興味なさそうに真備と凧のほうを向き直した。

どうやら冷静な判断力は戻ったみたいですね…。本当に…刹那はすぐにキレルからいけません…。

でもそんなその場の感情に流されやすく子供っぽいところ。俺は案外好きですよ？刹那。

「ん…ちゅぱあ…はあ…やっぱスナック菓子もいいけどお…んあ…ちゅぱあ…苦くてドロドロしたこっちの方が好きい…」

ですがこればかりは止めていただきたいですね。いつまでたっても慣れません…。

「はいはい。刹那。指についた血を舐めない。行儀悪いですよ？」

あたしの前には真っ黒な装束の男　レリエルという男と水色の白人系の少女【刹那】がしゃべっている。

だけど2人の会話からあの男と刹那が仲間だということが分かった。

「真備。まだ死んでないでしょうね？」

2人が会話に夢中になっている間にあたしは真備を呼びかける。ピッチは救われたが状況は最悪だ。

刹那だけでも苦勞してるといふのにもう1人増えたのだ。これを最悪と言わずに何という。だからあたしは真備と新たな作戦を立てなければならぬ。

「……………」

ところが真備は反応しなかった。今、真備はあたしを庇うように立っている。レリエルという人物と刹那の方を向いてるためその表情はうかがえない。

ただ無言なのかそれとも気を失ってるのか　まさか本当に死んでないわよね…。

「真備？」

不思議に思ったあたしは横から真備の顔を見る。だけどあたしの予想はすべて外れていたのだった。

「……………」

真備は気を失ってなんかいなかった。ただどまるで何か驚愕的なものを見たかのように目を見開いてる。いったいどうしたの…???

「…真備？」

「ん…あれ？どうかしたか姉貴？」

二度目の呼びかけ。ここで真備はやっと反応する。でもやっぱりど

こか心ここにあらざとといった表情をしている。

本当に…どうしちゃったのかしら…？

「わりー…どうやら思った以上に肩の傷で流した血の量が多すぎたみたいだ…頭がボーっとしてた…」

苦虫を噛みしめるような表情の真備。その顔だけを見たらそれもあながち嘘ではないようだ。

実際足元がふらついている。いくら陰陽師の血である羽前の血で傷の治りが早いとはいえあれだけ血を流したんだ…無理もないわ。

それにあたしだって同じことが言える。さっきの刹那の一撃であたしも同じ様にところをザックリと斬られたわ…正直痛みで気を失いそうよ…。

これが真備が味わってた痛みなのね…。あいつよくこんな傷で闘い続けてられたわね…。でも

「…そう。気をつけなさい真備。状況はさっきより悪化してるんだから」

「ああ…分かってるぜ姉貴。俺達が最悪な状況にいるくらい俺にだ

って分かる」

でも。今はそれどころじゃない。あたし達はもう…逃げられない。

「まずはそっちの男…助かった礼を言う」

「…気にしないでください。俺はこいつの暴走を止めただけですから。あなた方が死ななくて本当によかったです」

唐突な真備の言葉。そう言うとレリエルは刹那の頭をわしゃっとかきなでる。

「やめろよレリエル…」

恥ずかしそうにする刹那。その姿を見ながらあたしは少しだけ頭をひねった。あれ？真備の今の言葉…何か違和感が…。

そんな疑問があたしの頭を駆け巡るがすぐに振り払う。さっきも言ったが今はそんなときではない。あたしはすぐに身構えた。

「そうか…じゃあ…俺はお前らに問う…お前らの目的はなんだ？」

真備の質問。それは肩の痛みであまりしゃべりたくないあたしの疑問を含んだ問いだった。

真剣な眼差しの真備。だけど刹那とレリエルは真備のその瞳を流すのだった。

「刹那…俺は手助けしませんよ？」

あたしと真備の質問を一切無視したレリエルはその無機質な声で刹那に話しかける。

刹那もそれを聞き流しながらゆっくりと…ゆっくりと…雪化粧が刺さった木に近づいていった。

そしてあたしの一番望まなかったことが起こったのだ。

シュルリ !!

「っ！？…羽前流式紙術！！守式【虚空】！！」

ガアアアアアン！！！！

あたしはとっさに真備の前に出ると虚空を発動させて刹那の攻撃を防いだ。

結界を腕で支えなければいけないため、虚空は結構、腕に力を入れる必要がある。肩の傷にもすごい痛みが走った。

「わかってるよレリエル。この2人は必ず俺が目覚めさせる…だからそこで黙って見てろ…」

そして刹那の綺麗なソプラノ声があたしの耳にこだまする。

それほどまでに近いところにいる刹那はさっきまでの怒りの感情はない。だが別の感情を感じる。

レリエル。あの人物が集まったことにより刹那は 焦り始めてい

た。

「姉貴！！」

ブンッ！！

あたしが刹那の動きを封じると同時に、反射的に真備が刹那に拳を繰り出した。だけど刹那は…その拳を難なく避ける。

まるで煙のように一瞬にして消えたかと思ったら…刹那は蜘蛛のように地面に張り付いていたのだ。

「…っ！？」

突如として消えた刹那に真備は目を見開く。だがあたしも真備も真に驚くのはまだ早かった。

刹那のその身体能力をなめきっていたのだ。

シュタンッ！！！！！

「…え？」

驚愕に歪む真備の顔がさらに驚愕の色を現す。だって…地面に張り付いていた刹那がまた一瞬にして消えたからだ。

でも今回は目が慣れたのか刹那が何をしたのかはつきりではないがあたしにも見えていた。だけど…信じることはできなかった。

ガアアアアアアアアアアアアンッ！！！！！！！！

「がはっ！？」

刹那は体全部が地面についているような状態から…腕の力だけを使っただけで飛び上がったのだ。

でもそれだけじゃない。刹那は飛び上がり、拳を外してバランスを崩した真備にかかと落としを繰り出したのだ。もうこれは…人間業

じゃない…。

そして刹那はさらに追い討ちをかけた。

フォン！！ガンッ！！

「ぐっ！！」

かかと落としを繰り出した刹那。そしてすぐに体を入れ替え真備に回し蹴りを繰り出す…空中にいたまま。もう何でもありだ。

シュタンッ…

あんなアクロバティックな動きをしたのにも関わらず刹那は何事もなかったかのように綺麗に地面に降り立つ。その動きすべてに何らかの芸術性すら感じた。

もうこれは人間の動きじゃない…。だけど敢えてあたしは言おうと思う。

刹那の身体能力…そして格闘センスは…異常だ。

「ち…ちくしょお…」

だけどそんな怒濤の攻撃にも関わらず真備がふらふらとしながらもまだ立ち上がる。

あたしは…もう見てられない。そんな衝動に何度も駆けられた。本当は立つてることも辛いはずなのに…。真備は歯を食いしばって…立ち上がる。その姿にあたしはもうちょっとで耐えられなくなりそうだった。

…?
「こんな…こんな…なんであたしたちがこんな目にあってるのよ」

その疑問が頭を何度もよぎる。あたしはもう立つこともままならなかった。

「…まだか…」

刹那が何かを呟いたような気がする。

ただどあたしの頭の中はただどうしたらこの状況を抜け出せるか
それしか考えてなかった。

でもだめ…どうにも頭がうまく回らない。

「刹那どうした？まだ俺は立ってるぞ」

やせ我慢なのは誰の目にも明らかかな真備の言葉。あたしにはその声
がレリエルの機械を使ったかすれ声みたいにかすれて聞こえた。

気のせいかな…目まで霞んできた気がする…。ただどあたしは自身の
肩を見た瞬間にすべてが納得してしまう。ザックリと斬れたその傷
を見た瞬間に

そっか…あたし…血を…流しすぎたの…ね…。

あたしはもうどう考えても戦闘できる体ではなかった。

目が霞み体の力が抜け立ち上がることもできない…。

真備が　あたしの大事な馬鹿弟がまだ戦ってるというのに…。あたしはもう…ダメだった…。

ドクンッ！！

ただどそのとき…あたしの心臓が大きく脈打つ。

ドクンッ！！

体の底から何か熱く締め付けるものがこみ上げてくる…。【魂】とでも言うのだろうか？そんな深いところから…何かが。

ドクンッ！！

それは頭の中に直接入り込んできてあたしの頭をグチャグチャにする。

特有のあの鋭い目は顕在だ。でもその瞳に 色はなかった。

「な…ナギねえ…？」

俺は思わずナギねえの名前を呼ぶ。だけどナギねえは何の反応もしない。

すぐ目の前にいるはずなのにそのときのナギねえを俺はどこか遠く存在のように感じていた…。

シャキンッ！！！！！！！！！！

そして俺の言葉を見殺したナギねえは手に持った鉄の棒らしきそれを開く。そのとき俺はナギねえが持っていたその鉄の棒の正体をやっとなんか知ると知る。

ナギねえの手を軸にして開かれた何枚もの鉄の羽根。その鉄の羽根の中心には蓮の花が描かれている。

【風神】まさしくその言葉が似合うその武器の正体。それは

「鉄扇”の魂狩【風神】…」

“鉄扇” それを持つナギねえの雰囲気はさっきまでの刹那の雰囲気に似ている気がする。いや…それ以上だ。

ガタガタと震える肩を抑えなければいけないほど、俺は姉貴のかもし出すその雰囲気完全に怯えてしまっていた。

「やっとか…」

刹那の眩きは今の俺にはどうでもよかった。

ただ姉貴を ナギねえを見つめることしか俺にはできなかったのだ。

そしてそのときだった。

ブンッ！……！！……！！……！！……！！

ナギねえが一瞬で刹那に迫り鉄扇　風神を閉じた状態でその体に叩きつけた。

「っ！？やばっ！！」

キィ　ンッ！！！！！

ナギねえの突然の攻撃に刹那は慌てた様子で雪化粧を構える。辺りに金属と金属が当たったような音がこだまする。

見えなかった。俺の目では今の攻撃を見ることができなかった。ナギねえの動きがあまりに速すぎて…。それこそ【風】と言えるほどに

「くそっ！！」

ナギねえが攻撃したときに舞い上がった砂埃の中。その刹那の言葉だけが俺の確認できた情報だった。

ナギねえがいったいどうなったのかは分からない。だけど夜の真っ

暗な森。砂埃で完全に見えない空間にその音だけが響き渡る。

キンツッ！！キンツッ！！キンツッ！！キンツッ！！キンツッ！！

辺りに響く金属音。その音だけがナギねえのことを知る唯一の手掛かりだった。

そしてだんだんと砂埃が晴れていく。思えばこれ自体もナギねえの目くらましのための作戦だったのだろう。そこに現れる映像：俺はその映像から目が離せなかった。

『 …… 『

ギリギリッ…！！

無言で睨み合うナギねえと刹那。彼女達の手にはそれぞれ鉄扇と羽衣が握られている。

閉じた鉄扇　風神を刹那に押し付けるナギねえ。その鉄扇を力一杯広げた羽衣　雪化粧で押しとどめる刹那。緊迫した空間がそこ

にはあった。

ガアアアアアン！！！！

「がはっ……！！」

だがその空間は長くは続かなかった。おそらく刹那が一瞬、雪化粧に入れていた力を緩めてしまったのだろう。そしてその隙をナギねえが見逃すはずがなかった。

その一瞬の油断の間に刹那の腹にナギねえの蹴りが入っていた。

シャキンッ！！

いくら刹那が身体能力が異常に高いとはいえ、ナギねえの蹴りをまともにくらってフラつかない方がおかしい。

フラつく刹那。ナギねえはそんな刹那を前にしてひどく鋭く尖った音とともに風神を開くと一気に刹那に詰め寄った……！！

ザシュツ!!

「…ぐっ!？」

気持ちがいいくらいの音。そして巻き散るのは刹那の血潮…。服の上から腹を切り裂いたナギねえの攻撃は浅かったとはいえ、確かに刹那へとダメージを与えた。

「……………」

そして刹那の腹を切り裂いたナギねえはいたって冷静だった。

いや…無感情だった。

下手をすれば致命傷になりかねないところを攻撃したにも関わらずナギねえの瞳には相変わらず色がなく、顔に表情もない。

まるで機械操作のように与えられた仕事をこなすその姿は 人形
のようだった。

「ふう…いてえ…」

刹那がお腹を押さえながらうつずくまっている。

見たところでは刹那は風神で斬られる直前に後ろに跳んでいたからそんなに深くは斬られていないはずだ。だが確かにあれは痛いだろうな…。

「ナギねえ…」

刹那から顔をナギねえに移し俺はナギねえを呼ぶ。だけどやっぱり反応はない。俺はこの状況においていかれたかのように思えた。

「真備。少しよろしいですか…?」

そのとき突然後ろから声がかかってくる。無機質な機械の声…。ただ俺にとってその声は

「レリエル…だったか？俺に何のようだ？」

俺の後ろ。１メートルくらいのところにいつの間にかその男。レリエルが立っていた。

心配しなかった。だけど驚きはしない。今の問題は別にあるからだ。

「…真備。今、あなたは瀬戸際に立っています」

それはいったいどういう意味だ？

「意味が分からないという顔ですね？ですがあなたが目覚めないと…風は止まらなくなります…」

目覚める？止まらなくなる？…どっぴいっことだ…？

「あなたには…都合のいいものが流れている。人を守りたい。そう思ったときに覚醒する血が…」

「…【羽前の血】」

ドクンッ！！

その刹那。俺の心臓がこれまで経験したことがないほど大きく脈打つ。

なんだ…なんだ今の？手の先が、足のつま先が、頭の中が、体全部が、心の奥底が…たった1回の心臓の鼓動に…俺のすべてが震えた。

ドクンッ！！

「がっ…！！がはっ！？」

再び俺の中を何かが走り去る。目の前に赤い何かが映る。紛れもな

い…血だった。俺は吐血したのだ。

痛いなんてものじゃない。まるで体全部に鋭くとがった何かが刺さったような…そんな感覚だった。

ドクンツッ!!

「すみません真備…俺は日向や知恵理だけでなく…あなたや凧をも苦しめてしまいました…本当にすみませんでした…」

「ぐっ…!!がっ…!!」

霞む。目の前が真っ赤に霞む。俺は心臓の鼓動のたびに打ち振る得る体を持ち上げ、そいつに手を伸ばす。

真っ赤…真っ赤…。とにかく真っ赤な世界だ。今の俺の目に映る色は赤以外にはない。

俺のスクリーンは真っ赤な血の色に染まりあがってしまっていた。

ドクンツッ!!

ですがここで予想外のことが起きました。俺も刹那も…そして水城ですら予想できなかった事態が

「 協調 ”

“ チューニング ”

真備の魂狩は発動直後の能力の解放以降も…電気を放出し続けていました。それが意味することそれは…。

「 初発動で魂と身体（能力）の “ 協調 ” をさせた… 」

“ 協調 ”^{チューニング} これを完全に使いこなすためにはそれなりの期間を有します。俺も… “ 協調 ” ができるようになるまでかなりの時間を有しましたし、一生これができない能力者もいます。

ですが…初発動でこれを使いこなす人間を俺は初めて見ました。真備の魂狩の周りにまとう電気はその証です。

俺はこのとき直感しました。真備はこれまで俺が見てきた能力者の中でも数少ない…強い魂を持つ人間だと。

バアアアアン！！！！！！！！

拳と拳を打ちつける音が響き渡る。そしてその音と共に真備の周りにあつた電気は全て飛び散りました。

光の中心だつた場所にいる真備の体の前で合わされた両拳に弾かれたかのように

「……………」

そこにいたのは風と同じように顔に表情の「ひょ」の字もなく、瞳に色がまつたくない…真備。

そんな真備はゆっくりと体の前で合わせていた拳を解き放ち、フアインディングポーズを取ります。

俺はそのときやっと真備の拳を包む銀色と黒色のものに気がつきました。

真備の拳を隠すかのように包み込まれたそれ。一見すると手袋にも見えるそれでしたが、よく見てみると指の関節や手首周りは硬い金

属で覆われていました。

そして極めつけは手の甲のそれ。銀色の金属であしらわれたその綺麗な“蓮”の花はとても美しかった。

そんな真備の武器。真備の魂。それは

「…鳴り響け！！“グローブ”の魂狩【雷神】！！！！」

今宵。この森に2人の神を操る双子によって“嵐”が巻き起こされる。

真備の魂は怒涛のごとく鳴り響き、すべてを破壊する稲妻のグローブ【雷神】

嵐の魂は大地を吹き荒れ、空を流れる旋風を巻き起こす疾風の鉄扇【風神】

双子ならではの名前。双子ならではの武器。双子ならではの魂…。

そして2人の魂は絡み合い、せめぎ合い、嵐となりてまだ見ない世界へと飛び立つのだった

第14話 風神と雷神（後書き）

真「姉貴！！今回は俺達の魂狩の登場だったな！！」

凧「そうね。あたしは鉄扇。あんたはグローブ。なかなかカッコイイじゃない！！」

真「だな！！俺達が魂狩を発動させたことでこれからどうなっていくかすごく楽しみだぜ！！」

凧「まあ今は最悪の状況なんだけどね。本編のあたし達は暴走しちゃってるし、刹那も怪我しちゃったからレリエルに頑張ってもらわないとね」

レ「…なんですか凧。結局、他人任せじゃないですか？そんなことしても親御さんは喜びませんよ？」

凧「あんたは立てこもり犯を説得する刑事か！？」

真「それ以前にお前いきなり出てきたな！？おい！？」

レ「気にしないでください。俺としてはこの物語の謎な人要員ですから、これぐらいの技術持って当然です」

真「自分で言うなよ…自分で。でも確かにな。フードで顔隠して、機械で声変えて、本当にお前誰なんだよ？」

レ「ふふふ。それは秘密です。某アニメの巨乳未来人風に言っと禁

則事項です」

凧「…ごめん。あたしにはあんたのキャラはわからないわ」

作「はいはい。話が変わってるから一度話を戻したいと思います。おほん。今回は凧と真備。2人の魂狩が初登場した話でした」

レ「そうですね。これで主要メンバーの大半が魂狩を発動させたこととなりますね…ところで気になっていたんですけど…」

作「ああ。どうしたんだ？」

レ「はい。じゃあ…真備と凧。2人の魂狩には花が描いてありましたよね？確か花の種類は」

真& amp; 凧『『蓮』』

真「こいつは俺達から説明させてくれ」

凧「あたし達の武器だし。あたし達の家に関係することだから」

真「そもそも俺達の家って陰陽師だろ？実は俺達の家は日本ではかなり有名な家柄なんだ」

凧「で。ここで水戸黄門を思い出してほしいわ。特に最後のあのシーン」

真「“この門どころが目に入らぬか！！”てところだな」

凧「そう…角さんが出すあれ…あれには家紋が書かれてるでしょ？
三つ葉が書いてあるやつ。あれと同じよ」

真「つまり水戸黄門が出す家紋が三つ葉だということと同じようにう
ちにも家紋があるんだ。それが」

真& a m p ; 凧『『“蓮”の花ってわけだ(よ)』』

作「じゃあ尺がないから次回予告

暴走する真備と凧。お互いに姉弟だということも忘れた2人は…。

次回【疾風迅雷の闘い】

日「問題nothingだぜ!!」

作「まじで尺がないからじゃあね〜!!」

真& a m p ; 凧& a m p ; レ『『サヨナラ〜』』

次回に続く!!

第15話 疾風迅雷の闘い（前書き）

遅くなりました・・・

あの二人が登場！

「……」

シャキツ…シャキツ…

俺は再び真備から視線を風に移します。苛立ってるのかさつきからずっと手に持った鉄扇　風神を開いたり閉じたりを繰り返していきます。

そして風の色のない瞳が双子の弟の真備を見ます。この危険な空気に俺は息を呑みました。そしてついに

シュタツ…！！！！

そしてついに…風が駆け出しました。ついに始まります。真備と風の双子陰陽師の闘い…。

疾風迅雷の闘いが。

「うがああああああああああああああああああ……!……!……!……!……!」

「……………!……!……!」

キイイイイイイン!!!!!!

折りたたんだ鉄扇が真備の拳を包んだ鉄のグローブとがぶつかり合います。

ですがパワーでは明らかに華奢な体をした凧より大きな体の真備の方が有利。真備がすぐに押し切りました。

「うがああああああああああああああああああ……!……!……!……!……!」

「……………!……!……!」

ブンッ!!!!!!

ですが小回りが利くのはやはり凧の方でした。押し切られた凧に真備は追撃と言わんばかりに拳を振りますも、凧はいとも簡単にそ

れを避けます。

ドグシッ！！！！！

そして軸足を地面に突き立てると真備の胴体に鋭い蹴りを繰り出しました。真備はそれを避けることができず正面から蹴りを受けます。しかし

「グルルルルル……」

風の蹴りは完全に真備を捕らえていました。普通なら気を失ってもおかしくない一撃。ですが真備はまったく動じてませんでした。

唸りながら風を睨みつける真備。その胴体には制服のスカートから伸びた風の細い脚が刺さっています。

さっきまでの真備と風とは違い、力と力だけで争いあう。まさに死闘。それが今、俺の前で展開されてしまった。そこにはもう俺達に踏みこめる場所はありません。

【風神】と【雷神】神どうしの闘いでした。

シャキンッ！……！！

そのとき真備の胴体に脚を突き立てたままの凧が手に持った風神を開きます。

その動きをさつき俺は見ました。あの風神を開くということは

「……！！」

ブンッ！……！！

あの風神を開くということは 真備を斬りにかかるということ。しかもあれの切れ味はさつきの刹那への一撃で立証済み。

刹那はギリギリのところでは避けたがあれの切れ味は凄まじいの一言。おそらく本家の日本刀並みの切れ味があると思います。

なるほど……そういうことだったのですか。

さきほどの蹴り。今、真備の体に刺さった風の脚は真備を捕らえるためだったようですね。さっきの刹那のことで学んでみたいですね。力と力だけというのはどうやら間違いだったようです。風は本能的にそれをやっただけですね。

さすがは風。戦闘訓練で鍛えた戦闘センスはさすがです。さすが真備のセンスも…さすがでした。

ガシッ…!!

さきほどまでとは違い瞳に色が無いとはいえ、無言で風を見つめる真備。そしてその片方の手には風の風神を持つ手がしっかりと握られていました。

確かに俺の思惑通り風と真備は能力に目覚めました。ですが風の風神、真備の雷神。似たような名前ですがその戦力は 攻撃力は段違いでした。

風の風神も一般人相手に使用すれば簡単に致命傷を与えることができます。と思います。

ですがそれはあくまで一般人に向けての話…。

協調が使える能力者相手ならその実力は天と地ほどの違い…。はっ

きりと言つと凧に勝ち目はありませんでした…。

「……………!!」

ガンッ!!

ですが凧は諦めません。脚を真備の胴体から抜き取ると、そのまま真備の脚に蹴りを入れてひるませ、その間に真備の手から風神を抜き取ります。

ヒュン!!ガシッ!!

さらに反対の腕で裏拳をしますが、この攻撃は真備の雷神をはめた右手に拒まれてしまいました。

腕の喧嘩で真備にかなうはずがありません。なぜなら真備は 武器を使わない喧嘩なら日向よりも強いからです。 武

【桜時学園喧嘩の強い奴ランキング】あれは学園の新聞部が作っているとはいえ、なかなか侮れない情報源でした…。

「…格闘戦は風に分が悪いですね。真備の破壊力はバカになりません」

「そつだな。俺もそう思うよレリエル」

完全なる傍観者となった俺と刹那は冷静にこの戦いを分析します。

確かに風の格闘センスは真備とそう大差ありません。2人とも平均してかなり高いです。

ですが現在の状態が最悪でした。ただでさえ女で小柄な風はそれだけでパワーに劣ってしまうところがあります。

しかも風はさっきの刹那との戦いで左肩を負傷。大量の血を流してしまってます。これは真備と同じですが、小柄で華奢な体の風。体内に流れる血も同じく少ないはずです。

ですから肉弾戦は明らかに風に分が悪いのです。

ブンッ！！

真備の拳が空をきる。ただでさえ雷を帯びたあのグローブ　雷神をつけた拳をつけたら凧じゃなくてもただじゃすまないでしょう。ですが凧はギリギリのところまで真備の攻撃を避けきってみせています。ですがもう大分体力を浪費しているはず。そろそろ凧は危ないでしょう…。

ブンッ！！

対して真備は拳が顔を狙ったものから体全体を狙ったものへと変わります。

それは、真備のどんな手を使っても必ず勝つという意志表示なのかもしれません。

「…止めないのか？」

そのとき刹那の凧とした声が聴こえます。そして刹那の問いは最もなことでした。

ですがそれは今の俺には辛い質問でした。なぜなら

「できればしていますよ」

そう、俺も風が暴走しだした以上風の暴走を止めたかったです。

最もそれだけの体力が残っていたらの話ですが…ね。

「！？…どういことだ…！？」

「…日向との戦いで左足を負傷。実は歩いてるのも辛いです。そして弓を引くのに必要な左手も怪我しています。今の俺には通常時みたいな矢の連射はできません。こんな状況であの中に入るのは命を捨てるのと同じですよ」

まあ、そういことです。

すでに日向との戦いで俺は全身怪我だらけなのです。

ですから、今の俺には真備どころか風すら止める力はない…といふことになります。

「…そうか。くっ!?!」

そして刹那。俺の言葉に納得した刹那は納得したように言葉を繋ぐと再び真備と凧のほうを向きました。

ですがその直後、刹那は凧に斬られたお腹を押さえます。刹那の方も、すでに怪我の具合がかなり不味いのです。この闘いを止められるはずがありませんでした。

ガアアアアアン!!!!!!

そのとき耳を疑うほどの鈍く重たい音が俺の耳に届いてきました。そしてそれと同時に何かが近くの茂みへと吹き飛ばされました。どうやら戦局が変わったようです。

「うがあああああああああああ!!!!!!」

真備の雄叫びが再び俺達の耳を貫きます。そんな真備の近くに凧は居ませんでした。

ガサガサ……!!

そして凧はというと、さっき何か飛ばされた茂みからフラフラと出てきました。そう……フラフラと。

制服はボロボロ、茂みに突っ込んだからか体の至る所に生傷が絶え間なくあります。そんな格好で、お腹を押さえ、足元をフラフラさせながら出てきた凧。

どうやら真備の攻撃が始めて凧の体を捕らえたみたいです。凧はお腹を押さえ、うずくまりながら真備を睨みつけました。

『 …… 』

2人がお互いを睨みつけます。おそらく、今の2人は自分達が血を分けた姉弟だということすら忘れているのでしょう。

俺はつい怒りのあまり歯ぎしりをしてしまいます。自分が招いた事態にも関わらず、この事態を止めることが出来ない自分に

シュタツ……ドゴツ……!

そのとき一瞬にして風が消えたかと思えますと、嫌な音が響きます。ですが目がいい俺は風の動きをしっかりと見ることができていました。

ですから俺は視線を移します。風が　そして真備が今どうなっているのかを確認するために……。

「……どうやら決着みたいですね」

俺が視線を移した先、そこでは風の拳が真備の顔をとらえています。ですけれども真備の顔が動くことはありません。風の拳が真備の顔に刺さっていても、真備の顔は微動だにしていませでした。

「……」

それでも変わらず色のない瞳で真備を睨みつける風。そんな風の睨みを真っ向から受ける真備は自身の頬に刺さった風の拳を無視する

と風の顔に手を近づけていきます。

そのとき、俺は真備の顔に一瞬だけ穏やかな顔が戻ったような気がしました

ピリッ…バタッ!!

それは本当に一瞬でした。

手を伸ばした真備は風の頬に触れると、雷を風の体に流し込んだのでした。体に流れる微量の雷に風は気を失い倒れました。

もしかしたら、真備は正気に戻っているのかもしれない。

俺は一瞬、そんな願望が頭に浮かびます。普通、理性を失ったら誰が誰だかわからなくなるものです。でも、風に対する真備の攻撃は明らかに相手に対する思いやりがあるものでした。

だから、もしかしたら

「うがあああああああああああああああ……!!」

ですが俺の浅はかな考えは再び木霊した真備の雄叫びに…破壊されました。

そして、俺は新たな仮定を導き出します。これは真備が自分の意志で凧を助けたわけではありません。無論、真備も本能的に凧を姉弟だと分かっているかもしれません。

ですが真備の中にはそんなものより納得がいくものが流れています。それは

「【羽前の血】ですか」

そうです。凧を助けたのは真備の中に流れる羽前の血の影響だったのかもしれない。人を助ける羽前の血の影響。だとしたら人に害を与える存在には容赦しません。

ということは

「まずいですね…」

「な…なにがだ？」

刹那は俺の呟きに少し怯えながら聞き返します。

やはり本質的にはよく分かっているみたいですが、薄々は気づいているみたいです。

俺達は今回の戦闘において、真備を…そして尻を傷つけています。それはつまり真備の敵だということを意味します。俺達は 真備の敵。真備の倒すべき相手なのです。

「…刹那。覚悟をしていたほうがいいかもしれません」

「レリエル？ いったいどうしたんだ…？」

「…いいですか刹那？ 協調が使えないあなたはかなうはずありません。そして協調ができるとはいえ、俺は怪我で弓の連射は出来ず、まともな戦闘はできません…つまり」

ピンチですね。

「うがあああああああああああああああ！…！…！」

俺がピンチだと口を開こうとした瞬間、真備が雄叫びをしながら襲いかかってきました。

「…っ!？」

パチンツ!!ザンツ!!

突如として襲いかかってきた真備に、俺は反射的に閃閃弓の矢を打ち込みました。至近距離。普通なら素早い日向の速さですら避けきる距離ではありません。ですが

ガシツ!!

「なっ!?!そんなバカな!？」

刹那の驚きの声は俺の心情を的確に表していました。

日向に受けた腕の痛みを我慢して放った矢。それを真備は “ 掴んだ ” のです。

並みの胴体視力じゃありません。魂狩を発動したことで様々な身体能力が高まってるのでしょう。

「…しくじりました」

唇を噛み締め、痛みが残ったまま弓の弦を引いたばかりの手を押さえながら俺がそう呟いたときでした。

「うがぁああああああああああああ！！！！！！！！！！！！」

光の矢を投げ捨てる真備。そして真備は雄叫びを上げながら、凧と同様の色がない目で俺に近づいてきます。

無理して矢を放った俺は痛みのみあまりその場を動くことができませんでした。

「レリエル！」

ガンッ！！

真備が振り上げた雷神をはめた拳を動けない俺に振り下ろします。ですが、そのとき俺の前に何か閃光が現れました。刹那です。

刹那は俺の前に立つと雪化粧を広げ真備の拳を受けました。ですが

ガアアアアアアアアアン！！！！！！！！

「ぐはっ…！！？」

真備の一撃は重すぎました。真備の拳をもろに受けてしまった刹那。彼女はそのまま吹き飛ばされ俺の後ろにある木に背中を打ちつけてしまいます。

急いで振り返る俺。そしてそこには木にもたれかかる体制の刹那が満身創痍な瞳で俺を見ていました。

「ぐう……」

薄目で俺を見る刹那。その目は俺に何かを訴えています……ですが。

「グルルルル！！ぐあああああああ！！！！！！！！！！」

再び雄叫びを上げる真備が今度はまた俺に標的を絞ります。その雄叫びの前に、俺はなすすべがありませんでした。

「……知恵理。どうやら約束は果たせそうにありません」

俺はふと先程、知恵理と交わした誓いが頭に過ぎりました。

今にも逃げ出したいと思いました。おそらく刹那のさっきの目もそれを訴えていたと思います。

ですが、俺は刹那を置いて逃げませんし、そもそもこの場を動くことができません。万事休すでした。

「グルルルル…」

うなり声をあげる真備が雷神をはめた拳を振り上げます。

俺はこの瞬間今日2回目の死を覚悟しました。

「逃げ…ろ…レリエル。逃げ…ろ…」

後ろから聞こえてくる刹那の声。ですが俺は目の前で俺を睨みつける真備の色のない瞳から目を離せられませんでした。

そしてついにそのときが来ました。俺の最後の時が。

ブンッ！！

真備の拳が俺に向かって振り下ろされます。俺は思わず目を瞑りました。

2回目の死を意識したから。2回目の死の恐怖を感じたからです。ですけれども

ガアアアアアアアアアアアンツ!!!!!!!!!!!!!!

「うっ……」

このピンチに颯爽とヒーローが現れました。響き渡る鈍い音。目をつぶっていた俺には何が起こったのか分かりませんでした。

俺はおそろおそろ瞳を開きます。すると辺りはさっきまでとは違い暗闇に包まれていました。

真備の体にはほとばしっていた電気がなくなっただけです。そして俺の目の前にいた人物も変わっていました。

そこにはグローブをつけた拳を振り上げている真備ではなく

「大丈夫ですか？レリエルさん」

「もちろん問題 nothing だろ？」

日本刀を携えた少年と、救急箱を両手に握りしめた少女がいました。まさかこんなにも早く誓いが果たされるとは思っていませんでした…。

「ええ大丈夫です。俺は平気ですよ日向。知恵理」

俺の言葉に2人はニツコリと穏やかな顔をします。その表情を見た俺はやっと自分が助かったことを知りました。

2度目の命の危機を救ってくれた人物。それは最初に俺を殺そうとした少年でした…。

第15話 疾風迅雷の闘い（後書き）

日「みなさん久しぶりiiiiiiiiiiiiiiiiiiii!!!」

知「わお ヒナ君。久しぶりの登場だから張り切ってるねえ」

レ「本当ですね。そして長かった真備と凧の双子陰陽師編もここで区切りとなるそうです」

真「俺達の活躍の場があ……」

凧「そうね。終わっちゃうのは残念ね。でも真備。よく考えてみなさい？あたし達、今回の話じゃああなたは叫んでるだけで、あたしは終始無言。セリフすらなかったじゃない？これっていったいどういうことよ？」

日「まあ暴走してんだから仕方ねえんじゃない？ちなみに俺の時は暴走してもセリフあったぜ？」

真&凧「ズルい!!!」

日「これが主役と脇役の違いだよ!!!はっはっはっはっは!!!」

作「はははは。じゃあ日向が自身に酔い、真備と凧の心をバキッと折ったところで次回予告。次回の時の秒針は

双子の闘いが終わった。だが本当の闘いはこれからだった。

気を失った凧は風がなびく草原にて1人立ち尽くす。そんな彼女の前に現れたのは…。

次回【治療のお時間】」

日「問題nothingだぜ!!」

作「ちなみに一応日向が主役だけど、真備と凧も脇役じゃなくて準主役みないな立ち位置なんだよ?だから真備と凧も日向とsideは同じくらいだな」

日「ガアアアアアン」

真&凧『ヨッシャアアアアアア!!!!』

作「あ。だけどおいしいところはほとんど日向が持ってくから。そこは主役なんだし譲ってやれよ?」

日「ヨッシャアアアアアア!!!!」

真&凧『ガアアアアアアン』

レ「…3人とも喜んだり、落ち込んだり忙しいですね」

知「というより作者さんに完全に遊ばれてるかな?あはははは…」

次回に続く!!

第16話 治療のお時間(前書き)

やっと一日目が終わります

第16話 治療のお時間

ある時、私は蝶になった

夢を見た

私は、蝶になりきっていたらしく、それが自分の夢だとは自覚できなかつたが、

ふと目が覚めてみれば、私は私であつて蝶ではない。

蝶になった夢を、私が見たのか、私になった夢を蝶が

見ているのか

きっと私と蝶との間には区別があつても絶対的な違いと述べるものはない。

そこに因果は成立しない。

莊子【胡蝶之夢】より

あたしも夢を見る。だけどあたしが見る夢に出てくるのは別の存在
なんかではない。

あたしが見る夢に出てくるのは未来のあたし。あたしにとって夢と
は明日のあたしのこと。

でもただ1つ言えること。それはあたしの夢には因果 “原因”
と“結果”が成立しているということである…。

風side

「ここは…?」

気がつくときあたしは広くて明るい草原のど真ん中に1人で立ちつく
していた。

ここがどこなのかは分からない。だけど敢えて言うなら、あたしは
ここが嫌いではなかった。

ヒュオオオオオン…

優しいそよ風があたしの頬を優しく撫でる。だけどあたしの頬はそんな風の感触を感じることはなかった。

無限に広がるような広くて明るい草原。辺りにはそれ以外には存在しなかった。そして頬に触れる感触がない。もうここまで来れば答えは分かっていた。そう…これは意識を失ったあたしが見ている

「“夢”ね…」

あたしの考えは100パーセント正しいと思う。

だけど…忘れないでほしい。あたしにとっての夢は大きな意味を持っていることを…。

「…本当に何も無いわね」

あたしはもう一度周りを見渡す。今までのパターンならここから別の場所に突然飛ばされるなんてこともあった。

でも、あたしが見渡した範囲には果てしなく続く草原のみ…。

珍しいパターンだった。

「予知夢じゃないってことかしら…」

「そのとおりです」

あたしの独り言に予想外にも答えが帰ってきた。女性の声、あたしはその声の主を確かめるために振り返った。

「こんばんは。若き羽前の姫…」

綺麗だった。振り返った先にいた彼女は本当に綺麗だった。地面まであろうかというくらい長い金色の髪、澄色の着物を着こなし、美しい顔立ち…。

美人だった。それもとてつもない。あたしは彼女の姿に思わず体が堅くなってしまうた。

「わたくしは【楓】と申します。あなた様を見守り、あなた様を守

護する者です」

「…楓？」

妙にかしこまった言い方をする楓にあたしは少しマヌケな声で聞き返してしまふ。【楓】その名前に聞き覚えはなかったが、なぜか知っているような気がした。

楓の話は続く。

「…姫。今の世はとても汚いです。人間が森を荒らしてしまつて…都には巨大な石の塊のような家が立ち…川は捨てられた鉄で満たされている…」

楓の言うことには同感だ。

だけど、あたしは楓が何を言いたいのかわからなかった。

「…ですが【あの方】の心は何も変わっていません」

楓が目を細めて悲しげな顔を浮かべる。その瞳の真意はあたしには知るすべはなかった。

「【あの方】の心は…わたくしと【紅蓮】が出会ったときと同じように純粋な心をお持ちのままなのです…」

そして楓はあたしのほうを向く。その瞳にはさっきまでの悲しげな表情はなく、どこか楽しげなものとなっていた。

「羽前の姫。 凧」

「は…はい…！」

あたしはとっさに背筋を伸ばしてかしまる。

だけど、そんなあたしを楓はニコニコと微笑んで眺めていた。

「そんなにかしまらないでください。わたくしはあなたのことをいつも見ていますから普段のあなた通りで接してよろしいですよ？」

「は、はい…」

頬を赤くしているあたしを優しく見る楓にあたしは一種の安心感を覚えていた。お母様との感覚。それに近いものを感じていたのだ。

そう考えているあたしに楓はもう一回微笑むと再び語り出した。

「近々、あなたの所に1人の男が来ます。名は…水城【時雨水城^{しぐれみずぎ}】と申します」

「…水城？」

「ええ…彼はあなたやあなたの弟である真備に多大な影響を与える男。そしてわたくし達がずっと帰りを待ち望んでいた方です」

「……………」

「姫。【あの方】は必ずあなた様にも大切な方となります。あなた様と真備様を成長させる大切な方に。だから」

そして、楓はそこまで言うところりと一回転してみせた。

するとその姿は一瞬にして変貌する。

「…っ！？あんたは！？」

あたしの目の前にいた楓。彼女は一瞬にして、元の美人の面影も見せない金色の獣となる。金の毛をなびかせるその姿。

尻尾が1…2…3…4……合計9本ある普通は見覚えがない獣。

ただどあたしには見覚えがある。いやありすぎるとも言っていていい。だってそれはあたしにとって

トラウマだったから。

「羽前家の守護妖【九尾】…あんただったのね」

そうそれは羽前家を護る妖怪の1人。そしてあたしの中に居座りあたしに予知夢を見せ続ける張本人だった。

「あんたは…あんたが…」

九尾は再びくるりと一回転する。すると九尾は再び楓となった。

だがあたしは目の前の女性に怒りを隠せない。あたしを苦しめ続ける存在：それが今、あたしの目の前にいるのだ。怒りを隠せるわけがなかった。

だけど楓があたしにしゃべらせることはなかった

「目覚めの時間です姫。あなた様の幸せをずっと願っております…」

楓のその声を聞いた瞬間。あたしの視界は真っ白になったのだった…。

「う…うん？」

あたしはさつきまでの映像とはまったく違うところで目が覚めた。目覚めたばかりかまだ頭がぼーっとして視界もぼやけている。

だけど、あたしは暗闇の中、栄える銀色の何かを見つけ出した。見覚えがありすぎるその銀色を…。

「…っ！？ここは！？」

その銀色を見た瞬間。あたしの視界は完全に回復した。真っ暗な森の中。風一つなく静かなこの場所。そして傍らには

「あ！！ナギちゃん気がついた？よかったあ…」

月明かりで輝く銀髪。淡麗な顔立ち。そしてその顔に似合う笑顔だった。

「知恵理？…痛っ！？」

「あ、まだ動いちゃだめだよナギちゃん。」

知恵理のその声であたしはあたしは痛みあまりとつさに手で押さえたあたしの肩に目が行く。

包帯で綺麗にぐるぐる巻きにされたその場所。それを見てあたしはやっと意識がはつきりするのだった。

「ちよっ！？知恵理！？あんたなんでこんな所にいるの！？」

あたしの突然の大声に知恵理は一瞬キョトンとした顔になるがまたすぐ笑顔になると言い切った。

「ナギちゃんの治療のためにだよ」

救急箱を抱え、ニッコリと笑顔を見せた天真爛漫な知恵理の言葉にあたし頭を抱えてため息をつくのだった。

「はあ…この天然娘は…あたしが言いたいのはそうじゃないのに…」

知恵理に聞こえないようにあたしがそう呟いたとき2つ目の声が出た。

「知恵理。尻のやつ問題 nothingに目を覚ましたか？」

そこには予想外 とは言い切れない少年が立っていた。

まあ知恵理がいるんだからこいつもいるのは当たり前か…。なんて
つてこいつらは2人でワンセットだからね…。

おっと。それはあたしと真備のことか…。

「日向…なんであなたがここにいんのよ？」

あたしがそう問いかけるとその少年 不知火日向はあたしの問い
に少し困った顔をして答えるのだった。

「うーん…それはおいおい話すとするから…今は治療のほうが先かな？」

「治療って真備の？」

「うんうん、マキ君は大きな怪我もなくてほとんど無傷だったよ？」

「はあ！？大きな怪我がなかったですって！？」

突然叫んだあたしの言葉に知恵理と日向がビクリと肩を震わせる。

「ただどあたしは叫ばずにはいられなかった。なぜなら真備は確かに肩に傷を受けていたはず。いくら羽前の血の力があるとはいえこんなに早く傷が塞がるはずはない。なのに傷がないですって！？」

「日向！？どういうことよ！？真備に傷がないって！？」

「はあ？真備に怪我がなかったんだから普通万々歳だろ？お前どうしたんだ？その口調だとまるで真備に怪我していて欲しかったな言い方だぞ？」

「そんな訳ないでしょ！？あぁ～もっ！？」

あたしは苛立ちを感じてしまう。なんでこいつらは分かんないのよ！！誰でもいいからこの状況を説明できる人はいないの！？

あたしは内心で葛藤する。だけどあたしの葛藤は突然響いてきた声に集結を迎えるのだった。今度こそ予想外な声に…。

「そこは俺から説明させてください。凧」

「あー！！レリエルさん！！」

突然あたしの後ろから現れたその声に知恵理は嬉しそうにその名前を呼ぶ。だけどあたしはその声に思わず後ろを睨みつけた。

「レリエル！！！！」

ブンッ！！パシッ！！

あたしの反射的に出された裏拳。だがあたしの裏拳はレリエルじゃ

ない別の誰かの手によって塞がれてしまう。

ポニーテールにした水色の髪。欧米人らしい白色の肌。そしてあたしを見る穏やかなブルーアイ。

「お、落ち着けてる。俺達はもうお前たちに危害は加えないから。な？」

そう。あたしの拳を止めた人物。それは数十分前まであたし達と対峙していた少女。刹那だった。

あたしは啞然としてしまう。なんで…なんでこいつらがまだここにいんのよ!?

あたしは刹那に押さえられた手の握り拳に力を入れる。だけどそのとき、あたしの怪我してないほうの肩に手が置かれるのだった。

優しく。温かいその手。あたしはその手の主を見る。そこにいたのは

「ちょっと日向!…なんで止めんのよ!？」

「落ち着けてる…慌てるのも無理ないけど」

「あんたバカア？この状況で落ち着けつて言う方がおかしいでしょ？あんた達がここにいるだけでもおかしいのに刹那やレリエルとも普通に喋るわで…あたしをパンクさせるつもり！？」

まくし立てるようなあたしの怒声に日向と知恵理は苦笑い刹那は顔をひきつらせレリエルは口元に手を当てて笑いをこらえる。

なんかまたあたしだけ仲間はずれのようなきがするわね…。

あたしが1人だけ仲間外れに思っていると苦笑いしつつ日向が口を開くのだった。

「はははは…じゃあ話をするとしますか…」

「そう…そうだったのね」

あたしは日向と知恵理そしてレリエルの戦いの話を聞き納得した。

よくよく見てみると日向と知恵理の肩にも包帯が巻かれている。ちなみにそこまで傷は深くないらしい。それを聞いたレリエルが安心したように息を吐いていた。

包帯やら湿布やらの治療道具は日向達が一度家に戻ってから持ってきたものであたしと真備が怪我すると予測して持ってきてくれたらしい。まったくこの2人は用意周到なこと…。

そしてあたしは真備の傷についてレリエルから話を聞いていた

「…傷が勝手に塞がっていったのですって？」

「はい。日向と知恵理が来てからまっさきに俺達はあなたと真備の治療に取り掛かりました。血を流しすぎていましたからね…ですが

「治療しようとしたとき、急に真備の傷が勝手に治っていったってこと？」

「はい。そうなります」

なれほどねえ…傷が勝手に塞がる。自己再生か。となると原因ははっきりしてるわね…。

あたしはレリエルの言葉でなぜ真備が大した怪我が残っていなかったのか原因を突き止めた。最悪の原因を

「…俺はこの傷についてこう考えます。真備は雷神を発動したことにより、おそらく体内の羽前の血の力が活性化したのではないでしょうか？これなら辻褃が合うはずです」

「確かにそれが一番しっくりくると思う。俺も同感だレリエル。あの血を舐めたときから普通の血とは違う味が」

「違うわ2人とも」

勝手に憶測を進めるレリエルと刹那。2人の話を真剣に聴き入っていた日向と知恵理もあたしの声に動きを止め、あたしに注目した。

あたしは膝枕をした真備の頬をさっと撫でると少し齒ぎしりをする。少しだけ使わせてしまったのだ。真備の力を

「日向。知恵理。あんたらどうせ真備に聴いてんでしょ？あたしのこと」

「え？ いや… オレハナニモシラナイヨ？」

「はわわわわわ！ ナギちゃん！ なななな何のことか！ わわわわ私には！ わわわわ私分かんないのよ！？」

「はあ… あんたらウソつくの下手すぎよ…」

片言になる日向。どもりまくりの知恵理にあたしは盛大にため息を吐く。まったく… あたしがそんな反応で気付かないとも思っているのかしらこの2人は？

あたしのジト目の視線に日向と知恵理はばつの悪そうな顔で息を吐き出すのだった。

「…【予知夢】だろ？」

渋々といった感じで日向がそっと呟く。その言葉にあたしは、ああやっぱり…と、またしてもため息をつくのだった。

「はあ… やっぱあんた達知ってたのね…。輝喜は？ このこと知ってるの？」

「…ああ。俺と知恵理。それに輝喜は真備からお前を夜の恐怖から解放してくれと頼まれたことがあるからな。俺達全員知ってるよ」

「…あの馬鹿弟。本当に大きなお世話よ。お節介にもほどがあるじゃない」

「ナギちゃん!!」

咎めるような知恵理の声が響き渡る。かなり珍しい知恵理の怒った声。最後に怒ったのは3年前。輝喜の眼帯をバカにした人に見せたあの怒り以来だ。

あれと同じくらいの叱咤。だけど知恵理の声はこれ以上、大きくなることはなかった。肩に置かれた日向の手によって

「…ヒナ君？」

「知恵理。今の風には怒鳴る必要はない。風なら問題 nothing だから…風なら分かってるから…」

最後に「だろ？」ってあたしに視線を向ける日向にあたしは1回大きくめに頷く。分かっている。分かっている…。あたしにはちゃんと分かっている。

真備があたしのことを本当に考えてくれてることくらい…ちゃんと分かってるんだから…。

本当に…お節介よ。真備。あなたには本当に感謝してるんだから…。

「…バカ」

あたしの呟きに日向と知恵理が微笑んだような気がした。

「と。そんなことはどうでもいいのよ！！それよりあなた達！！あたしの予知夢については知ってるのよね！？」

「うん。ナギちゃんのこと隅々まで全部知ってるよ？」

「…知恵理。あなた、その言い方いろいろ誤解を招くからやめなさい？それとその2人！！ニマニマしない！！レリエル！！あなたなんか顔見えなくても雰囲気でニマニマしてんじゃない！！」

「気にしないでください。俺は気にしません」

「あたしが気にすんのよ！？」

ゼーハー…ゼーハー…。こいつら…本当に今日会ったばかりなの？
息会いすぎでしょ？じゃなくて!？」

「あんたら…!!いい加減にしないと尻払うわよ!？」

あたしの少し殺気を込めた声にニマニマしていた日向とレリエルが
急いで顔を逸らす。これでやっと話ができるわ…。

あたしは今日、何度目になるかわからないため息を吐きだす。そし
て膝の上で少しチクチクする真備の髪を少し撫でると話し始める。
真備のことを

「…真備もね。あたしと同じなの。貰いたくもない力を貰って、苦
しむ被害者の1人なのよ」

「…?どういうことナギちゃん?」

不思議そうな顔で首を傾げる知恵理。この子って本当に鈍いわね…。
それとブルータス。あんたもか…。あたしは知恵理の横で一緒に首
を傾げる刹那を見て頭を抱える。そして対するように真剣な顔をし

た日向。レリエルも雰囲気を見る限り同じような表情だと思う。

やっぱり日向とレリエルには分かったみたいね。あたしが言いたいことが…。

「あたしは真備の力を知らないわ。だって真備も知らないんだから…あたしが知るはずもないわ。でも、これだけは言えるわ。あの力は危険。危険すぎるのよ…。あの力を使い続けると」

全員が息を飲む。あたしを含めた全員が…。でも、あたしにも

「あの力を使いすぎると　あたしにもどうなるか分からないわ…」

「分からない。ナギちゃん。分からないって…」

「仕方ないのよ知恵理。あたし達も真備の力は知らないし、そもそも真備もこの力を使ったことは…1回しかないし、正直どうなるかは分からないのよ…」

「ん？じゃあ、もしかしたら何もない場合もあるってことか？」

話に入ってきた刹那の言葉も最もだ。だけど、それだけはない。そ

れだけは絶対はない…。だって

「…真備がね。昔、その力を使ったのを唯一見てた人がいたわ。他ならぬあたしよ」

「凧が…か？」

あたしの言葉に驚いたような日向の言葉。でも、あのことことは思い出したくない。あのことことはあたしにとって、予知夢と同等なトラウマだから…。

「あのとき、あたしの前で真備は力を使ったわ。あたしには何が起こったのかは分からなかったけど…気がついたら全てが終わってたわ…」

「…結局。何が起こったのかは分からなかったんだろ？ だったら」

「刹那。あれはそれじゃ済まされないわ。真備の力は危険。危険なのよ…誰よりも真備がね…」

あたしはそう言うと、真備の頬をもう一度優しくなでる。夢に恐怖

するあたしと違ってこんなに穏やかな眠りやがって…。

心配させないでよね…。

「…凧。では真備がこんなに早く傷が回復したのは、その力が原因なんですね？」

「そうね。真備の力の正体は誰も知らない。誰もわからない。でも、真備の類い希なる運動神経も…自己再生能力の異常性も…全部、真備の力が原因よ」

ゆっくりと真備を撫でると真備の顔がさらに穏やかになった気がした。あたしも、その顔を見て笑顔を作る。

真備。あんたは無理しちゃダメよ。あたしもあんたも力をうまく操れないんだから…。無理だけはしないでね。

あたしの心の中の言葉に真備が「心配すんな…」という表情をした気がした。

「ふう…あたしの話はここまでね。今度はあんたたちが話す番よ」

そしてあたしは手に持った鉄扇を前に出した。

「これについて教えてくれるかしら？」

日向side

「…なあ風？」

「何よ日向。悪いんだけど今、話しかけないでくれる？重いから…」

本気で嫌そうな顔する風。その背中には風よりも一回りも大きい真備の姿がある。本当にどうやって運んでるんだろうな…。

ちなみに今は、レリエルと刹那。2人と別れて風と真備を家に送り届けているところだ。風に真備は俺が運ぶって言ったんだけど…。

こいつはあたしが運ぶの！！の一点張りだから仕方なく俺は妥協していた。だから、この映像が俺のせいじゃないことをはじめにご了承いただきたい。

と。そんなことしてる場合じゃなかった。

「…なあ時間は取らせないからさ風。1つだけ聞かせてくれ」

「…なによ？」

不機嫌そうな顔を隠そうともしない風。その風の横では真備を抱える風をオロオロとしながら心配そうにしてる知恵理。

確かに体重が倍近くもある人間を心配するのは当たり前だよな…。まあ風だから気にしないけど。

俺は少しだけ可愛らしい知恵理のその姿に苦笑いを浮かべると、さっきの情景を思い浮かべた。レリエルと刹那。2人との別れ際の映像

「なんで刹那を許したんだ？お前なら真備を傷つけた奴を許す訳ないと思っただけだ…。お前、隠れブラコンだし」

「殺すわよ？」

今、本気で殺気が飛んできた。

「…という冗談は後にして、あたしがなんで刹那を許したかって話よね？そんなの簡単よ。だって」

そのとき、凧が振り返る。その顔には笑顔があった。あのとき、刹那に見せた笑顔が…。

「だって あの子って昔のあたし達にそっくりだったじゃない。あんたと知恵理に救われる前。親の言いなりだった、あの頃のあたし達に」

凧side(10分前)

「さてと…魂狩。それに能力の話も終わりましたから俺達はおいとまさせていただきます」

あれからあたしはたくさん話を聞いた。能力者のこと、魂狩のこと、だけどやっぱり一番の衝撃はやっぱりあたし達が能力者だったって話だ。

あたしは風。真備は雷。それぞれ特異な力は違えど、あたし達がさらに人間から遠ざかったのだから衝撃的だった。

そして、話し終えたレリエルはそう言いつと立ち上がる。その声につられて刹那も立ち上がった。

「もう…行くのか？」

別れ際のレリエルに日向は少し残念そうに声をかける。対してレリエルのほうも日向のほうを向くとしつかりと頷いていた。

さっきの話を聞く限りじゃ一回は殺したいほど憎んだ相手なのに…今の2人からは友情すら感じられたわ。

あたしは知恵理のほうを覗き見る。知恵理もあたしと同じことを考えているのかニコニコと笑顔を見せていた。

「…おい風」

あたしがそう考えていると今度は刹那が話しかけてきた。

ちよっとだけ元気がなさそうな刹那の声に、あたしは刹那のほうを向く。するとやっぱりそこにはバツの悪そうな顔の刹那の姿。あたしはその表情に真剣な面持ちで刹那と対峙する。

そして刹那の口から出てきた言葉を、あたしはじっと黙って聞き入るのだった。

「風。その…悪かった。言い訳なんかしない。俺はお前たちを傷付けた。だけど、これだけは聞いてほしい。本当に…ごめんなさい」

「……………」

刹那の言葉にあたしは一瞬思考が止まってしまった。傷付けたのに謝るその姿。あたしは最初、なんて虫がいい話なんだと思った。

だけど、それは間違いだった。彼女の目を見たとき、あたしは思ったのだ。この子は昔のあたしだと…。

『……………』

刹那とあたしのやり取りに日向も知恵理もレリエルも、固唾を飲むような表情であたし達のほうを見ている。あたしはどうしていいか分からなくなつた。

こいつらは、あたしに何を求めているの？

あたしの心の中の疑問に答える人は誰もいないし。答えを知るものもない。

あたしは一度、深く深呼吸をする。そのとき、俺は1つの答えにたどり着いた。答えを知らない。だったらあたしの好きなようにやればいいんだ…と。

「刹那。ちよつとこつちに来なさい…」

日向の話を聞けばレリエルが日向と知恵理を襲つたのは本意じゃなかったらしい…。じゃあもしかしたらこの子も

このときあたしはあのと刹那の中にあつた怒りじゃない感情を読み取つた。

あれは…たぶん、あたし達を傷つけることに対する悲しみだったのではないのかと。それだったら刹那があたしと真備を襲つたのは本意じゃない。

そう思えるには充分すぎる理由であった。だったら今、あたしがしたいことはただ1つ。それは

「刹那。ちょっと痛いけど我慢しなさい」

パチンツ!!!

あたしの言葉に咄嗟に目を瞑った刹那。あたしはそんな刹那の頬を思いっきりひっぱたいた。

突然のことに呆然とする刹那。赤くなった頬を押さえ、キョトンとした顔の彼女にあたしは言っただった。

「…今ので今回の件はチャラよ。後で慰謝料請求するんだから覚えときなさい」

刹那に向けてのあたしの言葉。このとき、あたしは知らず知らず
に穏やかな顔をしていた。まるで昔のあたしを見ているようだったか
ら

刹那のはたかれたほうの頬をさすりながらあたしを見つめる。その刹那の表情にも、どこか優しい穏やかさがあつた気がした。

「ありがとう…風」

そのとき見せた、彼女の本当の笑顔は雪のように冷たいものじゃなく、まるで優しいお日様のような暖かい笑顔だった。

「じゃあ行きますよ刹那。ちなみに風。慰謝料は絶対に払いませんからそのあたりはよろしくお願いします」

「む。案外ケチなのねレリエル。でもあんた達のこと、絶対に突き止めて絶対に慰謝料払わせるんだからね！！覚悟しなさい！！」

「楽しみにしてますよ。それでは日向、知恵理、またお会いしましょう」

そう言った瞬間、レリエルの姿は忽然と消え去っていた。

2回目だからか、日向と知恵理は不思議そうには思っていなかった。そしてレリエルに呼ばれた刹那はもう一度あたしの方を見ると、微

笑んだ。

「真備が起きたら…すまなかったって、言っただいておいてくれねえか？」

その言葉にあたしはしっかりと頷いた。

「わかったわ。ちゃんとあたしが責任を持って伝えとくから…」

あたしの答えに満足したのか刹那は再び笑みを浮かべるとレリエルの後を追うように歩き出した。

あたし達はその姿を最後までしっかりと見送るのだった…。

こうしてあたし達の長い1日は終わる。だけど本当に大変だったのはこれからだった。翌日。あたし達は本当の恐れを知ることになる。

あの男。【時雨水城】の手によって

日向 おまけ side

凧と刹那の感動的？な別れから15分後。真備が目を覚ましたようである。

凧の背中で辺りをキョロキョロと見渡す真備。はっきり言っすべし映像だ。

「俺は一体…あれ？日向？知恵理？どうしてお前らがいるんだ？」

はあ…マジでめんどくせえ…。また同じ話をしないといけないのかよ。

まあ同じ話なんだしすぐに終わるか

ところが後に俺は俺自身の考えの甘さを知ることになる。

俺は忘れていた。真備の頭は凧ほどの理解力がないことを…。その

ため、それから1時間、俺達は必死に説明しなければいけないことを俺はまだ知らなかった。

俺達の長い1日はまだまだ終わりそうにない

第16話 治療のお時間（後書き）

刹那と和解した風・・・だが、風が見た夢が意味することとは？

さらに、レリエルと刹那を操る存在とは？

いよいよ、舞台は二日目に突入する。

輝喜は？悶は？水城は？

次回に続く

第17話 時の番人（前書き）

二回目の始まりです。

第17話 時の番人

レリエル side

キ ツ…

深夜の洋館。日向達と別れた俺と刹那は不気味な雰囲気の中この大広間に入りました。

大広間に入った俺達の目には大きな大理石の机が1つ　そして数個の椅子が見えました。

そしてその中の1つ。一番奥にある椅子に腰掛ける男を俺は見据えました。

「水城。只今戻りました」

「おう！！帰ったぜ！！水城！！」

その男 “時雨水城” は俺と刹那の言葉に、長い黒髪をたくしあげて額に手を置きます。

これは、水城が呆れたときにする定番のポーズ。すみません。少し軽率な言葉でしたね…。

「……お前ら、もう少し危機感を持って帰ってこい」

水城は相も変わらず無表情な顔で俺達に言葉を返します。

そして、そんな水城の言葉を聞いて口出したのは目の前で駄々っ子のように頬を膨らました美少女、刹那でした。

「え〜別にいいじゃん！！危機感を覚えることは何もなかったし〜
！！！」

刹那。水城が言いたいのはそう言うことじゃないと思いますよ？まあ、不器用な水城の言葉使いにも問題がありますけどね…。

それに、実際には俺もあなたも死にかけましたよね刹那？俺は思わず苦笑いを浮かべてしまいます。

そのとき、俺は水城の目が怪しく光ったように感じました。やはり水城の目は誤魔化せませんでしたか。

「…………刹那。腹はどうした？」

「っ!?!?」

的確すぎる水城の指摘に刹那の顔が驚きで見開かれます。

そして咄嗟に白い包帯で捲かれたお腹を隠すように両手を回した刹那は少し罰の悪そうに呟きました。

「…………風に斬られた」

その言葉を聞いた水城は一瞬だけ目を瞑りましたが、再び開けたときにはいつもの無表情で冷徹な顔を崩すことなく刹那を見ました。

ですが少しするとまるで興味がなくなっただのか一度顔を伏せ再度俺の方に目を向け言葉を出しました。

「……まあいい。それより報告をしろ」

「はい」

そして俺は水城の言葉にほっとしている刹那を横目に今夜の報告を
始めます。

全ては俺自身に与えられた任務のため。そして、誰よりも日向達の
ため、知恵理のために

「まず最初に、俺も刹那も無事に“ノルマ”を達成させることに成
功しました。日向、凧、真備の3人は無事能力者として目覚めまし
た」

「……………」

水城は俺の報告に表情を崩すことなく聞き入ります。

この場にいる2人の幹部も同様に俺の報告に耳を傾けていました。

「双方の損傷は軽少。後々あまり問題ありませんが後で“日向達も
含めて”医療局局長の【ゲイル】さんに治療をお願いしたいです」

「……ゲイル？」

俺の言葉の後すぐに水城は右側の席に座る1人の男性幹部に声をかけました。

その男性幹部の特徴は金髪で年は20代半ばくらい。そして無駄な筋肉がなく引き締まった体を持つこの組織で俺が最も信頼する御仁の【ゲイル】さん。

ゲイルさんは水城の言葉にゆっくり頷きます。

「ワカリマシタ」

時の番人の中で1番フレンドリーなこの人は普段は陽気そうな片言の声で話しますが、今は真剣な片言の言葉を出しました。

俺はそんなゲイルさんの言葉を聞いて、この部屋にある少し穏やかな空気に安心しつつ、言葉を続けました。

「…日向は別格としても、真備。凧の2人もなかなかの能力の持ち主でした。やはり羽前家の出身者だけはあると思います。…です

が、水城。ちょっとしたイレギュラーが起きました…」

「……イレギュラー？」

俺は水城、ゲイルさん、そしてもう1人の幹部である技術開発局長のデモンさんの顔を見渡し 報告しました。

今回の1番大きな手土産を

「では報告します…真備が“チューニング協調”するのを確認しました」

『 ……！…！』

少し溜めてからの俺の言葉にゲイルさん、デモンさんの目が見開きます。水城も無表情のままとはいえ、どうやら驚いているみたいです。

それほどまでにこれは驚きでありイレギュラーな出来事だったので

「……確かなのか？」

俺の言葉が信じられないのか今度は刹那のほうを向いて水城は確認をとります。そして水城と目を合わせた刹那は俺の言葉が事実であるという証明として黙って頷きました。

「……………」

そして再び黙ってこちらを見てくる水城。ですが、その瞳にはもっと詳しく説明しろと書かれています。

そんな水城の瞳に応えるため、俺はさらに詳しく説明をするために口を開きました。

「改めて報告させていただきます。俺と刹那はこのことを2人共確認しました。真備の魂狩“雷神”に雷がまといそれを自在に操っているのも確かにこの目で確認し確信も持っています。俺は少なくともAランク（上級）の能力…結論を言うと、彼は魂狩の扱いに関する【天才】だと俺は考えます」

「……………」

俺のその言葉を聞いた瞬間、水城は椅子から立ち上がり大広間の扉に向かいます。

気のせいかいつもは無表情な彼の顔に少し笑みが浮かんでいるようにも見えました。

まあ…それはありませんか。

水城は普段からいつも一緒にいる刹那にすらあまり表情を見せない人間。

おそらく水城の醸し出す雰囲気俺をそう感じさせたのでしょう。

「水城？」

刹那の呟きに水城は扉の前で振り返ると

「……………計画を早める」

そう呟いて自らがいつも着ている死神を思わせる漆黒のコートをなびかせながら自らの体を深く隠すようにコートの紐を堅く結びなおしました。

俺はそれが意味することを一瞬で読み取り言葉をかけます。

「あなたのノルマですね」

「……………ああ」

俺の言葉に水城はそう一言だけ応えると、コクリと頷きました。その言葉に俺は悟ります。明日は俺にとって　そして日向達にとって大変な日になることを……………。

どうやら水城は明日行くつもりなのですね。

学校……………【桜時学園】に。

でしたら明日の俺は水城の案内役ということになりますね。

まったく…やれやれです。明日は眠いという理由で学校を休むわけにはいかないようですね。

俺は水城の気まぐれに

大きいため息を吐き出しました。

「ゲイルさん。明日早くに学校にいかなければいけなくなりました。治療を早くお願いします。…早く帰って寝たいです」

現在深夜一時。寝不足の顔を日向達に見せて疑われるわけにはいけませんからね。

「 I see…ワカリマシタ。“レリエル”」

ゲイルさんの優しい声に俺は安心して体を預けました。

「デハ…」

「お願いします。ゲイルさん。いえ…ゲイル先生」

そしてゲイル先生は彼自身の手から出される温かい光を俺に当てるのでした。

温かい…まるで、俺を包み込むような光。その光の前に俺の傷はみるみる塞がっていきました

日向side（翌朝）

「眠い…まったく寝たりない…問題nothingじゃねーよコン
チクショー…」

ム力つくくらい清々しく、気持ちがいい朝。登校途中の俺は欠伸を隠すことなくそう呟いた。

実際ただでさえ低血圧な俺には睡眠時間5時間はかなりきつい。隣に知恵理がいなかったら、そのまま、歩いたまま寝そうな勢いである。

その証拠に、片目は自分の力では開けないし、今朝も鏡を見たら目の下にうつすらと隈もできていた。

ちなみに言わせていただくと

「俺の1日の平均睡眠時間は14時間だ」

「…ヒナ君。いきなりどうしたの?」

しまった。寝不足でついつい言葉に出してしまったようだ。

こりゃ冗談抜きにマジでヤバいかもしれない…俺本当に大丈夫か?

「なんでもないよ知恵理」

「そう?」

この後始末のために俺は知恵理にそう言つと知恵理はまたしても可愛らしく小首を傾げる仕草で俺を見つめてきた。小首を傾げ、銀色の髪の毛が肩のあたりで柔らかく揺れる。その姿は反則だった。

なんだこいつ…無茶苦茶可愛い。可愛いすぎる…。

「ヒナ君。ただでさえいつも必要以上に寝てるのに…睡眠時間足りてる？」

「あ、ああ…問題 nothing」

俺は知恵理の小首を傾げる姿がツボなのか？とか考えていると、俺の顔の下から俺より背が低い知恵理が覗き込んでくる。

やめろ…やめてくれ。ここで上目遣いとかマジで死ぬ。俺を萌死させる気が貴様…。

このとき、俺は最大の敵は俺の目の前にいるこいつだということを知った。

ちなみに必要“以上”と言ったことは気にしない。だって、誰よりも俺自身が認めていることだからだ。

「そついえばヒナ君“肩”どうだった？」

俺が必死に悶えているとき、俺の顔から目はずした知恵理がそう言いながら俺の後ろ肩を覗き見る。

解放された……。と心の中で思ったのは内緒だ。

でも確かに知恵理がそんな興味を持つのは当然である。

俺も俺自身の傷口を朝早くに知恵理に叩き起こされたとき、無意識に触ったが、疑問に思わずにはいられなかった。なぜなら

「知恵理と同じ。朝起こされた時には傷1つ残ってなかったよ」

そう言っただけ俺は昨日レリエルの放った矢が当たったあたりをポンポンと叩く。

だがそこを叩いても俺はまったく痛みを感じることはない。俺が朝起きた（起こされた）時には肩口の傷は一切なくなっていたからだ。

「昨日のことが夢だったら良かったのにな……」

「うん。でも実際は違よヒナ君…。あれは間違いなく現実だったよ」

知恵理の言葉に俺は相槌をうつ。朝、傷がないことを知った俺は確かめる方法を探した。そして、1つだけ心当たりがあった。

【魂狩】

(ソウルテイカー)

それは昨夜知ったと思われる俺の魂の姿。もしかしたら昨夜のことは夢かもしれないと思っただ俺は、それを発動させることでそれを確かめようとした。だがしかし

《…来い【紅翼】》

そしてその結果。

気付いたときには、俺の右手には銀色に輝く刃が握られていた。その刃は俺の淡い期待を裏切ってくれた証拠であった。

形がないほど粉々に

「とりあえず学校に行って真備と凧に確認しないと。あと輝喜にも…」

「コウ君？」

輝喜の名前を出すと知恵理は再び小首を傾げる仕草をする。なぜここで輝喜の名前を出したのか？

それは俺には確かな確信と疑惑があったからだ。だけど、何より輝喜が心配だったからである。

輝喜は あいつは俺達と似通った存在だから、もしかしたら俺達と同じかもしれない。

なぜならあいつは

「知恵理。輝喜の運動神経は俺達並み動体視力と握力は俺達の中じや随一だ。これが意味すること…分かるか？」

俺達と似通った存在。つまり“驚異的運動能力”を輝喜は持っているという事。これはあることを指し示していた。

知恵理は考えるような仕草を見せるが一時すると苦笑いを見せている。まあ天然娘にはちよつときつかつたかな…。

俺は一度深く溜め息を吐くと知恵理にも分かるように独り言のように呟いた。

「…能力者であるための第2条件“驚異的運動能力”」

「…あ!」

どうやら気づいたみたいだな。

「そうだ。輝喜は能力者である確率が高い。下手をすると昨日のうちにレリエル達の仲間の1人が接触してるかもしれないということだ」

俺の言葉に知恵理は肩を震わし顔をうつ伏せてしまふ。両手で自分の肩を抱く知恵理。たぶん昨日のことを思い出し出してるのだろう。

そんな知恵理の姿に俺は安心させる意味も込めて知恵理の髪をそつと撫でる。彼女に触れるとき、そのとき俺は一番優しい俺になれるのだ。

「…大丈夫。大丈夫だよ知恵理。あのレリエルだぜ？刹那だって、あんなにいい子だったんだ。もし輝喜があいつらの誰かに出会っていたとしてもきつと大丈夫だよ」

「…ヒナ君」

どこか清々しい顔で俺の手を取る知恵理。その仕草に俺は知恵理の意図をすぐに読み解いた。

「ああ。じゃあまた遅刻ギリギリみたいだし、早く学校に行くか！

」

「うん！」

俺の言葉に元気よく応える知恵理。その笑顔を見た俺は繋がれた手

をギュツと握りしめると一気に学校に向かって駆け出すのだった。

俺の親友達。そしてこれから俺達と大きく関わりを持つことになるあの2人

“墮天使”と“死神”が待つ学園へと

第17話 時の番人（後書き）

作「今日は海の日」（これは2010年7月19日の投稿作品です）

「

凧「そうね、あたしも早く海に行きたいわ」

知「うん！！私も今年は海に行きたい！！ね？ヒナ君！！」

日「……」

膝を抱え込み部屋の隅で暗くなっている日向。

日「ヒナ君？」

凧「…あんだ。一体どうしたのよ？」

ヒ「……………
ないぞ！？
へ？いいいや！？ななな何でも

知「…本当に？」

ヒ「も…も…問題nothingだ…！」

凧&mp;作「『嘘だろ』でしょ？『？』

日「な…何のことだよ?」

凧「あんた動揺しすぎよ? いったいどうしたっていつのよ?」

日「も…問題 not ill age だ」

知「…ヒナ君。動揺しすぎて nothing の綴りが間違ってるよ?」

凧「それじゃ【問題ない】じゃなくて【無農薬問題】になるじゃない? その年でボケが始まったんじゃない?」

日「…はて? 凧ばあさんや、僕は誰じゃったかのう?」

凧「本当にボケんじゃないわよ! ? ていつか誰がばあさんよ! ?」

知「……………あ! !」

日「(ピクッ! !)」

突然の知恵理の閃きに日向がビクつく。

凧「…??…どうしたのよ知恵理??」

日「ブンブン…! !ブンブン…! !ブンブン…! !」

必死に×だと知恵理に訴える日向。

知「…あれ。ヒナ君？」

知（どうしたんだろヒナ君？あんなに必死に…そうか！！ヒナ君の唯一の弱点だからみんなにも知って貰って弱点克服したいんだね！分かったよヒナ君！！）

日（なんでだろう…。寒気が止まらない。知恵理のやつ何か勘違いしてないか？まさか“あれ”をあかす気じゃないよな…。止めてくれ！！それだけは絶対！！）

知「うん分かったよ。ナギちゃん。実はヒナ君はね」

作「いいところなんですけどここで次回予告。次回の時の秒針は学園に来る日向と知恵理は真備と輝喜、悶と出会う。一方そのころ凧は悩んでいた。

屋上で1人膝を抱える凧。そんな彼女の前にあの人物が現れる…。

次回【雨滴る死神の男】

日「問題 nothing…じゃねーよ！！何喋ろうとしてんだ知恵理
いいいいいい！！」

知「はえ？ヒナ君。どうしたの??分かった！！ヒナ君の弱点をみんなに知られるのが恥ずかしいんだね！！」

凧「なんですって！！日向の弱点！！それはぜひとも聞きたいわね

「!!」

日「間違ってるじゃない!!間違ってるじゃないけどなんか間違ってる!!」

次回に続く!!

第18話 雨滴る死神の男(前書き)

学校にあの二人が現れます。

第18話 雨滴る死神の男

日向side

タッタッタッタッ…

『はあ…はあ…はあ…』

学校の廊下を全力疾走する俺と知恵理。昨日とは違って遅刻ギリギリではないが、なぜか俺達は走っていた。

遅刻ギリギリじゃないからか廊下にはまだたくさんの生徒が居て、俺と知恵理を好奇心な目で見てくる。

でもそんなこと気にしてられるか！！俺は気にせず走りつづける。あいつが…輝喜が心配だ。無事でいてくれよ…！！

ガラッ…！！

『『はあ…はあ…はあ…』』

手を引いていた知恵理と一緒に膝に手をついて、息を整える。何だか冗談抜きで昨日の映像と被ってるな…。

俺は顔に出すことができないから、思わず心の中で苦笑いしてしまう。そのときだった

「あれ？お2人ともどうしたんですか？」

その声に俺と知恵理は膝に手をつき、下げたままだった顔を上げる。聞き慣れた声ではないものも、聞き覚えがある声。

少しだけ違和感がある日本語。そこにいたのは

『『悶（モン君）』』

「はい。そうですよ？お2人も慌ててどうしたんですか？」

昨日と同じ優しい声に俺と知恵理は少しだけ呆然としてしまう。いわゆる拍子抜けしてしまったわけだ。

輝喜のことが心配で、心配で、心配で、周りの目を気にすることなく急いで学校に来たときに、最初に見た顔がこんな屈強のない顔ならそりゃ拍子抜けもするもんだ。

俺は少し落ち着くために一瞬だけ、目を閉じる。そして目を開け、穏やかな顔で悶を見た。

「おはよう。悶」

「はい。おはようございます日向さん。三度目になりますけど、どうかしたんですか？」

三度目だからか、少し呆れ顔が入った悶。そんな悶の問い掛けに、俺は周りにいるクラスメートにも気付かれないように心の中で、ニヤリと笑みを浮かべた。

すまん知恵理。お前の犠牲は決して無駄にはしない！！

「ああ。実はさあ知恵理が今朝、輝喜が一人でタップダンス踊って階段から落ちたなんか言い出してさあ」

「ひひひヒナ君!？」

「たぶん夢だと思うんだけど、どうしても言うから…走って学校に来たんだ」

「ふえ…ふえ…私。そんなこと言って…ふみゆ!？」

「はわわわ」と慌てた様子の知恵理の唇を塞ぐ。もちろん“手”でな。俺に口をふさがれて、苦しそうな様子の知恵理。だが、そんな知恵理の味方はこの教室にはいなかった。

『『またやったんだ。姫ノ城さん…』』

クラスメイト全員がジト目で俺に唇を塞がれた知恵理を見る。残念ながら、これがクラスメイト いや、学校全体から受けている知恵理の評価である。

さっきのクラスメイト達の発言で分かるとおり。実は知恵理がこんなこと（今回は誤魔化すために俺がついた嘘だけど）を言い出すのは結構日常的なことである。

その証拠が以下のクラスメイト達の発言だ。では、その一部始終をどうぞ

「姫ノ城さん。またやったんだね…確か、この間は羽前君が巨大インコに食べられたとか言ってたよな？」

「ああ。確かあのときは羽前姉と美濃が悪乗りして、羽前弟を無理やり監禁したから、姫ノ城が本気で信じたんだよな…」

「そのときも一番の被害者は不知火君だったよな…。不知火君。姫ノ城さんのことに関してだけは無茶するから…」

「顔はアイドル以上なんだけどなあ…あの天然にはどうしてもついていけないよ…。俺、マジで不知火のこと尊敬するわ」

「うん。不知火君すごいよねえ。この間のテストの順位も一桁だったし、この間の体育のサッカーのときも羽前君や美濃君と沢山ゴール決めてたし、本当に弱点といえば、姫ノ城さんに甘いことだけだよなえ…」

「本当だなあ…。頭脳明晰、運動神経抜群、おまけにイケメンときて…。なんでいつも寝てるやつがあんなにできるんだか…。永遠の謎だ…」

「『はあ…』」

g. なぜか、俺の株が急浮上したが、まあそこは問題 nothing 会得だから気にしない。

で、問題なのは知恵理のほうだ。実は俺が悶についたこの嘘みたいなの。実は案外、嘘でもない。

知っての通り、知恵理はドがつく天然だ。本人がいくら否定してもこれは紛れもない事実。まあ、それ故に俺が苦労するだけだな…。

「うう…」

涙目の知恵理が俺を睨んでくるが、そこはスルーさせてもらおう。むしろ可愛いからたちが悪い。

俺は可愛く睨む知恵理の唇を解放すると、そのまま髪をサラリと撫でる。

ちなみに知恵理はいい子だから、俺が手を離しても俺の言葉を否定はしない。俺が何故この嘘をついたか分かっているからだ。まあ、睨んではいるけど。

「…そんな顔すんなよ知恵理。後でパフェ奢ってやるから」

「分かった ヒナ君。ゴチになりまーす」

一瞬にして機嫌がよくなる知恵理。伊達に幼馴染やってるわけではない。こいつのご機嫌とりはお手のものだ。

実際。ここでご機嫌とりしとかなないと俺の飯がなくなる。家で一番

力を持つ者は台所を預かる者だと言っけど あれは本当だ。^{マッ}

「えへへへ」

とにかく知恵理の機嫌が治って本当に良かった。これで、俺は明日を掴むことができたからな

「おっと、話がズレたな…。すまん悶」

「気にしないでください。僕もおもしろおかしく聞かせていただきましたから」

俺の言葉にニコニコしながら応える悶。その横でもニコニコしてる人間がいるが、気にしないでおう。

俺は悶の横にいる黒い眼帯をしたその人物に微笑むと悶に向き直った。

「まあ、知恵理がどうしても輝喜が心配だって言うから…。だから、輝喜探してるんだけど…。悶。輝喜どこにいるか知らないか？」

俺の問いに困ったように言葉を濁した悶は目を泳がせて、最終的に悶の横で俺と知恵理にニコニコと微笑みかけている人物に視線を移す。

どうしたんだよ悶？

「え…えーと…」

まるで小動物みたいにキョロキョロと俺を見たり、横の人物を見たりの悶。その姿を俺と知恵理は不思議そうに眺める。

本当にどうしたんだ悶？どうしてそんな困惑した顔するんだよ…？

俺達には悶がなんでそんな表情をするのか分からなかった。

「…仕方ないか。やっぱり、気付かないよな」

突如、聞こえてきたその声に俺と知恵理は振り返った。もちろん聞き覚えがある声だったからだ。

「よお真備。おはよ」

「おはようマキ君」

振り返った先、そこにいたのはその声の正体。真備だった。

俺はとりあえず真備の体全体を眺める、見た目では分からないが、どうやら体全体の傷は癒えているみたいである。そして、俺はもう1つ真備に聞きたいことがあった。

それは

「なあ真備。輝喜、どこにいるか知らないか？」

俺が問い掛けた瞬間、真備の顔が少しだけ歪んだ。その顔は呆れ顔なのか、はたまた害虫を噛み締めるような顔だったのか。そのときの俺には分からなかった。

「はあ？日向。お前なに言っただよ…？」

「ただど、真備の口から出てきたのは「こいつ何言っただ？」と少しバカにしたような呆れ声だった。

「あ…え？なに言っただって…。真備。俺はただ輝喜がどこにいるか聞いただけだぜ？それが」

「だ・か・ら！！それがなに言っただって俺は言っただよ！？お前ら…もう一度あつちを向け！！そして目を見開け！！あそこにいるのはいったい誰なんだ！？」

「…なんだよ？まさか、俺達が振り返った先には輝喜が居るっていつのかよ？バカだなあ真備。そんな嘘に俺が引つかかるわけないだろ？ほら？振り返っても誰も あれ？」

「あははは もうヒナ君 マキ君の言うこと、そんなすぐに信じちゃ ほえ？」

振り返ると、真っ黒な眼帯をつけた少年がニコニコと微笑んでいた。あれ？さっきまで輝喜いたっけ？

「わあ！！すごいコウ君！！どうやったの？ねえ今、どうやったの？」

「くすくす どうせ俺は影が薄いですよ 最近も話に出て来ませんでしたからね くすくす くすくす くすくす くすくす」

イリユージョンだと思って目を輝かせている知恵理。その前で、黒い笑みを浮かべる輝喜に俺は顔をひきつらせるのだった。

ごめん輝喜。マジで気がつかなかったわ。だって何故かは分からないけど輝喜じゃない気がしたんだもん…。

俺は苦笑いを隠すことができなかった。

「あ」

そのとき、黒い笑みを浮かべる輝喜の横からたった一言の言葉が放たれる。

そこまで大きくない声だったが、俺達は苦笑いしたり、目を輝かせたり、黒い笑みを浮かべたりとなんだかんだで、この場にいた全員が言葉を出せずにいた。

そのため、悶の口から出たその声は予想以上に響き渡ったのだった。

「…どうかしたか悶？」

懐疑そうな目で真備が悶に尋ねる。その問い掛けに悶は少しバツが悪そうに視線を反らすと、頭を数回ポリポリと掻いて口を開いた。

「すみません皆さん。僕、ちょっと用事があるのでこれで失礼させていただきます」

「は？おいおい悶。用事って」

悶の言葉に真備の懐疑そうな顔がさらに深まる。かくうえ俺達も真備と似たような顔をしてると思う。

だが、悶はそんな俺達の様子を気にとめることなく「急いでいるので…」と言葉を俺達にかけると足早に教室を立ち去っていくのだった。

「…あと少して朝のホームルームなんだけどなあ」

悶が教室を出て行くときの後ろ姿を俺達はただただ眺めることしかできなかった。

突然の悶の行動に、静まり返る俺達。最後に真備の声だけが突如として悶が出て行った教室の扉を眺めている俺達の耳に虚しく響くのだった。

???side

PiPiPiPiPi…

「…こちら桜時学園。俺です。…はい準備は完了いたしました。…はい。…はい。了解しました。では、決行いたします」

…Pi

普段なら騒がしい廊下。だが、ホームルーム前だからか、1人として人がいないそこは殺風景な場所と化していた。

そんな廊下にて、何処かへと歩く1人の少年が携帯を切る音が木霊する。普段の彼とは違い、目を鋭くとがらせたその表情は見る者すべてを切り刻むくらいの鬼気がある。その少年の名前は

【李・悶】

「…さて、賽は投げられた。これから君がどうなるか楽しみだよ」
【紅翼の天使】

物語は日向達の知らないところで、確実にそのネジを動かし始めた。

風side

ヒュオオオオオン…

西から吹く風があたしの頬を伝い、そしてまた遠くへと誘われていく。その風の気持ちよさにあたしは虜になっていた。

今、あたしは学園の屋上に来ていた。なぜなら、ここはあたしのお気に入りの場所だからだ。

あたしは時々一人でこの場所に来る。もっぱら、予知夢を見た次の日、ブルーな気持ちになっているのを知恵理や日向、輝喜に悟られないために来たりしていた。

まあ、あいつらも気付いてるみたいだけどね…。

「……………」

あたしの心の中は空っぽだ…。ここにくるとよく思う。

知恵理は輝きを持っている。あたしやみんなに振りまくあの笑顔には人の心を暖かくする何かを感じた。居心地よかった。

輝喜は何事にもめげない強い意志を持っている。目のことを悪く言う級友はたくさんいる。だけど輝喜はいつも底抜けに明るく笑っている。とても強かった。

真備は誰にも好かれる純粹さを持っている。運動神経と元気な所しか取り柄がなくても、真備の純粹な心に惹かれて多くの人が集まった。うらやましかった。

そして日向 あいつは自分自身を一番分かっている。誰よりも自身を分かっているからこそ…あいつは誰よりも強いのだ。あたしはそんなあいつに憧れた。

だけど…あたしには何もない。日向達には気になることは最後まで調べないと収まらない興味本意の塊だと言われたことがある。

でも現実はそのじゃない。あたしはあたししか持たない何かを欲しているのだ。

そのために気になることをあたし自身の魅力にしようとして一生懸命調べる。そして、中には夢中になったものもあった。

だけど、あたしはまたすぐに飽きてしまう…。

そうしてあたしは何度も自分自身を捨ててきた。あたしは飽きやすい自分が嫌いなのである。

「【魂】か…」

ふと、あたしは昨日の日向の話を思い出した。

『魂狩や能力はその人しか持たない。つまり、魂狩や能力とはその人自身なんだ』

その言葉にあたしは納得してしまった。あたしの能力は…【風】

その能力の名前を知って、あたしはまさしくあたし自身だと思った。あたしの中には風のように何も無い。

あたしは“風”だった。

「…気持ちがいい風ですね？風」

あたしがそう結論出したとき不意に聞き覚えのある無機質な声が耳に届いた。

忘れるはずのない。昨夜初めて聞いたばかりの優しい声だった。

「ああ、レリエル。なんだあんただったの…」

「あれ？驚かないんですね？少し予想外な反応です」

あたしの呟きに彼…。レリエルは昨日とまったく同じ格好で座っていた屋上の一番高いところにある給水タンクから飛び降りた。

「おはようございます。8時間ぶりですね」

「…まあ、そうね」

あたしはレリエルの言葉に相づちをうち、軽く流す。正直、驚きではあったが今はあまり人と関わりたくなかった。

だけど、あたしの思惑を知るはずもないレリエルはあたしにさらさら話かけてきた。

「傷はどうですか？どこか痛むところとかはありませんか？」

「ええ、朝起きたらかゆみすらなかったわ」

「…それはよかった」

こいつは本当に安心したような声を出すからたちが悪かった。

もう少し…そう、あからさまにわざとらしく皮肉ればあたしは何の躊躇もなく邪険にするのに…ね。

「…ねえあんた？なんでここにいるのよ？」

「ちよつと、学校見学を求めている人がいまして…その案内です」

そう言つとレリエルは肩をすくめる。だけど、あたしはレリエルのその言葉に思わず顔をしかめてしまった。

学校見学？こいつが案内するってどういふことよ？

だけど、あたしの心の疑問はすぐに答えが導き出される。最悪な形で

「…っ！？誰！？」

「…どうやら俺の待ち人が来たようです」

今まで感じたことのないとつもない気配に、あたしは後ろを振り返った。

普段のそこには安全のためのフェンスがただ並んでいるだけ、本当にそれだけならよかつたんだけど…。

現実とは違っていた。

バサッ…

屋上に吹く風がフェンスの上に立つ男の服を揺らす。

レリエルとほぼ同じ色の黒いコート。髪は背中の中あたりまで届く黒髪。そして、まったく崩さない無表情な顔…。

格好と今の状況を合わせるとまるで天から降りてきた死神のようだった。

「……レリエル」

「水城。時間通りですね」

あたしはレリエルの言葉に耳を疑った。「もしかして……」という感情が抑えられなくなった。

「あんた……だれ？」

あたしの問いに男はまったく表情を崩すことなく答えた。あたしの予想通りの名前を

「……俺は【時雨水城】しぐれみずき時の番人クロノスの現最強の能力者……通称【雨の死神】だ」

物語の秒針はまた新たな時を刻んだ。

第18話 雨滴る死神の男（後書き）

作「はい。じゃあ今日は新企画！！ラジオ放送風あとがきをしていきたいと思いまーす！！ゲストはこのお2人！！」

輝「こんにちわ〜 美濃輝喜です」

刹「おう！！刹那だ！！よろしく頼む！！」

作「というわけで、以上の作中ではまったく接点のない2人です」

輝「しくよろ〜！！」

セ「おう！！」

作「さて、お互いの自己紹介が終わったところでさっそくコーナーに入っていきたいと思いまーす」

輝「あははは〜 唐突ですね〜」

作「【羽前凧？憂鬱】」

刹「明らかなパクリがきたあああああ！？」

作「ではコーナーの説明。このコーナーは凧に相談しようというコーナーです。ではさっそくお便り行きます」

凧「いつでもいいわよ」

刹「せめて…解決方法だけでも教えてやれよ」

輝& amp ;刹《《じゃないと哀れすぎる…》》

凧「え〜ダルいわね〜じゃあ、ストレス発散に真備でも殴つとけば？はい解決!!」

輝& amp ;刹『『ぜんぜん解決してねええええええええええ!!！！
????』』

作「はい、ありがとうございました。では、次のコーナー…の前に次回予告いきたいと思います。次回の時の秒針は

体は力。魂は器。2つ合わせれば未来となる。

次回【魂と身体の協調】

日「問題nothingだぜ!!」

作「まだまだ続くよ!!!ラジオ放送!!!次のコーナーはいつたい何かな!？」

刹「え`?まだ続くの?」

輝「カオスの予感しかありませんねえ」

次回に続くの?

第19話 魂と体の協調（前書き）

前の作品で誤字、脱字が多くてすみませんでした

第19話 魂と体の協調

凧side

「時雨…水城…」

口元で小さくリピートされたその名前にあたしは呆然としてしまふ。なぜなら、その名前はあたしにとって大きな意味があるからだ

その名前は楓が 九尾があたしに教えてくれた名前。その名前とまさしく同じ名前を持った男が今、あたしの目の前にいた。

504

「…………レリエル。こいつは誰だ？」

空気が凍るほど冷たい声。その声にレリエルが応える。

「羽前凧。風を操る羽前家の姫、羽前凧です」

その言葉に、あたしはゴクリと唾を飲む。どうやらあたしについての説明をしているようだ。

刹那やレリエルとは違って、こいつは少なくともあたしについて何も知らないようだった。

「……そうか。こいつが羽前風か」

レリエルに水城と呼ばれたその男は興味なさそうにそう呟くと、長い黒髪を靡かせながらあたしのほうに歩み寄ってきた。

カツ…カツ…カツ…

静かにゆっくりと、ただどしっかりとあたしに近づいてくる水城。あたしはその動きを見漏らさないように警戒する。

あの男が出すオーラ。もしくは気配というのだろうか…。何かは分からないが、そういった何かがあたしに警戒しろと忠告してきている。

刹那ともレリエルとも違う威圧感。あの男　時雨水城にはそれが

あった。

「……………」

カツ…カツ…カツ…

無言で放たれる時雨水城の威圧感にあたしは一步、後ろへ後ずさってしまふ。今まで感じたことがない空気に耐えられなかったのだ。

すでに、時雨水城はあたしの目の前まで迫っていた。

「……………」

締め付けられそうな空気の中、あたしは時雨水城をにらめつける。これが、あたしの最後の抵抗であり強がりだった。

カツ…カツ…

そして、遂にあたしの目の前に時雨水城が立つ。感じる。目の前に立った彼から放たれる押しつぶされるような威圧感を。

遠くからでは分からなかったが時雨水城。彼の身長はかなり高い。あたし達の中で一番高い真備よりも数センチは上だ。

あたしは30センチ以上上から見下ろされていた。

『……………』

時雨水城は黙ってあたしを見下ろす。だが、その瞳はあたしを見下ろしているようにも思えた。そして、その視線をあたしが見返すといった形。気分は最悪だった。

嫌な時間ほど長く感じる。昔、誰かがそんなことを言ってたけど、今この瞬間はまさしくその通りだと思う。

水城の鋭く鷹のような目。それに見下ろされる時間はとても不快だ。そう…それは、まるで肉食獣が草食獣を見るような感じ…。ただし獲物を見る目ではない。

小さすぎて興味がわかないといった感じの目だ。

「水城。羽前凧に興味を抱きたいのは分かりますが、時間がありません。そろそろ行きましょう」

不意に放たれたレリエルの発言。その言葉にあたし達の時間は動き出す。

あたしは思わず安心して深く息を吐き出してしまった。正直、この男には関わりたくない。いや、関わってはいけないような気がしたからだ。だけど、あたしの願いは崩れ去る。他ならぬあたし自身の手によって

「……期待外れだったな」

ヒュオオオオオン…

再びあたしの頬を撫でた風の音と共に、あたしの耳に確かにその声が響いた。あたしは思わず、その声に顔を上げる。

そこには未だに長身の男があたしを見下ろしていた。

カツ…カツ…カツ…

あたしが顔を上げたからか、あたしの目の前の男。時雨水着は長い黒髪を靡かせると、あたしを無視するようにあたしの横を歩いていく。

だが、そのときだった。

「……………」
「ザコ」

あたしとの出会い頭、あたしの横をすり抜けるときに放たれた言葉にあたしは目を見開く。時雨水城が放ったその言葉。最初、突然言われたその言葉の意味がよく分からなかったからだ。

“ザコ”それってどういうことよ…？

そして、気付いたときにはあたしは時雨水城を呼び止めていた。なぜ呼び止めたのかは分からない。だけど、止めなければいけない。あたしはとっさにそう思ってしまったのだ。

「ま…待ちなさい!!」

カツ…カツ…

あたしの声に時雨水城の足音が止まる。あたしは風すらもなくなった空間が静まったのを確認すると、意を決して後ろを振り返った。

「……なんだ。まだいたのか、ザコ」

「…悪いけど、初対面のアなたにザコ呼ばわりされる覚えはないのよね」

振り返った先、そこには立ち止まりあたしを無表情な目で見る時雨水城がいた。

再び浴びせられる見下したような言葉にあたしは彼を睨みつけ口を開く。そんなあたしの言葉に、彼は興味なさそうにあたしをその無の瞳に映した。

「……ふん。貴様などただのザコだ。満足に魂狩すら使いこなせないものなどザコ以外の何者でもない」

「…じゃああなたは満足に魂狩が使いこなせると言いたいわけ？」

「……ああ。貴様が足元に及ばないくらいにな」

あたしを見据えて、はっきりと言い切る時雨水城。その言葉にあたしの冷静だった頭が吹っ切れた。

「そう…そこまで言うなら試してあげる」

あたしは右腕を真横に突き出す。昨日手に入れた新たな力を使うために

「後悔しても…知らないからね！！舞い上がれ“風神”！！」

ヒュオオオオオン！！！！

その刹那、あたしの周りに突風が吹き荒れる。竜巻のような風があたりを囲むように渦を巻く。

その風の中、あたしは心を落ち着かせようと深く息を吐き出す。そして、周りの風を一気に切り裂いた。

ザシュツ…!!

「…鉄扇の魂狩【風神】」

竜巻を切り裂き、再び太陽の光の下に戻ったあたし。その手には確かに鉄扇。風神が握られていた。

「水城。あなたのその幻想をあたしが風払わう!!」

シャキンツ!!

風神を開き、あたしは時雨水城を睨みつける。だが、そんなあたしの動きにもかかわらず時雨水城は一步も動こうとはしない。

あたしを嘗めてるのか、はたまた価値もないと思っているのか……。あたしはその水城の態度に冷静さなど完全に失っていた。そしてあたしは普段のあたしが絶対にしないことをしてしまう。

「はああああああ！！」

冷静な頭を完全に失ってしまったあたしは考えもなしに時雨水城に挑んでいく。それが間違いだとも気づかずに。

駆け出し始めたあたし。だが、やはり水城はその場から動こうともしない。それどころか、魂狩を出そうともしない。

あたしは一瞬、動こうともしない水城を攻撃することに躊躇してしまふ。だけど、それこそがあたしの間違いだった。

「……………羽前凧。そこが貴様の弱いところだ」

そして、あたしの一瞬の戸惑い。時雨水城はそこを見逃さなかった。あたしは知ることになる。目の前の恐怖を

「【水堅・天象】」
すいけん・てんしやう

ジャバンツ！！！！

右手を掲げる時雨水城。その刹那に手のひらに現れた水に風神の攻撃を防がれるとは思ってもよらなかった。

あたしはただただ目の前の光景に啞然とする。

「ウン…」

あたしの攻撃は 時雨水城の差し出した右手…正確には右手の前に現れた水の塊を前に完全に止められてしまっていた。

信じられない光景をあたしは目の当たりにする。あたしは必死に風神を握る手に力を入れる。だが、そこから動かすことはできなかつた。

あたしは完全に敗北したのだ。時雨水城に

「……羽前風。貴様は甘い。故に貴様はザコだ」

そのとき、時雨水城の声があたしの耳にやまびこのように何回も響いてくる。

だけど、怒りは感じなかった。まさしくその通りだと痛感させられたからだ。あたしの怒りはいつのまにか 悔しさになっていた。

カランカラン……

あたしはショックのあまり、風神を持つ手から力が抜ける。最早、地面に落ちた風神を取る力さえなくなっていた。

絶望に打ちひしがれる。時雨水城の「……ザコ」という言葉は今のあたしには、まさしくピツタリな言葉であった。

あたしは弱い。力や技術以前の問題に、あたしは心が弱い。あたしは水城の言葉にそのことを気付かされた。

今のあたしでは あの男には絶対勝てない。あたしは知らぬうちに瞳から涙を流してしまっていた。そのときだった

あたしを助けたのは間違いなく“レリエル”だった。

「……レリエル。貴様、どういっつもりだ？」

少しだけ力が入った時雨水城の声に、あたしの思考回路が回帰する。そして思考が回復して最初に見えた映像。それは 対峙したレリエルと時雨水城だった。

「水城。あなたは計画を忘れたのですか？」

「……無論、忘れてなどいない。俺は俺のやるべきことをしたまでだ」

「……水城。例えそうだとしてみやりすぎです。計画を早めた今、俺達はおつと慎重に動くべきです。それが分からないあなたではないでしょっ？」

「……問題は無い。こいつには自分の立場を知る必要がある。故に、こいつは絶望しなくてはならない」

「……っ！？確かに、あなたの言うことにも一理あります。ですが！あなたのおしていることは間違っている！！」

ギリギリ…

レリエルの手に、再び閃光の光の矢がセットされ、時雨水城に向けられる。

だが、時雨水城はその矢すらも、あの無表情な顔で軽く流していた。撃ちたければ撃て。とその無表情な顔で言っているのか、それとも貴様に撃つことはできない…。と高をくくっているのかは、あの無表情な顔から見抜くことはできない。

だが、その無表情の顔に見られるレリエルは、やがてその弓を下ろすのだった。

「…水城。ここで、あなたと闘っても俺ではあなたに勝ち目はありません。退かせていただきます」

「……賢明な判断だレリエル」

時雨水城の言葉にレリエルの唯一見ることができ唇が見えた。その口元は悔しそくに固く結ばれていた。

「…ですが、もう一度だけ言わせていただきます水城。あなたは間違ってる。確かにあなたの考えは正しい。でもあなたはやり方を間違えてます。今、このときも」

それはレリエルの最後の抵抗だった。確かに、フードで隠れて見えないが、あたしには見えていた。

フードの下から時雨水城を睨みつけるレリエルの鋭い眼まぶたが

「…………ふん」

そんなレリエルの言葉に時雨水城は、鼻を鳴らし右手にあった水の塊を握りつぶす。

あたしの風神を止めるほどの強固な水。しかし、水城はそれを躊躇なく握りつぶしたのだった。

バシヤッ！！！！！！

だが、その水の塊はさっきまで本当に風神を止めていた水なの？と疑うほどあっさりとしかもかなり水らしい音を出して崩れさる。

その呆気なさに、あたしは呆然としてしまった。

「……いいか羽前凧？一度しか言わないからよく聞け」

呆然とするあたしに時雨水城は言葉を投げつける。その表情に変化はない。最初と同じ、無表情の顔のまま。

そして、会話自体もあたしの意志を無視した一方的な会話だった。

520

「……能力者は自分の能力を魂狩を通して発動させることにより真の戦闘力を得る。……レリエルの光の矢がいい例だ。やつは閃閃弓に己の能力である【光】を加えることでそれを光の矢として飛ばしている。……これを俺達は【コミュニケーション協調】と呼んでいる。……そして、これができるAランク（上級）能力者とできないBランク（一般）能力者とは、その戦闘力は、天と地の差だ」

時雨水城はそこまで一息も息を入れることなく言い切る。知恵理や真備あたりなら聞き取れなかったであろうその言葉はあたしにも、少し理解できなかった。

「ただ、これだけは分かる。あたしは日向や真備とは違つといつこ
とは

ガチャツ！！！！！！

「アネエキイイイイイイイ！！！！無事かあああああああ
ああああ！！！！！！」

あたしがそう結論を出したとき、屋上へ入るための扉が勢いよく開
いた。初めは何が起こったのかは分からない。だけど、叫ぶような
その声を聞いてあたしはやっと理解した。

あの馬鹿（真備）だと

「凧！！」

「ナギちゃん！！」

「ナギリン！！」

そして、真備に続くように3人の男女が顔を出し、思い思いの呼び方で、あたしを叫び呼ぶ。あたしはその顔を見た瞬間、何を言っているかわからなくなった。

なんで、みんないるのかは分からない。だけど…嬉しかった。

こんなあたしにも、まだ心配してくれる親友がいるということが、何よりも嬉しかった…。

あたしは…まだまだ闘える。いや、闘うんだ。誰よりもみんなのため

第19話 魂と体の協調（後書き）

作「はい！！今回は前回の続き！！ラジオ放送風あとがき後編をお届けしまああああす！！！」

刹「…まだ続くのか」

作「じゃあさっそく今回のコーナーいきまーす【不知火日向の問題 nothing】！！！」

輝「あはは〜 カオスはどこまでも続きますね〜」

作「このコーナーは日向に対する質問を日向本人が一言で答えてくれるコーナーです」

日「問題 nothing だぜ！！！」

刹「凧といい日向といいどこから出て来くるんだよ？」

作「では、さっそくお便りいきたいと思えます。ペンネーム【天然娘】からのお便りです」

ヒナ君。昔の事を忘れられないのは分かるけど…無理してない？キツかったら…いつでも相談乗るから…ね？私はいつでもヒナ君の味方だから…

だそうです」

その右手に持つのは死神の武器。それは

次回【死神の魂狩】」

日「問題nothingだぜ!!」

追伸・この放送を聴いてた知恵理がショックを受けて一週間、日向と口をきかなくなった。だがしかし

実は放送の日向は録音機とハリボテだと判明。翌日、作者は日向と凧に折檻されました…。

次回に続く!!

第20話 死神の武器（前書き）

今回は書くのが難しかったです。

第20話 死神の武器

数分前

凧とレリエル。そして雨の死神こと時雨水城が屋上にて、対峙しているころ。

同じ学校の下の階にいる日向達は

日向side

「はい。じゃあ今から朝のホールームルームを始める。まず、今日欠席してるものはいるか？」

悶が教室を出てから数分。俺達は、怠慢そうに欠伸をしながらホールームルームを進める我らが担任“松竹梅太郎”の声を教室にあるそれぞれの席で聴いていた。

そして、俺はといえば机に頬杖をつき、欠伸を隠そうともせずずっと外を眺めている。

ちなみに普通の朝の俺は、学校に来た瞬間から眠りにつくから、これでもマシな方なのである。

「誰もいないな。なら、連絡もないし。今日は終わりなあ」

だからなのか、ホームルームを行っている梅ちゃんは、俺の様子を気にする様子なく、どんどんホームルームを進めていく…というより終わった！？早すぎだろ！？。いや、あの怠慢教師ならこれが普通か…。

あまりの事態に少しだけ現実に戻る俺。だが、よくよく考えてみればこの教室では、これが普通なことに気がつき、もう一度大きく欠伸すると、再び外に目を向けた。

「せんせー。李君と羽前さんが学校には来てるんですけどいませーん」

「…ちつ。めんどくせー。それじゃあ…誰か後で2人に職員室に来るように言っといってくれ」

このまま今日も何も問題なくホームルームが終わると思われたその

とき、1人の生徒がそう言いながら挙手する。

おいちょっと待てその怠慢教師。お前、今舌打ちしただろ。それとめんどくせーって何だよ。お前はそれでも教師か…。

普段ホームルームの話を聞きすらない俺は思わず頭を抱えてしまった。何が怖いって？周りの奴らがこれを普段と変わらないように対応をしているとこだよ…。

ふと、そのとき俺はあることに気がついた。さっきの誰だけ知らない生徒の発言について

あれ？羽前さん？羽前さんって…あいつ？あいつのこと…だよな…。

頭に浮かんだのは昨日の夜の映像が甦る。でも、学研には来てるらしいし…。普段真面目なあいつがサボるなんて…。いったい何が？疑問が疑問を呼び、俺の頭の中を駆け巡る。そこで、俺はそれを確かめるために、前の席の馬鹿（真備）をひっぱらいた。

「おい。おい真備。聞きたいことがある（小声）」

スパンツ…!!

「いった！？日向！！てめー何しやがる！？」（小声）

教科書で叩いたからか、なかなかいい音が教室に響く。

真備自身もそれなりの痛みを感じたのか、声を潜めてはいるが、涙目で文句を言いながら振り返った。

「問題 nothing。気にするな。それより真備。凧は？さっきも姿がなかったような気がしたけど……」

頭を叩かれてふてくされる真備は頭を抑えながら唇を尖らせる。だがそれから少しすると黙って天井を指差した。

ああ。なるほど。そういうことだったのか……。

「…そっか。じゃあ仕方ないな」

「ああ。仕方ねーだろ？だから、悪いけど今は姉貴のことはそっと

しといてくれないか？」

真備のその行動。俺はそれを見て頭をポリポリと掻く。こればかりは俺には　俺達には、どうしようもできないからだ。

俺達にはそれぞれが黙認していることがある。たとえば輝喜の目についてだ。

輝喜の目については俺達は触れないようにしている。そして、輝喜の目について悪く言う奴がいれば…俺達は全力でそいつを目で射殺す。これが、黙認していることの1つだ。そして、今回の事例

凧に対する黙認事項。それは予知夢などの問題で昔から何かと1人で悩みこむことが多い凧が、よく屋上の凧に当たりに行くということだ。だが、そんな凧に俺達が取った策　それは放置だった。

一見すると無責任なだこもしれない。だけど、俺達は俺達で凧にしっかりと悩ませようと考えたわけだ。

そして、俺達は凧が助けを求めたときだけ助ける。これが俺達が出した結論だった。

「悩みは大きいほど人に頼らなければいけない。人は1人では絶対に生きていけないからね…」

そのとき、不意に後ろの席の輝喜が語り出す。

「だけど、ナギリンは大きければ大きいほど自分で解決しようとするんだよね……」

「…うん。コウ君の言うとおり。ナギちゃんは本質的な所では、まだ1人で生きてるのかもしれないね」

そのとき、さらに不意に俺の席の横からヒョイと知恵理が顔を出す。この4人の中で、知恵理だけが席が離れているはずだが、俺達は不思議に思わなかった。

なぜなら、教室の前。そこにはホームルームを終えたからか自分の腕を枕にして眠る梅ちゃんの姿があったからだ。だから、俺達は気にすることなく話を進めた。

「姉貴の本質か…。俺達ですら入れない姉貴の悩みって…一体何だろうっな…」

「本質…【魂】…」

誰も分からない風の本质。それを考えたとき、ふと昨日のレリエルとの会話を思い出す。

『 その人の持つ能力も魂狩もその人だけのものということですよ。能力や魂狩はその人だけのもの。人の本質は、もしかしたら魂に隠されているのかもしれない。風の魂“風神”。風の本質は風神が表しているのかもしれない。』

俺が思ったことは魂狩のことについてのことも含まれていたから輝喜がいるこの場では声に出さない。だけど、俺は3人の言葉に微笑みで答える。そして、知恵理達も俺の微笑みに、しっかりと頷いてくれるのだった。

「…問題 nothing。あいつの強さは誰よりも俺達知ってる。だから問題 nothing oku…」

「そつだね…ヒナ君」

俺の言葉に知恵理が、微笑み返してくれる。真備も輝喜も、言葉こそ返さないがその顔には穏やかな笑みが浮かんでいた。

信頼できる親友達に囲まれた穏やかな空間。昨日の非日常がまるで嘘のような空間。とても心地よい空間だった。

俺はその空間に名残惜しく別れを告げ再び、窓の外の空を見上げる。

大好きだった【あの人】と同じ名前の青々と広がる蒼穹アスカを

不思議と安心できた。まるで、【あの人】に包まれているかのような気持ちのいい感覚に。俺は自らのまれていった…。

ヒュオオオオオン…

「……………」

教室の開け放たれた窓から温かな春風が舞い込み、日向の髪を撫でる。それはまるで【あの人】が温かい手で、優しく髪を撫でてくれたような感覚だった。

そんな日向の様子に、知恵理、真備、輝喜は不覚にも見とれてしまっていた。そこにあるものがまるで1つの芸術作品のように美しかったからである。

空を優しい笑顔で見上げる彼の姿は、それだけで一枚の画になっていた…。

「……………!?!?」

彼の瞳が驚きで見開かれるまでは

「あれは…っ！？くそっ！！」

突然の光景に俺は目を見開く。今のが果たして真実の映像なのか、疑ってしまうほど信じられない光景だった。

だが、あれはどう考えても幻なんかじゃない。あれは間違いなく現実だった。俺が今見た光景は明らかに…危険信号

くそっ！！なんで昨日の今日で来るんだよ！？

「ヤバい…。風が危ない！！」

俺はここで1つミスをしてしまった。

次の時間の授業が、移動教室だからか、前で寝てる梅ちゃんを除いて誰もいなくなっていた。だが…輝喜がいた。俺はそのことを忘れ

ていた

「ヒナタン?? いったいどういうこと!??」

ミスった。それも言い訳ができない相手に…。

俺は俺自身の言葉の後、すぐに自らが犯したミスに気がつく。輝喜だって凧の身を案ずる1人だ。こんなことを言えば気になるのが普通だろう。しかも輝喜に言い訳は通じないし、したくもない。

俺は自分の軽率な発言に、唇を噛み締めた。

「…輝喜…。わりーけど今回は」

「…輝喜。一緒に来い!!」

だから俺は決意する。輝喜を連れて行くことを…。真備の言葉を折り、そんな俺が言ったことに知恵理と真備が驚愕の顔を向けた。

「そんな…!! ヒナ君!!??」

「てめー…自分が何言ってるのか分かってんのか!？」

ガバツ…!!

潤んだ瞳の知恵理。咄嗟に俺の胸ぐらを掴む真備。俺はそんな2人から目を背けることしかできなかった。

「すまん知恵理。真備。これは完全に俺の責任だ…。うっかり口が滑った俺の…な」

「…っ!?日向!?!だからといってこいつを連れて行くことがどういふことか分かってんだろ!?こいつを連れて行くことがどれだけ危険か…!!なら…意地でも止めるよ!!!」

俺の胸ぐらを掴んだ真備の手に力が入る。その思いは手に取るように分かった。俺も同じだから…。

こいつの考えることは単純だ。単純だからこそ…こいつの言うことは真っ直ぐで、必ず正しい。

だから俺はこいつの親友をやってるんだ。こんな、単純馬鹿の親友

をな……。天才と馬鹿は紙一重。俺とこいつは…俺とそっくりなんだ。

「はあああああ…ふうふうふう…」

一旦、息を大きく吸って、勢いよく吐き出す。これだけで俺の心は落ち着きを取り戻す。

そして、目の前で俺の胸ぐらを掴んでる真備を見据えると、その瞳に優しく微笑んだ。

「真備。お前はいい奴だ。双子の姉の風が危ないってときにも、輝喜の身を案じてる。俺は今ほどお前の親友やってよかったと思っただことねーよ…」

「…ぐつ。だ…だからどうしたって言うんだよ…。話を反らそうっ たってそうはいか」

「でも、お前は風のことを心配するあまり、冷静な頭を失ってる。風を心配してるのがお前だけだと思うな…!!」

「…っ!？」

微笑みから一変、鋭いまなざしの俺の言葉に、真備の顔がゆがむ。本当は真備だって分かってるから…。

俺の胸ぐらを掴んだ真備の手からゆっくりと力が抜けていき、俺は真備の手から解放される。分かってくれ真備。お前の意見には俺も同感だ。だけど…それを許さない人間がいることを忘れるな。

「…ヒナタン。マキビン」

俺と真備はその声に、視線を横に移す。すると、そこには強く輝く目があった。意志が強い…心が強いあいつの目が

「輝喜…」

「分かったたる真備？どっちみち輝喜はどうやってもついてくるつもりだ。俺達3人だけで行ったとしても必ず後から付いてくる。こいつはそついう奴だ…」

俺の言葉に輝喜が大きく頷く。その瞳には強い意志が宿っていた。

こいつの心が強いのは誰よりも、俺達が一番よく知っている。真備

同様、伊達に親友やってるわけじゃない。こいつは…誰よりも強い。誰よりも…な。

「責任は取る。俺が責任持って輝喜を守るから…。だから、こいつを連れて行くことことを許してくれ…」

そして俺と輝喜は2人に向き直り、大きく頭を下げる。正真正銘、俺達の思いを込めた礼だった。

『 …… 』

黙る2人。いや、黙らずにいられない2人を前に俺は、2人の表情を確かめるためにゆっくりと頭を上げる。

だけど俺は知っている。誰よりも真備のことを、そして知恵理のことを…。そして俺が顔を上げ終わる。するとそこには案の定

「はあ…つたく、お前も輝喜も頑固だからな…。類は友を呼ぶってこのことなのか…？」

「あははは マキビン。それはお互い様というものだよ」

「そうだな、違いねえな……」

呆れ半分に苦笑いを浮かべる真備と

「ヒナ君。大丈夫。私はヒナ君を信じてるから……」

「……ああ、問題 nothing。ありがとう……知恵理」

俺の手を両手で優しく包みながら、優しい笑顔を浮かべてくれる知恵理がいた。本当に……お前らにはかなわないよ……。

このとき俺は、2人の笑顔に改めてこいつらと親友でよかつたと思っていた。俺が誰よりも知っている。俺のことを誰よりも知っているお前達をな。本当に最高だよ……。

そして、俺は優しい俺の手を包んだ知恵理の手を優しく握り締める。このとき、俺の周りで孕んでいた空気は一気に緊張状態に舞い戻った。

無駄な時間を食ってしまったからな……。

「…じゃあ時間がない。行くぞ、お前ら。もちろん問題 no t h i
n g だろ」

「うん…!! ヒナ君。私は大丈夫だよ…!!」

「ヒナタン。俺はこの先何があるか知らないけど…必ずついて行くから…」

知恵理と輝喜。2人から伝わってくる思いに俺はコクリと頷くと、
知恵理の手を握りしめた自らの手に力を込めた。

「うっしやあああああああああ!!!!!!!!!! 待ってるアネ
キiiiiiiiiiiiiiiiiiiii!!!!!!!!!!」

そして、誰よりも姉であるあいつのことを心配してる真備が大声を
上げながら全力ダツシュしていくのを見て、俺達も駆け出す。

あいつを 羽前凧を助けに行くために

そして、現在に至る。

凧side

「……なぜここにいる？」

突然現れた日向達。だが、それに時雨水城は慌てることなく日向達にそう問う。

その問いに日向は右手を屋上のフェンスの向こう 遙か向こうを指差して答えた。

「空を飛んでいく光る物体が見えたんだよ」

日向のその答えにあたしはハッとする。なぜなら、その光の正体についてあたしは気付いたからだ。

「レリエルの…光の矢」

「気付いてくれましたか…」

あたしの眩きに、レリエルがホツと肩をなで下ろしたのが分かった。そう、あれはあたしを助けるためにレリエルが放った矢。

時雨水城とあたしを離れさせるためにレリエルが放った光の矢…。
きつとあれのことだ。

あたしは知らず知らずにレリエルに二度も救われていたのだ。

「……………レリエル。貴様」

「そう睨まないでください水城。俺が放った矢がたまたま日向達に見られただけですよ？これは俺達にとって不幸な事故だっただけです…」

「……………白々しいなレリエル」

無表情のまま時雨水城がレリエルを睨みつける。

だけど、レリエルは水城のガン付けを鼻で笑ってかわすのだった。

「……まあいい、手間が省けた」

そう呟くと時雨水城は日向達のほうに向き直った。

「……改めて自己紹介をする。……時雨水城。時の番人に所属する能力者。……通称【雨の死神】だ」

「あ……雨の死神？」

真備が時雨水城の通称の雨の死神の部分を聞き返す。そして、それに答えるように水城は左手を前に少し出した。

あたしはその動きに目を見開く。まさか……あの動きは……。

「……降り注げ。……発動【村鮫むらじょう】」

ザアアアアアアアアアアアッ！！！！！！！！！

あたしの予想通りの眩きとともに時雨水城の姿を隠すほどの滝のような大量の水が時雨水城の周りに降り注ぐ。

それはまるで土砂降りの雨のよう　いや、時雨水城の通称を考えるとそれが正しいのかもしれない。

屋上に鳴り響く雨が叩きつけられる音。だが、その刹那、時雨水城を囲んでいた水のカーテンが大きく切り裂かれた。

スパアアアアアアアアアアンッ……！！！！

それと共に現れる時雨水城。その姿にあたしは息をのむ。なぜなら、その姿は“雨の死神”という名前がピッタリだったからだ。

さっきまで降り注いでいた雨のせいか、ずぶ濡れで水が滴る死神を思わせる黒く、不気味な装束。死神のようになにも考えず、命を刈り取るような無表情な顔。

そして

「……………素早く終わらせる。……………【大鎌】デスサイズの魂狩【村鯨】」

命を…魂を刈り取るための死神の武器（魂狩）

まさしく死神だった。

日向side

「……これが俺が【死神】と呼ばれる由縁。魂を刈るための魂狩だ」

547

あの男 時雨水城はそう言うと、大鎌を肩に担ぐ。ずぶ濡れなその姿はまさに死神。“雨の死神”にしか見えなかった。

「…時雨水城。お前の目的はなんだ？」

俺は知恵理と輝喜を後ろに隠すように前に出て時雨水城に問いかける。

近くにいたレリエルに聞くのが一番だったが、俺はあえて水城に聞いた。一瞬、空を見上げる水城…それはまるで、さっきまでの俺のようだった

だが、時雨水城のその無表情な瞳で再び俺を見ると　いや…違う…!?

「…俺のノルマを達成させるため、そこにいるやつを目覚めさせるためだ」

無表情なその顔を崩すことなく、俺を　俺の後ろを指差した。

やっぱり…そういうことか…!!…こいつの…こいつとレリエルの狙いは…!!

「お前の目的は輝喜か!!」

俺の叫びに、時雨水城は相変わらずの無表情の顔を貫く。だが若干…。そう、ほんの少しだけ　口元が緩んだ気がした。

「……だとしたら？」

その言葉で俺の疑問は確信へと変わった。

「お前を許さない……！！」

「てめーをぶっ飛ばす！！」

俺と真備はその一言に我慢できなくなる。そして俺は右手を真備は両手を前に出した。

「舞い上げれ【紅翼】！！」

「鳴り響け【雷神】！！！！！！」

ポオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！！！！！！！！

ピシャアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！！！！！！！

俺の周りには炎が、真備の周りには雷が巻き起こる。俺と真備の怒りが籠もった怒涛のごとき雷炎だった。

「日本刀の魂狩【紅翼】」

「グローブの魂狩【雷神】」

そして、2つの能力の創出が終わりを告げたとき、俺の右手には日本刀。真備の両手にはグローブが。

後ろで輝喜がどんな顔をしているか気になるが、そんなことよりも強い意志が俺の頭の中で働く。

輝喜を巻き込みたくない。そのことしか、今は思い浮かばなかった。

「……………おもしろい。貴様達の力、試させてもらおう」

ピリピリと伝わってくる時雨水城の殺気を前に、俺達は真っ向から立ち向かう。

俺と真備。そして時雨水城との闘いが今、ここに始まりを告げた。

第20話 死神の武器（後書き）

作「はい。じゃあ今回は能力者のランク付けについて話していきたいと思いますーす」

日「そういえばレリエルとか水城とかがランクがどうこうって言うてたな…」

真「Aランクとか協調とか、本文じゃ分からないことだらけだったからなあ…教えてくれるならありがたい」

輝「大丈夫だよ マキビン どのみちマキビンには分からないと思うからさ」

真「それもそうだな…っておい!?!」

作「じゃあさっそく説明します。ふえーういーうー!?!」

Dランク（知覚能力者）

能力の知覚を感じ始めた能力者。まだ能力をうまく扱えない。

Cランク（一般能力者）

能力者であることを自覚し、能力を自由自在に操れる能力者。能力者の大多数がここを占める。

Bランク（戦闘能力者）

能力を戦闘で使うことができる能力者。魂狩の発動がこのランクの条件。

Aランク（特異能力者）

魂狩を完全に使いこなす能力者。このランクとBランクとの間には絶対的な差がある。協調の発動がこのランクの条件。

作「というわけで、以上が能力者のランク分けになります！！みんな分かったかな？」

日「問題nothing！！俺は分かったぜ！！！」

輝「俺も分かったよ〜」

真「全然わかんねええええええええええええええええええええええええ！！！！！！！！！」

作「じゃあ時間もありませんので、次回予告行きます。次回の時の番人は

雨は雷を呼び、雷は炎を起こし、炎は雨を降らす。

次回【雨と炎と雷と】」

日「問題nothingだぜ！！！」

日「おい真備！！なんでこんなこともわかんないんだよ！？」

真「しゃーねーじゃん！！ややくしーんだらかー！！！」

輝「あははは マキビンらしいねー なら、作者さんに聞いてみれば?。」

真「作者に聞く…。それっていいかもな!。」

日「というわけで分からないことがあったら、どしどし作者に聞いてくれ!。」日& amp; 真& amp; 輝『』お願いしまーす『』

次回に続く!!

第21話 雨と炎と雷と（前書き）

すみません遅れました！

「……拳の振りが大きい」

水城の顔すれすれを通りぬける拳。水城の無表情ですが、涼しげな顔を見る限り、余裕すら感じられます。

やはり…回避能力が高い水城には、そうそう当たりませんか…。

「…っ！？なめるなああああああああ！！！！！！」

ですが、真備の力も侮れません。常人なら体勢を崩すあの振りから、真備は呼吸を入れることなく水城に拳を放ちます。

すぐ目の前から放たれる真備の拳。こちらも普通ならば、冷静な頭を保つことも難しい状況。ですが、水城は慌てることなく、ゆっくと右手をかがげました。

「……【水堅・天象】」

ガアアアアアアアアアアアアンッ…！！

水城がかざした右手から現れた水の塊を前に、真備の拳は簡単に塞がれてしまいました。

高い攻撃力を持つ真備の拳も水の水圧を前に威力を殺されてしまったようです。やはり、水城の強さはいつ見ても鳥肌がたってしまいます…。

これは…真備には不利な闘いですね…。

「問題 nothing!! 真備!! そのまま押さえ込め!!」

「おっつ!! 任せとけ!!」

ただし、日向がいなければの話ですけどね

「くらえええええええええええええええええ!!!!!!!!」

真備の攻撃を防いだことで、水城の動きを制限することに成功しま

した。そこに、炎をまとった紅翼　日本刀を振りかぶった日向が
水城を切りにかかります。

だけど水城も油断はしていません。水城はすぐさま、右手で真備を
押さえたまま左手に持つ村鯨で紅翼を受け止めました。

キイイイインツ…！！

日向の紅翼と水城の村鯨の刃がぶつかりあう音が屋上全体に見玉し、
空気の波状を描いて俺達の耳へと流れてきます。

刃と刃　魂と魂がぶつかりあう音。それはまるで、鈴の音のよう
なとてもとても…清らかで、綺麗な音でした…。

日向 side

「ぐあっ…！！」

紅翼を振りかざし、時雨水城と刃と刃を交わらせる俺。だが、やは

り体格の違いからか俺の攻撃はいとも簡単に押し返されてしまう。

それに、右手から出される水と左手に持つ村鮫　その2つのコンビネーションはかなりの完成度を誇っている。

やはりまだ魂狩の扱いに慣れていない俺達とは、修練の差が違いすぎる。俺達は着々と、しかも確実に追いつめられていった。

「はあ…はあ…はあ…真備。あの水なんとか破れないのか？」

「はあ…はあ…はあ…む…無茶言うな。あの水に俺の拳はまったく歯が立たねーんだ。無理に決まってるだろ…？」

重度なる攻撃を重ね、息を切らす俺達とは裏腹に時雨水城には一切疲れた様子がない。ただ、無表情な瞳で俺達を見るのみだった。

「……………どうしたお前ら。もう終わりか？」

挑発するような時雨水城の声。だが、それでも俺達は体を動かすことができなかった。

やつても無駄だと分かっていたからだ。

「ちくしょー…やっぱ、対策を変えないと勝てないのか…??」

「真備、違う…。その考えは間違ってる。あいつには対策を変えても無駄。勝てる確率はほぼ皆無なんだからな…あいつはレリエルや刹那とは違う」

そう…時雨水城はレリエルや刹那とは違う。

あいつは、レリエルと刹那。2人みたいに手を抜くことはない。完全に本気だ。

俺達は、無表情な時雨水城の瞳の先にある何かに押しつぶされてしまいそうだった。あの瞳の先に、何かがあるのか…それを考えるだけでも、恐怖で体が凍ってしまいそうになる。でも…でも

「でも…やるしかないんだよな…日向？」

「ああ。問題 nothing。俺に依存はない…!!いくぞ!!真備!!」

駆け抜けた。

「……雨よ降り注げ」

ザアアアアアアアアアアアアアアアアアッ……！！！！！！

その刹那、時雨水城の眩きとともに大量の雨が降り注ぎ、村鮫の大きく婉曲を描いた刃に水が灯る。

透明な水が纏った刃が太陽に反射し、キラキラと光って雨後のような寂しげな美しさのように花開く。

「真備！！やつに攻撃させる隙を与えるな！！」

「おう！！分かってる！！」

だけど俺と真備は、今にも攻撃をしてきそうな、時雨水城に攻撃させる暇を与えなかった。

走りながら叫んだ俺の声に真備が応える。雷神を　グローブを付

けた右腕を振りかぶり、時雨水城に一気に間合いを詰めよる。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おお……！」

今までに見たことないほどの怒りを覚えた拳で真備は水城に殴りかかる。

鬼気迫るその表情には、真備の怒り全てが込められているような気がした。

対して水城はその動きを呼んでいたのか、真備の拳を避けようと身構える。

ただどそれが水城にとっての過ちだった。ここで俺達はジョーカー（切り札）を出したのである。

「……なかなかやるな」

真備の攻撃を避けようと、体を動かそうとしたその瞬間、時雨水城が無表情のままそう呟く。

その言葉を聞く限りでは、どうやら驚いてくれているようだ。だ
どそれも当然だろう。なぜなら

コロ…コロ…

時雨水城のすぐ目の前まで迫っていた真備が【紙】になったからで
ある。

「掛かった！！真備！！」

「おうよ！！散々待たされたんだ！！派手なパーティーを始めるぜ
！！」

その刹那、時雨水城の後ろ 完全なる死角となるフェンスから真
備が飛び上がる。

そして、それと同時に俺も時雨水城に急速的な加速で一気に迫った。
もともと脚の速さは仲間内でダントツに速い俺は、真備と同時に時
雨水城に襲いかかるためにギリギリ攻撃が届く範囲でとどまってい
た。

そしてそれが水城にとってみれば油断となったはず そう思った。

だけど

「……………【水堅・天象】」

時雨水城は、あの防御技の名を呼ぶ。

だが、このとき愚かだった俺達はその言葉の意味も考えずに時雨水城に突っ込んでいってしまう。そして突然現れた渦巻いた水に弾かれるのだった。

ガシャアアアアンツ！！ガシャアアアアンツ！！

「ぐはっ……………！！」

「な……………に……………っ！？」

時雨水城の今までとは違う【水堅・天象】に対処しきれなかった俺達はそれぞれ別々の場所に飛ばされてしまった。

「くそ……!!何だ??何が起こったんだ……!!?」

「ヒナ君!!ヒナ君!!」

「ヒナタン!!大丈夫ですかっ!?!」

知恵理と輝喜。それに風がいる屋上の入り口近くに飛ばされた俺に、知恵理と輝喜が駆け寄る。

「つうーいつてー……。ああ問題 nothing 大丈夫だ」

俺は駆け寄る2人を安心させるように片手を上げながら、上半身を起こした。俺が飛ばされた方を見れば、未だによく分からない現象が起こっている。

あれはいったい何なんだ?

「日向。あんた、死んでないでしょうね??」

「いてて……せめてもう少し優しい言葉が欲しかったよ……」

そのとき、知恵理達から少し遅れて凧がゆっくりと歩み寄ってくる。その表情は知恵理や輝喜とは違い俺の心配はしているようだが表情は硬い。

どうやら凧もあの現象について不思議に思っている。いや、時雨水城に対して敵意を露わにしているようだ。

凧のその表情に俺も知恵理も輝喜も、時雨水城の居る方を見据える。するとやはりそこには水があるのみ。そう　そこには、水城を囲むように水が渦巻いていた。

「…あんだ、あれどう思う?」

「…さあな。見た感じじゃ竜巻みたいだけど、あれ、どう見ても水だよな?」

凧の言葉に応えながら、俺は心配そうな顔の知恵理の手を借りながら、痛む体に鞭を打ち立ち上がる。唇から落ちる血を拭い、俺は刀を持つ手に力を入れた。

「まるで水のバリアー…水でできた要塞ね…」

「いえ。正確には渦のバリアーです」

風の呟きに応えるようなその声に、俺達は思わず後ろを振り返る。そこには黒いフードで顔を覆ったそいつ。レリエルがいた。

「渦のバリアー？」

俺の繰り返しただけの言葉にしつかりと頷くレリエル。そして、レリエルは未だに時雨水城の周りで渦巻いている水に目を移すと説明を続けた。

「渦潮って知ってます…よね？あれと同じ割合です。周りの物を巻き込んで中心に持って行って…破壊する。つまり相手の攻撃を吸収して村鯨で造った渦の中心に持って行き相手の技を相殺する。これが本来の【水堅・天象】…村鯨で行う防御技【渦潮・天象】つぎしお・てんしやうです」

【渦潮・天象】。その技の名前を聞いて、俺は唇をかみしめた。なるほどな…。だから俺と真備の攻撃が当たることはなかったんだな…。相手の力量を量らずに突っ込んだ俺達の落ちだな…。

拾うのだった。

羽前流式紙術【空蝉】

真備が使う【攻撃式式紙】でも、凧が使う【防御式式紙】でもない、真備も凧も使える【特別式式紙】である式紙。

その実態は自分そっくりに化けさせた式紙を遠距離から操る技。

その紙が感じる五感をそのまま術者に感じさせたり術者の戦闘能力をコピーして軽い戦闘をも行えるため偵察にも使われる実用性が広い式紙でもある。

「……だがいつの間に…そうか最初からか」

時雨水城の言葉に俺達はさらに強く唇を噛む。なぜなら時雨水城は俺達の作戦を完全に読み取ったからだ。

そう、時雨水城の言うとおり最初にいた真備は空蝉が作り出した幻影…。

そして術者本人である真備は一階下の資料室に待機させていたのだ。

「ヒナ君…血が…」

「…問題 nothing。このくらいどうってことない」

心配そうな知恵理な声を制して、俺は知恵理に指摘された唇を噛み締めすぎて、流れた血を拭う。

だが、状況は最悪だった。凧は今でこそ普通に俺達と接しているが、時雨水城を前にしてたときは見てはいられなかった。全身を震わせ、立つこともできなかつたからだ。つまり凧は闘えない。

そして、俺達の切り札だった式紙は時雨水城に見破られた。あれは本当に最終手段だったのに…。俺達は時雨水城の前に破れたのだ。つまり

「打つ手なし…ってことかよ…」

俺の咳きは予想外に響いたらしく、周りにいた知恵理、凧、輝喜、レリエルはもちろん、時雨水城は無表情で俺を見て、反対側のフェンスにいた真備すら、俺を睨むような眼で見ってくる。

四方八方から集まる瞳の前に、俺は制服のベルトに差した紅翼の鞘を抜いた。

「日向……!!!」

「……利口だな、不知火日向。……まさか鞘を抜く意味。分からないわけではあるまい？」

叫ぶ真備。そして、冷静に俺の行動の意味を推測する時雨水城。それを前にしても俺は時雨水城から、知恵理達を守るように仁王立ちする。

確かに鞘を抜くということ 武器を捨てるということが、闘いを諦めるということとは分かってる。

どうやら真備は俺の言葉、それに時雨水城の言葉に俺が諦めたと思っただけ……俺はこんなことで諦めると思ってるのか？

俺は心の中でそう呟くと、鋭い眼差しで時雨水城を睨みつけた。真実を告げるために

「……何、勘違いしてやがんだよ……お前ら？」

俺の一言で周りの空気が一変した。

「なあ時雨水城？俺達をなめんのはかまわねーよ？事実、俺も真備も凧も…3人掛かりで、お前1人に勝てないしな…。でも…これだけは覚えとけ…!!」

そして俺は、日本刀を鞘へとおさめて天高く掲げる。この意味が分かるのは俺達だけ、この意味を知ってるのは俺達だけ、なぜならこの意味を作ったのは…俺達だからだ。

「…っ!!日向!!」

「真備!!!さつさと立ち上がれノロマ!!!!お前の根性はそんなもんかよ!？」

「へへ…んなわけねーだろ!？」

俺の行動に、真備は笑顔すら漏らしながら立ち上がる。それを見た俺は、再び鞘から刀を抜いて、鞘を投げ捨てた。

カラン…カラン…

ふらつく体。頭には血が上り、冷静な判断力なんてとっくの昔に忘れてしまっている。

ただ俺達は体に残る最後の力を振り絞り、時雨水域を睨みつける。これだけは…これだけは…絶対に譲れない…！！

「ダチを…仲間を…親友を…」

「バカにするやつを…俺達は絶対に許さない…！！」

『だからお前は俺達が必ず…』』

そして、俺は日本刀を真備はグローブを付けた右手の人差し指で時雨水域を指差す。

誰よりもダチであり、仲間であり、親友であり、真備にとってみれば大事な姉でもあるあいつ…。

【羽前凧】の為に…。

『『断罪』する…！！…！！』』

その言葉は俺達が俺達を鼓舞するために、昔取り決めた言葉。元は遊びで作った取り決めだ。だけど今となってはそんなこと関係ない。“断罪”という言葉は凧のための言葉。今、この状況でこれは…俺達の思いを込めた言葉となった。

「……おもしろい。ならばその思い、俺の方から断ち切らせてもらう」

俺達の言葉、俺達の目に、時雨水城は淡々とそう応えて、水が帯びたままの村鮫を振りかぶる。

「ただ俺達はもう止まらない。止められない。俺達は、時雨水城へと駆け出した。」

「……力の差を知れ」

「まさか…水城！！！！」

ンッ……！！！！！！！！！！

今まで聞いたことがないほどの、凄まじい音が俺の耳に木霊する。

だが、その音と一緒に聞こえてきた叫び声。それはあまりに聞き覚えがありすぎる声だった。つい数秒前まで……聞いてた……声だった。

「ま……ま……マキビイイイイイイイイ！！！！！！！！！！」

あまりの出来事に、俺は完全に足を止めてしまう。いや、止めるしかなかった。俺の目に飛び込んできたその映像を見てしまったがために……。

叫ぶ俺の目線の先にはフェンスがある。ただし、ただのフェンスじゃない。飛ばされた真備によって破壊されたフェンスが

屋上がアスファルトだったがためか、砂埃などたつわけがなく真備の悲惨な姿はすぐに俺達の目に飛び込んできた。左肩から右腹にかけてめり込んだ攻撃の跡が痛々しく残ったその姿が

一瞬だった。本当に……一瞬だった……。

「マキ君！……！」

「マキビン！……！」

呆然としてしまう俺に、知恵理と輝喜の叫びが届く。だが、今の俺にはあいつらみたいにかぶ力は残ってない。俺は、ただ呆然と真備の姿を見るしかなかった。

「ま……きび。まきび。まきび。まきび。真備。真備。真備真備真備真備真備真備真備真備。いやああああマキビイイイイイイイ！……！」

追い討ちをかけるように風の叫びが木霊してくる。あの2人はお互いに片割れというほど仲がいい姉弟。この状況に発狂してしまうのは無理がなかった。

「ミズキイイイイイイイイイイイ！……！」

そんな中レリエルだけが水城の名前を呼ぶ。いや、叫ぶ。

普段の優しい口調ではない。俺とはじめて会ったときのふざけた口調でもない。あれは…怒りを孕んだ声だ。

「……………なんだレリエル？」

「なんだじゃありません！！どういつつもりですか！！！」

レリエルの無機質な声が叫びとなって、屋上の隅まで響き渡る。

だが、時雨水城はそんなレリエルの声を軽くあしらうと、レリエルを見ることなく真備を　フェンスを見ながら呟くのだった。

「……………計画に支障はない」

「そういう問題ではありません！！あなたは真備を殺す気ですか！
？あんな一撃…真備が死んだら計画どころではないでしょう！！！」

時雨水城の呟きに反論の言葉を並べるレリエル。だが、時雨水城は慌てることなく言葉を繋いだ。

「……ならば、死んでいなければ問題あるまい。現に手加減はした。奴はまだ生きている」

「……っ！！ですが……！！ですが……！！」

「……それにレリエル。お前も昨夜こいつらに何をしたか……。まさか忘れたわけではないだろう？」

「ぐっ……！！」

時雨水城の言葉にレリエルの口が詰まる。たぶんフードの下では、レリエルは時雨水城を睨みつけているだろう。

だけどそれだけ。レリエルが時雨水城に口を出すことはそれ以上なかった。その理由は誰よりも俺が解ってる。あんなこと言われたら誰だって何も言えない。誰だって昨日のことを言われたら、何も言えなくなるに決まってるだろ

「……時雨水城。お前、サイテーだ」

「……不知火日向。今のお前が何を言っても負け犬の遠吠えにしか聞こえない」

そして時雨水城は、崩れることのない無表情な顔で俺へと向き直る。

その声に俺は恐怖心を抱く。だけどそれ以上に俺は怒りを感じずにはいられなかった。

真備を尻をを傷つけ、今また輝喜をも傷つけようとしている目の前の敵に。でも…今の俺にはもう刀を握れる力はなかった。

無力な俺には みんなを守るための力がなかった。力がほしい。そう思ったそのときだった。

「…よく頑張ったな“日向”。後は任せろ」

俺の口が再び勝手に話し出したのだった。

第21話 雨と炎と雷と（後書き）

日「…俺は病気なのか？勝手に喋りだしたりするなんて…。夢遊病か？」

真「どした日向？ついに知恵理に愛想つかされたか？？」

輝「あははは マキビン それだったらヒナタンは今頃、樹海の木にぶら下がってますよ」

凧「もしくは日本海溝の底に沈んでるわね。それにどの道、知恵理に愛想つかされたら日向は餓死するに決まってんじゃない。家事一切できないんだから」

真「それもそうだな！！あっはっはー！！さあー一緒に！！！」

真& amp; ;凧& amp; ;輝『あっはっはー！！あっはっはー！！』

日「お前らには悩んでる友達の話を知ろうという選択肢はないのか！？」

真& amp; ;凧& amp; ;輝『だって友達じゃないもん』

日「…！？そ、そんな…」

知「ヒナ君…」

日「ち、知恵理。お前は俺のこと心配してくれるよな??な??俺とお前は友達だよな??」

知「ヒナ君…カルシウム足りてる??毎朝出してる牛乳、ちゃんと飲んでるの??もう…いい加減に牛乳嫌い治さないと、めっだよ?それ・に私とヒナ君は友達じゃないでしょ」

日「え…ええ…うっ…うっ…お前らなんて…大っ嫌いだあああああああああああ!!!」

知「あ!!!ヒナくん!!!!!!!」

真「…友達じゃなくて親友…だって言いたかったんだけどな…」

輝「ヒナタン。盛大に勘違いしちゃってたね」

凧「ふん!!別にあたしは日向のこと親友だなんて思ってないんだからね!!」

真&輝『ツンデレ乙』

作「はい。じゃあ次回予告行きたいと思いまーす。次回の時の秒針は

彼と彼女はずっと一緒だった。同じ孤児院で育ち、同じ家に住むようになり、同じ親友に恵まれる。

そんな2人の関係とは…??

次回【君と私との関係】

日「うう…問題…nothing…だぜ…」

凧「そう言えば知恵理。あんたは日向との関係。何て言っつもりだつたの??」

知「え??えつと…うんつとね…ん」と…」

作「おっと、そこから先は、次回のネタバレになるからストップな」

知「は〜い」

真& amp・凧& amp・輝『』…すごく気になる『』

日「ひっく…ひっく…どうせ…どうせ俺なんて…」

真「…問題nothingを言うために帰ってこなきゃいけないなんて…」

輝「なんていうか…本気で可愛そうだね…」

次回に続く!!

第22話 君と私との関係（前書き）

日向の正体とは？

第22話 君と私との関係

知恵理 side

「まったく……派手にやってくれたな」

ヒナ君がさっきから話し出した言葉は今までのヒナ君とはまったく違う口調だった。

まるで誰かに乗っ取られかのような そんな感じでした。

「…………お前は誰だ？」

そんな中で相変わらず無表情な水城さんは少しだけ強めな感じでヒナ君に話しかける。

でもそんな口調の水城さんにもヒナ君は慌てることはありませんでした。

「……なんだ水城。分からないのか俺のこと？」

そう答えながらこっちのほうを向いてくるヒナ君。でもその様子はやっぱりおかしい。

ヒナ君が私達を見る目には何か怯えるような虚ろな目をしてたから。

私はあんな目のヒナ君を見たくなかった。

「俺は不知火日向だよ。間違いない」

でもヒナ君の口調だけは冷静そのものでした。

いつも私がピンチの時に助けてにきてくれるときのヒナ君の口調。

まさにそれでした。

「だけど今の俺はそれだけじゃない……」

私が思考のジレンマに囚われているとヒナ君はさらに言葉を続けました。

陽光がサンサンと降り注ぐ中私はヒナ君のその姿を改めて認識します。その意味深な言葉によって……。

「……俺は【紅翼の天使】魂狩”紅翼”の使い手にしてチエの守護者だ」

その言葉は私の中にある世界を動かす新しい鍵でした。

そう。私の知らない私の中の”時”を動かすためのゼンマイであり時の秒針を動かす原動力だったのです。

『 ……！！！！！！』

ヒナ君のその言葉を聞いた瞬間私達はレリエルさんと水城さんが動揺するのを確かに感じました。

水城さんは表情こそ崩しませんが少し顔が強張りレリエルさんは少し後ずさりします。ヒナ君の言葉の意味は一体？

「……日向なのか？」

「さっきからそう言ってんだろ水城」

水城さんは動揺をつまぐ隠しながら言葉をだします。

ただヒナ君はさもめんどくさそうに答え返しました。でも水城さんは次にとんでもないことを言ったのです。

「……言葉が悪かったな。俺が言いたいのはお前が本当に

時の番人クロノスの元No.3の能力者【紅翼の天使】と呼ばれた昔の不知
火日向

かと聞いている」

その言葉を聞いた瞬間。私やナギちゃん。コウ君に驚愕の色が出ました。

ただそれ以上にヒナ君の目はこれでもかといつくらいに見開いてました。

そしてヒナ君の口が言った次の言葉でヒナ君はとどめを刺されたのです……。

「ああそうだ。確かに俺は時の番人に所属していた不知火日向だ。時の番人No.4【雨の死神】時雨水城」

認めてしまったのです。他ならぬ【ヒナ君】が……。

そしてヒナ君はついに立つこともできなくなり崩れ落ちてしまいました。

虚ろな目をしたヒナ君。私は我慢出来なくなった。

「ヒナ君!!!!!!!!!!」

私は叫びに似たその声と一緒にレリエルさんやコウ君の制止を振り切ってヒナ君のもとに走り出した。

『……………』

ヒナ君と水城さんがそんな私を虚ろな目と無表情な目で見つめます。でも。私は自らの衝動のままに動いていました。

ガバッ……！！

そして私は虚ろな目をしたヒナ君を私自身の胸の中へと抱き締めました。

それが私にできる唯一のことだと信じて。ヒナ君は一瞬なにか起こったのかわからなかったみたいだったけど私に抱きしめられているとわかると安心して目を閉じていった。

私とヒナ君の間に言葉なんていらぬ。お互いの存在を示しあう。それだけでいいのです。

「綺麗になつたね。チエ」

そのときヒナ君の口が動いた。でもいつもの知恵理という呼び方ではありませんでした。

私をそう呼ぶのは3人だけ。いえ。3人だけだったと言ったほうが
いいかもしれない。

1人はいつの間にか呼ばなくなったヒナ君。

1人はいなくなったもう1人の幼馴染。

そしてもう1人は私の死んでしまった兄。

だけどその口調がヒナ君の呼び方だとわかった。
それがうれしくて私はより強くヒナ君を抱きしめました。

「……………ヒナ君。あなたは本当に私の知っているヒナ君なの??」

私は【ヒナ君】に話しかける。

そして【ヒナ君】は体はヒナ君のままだけど言葉だけは【ヒナ君】
となり私の質問に答えてくれた。

「チエ。俺は確かにお前の幼馴染の日向だよ。でも俺は4年前……つまりここにいる日向とは別の記憶　　だけど本当の記憶を持った9歳の不知火日向なんだ」

その言葉は普通の人には信じられない言葉だったと思う。

その証拠に【ヒナ君】の言葉に私が抱きしめているヒナ君の目が再び見開いた。

そんなヒナ君に私はゆっくりと背中をさすってあげます。言葉なんかよりずっと思いを伝えやすいから

だけど　　私は他ならぬヒナ君のそして【ヒナ君】の言葉だったから信じられたのもまた真実。私にはヒナ君の言葉が絶対なんです。

つまり私達の間言葉はいらないかもしれないけれども私は結局ヒナ君の言うことならなんでも聞いちゃうということ。

それが私とヒナ君の関係。私はヒナ君に絶対的信頼を置く代わりに傷ついたヒナ君を無言で抱きしめる。

そんな家族のようなはたまた兄弟。あるいは恋人のような関係。いえ。もしかしたらそれ以上のような深いところで繋がった関係。

これが私の世界。そしてヒナ君の世界。私達には家族も兄弟も恋人も含んだようなこんな関係がちょうどいいんです。

「……桜舞い咲き。陽光は天を照らし出し。空は永遠に続いていく」
「……え??？」

唐突に呟かれたその言葉に私は思わず顔を上げる。

すると目の前のヒナ君もその言葉を聞いたからか私と顔を合わせゆつくりと抱きしめ返してくれました。

問題 nothing。俺はもう大丈夫だから。いつもありがとな知恵理。

【ヒナ君】じゃなくてヒナ君のその瞳と笑顔は私にそう無言で語りかけてきます。

”心配いらない”ヒナ君の口からその言葉を聞くことはありません。だってヒナ君も私との関係が分かってるから

私がヒナ君を心配しないなんて無理。だからヒナ君も私を無言で抱きしめてくれるのだ。それが私達の関係だから

「……ヒナ君。それはどういうことなの??？」

私は喋れないヒナ君の代わりに【ヒナ君】にその言葉で尋ねました。

するとヒナ君は私の言葉に戸惑うことなく表情に出せばきつと満面の笑みを浮かべている。そんな口調で私の問いに応えた。

「ヒントかな。俺自身……それにチエ。お前の中にもある記憶という【時】を引き出すための……」

「【時】??それって一体どういうこと……??」

「それはまだ教えられない。だけど【時】がお前がその力に目覚めるときは近い。でも安心しろ。そのときはきつと紅翼の天使

”俺”が守ってくれるからさ……」

「……うん。私はヒナ君を信じてる。だからこれからも私と一緒にいてね」

「もちろん【問題ない】分かってるってチエ……それじゃあそろそろあそこにいる無表情男と話させてくれないか??ちよつとここからは」

私は【ヒナ君】の言葉に軽く頷くとヒナ君から腕を離す。そのときのヒナ君の顔は忘れられない。

あの凜とした真剣な【ヒナ君】の顔は

「violenceな話だからさ」

日向side

「また体貸してくれないか？」

なんで？

知恵理から解放された俺に俺の口はそう告げる。

俺は普通に心の中で聞き返してしまった。

「ん〜……まあ、勝手に乗っ取ることにはできるんだけどどれは俺がいやだからな。あと理由は水城と真正面から話がしたいからかな……大丈夫。話が終わったらすぐに返すから。」

でも。もともとお前の体なんだろう？ だったら勝手に……。

「ふざけるなよ。確かに俺の体だがこれはお前の体でもある。だから許可は絶対求める。わかったか？」

ああ…分かった。

「よし。じゃあどうなんだ貸すか？ 貸さないか？」

うん。問題 nothing。どうぞお好きなようにお使いください。

「さすが俺話わかるじゃん。……そうだ。最後にこれだけ言っておく。今回すぐに体借りなかったのはお前に俺の正体を教えるためだ。次目覚めるとき俺はいない。だから絶対に忘れるなよ俺の正体」

わかった。

「じゃあ遠慮なく拝借させてもらっせ……」

そうして俺の視界はブラックアウトした

水城 side

「よう水城。この姿で会うのは初めてかな?？」

再び目を開けたときの日向の目は紅かった。

こんな目をした日向を見るのは久しぶりだ。

「さて水城。積もる話もあると思うけどまずは俺の質問に答えてもらおうか」

懐かしさと共に湧き上がるこの感情はやつの目の鋭さが増したと同時に消え失せた。あの目をした日向の相手をするのは危険すぎる。

俺は黙って頷いて「是」だと答えた。

「…1つ目。お前は【空蝉】を知っている？」

「……昔見たことがあったからだ」

間違っではない。ただ核心の所は答えてないだけであるが……。

俺は確かに【空蝉】を見たことがある。いや。寧ろ空蝉を始めとする羽前流式紙術は全部”使った”があると云った方が正しいかな。

「2つ目。俺の居場所をどうやって探した??俺は確かに”お前の記憶”も書き換えたはずだけど??」

「……しらみ潰しに探っただけだ」

そう。確かに俺もお前との記憶が書き換えられていた。だからこそ俺はそろそろ血眼になって必死に探したんだ。

あの頃　それにあの戦争を知っている俺の認める”仲間”である
お前を含めた全員がああ戦争から数ヶ月以内に3人とも俺の目の前
から忽然とその姿を消したからな

”響理”音弥”オペリア”も。”雲雀春姫”ひばりはるひも

そしてお前【紅翼の天使】こと戦場にて最も美しく舞った”不知火
日向”もな

「最後だ。だけど実際にはここからが本題と言っていいがな……水
城。お前の目的はなんだ??」

「……ご想像に。と言いたい所だが……お前は気づいてるんだろ?」

「まあな。目的なんて端っから1つしかないしな」

そう言うと日向は肩をすくめてみせた。

「……昔から変わらないなお前は」

俺の言葉に日向は俺を見つめやがて口元を歪ませて言った。

「お前は変わってしまったな……」

まったくだな。

言葉にはできなかつたが俺は納得できた。

日向はやはり昔から変わらない。

「さて。俺の出番はここまでだな……。おっと忘れる所だつた。俺は今後あまり出てこないようにするから。日向に【あれ】を教えておくぞ」

その言葉が意味するものは大きかつた。俺達のこれからの闘いを左右させるほどに

「……待て日向。あれとはもしかして」

「ああだいたいお前の想像通りだぜ水城。俺が教えることなんて決まってるんだろ」

そして日向は俺のほうを向き軽く微笑んだ。

「【一式】から【四式】までの……奥義をだよ」

日向は最後にそう言つと知恵理に支えられながら倒れ込んだのだつた。

日向 s i d e

…な…。ひ…た。

どこかで聞いたことあるような優しくも気品があり勇ましくもある。そんな心地いい声が俺の耳に突き刺さってきた。

だけど辺りは真っ暗闇。ふと俺はそのときやっと自分の目蓋が閉じられていることに気がつく。

瞳が重い。開けるのすら戸惑ってしまうほど俺の瞳は堅く閉じられている。

だが次の瞬間。俺の瞳に何か温かい液体が落ちてくる。それは堅く閉ざされた俺の瞳をこじ開けるくらいの力を持った優しい液体。

悲しみと喜びに暮れる凧の涙の粒だった。

「日向!.....!」

「!.....凧。それに輝喜お前らだったのか」

重たい目蓋を開けた先。そこに待っていたのはどこか暗い表情をした輝喜。それに瞳にさつき俺に降り注いだ優しい涙をめいっばいに溜め込んだ凧の2人に覗き込まれている映像であった。

仰向けで寝ている状態で空が見えるということはどうやらここはたださつきと同じ屋上のようだ。

心配そうに覗き込む2人。俺はそんな2人に軽く微笑むと痛みと疲労に軋む体に鞭打って上半身を起こし上げる。

「いつて.....」

「日向。大丈夫??」

凧が俺の体を支えてくれたので俺はやつと周りの様子を見ることができた。

まず真備がいた場所。そこには凹んだフェンスがあるだけで肝心の真備の姿はどこにも見あたらなかった。

水城がいた場所は何もなかったかのように綺麗にもぬけの殻。もしかしたらそこにいたことさえ俺の妄想ではなかったのと思うくらいに何も存在していなかった。

そして凧と輝喜。それにレリエルのいた屋上の入口には包帯を巻いた真備の姿が見える。包帯を巻き意識を失っているのか横たわったその姿は安らかそうに見える。どうやら一命はとりとめたようだ。

これで俺は一通り辺りを見渡したことになる。全体的に開けた屋上では俺がいるこの場所から死角になるところはない。

だけど一通り周りを見渡したが俺は違和感を覚えずにはいられなかった。何か足りない

あれ。何か俺は大切なことを忘れていたような気がする……。

俺がそんな疑問を思ったとき不意に真備がいたフェンスとは反対の

フェンスから声が聞こえた。

無機質な機械で変えられたその声。それはこの1日の間で俺の耳に焼き付いた優しい口調の声である。

だが彼のその優しい口調自体は今までみたことないくらいに苦しもうなものであった。

「すみません日向」

その声に反応した俺は急いで振り返る。そこには漆黒のフードで表情を隠し感情を見せない男。

夜の天使の名前を持つ光の能力者”レリエル”がいた。

「レリエル??そんなに苦しそうな口調でどうしたんだ??」

俺の言葉にレリエルは拳を固く握りしめる。

まるで自らに課した戒めのように彼は唇を噛みしめたまま放ったかのような苦しげな言葉を放つのだった。

「日向。知恵理は水城が連れ去りました。町外れの洋館。それが俺達の本拠地です。知恵理を連れ戻したかったらそこまで【4人】できてください」

俺は最初何を言われたのかわからなかった。凧と輝喜のほうを見る。だけど2人共顔を伏せたままだった。でもその表情はレリエルの口調以上に苦しそうに見える。

悲しそうに 唇を噛みしめている。そこまで来て俺は違和感の正体に気がついた。

どうして今まで気がつかなかったかと俺自身をレリエル同様に戒めるほどに大きな違和感に

俺の最も大切な者。知恵理がいなかったのだ。

「レリエル。これは一体」

「すまない日向……」

レリエルは俺の言葉も聞かずにフェンスから飛び降りていく。

その背中に俺はがんじがらめに巻きついた戒めの黒い鎖をみた気がする。

苦しみを強要するかのような黒い鎖を

これが時の番人との全面対決の始まりとなった。

第22話 君と私との関係（後書き）

日「おい真備。お前知恵理が攫われたつてのにいつまで寝てやがんだ！いい加減に起きやがれ！おらあ あ！！」

真「くぺっ!?!」

輝「あははは マキビーン。首が在らぬ方向を向いてるよ。だいいじぶですか?」

凧「…気持ち悪い」

真「あんた俺の姉ですよね!」

日「…自分でやっといてあれだけどちよつとやりすぎたか??これは…なあ」

輝「う…うん。俺、180°首が回ったまましゃべる人、初めて見たよ…」

凧「…気持ち悪い」

真「あんたら散々だな!」

作「なんか訳が分からない展開ですけど次回予告行きたいと思いません。次回の時の秒針は

そこは日向達のたまり場所。喧嘩をしたときは手厚く治療してくれ

る優しい町医者が経営する病院。その場所は…。

次回【桜時クリニック】

日「問題nothingだぜ!!」

日「知恵理。待つてる。必ず助け出してやるからな…。それまで問題nothingに無事でいてくれよ…」

真「あのヤロー…次会ったときには覚えとけよ!!知恵理を助け出すついでにぶん殴ってやる!!!!!!!!!!」

凧「時雨水城…。知恵理に手を出したら許さないんだからね!!」

輝「…みんな。張り切つてるとこ悪いと思うんだけど…。次回はまだ助けに行かないからね?」

日&真&凧『…マジで?』

次回に続く!!

第23話 桜時クリニック(前書き)

なんだかんだで過去最長・・・

真備の体に大量の湿布を張り付けている風。

でもただ湿布をはるだけでは真備も痛がらないのに。

「ねえナギリン…なんでガムテープでマキビンの体をぐるぐる巻きにしてるの？」

「決まってんでしょ！！今からあたし達は激しい運動をしないといけないの！！だから動いてもとれないように固定してるのよ！！」

「痛い痛い！！！！そんな気遣いは無用だから！！だから…俺を開放しろおおおおおおおお！！！！」

というわけで、風の手によって明らかに間違った治療法を受けている真備。その姿に、俺達は黙って目を背けるしかなかった。

マキビン
真備哀れな奴…。

俺と輝喜の心の声がシンクロしたことは確かだった

バリバリバリッ……！！！！！！

「ぎゃあああああああああああああああああ……！！……？」

聞き慣れた真備の断末魔を横耳に、俺と輝喜はお茶をすすめるのだった。

「よし……！……終わり……！！」

あれから数分。真備の全身をガムテープで固定した凧は最後に真備の体をパチンと叩く。だが、真備が反応することはなかった。そんな様子に俺はため息を吐き出し、少しだけドアの方に目を向け、誰もいないことを確認すると皆に聞こえるように呟いた。

「…先生は？」

俺の真面目な声に凧と輝喜の顔が引き締まり、辺りの気配をうかがう。真備も気配をうかがうことはないが、ぐったりした状態から立ち上がり、ベッドへと腰を下ろす。

それから少しすると2人は俺に顔を向け、頷くのだった。

「…じゃあ話を進めるぞ」

凧と輝喜はドアの近くで人が来ないか見張りながら、怪我人の真備はベッドに座りなりながら、俺の話に耳を貸す。

その表情は真剣そのもの。俺はそんなこいつらの表情を見ながら、

話を進めた。

「まず、洋館ってのは真備と凧の家とは反対側の森にあるあれ…だよな？」

「ええ。あたし達もなるべく近付かないようにしてる。あそこはそれほどもでに薄気味悪い所よ…あたし達が生まれたころにはもうあったから、築何年になるかしら…??」

「姉貴。今する話じゃない。自重しろ」

「…うん。そうだったわね」

真備が凧を叱る。これはこれで珍しい光景だが、俺達は気にすることなく話を進める。

ちなみに俺と知恵理と輝喜はこの町に引っ越してきている。だから、最初からこの町に住んでいたのは真備と凧の双子だけなのだ。

皆の呼吸が深くなる中、今度は真備が口を開ける。

「レリエルは【4人】って言ったそうだな。ということは俺と姉貴と日向…あと1人は？」

「馬鹿弟。あんたって本当のバカだわ。この状況であと1人って言ったら決まってるでしょ…。少しはそのない頭を働かせなさい、馬鹿真備」

真剣な顔をしてても真備は真備。それを思い知らされた一言だった。呆れを隠さずに頭を抱える俺と凧。そして俺と凧は真備にはつきりと分かるようにドアのほうを向く。そこには

「ふう…：僕ですよね？」

そこには　すでに分かっていたのか、どこか諦めたかのようにため息を吐く輝喜がいた。

その姿に俺はどこか清々しさを感じる。すべてを受け入れる覚悟のその姿に。

「輝喜…お前」

「行きますよ、僕は」

真備の驚きの声を遮る小さく　　だけど、しっかりとした輝喜の決意表明。

俺と凧はその姿に何かとてつもなく強いものを感じる。心から強い。そう思える強いものを…。だが、そんな輝喜の決意に納得してないやつがいた。

「ばっ…バカかお前！！！！」

輝喜の決意表明に真備はベッドから勢いよく立ち上がり、怒鳴りつける。

その形相はまるで鬼のように鋭く尖ってるようだった。でも俺達には分かる。

真備は俺達の中で最も友情を大事にするやつだ。だからこそ真備は輝喜のことが

「ふざけんな！！お前にそんな危ないことさせられるか！！俺は反対だ！！」

心配で仕方ないのだ。

だけど俺はそんな漫画の主人公のように熱く、誰よりも友情を大切に
する真備を嫌いにはなれない。

こいつは確かに馬鹿で方向音痴で馬鹿で機械音痴で馬鹿で不器用な
男で馬鹿で何でも突っ込んでいく猪突猛進で馬鹿で 馬鹿で
馬鹿だけだ。

【友達】としては最高なんだよ。

そしてそんな真備が分かっているのは俺だけじゃない。長年親友を
やってる俺や誰よりも真備を理解して、大切にしている双子の姉の風。
それに

「…マキビン」

「な…なんだよ…」

もちろん輝喜もだ。

輝喜は少し驚愕に顔を歪める真備に真剣な面もちで話しかける。

「僕は絶対行きますよ。マキビン達が一体なにに巻き込まれているかはわからない。でも僕は君達について行くから。絶対に」

鋭く。強い意思が込められた輝喜のその目に真備は後ずさりしてしまふ。それは真備の鋼鉄の意思にもひびをいれるほどの凄まじい威力を持っていた。

真備は…重要なことを忘れていた。こいつは誰よりも強い。体じゃなく心が強いってことを

『 …… 『

無言になる2人。それはあたかも、ビリビリと火花を散らすような状態に見えないこともない。

だが2人の様子をよくよく見てみれば分かる。輝喜の方が真備をかなり押ししているということが…。おそらくこのままいけばきりがないだろう。だからここは俺が助け船を出すことにした。

「真備。お前の負けは最初から決まっていたんだよ」

俺の言葉に真備は何かはじけたように俺のほうを向いてくる。

こちらを向いた真備はかなり間抜けな顔だ。そんな真備に俺は慰めるように語りかけた。

「真備。分かっただろ？こいつの心の強さは筋金いりだぜ。まさかこいつの意志をぶつつぶす気はないだろ？」

慰めると言いつつも、半分脅迫に近いことを俺は真備にぶつける。すると真備は一瞬その表情を硬直させるも、徐々に綻びを出し始める。

「どつだ真備？」

そして、俺の駄目押しという言葉に真備は完全にうなだれてしまった。こうなることは分かった。真備が輝喜に負けることは、俺も凧も…それに真備自身も分かっていた。

でも、そんな真備の気持ちも俺達は…痛いほどわかっていた。あいつの気持ちは痛いほどに

「ちつ。わあつたよ…」

場が悪そうに顔を逸らす真備。その顔に俺は話を進めるために、唇を開いた。

「OK。問題noth」そのかわり「…ん？」

だが、そのとき俺の言葉を遮り、俯いていた真備がその大きな瞳で輝喜のほうに顔を向ける。

そして、真備の口から放たれた言葉は真備らしいの一言につきる言葉だった。

「俺は絶対お前のこと守るからな!!」

『……………』

突然の言葉に俺達は言葉を失ってしまった。

だけど、真備の言葉は確かに俺達の心の奥深くに突き刺さり、暗雲を晴天に染め上げる。俺達も真備の言葉に同感だった。

俺は いや俺達は緩みきつた頬を隠すことができない。その真つ直ぐすぎる真備の実直な言葉に、俺達は口元を緩ませ、自然と言葉がでるのだった。

「問題 nothing。そうだな真備。俺達は絶対に守りきってみせる。輝喜も…知恵理も…な」

「まあ馬鹿弟にしてはいいこと言ったわね。赤点ギリギリだけど…まあ合格点かしらね」

「ふふふ…お願いしますよマキビン。俺は俺で頑張るから必要ないと思うけど〜ね」

「おお!!また大きく出たな輝喜!!ならお前がいれば時雨水城なんて楽勝だな!!頼んだぜ!!輝喜!!」

「あははは 任せといてマキビン 時雨水城なんて3秒でけーおー
してあげるから」

『あははははは……!』

それぞれがそう言って俺達は全員で笑いあう。その笑顔の中、俺は
決意を強く固めるのだった。

知恵理。俺はお前を絶対助け出すからな…。

知恵理 s i d e

「待ってるからねヒナ君」

真っ暗な部屋の中。私は、なぜかは知らないけどそう口に出して
いた。ちなみに私は今1人じゃありません。私のすぐ横。そこには

「どうしたんだ知恵理？」

「え？ああ…んーなんでもないよ、セツちゃん」

隣でお菓子を食べているセツちゃん。私は独り言をセツちゃんに聞かれたと思って顔を真っ赤にして手をブンブンと振りました。

ちなみにセツちゃんというのは刹那ちゃんのこと。捕まってから少ししてから来てくれて話し相手になってるうちにそう呼ぶようになったんです。

やっぱりレリエルさんといい、セツちゃんといい、いい人はどこにもいるみたい。

「そうか…あ。ほらお菓子まだあるからどんどんたべろよ！..」

「うん！！ありがとう」

このとき私は、危機感が無い私自身に呆れて苦笑いしてしまいました。

だけど、それもセツちゃんのおかげ。本当にありがたかった。

「 それにしても大変だったな。知恵理。あの無表情男が迷惑かけて…本当にごめん!…」

さつきから10回目くらいになる謝罪の言葉に、私は溜め息を吐き出してしまいました。本当に気にしなくてもいいのに…。

「 うんうん。気にしないでセツちゃん…。私は大丈夫だから…ね?」

「 じゅ…」

セツちゃんが安心できるように、私はセツちゃんの髪を撫で撫でてあげる。撫でられたときに見せるその嬉しげな顔が癖になっちゃいそう。

私はヒナ君にこうしてもらうのが大好き。だから、セツちゃんにもしてあげてるの。ヒナ君も私を撫で撫でしてるときはこんな気持ちなのかな?

「 ……じゅ／＼／」

可愛い声で鳴くセツちゃん。まるで小動物みたいなその姿に私はキ
ュンとしちゃいました。

私がセツちゃんの髪を撫で撫でしながら、セツちゃんの笑顔を楽し
んでたそのとき、不意に部屋の入り口のドアが開きました。

ガチャッ…

「2人とも。ご飯をお持ちしましたよ」

その無機質な、だけど優しげな口調の声私達がいる部屋に響きま
す。相変わらず顔はフードで隠されているから見えませんが、その
顔は微笑んでるように思えました。

「あ。レリエルさん」

「（ビクッ！）（よ…）ようレリエル。ありがとな」

セツちゃんは、レリエルさんが入ってきた瞬間に私の腕から抜け出

しちゃいます。ちょっぴり残念。

セツちゃんは、顔を赤くして恥ずかしそうにしています。でも、そんな中レリエルさんはセツちゃんの耳元に唇を寄せると。

「ふふふ。気持ちよかったですか、セツちゃん？」

「ば…馬鹿!？」

レリエルさんがそつと呟いた言葉に、セツちゃんは、さらに顔を赤くしてしまいました。レリエルさんたら何言ったのかな？

「ふふふ。レリエルさんあまりセツちゃんをからかわないでくださいよ」

「…馬鹿にしすぎだ。レリエル」

あははは…セツちゃん。拗ねちゃった。でも…拗ねたセツちゃんも可愛い

私はこのとき、あんな妹が欲しかったなあって、思っちゃいました。お兄ちゃんなら居ただけどね…。

そして、私はセツちゃんをからかうレリエルさんに視線を移しました。

「なんかご機嫌ですねレリエルさん」

「ふふふ。そうですね？」

レリエルさんはそう言ったけど、その様子は明らかでした。顔は見えませんがレリエルさんは恥ずかしそうに頬を掻きます。案外バレバレですよ？

「レリエルさん。何かあったんですか？」

するとレリエルさんは少し照れ気味に首を横に振りました。

「うん。あったと言ったらありましたけど、なかったと言ったら何もありませんでしたね…俺の方には…ですけどね…」

「…??…レリエルさん??」

あれ？レリエルさん…どうしたのかな？

最初は楽しそうに話していたのに、途中からは哀愁を感じるような話し方をするようになるレリエルさん。

その様子に、あたしはレリエルさんの頬へと手を寄せていきました…。

「…っ！？…いえ。何でもありません。今のはお気になさらないでください」

だけど、私がレリエルさんの頬へと触れる前に、レリエルさんはどこか慌てた様子で食事が乗せられたお盆を地面へと置きました。

私は突然の出来事に、思わずピクリと肩を震わせます。でも、私から少し離れるとレリエルさんはまた穏やかな声で私に語りかけました。

「知恵理。ご飯はしっかり食べないといけませんよ？きつと今夜は食べないと保ちませんから…」

「…レリエルさん。はい。分かりました」

「ふふ。素直な子は大好きですよ…知恵理」

そう言ってポンポンと2回私の頭を優しく叩いて口元で微笑みました。

私はその笑みをなぜだか分からないけど見たことある気がしました。なぜだか分からないけど

「ほら刹那も。食べておかないと後で働けませんよ?」

「うう…わかったよお…」

拗ねたままだけど、レリエルさんの言うことをしっかりと聞くセツちゃん。そんな2人の様子に、私は2人の強い絆を感じました。私達にも負けない いや、もしかしたら私達以上の強い絆を。

だけど、私が2人のそんな姿を微笑ましく見ていたそのときでした。

「…………レリエル、入り立つぞ」

「水城？」

無表情な顔を崩すことのないその人。私を連れ去った張本人である時雨水城さんが部屋に入ってきました。

「……どうかしたか水城。オレ達に用……ってわけじゃなさそうだけど……」

「……刹那。なぜ貴様はここにいる。俺がこの女の監視を言いつけたのはレリエル1人のはずだが」

「……っ！！はっ！！知るかよそんなこと！！オレがどこに居ようがおレの勝手だろ！？」

「……ふん。まあいい。精々、客人やレリエルに迷惑をかけないようにしる」

「ちっ。お前に言われなくても、そんなことわかってるよ。話が済んだならとつと消えな。無表情男」

その人。時雨水城さんの登場にさつきまで和やかだった場の空気が一変しました。水城さんに悪態をつくセツちゃんの表情には明らかに怒りの表情があり、レリエルさんも表情を固まらしてしまいます。

その異常な空気に、私はただただ事の次第を見ることしかできませんでした。

「…刹那。落ち着いてください。水城が知恵理を連れ去ってきていきり立つ気持ちは分かりますが、ここは押さえてください」

「…だけどレリエル。この男はオレ達に何の相談もなしに強引に作戦を進めやがったんだぞ？お前は腹が立たねーのかよ。こいつに」

「ええ。ええ、そうです。俺だって水城のやったことに怒りを感じてないわけではありません。ですが…ですが、ここは耐えてください刹那。俺のため、あなたのため、そして何より【彼ら】のため」

レリエルさんはセツちゃんの両肩に手をおいて必死にそう悲願しました。

薄暗い部屋の中。私の位置からもしつかりと見ることでできるレリエルさんの口元。それは確かに固く結ばれていました。まるで、自分自身を縛るかのように、固く。

「…じゅめんレリエル」

それから数秒もたたないうちにセツちゃんの口から漏れた言葉は、きつとレリエルさんが一番待ち望んでいた言葉でした。

「……いいえ。俺の方こそありがとございます。こんな俺の言葉を聞いてくれて」

レリエルさんの結ばれていた唇が解放され、綻びへと変わりました。そして、セツちゃんの肩から手を放すと水城さんへと向き直りました。

変わることにない無表情な顔でレリエルさんを迎える水城さん。その姿に私はすごい威圧感を感じます。ところが慣れているのかレリエルさんは、そんな水城さんの態度に臆することなく口を開きました。

「さて、刹那とは話が付きました。それで水城。俺達に何のご用ですか？」

「……ああ、ちょうどいい。用があるのは刹那でも、その女でもない。お前だったからな」

「珍しいですね。水城の方から俺の所に来るなんて……。どのようなご用件なのですか？」

「……この部屋でしか果たせない用件だ」

カツカツカツカツ…

警戒するレリエルさんに、水城さんはゆっくりと近づいていきます。その様子を私達は見ていることしかできませんでした。

そして、レリエルさんの目の前で立ち止まる水城さんは、そのままレリエルさんの耳元に口を寄せて静かに呟きました。

私にもよく聞こえるように、しっかりと

「……遊びはここまでだレリエル。貴様の任務はこの場をもって終わりとする。……今、楽にしてやるからな……」

「え……？？ぐあっ！？」

バンッ……！！！！！！

「…っ！？水城っ！！！！！」

突然の事態に、私の近くで傍観者となっていたセツちゃんの声が響きわたります。対して私はあまりの事態に声を出すこともできませんでした。

なぜなら、水城さんが突然レリエルさんを乱暴に転けさせたからです。

でも…ただ、転けさせたわけではありませんでした。

突然のことに慌てるレリエルさん。だけど次の瞬間。水城さんは、レリエルさんの闇を隠すフードを脱がせ、レリエルさんの顔をさらけ出させました。

636

「水城…！？お前！！自分が何をやってるのか分かってんのか！？」

「……無論だ。何のためにこの部屋に来たと思っている。何のためにこの女がいるこの部屋に来たと思っている。全てはこのときのためだ……」

「…っ！？みいいいいずうううきいいい！！！！！」

怒りに燃えるセツちゃんの叫び声。だけど、今の私にはそれすら遠

い世界のように感じました。

なぜなら水城さんがさらしたレリエルさんの顔。私はその顔に見覚えがあつたからです

「な…な…何を…」

水城さんの突然の行動に私以上に、レリエルさん　いえ【彼】は驚きを隠せていませんでした。昨日、今日と会つた【彼】の顔が驚愕で歪む。私は【彼】のそんな表情を始めて見ました。

有り得ないものを見たかのような瞳で、水城さんを見る【彼】。私は、そんな【彼】に話しかけることができませんでした。私は、【彼】を受け入れることができなかったのです。

「み…水城？」

「……お前に任務を言い渡す。これから来る客人の相手、しっかり頼んだぞ」

「…っ！？そんな!？」

「……命令だ。お前はただ俺の言うことに従っていればいい。頼んだぞ」

カツカツカツカツ…

反論がありげな【彼】に水城さんは、それだけ言い捨てると、部屋から出て行きます。

だけど、水城さんの言うこと、それは今の【彼】には酷意外の何でもありませんでした。

でも、今の私はただ無力な1人の少女。私に出来ることは何もありません。私はこの光景をただ指をくわえて眺めることしかできませんでした…。

日向side

「…さて。みんな!!準備は終わったわよね!？」

街の病院である桜時クリニック前。夕焼けが辺りを赤く照らす中、

風の元気いっぱいの声に俺達はしっかりと頷いた。

「問題ないぜ！！姉貴」

「俺も問題なしっす」

「俺も問題nothingだ」

確かな意志表示を3人で示す俺達。準備万端。これから時の番人の総本山に乗り込もうとした。そのときだった。

「Hey!!!ミナサン!!!」

聞き覚えのあるハイテンションで片言の日本語に俺達は再び、今出てきたばかりの病院の方を振り返る。

白く清潔感が溢れる建物の自動ドア。そこには俺達がお世話になった先生であり、この病院の唯一の医者である医院長先生であり、俺達の友達。そして、俺にとっては恩人でもある金髪のその人がいた。

「ゲイル”先生?”」

俺の少し間抜けな言葉にゲイル先生はニッコリと微笑んだ。

金髪の髪をした二十代半ばくらいの男性。聞けば南北アメリカ大陸にかけて栄える世界最大の国家【ギオン帝国】の人だそうだ。

「コレヲモツテイッタハウガイイデスヨ」

先生の手には包帯と湿布。あとマキ　ンなどが入った救急箱。

ちなみにマキ　ンってのは真備のことじゃなくて消毒液のほうだからな。

「え…でも…」

「キツトツカウコトニナリマース」

このとき俺達は1つの過ちを犯していることに気付いていなかった。

なぜゲイル先生が治療道具一式を渡してくれたのか？なぜゲイル先生は俺たちの行動を先読みしたのか？

だけど俺達はゲイル先生の言葉の意味も考えずにそれらの治療道具を受け取るのだった。

「あ…ありがとうございます。ゲイル先生」

「イエイエ」

先生はもう一度細く微笑んでくる。

俺達はそんな優しい笑顔のゲイル先生にありがたく礼を述べると頭を下げてその場を立ち去ったのだった。

「……………」

p i p i p i p i ……

夕焼けに伸びる日向たちの影を見えなくなるまで眺めたゲイルは少ししてから携帯電話を取り出していずこかに電話をかける。

そのかけた先は…。

「ア。ワタシデス。ミズキ（水城）」

沈黙なる男。時雨水城だった。

「エエ。ヨニントモ、イマ“ビョウイン”ヲデマシタ。…ハイ、ワカリマシタ」

p i ……

ほんの少し。僅か10秒ほどの会話を終えたゲイルは日向達が立ち去った先を静かに眺めるのだった。

「（日本語訳） 日向。あなたは強くなりましたか？私との約束は守れていますか？ あの人に少しでも近付けましたか？ 私がそれをたしかめます。私【ゲイル・ハルトマン】がね……」

時の番人の男性幹部である彼【ゲイル・ハルトマン】

だが彼の日向達を見る瞳はこの3年間変わることのない優しさを秘めている。

今この瞬間も

今、日向の壮絶なる“記憶(時)”が再び動き出そうとしていた…。

第23話 桜時クリニック（後書き）

凧「ちわー！！今日はあたしが今回出てきた単語について説明するわ！！あんた達！！刮目せよ！！」

知「はい！！分かりました先生！！」

真「うっす！！わかったぜあねK！！！！いつてえええええ！！」

凧「はいそこ！！あたしのことは先生。もしくは神様と呼びなさい！！OK！？」

真「いてて…うっす！！了解したのであります！！神様！！」

知「え！？マキ君そっちの呼び方のほうを選ぶの！？」

凧「よし！！あなたにしては100点満点よ真備！！この調子で次の問題もOK??」

真「オーケー！！！！」

知「うん…本編は赤点ギリギリだったのに、今の回答は100点なんだ…」

真「気にしちゃだめだ知恵理。そこを気にしたら姉貴の発言の七割はツッコミどころで溢れてるから…」

知「ツンデレさんも大変なんだね…」

凧「はいそこ！お喋りは禁物よ！！次に授業に関係ない話したら凧払うからね！？」

知&真『はい』

凧「それじゃ授業を始めるわ。今回の議題はこれよ！！今から黒板に書くからしっかりメモリなさい！！今日の授業はこれでおわりだからね！！」

知「わお！！すつごくシンプルな授業だね！！」

真「というより授業として成り立ってなくない！？」

凧「そんなこと気にしない気にしない。べ、別にあんたなんか気にされるようなことないんだからね！！」

真「ここでまさかのツンデレ！？」

凧「説明へ あでゅー」

真「無視すんな！！このロリ萌やるおおおおおお！！！！！！」

ギオン帝国について

正式名称は【進歩したアメリカ大帝國（The Gigantic Onward American Kingdom）】

GiganticのGiの部分とOnwardのOnの部分をとってギオン帝国としている。

領地は南北アメリカ大陸でおよそ世界の5分の1の領地を誇り、もちろん世界で最も多い領民を持つ。そのため【世界最強国家】の異名を持つ。ちなみに帝国なため、王政である。

4年前の戦争では、日本と対立していた。

作「はい。自分の考えたオリジナル国家の説明を終えたところで次回予告行きます。次回の時の秒針は

夜。戦闘準備を完了させて日向達は時の番人の総本山につく。緊迫した空気の中、突然、刹那の音が聞こえてくる。

その口から語られたのは…??

次回【プタハの局長】

日「問題nothingだぜ!!」

凧「はい。本日の授業はここまで。起立。気をつけ。礼」

知& amp;真『『ありがとうございました』』

次回に続く!!

第24話 プタハの局長(前書き)

突入開始!

第24話 プタハの局長

日向side

「ここが…時の番人」

完全に日が落ちた夜。俺達4人はすぐ目の前にある古びた洋館を見据え唾を飲み込む。なるほど…確かに凧の話のとおり気味が悪い場所だな…。

よくある雷がゴロゴロなっているような雰囲気ではないが、如何せん人の気配がない。俺達はまずその雰囲気には圧倒されていた。

649

「ふう…で？これからどうすんだ？日向？」

「…そうだなまずは入口を探す　と、言いたいとこだけど、見た感じ1つしかないな…」

真備の言葉に俺は溜め息を吐きながら、洋館の中央にあるバカデカイ扉を指差す。デカイ洋館だが、後ろには土砂崩れでもあったのか、洋館の後ろ部分は土砂で埋もれてしまっている。

だから俺達が見渡してもそこしか入口がなさそうだった。

「んじゃ、ちゃっっちゃと行きますか」

入り口を確認し、気合い十分に意気揚々と歩みを進める真備。真備その素直さはお前の美德であり、すばらしいところだと思う。でも

やっぱ、お前は馬鹿だ。

「マキビン。ストップ！！ストップ！！ストップ！！」

あまりに無計画な真備の動向をいち早く察知した輝喜が真備の前に立ちはだかる形でその行方を制止する。

「んだよ輝喜…」

「はあ…マキビン。マキビンはもっと疑うということを学んだほうがいいよ…」

「…なんであたしの弟。こんなにもバカなんだろ」

凧。頼むから俺の隣でため息を吐かないでくれ。そんなことしたら関係ない俺まで悲しくなってくる。

「はあ？どういうことだ輝喜？別に入り口から入るのは当たり前なんだぜ？どこに疑う余地なんてあんだよ？バカだな」

「…真備。今のあなたに馬鹿って言われるほど屈辱的なことはないわ」

輝喜の話を凧が引き継いで話し始める。

「はあ…いい真備？もしあなたがあつちの立場だった場合を考えてみなさい。攻められそうになっているこの状況で《はい、どうぞ》なんて簡単に玄関から入れてくれると思ってるの？………そんなわけないことはあんだってわかるでしょ真備？答えはもちろん…N
Oよ」

「……どゆこと？」

ついに凧が頭を抱えてうねり始めた。その足元は俺が思っている以上におぼついてない。だが、その気持ち。分からないでもないから俺まで巻き込まれそうだな。

い あゝあ。こりやだめだな…。凧にはもう説明できないか…。仕方ない

「真備…」

ここからは…俺が説明するのでしょうか…。

「はっきり言っと、これは罠だ」

「罠？」

俺の言葉が理解できないのか、小首を傾げる真備。はあ…もういい。お前に理屈を理解させようとした俺達が間違ってたよ…。まったく同じタイミング。同じようにそう結論づけた俺と凧と輝喜は揃って深く溜め息を吐き出した。

はあ…真備。あと小首を傾げる仕草、お前がやるとキモイから止めてくれ。

「はあ…真備。とりあえず【懷虫】でドアを攻撃しなさい。それで万事解決するから…」

「は？なんでんな面倒くさいことしなきゃいけないんだよ？それに壊虫だつて使用回数にも限界があるんだぜ？そんな無駄なことに使っわけには…」

「いいからやりなさいバカ弟！！！！あなたは悩むな考えるな口を開くな！！！！話がややこしくなる！！！！次にあたしの言うことに逆らつてみなさい！？あなたのその無駄についての【検問消去】風払ってやるからね！！！！Do you understand (分かった)！？」

「アイアイマム！！！！」

流れるような風の罵倒や、女の子が口にしてはいけないような単語が混ざつた命令に、真備は逆らうことなく式紙を一枚取り出す。

刺さるような風の視線。それが原因かは分からないが、式紙を持つ真備の手がブルブルと震えて、狙いを定めずにいる。ドンマイ真備。

「ひっ！？懐虫！！」

そしてついに、後ろから来る風の鬼のような睨みに我慢出来なくなつたのか……。真備は勢いのある声（もしくは悲鳴？）と一緒に手に持った式紙を如何にも分厚そうなドアへと投げる。

初めひよろひよろと力なく飛ぶ式紙。だが、紙はみるみるうちに頭がナイフのような巨大な虫へと変化してドアへと突き刺さる。そして、次の瞬間　　！！

ガンッ……！！！！

『……………』

俺達は　辺りの空気は死んでしまった。

何も起こらなかつた空間に拍子抜けしてしまったのだ。なんぞや？

「……何も起きませんね」

輝喜の苦笑い気味に発せられた言葉に俺達は我に帰るのだった。

「おかしいだろ…何で何も起こらないんだ…？」

「あつちが真備並みのバカってわけじゃ…ないわよね…？」

明らかに拍子抜けな状況に俺達は頭をひねる。俺の予想では【重火器の一斉掃射】や【鉄斧が落ちてくる】といった映像を予想してたのに…。いったいどういうことだ？

「…可能性としてはあたしらの行動を向こうが先読みして、事態に対策。さらなる罠を張ってるか」

「俺達の深読みしすぎかのどちらかだね」

眉をひそめ、頭を悩ます凧と明るい輝喜の極論に俺は同意の意を表す。だが、どちらが正しいとは言えなかった。

真備以外の3人でこれから先のことを考える。下手に動いたら全滅だってありえる状況。俺達は慎重にならざるを得られない。だが、

そのときだった

P i r i P i r i P i r i P i r i P i r i P i r i P i r i
r i P i r i P i r i

突然、今の状況とは不釣り合いな機械的な音楽音が鳴り響く。無論、機械音痴な真備が携帯を持っているわけがない。

ということとは

「…この着メロ。日向。あんたの携帯じゃない？」

俺は突然鳴り響いた自身の携帯をポケットから出し、パカリと開く。するとその画面に表情されていた名前は意外な人物だった。

「ち…知恵理からだ…」

『…!!…!!…!!』

俺の呟きに、真備を含んだ3人の顔が驚愕へと歪み。次いで引き締まる。

だがそれも当然だ。なぜならこれから助けようとしている張本人からの連絡。俺達の緊張感が高まるのは目をみるより明らかである。

俺は一度深く深呼吸をする。心を落ち着かせるためだ。そして、ゆっくりと携帯の通話ボタンを押し、耳に当てるのだった。

『…よお。日向：だよな？オレだオレ。分かるか？』

携帯を耳に当て、聞こえてきたのは知恵理と同じ綺麗な声だった。機械越しでも分かるその鈴のような声。

だけど、その言葉使いは知恵理とは違い男らしい。俺はこの一瞬で電話の相手を全て理解した。

「…“剎那”か？」

『おつ。昨日ぶりだな』

俺の言葉にしっかりと応える刹那。俺はその声を聴くと、電話の相手を知り驚いてるみんなに聞こえるように携帯のスピーカーボタンを押す。

とたん、携帯から刹那の鈴のような声が一気に辺りに木霊した。

『ヤッホー。外のみんな聴こえるか？眼帯の奴は知らないけど、そのほかの奴は昨日ぶり！！』

「え…ええ、昨日ぶり刹那。あんたこそ元気だった？ほら…あたしが切り裂いちゃった傷とか…」

『ああ…その辺は気にすんな。オレもお前らと同じで完治してるからさ…。それより、時間がない』

昨日、一悶着あった風と少しだけ話をするに刹那はすぐに真剣な声へと変わった。

「時間がない…。刹那。それってどういう」

『…オレは今、水城の命に逆らって秘密裏におまえ等に連絡をとってる。つまり今のオレは反逆者ってことだ』

その言葉に俺達ははっとする。そうか…だから知恵理の携帯から連絡してきたのか…。確実に俺達へと繋がる知恵理の携帯から。

「反逆者って…。刹那。あんた、なんでそんなこと…」

『オレにだって良心があるってことさ』

そう言って刹那はコホンと1回咳払いをして、話を続けた。

『と、まあ…こんなこと言うてるけどオレにはこの組織を“本当に裏切ることなんてできない。この組織にはいろんな恩があるからな…。だから今回は特別なんだからな!!』

「…ありがとう、刹那」

刹那の言葉に凧がお礼を述べる。この言葉にはいつい俺達が面食らってしまう。凧がデレた…!?!と。

『じゃ…じゃあれからの流れについて説明するからな!?!1回し

「か言えないからよく聞きやがれ!!」

「あ…ああ問題Nothingじゃあ頼む…」

あまりに凧の言葉が意外だったのか慌てたようにそう会話する俺と刹那。

だが、すぐに真剣な面持ちになる俺達について刹那は話し始める。
これから行われる【ゲーム】のルールについてを

『ん…ん…まずはドアだな…これは警戒しなくてもいいぞ。仕掛けや罠はないから』

「…つまり玄関は素通りでいいってことか？」

『ああ。最初は技術局のデモンさんが張り切ってたんだけどオレとレリエルが何とか止めさせたから…。ちなみに最終的に水城の《…
…出れない》って言葉がトドメだったな…』

「それはまた…お疲れ」

刹那。レリエル。お前らも大変なんだな…。知恵理といつも一緒にいる俺だからか、その苦勞を分かち合うことができた気がした…。

『そんでもって、ドアから入って最初の部屋には1人。時の番人のメンバーがいるから…そいつと戦うってわけだ』

「…それが誰かは教えてくれないのか？せめて、お前とレリエル。それに水城の順番を教えてくれ」

『…すまない。それは教えることはできない。時間もなし、何よりそれじゃ…なあ？』

「…なるほど、ご都合主義か。確かにこれ以上分かったら向こう側の人がおもしろくもなるともないな」

「…ヒナタン。どうしてそんな、電波みたいなこと言ってるんですか？」

気にするな輝喜。大人の事情というやつだ。そして、刹那の話は佳境へとさしかかった。

『続けていいか？そんでもって勝ったら次の部屋、また勝ったら次の部屋と進んでいっていく方式になるんだ。そして最後の部屋。そこに知恵理がいる。ちなみに部屋は全部で5つ。そのうちの3つはもちろんオレ、レリエル、水城だな。というわけでオレの説明は以上だ。何か質問あるか？』

なるほど。ようするにゲームにおけるダンジョンと同じってわけか
…。
刹那の簡単かつ、分かりやすい説明に俺達から質問することは何も
ない。自分なりの解釈もできた俺はその意を伝えるために、携帯に
耳を当てた。

「…問題Nothing。質問することは何もない。刹那。知恵理
のこと頼んだぞ」

『…ああ、わかってる。それと日向。知恵理から伝言だ』

「…??？」

『《待つてるからね…》だそうだ…。じゃあ、そろそろ知恵理を別
の部屋に移さなきゃいけないから切るぜ。確かに…伝えたからな…』

「…ありがとな刹那」

俺の最後の言葉を聴くことなく、刹那と俺とを繋いでいた線は切れ
ていた。

ありがとう。本当に…ありがとな…刹那。せして知恵理。絶対助け
るから。だから…待ってる…。

「知恵理…」

俺は最後に人知れずそう呟くのだった

刹那 side

「いいのか？本当に…」

暗闇の中。電話を切ったオレは白い携帯電話を目の前の人物へと投げる。

その人物は、オロオロとオレが投げた携帯電話を危なっかしい手取りで、受け取った。

「はわわわ…ふう。ありがと、セツちゃん。私のお願ひ聞いてくれて…」

「…ああ。じゃなくて本当にいいのか？お前じゃくてオレが連絡して…」

「…私が連絡してもよかつたんだけど…。今の私には連絡できないよお…真実を知っちゃった私には…」

「だけど言いたいことだつてあるだろ？日向や凧達に何か…。何か…伝えたいことないのかよ【知恵理】？」

オレの言葉にその人物 知恵理は薄暗い部屋でも分かるくらいに悲しそうな表情で、オレに応える。

そして、その気持ちはオレには痛いほど分かる。いや…レリエルの真実を分かっていたからこそ、オレは胸が痛かった

真備 side

「知恵理…」

刹那との電話が切れたそのとき、俺達は日向の独り言をしつかりと

耳に刻み込んだ。だが、それでも日向は、次の瞬間には何事もなかったように洋館のドアへ向けて歩き始めていた。その目に決意を秘めさせて

日向はこういつやつだ。たぶん、自分でも本能的に知恵理を求めていることに気づいていないんだろう…。だけどこれだけは言える。

知恵理のことを一番大事にしているのは間違いなくこいつ…日向だ。

これだけはいくら頭がいい日向がどれだけ否定しようとしても覆ることのない真実。知らぬは本人と知恵理だけだということだ

「真備。何立ち止まってんのよ。さっさと行くわよ」

「おう！！分かってるぜ姉貴」

まあ今はこのままでいいかな。2人のためにも…な。

そうこうしているうちに俺達はドアの前にたどり着く。その表面には、俺がさっき投げた懐虫が深々と刺さっている。

「じゃあ入るよみんな」

そのドアの取っ手に手をかけ、今にも開こうとしている輝喜の明るい言葉に日向と姉貴は無言で頷く。

もちろん、俺も2人に従い頷く。何の問題もなし。いよいよ突入という段階で俺は大きく深呼吸を　ん？

なんだ…あれ…？

「…真備？あんたどうかしたの？上を向いたと思ったらいきなり止まったりなんかして…」

「マキビン。どうかした？」

姉貴と輝喜の声が耳に届く。だけど、俺は上げた視線を下げることはなかった。

そして、ついに業を煮やしたのか、日向達は俺の視線を追うように上を見上げる。日向達の死角　というより、上過ぎて見えなかった部分を

「…なんだ…あれ？」

「何かの文字かしら？」

「だろ？何か書いてあるんだけどなあ…。俺じゃあ読めねーんだよ…」

俺の視線を追った結果、どうやら日向や姉貴も俺と同じところに辿り着いたようだ。ドアの上。そこには確かに何か書いてあるんだけど…。俺じゃ遠すぎて読めない。

結果、俺は他の3人に頼ることにした。だが

「どうだ日向。読めるか？」

「いや…遠すぎて見えないな…。風は？」

「右に同じ。それ以前に街灯もないこんな山の中じゃ見えただけ奇跡よ。あれは…」

日向も姉貴も、最後には溜め息を吐き出し、文字を読むのを止める。でも…まあ、仕方ないよな。あんな高いところにあるうえ、辺りは真っ暗だし。

そして、俺達は字を読むのをあきらめようとする。どうせ関係ない字だろうと高をくくった。だが、そのときだった

「…【女神の間】」

「え？」

突然の声に俺達はその声の主を凝視してしまう。誰もが読めないだろう。人間には読めないだろう…。そう思っていたときの一言だった。

その声の主は

「“輝喜”…あれが読めたのか？」

驚きの顔の日向の言葉。だが、確かに不思議だった。あんな所にある字を読んだ輝喜が。

そんな俺達の眼差しに気がついたのか、輝喜はニツコリと俺達に微笑むと、再びあの文字を確かめるように上を向き口を開いた。

「右目が見えないからかな？…実は俺の左目の視力が4・0あるんだ。スゴいだろ！！」

えへんと胸を張り、まるでガキが褒めてもらったそうにそう言う輝喜に俺達は感心する。

ただどこいつの知らない一面を見れたことが少し嬉しかったり悲しかったりした。

「そつか…3年も一緒にいて何で知らなかったんだろっな…俺達…」

「まあヒナタン達は俺の右目ばかり気にしてたからね 無意識に目に関する話題を避けてたんだよきつと」

「ははは…問題nothing 輝喜。お前の言つとおりだ…違うな…」

そっだな…。親友だと言っても知らないことってあるんだ…。すべてを知ろうなんて俺の傲慢なんだ…。

日向の乾いた笑みと輝喜の満面の笑み。その2つの笑みを見つつ、俺は息を吐き出した。

そうさ…。すべてを知ってるなんて…俺の傲慢なんだ…。このとき俺は寂しげな笑みを浮かべてることに気付いてなかった

「【女神の間】か…どういう意味かしら？」

そのとき、唐突に響いた姉貴の冷静な言葉に俺は我へと帰る。それは俺だけじゃなく、日向や輝喜にも同じことが言えていた。

4人で再び目の前のドアを見上げ、ゆっくりとその意味を考え…ふと、輝喜が閃いたような顔で俺達の顔を見渡した。

「はいはいはい！！俺、分かっちゃったかもしれない！！このドアの向こうにはさ…。きつと、物凄い美人がいるんじゃないかな？と俺は考えたわけです」

そんな突拍子もない輝喜の言葉に俺達はため息をはいた。そんな単純…。と、呆れてしまったのだ。だがしかし

美人。美人。美人ねえ…。そう言えば昨日は美人じゃないけど美少女に会ったよう…。

俺は頭でサラサラって昨日のことを整理する。確かに昨日は今までの人生でもかなり濃い1日だった。だが、それでも印象に根強く残るものがある。

後ろで縛った水色の髪。雪のような白い肌。そして水のような青い瞳。俺の頭の中で何かが弾け飛んだ。

『刹那!!!!!!!!!!!!!!』

次の瞬間。俺、日向、姉貴がほぼ同時にある人物の名前を叫ぶ。さつきまで日向の携帯で通話していたそいつの名前を。

どうやら日向と姉貴も同じ答に辿り着いたみたいだ…。確かにあいつは美少女だ。それもかなりのだ。だが、姉貴はどこか納得がいかなさそうな顔をしていた。

「うーん…。でも…刹那は女神というより…乙女って感じよね…。年齢的にも容姿的にも…」

「…その違いは何だ」

姉貴の呟き。それは俺達にはさっぱり分からない違いだった…。

だが、彼らは知らない。このとき外部マイクで凧の声を聞いていた知恵理が凧の考えに同調して刹那を褒め称えたたおていかことを…。そして刹那の顔が真っ赤になつてゐる事を

「まあ…とりあえずこの先に待つてるのが刹那かどうかは入つてみたら分かるだろ…」

「うーん…まあそうね。不本意だけど、今回はあなたの言葉に同意するわ」

「そうだね ナギリンの言つとおり 本当に不本意だけどね」

「問題 nothing。不本意だけど仕方ないな…」

「お前ら俺に何か恨みでもあるのか!？」

四方八方からたこ殴り。親友全員からフルボッコ って何だこの状況!？」

俺はこの仮面投下（四面楚歌のことです）な状況に頭を抱え、うが

「……と言いながら頭を掻きまづる。最早周りに俺の味方はいなかった……」

すべての者が敵にみえる。

「……とまあ冗談はここまでにして」

「俺には冗談には聴こえなかったけど……」

俺の言葉に3人が苦笑い気味に頷いた。あまり頷いて欲しくないけど、のを見た俺ははあ……と溜め息を吐き、ドアへと手をかけた。

締めまりがない始まり方だなあ……と内心思いながら。

ギ　　ッ……！！

今どき下手なホラー映画でもないくらいのベタな音を出して開くドア。

開けた瞬間に溢れる明かりその奥には洋館にはありがちな玄関ホール。それにシャンデリア（シャンデリアのことです）が吊されている。

た…。

そしてそのホールの真ん中にいる1人の男。ボサボサな金色の髪。俺よりもさらに大きく、姉貴より一回り近く大きな大男。そんな男が目をつむり、静かに佇んでいた。

「お前は…誰だ…？」

「それ以前に日本語通じるのかしら…？」

警戒を怠らず、目の前の男にそう問いかける日向。同じく警戒を怠らず男の様子を伺う姉貴は、男にいつでも噛みつける体制をとっていた。

そして、そんな2人とは対称的に俺はその2人の後ろで輝喜かばう形で輝喜の前に立っていた。輝喜を守るためである。

重たい空気が辺りに流れる。そしてついに、目の前の男が口を開いた

「Ich freue mich, Sie kennen zu lernen.」(初めまして)

…少なくとも女神には見えないその大男はゆっくりと目を開けると、流れるような外国語が口から出てくる。

正直、俺には理解できない。それは天才だとうたわれる日向や、もちろん輝喜も理解できてないはずだ。だけど

「Deutsch Auforen?」(ドイツ語。止めてくれるかしら?)

「Oh Entschuldigung」(これは…失礼しました)

この中で唯一。この言葉を理解している奴がいる。他ならぬ…俺の姉貴だ。

男と同じように流れるような発音で、そう応えた姉貴に男は驚いた表情をした。

「失礼。失礼。すみません…。興奮のあまりつい母国語で話してしましまシタ」

だが次の瞬間。男の口から発せられたのははっきりとした日本語。俺はそのあまりの拍子抜けな感覚に言葉がなかった。

姉貴がいつたいどんな話をしたかは分からない。だがこれで俺達も理解できるようになった。

「へ〜…ゲイル先生と違ってちゃんとした日本語が話せるんだ〜」

「ワタクシ。大学では第2外国語で日本語を選択シテイタもので…」

「あっそ…。でもやっぱり所々に怪しいところあるわね…まあ仕方ないか」

確かに普段からゲイル先生あの片言の喋りを聞いていたからか、じゃっかん違和感を感じる。

だが、そんな中俺の考えとは関係なくその男は話は進めんでいった

「ワタクシは【デモナン・カイハーツ・キルデ】ドイツ人の技術者
で時の番人の【技術開発局^{テックハ}】の局長を勤めてオリマス」

「デモナン・カイハーツ・キルデ…」

オウム返しに俺は男の名前を呼ぶ。すると男は俺の声に気がついたのか、ニツコリと微笑むと呟いた。

「Ich freue mich Sie zu sehen.)
あなた方とお会いできて光栄です」

「は…:…?」

「あたし達に会えて嬉しいって言うてんのよ…。にしてもその名前。なんとかなんないの?長すぎんのかな…」

「エエ。ですが長い名前なのでワタクシの周りは縮めて【デモン】と呼ばれてオリマス。ですからミナサンも、ぜひそう呼びください…」

姉貴の言い分に、苦笑いを浮かべながらそう応える男 いや、デモン。

そして姉貴とデモンとの話は最も重要なところへと到達する。

俺達がこの場所に来た目的。俺達とデモンがなぜ今、この場で顔を合わせる事になったのかを

「ん。じゃあそうさせてもらうわデモン。こっちもやることやっちゃえば文句ないんだし。そういうわけだから」

そう言うと、姉貴はデモンの後ろへと見えるこの屋敷の奥へと続く階段を指差した。

「この先。行かせてもらってもいいかしら？」

「…それとこれとは話が違いマスネ。Unterschied（違い）デスネ」

途端。俺達とデモンとが孕んでいた空気が一変する。そう…俺達は敵同士。いくら話が合っても、それだけは決してひっくり返らない事実だった。

「そう…あんたかその気なら、あたしはあんたを尻払って進むだけよ…」

「Das kann ich nicht machen（…あなたには出来ません。決してね…）」

こうして俺達と時の番人との闘いが始まった

第24話 プタハの局長（後書き）

作「Yahooー！今回は新キャラ登場ということで、今までで一番人気があるキャラクターに来てもらいました」

レ「こんにちは。なぜか謎な人要員なのに一番人気のレリエルと申します」

作「はい、丁寧な挨拶ありがとうございます。本当に書いてる自分も何で人気があるか分からないんですよえ…？」

レ「くすくす。キャラ投票では1位になってみせますよ」

作「ははは…さて、あなたの正体うんぬんはこの際無視して今回は話の流れについて教えていただきたいと思いまーす」

レ「俺が知ってることでよければ何でもお聞きください」

作「ありがとうございます。では、さっそくですけど【デモナン・カイハーツ・キルデ】さんはどんな人ですか？」

レ「はい。お応えします。デモンさん。彼はとても紳士な人ですね。技術開発局の局長らしく頭もよくて確かポストンの大学にドイツから留学したらしいです。後はそうですね…《世の中の人間は二通りある》が口癖なんです」

作「なんですかその口癖？」

レ「どうやら昔の経験だそうですね」

作「そうなんですか…じゃあ、技術開発局フタハって何ですか？少なくとも自分は「プタハ」って名前は聞き覚えがないんですけど…」レ「はい、お答えします。そもそも時の番人クロノスの名前の由来は時を司る神【クロノス】から来てます。それと同じで時の番人にある4つの部署も神様の名前から来てます。そして、4つの局の1つがこの【技術開発局フタハ】なのです。ちなみにプタハとはエジプトの創造神のことなんです」

作「はい、ありがとうございます。それにしても時の番人って一体何なんですか？」

レ「それはヒ・ミ・ツです」

作「……………」

レ「あ、そろそろ刹那がゴネるころなので帰りますね」

作「え`。せめてこの場の空気戻してから…………チツ。逃げたな。まあいつか。じゃあ次回予告行きます。時の秒針、次回は

最初の部屋【女神の間】。その名前の由来となる女神がついに現れる。

果たしてその正体とは？

次回【機械仕掛の女神】

日「問題nothingだぜ!!」

作「はい。じゃあ最後にデモナン・カイハーツ・キルデの名前の由来ですが…分かりますよね？」

【何でも開発できる】です。

それではみなさん。また次回会いましょう!!」

次回に続く!!

第25話 機械仕掛の女神（前書き）

女神の間の正体とは？

第25話 機械仕掛の女神

デモンス・イデ

「そう…あんたかその気なら、あたしはあんたを尻払って進むだけよ…」

「Das kann ich nicht machen…あなたには出来ません。決してね…」

ワタクシの目の前にいる子供達。その中でも特に小柄な少女の言葉に、ワタクシは白衣をバサリと靡かせ、ポケットへと自らの手を入れマシタ。

それと同時に身構える彼ら。やはり一筋縄では行かナイ子供達デスネ…。

さすがは水城が目をつけタ子供達デス。その反応はもうすでに子供の域を超えてマスヨ…。それに

「……………」

先ほどからワタクシを一直線に睨みつけてイル漆黒の瞳。ワタクシはその真っ直ぐな瞳に思わず恐怖を感じてシマイマシタ。

あの瞳。4年タツタ今でも忘れるコトはできません。あの瞳に隠された彼の悲しい日々。そして楽しかった日々を知ってるからこそ

「…Entschuldigen Sie, bitte」
すみません…

ワタクシは彼に謝らなければいけません。大人として、時の番人の一員として…あなたにはまた辛いコトを押し付けてシマイマス。

どうか…この不甲斐ないワタクシ達を恨まナイ　いえ…思う存分恨んでクダサイ…【日向】

「世の中には二通りの人間がいます…知を【知る者】と【知らない者】です」

唐突なワタクシの言葉に首を傾げる4人。でもワタクシの話は終わりません。いえ…むしろ

ここからが、ワタクシの話の本題です…。

「…いつたいどういう意味よ。それは…？」

「…あなた方は知とは何だと思いませんか？理論？証明？考察？知恵？…確かにそうデス。それらは間違いなく知であり、知の根と言えるデシヨウ…。ですがその神髄は違います」

そしてワタクシはポケット入れたままの手を抜きます。そう…知とは

「知とは…【武器】デス」

抜き出されたワタクシの右手。そこにはあるものが握られていマシタ。

ワタクシの26年間溜めてきたすべての知を結集して造ったワタクシの武器。それを起動させるための黒いリモコンが

「知。そして、それは時として【能力者】と【凡人】との間にある壁をも取り払うこともできるのデス。だから、私はあなた方を

倒します…！！」

そして、ワタクシはリモコンの真ん中にある赤いボタンに指を向けマシタ。これがワタクシの秘密兵器の起動スイッチ。ワタクシが日向にデキル最後の罪滅ぼし。

ワタクシはここであなたを止めてみせます。これからのあなたの

あなた方の希望アル未来を消さナイために…！！

そう決意を固め、ワタクシは戸惑いなく…そのボタンを押しマシタ。

あなた方の希望アル未来を照らし出す太陽のような光となってクダサイ。

ワタクシの願いを届けてクダサイ【アマテラス】

日向side

俺はこの事態にただただ呆然とするしかなかった。とても問題no thingと言える状況ではない。

だが、この現実を俺達は受け入れるしかなかった。

トトトトト...ッ!!!!!!

響き渡る地響き。それと平行するよう起こる地面の揺れに俺達は立つことさえもままならない。

さらに突然目を開けることもできないくらいの光を天井から吊り下がるシャンデリアが放ち始めたため、俺達は目を開けることもまともにならなくなった。

そう...それはまるで燦々と輝きを放つ太陽のような光だった

「ぐっ...!!な、なんだ...!!? いったい何が起こってるんだ!?!」

「姉貴!!!日向!!!輝喜!!!無事かあああああああ!?!」

シャンデリアが放つ光で俺達は横にいる仲間の姿すら見つけることができない。耳に響く真備の声。だが、俺達は誰1人としてその声に応えることはできなかった。

そもそもなぜこの事態に陥ってしまったているのか？そんなこと解りきっている。突如としてデモンが白衣から取り出したあのリモコンが原因だ。

いったいデモンは何をしたんだ！？しかし、俺はこの状況の中、為すすべなく地面に張り付くしかなかった。

ゴゴゴゴ...ッ！...！！

そのとき、事態はさらなる急展開を迎える。地面が地響きによる揺れとはまた違う揺れ方をしだしたのだ。

あまりの衝撃に、俺は急な光で潰れた目を無理やりこじ開け、驚きを保ちながら前を向く。光は止み思いの外視界は正常に機能している。

だが、俺の目に映ったのはにわかには信じられない光景だった。

「な、なんだ!？」

驚きのあまり俺はその光景から目が離せい。普通なら信じられない。だが、これは間違いなく真実だった。

「k i n d e r s p e i s e k a r t e (あなた方の為のメニュー) デス。存分にお楽しみクダサイ…」

そう言つてクフフ…と含み笑いをするデモン。だがその姿を俺達が確認することはできない。

なぜならデモンの前の床。そこがきれいに2つに割けまるで神話の中に出てくる女神のように【そいつ】が出て来て、そしてそれがまるでデモンを守るかのように彼の前へと立っていたからである。

「何よ…あれ…?」

「【女神】だ…」

呆然として風と真備の声。無論、俺も同じ気持ちだった。これは…
明らかに俺の　俺達の想像を超えている。

そんな代物が俺達の前へと現れたのだった。

「Ich hoffe, dass das Ihnen gefa
llt.」(お気に召すとよろしいのですがね)「

「Schlecht」(最悪ね)「

デモンの前にいるそいつの正体。それは石像だった。

隣にいるデモンでさえ長身で2メートル近い高さがあるというのに、
突然現れた石像はデモンのそれよりさらに高い。

だかしかし、一番驚くのはその石像の容姿である。その姿はまさし
く美女。とても綺麗な女の人だった。

それは【ヴィーナス】もしくは【自由の女神】とも呼べる美しさだ
った

「…なあ輝喜。なんか前に美術の教科書で見た気がしないか、あれ
？」

「芸術品かな？俺もよくは覚えてないけど確かに見た気がするよ……」

疑問符を浮かべる真備や輝喜の眩き。デモンはその2人に応えるようにその【兵器】について説明を始めるのだった。

「これは、対人用決戦兵器【アマテラス】私の現時点での最高作品です」

作品…ということとはこれはデモンが作ったものなのか…。もしかしたらこの人は芸術家なのかもしれない。

初めは頭の中でそう思考を巡らせるもすぐに否定する。なぜならさつき電話してたときの刹那の言葉を思い出したからである。

『最初は技術局のデモンさんが張り切ってたんだけどオレとレリエルが何とか止めさせたから…』

このときの刹那の言葉。その中に含まれる技術局のデモンさんという言葉を俺はしっかり覚えている。

ということとは結論は1つ。

「…デモンさん。あなた技術者メカニックですよね？どうしてこんな芸術作品を出したんですか？」

隠すことのない正直な思い。俺はそれをデモンに真っ正面から伝える。

だが、対するデモンはほんの少し…口元を歪ませる。そして一瞬後に高らかに笑い始めるのだった。

「ハハハハハハハハハハッ！！！！Wonderbar！！！！ごっこはすWonderbar！！！！ハハハハハハハハハハッ！！！！」

「…何がおかしい？」

その非常識な反応に、少しだけむっとした俺は高笑いするゲイルに少しトゲトゲしく語りかける。

だが、デモンの方はそんな俺の態度を気にもせず、また1人で話を進めていくのだった…。

「ハハハハ…。Wonderbar…。実にWonderbar…。すばらしいです。さすがは日向というところデスカ…」

「…！？俺の名前を…！！」

「そう驚くことはアリマセン…。アナタとワタクシはかつて同じ組織にイタのデスカラ…。ワタクシがアナタを知っていても当然デス…」

「…やっぱり、俺はこの組織にいたのか…」

デモンから出てきた言葉。それは昼間の時点で見らかになっていることだから特に驚くことはない。

だが、驚くこととその衝撃を受け入れることはまた別だった。

俺はいつたい…昔、何をしていたんだ…。その謎が深まるばかりである。だけど…だけど今は

「ウツセエエエエなんだよ…！！さっきから…！！今は日向の過去がどうだろうと関係ねーだろ…！！」

「そうよ…！あたし達はねえ…日向の過去なんてどうでもいいのよ

「！！今大事なのは知恵理を取り戻すことだけなんだから！！話変えんじゃないわよ！！」

そつだ。今大事なのは俺の過去なんかじゃない。そんなものより大切な…ずっとずっと大切な…あいつのことだ！！

「…OK。問題nothing。真備。凧。お前らの言つとおりだ。記憶なんか糞くらえ！！過去なんか糞くらえだ！！俺達の前にそんな置物だけで挑んできたことを後悔させてやる！！」

「来い！！【雷神】！！」

俺の宣言に、先陣を切るかのように真備の叫びが木霊する。辺りにまき散らされる電撃。だが、そのほとぼしる電撃は決して俺達に当たることはない。

真備が昨日より…そして、今日の朝より各段に魂狩の扱いに慣れた証拠だ。

この半日…俺達が何もしてなかったと思うなよ！！

バチバチッ！！バチバチッ！！ピシャアアアアアアアアア

アアアア！！！！！

「Ja, ich bin damit einverstanden. (…なるほど、納得しました。) ただの物置には用はないというコトデスネ…」

耳につんざく雷の音。だがそれが止み、部屋が始めてと言っている静寂となる。嵐の前の静けさ…ということなのか。その静けさを破ったのはデモンのその言葉だった。

「要するにアナタ方はワタクシの発明品を愚弄スルというデスネ…。まあ、それも良いデショウ。その場合アナタ方を」

静かなる威圧が込められたデモンの声と共に、アマテラスと呼ばれる石像の隙間から見えるデモンがその手に持つリモコンのボタンを押す。

すると、芸術品とも呼べるアマテラスの口が開き、芸術とはかけ離れた機械じみた筒のようなものが出てきた。あれはいつた…??

「ワタクシはアナタ方を　倒すまでデス…」

「…！？まさか!？」

いち早くその筒の危険性に気がついたのは…真備だった。そして、そこからの真備の行動の速さは尋常ではなかった。

真備はまず一番近くにいた輝喜を思いつきり蹴飛ばすと俺にアイコンタクトを送る。その意味を察知した俺はすぐさますぐ横にいた未だに状況を飲み込めずにいる凧を抱え急いでその場を退避する。

抱えている凧が小柄で軽いからかそれなりの速さで走ることができた。だが

「無駄デスヨ…」

ガガガガガッ！！！！

だが　アマテラスが…デモンが俺達を逃すことはなかった。アマテラスが口を開けた時点で…俺達は

突然響いたその不可思議な音に、俺は走りながらアマテラスへと目を向ける。でもそれがいけなかった。

「…っ！？くっそおおおおおおおおお！…！！！」

「ちよっ！？ちよっ日向！…どうしたっていつのよ！…？ていつかいい加減離しなさいよ！！HENTAI！！！」

脇に抱える風が何か叫んでいるが今は関係ない。なぜなら時はすでに一刻も争えない状況になっているからである。

「…逃れラレルとは思わナイことデスネ」

「日向！！！！姉貴！！！！！」

真備の叫び声が木霊する。どうやら真備も俺達の状況に気がついたみたいだ。だが…真備にだってもうどうすることもできない。

ここまで離れてしまったら…。もう…俺達がいるここまで辿り着くことは不可能だからだ…。

それに、もし追いついたとしても真備には何もできない。いや…俺や風でもこの状況を打開することはできないだろう…。

俺と凧を追尾するかのように首を曲げながら照準を合わせるあの女神像　アマテラスからは…！！

そう…おそらく俺達はすでにアマテラスの標的ターゲットとしてロックされているのだと思う。なぜなら、それは向こうの立場となって考えれば正しい判断だと思うからだ。

ガガガガガッ！！！！

「…くそっ！？振り切れない…！！」

俺はデモンじゃないから分からないが、あれに標的を追尾する機能がついていると仮定する。その場合、俺だって確実に向こうではなくこちらを狙うと思う。

より邪魔な存在である魂狩を使える能力者が2人もいるこっちの方を…。

くそ！！凧を抱えたのは失敗だった！！さっきは4人別々に逃げべきだったんだ！！そう地団駄を踏んでも後の祭り。今更言っても仕方がないことだった。

今更、凧を降ろすなんてことはできない。すでに狙いをこつちと定めた筒がこつちを向いてる今、凧を降ろすために一瞬でも止まった

ら遠慮なくドカンだろう。それだけは避けなければいけない。

「はあ…はあ…はあ…!!」

だけど、このまま走り続けると確実に体力を削られいつかはドカンだ。しかも軽いとは言え、人一人を抱えている現状…もう時間の問題だ。

Uターンをして真備達のところへ帰ることももちろん考えた。だが、それでもUターンするときに一瞬止まらなければいけないし、そもそも真備達のところへ言っても意味はない。巻き込むだけだ。

何か…何かないのか!? 手立ては!?! だが、走って体力を消耗した今の俺に策を講じることができなかった…。チクシヨ…。もう何にも考えつかない。万策つきた…か。

こうなったら風を安全な場所に投げて俺だけが犠牲に…。そう考えたそのときだった

ガッ…!!

「うわっ!? 嘘だろ!? チクシヨオオオオオオ!!!!」

「…それは現在、俺とお前が立っている状況に対してか？それとも、こんなとこでまさかのドジっ子アピールをしちまった俺に対してか？」

「…そんなの決まってるじゃない。どっちもよ」

「お互いにな…」

お互い。それ以上の言葉はいらなかった。俺は自らの犯した致命的とも言えるミスを把握しているし、凧も自分が足手まといだったことを理解しているのだろう。だからお互い言葉はいらなかった。

そして、そんな俺達にデモンはニヤリと笑みを浮かべると…。静かに口を動かすのだった

「Auf wiedersehen・Nagii・Hinata・）
それではサヨサナ。凧…それと日向（）」

ピカッ！！！！！！！！！！
イイイ！！！！！！！！！！

その刹那。俺と凧の間に閃光が走るのだった

「世の中には二通りの人間がいます。【勝者】と【敗者】です
…」

デモンのその言葉を…俺と凧は聞くことはできなかった…。

「はあ…はあ…誰が…はあ…敗者…だって？」

凧 side

「はあ…はあ…誰が…はあ…敗者…だって？」

あたしは目の前で起こっていることに思わず両手で口元を覆ってしまつ。信じられない…いや、信じたくない光景があたしの目に飛び込んできたからだ。

「アナタのコトデスヨ…。美しい光景だとは思いますが…。頭が言い行動とは思いません…」

「はあ…はあ…余計な…はあ…はあ…御世話…だ…はあ…クソヤロオ…」

「…喋ることも辛いはずデスのにさすがデス」

「はあ…はあ…はあ…」

バタンツ…！！！！

そして、あたしのすぐ目の前で“そいつ”はまるで魂が抜かれたように崩れ落ちる。あたしは…崩れ落ちる“そいつ”を見ていることしかできなかった

「ウソ…ウソでしょ…！！」

あまりの光景にただ見ることにしかできなくなかったあたしは、そこでやっと固まっていた体を動かせるようになり、急いで目の前の“そ

いつ”のもとに駆け寄る。

「しつかりなさいバカ！」

あたしは必死だった。“そいつ”に駆け寄り、何度も何度も呼び掛け続ける。だって…だって

「ねえ…！！しつかりして！！お願いだから…お願いだから…！！目を開けてなさいよ！！【真備】！！！！！」

その場に崩れ落ちたのはバカだけど…誰よりも強くて優しい大切なあたしの弟。【真備】だったからである。

信じられないとばかりにあたしに続いて駆け寄る日向。日向と同じような表情で向こうから全力疾走してくる輝喜。

だけど、誰よりも速く真備のもとへと駆け寄ったあたしが誰よりも速く真備の現状を知ることになった。ボロボロになった真備の姿を

「はあ…はあ…あ…ね…き…はあ…はあ…」

「ま…真備…！気づいたのね…！喋っちゃダメよ…！ちょっと待って…今、ゲイル先生から貰った薬持ってくるから…。ほんの少しだけ…待って」

「姉貴…ごほつ…！ごほつ…！ガハツ…！はあ…はあ…」

「真備…！…！」

身体中ボロボロで…口を開くのもきついはずなのに言葉を続ける真備。その姿にあたしはキュッと唇を噛み締めた。

なんで…。なんでなのよ…。なんで

「なんで…なんであたしと日向を庇ったのよ…！…」

「…へへ…」

あたしは真剣に聞いてるって言うのに、こいつは何を思ったのか嬉しそうに微笑みやがる。何よ…。何がそんなに嬉しいのよ…。

気付いたときには、あたしの頬を温かい何かが滴り落ちる。何かなんてことは聞かないでほしい。あたし自身だって分かってるから…。

だつてのにこいつは

「はあ…あ…ねぎ。はあ…はあ…はあ…はあ…なく…なよ。泣かない…
で…くれ…よ…」

「バカ…バカバカバカ!!」

あたしの頬に手を添え、今度はあたしに安心させるように笑顔を見せる。あたしはあんたを…あんたを守るって約束したのに…。そんな風に笑わないでよ

707

「真備…」

「マキビン…」

いつの間にそこにいたのか、あたしのすぐ目の前には真備とあたしを見守るように日向と輝喜があたし達を見つめる。

その姿は真備にも見えていたらしくいったんあたしから視線を外し、日向と輝喜へと微笑んだ。

「へへ…2人も…ごほっ!!ごほっ!!無事で…よか…った…ガハッ…!」

「…問題nothing。俺も輝喜も大丈夫だ。お前のおかげでな…」

「うん。ありがとうございませすマキビン…」

「はは…はあ…はあ…な…んか…照れる…な…」

ククツと笑顔を見せる真備。そして、真備の手があたしの頬から…スリ落ちた。

「真備!?!?!」

「へへ…ちょっと…はあ…はあ…げ…んか…い…はあ…はあ…みた…いだ…」

「真備…。うん…分かった。あんたは頑張ったわ。だから…少し休んでなさい…」

だんだんと閉じていく真備の瞳。それを見ながら、今度はあたしが

真備の頬へと手を添える。少しだけ…真備の表情が和らいだ気がした。

「…なあ…はあ…はあ…あね…き…はあ…そ…うだな…はあ…俺…少しだけ…はあ…はあ…寝る…から…ガハツ！！ごほっ！！終わったら…おこ…して…く…れよ…？」

「…もちろんよ。起きなかつたらあんたのこと風払ってやるんだからね」

「はあ…はあ…そ…りゃ…怖…いな…」

最後にはいつもの真備みたいにあたしへの皮肉を口走りながら瞳を完全に閉じる。そして、それからすぐにすうーすうーと寝息が聞こえてくる。その顔は、案外安らかな顔だった

日向side

「…真備。ありがとう」

俺は穏やかに寝息をたててる真備に語りかけ微笑む。真備が応えることはないが俺は真備の安らかな顔を見るだけで十分だった。

だが、俺はすぐに表情を引き締め振り返る。するとそこには

「Endden（終わりましたか）？」

そこには さっきと変わらず同じ場所にボサボサの金髪に白衣を羽織った男。デモンがリモコン片手に立っていた。

その表情は真備を撃ったにも関わらずさっきと変わった様子はない。俺はその姿に底無しの怒りを覚えていた。

「…デモン。問題nothingだ。お前が何言ってるのかは正直俺には分からない…けど、これだけは言っておく」

俺の言葉に気がついたのか真備を見るために屈んでいた風は立ち上がり、輝喜も俺と同じようにデモンがいる方を振り返る。

きつとこのとき俺達は全員、同じことを考えていた。だから代表して俺が言わせてもらう。俺はお前を

「俺はお前を 絶対に許さない…!!」

俺の言葉に凧と輝喜の瞳が鋭くなる。それを確認した俺は2人に見えるように…そして聞こえるように…発動させた。

「来い!! 【紅翼】!!」

ボオオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!!!!!

俺の叫びと同時に俺達3人を囲むように、辺り一面から炎が舞い上がる。熱く燃えたぎる炎の渦。怒りのせいか、これまでの中で一番燃えたぎっていた気がした…。

「発動!! 【風神】!!」

次いで、凧の聲が一閃する。その刹那、凧の纏う風が俺達を囲む炎の渦が刃で斬られたように引き裂かれ、俺達の姿が露わになった。

日本刀を握りしめる俺と鉄扇片手の凧。それに力がこもった瞳をした輝喜の姿が

「…凧。輝喜。俺達はこれから何をしなければいけないか…分かってるよな？」

「ふん！！愚問ね日向。そんなの決まってるでしょ。あたしの弟を傷つけたこと…後悔させてやるんだから…！！」

「そうだねナギリン。俺達はマキビンの仇を討たないとね。だから…あの人を…デモンさんを…」

そう言うと俺達は昨日の不良達との喧嘩のとき。それに今日の朝の水城との闘いのとくと同じように俺は日本刀を、凧は鉄扇を…そして、何も持たない輝喜は人差し指を…デモンに突きつけた。

真備…お前が救ってくれたこの身体。絶対に…絶対に無駄になんかしない。だから、そこで見ていてくれ。俺達が

『』断罪する！！！！！！』』

俺達が 勝利する瞬間を。

「でも…その前に」

「真備を…あたしの大事なものを傷付けたあのオモチャを」

『『ぶっ壊す!!!!!!!!!!』』

そう啖呵をきつた俺は右から風は左からそれぞれアマテラスに突撃する。

無謀とも言える賭だった。だけど動けないアマテラスには懐に入っ
てしまえばこっちのものだと考えたのだ。

「デモン!! 覚悟は問題 nothingか!？」

「応えは聞いてないけどね!!」

そして、俺達はアマテラスへとたどり着く。だけど…俺達の考えは
つくづく甘かったことを思い知らされるのだった

「… Ad f a h r t (… 発射)」

そして、デモンの口はしっかりとその言葉を口にし、手に持ったりモコンのボタンを高速で操作した。こればかりはドイツ語が分からない俺にだって分かる。

あれは俺達への… 攻撃命令なのだ

ヒュンツ！！ヒュンツ！！ヒュンツ！！ヒュンツ！！

イージスシステム。そう呼ばれたアマテラスから放たれた大量に飛び交うミサイル。その光景に呆然とする風はその場を動くこともできてない。

だが、そんな風のもとへもミサイルは容赦なく降り注がれた。

「ナギリン！！！！！！！！」

「…っ！？羽前流式紙術」

ダンッ！……！ダンッ！……！ダンッ！……！ダンッ！……！

しかしそのとき、風は突如としてそこに現れた輝喜に抱えられその場を後にする。その刹那、さっきまで風がいたその場所が吹き飛ばされる。まさしく九死に一生。その言葉がそのままではまる状況だった。

小柄な風をその腕に抱えた輝喜は、そのままさっきの俺と同じく風を抱えて走る。

だが次の瞬間。さっきとは違い風は輝喜の腕の中からすりりとすり抜けると懐から一枚の紙を取り出すのだった…。

あれは…まさか？

「 【碧空】 」

“ くきくう ”

パリンッ…！…！

… やっぱりそうだ。あれはやっぱり…羽前流式紙術。俺は、まるで

凧を囲むように現れたその結界を見て全てを把握した。

四方八方をガードすることができる結界【碧空】それは、全方位をガードすることができる。まさしくほぼ“鉄壁”の結界だった。

ただし、発動するとその場から動けなくなるという弱点があり、結界自体の硬さも【虚空】より落ちる…らしい。

この半日で頭に入れた羽前流式紙術の情報をフルに回転させ、俺は頭を落ち着かせ状況を分析する。未だに不確定要素は多いが…。でも…1つだけ俺にも確実に分かっていることがある。それは

ドカンッ！！ドカンッ！！ドカンッ！！ドカンッ！！

それは　これで、ヤツの　アマテラスのイージスシステムの穴が出来たということだ。

とにかく、凧はうまくミサイルを避けきることに成功し、次いで…輝喜も凧が張った結界へと避難する。あとは

「あとは…俺さえあそこに行けば体制を整えることができるってわけだな」

そう。あそこに行けば少しの間とは言え3人で集まり話し合う時間がとれるというわけだ。

それさえできれば…まだ俺達にだって勝機はある。

だけど、ここで一番の問題がある。それは…俺の危険性はまだ立ち去っていないということだった。

ヒュンッ！！ヒュンッ！！ヒュンッ！！ヒュンッ！！

上、下、左、右からそれぞれ1つずつミサイルが飛んでくる。だが、俺には風のような四方八方をガードする防御技はない。だったら…どうするか？

「…問題nothing。そんなの簡単だ」

そうだ。答えは簡単。

防御ができないならどうすればいい…？防御できないならどう動けばいい…？昔の言葉にこんなものがある。“攻撃は最大の防御”それはつまり

シャキンッ……!!

全て…切り落とせばいいだけだ。

いつもより軽く感じる紅翼を握りしめ、俺は飛んでくるミサイルへと刃を向ける。

「…やってやるよ。全部…ぶった斬ってやる!!」

シュタツ!!ザアアアアアアアアンッ!!

そして俺の孤独なる闘いが始まる。誰一人として頼ることができない。俺だけの闘いが。

「次……!!」

ザアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！

上からくるミサイルを切り落とし、右のミサイルを叩き斬る。

「はぁ……！！！！！！！！」

ザアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！

下からのミサイルはすくい上げるように斬り

「ラストオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！！！」

左からきたミサイルは突っ込んできたところを真ん中から真っ二つに引き裂いた。

ザアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！

にヤバい数だ。

一難去つてまた一難な状況…。俺達は絶体絶命な事態におちいつていた。

ダアアアアン！！ダアアアアン！！ダアアアアン！！ダアアアアン！！ダアアアアン！！

その中で、俺達はミサイルの着弾音を聞きながら話し合いを続けた

「くっ…！！あまり持たないわよ…どうすんの？」

「まずはあれに近付かないことには何もできないし…。どうすれば…」

「…ねえヒナタン。ナギリン。俺にいい考えがあるんだけど」

いつものニコニコとした顔じゃなく、真剣な…鋭い目をした輝喜の表情に、俺達も表情を強め…輝喜の話聞き入った。

輝喜が思いついた作戦。それを俺達は身を固めて聞き入った。な

るほど。おもしろそうだ…。

「風。結界はあと何分くらい持ちそうだ？」

「桁一つ違うわよ。分じゃなくて秒。あと30秒くらいね」

「ヒナタンもナギリンもいい??これは出てから20秒の速攻作戦。当たって碎けるとは言わないけどダッシュで片付けちゃお」

いつも通りの輝喜へと戻った輝喜のその言葉を最後に、俺達は結界が崩れ去るまでの残り秒くらいを静かに待つ。

ダアアアアン!!ダアアアアン!!ダアアアアン!!ダアアアアン!!ダアアアアン!!ダアアアアン!!

あと5秒…。

「日向。あんたが一番気張らなきゃいけないんだからしっかりしろよ??」

「…問題nothing。分かってるって風」

あと、3秒…。

「輝喜。頼んだぞ…お前に全てがかかっているんだからな…」

「くすくす もちろん 任しといてヒナタン」

そして結界の強度の残り時間は減っていく。残り時間。あと…3…
2…1

「じゃあ2人とも…！派手に風払うわよ…！！！」

『『ああ（うん）…！！…！！…！！』』

ダアアアアン…！ダアアアアン…！ダアアアアン…！ダアアアアン…！ダアアアア
アン…！！

そして俺達の起死回生へと向けた作戦が今…始まった。

ペンネーム【ニコニコ眼帯】さんからのお便り

真「…あいつか！あのかそ輝喜！！！！」

作「ちなみに似たようなお便りでもこんな質問がありまして」

真備が尻を殲滅して痛めつけて調教して【検閲消去】にして禁断の姉弟××しようとしているって本当ですか（笑）
ペンネーム【問題nothing】さんからの便り

真「おい！！こいつらは俺に死ねと言ってるのか！？そうなのか！？」

作「さあ？」

真「ていうか、一通目は輝喜だし二通目はどう考えても日向だよな！？しかも日向の文の最後に（笑）がついてる時点であきらかにこの状況楽しんでるよな！？なあ！？」

作「お好きな解釈でお受け取りください」

真「くっそ…あいつら…ぶぎゃ！？」

ドガシャアアアアアアアアアンツ！！！！！！！！

凧「あ〜ん〜た〜は〜!?!」

凧登場(哀)

真「あ…姉貴…なんで…ここに…??」

凧「知恵理からあなたがよからぬことを考えてるって聞いたのよ」

真「んなバカな!?!知恵理がそんなことを言うわけが　はっ!!
またあいつらかああああああああああああ!!!!!!!!」

凧「話はゆっくり聞かせてもらおうわよ」

真「いやだ〜!!!!H A・N A・S E!!!!」

凧「だが断る!!!作者!!!あなたはさっさと次回予告をしなさい!!」

作「あ〜はい…(南無南無)さて、時の秒針。次回は女神の間決着編!!」

果たして日向達の作戦とは何なのか?アマテラスの弱点とは??知恵理の運命とは???

次回【嘆くアマテラス】

日「問題nothingだぜ!!」

真「ぎゃあああああああああああ!.....!!」

日&輝『ドンマイ』

次回に続く!!

第26話 嘆くアマテラス(前書き)

タイトル考えるの疲れてきたな・・・

第26話 嘆くアマテラス

日向side

「じゃあ2人とも!!派手に凧払うわよ!!!!!!」

『『ああ(うん)!!!!!!』』

結界が破れる寸前。凧のその声と共に俺。凧。輝喜は一気に動き始めた。後ろを覗くことはできないが、おそらく俺達がさっきまでいた場所は哀れなことになっていると思う。

ただど今の俺にそんなことは問題nothing。この20秒。それが勝負だからだ。

「…逃げられると思ってイルのデスカ??」

デモンがそんなことを言ってるが今の俺たちには関係ない。なぜならば

「はっ！！問題 nothing！！その質問は愚問だぜ。だって俺たちは」

「逃げるつもりなんて」

「さらさらないんだからね！！！！」

逃げるつもりなんてなかったからだ。

右へ左へ真ん中へ、3人でアマテラスから放たれるミサイルを避けつつ様々な方向へと旋回する。そして、三方向へと散っらばった俺達は再びアマテラスのほうに近づいく。

所謂現地集合というわけだった。

「はああああああああああああ！！！！！！」

まず最初に3人の中で一番脚が速い俺がアマテラスへと辿り着く。するとやはり俺に対する攻撃がかなり増加する。だが、これも許容範囲内の出来事だった。

ダアアアアン！！ダアアアアン！！ダアアアアン！！ダアアアアン！！ダアアアアン！！

来るミサイル1つ1つを俺は切り落とし、間に合わないものはうまく体を捻って避けきる。

正直かなりきつい作業だった。だけど…これも十分に許容範囲内だ。アマテラスのミサイル発射口から放たれた迫り来るミサイルを俺はただひたすら切り裂き続ける。

俺に与えられた役割はたった1つだけ。それを絶対に完遂させてみせる！！

「はあああああああああああああ！！！！！！」

ザシュツ！！ザシュツ！！ザシュツ！！ザシュツ！！ザシュツ！！ザシュツ！！ザシュツ！！

このとき…俺は不思議な感覚に駆けられていた。まるで、頭で考える前に勝手に体が動くような…そんな感覚が。だけどこの感覚…身に覚えがあった。

ひたすら切り込むという動作を体が覚えているのだ。

そして俺は この感覚に溺れかけてしまっていた。この心地よくはないが懐かしい感覚に、俺は落ち掛けていた。だけど…俺が溺れることはなかった。

ガキイイイイイン！！

ミサイルを斬ったときは違う音が紅翼を持つ手から俺の頭の中へと伝わってくる。その音で俺は確信した。目的の場所へと辿り着いたのだと…。

俺の中の何かが溺れてしまう前に…俺はアマテラスのいる場所に着いたのだ。

「…斬る」

俺はそう呟くとアマテラスに刃をつきたてる。

だが、これで終われば本当によかったんだけど現実はそう甘くはなかった。

ガキイイイイイン！！

再び紅翼を持つ手から伝わってくる音に、俺の全身は凍りついた。なぜなら、アマテラスを斬りつけた感覚。

それはまるで鋼鉄に切り込んだような硬さだったからである。

「…ぐっ！！」

俺はあまりの硬さに手のひらにジンジンとした痛みを感じる。

それに伴い、体中に電撃を食らったような感覚にもみまわれる。やっぱそうそううまくいくわけがないか

「アマテラスの装甲はコンクリートにダイヤモンドを混ぜ込んだ超硬化装甲になってイマス。たとえ魂狩デモ傷を付けることは D a s i s t u n n o g i c h (無理です)」

聞きたくもない情報を言ってくれてありがとう。そんな悪態をつきたくなるようなことをデモンは俺達に語る。

だがしかし、ここで俺は1つの結論に至った。それは、やはり俺の紅翼 日本刀の刃ではあのアマテラスに傷をつけるのも難しいということだった。それはつまり

「ここまでか」

「…諦めましたか。日向？」

顔を伏せながら呟いた俺の言葉にそう返すデモン。しかし奴は大きな勘違いをしていた。確かにアマテラスに紅翼がきかないのはよくわかった。だが、別にそれ〃俺の負けではない。

デモンお前は俺達がこのことを予想していなかったと思うのか？ここにいるメンバーを誰だと思っている。桜時学園始まって以来の秀才ばかりだぞ？お前の勘違いは実に滑稽だな。

ああ。確かにここまでだ。それは事実だし認めもする。ただし

「俺の役目はな…」

シュタンツ！！！！

その刹那。デモンの横に高速で何かが近づく。そして俺はその正体を知っていた。

「さくすがヒナタン 完璧な仕事だったよ」

「問題 nothing!! 行け!! 輝喜!!」

そうやって俺が顔を上げたのと輝喜がデモンに殴りかかったのは同時だった。

「なにっ!?!」

少しだけ驚きの表情を見せるデモンに俺達はニヤリと笑みを浮かべる。さすがに、ここまで来れば分かると思うが、俺はオトリだったのだ。

俺がアマテラスに攻撃を仕掛けていたのは輝喜がデモンに近づくのを気づかせないため…。これこそが、俺に与えられた唯一の仕事だった。

そして、俺達はここまで完璧に作戦を遂行したのだ。

「はああああああああああああつ！！！！」

輝喜が殴りかかるのを見ながら俺はやった！！と確信を持つ。なぜなら、このコースは確実に仕留められるコースだったからだ。

…だが、それは相手がこのことに気づいていなかったらの話だったけどな

ブンッ！！

その音の正体は見ていなくてもももわかった。

喧嘩のとき。相手の拳を避けるたびに聞いてた音だったからだ。そう。輝喜の拳をデモンが後ろ飛びで避けてしまったのだ。

「…ちっ…!!」

輝喜の口から、輝喜らしからぬ舌打ちの音が俺の耳にまで届く。あのいつもニコニコしている輝喜の舌打ち。それは、悔しがつている証拠であった。

こうして輝喜の奇襲は失敗してしまったのだった。

「…Wunderbar!!^{すてきな}なかなかIntressant^{おもしろい}な作戦だったデス。デスガ、技術開発局^{フタハ}の局長であるワタクシのKoppf^{（頭）}を舐めないでいただきタイ。これくらいの作戦見破れマシタよ…」

地面へと着地しながら俺達の作戦は見破っていたと語るデモン。だが、その様子を見ていた俺と輝喜は口元を緩ませ 失笑したのだった。

「はははは…」

「くすくすくす…」

失笑しながら俺達はデモンの降り立った場所を見つめる。

その様子を不思議に思ったのか、デモンはついにしびれを切らして俺たちに問いかけてきた…。

「Warun lachen. (なぜ笑う)? 何がオカシイ?」

少し、力がこもったデモンの言葉。それに輝喜はクスリと笑みを浮かべ、簡潔かつ明解に答えるのだった。

「…ねえデモンさん。思い出してください。最初の俺達の言葉を…。さて、ではここで問題です。最初にヒナタンとナギリンは最初になんて言ったでしょう?」

その通り 戦闘準備を整えた俺達が最初に言った言葉を思い出してもらいたい。

『でも…その前に』

『真備を…あたしの大事なものを傷付けたあのオモチャを』

『ぶっ壊す!…!…!…!』

問題 nothingか？

そう。つまり、もしもあのまま輝喜がデモンをしとめていれば、最初の俺達の言葉に矛盾がしょうじる事になる。嘘はいけねーってわけだ。問題 nothing.

それと、さつき俺は確かに輝喜の奇襲が失敗したとは言ったが、別に作戦が失敗したとは言っていない。そもそも、アマテラスと対峙する俺に目を向けさせていたとはいえ、迫り来る輝喜に気付かないなんてあり得ない話だ。頭はいいらしいからバカじゃないし、デモン自身。それほど鈍感なわけでもないだろ。

そして最後の決め手。それはまだ作戦開始から13秒程しかたっていないということだ。それはつまり

『 』 決着は既についているってわけだよ () 『 』

「…っ!? しまった Falisch!?!」

作戦は現在進行形で継続中!! まだまだ俺達のターンってわけだ! ! さあ…行くぜデモン!! 問題 nothing 以外の解答は求めないけどな!!

「ぐ〜てんあ〜べんと!! こんばんわ。ずっとずっと会いたかったわデモン。そして…Auf サヨナラ Wiedersehen…デモン」

「な…何!？」

デモンの着地点から僅か1メートル後ろ。そこに彼女はいた。そう…デモンにずっとずっと会いたかった彼女　羽前凧が。

全ては彼女の為に用意された布石。オトリとなった俺のアマテラスへの無謀とも呼べる攻撃も。そして、輝喜の奇襲と思わせ、実はオトリだったデモンへの攻撃も…その全部が

ガキイイイイイン!!

小柄な体型をフルに活用して、輝喜の後ろに隠れながら一緒にデモンへと近づいていった彼女の為の布石だったというわけだ!!

「なっ…!？」

「輝喜!! そっちに行っ たわよ!!」

いつの間にか、気づかぬうちに近付いていた凧の突然の登場に、デ

モンはなす術なくその手に持ったアマテラスの操作スイッチを風神により弾かれてしまう。

スローモーションにすら見えたと一連の動作。その先には、待ちかまえていたとばかりに輝喜がリモコンをしっかりとキャッチしていた。

「さっすがナギリン その姿に憧れる」

「はあ…バカ言っていないでさっさと終わらせなさい。あのムカつく美術品の最後をね…」

「くすくす。そーですね じゃあさっそく…えくと…さっきデモンさんが押していたボタンは確かこの辺りに……えい!!」

ポチッ!!

ボタンを押しましたと分かりやすいその音と共に、アマテラスの口がまるで顎が外れたみたいに大きく開いた。どうやら間違いない。輝喜は問題 nothing にボタンを押したようだ。

さて…じゃあここからは仕事じゃなくて俺の個人的な憂さ晴らしつてわけだ。俺の炎は熱いかもしれないけど、全部喰わせてやるよ!!

『日向！』
日向！
『』

ボオオオオオオオオオオオオオオオオオオツ！！！！！！！！

凧と輝喜から同時に飛ぶ言葉に俺は紅翼を持ち直し、刃に炎を灯す。その行動に、デモンは慌てふためいた。

「日向！！な…何するつもりですか！？」

デモンから飛んでくる叫び声。だが、俺は止まることはない。

そして俺はアマテラスの口から目の前の俺へと向けられる砲門へと、日本刀の刃先で狙いを定めるのだった

「Auf Wiedersehen Amateras (サヨナラ、アマテラス)」

シャキンッ！！！バリッバリッバリッ！！！！

最後は、凧とデモンの会話から聞き取ったその言葉と共に、俺はアマテラスの口の中に紅翼を　日本刀の刃をぶち込んだ。

やはりそうだったみたいだ。いくら表面が堅い物質に覆われていても、中はこのアマテラスを動かすために様々な入り組んだ機械構造になっている。

そして入り組んだ機械構造になればなるほど精密機械ってのは、脆く壊れやすくなってしまっわけだ……。これが、アマテラスの弱点。精密機械故の繊細さというやつだった

「……っ！？日向！！急いでその場を離れなさい！！」

その刹那、唐突に響いてきたデモンの声に、俺は反射的にデモンがいる方角を見る。すると、そこには明らかに焦った様子のデモンの姿があった。

ただ事じゃない。その顔に、そう感じた俺は急いでその場を離れる。そして次の瞬間だった

バンッ！！バンッ！！ドガンッ！！ドガンッ！！ドガシャアア
アアアアアンッ！！！！！！

激しい爆発音と一緒にアマテラスが木っ端みじんに吹き飛ばす。その爆発を、俺はただただ眺めることしかできなかった。デモンの言葉がなければ、俺は確実にあの爆発に巻き込まれていた。そのことを考えると、冷や汗がとまわらない。それほど危ない状況だったのである。

「あ、あつぶねー…」

突然のアマテラスの爆発。その原因は解っていた。所謂”内部爆発”ってやつだ。

口に押し込んだ紅翼が蓋替わりとなり、ビームの出口を塞ぐ。そして行き場のなくなった力は仕方なく口の中で放出され。自爆したというわけだ…。

ヒュンヒュン…

パシッ！！

そのとき、俺の魂である日本刀【紅翼】がヒュンヒュンと飛んでくる。だけど俺は、それを慌てることなく見据えると、右手を挙げ悠々とキヤツチするのだった。

ふう…これでやっとすべての任務が完了したというわけだ。

「時間もぴつたり20秒…やりましたね！！ヒナタン！！ナギリン！！」

嬉しそうにまるで子犬のような笑顔の輝喜の声で俺達は勝利を確信するのだった。俺もそんな輝喜。そして凧と瞳を合わせると拳を突き出す。

「はあ…まったく一時はどうなるかと思ったじゃない」

「はははは。まあその辺は問題notHINGというところでいいじゃない！！なあ？」

「…そうね。あんたの言うとおりだわ日向。終わりよければ全てよし。結果 all right！！ってわけね。まあそんなことはどうでもいいわね」

「違うない…」

凧の声に俺はまんべんの笑みで答え、それはいつの間にか苦笑いへと変わる。そして凧も俺の突き出した拳に自身の拳を力強くぶつけて笑顔を創るのだった。

まあ…何はともあれ、これでこの部屋で俺達に課せられた課題はクリアというわけだ。じゃあ、最後に個人的な我が儘だけど、これだけは言ってお締めとさせてもらおう。さんはい

『あゝスツキリした！！！！』

アマテラスをぶっ壊したことで感じた気持ちはどうやら同じだったらしく俺と凧はまったく同じ口調で示し合わせたようにそう同時に言ってお締めとさせてもらおう。さんはい

「ワタクシの敗北ですね…」

そのとき。笑いあう俺達の真上から、さっきまでとは違い、優しさを感じるデモンの降参の言葉が聞こえてくる。

見上げてみると、そこには俺達（特に凧）より遙かに背が高いデモンの姿があった。若干、横の般若（凧）から睨まれているのは気にしないようにしよう。見たら視線だけで殺されてしまうからな

「世の中には二通りの人間がイマス」

またしても、唐突なデモンのその言葉に俺達は身構える。だが、そんな俺達の思惑とは裏腹にデモンは優しく微笑み続けるのだった。

「それは何？」

「知を【知る者】と【知らない者】です」

時間がたち。我慢できずに聞き返した凧の言葉に対するデモンの返答であるその言葉は、戦闘が始まる前にも聴いた言葉であった。

「知を知る者は、知の海に溺れ、知を知らない者は知の海を泳ぐすべを知らナイ…人間ト八実に愚かな生き物デシヨウカ。ワタクシが言っテイル意味。ワカリマスカ？」

「……………」

デモンの言葉に、俺はゴクリと唾を飲み込む。理由は分かっている。言葉に出ずとも、デモンの言わんとしていることが解ったからである。

「…知とは確かに武器デス。デスガ、知を知りすぎるトイウコトは、それだけ深く考えなければいけなくナル。いつの間にかワタクシの頭は堅くなってシマツテイタのデス。ワタクシは負けマシタ。あなた方の適度に知の海を泳ぐすべを知ったばかりの柔らかい頭を持つあなた方に」

そこまで言うとデモンは少しだけ警戒心を出す風に右手を差し出す。その顔はとても清々しく感じた。

「世の中には二通りの人間がイマス。【勝者】と…【敗北者】デス【敗北者】として…ぜひ…」

「……………」

無言の凧はそのデモンの行動に警戒心を緩める。だけど、凧がデモンの手を取ることはなかった。

人を射殺せるのではないかというくらい鋭い目つきの凧は、そのままデモンの袖を引っぱり自分よりかなり背が高いデモンの顔を、自分の顔に近付けさせる。

そして耳元に自らの唇を寄せ、俺達にも聞こえるように、こつ耳打ちするのであった

「…デモン。あんたは真備を傷つけたんだから握手はしないわ。でも…あんたは、日向を助けてくれた。そのことについては感謝するわ。だから」

そこまで言うと、凧は目の前にいるデモンの存在を忘れたかのように…振り返り、歩みを進めた。予想外ではあるが　予想通りな展開だった。

「…殴んなくていいのか？」

おそらく真備を起こすために　真備の事が心配であるがゆえに、真備のもとへと向かう凧。そのちょうど、俺とすれ違う瞬間。俺は

俺と輝喜はそのあまりに過激な映像に、ただただ苦笑いするのだった。…そうだ。忘れないうちに

「…デモン。あんたは確かに天才かもしれない。俺も、学園では天才なんて呼ばれてる。だけど、俺はただ効率がいいだけの偽りの天才。真の天才じゃない。本当の天才。それは努力だけで俺と対等
いや、俺を遥かに超える知識を持った」

「いつてえええな姉貴！！なにしゃがんだ!？」

「うるさいわね。起こせていったのはあんたでしょ!？いつも通り起こしてやったんだから文句言わないの!！わかった!？」

「怪我人の俺にいつも通りの起こし方なんかしたら死ぬわ!？」

「Non far niente・Non far niente・
(気にしない。気にしない)」

「日本語喋れやああああああああ!!!!!!」

「あいつ(風)のことですよ…」

俺は、仲良く(?)口喧嘩を始めた羽前姉弟へと目を向け、本当の天才(彼女)の姿を目で追うのだった。あいつは…あいつは本当に俺なんかじゃ叶わない天才だからな…。

「…イタリア語まで話セルとは…日向。なぜ彼女は、あそこマデ語
学力に優れてイルのデスカ…」

「…それだけじゃない。あいつはドイツ語にイタリア語。日本語は
もちろん、学園じゃ英語も習ってる。それに…フランス語もあいつ
は出来るんだ」

「T o l l i … (す じ い …) 」

そう。凧の語学力は、もうすでに中学生。いや、大学生の領域すら
脱している。その能力にゲイルはただただ驚きの声をあげるのだっ
た。

実際。あいつは、俺より頭がいい。それは寝ることに恐怖するあ
いつが眠れずに、勉強ばかりしているというのもある。だけど、一番
の理由は

「あいつには…国際的な仕事がしたいっていう夢があるからな…」

「T r a u m … (夢 …) 」

「…あなたにも、きつと夢があったはずだ。別にお前がどうしよう
が気にしないけど、その才能。もう少し役立てられるところで使え

よ
」

そう言っつて、俺はデモンの前から離れていった。

「クスクス。なかなかクサイセリフでしたね ヒュータン」

「問題 nothing。ほっとけ、輝喜…」

「ふふふ はいはい」

からかい半分。ほめ言葉半分の輝喜のその声に、俺は顔が赤くなつたのを感じた。

別にいいじゃねーかよ…。たまにはクサイセリフを言っただってさ…。

俺は、嬉しそうにニコニコと肩を組んでくる輝喜の明らかに状況を楽しんでる笑みを前に深く息を吐き出すのだった。

「夢…デスカ。確かに、ワタクシにもアリマスね…夢。次、会うトキにはお教えシマスよ…日向」

このとき、俺は後ろから聞こえてきたデモンの呟きを気にする余裕なんて、なかった

知恵理 side

「…ヒナ君。よかったあ」

薄暗く、不気味な部屋の唯一明るい場所。さこで、私は明るい原因であるモニターに映る映像を見ながら、そう案著の声をしました。実際ヒナ君たちが負けるところは想像がつかないし、思いたくもない。でもそれでも…私は心の底から画面に映るその映像が嬉しかったです…。

肩を組むヒナ君とコウ君。その姿がとても…嬉しかったのでした…。

だけどそんなときもつかの間。私はある一点 正確には1人を見て凍りついてしまいます。

画面に映る1人の存在。私は彼を見た瞬間に自分の中にある何か

激しく震えるのを感じ、目を離せられなくなったのです。私の中でずっとなんとなく私自身を追いつめ続けているその映像から

違う。こんなこと…誰も望んでない…。

傷だらけのマキ君を囲んで、マキ君の傷を突っついて遊んでいるトナ君とコウ君。そんな2人を止めこそしないけど、苦笑いしながら傷の手当てをするナギちゃん。

本当に…本当に楽しそうな映像。だけど

「…知恵理」

そのとき、私のすぐ後ろからセツちゃんが声をかけてきました。

心配そうなセツちゃんの声色。そっか…セツちゃん。私のこと心配してくれるんだね？でも…大丈夫。私は…私は

私は、振り返りセツちゃんに表面上だけの笑顔を作るとその声に応えるのでした。

「なに？セツちゃん？」

「…オレもそろそろ部屋に行かなきゃいけないんだけど1人で大丈夫か？」

きっとセツちゃんは私の表面上だけの笑顔に気付いたと思う。

だけど、そのことを指摘することはありませんでした。私はその心遣いがとても暖かく、とっても嬉しかった…。

だからこそ、私は偽る。心細い気持ちを必死に押さえつけ、私は…必死に笑顔を創りました。彼女に心配をかけないために

「大丈夫だよセツちゃん 私は大丈夫 だってヒナ君達が助けにきてくれたから」

だから…私もセツちゃんの心遣いに気付かない振りをして表面上の笑顔でそう応える。

セツちゃんの心遣いを無駄にしないために…。

うん大丈夫。私は大丈夫。少なくとも今のセツちゃんの言葉で元気が出てきた まだまだ私は頑張っちゃうんだから

やるぞー!!と腕を上げる私をセツちゃんはそれでも私を心配そうに見てきました。

もう…ヒナ君といい、ナギちゃんといい…なんで、みんな私のことそんなに心配するの？私は全然大丈夫なのに…。ポンポンなんだからね…!!

本当に…ポンポン…なんだから…ね…。私は、心配してくれるみんなのことを思い浮かべる。みんな…本当に…ありがとう…。私はセツちゃんに微笑みました。今度は偽りなく、いつもヒナ君たちに向けているような…本当の…笑顔で

「…そうか。大丈夫そうだな知恵理。んじゃあ!!行ってくる!!じゃあな…」

「うん いったらっしい セツちゃん…」

悲しげな顔。だけど、最後には笑顔を見せて、セツちゃんは部屋の扉を潜っていきました。もうすぐ。もうすぐで始まるんだね…。

もうすぐ…闘うんだね…ヒナ君たちと

だけど、その闘いを望まない私の願いは届くことなく、部屋の重たく冷たい扉は静かに閉じられるのでした。

日向side

「…さて。じゃあ次の部屋に行くか!!…と、言いたいところだけど…」

「あははは」

頭を抱え、深く溜め息を吐き出す俺。心底楽しそうな輝喜の声が虚しく響く。

だけど、そんな俺達に共通していたこと。それは、2人とも前進から吹き出す冷や汗でいっぱいだったということだった。

理由については　あえて聞かないでくれ。

「問題nothing。真備がデモンにどうやって勝ったのかを聞いて、凧が輝喜の後ろに隠れていたのを知って大爆笑し、凧が往復ビンタしたとか。はたまたボロボロの真備にトドメさしにフライングドライブをしたとか…そんなことは絶対ないからな!!」

「…ヒナタン。ヒナタン。あのね…かな〜り言いにくいんだけどね…。声に…出てるよ？心の中のこと全部。ゼ・ン・ブ」

「なななな…なんだってええええええええええ…!？」

マジか!?マジなのか!?ぐっ…!?!しまった!!これじゃあ俺が真備と同じ目に遭っちゃう。明日は我が身ってわけか…。俺の目の前で、十字架をきる輝喜の姿が何故か霞む。

そうか…これが涙なんだな…。はははは。なんだこれ。しょっぱいや…。あははははは。はあ…現実逃避したっていいじゃないか…。人間だもの。

まるで処刑前の罪人のように、恐怖で顔がゆがむ俺は、輝喜の声にギギギ…と壊れたブリキのように後ろを振り返る。自らの罪を数えるために

『 『 …… 『 『

だが、俺の示唆したこととは裏腹に俺が恐れる風も俺が恐れる原因となった真備も…。なぜか、新たな部屋へと向かう扉の上のほうを眺めているのだった。

ふう…とりあえず首の皮一枚繋がったわけだ…。

俺は、前進に走る恐怖から解放され、ホツとしたように息を吐き出した。しかし…ホツと胸をなで下ろしたのも束の間。俺は2人のその行動にある疑問を感じるのだった。

ん？上のほうを見る2人…なんかこの映像デジャヴじゃないか？

そう思いつつ、上を見上げる俺。そしてその先にはこの洋館へ入るときと同じ。だが、よく見たら違うものがそこにあった。それは

【治癒の間】

達筆な字でプレートにそう書かれた文字。どうやら…次の部屋は治癒という単語がテーマらしいな…。

皆で真剣な面もちで、考え込む。だが、俺達がそんなことを考えているとき…。

唯一、この状況でなにも考えていなかった真備がドアノブに手をかけ、ゆっくりと俺達を見ながら言い出すのだった。

「…何してんだよお前ら。さっさと行けよ。」

『……………』

いまだに立つこともままならないため、尻に肩を借りてギリギリの状態で立つ真備。

プレートのことをいくら考えても、結果に行き着くことがなかった俺達は、その問いに頷く。

そして、その様子を確認した真備はドアノブを押すのであった

ギ ツ……………!!

再び、まるで古いホラー映画のような音を立てながら開く扉。それを俺たちは息を呑んで見つめる。

そして、開いたその奥はただ10メートルくらい長い廊下が延びているだけの空間だった。赤いカーペットが特徴的なその空間。どうやらここは本当に廊下らしい。

だがしかし、この部屋の長い廊下。そのちょうど真ん中であるそこには、俺達にとって意外すぎる人物がいた。

その男の登場に、俺達は4人揃って呆けてしまう。なぜなら、彼は俺達にとって、とてもとても…身近すぎる人物だったからだ。

忘れるわけがないその男。忘れるわけにはいかないその男。その名は

「ゲ…ゲイル先生…」

驚きで、数秒遅れた俺の呟きに、その男　ゲイル先生こと【ゲイル・ハルトマン】は、下降気味にあった顔をゆっくりと上げる。そして、ついにその表情が明らかになる。

俺が【恩人】と呼ぶ金髪の町医者者の表情が

「Hey…！ミナサン。ゴキゲンヨウ…！」

いつもと変わらぬその口調。これこそが、俺達の新たな戦いの始まりであった。

第26話 嘆くアマテラス（後書き）

作「はい！！今回もまた、あの企画をしていきたいと思えます！！
題して

第3回【時に至る軌跡】

この企画は【悟卵の酔】【ポンSARS】の提供でお送りいたしま
ーす！！」

日「いや！？スポンサーなんていねーし！！意味わかんねーよ！？」

知「わお！！ヒナ君ヒナ君！！この企画って悟卵の酔の提供だった
んだって〜！！私、知らなかったよ！！」

日「は！？あるの！？悟卵の酔って会社あるの！？マジで！？」

知「？ヒナ君ポンSARSもちゃんとあるよ。もう…ヒナ君たら…
最近人気のアイドルグループの名前も知らないなんて時代遅れ〜」

日「え、俺なのか！？俺が知らないだけなのか！？ていうかポンS
ARSって何だ！？何でそんな名前にしたんだポンSARS！？」

知「なんか親会社がポン酔の制作会社なんだって〜。ちなみに、そ
の親会社が悟卵の酔なんだよ〜」

日「親会社はお前らかああああああああああ！！！！！！」

作「じゃあ今回の話に行きたいと思います。今回も、次回に予告したとおり知恵理の話をしたと思います」

日「…始まる前からかなり疲れたけどな」

作「では、今回は知恵理の名前の話をさせていただきま〜す」

日「…ああ。あの親父ギャグ的な名前か」

作「…まあ、親父ギャグなのは認めるけどさあ…もう少し、オブラートに包めよ。お前のヒロインだろうが…」

日「気にすんな。で？知恵理の名前がどうしたんだ？」

作「うん。まあ…ぶっちゃけると知恵理の名前を考えるのにかなり苦労したって話だ！…はい以上」

日「そこまで伸ばしといて結局それだけ!？」

作「はい!!それだけです。てなわけで次回予告。次回の時の秒針は

俺は…この人に大切なことを教わった。

故に…俺はこの人のことをこう呼ぶ。【恩人】と…

次回【恩人と呼ぶ男】」

日「問題 nothingだぜ!…」

知「…ヒナ君。私の名前なんてどうでもいいんだ…ぐすん」

日「え…いや…あの…」

知「いいんだよ…ヒナ君。無理しなくて…ぐすん…私はそれでも…それでも…。ヒナ君のヒロインだから」

日「違う!!俺はお前じゃなきゃだめなんだ!!お前が俺のヒロインだからダメなんだ!!お前だからこそ…俺が成り立ってるんだ…」

知「ひ…ヒナ君…」

日「だから…これからも…これからも俺のヒロインでいてくれよ?」

知「…ヒナ君…うん!!」

作「…何。この固有結界。むしろ俺邪魔じゃね?…ああ。確かに知恵理はお前のヒロインだよ…」

次回に続く!!

第27話 恩人と呼ぶ男（前書き）

守るための拳を覚えてくれた人は・・・

守りたいものを奪う存在となった・・・

VSゲイル編、開始！

問題 nothingだぜ！

第27話 恩人と呼ぶ男

日向side

「Hey!! ミナサンゴキゲンヨウ!!」

部屋 と、いうより廊下の中央に仁王立ちしていたその男。俺達の“友人”であるゲイル先生は、いつも通りのハイテンション。それに片言の日本語で話しかけてくる。

でも。なんでここに

「先生!! ゲイル先生!! なんで…なんであんなにここにいんのよ!?!」

驚きのあまり、キッとゲイル先生を睨みつける叫びにも近い風の言葉。

だが、ゲイル先生は風の言葉に応えず、スーツの上から羽織った白衣の胸ポケットから一枚の紙を取り出すと、こちらに放り投げる。

シユルシユルシユル
パシッ！！

投げられた小型の紙は俺達のすぐ目の前へと落ちる。見た目、高級
そつな紙でできたそれは、どうやら名刺のようであった。

俺達はそんなゲイル先生の行動に不思議に思いながら名刺を覗き見
る。

だがそこに書いてあつた言葉は俺達を驚愕で顔を歪ませるものだ
た。

「ソレガ、ワタシノホンライノ“シヨクバ”デース」

明るさが消え、片言のみとなったゲイル先生の言葉は俺達には耳に
入ってこなかった。なぜなら俺達はその名刺に見入ってしまったか
らである…。

時の番人
クロノス
ヴィンシュヌ
医療局

局長”ゲイル・ハルトマン”

ゲイル先生が投げた名刺。そこには確かにそう書いてあった。聞き慣れない単語もある。でも、それでも…俺達を驚愕させるには十分すぎる内容だ。

この名刺が意味すること。それは

「ゲイル先生…俺達を…騙してたんですか？」

「…ハイ。ソウナリマスネ」

ゲイル先生は時の番人のメンバーだったということだ。

ゲイル先生はいつものハイテンションな言葉使いを納めて、ゆっくりと…呟く。

ゲイル先生とは、長いつきあいだから、俺にはゲイル先生の真意をつかむことができた。どうやら…先生も心を傷めていらっしやるようだった。

「…ゲイル先生。俺はどうしてもあなたが悪い人には見えません」

そのとき、はつきりとした口調で真備が言葉をだす。その言葉に、俺は少しだけ驚きをあらわにする。なぜなら、それは俺が言おうとしていた言葉だったからだ。

レリエルや刹那の件もある。おそらくゲイル先生も同じだと俺達は思っていた。

うまくいけば戦わずしてこの部屋を抜けられる。そう思った。けど

「ムダデスヨ」

ゲイル先生の口からかえってきた言葉は、明らかなる拒絶の言葉。

それはいつも楽しげに笑っていたゲイル先生が俺達に見せた初めての脅しの言葉だった。

「ゲイル先生…!!」

「サテ。ワタシト、タタカッテモライマシヨウ? ヒナタ…マキビ…
ナギ…コウキ?」

驚愕に驚愕が重なり、ゲイル先生へと言葉を投げつける俺。しかし、ゲイル先生はそんな俺の言葉を軽く受け流し、そう言いなながら両手の手の平を自分自身のほうに向けるように目の前に出す。

そう…その姿はまるで…手術の前の医師のような…そんな、仕草だった。

「デハ。オペヲハジメマス Come On!!」

ゲイル先生の短く鋭い声が響く。その刹那、温かい光が俺達を包み込み、あたりの様子を見ることができなくなる。

そのとき、俺の脳裏に懐かしい記憶が蘇る。ゲイル先生と初めて出会ったあの日の記憶が

その日は、中学の入学式 と言っても【桜時学園】は小・中・高一環だが だった。

それは入学式に起きた事件。だけど俺達には忘れられない事件でもある。なぜなら、それは輝喜との出会いの事件。そして、真備の心に深い傷が出来た事件だったからだ。

詳しくはまだ語れない。だが、ゲイル先生と出会ったのはその日の夕方。放課後のことであつた。

俺達はその事件にて不覚にも怪我を負つてしまつていた。だから、怪我の治療をしてもらうために、その当時、出会つたばかりの輝喜の紹介で知り合つた外国人の医師。それが、ゲイル先生だつたのであつた…。

俺はこの人に…大切なことを教わつた。俺だけじゃなく知恵理の人生をも変えるほどに大切なことを

日向side（3年前）

「こんにちは〜ゲイル先生いますか〜？」

日もだいぶおちてきた夕暮れどき。自動ドアをくぐり抜け、輝喜の案内の元、俺達が入つたのは内装の真新しさから、おそらくまだ開院したてだと思われる病院。いや、診察所だつた。

そんな、真新しい病院　桜時クリニク　に入った瞬間、大声で叫ぶ輝喜。すると、その叫びから数秒とたたないうちに病院の奥から1人の金髪の男が現れた。

「Hey!!ドウカシマシタカ?コウキ?」

「先生。少し喧嘩しちゃって…すみませんが、治療してくれませんか?」

「Ah…ナルホドデスネ。OK!!Of course.(もちろん)モチロナイデスヨ!!」

最初。彼から受け取った第一印象は、ハイテンションな外人だった。輝喜の声に、喜びを現すようにニコニコとした表情をする。それもかなり印象的だ。

彼は、いままで生きてきた中でも始めて会ったタイプの人間だった。

「オヤ?コウキ。ソチラノ、ヨニンハドチラサマデスカ?」

「ふふ〜ん　知りたい?先生?じゃあ特別に教えてあげるね　みんなは今日知り合った俺の友達で　右から　ヒナタン。チエリン。ナギリン。マキビンて言うんだよ」

「な、ナギリン…」

「マキビンって…なんだ…」

そう言えばこのときだったな…輝喜が始めて俺達のことをあだなで呼んだのは…。

天然な知恵理はそれほど気にはしてなかったけど 凧と真備は動揺してしまつて、少し引いちゃつてたな…。

まあ、実際に俺も急展開について行けず絶句してたけどな。

そんな俺達の様子に、目の前の外人のお医者さんはクスリと笑みを漏らす。その笑みに、俺達は気恥ずかしそうに黙つてしまう。ただ…嫌な気分はしなかった。

「（日本語訳）ハハハハ。実に愉快なお友達ですね輝喜。では、私も自己紹介させて貰いましょう。」

私は【ゲイル・ハルトマン】

この【桜時クリニク】の院長をしております。ゲイルとお呼びくださつてかまいません。…よろしければみなさんのお名前を教えてくださいませんか？」

確かに…あの紹介で分かるわけがないか…。だって明らかに本名じゃないもん…。

そう思い、苦笑いした俺達は、それぞれ思い思いに自己紹介をするのだった。

「あたしは羽前凧。今日より桜時学園中等部の1年生となりました」

まず最初に自己紹介したのは凧。その姿勢はさすがといえるものであった。育った家柄もあり、しっかりとした礼儀を持ち合わせているようである。

深々と頭を下げる姿はまさに優等生のようだ。口元が切れて血が流れ出てさえなければの話だが…。

さらに言わせてもらうと、こいつチビだからどう見ても子供が背伸びしているようにしか見えない。不思議なものだな…。

「あ…？日向。今、余計なこと考えなかったでしょうね…？」

「イエイエ。オレハ、ナニモカンガエテマセンヨ」

危な。そう言えば、凧は身長のことになると謎の第六感が働くんだ
ったな…。その瞳はメデューサもビククリ。石にならないのが不思議
であつた…。

「はははは。日向ドンマイ。んじゃあ次は俺だな！！羽前真備。お
初にお目に…お目に…まあいつか。会えてうれしいぜ！！ゲイル！
！」

ガツンッ…！！

いきなり真備の頭を凧が殴る。だが、今は俺だつてそうしてただ
ろう。

真備。少しは自分の姉を見習えよ…。凧をみる限り、決して甘やか
されて育てられてはいないだろう。

なのに…なんで、同じ育ち方をしてるのに、こんなにも正反対な2
人になつちまつたんだろうな…。主に体格とか性格とか。

まったく言っていないほど正反対な2人。俺は、その2人を比較し
て、人知れず苦笑いするのだった。

「ちょっとあんた！！目上の人でしようが！！ちゃんと【先生】をつけなさい！！お父様にいつも言われてるでしょ！？もう！！風払うわよ！？」

この瞬間からゲイル先生のことを【ゲイル先生】と呼ぶのが共通認識となった。まあ…俺にはゲイル先生を先生と呼ぶもう一つの理由があるんだけどな…。

「うるせーな！！俺の勝手だろ！？姉貴は黙ってる！！」

「はあ！？何ですって！！せつかくあたしが心配してあげてるのに…。もうあんたなんて知らないんだからね！！」

バチイイイイイイイイイイインツ！！！！！！

おお…ありや痛い。風のリントなんて久しぶりに見た気がする。ていうか…逆らわなきゃいいのに…。

このときゲイル先生を含めた俺達は、一重に同じことを思っていた。

と。あんなのはほつといて次は知恵理の番か。

「こんにちは先生 姫ノ城知恵理といます よろしく願いします」

知恵理のしっかりした挨拶に俺は感心しながらうんうんと頷く。

だが俺がそう思ったそのときゲイル先生は

「ヒメノジョウ…」

確かに、知恵理の名字を呼んだ気がした。

だけど。このとき、俺はあまり気にした様子もなく、ただ単に復唱しただけだろうと思い、それを受け流し、そのまま自分の自己紹介をするのだった。

「俺は不知火日向。不承不承ながらこいつらの保護者みたいなものを勤めています。…どうぞ、よろしく願います。先生」

「な!?!?ちょ!?!?ちょっと日向!!あんた何言ってるの!?!?」

「そつだ日向！姉貴と知恵理はともかく俺は世話にはなっていないぞ！？」

「ちよつと真備？それどつゆつこと？」

「へ？い…いや…これは…その……」

真備が凧の修羅モードにはたじたじになるのをそのときの俺達は合掌して見ることしかできなかった。

「ちよつとお姉ちゃんとお話しましょうね」

「ま…待て姉貴！…そんないい笑顔で迫ってくるな！…逆に怖いぞ！？」

「怒り顔全開よりはマシでしょ？」

「た…助けて……」

土下座までしだした真備に俺達は本当に哀れに思った。

でも、こればっかしは俺にはどつしよつもない。

周りを見てみれば今日始めてこれを見た2人は絶句してた。

「ただ、まあ身長138cm(当時)の少女に159cm(当時)の少年が土下座してりゃそりゃ驚く…よな。」

「ふふふ　まあ落ち着いて2人とも!!ほらゲイル先生が呆れてるよ」

「え!?!」

「助かった」

知恵理の声に、常人の羞恥心というものを知る凧は顔を真っ赤にして俯いてしまう。

「ただ、それとは正反対に、真備には誰がどう見ていようが、聞いていようがどうやら関係ないようで、安心したように息を吐き出していた。」

「真備。小さく“助かった”って言ったことは黙っとしてやるよ…。」

「ハハハハ!!イヤーミナサンスバラシイ!!コレカラヨロシクオネガイシマスヨ!!ナギサン。マキビサン。チエリサン　ヒナタサン」

何故か、ゲイル先生が俺を見る目だけ哀愁　　というか懐かしさを
帯びた目のようになった気がした。

一体どうしたんだろうか。

「…トリアエズ。ミナサン、ヒドク“キズ”ツイテマスネ。チリヨ
ウシマシヨウ」

「え…あ、はい。お願いします」

だがしかし、俺の疑問がゲイル先生へと伝わることはなかった。そ
して、このときは俺も、それ以上その表情を気にすることはなかつ
た…。

これが…忘れることのできない俺とゲイル先生との初顔合わせであ
った

日向side（治療後）

「へ〜先生はギオン人なんですか」

「エエ。ニネンマエニホンニヤツテキマシタ」

治療も終わり、俺達は井戸端会議（世間話）をやっていた。なぜか、ゲイル先生的にも、病院的にも不釣り合いな和室で…。

ちなみに、真備はトイレに風と知恵理はお茶を入れにキッチンにいる。だから、ここにいるのは俺と輝喜。ゲイル先生だけである。

それから少しの間、和やかな時間が流れていた。だけど、それを打ち砕く言葉がゲイル先生の口から出たのであった。

「ソウイエバ。ナゼミナサンハ、ケンカナンカヲシタノデスカ？」

それは唐突に訪れた、核心をつく質問だった。

「……………」

あまりに唐突。かつ、俺が今一番触れてほしくない話題に、俺は口を完全に閉じてしまう…。

なぜなら、この当時俺は…暴力がきらいだったからだ。今でも好きってわけではないけど…。

俺には…どうしても暴力をしたくなる衝動に駆けられるときがあった。その瞬間に至る理由はたった1つ。

「 あいつら。知恵理を無理やり連れて行こうとしゃがったんだ…」

知恵理に危機が迫ったとき。ただ、その瞬間のみ、俺は拳を握りしめるのだ。ゲイル先生の目に押された俺はとうとうそのことを自ら口を割ってしまった。

そんな俺の独白をゲイル先生と輝喜が黙って聞き入る。時には頷き、時には目をつむり考え込む仕草をする。

そして…気付いたときには、俺は総てのことを吐露してしまっていた…。

「知恵理だけは…知恵理を傷つけるやつだけは…どうしても殴りたくなる…。暴力は嫌いなのに…俺は知恵理を助けるために暴力をし

てしまう。先生……。俺は……。俺はどうしたらいいんでしょうか？」

始めて会った人だったが、初めて会った相手だからこそ、俺はゲイル先生に全てのことを吐いてしまっていた。

そしてその上で俺はゲイル先生に答えを請うた。自分の過去の戒めのように

「ソウデスカ……」

ゲイル先生はそう言うと輝喜に目配せする。それが何を意味する事を分かった輝喜は一つ頷くと二人がいた部屋から出て行ったのだ。

俺が呆然とその様子を見てみると不意に俺の頭の上に温かく大きなものが覆い被さった。

「先生？」

俺が顔を上げるとそこには優しい笑みをしたゲイル先生。

何故かは知らないが俺はその笑顔に見覚えがあった気がした。

「（日本語訳）…人は、なぜ人を傷つけるのか…。分かりますか？」

「…気に入らないものを打ち砕くため…ですか？」

「ハイ。デスガソレハセイカイデアリフセイカイデモアリマス」

「どうということですか？」

俺の言葉にゲイル先生はどこか遠くを見るような目をするのであった…。

「（日本語訳）…これは、あくまで私個人の考えなのですが…。人は守るために拳を使うのでしょうか。では何を守るのか？それは、何でもいいのです。自分が大切なものを守るために拳を使い…と、私はあなたに言いました…」

「大切な…もの？」

すると先生は俺の頭の上に乗せた手で俺の頭をかきながらさら

に言葉を繋いだ。

「アナタハ…チエリサンノコトヲ、ダイジニオモツテイルンデスネ」

「な!？」

その瞬間の顔を自分自身で見てみたかった。たぶん首筋まで真っ赤になっていたと思う。

そんな俺の様子をニヤリとした顔で見ているゲイル先生…。でも…不快ではなかった…。

「ハハハハ!!ジャアコンカイノハボウリヨクデハナイデスヨ!!」

「どういうことですか?」

この当時、殴ることは暴力と考えていた俺はその言葉の意味は分からなかった。だからこそ…このとき俺は本当に大切なものを学んだのだだった。

「（日本語訳）日向。大切な人を守るのに振るう拳は…暴力ではありませんよ」

優しい　とても優しい声が俺の中に溶け込んでいく。

そう…それは、まさに包まれた感じだった…。

ポタツ…ポタツ…

俺の目から水滴が流れ出る。俺は、どれだけこの言葉に救われたか…今となってはどうでもいい。

だけど…俺が流した涙。とても暖かく…とても心地いい涙だった。それだけは…俺は確かに覚えていた…。

「あり…ありがと…う…うございました…。」

流れ出る涙を抑えることなく俺は声を押し殺して　泣いた。

俺は大切なことをこのとき知った。そしてこれ以降俺は知恵理を守

るためだけに喧嘩をするようになる。

大切なものを守るために…。だけど

日向side（3年後）

「Come-On!!【執刀】!!」

ゲイル先生が叫んだ次の瞬間、温かい光がゲイル先生の周りからあふれ出てくる。その光は…昔の記憶にあるあの大きな手に似ていた…。

でも、その輝きも一瞬のこと。気づけば光の中心にはゲイル先生がいた。そして先生が前に出している手の指の間には銀色の物体…。

「ナイフ？」

真備の言つとおりナイフにも見えないことはない。でも違う。あれは

「【メス】ノソウルテイカー【執刀】！！」

俺を守るためにの拳を覚えてくれた人は今。

俺の守るべきものを奪う存在となった。

第27話 恩人と呼ぶ男（後書き）

作「今回は用語解説とします！！let's go！！」

・ヴィシュヌ医療局

時の番人にある4つの部署の1つ。その名前のとおり、医療関係を受け持つ部署で治療、病院の運営、ケアなどが主な仕事とする。

局長は【ゲイル・ハルトマン】年齢は25歳である。

ちなみに【ヴィシュヌ】とは地球を維持しているとされる神である。

・桜時クリニック

桜時市にある小さな病院で【ゲイル・ハルトマン】が院長を勤めている。

作「はい。というわけで時の番人の機関。医療局のお話でした」

日「なんか、実際はどうでもいいような話ばかりだったけどな……」

作「おいおい。あんた、一応主人公だろ（笑）」

知「そうだよヒナ君！！みんなヒナ君みたいに全部すぐに理解できるわけじゃないんだからね！！めっ！！」

日「…すみません」

作「日向は知恵理にかかれば形無しだな（2828）」

凧「ちょっと作者！！それより！！さつさと次回予告しなさい！！」

真「姉貴を怒らせないうちに速く…（ぼそぼそ）」

ドカーン！！キラッ

輝「あははは〜 マキビンはお星様になりました〜」

作「…さつさと予告やるか。え〜こほん！！それでは次回の時の秒針は

ゲイルとの決闘開始！！ゲイルの執刀の持つ力とは…いつたい？

そしてついに、魂狩の秘密が明かされる！！

次回【治癒能力の神髄】

日「問題nothingだぜ！！」

作「じゃあ今回の後書きはここまで。次回のこの時間にまた会いましょうー！！」

日&知『じゃ〜ね〜』

凧 & a m p ; 輝 『 『 また次回もよろしくー!! 』 』 『 『 』

真 「 うう… なんか、この作品。俺の扱いだけひどくねえか…」

次回に続く!

第28話 治癒能力の神髄（前書き）

閉じ込められる日向と輝喜・・・

魂狩【執刀】を使い襲ってくるデモン・・・

その中で凧が・・・

第28話 治癒能力の神髄

日向side

「ゲイル先生…どうしてもやるんですか？」

俺はメス　ゲイル先生の魂が具現化された魂狩【執刀】を持つゲイル先生に対して身構えながらそう問いかける。

もしここでゲイル先生と戦うことになる結果的に俺は戦う理由を教えてくれた恩人を倒さなければいけない。

それはどうしても避けたかった。だけど

「ヒナタ。ドウシマシタ？オジケツキマシタカ？」

ゲイル先生はいつもの喜怒哀楽の楽部分のみの楽しげな雰囲気ゼロの声。それは怒りや悲しみなんて声じゃなくただ純粹に闘いのための声。俺にはそう思えた。

俺は今までゲイル先生のそんな敵意しかない声を聞いたことがなかった。

「…やる気なんですねゲイル先生」

「クドイデスヨ。ワタシハアナタノテキデス」

ゲイル先生は両手に持ったメスを指で戯れ遊ばせながら息を飲む暇なく俺にそう返してくる。

指の間のメスがそれぞれ当たるたびにジャリジャリと金属がこすれあう音が響き渡った。それはあたかも俺をゲイル先生 恩人という鎖が解けていくかのように

そのとき俺は気がついた。俺自身もゲイル先生を恩人ではなく知恵理を奪う敵と見始めていることに。

そしていつと時の間その動作を続けたゲイル先生は一回深いため息をこぼすとどこか諦めた表情で呟いたのだった。

「シカタアリマセンネ……」

「えっ？」

それはどことなく諦めたようなゲイル先生の呟き。俺はその言葉に淡い期待を向けた。

だけど、それは結局淡い期待でしかなかった。

なぜなら、次の瞬間ゲイル先生の口から帰ってきたのは はっき
りとした拒絶の声だったからである…。

シュッ！！シュッ！！

「ヒナタン！！！！！！」

「ぐっ！？」

空気を何かが切る音が流れたと思った瞬間。俺の目の前は灰色の地面だった。

最初なにが起こったのかは分からなかった。だがすぐに気がついた。

俺は間一髪のところを輝喜に地面に押し付けられる形で避けることができたのだと。

キンッ!!キンッ!!

直後。俺の後方から何かが地面に突き刺さるような音がする。

振り返るまでもない。だが俺は敢えて振り返ってみるとそこには

「メス【執刀】」

そこには地面に刺さった2本のメス。ゲイル先生の魂【執刀】
だった。

そしてその刹那。さらなる追撃の音が部屋に響きわたった。

「ニガシマセンヨ!!」

シュッ!!シュッ!!

ゲイル先生のいつにもなく冷たい声に俺は前を振り向く。それと同時に向こうから飛んでくる光る物体が2つ見えてくる。

「くっ!!ヒナタン!!」

ドゲシッ!!!!!!

一瞬怖じ気付きながらも反射的に歯ぎしりをした輝喜はそのまま俺の体を蹴り飛ばす。

俺はそのまま反転し転がり転けるように倒れ込む。気がつけば俺がいた場所には俺を蹴飛ばした輝喜の脚がありそこに

ザシュッ!!!!!!!!

そこに鈍い音と共に何か突き刺さるような光景が目に入る。

床に倒れ込む輝喜。その脚には刺さりどころがよかったのか血こそ
でてはいなかったがしつかりと執刀が突き刺さっていた。

「ヒナタン？」

「お…お前馬鹿か！？なんで俺を庇ったんだよ！！」

呆然としていた俺は一気に態度を一変。頭に血を上らせた。

知恵理を助けるためとはいえ友達が 親友が傷つくのは見たくな
かったからだ。

「そつだ！！治療道具！！真備が持つてるバッグの中に治療道具が
入ってるはずだから…」

「ムダデスヨ」

明らかに俺の目の前から聞こえてきたその俺より1オクターブ
低い声。

俺はゆっくりと、自らの顔を上げる。するとそこにはいつも笑顔で

俺達を迎え入れてくれた恩人の冷たい表情があった。

「ゲイル先生……」

「アチラヲミテクダサイ」

ゲイル先生はいつの間にか俺の横。1メートルくらいのところに立っていた。

そしてゲイル先生が指差す先。ここから約5メートルくらい先のそこには立ち止まっている凧と真備がいた。

2人とも顔を俯かせてうまく表情を読み取ることができない。だが輝喜のもとになぜか来ない2人に俺は声を荒げた。

「2人とも何してるの早くこっちに来て」

「無理なんだ」

「……え？」

真備の言ってることを最初、俺は理解できなかった。ゆらりと立ち

上がり、凧と真備のほうに近づぐ。

ゆっくりと ゆっくりと 真備達に触れるために手を前に出して 近づぐ。

だけど、俺の手は真備達に触れることはない。いや、真備達に触れる前に別のものに遮られてしまった。

バリッ…!!

「っ!？」

それは真備達の前。本当に10センチもないところにあり。俺の手はその何かに阻まれる。

“ 結界 ” だった。

「凧?なんで結界なんて張ってるんだよ?」

俺の問いに凧は唇を噛み合わせて本当に悔しそうに呟くのだった。

「…これ。あたしの結界じゃないわ」

顔を伏せて、肩を震わすその姿を見る限り、その答えは本当なんだと俺に確信づける。

でも。じゃあこの結界は誰の結界なんだ…？

俺がその疑問の答えにたどり着くには、さして時間はかからなかった。

「…っ！？」

俺はその答えにたどり着いた瞬間急いで振り返る。

するとそこにはさきほどまでの冷たい顔から一変させ、まるでピエロのような…道化じみた笑みを浮かべる男がいた。

「ゲイル先生…」

「（日本語訳）…この結界は執刀の【特性】です」

特性。その聞き覚えがない言葉に俺は眉を歪ませる。そんな俺に気付いたのかゲイル先生はさらに言葉を続けていった。

「（日本語訳）私の執刀には【治癒結界】という【特性】があります」

「治癒結界？」

「（日本語訳）ええ。もともと私の能力は【治癒】戦闘には不向きな能力です。ですけどそのぶん執刀には治癒結界という高い防御力を持つ特性があるのですよ」

「特性…??」

俺の疑問符が入り混じった声に「話を折られるのは嫌いなんですけど…」と言いつつも【特性】について話し出すのだった。

「（日本語訳）魂狩には能力と他に特別な力があります。それが【特性】です。特性を持てるのはAランク以上…つまり協調ができる

人間だけ。これが【特性】です」

「でも俺達は魂狩の特性を知らねーぞ!？」

真備が結界の外から叫ぶ。

確かに。俺も真備も紛いなりにも協調をすることができる。ゲイル先生の言葉で言うところのAランク能力者だ。

昼間の水城の話と合わせてみても、そのところは確信を得ることができる。

だけど俺達は自分の特性を知らない。これはどういうことだ？

「（日本語訳）なーに…それこそ簡単な話ですよ。確かに特性はAランク能力者すべての人が使えます。ですが、病気を治す【薬】と同じ様に、特性は使ってみないとその効果はわかりませーん。つまりそういうことですよ」

なるほど。確かにゲイル先生の言うとおりだ。

要約すれば特性はAランクの能力者にはすべて使えるが、その特性が何なのかは使ってみないと分からない。要するに俺と真備は自らの魂の特性にまだ気付いてないということか…。

「ハナシヲモドシマース」

俺がゲイル先生の言葉をそこまで解釈すると、ゲイル先生は再び執刀を出し話を進めた。

「（日本語訳）私の執刀の特性である【治療結界】これは完全治療を可能にする特性です。つまり結界内では私は好きなとき好きな場所で完璧に治療することができるということです。」

逆に私が望まなかったら例え目の前に全身に致命傷の damage を負った人がいてもずっとそのまま…簡単にいうとこの結界内に敵を追い込むと敵はただなぶりごろしにされるだけなんですよ!!!
！」

シュッ!!シュッ!!

そこまで言った刹那。ゲイル先生が右手に合った執刀が2本俺に向かって飛んでくる。

カランカラン…

確かなるメスが地面に落ちた音。その頃にやっと炎は止み、俺の全身が再びこの部屋の前に現れるのだった。

「…OK。問題nothing」

その言葉は俺の覚悟の現れだった。大切なことを教えてくれた先生に対する敵意の現れだとも言つ。

812

「輝喜…」

「なんです。ヒナタン??」

お前は俺の代わりに先生の攻撃を受けてくれた。それに、俺はゲイル先生を1人の思いで攻撃するのは難しそうだ。

だから…ここから先。これからも一緒に戦ってくれ!!

「輝喜 俺【達】がしなければいけないことは何だ!!」

「…うん。決まってるでしょヒナタン!!」

そして俺は紅翼を持ってない左手を輝喜は負傷した足を押さえてない右手をゲイル先生に突きつける。

俺達の動作に懐疑そうな顔をするゲイル先生。そんなゲイル先生に今度は笑みを浮かべながら前に出した手の人差し指を収め親指を突き立て下へと向けた。

俺達の決意の現れとして。

『『肅正!!!!』』

俺が先生と戦う決意をしたのはこのときだった。

「日向。ついに戦う気になったのね」

あたしは輝喜と一緒に【肃正】と叫んだ日向を見てそう思った。

あたしと一緒に戦うときは人差し指で相手を指差し罪を裁くという意味を持つ言葉【断罪】

そして、輝喜と一緒に戦うときは突き立てた親指を下に向け不正を正しくするという意味の【肃正】と叫ぶ。

真備のときもあるんだけどそれはお楽しみに

こほん。話がそれたわ…まあ、あたしが言いたいのは、とにかく。今のあたしと真備とは、日向が戦う姿をただただ、ここで指をくわえて見守ることしかできないということだ。

この頑丈に固められた結界の外側から…。ある意味、ここはあたしたちにとって最悪の牢獄となっていた…。だけど

はっ！！冗談じゃないわ！！そんなことさせてなるものですか！！

「ゲイル先生！！あたしを舐めんじゃないわよ！！」

「っ!?!?どうした姉貴!?!いきなり叫んだりして…?!?」

突然のあたしの声に、きよとんとしたマヌケな顔を引っさげる真備だけど、あたしにはそんなこと関係ない。

怪我だらけで満身創痍な真備。そんな彼にあたしはキツと睨みつけると、一気に命令を下すのだった。

「真備!?!あんたさっき何の役にも立たなかつたんだから名誉挽回しなさい!?!この結界!?!あんたなら壊せる!?!」

「無理」

即答だった。あたしの言葉に、真備は頭をポリポリとかきむしりながら、結界の先にいる日向達を見据え、そう即答する。

分かってる。そんなこと分かってる…。それに役に立ってないなんてのも嘘。真備は、あたしと日向を必死に庇ってこんな大怪我をした。役立つどころか、あたしたちの勝利のキツカケにすらなったのだ…。

感謝してもらったりない。だけど、それでもあたしは、そんな真備にさらにくってかかるのだった。

「とにかくく!! 【懷虫】でも【鉄槌】でもなんでもいいから攻撃しなさい!!」

「だから無理だつて。【鉄槌】は頭上からじゃないと攻撃できないし【懷虫】にいたつては姉貴の【碧空】すら破れないんだぞ。…絶対無理!!」

激しく否定する真備にあたしは睨みを効かせる。

一瞬たじろいだ真備だったが、すぐに持ち直してあやすようにあたしに語りかけてきた。

「…姉貴。焦つても仕方ないぜ。ここは日向と輝喜に任せよう。確かに俺達が戦闘に参加したら早く決着つくかもしれない。…けどな今の俺達に出来ることは何もねえんだ。だから…な?…ナギねえ」

悔しかった。

真備が言ってることは全て正しかったし、あたしが焦っていることも完全に見破られていたからだ。

あたしは再び顔を伏せてしまふ。真備の言つとおり、確かにあたしは焦っていた。あの言葉。水城に言われたあの言葉『……ザコが』。あときはこれまで生きてきた中で最も悔しかったし最悪の侮辱だったが、今はそれだけじゃない。ここにいたら、否が応でも思い知らされる。

あたしは弱い。弱いあたしには何も守れないと…。

「…ごめん。真備」

あたしは真備の顔を見ることなくぼそぼそとそう一言呟く。これは自分の勝手な八つ当たりなんだと気がついていて。だから、あたしには珍しい素直な謝罪の言葉を述べるのだった…。

「…ナギねえ。気にすんな」

そう言うと、真備は落ち着かせようとあたしの頭を撫でてくる。実際あたしはその動作に真備の温もりを感じ、落ち着いていた。

ありがとう。真備。

真備の心遣いに感謝し、あたしは心の中でそう呟いた。こればっかしはさっきのとは違って、絶対に口には出してやらない。だって恥ずかしいし、それに

あたしの頭を撫でるなんていい度胸してんじゃない？

あたしは真備がやってはいけないことはやってしまったのをしっかりと確認したからだ。

そして低めの。でもドスの利いた声であたしは言葉を放った。

「…あなた。自分が何やってんのか分かってる？」

「は？………あ！！！？？？」

あははははは。今更気づいたみたいね馬鹿弟。でも…もう遅いわ。

あなたはすでに手遅れよ。なぜなら、あなたはあたしを侮辱し、自分のことを自慢し、あまつさえ自らの身長を自慢するなんて…。べ…別に羨ましくもなんともないんだからね！？

まあ、それはいったん置いてくとしても、そんなことされたら…あ

心の中で「ど・こ・に・し・よ・う・か・な？」と楽しげにほくそ笑んでいるあたし。この、真備の全身を眺めるといふ動作があたしたちの勝利へと繋がる突破口だと知らずに

ふふん ど・れ・に・し・よ・う・か・な？と……あれ？あれは…何かしら…？

そう言えば昨日は上半身ばかりだったから、今日は脚のあたりを…と、あたしが真備の足元に視線を移したそのとき、あたしは”それに”に気がついた。

ちなみに真備が今立っている場所はさっきまで日向がいた場所より3メートル後ろくらいの場所。

そこに”あれ”があったのだ。降ってわいて出てきたこの事態。あたしはすぐにそれに手を延ばした。でも

バチッ…！！

残念ながら、”それ”は結界の向こう側だった。

「姉貴？」

いつまでも攻撃がこないからか、真備はしびれをきらし、あたしに奇怪な目を向ける。

だけど、今はそんなこと関係なかった。

あたしは、真備の声を無視して、あたりを見渡す。すると丁度部屋の反対側くらいにもう一本。”それ”があった。

ゲイル先生の向こう側に2本。こちら側のあたしの目の前にあるやつを含んで2本。その刹那、あたしの中で全てが繋がった。

あたしの仮定は今、確信へと変わった。

「輝喜。輝喜。ちょっと…」

「…ナギリン？」

だが、”それ”に気がついたのはいいが、現状あたしには何もでき

ないことに変わりはなかった。だから、あたしはゲイル先生と日向には聞こえないようにそっと…輝喜を呼ぶ。

激しさが増す日向とゲイル先生の闘い。それにも関わらず、あたしの声にすぐに気がついた輝喜は、怪我をした脚を引きずりながら、あたしへと近づいてくる。

これで…すべての駒が揃った。

「ナギリン？ねえ、どうかしたの？？ナギリン？？」

「そつだぜ姉貴。急にどうしたんだよ？輝喜まで呼んで…これから何をおっぱじめるきなんだ？」

「…真備。あんたは役立たずだから黙ってなさい」

「ひでー…」

ごめんね。真備。でも、仕方がないことなのよ。こればかりは、あたしもあんたと同じ役立たず。どうしようもできない。

でも、輝喜は違う。輝喜になら、この戦いを終わらせられる。結界の中にいる輝喜にならね…。

「…輝喜。これからあたしが言つとおりに行動してほしいの。あたし達の勝利のために…ね」

「…!!!ナギリン!!!それってもしかして!?!?」

「姉貴…まさか!?!」

あたしの言葉に、期待に満ち溢れた顔をする真備と輝喜。その2人の期待に応えるように…あたしは、しっかりと頷いてみせるのであった…。

「ええ。突破口を見つけたわ。この治癒結界に隠された大きな穴をね…」

こうして、あたしと真備。そして輝喜の知られざる闘いが始まりを告げた…。

第28話 治癒能力の神髄（後書き）

作「はあ…」

知「ワオ！！作者さん！！作者さん！！どうしたの？あとがき始まつてすぐにそんな深いため息なんかついたりして！！」

作「ん？…ああ、知恵理か。…いや、あつたといえばあつたけど、なかったといえは何もなかった…かな」

知「…??よく意味分かんない」

作「はははは。まあ仕方ないよ…こればかりはリアルに存在する俺だけの悩みなんだから…」

日「よお知恵理！！こんなとこでなにしてんだ？」

知「あ！！ヒナ君！！うん。実はね…カクカクシカジカで…ツンツンデレデレなんだって…どうして？ヒナ君？」

日「…ああ、なるほど…。状況は分かった。原因も…な…」

知「ほんと！！ヒナ君！！教えて教えて！！」

日「ああ！！もちろん良いぜ！！実はな作者はな」

作「わあ～～！！言わないで～～！！」

ガツンッ…!?

風「あんたそんなこと言ってる場合!?! まだまだ感想が来てないってことは結構深刻じゃないのよ!?!」

作「うう…言っちゃった…」

知「ああ…泣かないで作者さん、よしよし） i | i (\ (^ | ^)
」

作「ぐすん。知恵理」

日「……(怒)」

ドゲシッ!?

作「ぐはっ!?! な…ぜ…に…?」

バタッ…

知「あれ? 作者さん? どうしたんですか? おーい! ! おーい! ! ……
寝ちゃった。ヒナ君。作者さんどうしちゃったんだろ?」

日「知らん」

知「ほえ〜?」

凧「はあ…前途多難ねこの二人の恋路は…」

作「…はっ!?!」

知「あ!?!作者さんおはようございます!?!…いったいどうしたんです」

日「消え失せろ!?!?!」

ドゲシツ!?!

作「ひでぶー!?!」

凧「…あゝあ。見事にトドメさしたわね」

日「ノンノンノン!?!こんな問題nothingだぜ!?!」

知& amp; 凧『問題大有りだと思っけどな〜(じゃない)』

作「うぐう…ひどい目にあっただ…」

日& amp; 凧『復活はや!?!』

作「むにゃむにゃ…感想早く欲しい…な…」

日「& a m p ; 凧『つて!!寝言かよ!?!』」

知「あははは…」

日「す、未恐ろしいやつだぜ…」

凧「あたしてきには、あんたが恐ろしいわよ…。いきなり作者蹴り倒して…。出番減らされるわよ?」

あんたがそれ言いますか!?

b y ペンネーム【馬鹿弟】

日「大丈夫だろ?俺、主人公だし?」

凧「…ま、いいけどさ」

知「あれ?ねえねえ、また作者さんが何か言い始めたよ?」

作「時の秒針。今回は　ゲイル編!!!終盤戦!!!闘いがついに動き出す!!!」

次回【ゲイルへの肅正】んー…むにゃ」

日「問題nothingだぜ!!」

知「ワオ…ヒナ君。作者さん寝ながら次回予告してるよ…すごいね…」

日「とりあえずつるさいから紅翼でぶったぎるか」

凧「いや!!それ死ぬから!!」

次回に続く!!

第29話 ゲイルへの肅正（前書き）

ゲイルとの全面対決がついに始まる！！

そして日向にはある変化が・・・？

第29話 ゲイルへの肅正

日向side

キイイイイインツ!!

狭い部屋…と、いうより廊下と呼べる場所。その真ん中、道をふさぐように張られた結界の中で刃と刃がぶつかり合った金属音が響く。

まあ、その正体であり、斬り合いに集中している俺と先生はあまり関係のないことだけどな…。

「Hey、ドウシマシタヒナタ？イキオイガナクナツテマスヨ!!」

「ご冗談でしょ？先生？俺は最初からずっと問題nothingですよ!!」

ゲイル先生との斬り合いも既に5分。だが、ニヒルな笑みを浮かべたゲイル先生のそう軽口を叩き、はぐらかしてはいたが、実際には俺は限界へと近づいていた…。

日本刀とメス…リーチの長さなどから圧倒的に俺のほうが有利だと思っていたのは遠い過去の話…。

ゲイル先生は、俺の予想を遙かに上回るほどに…強かった。

カキイイイインツ!!

「…っ!!はあ…はあ…はあ…はあ…はあ…」

メスと日本刀。このリーチの差は、近距離戦において逆に不利だと判断した俺は、いったんゲイル先生から距離をとる。

それを追いかけて、ゲイル先生は俺を自分のゾーンから簡単に逃がしてくれた。

それは、俺とゲイル先生との実力差を深々と俺に見せつけていた…。

「（日本語訳）…日向。あなたは強い。それは、あなたをずっと見てきた私だからこそ分かります。…ですから、いい加減に認めたらいかがですか？」

俺へと優しく咎めるような言葉。それは、喧嘩したたびに治療してくれたゲイル先生が治療中に語りかけてくれた言葉と同じであった。だけど…それは、同じであって同じではない。なぜなら、今のゲイル先生の言葉は…俺自身を簡単に打ち砕く言葉だったからだ。

“信頼” “絆” これまでゲイル先生と築いてきた…すべての言葉を…。

「はあ…はあ…な、何をだ…ですか？」

「… Ah・ヒナタ。アナタハバカデハアリマセーン。ユエニ、アナタハワカツテルハズデスヨ」

その瞬間だった。俺の頬を高速で何かが通り過ぎる。昨日のレリエルの光の矢と似たような感覚。だが、実際には、それはまったくの別物であった…。

「…っ！？いつの間に」

「…アナタ“ヒトリ”デハ、ワタシニカテナイトイウコトニ…デスヨ」

気がついたときには、ゲイル先生の右手からメスが1本消えていた。しかし、ゲイル先生の右手にはすぐに再び新しいメスが握られる。

そして、ゲイル先生は再び右手に現れたメスを構えると、瞬く暇もなくメスが投げられた。

シュンツ！！

「くっ！！ゲイル先生！！」

キンツ！！

俺は飛んでくるメスを紅翼で叩き落とす。

だが、ゲイル先生の猛攻は終わらない。すぐさま2撃、3撃と投メスを繰り返すのだった。

「ヒナタ！！アナタハアマイ！！ワタシガ、キツイテナイトデモオ

モツテマシタカ!? ソノ“ヤイバ”ニ!!」

シュンツ!! シュンツ!! シュンツ!! シュンツ!!

「…っ!! 先生!! 俺はあなたを傷つけたくなかないんです!! 下手をすれば死んでしまいかもしれないですよ!! そんなこと…俺にはできません!!」

「ソノケツカガ“ミネウチ”ト、イウワケデスカ? ハ!! ワタシモ、ナメラレタモノデスネエ!! ヒナタ!!」

「でも…それでも!! 俺はあなたを…あなたを信じたいんです!! あなたは俺に守り方を教えてくれた恩人。知恵理を守るすべを教えてくださいました人なんですから!!」

「ダカラ…ソコガ“アマイ”トイッテルノデスヨ!!」

キイイイインツ!!!!

激しくぶつかり合う金属音。それと同時に飛び交う俺とゲイル先生の言葉。俺とゲイル先生しかない、ここは…荒れていた。

「はあ…はあ…はあ…」

「ハア…ハア…ハア…」

あがる息。軋む体。少なくとも俺は、限界間近だった。傷つけたくない。その一心で俺は闘い続けていた。

だけど、それももう…限界だった。不思議なものだ。信じてた人に裏切られて心も体もボロボロなのに…俺の“魂”は歓喜していた。

まるで久しぶりに闘う強敵に胸躍るかのように…。それは俺の中で渦巻く。

さっき、デモンのアマテラスと闘ったときと同じ感覚。俺は…すでに、その感覚にドップリと浸かってしまっていた…。だけど

「はあ…はあ…はあ…ゲイル先生。俺は…あなたを傷つけたくない…。これだけは…変わりません」

「……………」

だけど、俺の頭は妙に冷静だった。これほどの感覚。薬と同じよう

にドップリと浸かっているというのに……俺は、刀の刃の方をゲイル先生へと向けることはなかった。

峰打ち。それだけを目的に、俺は刃を裏返すことは決してなかったのだ。

「……ヒナタ。ホントウニ……アナタハ“アマイ”」

「……別に構いません。俺はあなたを傷つけない。この心に嘘も偽りもありませんから」

「……」

「……」

「……」

「……」

「（日本語訳）……はあ。分かりました。ここまで言っても分からないのならば、致し方ありません」

「……!」

長い長い沈黙の終わりを告げたのは、どこか諦めたかのようにそう

呟くゲイル先生の声であった。

そして、その次のゲイル先生の行動は、俺の予想を見事にかつ、遙かに裏切るものであった。

「……！！ゲイル先生！？」

「……ヒナタ。ソコマデイウノナラ、ワタシニモカンガエガアリマ〜ス」

その行動に、俺はただただ呆然とするしかなかった。なぜなら、俺と敵対し、俺も敵対する決心をしたというのに……ゲイル先生は、俺のすぐ目の前で

シャキンッ……！！

「……コレデスコシハワタシノ“ハナシ”ヲキイテクレマスヨネ？」

自分自身の喉元にメスを構えていた。

「げ…ゲイル先生。何を」

「（日本語訳）日向。勘違いしないでください。質問するのは私であってあなたではありません」

聞く限りでは、いつも通りのふざけ半分のような片言で明るい声。だけど、ゲイル先生の目は…本気だった。

「や…やめてくださいゲイル先生。俺は…俺はあなたのそんな姿なんてみたありません…!!」

「…デハ、ワタシノハナシヲキクコトデスヒナタ。デハケレバ…」

「…!!でも…でも!!」

「（日本語訳）いい加減にしなさい日向!? “でも”も“なに”もありません!! 何度言わせるつもりですか!!」

突然、荒げられたゲイル先生の声に俺の思考は停止した。今まで考えていたこと　ゲイル先生をどう止めるか　ということを含めて…。

俺の頭の中は真っ白になった。

「…ゲイル…先生」

「（日本語訳）日向。よく聞きなさい。私はあなたが分かってるものと思っていました。ですが、それはどうやら私の勘違いだったようです…。あなたは…まだ何も分かってなんかない…」

「…分かって…ない？ゲイル先生…それはいつたい」

「（日本語訳）…日向。あなたは…なぜ闘うのですか？なぜ人は…拳を振るうのですか？」

「…っ!？」

…唐突な質問。だけど、その内容は忘れることのできない言葉であった。

その質問は3年前のあの日。ゲイル先生から問われた内容とまったく同じ…。そして、俺はその応えを知っている。忘れるわけがない。

俺はこの時点ではようやくゲイル先生の真意が分かった。先生は…先生は俺を試してるんだと。

「…ゲイル先生。それは…【目的】ですか？それとも…俺の…【意志】…ですか？」

逆に聞き返した俺にゲイル先生は深く息を吐くと、しっかりとした目で俺を見つめてくるのだった…。

「（日本語訳）…あなたがもし、私の言葉を覚えているのならば…今のあなたの質問の応えは、自ずと同じになるはずで〜す」

…やっぱりそうだった。この瞬間。俺は確信を得た。やはり、ゲイル先生は俺のことを試している。

でも…俺はゲイル先生から教えてもらったことを忘れた事など一度たりともない。あの日あの時のことを忘れたことなど一度としてない…。

だから…俺は叫ぶ。先生が…ゲイル先生が望む応えを。俺自身の口で 叫ぶのだった。

「ゲイル先生…俺の望みは…俺の望みは…俺の望みは知恵理を守ること…！それだけです…！ゲイル先生…！」

「…ソノトリー。ワタシハアノヒ、タシカニソウオシエマシタ。デスガ」

次の瞬間。空気が…揺れた。

「デスガ…デハナゼ！！ワタシヲタスケヨウトシテイル！！ヒナタ！！」

俺の高らかな宣言と同時に飛んできたのは厳しいゲイル先生の叱咤の言葉。その言葉は俺にとって…衝撃的だった…。

「サア…ナゼデスカ？」

「なぜ…なぜ…それは…ゲイル先生は俺の恩人で…いつも喧嘩したときも嫌な顔せず治療してくれて…いつも俺たちを優しく見守ってくれて…強くて…優しく…変わった身の上の真備や凧。眼帯の輝喜や、孤児の俺達を偏見なく見てくれる大人だから…だから…だから」

「…ソレダケ。デシヨ？」

どこか、含み笑いのゲイル先生の言葉。それは、いつもと同じ優しい雰囲気という言葉のような気がした…。

「…それだけ。それだけって！！ゲイル先生！！」

「（日本語訳）事実です。いくら見積もってもそれが限界。私は、あなたにとってそれだけの人間なのです。でも。」

そのとき、ゲイル先生のブルーアイにあのときの映像が映った気がした。

3年前のあの日。知恵理を守ると誓ったあのときの映像が

「（日本語訳）でも…あなたは知恵理を大切にしている。幼なじみとして…家族として…。私はあなたたちを見ってきました。だから、あなた達の関係も分かっているつもりです…」

「ゲイル先生…」

「（日本語訳）…日向。あなたの一番大事なものはいったい何なのですか？」

その言葉に俺は頭を殴られたような衝撃を受けた。俺の中にあるその事実。

本当は苦しい。本当は辛い。でも、認めなければいけない。認めなければ…俺は…必ず後悔するから。だから

「…俺の…俺の一番大事なものは…知恵理だ。たとえば、何を失っても…俺は…彼女だけは失いたくありません!!」

俺はその事実を認めるのであった…。

「（日本語訳）ようやく認めましたね…日向。そのうえで、私は言います。だったら前に進め!!あなたが助けたいのは私ではなく知恵理のはずです!!それを忘れてはいけません!!あなたが今、しなければいけないこと。それは」

そう言ってゲイル先生は再びメスを構える。その瞳に…優しさはなかった。

「（日本語訳）それは 知恵理を助けに行くことです！！例え、私の屍を越えてでも！！知恵理を助けに行く！！それが！！私があるあなたに教えたことです！！」

「っ！！…やってやる。…やってやりますよ！！ゲイル先生…いや！！ゲイル！！俺はあんたを…倒す！！」

それが、俺のめいっばいの意思表示だった。

ゲイル side

…日向。やはりあなたは強く真っ直ぐだ。

私は日向の意思表示ともとれるその言葉に、何かこみあがってくる感情を感じました。うれしさと…かなしさ。この2つの感情が。

本当に…あなたは素晴らしく成長をとげましたね。…あの人、【空】も鼻が高いでしょう。

最後まであなたの成長を見守れないことが…とても残念です。日向。

「いくぜゲイル！！もちろん問題 nothing 以外の応えは受け付

鳴り響く金属音。それは日向が上から振り下ろした日本刀を私は両手の指全てに挟んだ8本の執刀を使って受け止める音。

とてもナチュラルかつエクサイトな音は私を心の底から高揚させられます。すごい…これが…これが本当の“不知火日向”

その覇気は私の予想を本当にいい意味で裏切ってくれました…!!

ジリジリジリ…

私の拳を焼く紅翼の炎。熱い。熱い。だけど、この【治癒結界】の中にいる限り、私の傷は傷はすぐに回復する。

それは、この結界の中にいるかぎり、私が圧倒的に有利であるという事です。それでも…日向は、私に向かってきました。

「サスガニ…ヤリマスネ」

「まだまだこんなもんで満足さねーよゲイル…!!」

「Excellent!!!!ソレデコソ!!!アナタダ!!!!」

シャキンッ…!!

日本刀とメスの鏝迫り合いから離れ、間をおかずに日向がもう一度紅翼を振りかぶる。

だけど、私もただ黙ってるだけではありませんっん!!!!

シャキッ!!

振りが大きい。紅翼を振りかぶる日向の姿を見たその瞬間、私は日向に向かってメスを突き立てる。

でも、日向はさらにその上を行っていたのです…。

シュタンッ…!!!!

「…ッ!!…ッ!？」

「……」

…そのとき、私はあまりの事態に言葉を出すことすらできませんでした。舞い上がる日向。突然のその事態に、私は目を疑います…。ですが、これは事実。私の見ているものは現実でした…。舞い上がる日向。そして、その背中には確かに

「…紅翼の…天使」

ザシュッ！！！！！

…確かに…【紅い翼】が見えました…。その姿。まさしく【紅翼の天使】。そしてこれが…。

日向の…紅翼の【特性】

「…問題…nothing」

「グハッ…！！」

バタツ…!!

…ですが、私はその姿を確認する前に、私の目の前が真っ赤に染まりました。あまりの痛みに地面に膝をつく私。その目線の先には、赤く色づくドロツとした液体がありました。

そのとき、私は初めてあの刃のような鋭く、嫌な音の正体を知りました。あれは…私の腕を紅翼が斬った音だということに…。

「グアアアア…!!グッ!!ミギウデノ“サイセイ”カイシ…!!」
「……………」

その声とともに、私の右腕は治療されていきまーす。自己再生と言っても差し支えはないはずでーす。

でも…痛みは尋常ではありませんでした…。

「……………」

視線を感じる。すぐ目の前から。ですが、傷が塞がりつつあるとは思いますが私は顔を上げることはできませんでした…。

それと、私は日向の戦闘力が先ほどより遥かに高くなっていたことに驚きを隠せませんでした。あの動きは、明らかにさっきまでの動きを驚愕している。

…急速に成長している？

私がそう思うのは必然でした。それに

カッン…

そのとき、すぐ目の前から聞こえる足音。妙に静まりかえった部屋。その音は異様にも感じまーす。

私は腕の痛みを我慢しつつ顔を上げました…。

「…っ!？」

すぐ目の前。そこには、私を見下ろす形で日向がいました。その背中には、さきほど見えた羽は見あたりませーん。

いつもどおり、そこには人間の日向がいました。…さっきのは、本当に幻想だったのか？そんな疑問が私の中に渦巻きまーす…。

しかし、私の疑問は日向のある一転に目がいった瞬間、すべてのことに合点が이었습니다。

そう、そこは日向の【瞳】。そこにはさっきまでとは変わらない日向の瞳がまーす。

だけど、1つだけ変わった いや、昔に戻ったといったほうがいいところがありました…。

血に染まる黒瞳。さっきまでの日向と違うところ…。それは、瞳の色。このとき、日向の瞳は

血に染まったかのように紅かったのです…。

風side(少し前)

「どつ輝言？いけそつっ？」

「うん。OKだよナギリン」

部屋に響きわたる金属音。そんな中、あたし達　実際には輝喜は、日向とゲイル先生の2人に気付かれないように着々と行動を進めていった。

どうやら“2本目”も簡単に抜けたようね…。

輝喜のその言葉に、あたしは緊張が解けたかのように一気に息を吐き出す。さて、あとは

「…で？決行はいつにするんだ、姉貴？」

「まあ、落ち着きなさい真備。物事にはタイミングってやつがあるんだから…。それに、やるのは輝喜。あんたじゃないわ。あんたとあたしはここで黙って指をくわえるしかないのよ…。」

「…ちつ。クソつたれが」

…そう。この作戦、あたし達は何もしない。いや、参加できないのだ。

これは結界の中にいる輝喜だからこそできる作戦。だから、脚が痛

いのはわかるけどそれに鞭うつって頑張って貰わないといけない。

この闘い。全ては輝喜の腕にかかっているっていいんだから…。

「…っ！？ナギリン。どうやら状況が動いたみたい」

「…そう。ついに始まるのね」

あたし達の闘いがね…。

「…じゃあ輝喜。後は頼んだわよ… good rack!!」

ちなみに、この英語表記は別に間違いじゃない。なぜなら、あたしがこの言葉に込めた意味は【健闘を祈る】という意味ではなく…。

【よい破壊を】という意味で使っているのだ。

「ふふ ナギリンO.K…ヒナン風に言つと問題 nothing
g…！楽しみにしててね」

「いよいよね輝喜。用意して…」

「うん。行くよナギリン」

あたしの指示に、輝喜は痛そうな脚に鞭打って、立ち上がる。さあ…行くわよ。そしてついにそのときは訪れた。

シュタンツ…!!…!!…!!

あたしたちの誰もが予想しなかった予想外な形で…。

バサツ!!バサツ!!

「…っ!?なに…なによ…あれ。…日向…なの?」

「マジ…かよ…」

「…赤い翼。ヒナタン…天使みたい」

一瞬。ほんの一瞬だけ現れた日向のその姿。そのあまりにも美しい姿に…あたしたちは絶句してしまっていた…。

あまりに煌びやかで…あまりに神々しいその姿はまさしく…【紅翼の天使】

これが…【紅翼の天使】。これが…“不知火日向”

ザシュツ…!!!!

「…問題…nothing」

「グハツ…!!」

そして、あたしたちがハツと気付いたときには…状況が一変していた…。

バタツ…!!

痛さゆえか、膝をついてしまうゲイル先生…。その右腕からはおそらく、あたし達が呆然としているうちに斬られたと思われる血のあとが…。

でも…この結界の中だからか、ゲイル先生が一声かけるとすぐに止血され傷が癒されていく…。

それを見たあたし達は叫ぼうとして開けた口に何を言わせればいいのか分からなくなっていた…。

そして“時”は…動き出した。

「ヒナタ。アナタ…ソノ“メ”ハ、イッタイ…？」

…啞然とした表情。だけど、どこか納得したといったゲイル先生の表情がそこにあった。そして、その言葉により、あたしたちの間にも戦慄が走る。

幸か不幸か、あたしたちの位置からは日向の目を見ることはできない。それでも…あのときの映像がフラッシュバックしてくるのには十分だった。

それは、今日の朝…屋上での出来事。怯えた目でこつちを見た日向。そのときの彼の瞳。それこそがまさに紅だったのだ。

さらに、そのときの日向の口から放たれた言葉…。あれは

「ただ、あたしのフラッシュバックは日向達の次の会話にかき消されるのであった…。」

「…ゲイル。俺の目がどうかしたのか？」

「…ヒナタ。アナタ…マサカキガツイテナイノデスカ？アナタノヒトミ…アカイデスヨ」

ゲイル先生の言葉に、あわてた様子の日向は持、っていた紅翼で自分の目を覗き見る。

「あれ？確かに紅い。俺…どうしたんだ？」

その会話の内容。そして、日向の様子からあたしは日向がいつもの日向だと察した。

そして、冷静な頭を取り戻し、いつもの日向だと気がついたあたしは、本来なら真備と2人で叫ぶはずだった作戦開始の合図を

「日向！……！」

あたし1人で叫んだのであった。

日向side（少し前）

な…何なんだ。この感覚？体の自由が…体のコントロール権が俺にはないようなこの奇妙な感覚は…？

デモンと戦ったときも感じ取ったこの感覚に、俺は戸惑いを隠せずにはいらなかった。

まるで、体に染み付いた何かが勝つてに体を動かしているみたいなの…この感覚に…。

「……！？」

顔を上げたゲイルがこっちを見て何かに驚いていた表情となる。い

ったいどうしたんだ…？

ていうか…傷、もう治ってるよ…。はぁ…鬱だ。せつかく勇気振り絞って斬りつけたのに…。

でも…ゲイル。本当にどうしたんだ…？ いったい何に驚いているんだ…？

そして“時”は…動き出した。

「ヒナタ。アナタ…ソノ“メ”ハ、イツタイ…？」

…啞然とした表情。 だけど、どこか納得したといったゲイルの表情がそこにあった。

目…瞳？ 俺の瞳がいったいどうしたっていうんだ…？ だが、次の瞬間。 俺は戦慄することとなる。 次のゲイルの言葉に

「…ゲイル。 俺の目がどうかしたのか？」

軽い気持ちで聞いてみたがゲイル先生の言葉は俺を慌てさせるのだった。

「…ヒナタ。アナタ…マサカキガツイテナイノデスカ？アナタノヒトミ…アカイデスヨ」

な、なんだって…！？

その言葉に、俺は慌てて何か顔を見れるものを探す。何か…何か…！？

あった。俺は鏡となるものを右手に持っていた…それは日本刀。紅翼である。

俺は急いで紅翼に顔を写して目を見てみるのだった。

「…っ！？」

確かに…日本刀。紅翼に映った俺の瞳。それはまるで血に染まったかのように紅かった…。

「あれ？確かに紅い。俺…どうしたんだ？」

この事態に、俺は呆然と呟いてしまふ。なんで…どうして…紅くなってるんだ？

【日向】は出てきてないのに…なんでぬんだ？

疑問は絶えない…。だけど、俺に考えさせられる時間は与えられなかった。

「日向！…！！」

「…っ！？凧！？」

突然狭い部屋中に響きわたる高音の叫びに近い俺を呼ぶ声に、俺は振り返る。この部屋でこんな声を出せるのはただ1人。凧だった。

だが、そんな凧の姿を見るより先に俺はとんでもないものを目にする。

「…っ！？っおおおおおおおおおおお！…！！」

「なっ！？冗談だろ！？」

思わず、そう言いたくなる光景。でも現実だった。

そこには…痛そうに片方の脚を引きずりながらも、声を張り上げ懸命に走ってくる輝喜の姿が。目を疑いたくなる光景だった。だけど

「輝喜を守りなさい！！！！！！」

真備ならともかく、輝喜はバカじゃなければ、こんな場面でふざける奴でもない。ましてや輝喜の瞳は強い意志をはらんでいた。

それに加えて、凧の否定を許さないという言葉の叫びまでプラスされたなら、俺を駆り立てるのに十分すぎる材料だった。

「っ！？ O・K…！！問題 nothing！！こっちは任せろ！！」

正直なにか起こっているのかは分からない。だけど俺は敢えて何も考えずに、輝喜を背にするようにゲイルにへと立ち向かった。

「 ツウコウキンシ” デース!!!!!!」

鏢迫り合いの状態。そこからゲイルは、俺の日本刀を上には押し上げるとそのまま俺の腹に蹴りを入れて俺を倒す。

いくら能力者で驚異的身体能力を持っていてもそこは大人と子供。腕力の差はひをみるより明らかである。そのうえ、平均的な中学男子の体格の俺に入れられた大人の蹴り…。

俺の戦闘力は一気に刈り取られていった…。

「マチナサイ!!! コウキ!!!!!!」

ガシッ…!!!!!!

だけど…それでも、俺は痛みを耐えながら走る輝喜のために、輝喜を追いかけようとするゲイルの脚を必死に掴んだ。

行かせねえ…絶対に行かせねえよ!!!!!!ゲイル!!!!!!

ギョウウウウウ…！！！！！！

「…ッ！？ハナシナサイ！！ヒナタ！！」

「問題nothing…それは聞けない相談だゲイル。それにゲイルだつて言つてたじゃねーかよ」

シャキンッ…！！！！！！

必死にもがいて俺の手から離れようとするゲイル。だけど、この音を聞いた瞬間、顔から一気に血の気が引いていった。

「こっから先は」

「ヤ…ヤメナサイ！！ヒナタ！！」

青ざめるゲイルの顔。その目線はゲイルの脚を必死に掴む俺の左手とは反対の俺の右手へと向けられる。日本刀を　紅翼を持った右手へと。

シャキンッ……！！！！！！

ゲイルの方も……さすがと言えるほどに諦めが悪かった……。その姿に俺は

「くっ……くっ……おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお……！！！！！！」

シュンッ……！！！！！！

……何もすることができなかった。それは一瞬の出来事。まさしく刹那の攻防という言葉がぴったりの状況であった。

気がつけば、俺の努力は虚しくも……崩れ去った。輝喜へと向かって投げられたメスによって

グサッ……！！！！！！

「ぐっ…!!??」

そのメスは見事に輝喜の怪我してないほうの脚に突き刺さる。まさに神業。いや…この場合は執念のたわものと言ったほうがいいかもしれない。

それほどまでにすさまじく正確な一撃であった。

バタンツ…

…そして、輝喜は倒れる。部屋の反対側。奥へ続く方の扉近くのそこで。輝喜は力尽き、倒れ込んでしまう…。

その姿に俺は

「…ごめん輝喜。俺…守れなかった」

ただ、謝ることしかできなかった。俺のせいで…俺のせいで…何らかの思惑が失敗したのだと…。そう思うと、俺の中には謝罪の気持ち。それしか出てこなかったのだ…。

「……」

そして、訪れる静寂…。

痛みが走る体を俺は必死に動かし、なんとか上半身だけを起こす。

ゲイル先生は多量の血の跡があるとはいえ、すでに傷はふさがっており、メスを投げた状態で固まっていた。

後ろを見る余裕がないから風と真備の様子は分からない。だが、一言も話さない限り… 2人にも余裕は感じられなかった。

そして、残る1人。おそらく、誰もが彼の動向を見守ってると思われる輝喜は倒れたまま…動くことはなかった…。

…俺はおそらく、この中で唯一状況を把握できてない。だからこそ輝喜の行動の意味を知りたかった。なぜあんなことを…。なぜあんな行動を…。

疑問は絶えず俺の頭に押し寄せる。と、そのときだった。

「いててて…ああ。逃げきれなかったなあ」

これまでの静寂から解放されるかのように、その声が聞こえてくる。輝喜だった。

その声を聞く限り、大事はなさそうで一安心である。俺は彼のそんな様子に安心したように息を吐き出した。

「輝喜。大丈夫よね？」

「大丈夫か！？輝喜！？」

途端。鳴り響く心配げな真備と凧の声。だが、その言葉には、輝喜を心配する以外にも別の意味が込められている気がした。

別の…意味が…。そして、俺はその意味を意外な形で知ることになった。

キラッ…

真備と凧の心配げな声。その声に輝喜は声はなく行動で応える。

拳げられた右腕。その拳の中に部屋の光でキラリと光るそれがあった。あれは…まさか

俺の結論は…正しかった。

「ふふ ナギリン。マキビン。そんなに心配しないでよぉ〜 もち
ろん mission completeだ・か・ら」

……は？

「ほ、本当に？あかし達を安心させるためについてる嘘…なんかじやないわよね？」

「あは ナギリンたら心配性だなぁ〜 これ見てよ。こゝれ」

ブーン…

その刹那、輝喜の手にあったそれは、輝喜の手によって軽く凧たちがいる方へと投げられる。

俺のすぐ上を通り過ぎるそれ。スローモーションのようにも感じたその動作にて、俺は輝喜の手にあったそれを正確に確認するのであった。

カランカラン…

そして、凧たちのすぐ目の前に落ちるそれ。それを見た真備と凧は

『『や、やった〜！〜！〜！』』

それを見て同時に同じことを叫んでいた。いや…だから、なんでだよ？

俺の頭はますます混乱するばかりで、いっこうに事態の打開にはつながらない。本当に何なんだ？輝喜のこの行動の意味は…？

だけど、俺以外のやつらにはすべて解かっているらしく。話は俺の意志とは関係なく、勝手に進んでいった。

「…ヨロコブノハ、マダハヤクアリマセンカ？」

さらに続くゲイル先生の意味深な発言…。ついに、これはただ事ではないという雰囲気だ。それでも…俺にはこの事態がさっぱり分からないのに変わりはない。

最早、このままでは埒が明かない。そう思ったそのとき、凧はさらに訳の分からない言葉を出してくる。そう…他ならぬ、俺のことについてを

「はん！！問題ないわゲイル先生！！だって、最後の1本は日向が抜くんだからね！！」

「はあ…？」

そう高らかと宣言する凧の目の前。そこにはさっき輝喜が投げたそれを含めた3本のメス　　執刀が落ちているのだった…。

第29話 ゲイルへの肅正（後書き）

作「はい！！じゃあ今回は心理テストをしたいと思います！！」

刹「いきなりすぎるわボケ！？」

凧「はあ…いつものことながら藪から棒ね…」

日「しかも、なんで心理テストなんだ？興味ないから帰っていい？」

輝「え〜 おもしろそうじゃん 一緒にやろうよ〜ねえ〜」

日「ガキかお前は！？たく…何言われても俺は帰る。じゃあ」

知「わお！！心理テストするの！？面白そう〜！！ヒナ君！！ヒナ君！！一緒に頑張ろうね」

日「 なんと、見せかけて問題 nothing！！そつだな頑張ろうな！！知恵理！！」

真&凧&刹「つておい！？」

輝「あははは さすがチエリン。ヒナタンの扱いは天下一品だね」

作「あ〜そろそろいいですか？」

日「問題 nothing。いつでもいいぜ作者！！いや…ゲームマ

スターよ!!」

作「いや…俺そんな名前じゃないから…はあ…まあいいけど。それじゃ…行きますね?あなたが好きな動物を2つ選んでください」

日「俺はライオンと狼かな。すごく格好良いじゃん!!」

知「私は猫派だから猫ちゃんオンリーでも可愛い猫ちゃんたちよつとヒナ君似の猫ちゃんにわけよつと!!」

真「猪と…鯨かな?この間食ったときうまかったし…ジュルリ」

風「はあ…あんたってホントバカ。美味そうといえば鷹と針鼠に決まってるじゃない」

輝「じゃあ俺は敢えて可愛いパンダと醜い顔のコウモリを選ぼうかな」

刹「…なんでこいつらこんなにひねくれてやがんだよ…馬とリスで」

作「なるほどね…さて、以上のことから次のことが分かります。

最初の動物は普段あなたが見せている顔。

2番目はなかなか見せないあなたの内面です。

結果は以下の通りそれでは結果をオープン!!」

～普段の顔～

日向 誰にでも親しまれる中心

知恵理 おっとりとした天然

真備 何事にも当たっていく猛進

凧 気が強い高飛車

輝喜 マイペースで楽しむ楽道家

刹那 元気いっぱい1人走りする存在

日「へえ〜知恵理のことよくわかってんじゃん」

知「あー！！ひどいよヒナ君…私天然じゃないもん！！」

真「俺って突っ込んでいくタイプなのか？」

凧「あんたの場合周りまで巻き込むでしょ！？少しは自重しなさい！？」

輝「確かにナギリンは高飛車、ヒナタンについても正しいと思うな」

刹「…なんか俺の真備のに似てね？」

作「では、みなさんの本当の顔を発表…は次回にして予告いきまーす。次回の時の秒針は

その炎。日輪のごとくすべてを燃やし尽くす烈火の世界となる。

次回【日輪流炎術】

日「問題nothingだぜ!!」

日「本質か…あまり知られたくないんだけどな…」

知「ひよ？」

次回に続く!!

第30話 日輪流炎術（前書き）

日向の新しい力が今解放される・・・

V S ゲイル編決着！！

問題 nothingだぜ！！

第30話 日輪流炎術

日向 side

「あゝもう!! お前ら俺を置いて勝手に話を進めるな!! 俺はぜんぜん問題 nothing じゃねーんだよ!! いい加減説明しろ!! あゝあ!!」

輝喜の謎の行動後。おそらくこれからの出来事の渦の中心にいますというのに、まったく話がかめないこの状況に俺の頭はついにオーバーヒート!!

爆発しそうなほど混乱していた。いくら、炎の能力者だからといっても頭の中まで炎への耐性があるわけではない。

そして結果として、頭の中が完全にパンクさせてしまった俺はあまりに理不尽なこの現状にキレてしまったのだった。

「ま…待って日向。いい? お、落ち着きなさい…。まずは話をするから…」

「ソ、ソウデスヒナタオチツキマシヨウ…ネ?」

「そ、そうだぜ日向！！落ち着け！！冷静になれ！！ちなみに俺も今の状況よく分かってないから！！」

「いや！？お前は分かってなくちゃダメだろ！？」

真備のあまりのバカさ加減に思わずツツコミを入れる俺。ちなみに真備。俺は情報不足で分かってないが、お前は理解不足だろうが…一緒にするな！？

ていうか、凧もゲイルもなんでそんなに必死になって俺をなだめるんだよ！？てめーらは今、敵同士じゃなかったのかよ！？

俺は最早ムチャクチャなこの状況に為すすべは何もなかった…。こうして、俺のささやかな反逆は幕を閉じるのだった。

「…分かった。問題 nothing。誰でもいいから状況を分かるように説明してくれ」

俺がしぶしぶといった感じで妥協し、納得すると4人（ちなみにモニターで知恵理も見てるから正確には5人）はあからさまに肩を撫で下ろすのであった…。

俺は猛獣かあああああああああああああああ！？

「で！？なんで輝喜が走ってきたんだ？」

俺はいまだに怒りをおさめきれないから怒りたっぷりの口調で問いかける。

すると、この問いに応えたのは凧だった。凧は自分自身の前、そこにある3本の執刀 さつき輝喜が投げたそれを指差す。

俺がその指に理解を示し輝喜のほうを向くと、輝喜も分かっていたのか俺に向かって手を振っていた。

「ヒナタ〜ン！！それをちゃんと見てね〜！！」

「見てるよ輝喜。それで？なんで輝喜が執刀を持ってんだ？ゲイル先生が投げたやつ…ではなさそうだけど…」

俺の疑問符に今度は後ろの真備が叫んだ。

「へへっ！！日向！！そいつはな、こっちに2本。あっちに2本。」

地面に刺さってた執刀なんだぜ。で、いまここにあんのが、こっちの2本とあっちの2本のうちの1本ってわけだ!!」

「どうでもいいけど、何もわかってないお前が威張って言うことではないな」

思わず口にでたが、ここは敢えてスルーさせてもらおう。それよりも、問題は執刀が刺さってたということである。

凧たちの側は最初にゲイル先生が執刀を投げたからまだ分かる。だけど、問題は奥に続く扉の方の執刀だ。これは…いつたい？

俺が考えを巡らせていると今度は、凧が応える。

「日向。あんたのことだからなんで執刀が刺さってるんだ?とか考えてるんでしょ?」

「…まあな。説明してもらってもいいか?」

「うーん…まあ、あたしが説明するのもいいんだけど、はっきり言っただけのはただの憶測なのよね…。だから、それは」

そして、凧は輝喜に向けていた指を今度は輝喜とは違う方向の俺の後ろの方へと向ける。

そこには、おそらくこの中でも誰よりもこの状況のことを分かっている人物

「ゲイル先生に話してもらったほうがいいんじゃないかしら？」

俺が今度はゲイルのほうを向くと、ゲイルはやれやれ、もしくは降参だといった表情で説明を始めるのであった。

「（日本語訳）…私の執刀の特性【治癒結界】確かにこれはとても wonderful かつ Convinnence（便利）な特性です。でも…こんな便利なものにはそれなりの発動の条件があるのです…」

「発動…条件？」

呟いた俺にゲイルはこくりと頷いた。

「（日本語訳）私の執刀の特性である治癒結界。これの発動条件。それは」

その刹那、ゲイルは右手を顔の前まであげ、手のひらを開く。そのそれぞれの指の間には 4本の執刀が挟まれているのであった…。

「（日本語訳）発動条件。それは 【四方取り】です」

そう言うとゲイル先生は輝喜とは逆方向の後ろを指差す。

そこにはおそらく輝喜が回収し忘れた最後の1本の執刀が刺さっていた。そして、それを見た瞬間。俺の頭の中ですべてが繋がった。

そう…だったのか…と。

「（日本語訳）日向。あそこは私の結界の一番端だと思ってください。輝喜が回収した3本もそれぞれが、結界の端のうちの3カ所あったやつです」

やっぱり…そうだった。このとき、俺はもう1つの疑問の答えについても確信を得た。

それは…いつ、治癒結界が発動したかということについて。ゲイルの話が正しければ…おそらく発動したのは

「（日本語訳）つまり、私の結界は地面に刺した4本の執刀を端にして形成されているということなんです。で、最初に日向、あなたに攻撃したときに投げた執刀…あれが地面に刺さったときに結界は発動したので〜す」

そこまで一息で話したが、理解は出来た。

ようするににあの4本の執刀で【治癒結界】は形成されているという事か…と。ふと、そのとき、さらなる疑問が俺の頭に浮かんだ。

「…でもゲイル。それだと1本でも執刀が抜かれただけでも、結界は崩れるんじゃないのか？輝喜はすでに3本も抜いてるのに…なんでこの結界は崩れないんだ？」

俺が口にした疑問に、ゲイルはヒューと口笛を吹くと、嬉しげな表情を浮かべるのであった。

「（日本語訳）excellent. さすが日向。すばらしい着目点です。確かに、この結界は、4本の執刀を軸にして造られています。ですが、一度結界が形成されると結界は安定するので、そう簡単には崩れないのです。ただし」

そこでゲイル先生は一度言葉を切ったが深く一回深呼吸をして最後の言葉を言い放った。

「…4本の執刀がすべて外れると結界は崩れます!!」

その言葉に、俺ははっとした。現在の状況は、輝喜が頑張って執刀を三本外したという状況。

つまり、この結界を維持しているのは、あのゲイルが指差す方向にあの一本だけということだ。と、いうことは…あれさえ、あれさえ抜けば

「…吹け【風神】」

「…鳴り響け【雷神】」

凧、真備が戦闘可能になる。そういうことだ。それはつまり…俺たちの勝利だということだ…！

結界の外。そこでは、凧と真備の声と同時に強風が吹き。落雷が落ちていく。2人も…戦闘準備は万全な様子であった。

「…ヤレヤレ。キガハイデスネ。ソトノフタリハ」

「…あいにくあいつらは厳しい家で育てられてますからね…遅刻は御法度なんだよゲイル。それはあんたもよく知ってるだろ？」

「…ソウデシタネ」

シャキンッ…！！

そして、俺たちもそれぞれ刃を構える。お互い、このとき表情には笑みすら浮かんでいるのであった。

「…そういえばゲイル。1つ疑問なんだが、そんなに情報をべらべらしゃべってよかったのか？」

俺は、構えた紅翼の刃をおろすことなく、ゲイルにそう問いかける。だが、ゲイルは落ち着いた雰囲気とその答えを返すのだった。

「…ドツチミチ、ナギニハバレテタミタイデスカラネ。イマサラカクシテモ、ムダダトイウコトデース」

そんなゲイルの瞳は俺の後ろから聞こえてくる声援の方へと向けられていた。

「いつけえええ日向！！最後の1本は任せたわよ！！」

「日向！！俺はお前を信じるからな！！絶対に…知恵理を助けようぜ…！！！！」

「…ああ。問題nothing」

おかげで　俺はまだまだ闘える！！

再び刃に灯る紅蓮の炎。それは、俺とみんなの思いがこもった炎。そして、絶対に知恵理を救い出すという、そんな願いがこめられた炎であつた。

「… I see . ヨクワカリマシタ。ソコマデイウノナラバ、ワタシモゼンリヨクテムカイウチマシヨウ！！」

「上等だゲイル！！だったらこつちも　全力であなたを倒します！！知恵理を…守るために！！！！」

「…！！… All right . アナタハヤットワタシノコトバノイミガ、ワカッタヨウデスネ。ヒナタ」

そのとき、ゲイルの顔が少し優しくなつたように感じた。だけど、俺にはもう…彼の言葉は届いていなかった。

なぜなら…この闘いを終わらせるためにな！！

「問題 nothing だぜ！！」

ゲイルside

「問題nothingだぜー!」

「…ッ!?!」

…再び目を開けたときの日向を見た私は呆然としてしまいました。

それは、目が紅いとかの物理的なものではありません。私が驚いたこと。それは、彼から漂う雰囲気、それに驚かされたのです。

日向が出すその雰囲気。それがあまりに【あの子】に似ていたことに

「…“姫ノ城…空”」

一言。その雰囲気を一言で表せばまさにそついうことでした。

今の彼の雰囲気はまさしくあの子【姫ノ城空】アノコノシノシメクにそっくりだったのです…。

「やはり、アノ“クチグセ”ノセイデスカネ…」

「ふっ」と鼻で笑いながら私は日向達には聞こえないようにそう咳く。それと共に、あときの記憶がよみがえりまゝ…。

あの日、日向に戦う理由を教えた3年前のあの日の記憶が

日向と久しぶりに会って、“日向の口から”初めてその言葉を聞いたあの日の記憶が

ゲイル side (3年前)

「ぐす…ぐす…」

涙でグチャグチャな日向の顔。ですが、その顔は決してひどいものではありませんでした。やはり、あなたは優しい人ですね 日向。

私は目の前で涙を流し続ける日向を見ながらそう思っていた。

でも、それと同時に私は日向の奇行に驚かされてもいました。まさか…まさか、彼の口からあんな言葉がでるなんて思いもありませんでした。

これが、1年前まで戦場を駆けていた【紅翼の天使】とは…です
ね。

戦場で躊躇なく敵を斬り倒していた少年が、今では喧嘩1つまともにできなくなっていたのです。私には【嬉しい】誤算でした。

だけれども

この子を再び戦場に送らないといけなくなるのですね…私達は。

それは決められた未来。だけど、私には我慢出来なませんでした。
たとえ…。たとえ

たとえ…【あなた自身】の願いでも…。

「ぐす…先生…？」

おっと…どうやら日向が泣き止んだみたいですね…。一回り小さな彼の体からは私を見上げるほかありません…。

相変わらず整った顔立ちの彼を私を見上げた表情。その素顔の前には涙すら美しく見えまゝす…。

日向…あなたの涙を見るのなんて…本当にいつぶりになるのでしょうか…。でも、このとき私は不謹慎ながら、私の前で弱さを見せてくれた日向にうれしく思っていました。

「ハイ。ドウカシマシタカ？」

「もう…大丈夫です。すみません。みっともないとこ見せてしまいました」

「…イエイエ。キニシナイデクダサイ。ソレヨリ、ナヤミハカイケツシマシタカ？」

「はい。本当にありがとうございました…ゲイル先生」

そう言った日向の表情に、涙はもうありませんでした。私は、彼の

心の強さを…改めて知ったのです。

「先生にそう言ってもらえたので喧嘩する理由を見つけました。だから」

「ただ、私は次の言葉を聞いた瞬間。ただただ…呆然としてしまうことになりました…。」

まさか…まさか【空の口癖】だった言葉が日向の口から出てくるとは、滴の一滴も思ってもいなかったのです。

そして、このとき私は確信したのです。彼の心の中に今でもあり続ける大きな存在を

「だから 問題 nothing ですよ!! 先生!!」

ゲイル side (3年後)

「…ヒナタ。ワタシハゼツタイニ、アナタヲワタシノウシロヘイカ

セマセン！！ゼンリヨクデソシシマ〜ス！！」

ただならぬ雰囲気を出す日向に、私は今までにないほどの緊張感を持たせて身構えま〜す。

しかし、日向はこちらに斬りかかってくる気配はありませんでした。それが尚、日向の行動の不気味さを引き立てていました。

日向。いったい、あなたはどっいつつもりなのですか…？

そんな疑問が頭をよぎりま〜す。でも、私は知ることになりま〜す。彼は 日向は【紅翼の天使】だということを

「…ゲイル。最初についておく。俺はあなたの後ろにいくつもりはサラサラね〜ってことをな」

『…え(What)！…？』

その瞬間、私を含めたこの場にいる日向を除いた4人が声が重なりました。

本当に…あなたは何のつもりなのですか…？

「…ヒナタ。アナタハ、チエリヲタスケルノヲ、アキラメルノデスカ？」

「いや、助けますよ…俺は。【ゲイル先生】が教えてくれたことはきちんと最後まで守ります。それに」

そう言う日向は、またしてもただならぬ雰囲気を出していました。

その姿に、私はまさしく圧倒的な存在感。それを感じます…。

それに、もしかしたら私はこのときすでに分かっていたのかもしれない。私の迎える未来が…敗北であるということ。

「それに　俺には、新しい力がありますから…」

そう言いながら、紅翼を振り上げる日向の顔には、不適な笑みが浮かんでいました…。日向は…何をやる気でしょう…？

背中に悪漢が走る感覚が止まりません…。何か嫌な予感が、滞りなく私に襲いかかってきます…。

ですが、もう　すべてが手遅れでした。私は熾してしまったので…。日向の中にある燃えたぎる

【日輪の炎】を

「【日輪流炎術・一式】」

「飛炎ひえん」！！！！！！」

日向side

燃えたぎる。日本刀の刃だけじゃない。俺の中にある全てが熱く……！！熱く……！！燃えたぎっていく。

これが、俺が手に入れた新しい力、その名は

【日輪流炎術にちりんりゅうえんじゆつ】

あのととき 屋上で気を失ったとき【過去の俺】が俺へと託した炎が、今、開火する。

ポオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオツ！！！！！

ゲイル。これが【炎弾】の日輪流炎術【一式・飛炎】だ！！

「シ、シマッタ！？」

俺の刃から放たれた炎の弾丸。その炎を前に、ゲイルは必死に炎弾を追おうとする…が、すでに手遅れであった…。

それじゃあ…ゲイル先生

「…チェックメイトです」

ドカアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
ンッ！！！！！！！！！！

問題 nothing. これで、すべてが終わりました

第30話 日輪流炎術（後書き）

作「それでは今回は前回の心理テストの続きをやりたいと思います
！！果たしてみんなの本当の顔とは？それではLet's go!
！」

（本当の顔）

日向 クールでシニカルな一匹狼

知恵理 心を許した人にしか甘えない甘えん坊

真備 大きく広い心で皆を温める存在

凧 針を立てて相手を拒絶する孤独な存在

輝喜 隠れた所で活躍する策略家

刹那 可愛く繊細でお転婆な少女

知「…ヒナ君？」

日「…ごめんな知恵理。やっぱり俺って心のどこかで1人で生きてる
って思ってたんだな？」

知「うんうん。ヒナ君は1人じゃないよ」

知恵理はギュッと日向を抱きしめる。

日「ありがとう…知恵理」

知「それに」

日「それに？」

知「あ！！うんうん！！何でもないよ！？」

日「??？」

知（それに…私が甘えられるのはヒナ君だけなんだから…ね）

真「おお。やっちゃってるよあいつら…」

凧「…」

真「…なあ姉貴？」

凧「な、何よ？」

真「…俺は姉貴の針を抜けるように頑張るからな」

凧「…馬鹿」

凧（あんたはあんたが考えている以上にみんなの支えになってんの

よ…)

刹「俺ってお転婆？」

輝「さあ、どうでしょうねニヤニヤ」

刹「…お前は策略家なのか？」

輝「いえいえ、違いますよニヤニヤ」

刹「とりあえずその完璧な造り笑顔止めるよ!？」

輝「ニヤニヤ」

刹「…わざとか？」

輝「ニヤニヤ」

刹「わざとなのか？」

輝「ニヤニヤ」

刹「う…う…う…うぎゃあああああ!…」

輝喜にハイキックを繰り出す刹那!!だが、しかし

刹「なっ!？」

輝「クスクス。やっぱりお転婆だね〜」

刹「う〜」

輝「それに〜」

刹「？」

輝「すごくかわいい」

刹「なああっ！？／＼／」

輝「（ー）（ニヤリ）」

作「さて、では次回予告。次回の時の秒針は

永く…辛い闘いが終わり、日向たちはゲイルと対面する。そのゲイルの口から語られたのは予想外の言葉だった…

次回【兄貴”姫ノ城空”】」

日「問題nothingだぜ！！」

注意・今回の心理テストは作者が勝つてに作った都合主義のもの
です。

学校でやっても恥かくだけなので注意してください。

輝「そうだったんですか？」

作「そうだったんです！！」

次回に続く！！

第31話 兄貴"姫ノ城空" (前書き)

・・・失った兄の記憶を知る男、ゲイル

再び、ゲイルが日向を導き出す。

ゲイル編最終話!!

問題 nothingだ!!

あ、ちなみにまだ次の部屋には行きません。

すみません・・・

第31話 兄貴"：姫ノ城空"；

日向side

「…終わりだ。ゲイル」

俺の言葉は無情にゲイルの耳元に届く。その証拠にゲイル先生は地面に崩れ倒れている。その姿は、俺の いや、俺達の勝利の証であつた。

「ナゼデス…。ナゼ、アナタハイママデ」

「簡単だよゲイル。隠し玉は最後までとっておく。だってその方がおもしろいじゃねーかよ」

「…ナルホド。タシカニソウデスネ」

「俺の力を浅はかに見たところ。それがあんたの敗因だよ…ゲイル」

バキッ！！！！！！！！

何か折れたような音が響く…正直、最後の1本がどうなったのか、わからなかったが、その音で俺は確認した。最後の1本の執刀を破壊したということ

「…ゲイル。もう一度だけ言う。チェックメイトだ」

バリントッ！！！！！！！

最後に、言い捨てるような言葉をゲイルに投げかけ、俺はゲイルに背を向ける。

そしてその刹那、ゲイルの魂の【治癒結界】は粉々に舞い散った。

まるで桜吹雪のような…綺麗なピンク色に

「…問題 nothing」

真備 side

「…崩れた」

ポツリと呟かれた姉貴の言葉。その言葉のとおり、俺達を拒んでいた結果は、呆気なく簡単に崩れ去っていた。

だが、姉貴が呆然としつつ呟いたり、俺が口を半開きにして絶句している理由は他にあった。それは

「…姉貴。分かってるよな？」

「ええ…もちろんよ」

どつやら姉貴も同じ気持ちのようだな…。

そうとわかった俺達はお互い頷き合つと、優雅にゲイル先生との決着をつけ、輝喜の様子を見に行こうとしている日向のほうにツカツカと近づく。

「ん？どうしたんだ2人とも？そんな清々しいまでの笑顔は…。俺の闘い。問題 nothing だったろ？」

どうやら、日向が近づいてくる俺達に気づいたみたいだな。少し気味悪げな顔で俺達を見る日向。だが、その表情には嬉しさがにじみ出ていた。

ああ、確かにすごかったよ…お前の戦い。だけどな…日向…お前ってやつは…。

「ふうん。確かにすごかったわね。あんたの闘い。特に最後の技、あんなにほればれたのは久しぶりだったわ…」

「そ、そうか？あ…ありがと…」

はあ…お前もわかってないな…姉貴が人を誉めるときがどんなときか…。

いつも、その被害を受けている俺だから言っが。お前、歯食いしばれよ？

「日向。お前の技はすごかった。確かにすごかったぞ…だけどな

「

「お、おう。真備……」

と、俺達は日向の前で立ち止まる。そして

「なんで」

「はえ？なんか言ったか尻？」

ははは……。日向、覚悟はいいか？何のことか分かってないのか、ほけほけっとした日向の顔。その顔を見ているだけで今の俺たちはイラッとすする。

本当に…本当に…本当に…！！お前ってやつはあああああああ
ああ…！！…！！

『「なんであんなのがあるんなら最初から使わなかったんだあああああああああああああああああああああああああああああああああああ
あああああああ！…！！…！！…！！…！！…！！…！！…！！…！！…！！」』

ズガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアンツ！！！！！！！！

「ぐぎゃああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああ
あああつ！！！！！！！！」

…あゝ！！すつきりした！！

俺と姉貴は3メートル先の輝喜のいる場所まで吹っ飛んだ日向を眺
めながら、パンパンと手をはたいた。

ざま〜みる！！！！！！

「ひ、ヒナタン大丈夫？」

「うづう…」

ぶん殴った顔から煙が出ている（実際には出てない）日向を心配そ
うに、かつ顔をひきつらさせつつ覗き見る輝喜…。

は！！輝喜。そんなやつ心配なんてするんじゃないよー！！

ツカツカツカツカ…

俺と姉貴はさらにツカツカ…と、日向に歩み寄る。そんな俺達をまるでギギギ…と、機械のようにぎこちない動作で顔を上げる日向。だが、現実は甘くはない。きっと日向には、俺達の冷たい視線が突き刺さっていただろう。俺達は…本気だった。

「…日向？」

「ふあ、ふあい！！！！！！」

鼻血でうまく喋れない日向。その様子は、昨日の朝のあの映像とデジャビユる。

…そういえば。昨日の調べ学習の時間に日向のやつ俺の助けてという視線を無視しやがったよな？その辺をきつちり、S I I K A E
S I I しないとなー！！

ふふふふ！！日向！！昨日とは立場は逆転だな！！さあ…こっからはずっと俺のターンだぜ！！！！

「日向！！なんであんな技できんのに最初から使わなかったのよ！？」

「ひゃひえはあふあひいひゃふあふあふあふあひよ（あれは隠し玉だったんだよ）！？」

「はあ！？あんた何言ってるのかぜんぜん！！！！分かんないのよ！？もつとハキハキ喋りなさいよ！！！！尻払うわよ！？」

ドゲシッ！？ドゲシッ！？ドゲシッ！？ドゲシッ！？ドゲシッ
！？ドゲシッ！？

…すまん。さっきのセリフはキャンセルするわ。だって…こっからはずっと姉貴のターンだから…。

俺は、倒れてる日向にヤクザキックを繰り出す姉貴の姿に、鬼をみた。ドSという名の鬼を

気づけば、俺の中には日向に対する恨みはなくなり、ただただ、同情の気持ちしかなくなった…。

「ふあひいひい。ふあふうへえへふへへ（真備。助けてくれ）」

正直、日向が何を言っているのかは分からない…。だが、その悲痛の叫びは俺の中へと響いた。俺の中にある良心とか、そんな何かに引っかったのだ…。だけど

「…そっぴや輝喜。脚、大丈夫か？」

「ふうひいふふほおふあほお！？（無視すんのかよ！？）」

俺は見ているだけで涙が出るような、日向の救済コール　　じゃなく、訳の分からない言葉を無視することに決定した！！

だって…あんな状態の姉貴の間になんか入りたくないし…。すまん。日向。安らかに眠れ…。

「ふふあひいふあふあ〜！！ふあひいひい！！！！（裏切ったなああああ真備！！！！）」

「…今日はいい天気だなあ」

「…マキビン。夜の…しかも建物の中で、そのセリフは明らかにおかしいんじゃないかなあ？」

「…気にすんなブルータス。お前もだろ？」

「ん〜。そこはノーコメントでお願いねマキビン」

「ほおふひい！…ほおふあへほはあ！…！（輝喜！…お前もかああああああ！…！）」

俺と同じく、日向のSOSコールを全面無視している輝喜に、反論の余地はなかった。

「さて、言い残すことはないかしら…日向？」

「ふあふ！…ほおほおひいひいひふあふ！…ふはふほほふあふ！…（ある！…大いにある！…腐るほどある！…！）」

「…大丈夫。問題 nothing」

「ほおへえはあほおへえほおへえひいふ〜…！…？？（それは俺のセリフじゃない…！…！）」

「で？ゲイル。どういうことか説明してくれるのか？」 2分で復活した。

あのおぞましい事件から数分。身体も心もすっかり回復した俺は、傷だらけの体を庇いながら、ゲイルの前へと立っていた。

仁王立ち姿で、ゲイルを見下ろす俺。そんな俺の言葉に、楽な姿勢で座っていたゲイルは深くため息を吐くと語り始めるのだった。

「…すみませんヒナタ。ソレハイエマセン」

…はあ。納得するわけないでしょゲイル先生…。

ため息を吐くことさえ忘れるほどのテンプレなゲイルの答えに、俺達は納得するはずもない。

そんな俺達の中で、ゲイルに最初に食ってかかったのは、やはり彼女だった。

「このごに及んで見苦しいですよ、ゲイル先生？」

「……」

来たよ…だんまり。

昨日の不良グループ 確か【アンチチェーン】だったけ？ の
こともあるからな。その行動は危険フラグですよ？

「そう、ゲイル先生…。そのつもりな」

「トリヒキシマセンカ？」

「ら…って、取引きですって…？」

昨日のあの惨劇が俺の頭を過ぎったとき、凧の言葉を遮り、ゲイル
は俺達にそう提案してきた。

…取引って…なんだ？

「ゲイル。取引って…今度は何を企んでるんだよ…？」

俺達の中で唯一、警戒を解くことなく未だに雷神をつけている真備が俺の疑問をそのまま聞いてくれる。

俺は真備の質問の答えをじっくりと待つのだった…。

「（日本語訳）いえいえ。私が持ちかけていることに裏などありません。きちんとした正当な取り引きです」

「…ふん。それじゃ、何と何を取り引きするのかしら？先生？」

絶対に騙されない。そう決意したような風の表情に濁りはない。

だが、確かにこんな取り引き事は彼女が一番適任だと思う。素直すぎる真備やよく分からない輝喜よりは…ツンデレな彼女の方がね…。

そうこうしているうちに風とゲイルとの取り引きはどんどん進んでいく。

「（日本語訳）あなた達は私に今回の時の番人われわれの目的について聞かない…」

「…あたし達の利益は？」

「（日本語訳）Well…それでは、日向と輝喜。それに真備の治療、並びに私の友人の話でどうでしょうか？」

…確かに俺や輝喜、それに真備はかなりの傷を負っている。特に真備なんかは、アマテラスからの攻撃から俺達を庇った負傷で歩くこともままならない。

治療をしてくれるというのは確かにありがたい話だった。が

ゲイルの友人の話？ いったい、それは俺達にとって何の利益があるんだ？

「あんたの友達になんて興味ないわよ」

俺の疑問とは余所に、凧はゲイルを軽く突き放す。

俺もゲイル先生の話には悪いがあまり興味を持てなかった。

その名前を聞くまでは

「（日本語訳）…その友人の名前が…【空】と言ってもですか？」

「…っ！…！！…？…？？」

その刹那、俺の瞳はこれでもかというほどに見開く。それと同時に、肩が小刻みにふるえ出す。

甦る記憶。抱きしめられた感覚。俺はもう何年と味わってない家族の記憶というものを…思い出した…。

「…誰よ、それ？真備…あんた聞いたことある？？」

「ないな…初めて聞いたぜ。輝喜は？？」

「俺もだねえ。そんな覚えやすい名前。俺が忘れるわけないでしょ」

…確かに、凧や真備、輝喜にとっては重要な名前じゃないかもしれない…。だが、俺と知恵理にとってその名前は

「ゲイル…？」

俺は蚊の鳴き声ほどの、今にも消え入りそうに震えながらの声でおそろおそろ確認する…。

そんな俺の様子に、真備達は驚いたような顔で見つめてくる。…関係ない。

今の俺にはゲイル いや、ゲイルの言葉しかなかった。ゲイルが呼んだ…あの名前しか。なぜなら

「…ゲイル。それは…その名前は…【姫ノ城空】…のこと、なのか？」

驚きのあまり塞がらない口から出てきた言葉。その言葉に、ゲイルは無言のままだった。

無言の…“肯定”だった。

「姫ノ城…姫ノ城って、まさか知恵理の!？」

「でも…チエリンに家族は…」

「……………」

そして、俺の発した言葉は、少なからず真備達にも衝撃を与える。

姫ノ城の名前を聞いてすべてを悟る風。同じくすべてを悟ったであろう輝喜の顔には複雑な表情が浮かんでいた。まあ、俺と知恵理の家庭事情を知ってるんだから当然だな…。

最後に…終始一貫で無言を貫く真備の姿が目に入る。だが、その表情は他の2人同様厳しいものであった。真備も分かっているみたいだ。俺の言葉の意味を。俺の言葉の重大さを

「ゲイル…。どういう…ことなんだ…？」

「（日本語訳）…日向。これはあなたにも有意義な話です。あなたも知りたいはずですよね？かつて【兄貴】と呼び慕った少年の話を…ですよ？」

「…っ!？」

その言葉は、俺にとって悪魔のささやきと同等のものであった。そう…ゲイルが話そうとしている少年の名前は 【姫ノ城空】…知恵理の実の兄にして、俺が【兄貴】と言って慕った憧れの存在…。

そして【問題 nothing】という言葉の本来の使い手である人物でもある。

俺の知恵理以外の唯一の家族“だった”存在。その情報は俺にとつて、喉から手がでるほど欲しい情報だった…。

「…ゲイル。あんたは兄貴のことを知って…るんですか？」

「…ソレヲオシエルノハトリヒキニオウジテカラデース」

その言葉は俺の中でグルグルといろんなものを揺さぶる。…どうしよう。個人的には 兄貴の話を知りたい。

だけど、流されたら俺は時の番人がなんで俺達を狙ったかという情報を見失ってしまう…。

必死に頭を抱える俺。だが、その努力はすべて無駄となるのだった

『『いいわ(ぜ)(よ)(取り引きに応じる)』』

…俺の親友の3人が同時に、しかも3人共、同時に かつ、独断で取り引きに応じたのだ。

驚きで固まる俺。でも、3人の目に迷いはなかった。

「…イイノデスカ？」

「ええ、もちろんに決まってるんじゃ」

「ちょっ！！ちょっと待て！！お前ら！！自分達が何を言ってるのか分かってるのか！？」

俺はこの行動を止めるために必死で口走る。 だけど

「ちっ…日向。 あんたは黙ってなさい！！」

「舌打ちした！！今、このロリっ子舌打ちしやがった！！」

「あ、あ??？あんたバカなの？ 尻払われたいの!？」

「日向、すまん!!」

「む、むぐー!？」

だけど 俺の口は、真備と尻にすっかり塞がれてしまっただった。 思わず漏らした本音については忘れよう…。

忘れないと…風払われるからな…。

「あははは ヒナタン、相変わらずだなあ。ゲイル先生 いいんです…！」

そして、両足を怪我して動けない輝喜がゲイルにニッコリと笑顔を向けながら肯定する。

…ど、どうなってるんだよ？俺の頭は混乱する。…いや、本当は分かっていた。それは、こいつらのことを考えると当然な話だ。

俺だって…きっと同じ立場なら同じことをしていたと思う…。

輝喜の肯定の言葉が終わると、俺は真備と風の手から解放される。それに、俺は抵抗することはなかった…。

「……………」

「あんだ、自分が今いったいどんな顔してるかわかってんの？」

続けざまに出された風その言葉に、俺ははっとする。その様子に気

づいた凧は、溜め息を吐き出し、いつも持ち歩いている小さな折り畳みの鏡を開き、俺を写し出させるのだった。

…っ！？あゝあ…なんて顔してんだよ…俺…。

女の子らしい鏡に写された俺の顔。その顔を見た瞬間、俺は自分自身に呆れてしまった。…今にも…泣きだしそうな顔をしていたからだ。

「はん！！やっと気がついたのかよ日向！！たく…そんな顔されても俺達は困るだけだってーの！！」

「もう…マキビンもナギリも素直じゃないんだから…。でも、そうだよヒナタン。その顔されて黙ってられるほど俺達は冷酷じゃない。知ってるでしょ ヒナタン」

「…凧。…真備。…輝喜」

「ふ、ふん！！ベ…べつにあんたなんかのために言ってるんじゃないんだからね！！…でもね、日向。これだけは覚えときなさい」

そして俺は…ギュッと、小さな体に抱き締められる。温かい…小さ

な体に…。

「…あたし達は、ずっとあんたの友達よ」

その言葉は、俺の心の中を…綺麗に染め上げるのだった。ああ…そうだったのか…。

「へ！…当然だろ！！」

「そつだねえ〜ヒナタンが望むならいつまでも〜」

そつだ。俺は何を気にしていたんだろうか…。答えなんて、簡単じゃないか…。そう。俺にとって…お前らは…大事な親友。だったら、ゲイルの取り引きの答えなんて考えるまでもなかったんだ。

問題 nothing。ありがとよ…俺の大事な…【親友達】

「…ケツシンハツキマシタカ、ヒナタ？」

「ああ…問題 nothingだゲイル。俺の答えは」

悩む必要なんてない。悩むより前に…信じる。

「俺の答えは Yes。聞かせてくれゲイル。姫ノ城空 兄責
の話を」

「すっげえ…こんなに速くキズが治るなんて…」

「…そうだな真備。本当に…不思議なもんだな」

あれから数分。俺と輝喜…それに、真備の3人はゲイル先生が再び張った【治療結界】での治療を受けていた。

これが、なんとも不思議な感覚なんだ。

一瞬…とまではいかないが、急速的スピードで傷が治る感覚…。とても、新しい感覚だった。

ちなみに、真備のキズはあんな大怪我だったにも関わらず、ゲイルの治療が始まる前にはもうすでに大部分が塞がっていた。

そのため、治療時間もさして俺達と変わりはないでいた。…真備。お前、いったいどんな呪縛を受けてんだよ。

そんな俺の心の声が真備に届くことはなかった。

「んじゃあ先生？治療中悪いと思うんだけど、聴かせてくれるかしら？日向が…兄貴って、言ってる奴について…」

ふと、そのとき、俺達の中で唯一結界の外側にいる風が、同じく結界の外にいるゲイルに話を振る。

これは余談だが、ゲイルが外にいる理由は警戒のためである。ゲイル自身が言うには結界の中になかったら、実はゲイルの戦闘力は格段に落ちるそうだ。

だから、ゲイル先生には外から俺達の治療をしてもらってるというわけである。

「ワカリマシタ。“ソラ”ニツイテ…デシタネ」

ゲイルの言葉に俺達は無言で頷く。

どうやら、凧や真備も兄貴が俺の慕う人物で、知恵理の兄だということが凧達の興味を惹いたようであった。

そして、ゲイルの話は始まった。

「フウム…ソウデスネ…マズハナニカラハナシタラヨイデスカネエ…ヒナタ、アナタハナニヨシリタイノデスカ？」

「兄貴の何を…か」

正直、それはまったく考えていなかった。いや、たった今聞いたばかりではあるから当然と言えば当然だが…。

…でも、思い付かないわけではなかった。

「…ゲイル。じゃあ始めにあなたと兄貴との関係…を、教えてく
さい」

「Oh・I see…ソウデスネ、マズハソコカラセツメイシナケ
レバイケマセンデシタネ…ワカリマシタ」

そこでゲイルは一息ついた。どうやら…長い話になるみたいだ。

「ソレデハ、ミナサン。ワタシノツマラナイハナシニ、ドウゾサイ
ゴマデオツキアイクダサイ」

そして、ゲイルは語り出した。俺の知らない…兄貴についての話を

「（日本語訳）…姫ノ城空。この名前を聞いて、あなた方はおそら
くこう思ったはずです。この人は、知恵理の近親者だと」

「…そうね。私はそう思ったわ。で？実際の所はどうなのよ？」

「（日本語訳）Yes・凧、あなたの思ったことは実にすばらしい。
わんばふあ〜です。そう、あなたの思ったとおり…姫ノ城空。彼
は 知恵理の実の兄です」

「実の…兄…」

オウム返しのように、ゲイルの言葉を真備が復唱する。その顔は、驚きを隠せないという表情であった。

「（日本語訳）…そして、彼はそれと同時に私の 私達【時の番人】の仲間でもありました。…いや、この場合は戦友とも呼ぶことにしましょうか」

「…戦友？」

いつものテンションは形を潜め、自重気味なゲイルの言葉に真備は疑問付を浮かべる。それは俺達も同様で、全員揃って首をひねる。その様子が可笑しかったからかゲイルはくすりと少しだけ笑みを漏らしていた。

「（日本語訳）そう…私と彼の関係を言い表すと、そう言うのが妥当ですね。…私が時の番人の医療局ワイシユクスに入ったのが約6年前。そして、それと同期で時の番人の持つ能力者の部隊の一員として入ってきた男…それが空でした」

…6年前。それは、俺達にとって特別な年だった。

なぜなら、その年は　俺と智恵理、そして兄貴が親のいない子供が住む孤児院の施設をでた年だったからだ。

そして…施設を出た俺達が、この街。桜時市に来た年でもあるのだ。

「ちょ、ちよつと待ちなさい！！ゲイル先生！！」

「May not！！ナギ。ハナシテルトチュウデース。ハナシニワリコマナイデクダサイ」

「…いいえ、質問よ。ゲイル先生。…気になったんだけど、6年前っていうとその空っていったい何歳なのよ？知恵理のお兄さんなんでしょ？日向：あんた達って知恵理のお兄さんとそんなに年が離れてんの？」

ゲイルへの質問。だが、凧は途中で質問の矛先を俺へと変えてくる。当然の疑問だと思った。なぜなら兄貴は知恵理の実の兄。年の差なんて、たかが知れているのだからな。

そして、俺はその質問の応えとしてもう一度首を振った…横に。

「…“生きて”れば、兄貴は今…18歳…かな」

思わず呟いてしまった俺の言葉に、凧はハッとしたように俯いた。

「…じゅん」

「問題 nothing。気にすんな…凧」

俺は凧の横髪（頭撫でたら殺されるからな）を優しくなでながら、そう訂正する。そう…お前が気にすることなんてないんだよ…凧。

「…ふう。お前が言いたいのは、時の番人に入ったとき兄貴が何歳だったかってことだよな？」

優しくさすとす俺に凧は無言で頷き返した。普段から無駄に言葉を紡ぐ彼女にしては珍しいことだった。

少し潤んだ涙目の顔。そこには、確かに彼女のツンデレの奥に隠された優しい心があった。

「（日本語訳）…12歳、空が時の番人に入った年齢は12歳でした。あの時のことは今でも覚えています。あの映像は…衝撃的でしたからね…」

意味深なゲイルの言葉。それは、あたかもそこにゲイルが言う“あの映像”がリアルタイムで流れているかのような物言いだった。

「12歳…か…。だがよ先生。何故にそんな乳臭さが抜けたか抜けてないかってぐらいのガキが時の番人に入ったんだ？そんなこと…普通はしねーだろ？」

「……………」

そこに、すかさず口を挟んだのは真備だった。その言い分にゲイルの瞳が大きく揺らぐ。それは悲しみというよりも寧ろ、知られたくない真実に触れられたかのような表情であった。

…でも、確かにそうだ。なんで、兄貴はそんな小さいときに時の番人に入ったんだ？いや…それ以前になんで入れたんだ？

深まる謎はさらに深い謎を呼ぶ。そして、その真実を知る人物は…

ついに、その鍵をかけたように重たい口を開鍵し開く。

すべてを…俺達が知らない。知るには早熟すぎる真実を語るために

「…【チルドレン】」

「子共…達？」
チルドレン

それは俺にとって、まさしく 決して開けてはいけない禁断の箱
バンドラのほこ
であつた…。

「（日本語訳）…昔。…【チルドレン】」

「子共…達？」
チルドレン

それは俺にとって、まさしく 決して開けてはいけない禁断の箱
バンドラのほこ
であつた…。

「（日本語訳）…昔。第3次世界大戦より以前、時の番人には能力者を子供の頃から鍛えて最強の能力者集団を創るという計画がありました…それが【チルドレン計画】空は、その計画に参加していた

7人の被験者の1人だったのです…」

【チルドレン計画】：正直、話が飛びすぎて信じられない話だった。だが、それに対して俺の中ではその単語になぜか納得できた自分もいる。自分の気持ちの中で生まれた矛盾。

でも、正直なところでは信じたくない気持ちが一番だった。そんなものに兄貴が関わってたなんてことを…。

「チルドレン…計画…」

「（日本語訳）：Yes。空はその中でも最も優秀な方で、NO。1の能力者として被験名【聖空の騎士】という名前も授かっていた。ですが、人懐っこくて、誰にも好かれる実にわんだふおーな性格の持ち主でもありました。…利用する大人として、私には彼は実に眩しすぎる存在でしたよ」

遠い目をして語るゲイル。その背中を見た俺達は最早、何も言えなくなっていた。

そのとき、俺には確かに見えていた。あのときの
3年前。桜時
クリニックで触れたゲイルの温かい手のひらが…

そして、忘れもしないあの日の言葉。俺がゲイルを恩人と呼ぶ理由であるあのメッセージが…。

「（日本語訳）…4年前。彼は1つの願いを私に託しました。他ならぬあなた、日向のことです」

「…俺…ですか？」

「（日本語訳）…ええ、そうです日向。あなたと…そして知恵理とを頼む…と、彼から言葉を託されました。そんなこと…当たり前ですのに…」

「ゲイル…」

その言葉は俺のすべてを包み込む。包容されたとても言っのたろうか？抱き締められたよう。そんな感覚だ。

このとき、俺は改めてゲイルの “ゲイル先生” のすごさを感じていた。やっぱり…この人は。ゲイル先生は俺の

【大恩人】なんだと。

「…ホント、適わないなあ…あんたにも…兄貴にも…な」

「…ソレハ、オタガイサマトイウモノデスヨ…ヒナタ」

「え…?」

小さすぎて聞こえなかったその言葉。だが、その言葉の意味を知る
のは、また別の機会

「サテ、ワタシノハナシハオワリデース」

「っ!？」

次の瞬間、俺達を囲む治癒結界の壁が一気に崩壊する。そのときは
突然に訪れたのだ。

ゲイルの言葉に驚きつつ、俺は自分と輝喜、それに真備の体を順に
見て回った。

「治ってる…」

そこには怪我らしき傷痕はなく、元通りの俺達の肌があるのみであ

った。最初からなかったかのように……白い肌のみが。

キンッ！！キンッ！！

「っ！？しまった！！」

さらに、俺達を囲む結界が崩れたのと同時に鈍い金属音が響く。それは一瞬の油断だった。

俺達が目を離れたその瞬間にゲイルは執刀を使い、自らを囲うように治癒結界を発動させていた。

「ゲイル先生！！！！」

「サア……ツギノヘヤヘイツテクダサイ。ワタシノヤクワリハ、コレデオワリデス……」

叫ぶ風を無視し、そう言うゲイルの指さす先には、屋敷のさらに奥に進む扉。だが、ゲイルのその言葉に俺達は納得するわけにはいかなかった。

「おい！！ちよっおい！！待てよゲイル先生！！話ってそれだけなの
のかよ！？そりゃあんまりだろ！？なあ！？」

「…スミマセン。ワタシガハナセルコトハ、ココマデナノデース。
ダカラ、アキラメテツギノヘヤニイツテクダサ〜イ」

「ぐっ！！」

真備のまくし立てるような怒声にも臆することないゲイル。やはり、
ゲイルは俺達の言葉にはもう聞く耳持たないみたいだ。それはもう
…変えられない事実だった。

「…問題 nothing。わかったよ…ゲイル」

「ま、待てよ日向！？本気が！？お前が一番このことは知りたいは
ずだろ！？諦めんのかよ！？なあ日向！！」

「ただし！！！！！！」

標的を俺へと変えた真備の怒声を、俺はさらなる巨声で抑えつける。

そして、静かになつたら今度はゆっくりとした口調で…【確認】した。

…そう…問いかけではなく、決まりきった事実を確認したのであつた…。

「…ゲイル。次に会つたときにはもっと詳しく聞かせてくもらうからな」

俺の言葉の意味。しっかりと解釈してくれよ、ゲイル。

それからいつとき、沈黙の時間が過ぎる。だがしかし、押し黙つたゲイルだったが、もう逃げられないと悟つたのか、それから時間を置いた後…じつくりと…頷いたのだつた。

「All right…truly…You are a complete absolute fool…（分かりましたホントに…あなたは全くバカですね…）」

「All right…truly…You are a complete absolute fool…（分かりましたホントに…あなたは全くバカですね…）」

「…ああ。問題nothing。今の言葉…誉め言葉として受け取

つておきますよ 【ゲイル先生】「

そして、それを見た俺達は次の部屋に向かう。

俺が確認したこと…それは無言で行われた俺達の会話の中にしつかりと含まれていた…。

『また今度、会ったときに聞かせてもらいますよ？ゲイル先生…』

『…エエ、ワカリマシタ。デハ“マタ”アイマシヨウ…ヒナタ』

それは、無言で語られた俺達の言葉であった。

第31話 兄貴"姫ノ城空";(後書き)

作「今回は時の番人の秘密を少し明かしちゃいます」

水「……特別だぞ」

作「水城の許可が出たので話します。さて、作品内で出てきたチルドレン計画】その被験者達の設定を教えます!!

では、どうぞ!!!!!!」

↳被験者一覧↳

No.7 雲雀春姫

(ひばりはるひ)

被験名【絶倫の歌姫】

少し前の話で水城が口にしていた人物です。

被験者の中では一番格下ですが、唯一の女性被験者です。

第三章から登場予定

No.5 神無月透馬

(かななづきとつま)

被験名【沈黙の暗殺者】

詳しく語れない人物の一人ですが三章の重要人物です。 第三章から登場予定

No.2 御薙仁

(みなぎじん)

被験名【明星の闇】

透馬と同様詳しくは語れないが物語の重要人物である。
第三章から登場予定

No.6 響音弥

(ひびきおとや)

被験名【破壊の旋律】

プロローグや少し前に出てきた人物。物語の重要人物になります。
第三章から登場予定

No.4 時雨水城

(しぐれみずき)

被験名【雨の死神】

現在の時の番人に唯一所属する被験者。
時の番人のリーダー格として日向達の前に立ちふさがる。

No.1 姫ノ城空

(ひめのじょうそら)

被験名【聖空の騎士】

知恵理の実の兄にして日向が兄貴と呼び慕った人物。
物語の最重要人物の一人だがすでに故人です。
今後出てくるかもしれませぬ。

No.3 不知火日向

(しらぬいひなた)

被験名【紅翼の天使】

言わずと知れた主人公。

被験者の中で最年少、七歳で被験者になった一番の規格外。
現在、被験者だったころの記憶が無くなっているがその戦闘力は
現在も健在。
今後の活躍に注目してください。

作「以上、【チルドレン計画】の被験者達でした」

水「……俺達の秘密が少しは分かったらどう？」

作「でも、時の番人の一番の目的がまだ分かってませんよ？」

水「……そこはまだ明かせない。……それより作者、早く次回予告
をしる」

作「は、はい……。はあ……やっぱ水城ってこえ……ま、まあそれはさ

ておき、次回の時の秒針は

新たな部屋に進む日向達。だが、その先にはさらなる激闘と悲劇が待っていた。

次回【雪光のWバトル】

日「問題nothingだぜ!!」

作「今回は落ちも何もなく終わります!!それではまた次回会いましょう!!」

次回に続く!!

第32話 雪光のWバトル（前書き）

あの二人がついに登場！

いったい、二人の部屋とは何なのか？

・・・そして、あの人物の正体とは？

二つの部屋編開始！

問題 nothingだぜ！！

第32話 雪光のWバトル

日向side

「…次の部屋か」

ゲイル いや、ゲイル先生と別れた俺達は、いよいよゲイル先生と闘ったこの回復の間が一番奥にある黒い扉。その前に来ていた。

今までとは違い、厚く重たそうな、まるで金庫のような金属製の扉。きつとこの扉の向こうにはさらなる闘いが待っているはずである。

そして、型にはまってるというか、なんというか…。

「…また、プレートがあるわ」

「ああ…みたいだな」

唐突に呟かれた風の一言に俺は溜め息を吐き出した。そう、扉の前には最早お馴染みのプレートがある。

その位置はまたしても高すぎて、一目ではなにが書いてあるかは分からない。

だが、大体のことは予想できていた。

「あははは 次は何の部屋なんだろうね」

すっかり回復して、立って歩くことができるようになった輝喜は、また何を考えているのか分からないニコニコとした笑顔で俺に向いている。

今までの経験から、このプレートからもしかしたら次の部屋で待ち構える相手がわかるかもしれない。このとき俺はそう思っていた。

「……俺なんて……俺なんて……」

ちなみにあそこで暗くなってんのは真備だ。

ゲイル先生と別れた後に風が言った「役立たず!!!」発言が効いてるのか暗くなってるのである。

だけど、実際今までの2つの部屋では何もやってないからそれは仕

方がないことだけどな

「くおらー！！馬鹿弟！！あんたいつまで落ち込んでんのよ！！！！
！風払うわよ！？」

ゲシッ！！ゲシッ！！

あちやあ…真備のやつ風に頭ど突かれてザメザメと泣き出したよ。でもまあ…さつき俺を見放したからいい気味だな。ざまあ！！
そんな真備に、敬意を評してこの言葉を贈らせてもらおう。

「ぞまあ…！」

「ヒナタン…容赦ない」

気にするな輝喜。世の中の常識（？）だよ。…それより、次の部屋はいつたいどんな部屋なんだ？

未だに続く風と真備のコントのような兄弟喧嘩

むしろDV？を

横に見つつ、俺は次の部屋のプレートを読むために目を凝らす。
折り重なる文字。形を組み立て、一つ一つ繋いでいく。すると、それは一つの言葉にへと導き出された。

「変型の間」？」

そう俺が呟くと今まで真備を折檻していた凧が反応する。

ていうかあそこのモザイクの塊は真備か？とてもじゃないけど人間とは思えない状態だな……。

別にここまでする必要はないのに 哀れだ。

俺はある意味勇者な状態の真備にピシッと敬礼をすると凧と輝喜の会話に耳を傾けながら目の前の大きな扉に目をやるのだった。

「変型ね…いったいどういうことかしら？」

「ナギリン。それはここで考えても仕方ないでしょ？」

「それもそうね」

凧と輝喜。2人の会話を聞きながら扉を見る俺はさっきよりも堅そうなの扉に触れる。

うん。問題 nothing くれならいけそうだな。

俺はこの扉に何も仕掛けがないことを確認すると輝喜と話し込んでいる凧に視線を向けた。

「凧。後始末はお前がやれよ?」

そう言いつつ俺は後ろにあるモザイクの塊と化した真備を指差す。

「えー!!なんであたしが!?!いやよ!!手が汚れるじゃない!!」

「…仮にも自分の弟だろ」

俺の言葉に顔をひきつらせる凧。そんなあからさまな嫌悪感を示されても俺が困るんだが…。

ただど一応言っておくと2人の兄弟仲は悪くない。むしろ仲はいい方だと思つ。凧はただ単にあのモザイクがかった状態が嫌なだけなんだ。

「あー!!もう!!わかつたわよ!!」

結局はあんな形でも弟だからか、最後にはそう叫ぶように言い放つと、きびすを返して真備のほうへと歩き出した。

嫌そうな顔をしつつも、ずんずんと脚音を起てているように歩いていく凧を見送つた俺は改めて扉に手をかける。

ノブに手をかけ、一気に押し放つ　だがしかし

「っ!?!?な…なんだ…これ!?!」

だがしかし、扉に手をかけた俺は驚きで目を見開いた。なぜなら、目の前の手をかけたこの扉がとてつもなく重かつたからである。

「どつかしたのか日向?」

「のうわっ！！！！？？？？」

ある意味一番有り得ない声が俺へと降り注いできた。あまりに有り得ない。あまりに馬鹿馬鹿しい。

だが、結局俺は、その有り得ない声の正体を確かめるため、まるで飛び跳ねるかのように一気に振り返った。

「…驚きすぎだろ」

「当たり前だ」

振り返った先。そこには、さっきまでのモザイクがかった顔の面影は一切見当たらないバカ。真備がいつもの姿でそこにいた。

凧。お前いったい何をしたんだ…。

そう思うのは必然的。そして、俺はあんな状態から奇跡の復活を遂げた真備がある意味、超人だと思うのだった…。

「…ホント、お前って普通じゃないんだな」

「は？何行ってたんだお前？」

「…いや。問題 nothing だよ真備。気にすんな」

「んあ？そうか？んじゃ！！さっさと開けようぜ！！」

俺が変わっていく目の前の超人に溜め息をつきつつ見ていると、その張本人である真備は無邪気な笑顔でそう言くと扉に手をかける。

だけど助かった。俺の力ではどうにもならなかったけど…真備なら開けられるはずだ。

俺が脚が速かったり輝喜が握力と胴体視力が突飛して高いように真備は力が半端なく強い。真備ならたぶん開けられるだろう。

俺はそう思うと安心の息を漏らすのだった。

「ぐぬぬぬぬ…！！な、なんだこれ！？重すぎだろ！！」

だが、俺の期待は崩れ去る。なんと、あの真備でも目の前の鋼鉄の扉を開けることはできなかったのだ。

はつきり言って信じられなかった。まさか俺達の中で一番力がある真備が開けられないなんて…。

「ぐぬぬぬ…おい!!日向!!輝言!!見てないで手貸せ!!」

「あ…ああ。問題nothing」

「わかったよ…マキビン」

真備の叫びにも似た言葉に俺と輝言は驚きつつもゆっくりと頷き真備の隣に立つ。

そして俺達三人は扉に手をかけた。

「行くぞ!!せゝの!!」

ギギギギ…

力いっぱい扉を押すとそんな重たい音をたてながら鋼鉄の扉がやっ
と動く。

だが俺達3人が力一杯押しても何とか人1人通れるくらいにしか扉は開かなかった。

「はあ…はあ…風。先に入れよ」

「分かったわ」

重い扉を開けるために力を使ったから少し息を荒くしながらの俺の言葉に珍しく素直に扉に一番で入っていく風。

「次は俺が行くぜ？」

「問題 nothing…」

次に疲れて膝に手をついている俺に確認を取って扉に入るのは真備だ。

さすがに真備は体力があるらしく、さっそうと扉の中へと入って行った。

さて。残るは

「輝喜。先に入っ…!？」

振り返った俺…そのとき俺は思わず輝喜の顔を見たとき言葉を詰まらせてしまう。その顔はまるでさっきまでの俺。あの兄貴とのかを思い出そうとしていた俺自身だった。

あの表情を読みとるのは簡単だった…。いや、簡単に分かった。あれは…今にも泣きそうな顔だと。

「ん？あははは。どうかしたの？ヒナタン。まさか…俺に見とれてたのかな？」

「あ…うん。い…いや。問題nothing…悪い輝喜。先に行くな…」

「はららら…渾身のポケをスルーするなんて鬼畜だなあヒナタン。でも、分かった。また後でね…ヒナタン」

そう言った輝喜の顔はヒドく悲しげだった…。

???side

俺は扉の中へと遠ざかっていく日向の足音がいつもより大きく聞こえたような気がしました。鋼鉄の扉の向こうに消えていく日向。

向こうの部屋から漏れる光がまるで【神聖の間】への入り口のようにですね。

さて。俺も行きますか。

そう決心した俺はふと昨夜のことを思い出して苦笑いをしてしまいました。

「確かに私情に走ったのは俺でしたね」

そう言って自嘲気味に笑った俺は祭壇への扉を潜るのでした…。

日向side

「…ここが変型の間？」

日向side

「…ここが変型の間？」

俺達が入ったのは大ホールのような場所だった。

ただし家具などのその他一切の道具はなく壁や床天井まで全て白い
タイルに覆われているが…な。

「何にもない部屋ね…」

「ああ…そうだな」

風の吹きに律儀に応える真備。だが、確かに2人の言葉の通り見渡
してもただ白い空間が広がるだけで本当に何も無い部屋だった。

「いったい…どうなってんだ？」

「お応えしましょう。みなさん」

そのとき今まで気配すらなかった俺達の真後ろから突如として声が響いてくる。その無機質な変声機を使った声は今日と昨日で何度も聞いた。最早聞き間違えのない声だった。

「…！？【レリエル】」

「…ようこそ。変型の間へ…プレゼンターは俺…レリエルが勤めさせていただきます」

レリエルはまるで高級なレストランのウェイターのように丁寧にそう言いながら頭を下げる。

その動作。そしてその行動とレリエル自身の言葉に俺達はこの部屋の主を認識するのだった。

「ここはあなたの部屋ということね？」

この状況から受け取った情報をもとに凧がレリエルに確認を取る。

俺もレリエルはそれを肯定するものだと思った。だがしかし

シュルシュルツ！！

今度は俺達の左から布が擦れる音がする。だけど俺達は振り返る必要もなかった。なぜならその見事な水色の長髪がなびくのを見たからである。

「俺の存在も忘れないでくれよ」

「刹那!？」

凧の目が驚きに見開かれる。だがそれは俺や真備それに輝喜も同じだと思う。

一部屋に2人の能力者がいたのだから…。

「いったいどうなってるんだ!？」

真備が叫ぶがレリエルと刹那は冷静な目で俺達をみすえた。

「俺達と戦ってもらおう前に1つやらなければいけないことがあります」

そう切り出したレリエルはポケットからリモコンを取り出す。…ん？

971

あれ？この展開は前にもあったよな？確かデモンのときもこんな感じだったような…。だが俺の思考がそこまで行ったときにはレリエルは俺のすぐ目の前でリモコンの青いボタンに指をかけていた。表情は見えないがその不適な笑顔を浮かべながら…。

「“2人”には退場して貰いますよ…。」

ポチッ!!

レリエルがそう言っただけでリモコンのボタンを押した瞬間。俺はデモンとの戦闘がフラッシュシユバツクする。

ゴゴゴゴゴゴ…!!

そしてその直後やはりというか予想通りというか部屋が揺れ俺達が立つ床が動き出した。

ただし今回は床だけではない。部屋全体が動き出したのだ…。

「な…なんだ!？」

俺は動く床にバランスをとられないように脚を固める。だがそのとき俺の目の前に俺よりも小柄だが可憐なその体とその綺麗な水色の髪を振るわせながら突如として現れた。

「お前はあつちだ!!」

「なっ!!刹那!？」

ドゲシッ！！

その可憐な少女　刹那は俺を部屋の端っこの壁に蹴り倒すと満足したように踵を返して歩き出す。

そんな刹那を見ながら俺は蹴られて痛みが走る体に鞭打って立ち上がる。

「刹那！？なにしやがる！！……ってうわっ！？」

ガタンッ！！

だがさらに直後俺が刹那に蹴り倒された床が上に動き出し俺が立つてられないほどのスピードで上昇した。

な…なんなんだよ！？

「うわあああああああああああああああああああああ
あっ！！！！！！！」

床はそんな訳の分からない状態の俺に関係なく上昇し続ける。立ち上がるうとして再び倒れたせいかな俺は最早立ち上がる気にはなれなかった。そして

ガタッ…

急激に減速した床は俺を天井とサンドイッチする前に止まるのだった。

おそらく最初からこんな作りだったのだろう。その位地はとても絶妙な位地だった。周りが見えて、なおかつ飛び降りられない絶妙な位地だった…。

「止まった…」

俺は安心しきってそう案著の声を漏らす。しかしそのときさらに俺

を混乱させる事態が起こった。

「あ…ヒナ君!！」

「え!？」

その声を俺が聞き間違えるはずがない。その綺麗なソプラノ声に俺は声のしたほうを向く。

するとそこにはやはり彼女がいた…。

「ち…知恵理!？」

「うん。そうだよ」

今俺がいるのは地面から5〜6メートルほど上にある天井間近の盛り上がった床の上。

対して知恵理は俺と同じ高さにある天井からつり下がった鳥かごのようなものの中にいた。

なんで？さっきまで何もなかったのに？

俺はさらに周りを見渡した。すると首を横にしてみればすぐに俺の親友の顔が見えた。

「輝喜！！」

「…ヒナタン」

輝喜は俺とは反対側で盛り上がった床の上　つまり部屋の反対側にて俺とまったく同じ状態でした。

そしてさらにそのとき俺の耳にすぐ横の籠から知恵理の声がかたま
する。

「ヒナ君！！下を見て！！ナギちゃんとマキ君…それにレリエルさんとセツちゃんが…」

この際知恵理のセツちゃん発言は無視しようと思う。どうせ刹那のことだと思っからだ。

それよりも俺は知恵理がなぜそこまで慌てているのかが気になった。だから知恵理が言った通り俺は下を覗き見る。だがそこにあったの

は俺の想像を遥かに超える映像だった。

「な…なんだこれ？」下を見た俺はこの光景の異常さに声を失った。
なぜならそこにあつた光景はまるで異世界のようだったからである
…。

風side

「ふう…寒いわね」

あたしは周りの状況を視界だけではなくこの寒さで再確認する。肌を突き刺すようなこの肌寒さ…そして見渡せば辺り一面は銀世界だった。

そう。雪だらけなのである…。

さらに左側にはさっきまでなかった5メートルほどの大きな壁。

日向や輝喜はなぜか知らないけど上のほうにいるしあそこに見える鳥かごのようなもの…さっきあの中から声が聞こえたということはあそこにはおそらく知恵理がいるみたいね。

そんなもって、馬鹿弟の姿が見えないということは…。そして私はそこまで考えると左側の壁を眺めそつと呟いた。

「この向こうに真備はいるってわけね…」

「…どうだ風？俺の部屋…【静寂の間】は？」

あたしは唐突に発せられたその声に目の前にいる水色の髪の美少女を見る。

そこにいた彼女　刹那は昨日より少しだけ優しく楽しそうな笑顔を浮かべていた。

「…で？あたしの相手はあんたということね…【静寂の間】の主。刹那？」

「そついつことになるな風」

あたしは少しだけ皮肉っぽくそう言つと逆に刹那もあたしの真似なのかその柔らかかそうな唇をいやらしそうに振るわせる。

そして　あたしは右手を横に突き出し刹那は両手を前に突き出す。
戦闘準備完了だ。

「発動！！風神！！」

「来い！！雪化粧！！」

武器であるあたしの魂。鉄扇の【風神】を取り出しながらあたしはある一つの決意を固める。

彼女“刹那”を止める決意を……！！

あたしたちの1対1は誰も邪魔させないわ！！何としても刹那を止めてみせる！！

あたしたちの闘いは今ここに新たに始まった。

真備 side

「…なんだこれ？」

気がついたとき俺はこの空間の異様な場景を凝視した。

まず周りは全てさっきまでの白い空間と同じどある。ここまではまだいい。だが異常なのはここからだった。

そこは現実的にありえない光景があったのだ。問題は今この瞬間も俺の周りをフワリフワリと浮かんでいるこれ。

「【鏡】…か？」

「ええ。その通りですよ真備。これが俺の部屋…光の空間【鏡の間】です」

そう。俺の周りにはなぜか大小様々な鏡が…浮いていたのだ。

「なんで…鏡なんだ？」

「それはおいおい分かりますよ…」

そう言ったときのレリエルはきつと不適な笑みを浮かべていたと思う。そしてレリエルは左手を突き出した。

「…来い。恍穿弓」

その静かな声とは裏腹にレリエルの周りに激しい光が巻き起こる。

…ピカアアアアアアアアアアアアアッ!!!!!!!!!!!!

「これがお前の魂狩か…」

俺は彼の魂をはじめて見たがその姿はとても神々しい光だと思った。

使ってる人間があんな格好でなければ彼の姿は神にすら見えな
う。

「弓矢の魂狩。 恍穿弓」

彼の魂狩は弓矢 アーチェリーの形状をしている。 そんな端から
見れば旧式の武器にしか見えない武器だが俺はその武器に脅威と神
々しさを感じた。

そしてそれを扱う彼。 レリエル あいつにも…。

だが俺はそんな存在に立ち向かうための武器を手に入れた。 あいつ
を目覚めさせるための武器を。 その名前は

「発動!!! 雷神!!!」

ピシャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア

俺がその名前を叫んだ瞬間に俺の周りに大量の電気が飛び火する。

そしてその電気の暴れが収まるとそこには俺の褐色に似た肌色の拳を隠す黒いグローブが現れるのだった。

「グローブの魂狩雷神!!」

ここにきてやっときた俺の出番に俺は心が踊るのを感じる。心行くまで楽しみながら名誉挽回してやるぜ。そう心に思いながら俺は目の前の男にニヒルな笑みを向けると唇を震わした。

「おい!!レリエル!!」

でもそのまえにここで一つ爆弾落としておくとしよう。俺とお前の関係のヒントをな

「…なんですか?」

「いいか?レリエル。俺が今から言うことは冗談でも何でもないぜ?昨日の夜お前を見てから……そして今朝からのお前の“偽物”を

見てからずっと確信していることだ!!」

そこまで言うとしリエルは分かりやすく体を固めた。だが当然だろうな。俺も初めは信じられなかったし…だけど、その反応をみる限りどうやら事実なんだな。

だがまだ言わない。お前のことはまだ…こいつらがいる前では

「俺はお前の正体を知っている!!」

「……!?!」

声に出さずともその体の震えが何よりの返事となっていた。俺は彼が震える姿を始めて見た。

“今まで”見てきた中で始めて見たのだった。

「…いつからですか?」

「…だからさっき言ったろ?最初。昨日の夜…初めて会ったそのときからだ」

そつだ。初めて会つたあの姿を見てピンときてたんだ。でも敢えて学校でも普通に接してゐたのはこのときのための布石だ。

「お前とは一度やつてみたかつたんだよ」

「何をですか？」

「そんなもん決まつてんだろ……」

そこまで言つと俺はレリエルに指を突きつけ片目を瞑り押さえきれない高揚感そのままの楽しげな声をあげこつ言つた。

985

「喧嘩という名前のパーティーをだよ……!!」

「……っ!?なるほど、実にあなたらしい。いいでしょう……真備。全力でお相手いたします……!!」

「……っしやああ……!!」

さあ……パーティーの始まりだ……!!しつかり楽しませてもらうぜ……!!レリエル……!!……!!

第32話 雪光のWバトル（後書き）

作「さあ今回も来ました！！第2回ラジオ放送風あとがき！！その名も

【TOKIのSEKAI】！！！！」

司会は俺、作者が勤めまーす！？そして、協力者してくれるのはこの2人！！」

真「ういっす！！本編じゃケガしたり死にかけたり大変な目にあってる羽前真備と！！」

輝「影が濃いのか薄いのか！？美濃輝喜の2人で〜す！！」

作「と！！言うわけで今回もY O R O S I K Uお願いしまーす！！」

真&輝『しくよろ〜』

真「なあなあ！！そういえばさつきからずっと気になってただけどなんで、俺達が呼ばれたんだ？」

輝「そういえばそうだね〜。ここは普通、主人公の日向やヒロインの知恵理を出した方がいいんじゃないかな〜？ねえ作者さん。なんで〜？」

作「ふっふっふ！！説明しよう！！と言っても理由は簡単！！輝喜

と2人で真備を弄り倒すためだあああああああ！！！！」

真「弄られ役かよ！？ていうか俺の人権は！？拒否権は！？むしろ俺人間として扱われてるのかよ！？」

作「え、？お前って…人間だった…のか？」

真「当あああたり前だああああああああああああああああああああああああああああ！！！！」

作「ということで、最初のコーナー行きたいと思いまゝす」

真「無視された…」

輝「あはははでも作者さん。どうやら時間みたいだよ、続きはまた次回のあとがきということで」

真「あの…俺の存在って最早空気なんですか？ねえ？ねえ？ねえ！！？」

作「あら？もうそんな時間なのか…じゃあ、続きは今度にして次回予告。次回の時の秒針は

その矢、光ゆえに光の力を持ち。光ゆえに光をも超える力を持つ。
光こそが…最強の能力。

これが俺の魂狩の特性です！！

次回【弾光の閃光】」

日「問題nothingだぜー!!」

真「いーじ。いーじ…どうせ…どうせ俺なんて…ラブコメでありが
ちの主人公の親友（ウザい方）ですよ〜だ…いーじ…いーじ…」

輝「ふふふ マキビン マキビン 無視されて落ち込んでないでラ
ジオ放送の続きしよ それにそんなマキビンに朗報があるんだよ
なんと!!最初のコーナーは」

作「【羽前凧の憂鬱】…!!」

真「最悪だああああああああああああああああああああああ
あああああああああああつ…!!…!!」

凧「それどうゆう意味よ!?!」

真「げっ…姉貴!?!」

次回に続く!!

第33話 墮天使の栄光

凧side

「どうした凧!!まさかこの程度でギブアップなんて言わねーよな
ー!!!」

「ふんっ!?当たり前前よ刹那。あんたこそ、その可愛い顔に絶対に
吠え面かせてあげるんだからね!!覚悟しなさい!!!」

「へ!!!上等だぜ!!!」

キ ンッ!!!!!!!!!!!!

…あたしと刹那が戦闘をはじめて、すでに5分近く時間が過ぎてい
た。だけど結果としては、認めたくはないけどあたしは刹那に押しさ
れ気味だった。

その原因は言わずもがな、あの見た目に反してハイスペックを誇る
彼女の魂。

刹那の魂狩【雪化粧】である。

その形状は羽衣　はつきり言えば、布の形をしているのだが、あの布はただの布ではない…。

雪のような白い生地は、光の角度で何色にも見えるし、それに加えさらに驚きなのはその攻撃能力だ。

勢いよく斬りつければ人間の肌なんて簡単に傷つけられる。また、折り重ねれば少なくともあたしの攻撃なんて簡単に防ぐこともできる

つまり、あの外見とは裏腹にその性能はかなりのハイスペック。もしかしたら私を知る魂狩のどれよりも高性能なのかも思えてしまっただ。

ホント… Simple is the bestとはよく言ったものね。彼女の魂にはまさにその言葉がお似合いだった。

『』……『』

でも、実際問題これはかなりまずい状況だわ…。

あたし達の周りには雪、刹那は雪の能力者というだけあって雪上での戦いに慣れてる。さらにあたしは協調すらできない状態…。

これは…かなり不利な状況ね。

『へ！！オレの雪化粧にこの部屋で勝とうなんて思わない方がいいぜ？？』

そのとき不意に、戦闘が始まる前の刹那の言葉が頭によぎる。あの啖呵、まさにその通りだったわ。

今、あたしは確かに刹那の言った通りの展開になりつつある。つまり…あたしはあたしの敗北へと一步一步確かに前進しているということだ。

…さて、どうしようかしら。この状況を…一変させるためには

「凧、いい加減分かったろ？この部屋でオレには勝てないぜ？？そういう運命なんだよ」

「ふん、そんなことやってみないと分からないでしょ？第一、あんたがあたしの運命決めんじゃないわよ？？凧払うわよ？？」

「…そうだな。だがな、凧。オレがまだ本気を出してないこと…分らないわけじゃないだろ？」

「…そうね。気づいてないわけじゃないわ。でも、あたしだってま

だ本気じゃないわよ？それが分からないあんたじゃないでしょ？」

「言ってくれるな……」

口先では何とでも言える。でも、状況が最悪なものには変わりなかった。そんな強気なことを言っても状況が変わる訳じゃないし……。

それに、刹那が本気じゃないことも分かっていた。なぜなら彼女は

「んじゃ、そろそろ本気で行こうかな。果たしてお前にオレの姿を捉えることができるかな!？」

なぜなら彼女は 刹那は、まだあの姿を消す技を使ってない。昨日の夜。土壇場でキレた刹那が見せたあの技……。姿どころか、足音や気配すら消し去る、その名前のとおり【静寂】の技。

出来ないわけではないらしい。最初この部屋に入ったときに刹那はその技で姿を消してたから今もすぐに使えると考えたほうがいいでしょうね。

だけど、今それを使ってこないということは……。刹那は本気を出してないということである。嘗めてくれんじゃないのよ。

「…さて、じゃあそろそろ戦闘再開といきしましよ刹那。あんたのこと…風払ってあげるからね」

「ああ…いいぜ。お前の綺麗な鮮血…この目で拝んでやるよ。羽前の血はなかなか好みの味だったからな…」

今のあたしにはあの技に対処する方法はない。姿を消されてしまったら…あたしにはどうすることもできない。

でも、だったら

「はああああああああああああっ！……………！」

「うりゃああああああああああっ！……………！」

だったら 使わせる前に戦闘不能にするまでよ！！

キ ンッ！……………！！

静かな静寂の間の部屋に再び綺麗な金属音が響き渡る。雪だらけの冷たい部屋にその音は少しだけ不釣り合いのように思えた。

ぶつかり合う鉄扇（風神）と羽衣（雪化粧）。あたしたちの闘いは、あたしたちの思いとともに再び荒々しく舞い上がっていった。

「マキ君！！！！！」

だが、そのとき突然、真備の名前を大声で呼ぶ知恵理の音があたしの耳をつんざいた。そして

ドカアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
ンッ！！！！！！！！！！

あたし達の左側にある、おそらく真備とレリエルが戦っていると思われる境の壁が何かがぶつかったような巨大な音と共に揺れ動いた。

「な…なに！？何なの！？」

「…あゝあ。たつく…苛立ってやがんなあいつ…オレ達の目的まで忘れてるわけじゃねーよな…」

突然の事態に驚くあたしとは裏腹に、全てを悟ったかのような刹那の言葉。彼女の言うあいつとはきつとレリエルのことでしょうか…。

だとしたら、きつとあいつは…真備は…。

いったい、この向こうでは何が起ってるの？真備…あんだ、無事なんでしょうね

真備 side

「…いつてえ…」

くそ…油断したぜ。まさか…まさか、レリエルにあんな技があったなんて…。

まさか矢ごときに吹き飛ばされるなんて思ってもいなかったぜ。いてて…壁に打ち付けられた背中が割れそうだ。

「セイクレッド・アックス
…神聖の斧」

「!?!?くそつたれ!!!!!!!!!!」

パチンッ!!ザンッ!!

だがしかし、レリエルは壁に倒れこんでいる俺に容赦なく矢を撃ち込んでくる。

でも、この矢はただの矢じゃない。俺は分かっていた。あの矢の恐ろしさを

「ぐうっ…!!!!」

ザンッ!!!!

精確に俺へとむかって飛んできた矢を俺は紙一重、体をひねって避ける。だけど、これだけではこの矢の恐怖は終わらない…。なぜな

ら、この矢は

「能力圧縮解放。さあ…行ってください

【神聖の鐘】」

セイクレッド・ベル

ドカアアアアアアアアアアアアンツ!!!!!!!!!!!!!!

その刹那、俺がさつきまでいた場所のちょうど真後ろにあった壁が、まるで巨大な掘削機で破壊されたかのようにへこむ。

それは、俺へと放たれた矢を中心とした空間だった。

「あ、あぶねえ…」

「…惜しかったです」

冷や汗が背中にしたり落ちる。ギリギリのところまで避けたが、この攻撃に当たったら圧力で骨折してしまうかもしれない。それくらい巨大な攻撃なのだ。

「さすがですね真備。まさか【神聖の斧】だけではなく【神聖の鐘】まで避けるなんて…ね」

「かなり危なかったけどな…」

はつきり言つて俺はラッキーだった。あんな攻撃を一撃も受けることなく正体を見破ることができたからな…。

さつき、闘いが始まって、初めて攻撃を受けたときに俺は思わず矢を掴んでしまった。だが、すぐに投げ捨てていたため、光の波動を受けずに済んでいた。あのときはマジでびびったぜ…。

もし、あのままだったらきつと今頃俺の右手は粉々だっただろうな…。だが、結局近くで発動した波動で俺は壁まで吹っ飛ばされ、背中を打った…それがさっきの衝撃の真相である。

「ふう…で？そいつはいったい何なんだレリエル？ただの矢…なわけはないよな？あんなコンクリに鉄と鋼をトップピングしたみたいな壁をぶち壊してんだから…。どんな手品が隠されてんだ？」

「…まあ、隠すようなことでもありませんからね。…これは、俺の技の中で最も威力が高い攻撃用の技。その名も【神聖の斧】と申します」

「【神聖の斧】……」

その言葉がどういう意味なのかはさっぱりであった。もしかしたら姉貴や日向あたりなら分かるかもしれない……が。そんなことは今はどうだっていい。

今、一番問題なのはあの矢【神聖の斧】の凄まじい破壊の力についてである。レリエルの話は続く。

「……そもそも、俺の光の矢は俺の体の中に流れている能力の力。そうですね……しいていえば魔力、とでも呼びましようか？それを指先に集めて、集束させ、微量ながらも光の能力を帯びた一本の矢を生成してるにすぎないんですよ」

「……………」

あら……なんかヤバい。さっそく難しい話になってきやがった。こりやあ……雲行きが怪しくなってきたやがったな……。怪しすぎる。

話がどんどん難しい方へと流れていき、俺は口を開けることもできない。いや……口は開いてるんだけど……何というか……。俺はポカンとしていた。

「ですが、一本の矢を作るために必要なエネルギーはそんなに必要はありません。俺を一本の大杉としますと、矢はその杉からできる一本のつまようじ…とでも考えてください」

「……」

「さて、ではここで問題です。俺が矢を作り出す。ここまでは分かりましたよね？では、必要以上の能力を一本の矢へとこめたならばどうなると思いますか？」

「必要以上に…えっと…えっと…ええええっと…」

パチンツッ！！ザンツッ！！

次の瞬間。巨大な一本の矢が俺のすぐ横をすり抜ける。突然のことだったからその場を微動だにできなかつた俺。だが、少しだけかすった頬の傷は痛いし、背中に流れる冷たい冷や汗も、最早滝のように大量に流れていた。

そして俺は、呆然としつつも振り返る。“それ”の正体を確認するために。

振り返った先。そこには、放たれた矢がああ壁へと突き刺さった映像が俺の目に飛び込んできた。それもただの矢ではない。巨大な一本の矢。たぶんレリエルがさっきから言ってる矢の正体…【神聖の

斧】が。

俺のすぐ…後ろに

「危ないですよ真備。そこにいたら…ね」

「っ!?!」

ドカアアアアアアアアアアアアンツ!!!!!!!!!!!!

ぼそりと呟かれたレリエルの忠告も虚しく、次の瞬間、俺は壁から遙か遠くへと吹っ飛ばされていた。原因なんて…考えるまでもない。あの矢だ。

「…はい。では答え合わせです。必要以上の能力をこめられた矢。結果として、それは容量オーバーとして余計なエネルギーを外へと飛ばそうとするわけです。結果、圧縮から解放され、弾かれたエネルギーは膨張…さきほどのような巨大なエネルギー波となるのです」

「いっつつ…それが、お前の言うもう1つの技」

「そうです。これこそが破壊を生む光…。それはまるで鎮魂歌を奏

レクイエム

でる鐘の音のような破壊の旋律を刻む光の矢…」

そして、レリエルのフードで大部分が隠れた顔の中で、唯一見える口元に不適な笑みが浮かぶ。

そんな妖しく綺麗な笑みを、俺は本当にあいつらしいと思った。本当に…あいつらしいと

「【神聖の鐘】セイクレッド・ベルです」

打ちつけ、ヒリヒリとする背中に流れ落ちる冷や汗が気持ちいい…。その言葉に、俺はへへッと少し笑みを作り額の汗を拭う。

でも、油断だけはしない。いや、油断する余裕すらない。今俺の中を占めるのは緊張感と高揚感…ただ、それだけだった。

「…は。マジで最高に楽しませてくれるよな…お前は…さすがだぜ」

「はははは。パーティーに招待された身としては当然ですよ…。ただまだ余興はたくさんありますからどうか楽しんでください？」

「…それはこっちのセリフだったっの」

高まる気持ちを抑えつけ、俺は拳を構える。パーティーの再開だ…。俺と同じように弓を構えるレリエルの姿が俺の瞼へと映る。その姿に死角はなかった。レリエルの矢はまさしく早撃ち。その技術は、もしかしたら拳銃にすら対応できるんじゃないか？と思うほどだ。

つまり、一瞬でも意識を別なものに移したらパチンツと指を鳴らされ、俺は射抜かれる…。そんな感じだった。

『 …… 』

無言で拳を構える俺…。だが、状況で言うところかなり不利な状態だ。弓と拳…間合いが違いすぎるのだ。一歩でも動けば、その瞬間にパチンツ…俺は光の矢に射抜かれるだろう。

ちっ…やっぱ、こんな状態でレリエルを攻撃するためには…。この圧倒的な状態を逆転させるためには…やっぱりあれしかないってことかよ

「…真備。いくらバカなあなたでも気付いてるのでしょう？この状況を逆転させる一手が何かを？」

「ああ、もちろんだぜレリエル…。今のバカ発言はともかくとして、俺は全部気づいたぜ…。おまえの弱点が何かってのがな」

「さすがです」

ああ…そうだ。俺は気付いていた。確かにレリエルの放つ光の矢は速くて、そのうえ精確だ。だが、いくらレリエルが使ってる魂（武器）でも弓は弓。弱点も同じだ。

つまり、近距離に入られたら武器としては役に立たなくなるということである。これを考えたらあとは簡単。

弓を射た後、次の矢を構える前までのロスタイムを狙うしかないということだ…！！

「ですが、あなたに避けられますか？俺の矢を」

「避けなきゃ俺が攻撃できねーよ」

そして俺は拳をギュツと握りしめる。脚は踏ん張り、いつでも動ける体制を作り構える。

右か？左か？それとも上か？下か？…。そうやって身構える俺…だ

つたが、答えは違った。

そのことに気付いているのはレリエルと 【日向】 だけだった。

「気をつける真備！ あいつには…レリエルには広範囲攻撃（神聖の槍）がある！！」

「何！？」

突如として響き渡る日向の声。俺に対するその忠告の言葉だったが…時すでに遅し。

レリエルは日向の声で注意力を散漫させた俺を見逃さなかった！！

「残念でしたね真備。これで終わりです！！」
セイアフレッド・スピア
【神聖の槍】！！！！！！！！」

パチンッ！！ザンッ！！

指を鳴らす音が響く。それは、レリエルの手から1本の矢が放たれ

一番少ない部分を見極め、俺はそこに目掛けて走り出す。右、右、左、下！！

避ける順番を決めた俺は決断即行動！！回避行動に入った。まず…
1本目！！

「っ！？」

右から飛んでくる矢。やつぱ…速い。だけど、俺は1本目の右の矢をギリギリのところでひねり避けた。

さあ…どんどんいくぜ！！レリエル！！続いて2本目！！3本目！！同時に行くぜ！！

「はあっ！！！！！！」

右と左からほぼ同時にきた矢。それを俺は一気に両手で掴んだ…はずだった。実際に掴めたのは、右からの矢のみ。片方掴むだけで限界だった…。

左から来た3本目の矢に神経が行かなかった俺は…矢を掴み損ねた

左肩がから空きだった。そして

ザシュツ！！！！！！！！！

「ぐうっ……！！！！！！！！」

向かってきた矢は精確に俺の肩を射抜き、俺の痛覚神経を刺激する。痛みで、今にも脚をつきそうになる……。でも、負けるわけにはいかない。

俺は負けるわけにはいかない……。いかないんだよ！！！！！！いくぜ！！ラスト……4本目！！！！

バンツ！！！！！！

痛みでフラフラとしながらも、俺は足元に飛んできた矢を飛び避ける。思わず、崩れ落ちそうになる。でも……まだ、俺はやらなきゃいけないことがあった。

さあいくぜ！！！！！！……ここからは俺のターンだ！！！！！！！！！！

「散々やってくれたんだ…覚悟しやがれ！！！！レリエルウウウウ
ウウウウ！！！！！！！！」

肩の痛みを抑えながら俺はレリエルに突撃する。…決まった。

俺は走りながら勝利を確信する。いくら弓の扱いに長けていても…
インファイトなら俺の方が圧倒的にぶがある。俺の勝利は確定的だ
った。

「うらあああああああああああああああああああああああ
あ！！！！！！！！」

矢の雨をくぐり抜けた俺はレリエルに一発いれるために拳を振り上
げる。

完全に油断していたレリエルは大慌てで恍穿弓を構える。そう…思
っていた。

「…本当に、すごいですね真備。あなたは最高ですよ。…どこまで

も真っ直ぐで…ねじ曲げた運命も自分の力だけで切り開こうとする。
俺には…絶対に真似できません」

「はあああああああああああつ!!!!!!!!!!!!!!」

…だけど、それは俺の勝手な思い込みだった。なぜなら、俺をみる
あいつの口元は

「ですが、それゆえに…あなたは脆い…」

あいつの口元は 恐ろしく歪んでいた。

「マキ君!! マキ君後ろ!!」

「っ!?!? 避ける!! 真備!!!!!!!!!!」

そして、こだまする日向と知恵理の声…。このとき初めて俺は自分の
失敗に気付かされた。

自分が犯した…最大の失敗を

「サジタリウス射手座の矢は…狙ったものを必ず射抜きます…必ず…ね」

ザシユツ…!!…!!…!!

…背中に響く肉をえぐる音。それと一緒にきた痛み。その痛みは、さっき俺の左肩を射抜かれたときの痛みとまったく同じものだった。

「ぐあつ…!!…!!…!!な…なん…だ…と…」

バタンツ…

…さっきとは違い、背中と肩へと貫かれた痛み、俺は耐えられることはできなかつた。そして俺は、ついに脚をついてしまう。

そんな俺を、レリエルは見下ろすかのように俺の前に立ちはだかる。その姿はまるで…レリエル神に屈服したかのような画だった。

「な、なんで…なんで…後ろから…光の矢が…」

突然のことに、俺はレリエルを目の前にしても愕然としてしまっていた。こんなはずじゃ…こんなはずじゃ…なかったのに。

この事態に、俺は…俺は…何もできなかった。今の俺は…無力だった。

「ふふふ、まさかこの鏡に何の意味もないものだと思ってたんですか？」

「鏡が何だつてんだよ!？」

レリエルの言葉に俺は思わず声を荒げる。だが、それは虚勢でしかなかった。レリエルもそれが分かっているのか、俺の虚勢を鼻で笑う。その態度に俺は何も言えなかった。

「これは俺の魂…グロリアス 閃閃弓の特性【グロリアス 栄光】です」

「グロリアス 【栄光】…」

またしても聞いたこともない言葉。だが、この凄まじく冷たい空間でその言葉はあまりに不釣り合い。俺は直感的にそう思っていた。

「…お前の魂狩の特性。いったいどうゆう意味なんだ？」

「はい。俺の魂狩 恍閃弓の特性【栄光】これを説明するのは案外簡単なんですよ…」

「簡単…だと？」

「ええ。簡単です。俺の魂狩の特性【栄光】これを一言であらわすなら」

パチンッ！！ザンッ！！

その刹那、レリエルが浮かでいる鏡の1枚に向けて光の矢を放ち直撃する…。このままではあの鏡は光の矢に射抜かれ割れてしま…う…そう思った。

だが、その矢は

「いつ…!?うそだろ!?!」

その矢は 矢はそのまま鏡を割ることなく、まるで鏡に呑み込まれるかのように鏡の中に吸い込まれていくのだった。

「いったい何が…っ!?!」

俺が驚いてるとさらに奇怪な現象が起こる。その映像は嘘でも冗談でもない。矢が 吸い込んだ鏡から再び光の矢が出てきたのだ。そして

ザンッ!?!?!

「うわっ!?!」

…再び勢いを殺されることなく飛んできた矢を俺は右手で掴み取る。

このとき、俺の頭の中はすでにパンク寸前だった。

「これが俺の恍惚弓の特性の持つ能力の1つです。鏡やガラスなどの光り物に当たると光は反射しますよね？それと同じように、俺の光の矢も光り物に当たると反射するんです」

「三行で分かりやすく頼む」

「光の矢。鏡に当たる。戻ってくる。でしょうか…解りましたか？」

「いや、まったく全然！！これっぽっちも！！」

「はあ…自信持って言わないでください…」

そう言うと、レリエルはまるで呆れたかのようにため息をつく。いや、あれは呆れたわけではなさそうだ。諦めた…と、言った方がいいのかもしれない。

俺にとっては見慣れた光景だった。

「…まあ、これ以上は理解しなくてもいいですが、一応聞いておいてください。俺の魂狩の特性【栄光】これの真の力は

“恍惚弓から放たれた矢は光と同じ性質を持つ”

ということですよ。工夫次第で100通りでも200通りでも様々な闘いができるようになる最高の特性。まさしく栄光【栄光】グロリアスです！
「！」

そう言っただけで両手を広げるレリエルは今にでも高笑いをしそうな勢いでそう宣言する。その言葉の50%は俺は理解できなかった。

だが、俺にもただ一つ。分かっていることがあった。それはまだこのパーティーが

「へー！つまんねー話は終わったか…レリエル」

それはまだ、このパーティーが 終わってないことだけだった。

そう…まだこのパーティーは終わってない。俺はまだ…闘えるんだからな！！

ザシュッ！！

今の俺にあるのは 最高のパーティーになったこの喧嘩を楽しみたいという高揚感だけだった。

「…やはり、立ち上がるのですね…光に栄光を。そして、何よりもあなたに栄光を 【栄光】^{ケロリアス} は決して俺だけのものではありません。寧ろ栄光という言葉は…俺なんかよりはあなたにこそ相応しいと思います」

「知るかよそんなこと!!そんなことより俺は…テメーをぶん殴れりゃいいんだからな!!!!!!!!」

さあ行くぜレリエル!!パーティーの再開だぜ!!俺はお前を最後まで“信じ抜いてやるぜ”!!!!!!

第33話 墮天使の栄光（後書き）

作「はい！！というわけで最初のコーナーは【羽前風の憂鬱】です！！」

真「ついには合法的になりやがった！？」

作「このコーナーは凧さんにいろいろと相談しようというコーナーです。では、お願いしま〜す」

凧「いつでもいいわよ下僕ども！！おーほっほっほっ！！」

輝「あれれ？？ナギリンいつからそこにいたの〜？」

真「それ以前にまずはグチャグチャに崩壊しちゃったキャラにツッコメよな…」

作「え〜では、当然の事ながら真備はスルーという「ふざけんなああああ！！」ことで、早速相談に行きます」

ペンネーム【松竹梅】さんからのお便りです。

うい〜す羽前姉。それと読者ども。俺を覚えてるか？不知火達の担任教師の松竹梅太郎だ」

真「明かしちゃったよこの人自分の名前！？」

作「相談を聞いてくれ。実は俺のクラスにはいつも居眠りをして
いる【S・H】という生徒がいるんだけど、これがどうしようもない
怠慢ヤローなんだ」

真「そうだけど!! そうだけでも!! あんたが言つなああああ!
! ! ! ! !」

作「んでさゝそいつをガツンと言わせたんだ。なあ羽前姉。教え
てくれ。どうすれば…俺はあいつを痛みつけられるんだ! ? …だ、
そうです」

真「あんたはそれでも教師かあああああつ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! !」

輝「あはは 先生も大変なんだね」

作「てなわけで、凧さん。お答えをどうぞ! ! !」

凧「塩酸…」

真「へ?」

凧「グルグル巻きにして天井から吊し、目に塩酸を入れる。そうす
ればいつも寝てる日向でもきつと目を覚ますと思つわ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! !」

真& amp ;輝『はあああああああああ! ! ! ! ! ? ? ? ? ?』

梅「それだ! ! !」

真「うわっ! ! ! 梅ちゃん! ? だめじゃないっすか脇役がこんなとこ
にでしゃばっちゃ! ! ! ?」

梅「ええ〜い！！黙れ羽前弟！！そんなことより…見ていろよ不知火！！俺がきつちり目を覚まさせてやるからなああああああああ
あ！！！！！！！！」

真&輝『日向逃げる(て)ええええ！！！！！！！！』

作「はい！！では、次のコーナー　の前に次回予告。次回の時の秒針は

それは冷たく独りぼっちの世界。そして、それは彼女の魂の世界…。

次回【静寂の雪”風花”】

日「問題nothingだぜ！！」

真「あゝあ。梅ちゃん…行っちゃった…殺されなきゃいいけどな…

日向に「

輝「祈ろうマキビン。ヒナタンの機嫌が良いことを…」

次回に続く！！

第34話 静寂の雪"風花" (前書き)

凧、敗北で決着!?

刹那の見せる本気の力!!

静寂の【風花】が今、舞い落ちる!!

第34話 静寂の雪"・風花";

知恵理 side

「ひどい。ひどいよ…なんで…なんで、あの4人が闘わなくちゃいけないの?なんで…なんで」

「くそ!この高さじゃ飛び降りれねえ…俺達には何もできないのかよ!」

鉄で囲まれた部屋の中。口元を押さえ、今にも溢れ出しそうな涙を必死に拭いながら、そう私は呟やく。隣ではヒナ君も悔しそうに叫びます。

でも…今の私には、私達には真下で行われている戦闘をただただ眺めることしか出来ませんでした。

あの、辛く…悲しく…そしてきつと、誰もが望んでない闘いを。

「どつした風!?さっきまでの威勢はどこ行ったんだよ!?はあああああああああああつ!…!」

「ふん。冗談でしょ!?!それよりあんたこそ疲れてんじゃないの?

拳の速度が0.2秒くらい遅くなってんわよ!!はああ!!!!!!」

キ ンッ!!!!!!!!!

…まず、私の唯一の女の子の親友であり、大切な存在のナギちゃん。それとつい最近仲良くなったとはいえ、とつても素直で良い子のセツちゃんとの闘い。

激しく。それでいて容赦がない。私はそんな2人が戦ってるのを見るだけで胸が張り裂けそうになりました。そして

1026

「俺をなめんじゃねーよ!!!!!!レリエル!!!!!!」

「そこなければこちらもおもしろくありません!!」【神聖の槍】
セイクレッド・スピア

…傷だらけのマキ君。それに、正体を知ってしまったレリエルさん

なんで、なんであの2人を戦わせたりのの?

こんなの…残酷…すぎるよ…。

「知恵理…知恵理！！おい！！どうしたんだ知恵理！！」

「ふえ…？」

不意に頭に入ってくる心配そうな声…。それは私が毎日聴く声でした。

その声に気づき、振り返る。すると、そこには心配そうに私をぞき込んでるヒナ君の姿が。反応した私に、本当に心から安心したという表情を浮かべるヒナ君。

うん、ヒナ君には話していた方がいいかもしれない。

一人で悩む前にまずは周りを頼りなさいって 昔、お兄ちゃんがそう教えてくれた。困ったことがあったら…俺か、日向を頼れって

「よかった。本当によかった…知恵理…。さつきから呼んでも反応しないから心配したんだぜ？」

「…うん。ごめんねヒナ君」

そつだ。そつだよねヒナ君。レリエルさんの正体…きつとヒナ君なら

「あのね、ヒナ君…」

…だけど、私の言葉はヒナ君の厳しい顔と首筋にかかる冷たい感触に阻まれたのでした。それが何なのかは考えなくても解りました。

…相談する事も、許してくれないんですね？

私は、首筋に当てられている刃に恐怖しながらも後ろの人に声をかけました。その人に

「水城さん。私は…私はどうすればいいの？」

「……鎮静してろ」

その言葉は、今の私には重すぎる言葉でした。

bedside

「はあ…はあ…」

やばいわね…さすがに、息が上がってきたわ。

「ほらほらほら…!!…息切れしてんぞ!!…呷!!…」

「うっさいわね、これは持病の喘息よ!?!」

ちなみに、あたしは予知夢を見る以外いたって健康な体だからそこは勘違いしないでね。まあ、こんな分かりきった嘘。信じる奴なんて

「いや!!…そっちの方が問題あんだろ!?!」

…いたわ。だまされた奴。

「嘘よ」

「騙されたあああああああああああああああああああああ
あつ！！！！！！！」

…刹那って騙されやすいのかしら？いや、ただ単に純粹なだけか。

「騙されたあんたが悪いのよ！！」

「お、鬼」

…いつも思ってたけど、なんであたしってときどき悪魔とか鬼とか
って言われるのかしら？…ホント不思議だわ。

あたしはこんなにも可憐な容姿をしてるっていうのに　ごめん。
自分で言っても今はないと思うわ…。はあ…いよいよヤバいわ
ね。

怒りと焦り、そして刹那とのこれからの戦いでの思考でまともな判

断が出来なくなってる…。軽い冗談すら、もう頭に浮かべられなくなっていた。

「さあ来なさい刹那！！あたしが風払ってあげるからー！」

「くっ…。風。お前はオレを怒らせた。もう…挑発じゃあすまねえぜ」

今までのムードから一辺。雪化粧を構え直す刹那。

…うん。どうやらやる気みたいね。あたしの前に立つ彼女から溢れ出てくる闘気。どうやらここからが本当の戦いになるみたいね。

あたしも改めて風神を握りしめる。…はつきり言って今のあたしに刹那が本気を出したら勝ち目はほとんど無くなると思う。

うんうん、違うわ…あたしでは絶対に勝てない。

あたしはあたし自身の實力をはつきりと自覚している。たぶん、この部屋にいる能力者では最弱とも言えるわ。だからこそ、言いきれ

あたしでは、絶対に刹那には勝てないと

「最初に言っておく…オレの本気は静寂しずかだぜ？まるで、雪の中に隠れるみたいにな…」

「ふん。そんな御託、どうでもいいわ。かかってきなさい、子猫ちゃん？？」

「へへ！！望むところだ！！」

勝率の低い戦いをやるほどあたしは馬鹿じゃない。でも、今回は逃げられない戦い　まあ、逃げるつもりもないけどね。

だったら、最後まであんたにつきあってあげる。だから、刹那

あたしを本気で狂わせなさい！！！！

「行くぜ！！【静寂の雪・風花かざはな】！！」

その刹那、雪化粧を体に巻きつけた刹那の姿が跡形もなくなる。

その姿まるで、吹雪の中へと消えていく“雪隠れ”のような幻影のようだった

日向side

「水城っ…!!」

その男：時雨水城は俺の目の前で俺の守りたいものに刃を突きつける。

知恵理の銀色の髪とは真逆：光沢のない完全な漆黒のロングヘア！。

さらに死神を思わせる漆黒のコートを足の先まで着込んだ姿。そして、その姿と完全にマッチした大鎌^{デスサイス}。それは知恵理を迎えにきた死神のようだった。

「…何のつもりだ？」

知恵理が入れられている鳥かごのようなものの側面に掴まりながら、知恵理に村鯨の刃を向ける水城。

それだけでも俺には充分我慢出来ないことだ。

だが、水城はそんなこと気にした様子もなく俺に無表情な顔を向け

る。

「……お前も鎮静してる不知火日向。今は我らがやり合つときではない。鎮静してあの4人の戦いをしかと見届けよ」

ムカつくほど無表情な顔。その瞳の奥では俺達との【ゲーム】を楽しんでいるということは嫌でも分かる。

やつは俺と俺の親友達、そして俺が守りたいものをゲームの駒としか思っていない。そう感じた。

「…問題nothing。だけど、お前の思惑通りに事が運ぶなんて思っんじゃねーぞ？真備と凧は負けない。あいつらは強い…例えば相手がレリエルと刹那であっても、あの2人ならレリエルと刹那の目を覚ますくらいまでやってのける。あいつらを…なめんじゃねーよ？」

そう言つて、俺は水城を睨みつける。これは俺からの宣戦布告の意味もこめていた。俺は　俺達は、絶対にお前を倒す！！そうこめた言葉だった。

だけど、やつは動じることなく俺を見続け続ける。そして、訪れた

いつときの静寂

それは気持ちの悪い静寂だった。

『……………』

押し黙り、相手の出方を伺う俺達。その中で、真備が拳を振るう音、レリエルが指を鳴らす音がさつき以上に大きく聞こえてくる。

だがそのとき、水城は一瞬、俺に向ける視線を別の方向へと反らした。その無情な瞳が何を考えているのかは分からない。

だが、それから少しして、水城は口元を若干　そう、実際は動かしたか動かしてないかすら分からないほど微妙に歪ませ、言い放った。

俺達にとって最悪の言葉を。俺達にとって　ホントに、最悪な言葉を。

「……………どうやら、刹那の勝利が決まったみたいだ。残念だったな不知火日向」

ヒュウウウウ…

そのとき、俺の顔を弱々しい風が力なく撫でたような気がした…。

風side

「……………」

音もしない無音の空間。あたしは周りの気配に耳を、目を、鼻を…とにかく体全体を逆立てて身構える。だけど、やっぱり刹那の気配はどこにも感じない。

この世界は【静寂】…静かで寂しい世界。今、この空間は刹那によって完全に支配されていた。

あたしを含めて。

「……………」

ゴクリと唾を飲み込む音でさえ、大きく聞こえる静寂の空間。

全てが飲み込まれるような静けさ。そして、それをも凌駕する恐怖があたしの中をグルグルと支配していく。

耐えられない。絶えられない。堪えられない。たえられない。タエラレナイ。あたしには…この世界は寂しすぎた。

そう思った瞬間。あたしの中にあったいろいろなものが…バラバラに、跡形もなく崩壊した…。恐怖に、負けた瞬間だった。

「…どうしたの、刹那？来るなら早く来なさい！？あたしはいつだっていいんだからね！？さあ来なさい！！来なさい！！来なさい！！来なさい！！来なさい！！来なさい！！来なさい！！来なさい！！来なさい！！来なさい！！来なさい！！来なさい！！」

さっきまでの強がりな言葉とは似ているようで違う。あたしの心を支配した恐怖が溢れた言葉。

完全なる虚声があたしの口からこぼれ落ちてくる。それはあたしの中にある感情が全て恐怖による支配を受けている証拠だった。

いつも、夜になったときに訪れる恐怖と違う。

言うなれば、偽（夢）ではなく真（現実）の恐怖があたしの中を埋

め尽くす。現実には、目の前にある“死”という恐怖に。そして

「…助けて」

恐怖が再骨頂に達したとき【静寂】は破られた。

シュルシュル…！！

静寂の間に音が戻る。それは、無常にも布が擦れる死を知らせる音だった。このとき…あたしは本当の死を覚悟した。

「ごめん…オレはその願いを…叶えることはできない」

あたしの真後ろに現れた刹那は雪化粧をすでにあたしの体に巻き付けていた。

冷たい…あなたの魂狩たましいってこんなにも冷たかったのね…。

肩に触れた雪化粧の冷たさ……。それは、真備がない初めての恐怖に放り出されたあたしの心のように思えた。冷たく、光（真備）のない暗い空間のように。

…ごめんね。知恵理。

ザシュッ！！

あたしの肩が斬り刻まれたのは

あたしの不甲斐なさを親友に謝罪したのと同じだった。

刹那 side

目の前で吹き出す血。

オレを受け止めてくれた女の血が飛び散るのをオレは見続けることしかできなかった。

「ごめん…本当にごめん」

肩口の傷を抑えながら崩れ落ちる風…。やったのは…オレだ。オレはオレ自身に激しい嫌悪感がわいてきた。

【今】も【昔】も他人の命令にしか従わない自分に対する嫌悪感だ。そのせいで…オレはオレのことを分かってくれるかもしれないと思った女を傷つけた。

最低だ。俺は

バタンツ…

糸が切れた人形のように倒れこむ風。オレの身体には…大量の彼女の血が服を染め上げている。

その血すら、今のあたしには虚空のようにしか思えなかった。

ダンツ…

崩れ落ちる風の姿を見て、オレも思わず膝をついてしまつ。…これ

で、終わった。俺のノルマはこれで終わり

直に新しい仕事を与えられて凧や知恵理のことも忘れてしまつと思
う。

でも、いや、だからこそ　この悲しみを忘れてしまわないうちに
…泣こう。今はただ、精一杯泣かせてもらおう…。

「うっ…うっ…うっああああああああっ！…！！…！！」

凧 side

…暗い。

……寒い。

そして……怖い。

まるで【夜】みたいな空間にあたしはいた。刹那が支配していたあ
の空間とは違う…。

この空間はあたしが支配する側であり支配される側だ。

そう、これはあたしが見ている夢…。そして、この誰かに見られている感覚。彼女がいるのだ。

あたしの夢を支配し、あたしの恐怖という恐怖すべてを支配する…
彼女が。

「…あたしの夢を干渉するやつなんて一人しかいない。出てきなさい楓!!!…いいえ、九尾!!!!!!」

あたしの呼びかけに応じた彼女は昨日と同じ姿…。物の怪ではなく、昨日と同じ人間の姿で現れる。

真っ暗な空間に栄える金色の髪をした美女。それは、まるでこの空間に現れた一筋の光のようだった

第34話 静寂の雪"・風花"；(後書き)

作「来ました！第二回ラジオ放送！！

【TOKIのSEKAI】！！

司会は俺、作者が勤めまーす！？

そして、協力者してくれるのはこの二人！！

セ「刹那だ！」

コ「輝喜ですー！！」

作「と！言うわけで今回もY O R O S I K U！！」

セ&コ「はい！！」

セ「ところでなんで、また俺達なんだ？」

コ「そういえばそうですねー・・・日向や知恵理を出した方がいいんじゃないんですか？」

作「ふっふっふー！！説明しようー！！」

作者はそう言うと画用紙を取り出した。

作「こういうことだ!!」

↳常識人の定義↳

知恵理、真備く風、日向く輝喜、刹那、水城くゲイル、デモン

作「ゲイルとデモンは忙しいし」

水城は興味ないって出てくれないから」

ツッコミ入れる常識人が二人しかいないの？

分かった？」

セ&コ「俺（僕）達はツッコミかよ（）ですか!?!」

作「ということでコーナー行きます」

セ&コ「無視された・・・」

作「【羽前風の憂鬱】!」

セ「ついに合法的になった!?!」

作「このコーナーは風に好きなことを相談しようというコーナーです。」

では、風お願いします」

ナ「いつでもいいわよ」

コ「また、いつの間に……」

作「え、早速……」

ペンネーム【松竹梅】

羽前姉、先生の相談を聞いてくれ！

俺のクラスにはいつも居眠りをしている【不知火日向】という生徒がいるんだ！

そいつをガツンと言わせたいんだが……

こいつがいわゆる天才ってやつだからどうしようも……

教えてくれ！俺はどうすればいいんだ！？

……だ、そうです

コ「先生も大変ですね」

セ「ていつか日向のことは知恵理に言えばいいんじゃないか？」

作「では、風、答えをどうぞ……！」

ナ「塩酸……」

セ「へ？」

ナ「グルグル巻きにして天井から吊し、目に塩酸を入れれば目を覚ますと思うわ!?!」

セ&コ「はあ~~~~!?!?」

コ「な、ナギリンいつからそんなにデンジャラスな思考を・・・」

セ「それ以前にそんな事したら一生目が開かなくなるぞ!?!」

ウ「それだ!」

コ「うわっ!先生!?!」

ウ「ハツハツハ!見ているよ不知火!俺が目を覚まさせてやるからな!?!」

セ&コ「日向逃げる(て)~~~~!?!」
ヒナタン

作「では、次のコーナーです!?!」

セ「いや!何勝手に進めてやがる作者!?!」

コ「そうですね!早く先生を止めないと主人公の危機ですよ!?!」

作「ふ、問題ない・・・シナリオは1%もずれはない・・・」

コ「某組織の総司令のマネしてないで日向を助けてください!?!」

セ「というよりシナリオってなんだよ!?!」

作「新コーナー【羽前真備のシナリオ】！」

セ&コ「そこ〜!?!?」

作「このコーナーは真備が本文の一部分を勝手に新しい話にしちゃうコーナーです」

マ「ふっ!任せろ!!」

作「では、この場面を・・・」

『凧!俺達がいなければいけないことは何だ!?!』

『そんなの決まってるでしょ!』

『断罪!』

『断罪!』

作「では、この台詞を真備はどう変えたのか!?!」

『お願いします!?!』

マ「俺はごうしたぜ!?!」

『凧!俺達がいなければいけないことは何だ!?!』

『そんなの決まってるでしょ！あんたの目ん玉に塩酸を流し込む！』

『な！？ちよつと待て！俺が何をした！？』

『言い訳していいわけ！？』

『ま、待て！！』

『断罪！！！』

ギャーッ！！！？

マ「どうだ！！」

セ&コ「犯人お前か！！！！」

ズカーーンッ！！

マ「ヘブラハム・リンカーン！？」

チ「アメリカ第十六代大統領・・・」

正確には【アブラハム・リンカーン】だから注意してね」

作「・・・今、知恵理がいたような。」

ま、いつか!!

さて次回は凧の復讐が始まります!!

いったい、凧はあの状態からどうやって回復するのか？

では、次回のこの時間に会いましょうー!!」

セ&コ「終わりなの!？」

追伸・日向は今も授業中の居眠りは止めてません。

松竹先生も日向を起こすのは諦めたようです。

・・・現在全治一カ月で入院してますがね

次回に続く!!

第35話 包み込む凧の魂（前書き）

すみません！一週間ぶりの投稿です！

そのかわり過去最長！

しかもいままでに比べられないほど長いです！

今回は凧の心の中を書いています。

はたして凧は再び戦うことはできるのか？

それではどうぞー！！

第35話 包み込む風の魂

日向side

「な、風……」

あまりの出来事に俺は目を見開く。

カゴの中にいる知恵理も同じような状況だ。

あの風が……いつもみんなを引っ張りガンガン進んでいく姉御肌の風が……

肩から血を出して倒れてしまっているのだ。

「う……そ……?」

口元を手で抑え、今にも泣きそうな知恵理……

その横で無表情のままで見つめる水城に俺は怒りを覚えた。

「水城!?!」

「……言うておくがあれは俺のせいじゃないからな……」

何・・・ふざけたこと・・・言つてやがる！

刹那が自分の意志で凧を殺すわけないだろ！

あの子は・・・あの子に・・・そんなことができるわけ・・・

パンツ！！

・・・乾いた音が部屋にこだまする。

それは空気から伝わり俺だけでなく、真備、輝喜、レリエルの動きを完全に止めさせた・・・

だけど、俺はその光景を信じられなかった。

・・・あの知恵理が、水城の頬をひっぱいたのだ・・・

「・・・何を言ってるのよ、あなた？」

・・・あなたは、純粹なあの子の、刹那の心を惑わして・・・私の親友を・・・傷つけたのよ！！

なのにあなたは自分が関係ないですって？

ふざけないで!!!

あんな二人を見て何がおもしろいの？

私達で遊んで何がおもしろいの？

・・・私達をあなたの勝手なゲームに巻き込まないで!!!」

・・・知恵理の口から放たれる言葉の数々に俺はさらに驚きを見せた。

まず、知恵理が風や刹那のことを呼び捨てにしたのだ。

それだけで高らかと宣言した知恵理を凜々しくさせている。

さらに、言葉一つ一つに含まれる重圧・・・

もしかしたら俺は初めて知恵理が激怒した姿を見たのかもしれない。

「・・・俺は事実を述べたまで・・・俺には関係ないことだ」

知恵理の言葉に動じることなくそう返してきた水城・・・

あくまでもしらをきるつもりらしい。

「……（ふるふる）」

悔しげに肩を震わしている知恵理に俺は何も言葉をかけられない。

……事実、証拠がない状態の今では何も言い返せないのだ。

「う……う……う……」

下から聞こえてくる刹那のすすり泣く声。

女の子の強い部分と弱い部分を同時に見ているように感じた。

……そのとき。

パチンツ！ シュンツ！

指を鳴らす音、それに伴って聞こえてくる空気を斬るような音……

そして、その音はこちらに迫り、知恵理が閉じこめられているカゴに掴まる水城の手に向かう。

水城はその音の主が自身の腕に当たる前にカゴから手を離して二つの部屋を隔てる壁の上に降り立った。

ダンッ!!

音の正体・・・レリエルの光の矢は知恵理の入っている鳥かこの棒の一本に刺さる。

「・・・何のつもりだ、レリエル？」

水城がさっきよりも近くになったレリエルを睨みつける。

対してレリエルは水城の視線をサラリとかわす。

「すみません、ちょっと手が滑りました」

白々しく簡潔的な言葉に俺は心から感謝した。

知恵理も半泣きになりつつも何とかレリエルを見つめている。

そんな知恵理の姿にはさっきまでの凜々しさは感じられない・・・

いつもの弱々しく繊細な女の子だった。

風side

「あなた、何のようよ？」

あたしはこみ上げる怒りを抑えながら楓に問う。

無風のこの暗闇の中は何か居心地が悪い。

たぶん、あたしが風的能力者だからだろう。

そして、あたしの目の前にいる金髪の美女……

見た目は十代後半に見えるが実際は何百年も生きている大妖怪【九尾】である。

そして、あたしを生まれてからずっと苦しませ続けた存在……

でも、何で今、出てきたのよ？

あたしの疑心暗鬼な視線に楓はニツコリと……本当に笑顔で笑いかけてきた。

「わたくしは羽前家の守護妖ですよ？」

あなた様のピンチに駆けつけるのは当たり前です」

自分の胸に軽く手を当てながら大人の表情を見せる楓にあたしは何も言い返せない……

その雰囲気はおしとやか……知恵理によく似た雰囲気だったから

さらにあたしは言葉を吐けない。

「でも、すみません。」

わたくしはまだ表立って動けませんので今回はあなたへの助言という形になります」

・ 申し訳なさそうに語る楓はその見事な金色の髪をなびかせながら・

あれ？おかしいわね・・・

何か楓の様子がおかしいような？

髪がなびいてる？

ちょっと待って！ここって無風でしょ！！

なんで髪が・・・しかも楓の髪だけがなびいてるのよ！！

「ちょっと！楓！..！」

「はい、なんでしょっ..？」

「なんであんたの髪はなびいてんのよ！」

今、あたしが見てる夢の中は風なんて吹いてないわよ！

なんのトリックよ！！」

あたしの叫び声に一瞬キョトンとした顔になった楓だったが、また、たおやかな笑顔を取り戻すとさつきよりも優しい声を出した。

「よく、お気づきになりました。

さすがは羽前の血をひいておられますね」

そう言うと楓はクルリと一回転・・・

九本の尻尾がある狐、九尾の姿へとなった。

「な、何よ？」

まじまじと見つめられる九尾の目にあたしは身じろぐ。

だけど、九尾はあたしの態度に関係なく話始めた。

「まず、ここは夢の世界ではありません」

その言葉はあたしにとってみれば驚きの一言だった。

「はぁ！？こんな嫌な空間が夢じゃないって言うんならいいこと
は何なのよ！！」

あたしにとって夢とは嫌な空間というのが定義になっている。

予知夢で見せられる悪夢・・・その全てがまさに嫌な空間だったの
がその理由だ。

・・・だけど、九尾の次の言葉を聞いたとき、あたしはあたし自身
を嫌悪したくなる衝動に駆けられた。

「・・・ここは、あなたの魂の中です」

・・・

あたしは固まってしまった。

だけど、あたしはすぐに悟ったのだ。

あたしの魂がどうしてこんな寂れているのかを・・・

魂？・・・なるほど、そういうことね。

「暗く閉じこもった人間の魂は暗く閉じこもっているということね・・・」

いままであたしが歩んできた経緯、そして、今のあたしがどのような状態かを考えればすぐにわかった。

・・・あたしはひねくれ者なのだ。

真備や日向、知恵理に輝喜の優しさに甘え、あたし自身からはみんなに何もしてない最低な女。

あゝあ、あたしなんかになんでみんな仲良くしてくれるのかしらね・・・

泣けてくるわ・・・

あたしの瞳は決壊寸前。

刹那、あんたがあたしを狂わせる必要性なんてなかったわ・・・

あたしはすでに狂ってるのよ。

あたしがそう結論づけたとき、九尾は長い間（と言っても数秒）閉ざしていた瞳と唇を同時に開けた。

「ここが、暗いのはあなたの魂が今、体から離れているからです」

「え？」

「魂とは能力・・・」

わたくしは今あなたの体から話しかけているのですよ？

・・・あなたが昨夜いたあの草原があなたの心。

あなたがわたくしが本当にいる場所を探り当てたらあなたの道は開けると思います・・・」

「・・・どういうことよ？」

「わたくしを探すことでああなたが新しい力を手に入れるということです」

今度は九尾の全身にまとわれている金色の毛が全てなびき動いた。

彼女の毛がキラキラと輝く姿はとても綺麗だと思っわ・・・

「あたしはどうすればいいのよ？」

「簡単なことです」

すると九尾は再び一回転、金髪の美女である楓の姿になりニッコリと微笑んむ。

すると、今の今まで真っ暗だった空間が少しだけ・・・明るくなった。

はじめは何があったのか分からなかったけど、よく周りを見渡してみるとある一点から光が溢れていることがわかり、そっちをあたしは凝視する。

・・・まるで薄目で周りを見たようにかすんだ光の先、彼女がいた。

「・・・刹那」

光の先には両手を顔全体にかけて崩れ落ちている刹那の姿・・・

泣いてんの、あんた？

あたしはすすり泣く刹那の姿に見入ってしまう。

彼女が泣いている理由はおそらく・・・

いや、確実にあたしだ。

あの子は確かにキレたら怖く恐ろしい子になってしまっていた。

【昨日の姿からもそれは分かる・・・あのときのあの子はまさしく
戦闘狂】だった。

でも、だからといってあの子は異端な存在じゃないわ。

あの子だって普通に喜んで、悲しんで、笑って、楽しんで・・・
・普通に泣いてるのだと思う。

あたしは鳴きながらあたしの名前を片言に口に出している刹那を見ながらそんな当たり前のことを考えていた。そして、あたしはある感情が沸き上がってくる。

今、現在進行形で知恵理に感じている感情・・・

そして、あたしが今最も強くなっている感情だ。

・・・そっか、あたしは刹那を助けたいんだ。

その瞬間、辺りは再び真つ暗な暗闇に逆戻りした。

「あなた様の答えを聞かせてください」

そして、楓の声にあたしの気持ちも逆戻りした・・・

だけど、あたしの中では新しい気持ちを芽生えさせていた。

楓に対する気持ちはこの際無視していくわ。今あたしがやらなければいけないことは・・・

「さっきのあなたの言葉の意味はまださっぱり理解できていないけど・・・

気持ちの変化は大きいと思うわ。

気持ち一つで考える力が変わるのよ!」

「・・・では新しい考えとは?」

そんなこと、決まってるでしょ!!」

「あたしは刹那を助け出す!

たとえ、刹那がそれを望まなくてもあたしは刹那の心を開いてみせるわ!!!

だから、あんたの言葉、必ず解いてみせるわ!!!」

あたしはまさしく、ドドーンという擬音がでるような感じで楓を指差した。

そう、あたしを止めることはもう出来ないわよ!

それが恨み続けるあんただとしても・・・あたしはあをたを無視して進み続けるわ!!!

「・・・くすっ」

なっ!?

「あ、あんた今笑ったわね!？」

「・・・いえ」

「嘘おっしやい!今【くすっ】って笑ったじゃない!」

「自意識過剰ではありませんか?」

ムカツ！？

ていうか、あんたキャラ変わってない！？

「あ、あんたね、何かんが！」「あなた様はわかっておられましたね」「え・・・てん・・・のよ？」

あたしの言葉を遮り楓はそう言った。

・・・分かってるって何をよ？

「ちょ、ちょっと待ってよ、あたしはあんたの言葉を何にも分かってないわよ？」

「・・・はい、確かにあなた様は何もわかってませんね・・・」

・・・あんた、さっきと言ってること矛盾してるわよ？

どつゆつことよ？

「ただし・・・」

「？」

「あなた様の頭の中ではですが・・・」

そう言うと楓はまたクスクスと笑い出した。

なんかムカつくけど自然とその笑顔があたしを安心させていた。

・・・不覚にもね。

「頭で分かってないんならあたしは何にも分かってないんじゃないの？」

「・・・いえ、あなた様は分かっております」

やっぱり矛盾してるんじゃない？

「どつゆうことよ？」

「・・・あなた様は今朝何を言っておられたか覚えていらっしゃいますか？」

・・・今朝のことって、何かあったかしら？

今朝は思い出したくもないことはあったから忘れられないけど・・・

あたしは途中から自暴自棄になってたからそんな喋ってなかったと思っわよ？

・・・だめ、思い出せないわ。

「その表情はどうやら覚えてないようですね」

「・・・悪かったわね」

そのニコニコとした顔が今はとても恨ましく見えるわ・・・

「あなたはこう言いました・・・自分は空っぽだと・・・」

「！」

そ、そういえばそんなこと言った・・・いや、言葉には出してなかったから思ったか・・・

でも、確かにあたしは確かにそんなこと言ったわね・・・

だからといって、それがどつかしたのかしら？

「魂は心・・・これは魂狩^{ソウルテイカー}は人の心。

つまり、人の性質と同じ意味であることをあらわします」

「・・・性質？」

「あら？あなた様は彼らの性質を知っておられるはずですが？」

すると再び辺りは明るさを取り戻した。

・・・だけど、光の発信源は今度は4つある。

その中にはあたしの誇る4人の親友達が揃っていた。

「あなた様は彼らについても述べていたはずですよ？」

・・・あっ！

「まさか!?!」

「そうです。

知恵理様は【優麗な輝き】

輝喜様は【屈強な意志】

真備様は【純粹な心】

あなた様はよく分かっていらっしやいますね」

た、確かにあの三人のことはそれで間違いないわよ。

でも、それだったらあたしは・・・

「あなた様は空っぽ・・・確かにその通りです。

・・・でも、だからこそあなた様のが持てている性質があるのです」

空っぽのあたしにしか持てない性質？

「あなた様はその空っぽの心の中に包み込めることができます。

あなた様はその空っぽの心に学んだ知識を詰め込むことができます。

・・・あなた様はその空っぽの心に全てを受け入れることができますよ」

「そ、それがどうかしたのよ・・・？」

あたしのその言葉、そしてあたしの疑心暗鬼な態度に楓はここにきて初めてニコニコとした顔を止め、あきれた様子でため息をついた。

「はあく……あなた様はまだお分かりにならないのですか？」

「……生憎、あたしは日向みたいな天才じゃないからね」

憎まれ口を叩くあたしに楓は再び深いため息をこぼす。

（あなた様は5人の中で唯一、日向様と同等の学力をお持ちでしょう……）

楓が心の中でそう思ったのは内緒だ。

「……まあ、いいです。」

ようするにあなた様は他の皆様方同様、性質をお持ちになっている
ということですよ」

「あ、あたしの性質？」

「ええ、あなた様の性質、それは……」

全てを優しく包み込むことのできる【寛大な包容力】

これが、あなたが本能的に感じ取っている性質です

・・・包容力、ねえ。

あたしにそんなものがあるのかしら？

「あなた様には確かに包容力はありますよ」

「心を読むな!？」

「・・・先ほどまでのあなたの行動が全てを示しております」

「そして無視するな!これじゃまるで【ニコニコ眼帯】や【雪女】の扱いみたいじゃない!？」

凧はどうかやらあまりに早く話が先に進みすぎて頭がパニックしているようにすね。

某ラジオ放送のペンネームでツッコミ担当の二人を言っていますが、これは本編なので気にしないでください

「・・・あなた様がそれを認めようが認めまいが、あなた様の心の性質は【寛大な包容力】なのです。

・・・でも、認めてくださらないとあなた様は魂狩の真の力は使えません」

「真の力？」 冷静になった。

真の力・・・真の力ってまさか！！

あたしの考えは楓の言葉で確信となった。

「チューニング
協調です」

あたしはその言葉に耳を疑うと同時に喜びを感じたわ。

今朝は協調ができないがために水城に相手にすらされなかった・・・

あたしのプライドはズタズタにされたのよ。

・・・いえ、そんなの関係さいわ。

今のあたしは知恵理を助きたい・・・そして、刹那を助きたい！！

そのあたしにとってその言葉はまさしく天からの贈り物なのだ！

「楓、あたしはどっしたら協調ができるのよ？」

「・・・わたくしは言いましたよ。」

あなたが認めれば自ずと道は開かれます。

真備様は自分で自分の性質を見抜いていらっしゃるからいきなり協調ができたのです。

双子の姉でいらっしやるあなた様ならきつとできます!..!」

いままでにならないほど力説する楓に今だけは感謝だ。

あたしは自分の今までの行動を見直してみる・・・

そうすれば自分の性質を認とめることができると思ったからだわ。

1075

回想する。

昨日の昼間・・・あたしは転校したての悶を【街】で助けた。

悶のことを放っておけなかったから・・・

回想する。

昨日の夜・・・あたしはいきなり襲ってきた刹那を許した。

刹那が本当はあたし達を襲おうとしてなかったから・・・

回想する。

数時間前・・・あたしは真備を傷つけたデモンを許した。

デモンが本当は悪い人間じゃないって知ったから・・・

回想する。

今・・・あたしはあたしを殺そうとした刹那を助けたいと思っている。

・・・あの子の涙を見たから・・・

ははは！あたしの行動、よくよく考えてみればみ〜んな楓が言った通り全てを許そうとしてんじゃない！！

あ〜あ・・・なんであたし今まで独りでシリアスぶってたんだらう？

あたしは今のあたしそのままでもいいってことね！！

「正解です！風！！」

楓の賞賛の言葉、それと同時に今まであたしの目の前にあった真っ暗闇な空間は嘘だったように明るさを取り戻した。

・・・その風景はまさしく昨日の夜、気絶したときに見た一面が風を受け入れているように優しく草がなびいついる温かい草原だ。

その風を全身に浴びながらあたしは草原の真ん中で楓と向かい合っていたわ。

スー・・・

風があたしの髪を攫う・・・

だけど、あたしには気持ちがいい風だった。

「……気持ちいいわね」

「……ええ、そうですね、風」

あたしはこのとき生まれて初めて自分の心の暖かさを感じたわ。

自分を戒めていたくさびの一つが外れたのだ。

「さあ、あなた様はわたくしの問いに見事お答えになりました。

……現実に……夢の世界からお目覚めください。

そして……知恵理様と刹那様をお助けください」

ニコニコと楽しそうに笑う楓はあたしの目の前まで歩いてくるとあたしの頬を撫でた。

……憎き相手である九尾、だけど、この姿であるときはなぜか憎めないあたしがいたのだ。

あたしはおとなしく肌を撫でられながら楓の顔を見上げる。

彼女の顔は……優しくかった。

「目覚の時間です。あなた様のごぶうんをお祈りいたします」

だからなのか・・・あたしは素直になれたのだった。

「ありがとう、楓・・・あたし、必ず二人を助けるわ・・・」

あたしは楓のニコニコとした笑顔を見ながら視界をブラックアウトしたのであった・・・

刹那 side

「・・・ぐす・・・風・・・」

涙は・・・いくら拭いても溢れてきた。

それだけ、俺の中での風の存在はそれだけ大きかったのだ。

この世界に来て三カ月、俺が出会った人間の中であれほど俺を暖かくした人間はいなかった・・・

だけど・・・

この手であたしは風を倒したのだ。

と、そのときだった！

ドゴーンッ！！！

俺とレリエルの部屋を分け隔てている壁がその轟音と共に一瞬で崩れたのだ。

「な、なんだ!?!」

「ナギねえ〜〜！！！！」

俺の疑問の言葉を全てぶっ飛ばすような大声が部屋中に響き渡る。

驚きで崩れた壁のほうを振り返った俺が見たのは……

「はあ、はあ、はあ……ナギねえ……」

壁が崩れ去ったことにより巻き起こったホコリの中に立つ真備だった。

・・・いったいどうやってあの壁に穴を開けたんだ？

俺がそんな疑問を持ったそのとき・・・

フー・・・

頬を暖かな風が撫でる。

・・・その風はまるで麻薬・・・気をつけないと飲み込まれそうだ。

だが、それはありえない話だった。

だって、ここは部屋の中なのだ・・・

しかし、俺の確信は崩れ去る、なぜなら・・・

「うっさいわね！馬鹿弟！！」

真備 side

「水城・・・今の話は本当か？」

俺は肩を震わせながら水城に問いかける。

理由は分かっていた。

俺はあいつを許せないのだ・・・

「・・・お前には関係のない話だ」

サラッとふざけたことを言いやがる水城・・・

そうか、お前は俺にそんなに文殴られたいんだな？

・・・だったらお望みどおり・・・

葬ってやるよ!!!

「死ぬや〜!!!」

目の色を変えて俺は水城のいる壁に立ち向かう。

だが、俺はこのときある違和感を感じた。

なんというか・・・いつもよりとてつもなく速いのだ！

(速い!?)

頭が体に追いつけないほどに俺の体はとてつもないスピードで動く。

・・・だめだ!!ぶつかる!!?

「うお~~~~!!!!」

ぶつかると思った俺はとっさに拳を振り上げる。

普通は両手を前に出すところだが、俺の場合は向かってくる(向かってる?)物体を殴る殴ってしまう癖がついていた。

だから、俺はとっさに拳を構えてしまった・・・

(俺のバカ!!?あんな壁を俺がこんなスピードで殴ったら俺の拳が壊れちまう!!!!)

だけど、俺の思惑とは裏腹に俺の体はすでに壁寸前・・・

俺は腹をくくった。

(ヤケクソだ〜!!)

・・・自暴自棄になったともいう。

「うお〜!!!!」

覚悟を決めて俺は思いつきり壁をぶん殴る。

南無三!!

ドゴーンッ!!!!

・・・え!?

俺は予想外の音に耳を疑った。

ホコリが舞い上がり、前が見えない・・・だけど目の前が明るいか

ら状況は分かる。

・・・マジかよ。

そう、俺は壁を拳でぶち破ったのだ。

だが、俺はそれどころではない。

壁を破ったということはこの部屋には姉貴・・・いや、ナギねえがいる！

俺はとっさに叫んだ。

「ナギねえ～～！！！」

必死に声を荒げて叫ぶ俺にだったが未だに前はいつさい見えない。

ホコリを飛ばそうと手で仰ごうとした。

しかし・・・

な、なんだよこれ・・・息が上がってる？

俺はいつの間にか凄まじいくらい息を荒げていた。

「はあ、はあ、はあ・・・ナギねえ・・・」

それでも俺はナギねえの名前を呼ぶ。

たった一人の姉なんだ。

奪われたくない。

その言葉だけを支えに俺はナギねえの名前をひたすらに呼んだ。

が、そのときだった。

フー・・・

風が吹いた。

しかもただの風じゃない・・・

どこか暖かく、とても気持ちのいい風だ。

その風は俺の周りに漂っていたホコリを全てかっさらうと部屋の端へと消えていった・・・

「うっさいわね！馬鹿弟！！」

そして、部屋中に聞こえるくらいの大声……

間違いない！！

俺は声の出どころを見え探すために見回す……いた！

雪が降り積もっている部屋、その真ん中あたりで鉄扇を構えている少女。

まさしく我が親愛なる姉だった！

「あたしをなめんじゃないわよ！！！」

彼女、ナギねえが叫ぶ姿はとても勇ましかった。

第35話 包み込む凧の魂（後書き）

ナ「今回はあたしが大活躍ね!!」

チ「そうだね、ナギちゃんカッコ良かったよ」

ナ「ふふふん まあね」

作「確かに今回は凧が主役なんですけどね、でも実はみんながサラッと活躍したり意味深なことしたりしてるんですよ!」

チ「そうなんですか?」

作「ええ、知恵理は心の強さを見せてるでしょ?」

ナ「確かにあの強気な発言はカッコ良かったわ!」

チ「あ、ありがとう!」

作「知恵理には今後も意志の強さを書いていくからよろしくね」

チ「は、はい!」

ナ「・・・作者、あんたが つけるとキモイわよ・・・?」

作「ぐさっ!」

そのまま作者は緑色の槍を刺さらせたまま崩れ落ちた。

チ「ナギちゃん？」

ナ「ま、気にしなさんな〜!!」

チ「で、でも……」

セ「よう！何してんだ？」

チ「あ！セツちゃん!!」

ナ「あら、泣き虫の刹那ちゃん、どちたのかな〜（笑）」

セ「……喧嘩売ってんのか風？」

ナ「そんなことないわ、ただ……」

チ&セ「ただ？」

ナ「あんたの神経逆なでしたっけ」

セ「……殺す」

チ「二人とも笑顔だけど怖いよ……」

作者復活!!!???

作「そっぴゃ刹那な意味深なこと考えてたよな〜?」

ナ&セ「邪魔すんな!」

ブンツ!!

作「甘い!!!」

マ「へ?」

ドカーーンツ!!!

マ「ぎよえ〜!!!?!」

レ「……なぜですか?」

チ「あ!レリエルさんお久しぶりです」

レ「ああ、久しぶり」

作「あ、危なかった〜」

レ「だからといって真備を楯にしないでくださいよ……」

作「ま!真備だし問題ないっしょ!!!」

レ「おいおい・・・」

チ「はははは、ところでナギちゃんとセツちゃんは？」

作「現在【ストートファター】の真似事してるぞ」

『昇竜拳！！』

『甘いわよ！マサンコウサツポウ！！』

『おい尻！それは【ドラゴンボール】の技だろ！？』

『勝ちやいいのよ勝ちや！！』

作「・・・ま、気にしないようにしましょう」

レ「問題発言が何個ありましたけどどね」

チ「二人共怖いよ・・・」

ちなみに尻と刹那の出番は終わりです

ん？真備？

何それ、食えんの？

作「ところでレリエルはなんであそこで知恵理を助けたのですか？」

レ「乙女の秘密です」

チ「え〜！レリエルさん女の子だったんですか！？」

作「・・・ツツコミところそこじゃないから」

レ「でも、あと少しすれば分かりますよ」

チ「そうなんですか？」

レ「そうなんです！」

作「まあ、今回はここまでにしときましよう。

さて次回はついに凧が協調します。

さらに凧の魂狩の特性も登場！！

そして、刹那との決着がつく！！???

・・・かもしれません。

では、次回のこの時間に会いましょうー」

『ゴムのピトル…!』

『刹那!【ワピース】は反則よ!?!?』

作「・・・じゃないといろいろな意味で終わってしまっ

チ&レ」そうですね」

次回に続く!!

第36話 幻影の風声鶴唳（前書き）

タイトルの名前読めましたか？

タイトルの答えは作品の中にあるのでお楽しみに！！

問題 nothingだ！！

第36話 幻影の風声鶴唳

水城 side

・・・やはり羽前の姫というわけだな。

下にいた刹那、レリエル、そして真備の三人は気付いてないようだが、上にいる俺達にははっきりと見えていた。

凧が風神で力強く扇いだ瞬間に真備を囲んでいたホコリを全て攫ったところをだ。

・・・だが、これも計画通りである。

そもそも羽前の姫ともあろう女があ程度の力なわけがない。

いや、もしかしたら楓のやつが手を貸したのかもな・・・

でも、とにかく。

「……俺の出番はなかったということだ」

羽前家は昔から質のいい能力者を出している名家……当然か。

凧side

「協調……お前、いつの間に？」

「……刹那？あたしを誰だと思ってるの？」

羽前凧、羽前家の姫、羽前凧よ！！

「このくらいとーぜんだわ！！」

ピシッと指を刹那に突きつけてやる。

そうよ、あたしは羽前凧、駄目な当主になる馬鹿弟のサポートをしなくちゃいけない哀れな姫なの！！

このくらいのこと音なんてあげてらんないのよ！！

「来なさい刹那！あんたにあんたのやっていることがどれだけバカでマヌケなことかを教えてあげるわ！！！」

そして、あんたを支配してるあの男の魂をこなごなに砕いてやる！

あの忌々しい男・・・時雨水城を断罪する！

砕け散った壁の上で無表情にあたし達を見下ろしている水城を睨みつける。

水城のほうもあたしが睨みつけているのを確認するとあたしと目線を合わせてきた。

・・・その目、なんかムカつくわね。

「じよ、上等だ風！！もう一度真っ赤な血の味のかき氷を地面の雪で作ってやるよ！！！」

「あいにくとあたしはかき氷嫌いなよね、泣き虫の刹那ちゃん」

からかい口調のあたしに刹那はうるたえた。

ふふふ、可愛いわね。

「ば、バカ！なんで知ってたんだよ！？」

「馬鹿弟！あんた邪魔だからどいて！！」

「無視すんなー！！」

生憎とあんたは本編でもラジオでも弄られるツッコミって立場なの。

残念

「でも、ナギねえ・・・」

「心配いらないわよ馬鹿弟！！あたしは羽前凧なのよ！！」

まったく心配性ね、真備は・・・

ま、そんなところがあんなのいいところなんだけどね。

「あたしはさっきまでとは違うのよ、あんたは黙って見てなさい」
ウインク（）」

「いや、でも……」

「お前の負けだよ真備」

さらに何か言おうとする真備にあたしにとって助け舟が上から訪れた。

ナイスタイミング

「なぜだ日向!？」

「そのくらいにしないと尻に折檻されるといふことだよ」

さすが我が親友、よく分かってんじやない

「でも、ナギねえは怪我してんだぞ!？」

「……それでもお前を仕留めるくらいできそつだぞ?」

「……確かに」

「……ねえ、それどつゆつ」とよ?」

それじゃまるであたしがいつも真備を折檻してるみたいじゃない？

・・・まあ、いいわ。

「とりあえずあなたは邪魔なの！！」

ブン・・・

あたしは手に持つ風神で真備に向かって軽く扇ぎ、風を送った。

軽く扇いだことにより優しく吹く風は物の見事に真備の体を攫う。

「わ！わ！わ！？」

「あなたはそっちの部屋でおとなしくしてなさい」

ブンッ！！

再び風神を・・・今度は強めに扇ぐと発生した風は浮かんでる真備を確実に捕らえて向こうの部屋に押し戻した。

ドサッ！！

・・・降ろし方、ちょっと雑すぎたかな？

「・・・雑な降ろし方だな・・・」

あたしと同じことを考えていたのか、刹那がそんなことを呟く。

でも、気にしたら負けよ。

「さあ、改めてやるわよ刹那！！」

あんたを絶対助け出してやるんだからね！！

刹那 side

「さあ、改めてやるわよ刹那！！」

「やれるもんならやってみる！！」

凧の戦いの合図と一緒に駆け出す俺。

だけど、内心ではかなり複雑な心情に俺は陥っていた。

キンッ！

雪化粧が風神と交わる。

ただどさつきまでとは攻撃の重みが違う！

なんてっ たって協調ができるA級能力者とできないB級能力者とは戦闘力は……

天と地の差があるんだよ。

そして、ここで一番の問題だ。

確かに俺は魂狩の性質の一つである【特性】を操ることができる。

もともと【特性】は協調ができる能力者にのみ使える性質……つまりはA級能力者以上にしか使えない力だ。

でも、俺は特異な存在……協調もできずに【特性】が使える……

・・・回りくどいのは止めよう。

つまり・・・

俺は【B級能力者】ということだ。

そして、今、協調を使えるようになった風は【A級能力者】ということになる。

立場逆転ということだ。

「刹那！あたしの風には気をつけなさいよ！」

「何意味わかんないこと言っただよよ！？」

「ふふふ、それはじつじつとよよ……」

怪しい笑みを浮かべた風は風神を扇ぐ。

風に注意しろってどういうことなんだよ!?

スー……

風が扇いで巻き起こった風が俺の全身を包み込んだ。

だけど、それだけ。

風の風が通り過ぎて俺の体には何も変化は起きなかった。

「……どういつつもりだ？」

射すように俺は風を睨みつける。

対して風はなぜかすっとんきょんな顔を俺に向けていた。

「あら？なんで刹那が無傷なの？」

「……俺が知るかよ……第一にお前は何がやりたかったんだ？」

「……いや、カマイタチってあるでしょ？」

あれみたいに鋭い風があんたの体に突き刺さるかな？・・・て思っ
て」

「・・・で、何も起こらなかつたわけだ」

凧のやりたいことは分かつたし理解もできた。

カマイタチとは突如として鎌で斬つたような傷が現れる現象だ。

その原因はおそらく風だと思つし、実質そうなんだと思つ。

・・・でも、凧が起こした風では俺の体は傷一つつかなかつた。

これが意味していること、それは・・・

「あたしつたらまだ協調の扱いになれてないわね」

「自分で言つたいうことは自覚があるようだな」

そう、凧はまだ魂狩を完全には掌握しきれてないのだ!!

これは大チャンスだ!!

凧が完全に協調を使いきれようようになる前に………倒す!!

「確実にしとめてやる!!」

そう言った俺は微妙に凧の血が滲んでいる羽衣……雪化粧を全身に巻きつけた。

今度こそは雪化粧を染め上げる血染めの材料にしてやるからな!!

「まずい!あの構えは!!」

「え?何ヒナ君!」

日向と知恵理の声……でもすでに手遅れだ!

俺がこの大勢に入ったら準備万端の合図ということなんだぜ！！

「来るなら来なさいよ刹那！！」

凧が最後の悪あがきという感じで風神を扇ぎ風を送ってくる。

だが、その風は一筋としてカマイタチのように鋭い風とはならないで優しいまま俺の全身に降り注いだ。

・・・再び俺の勝ちだ！

凧がこの技を防ぐことはほぼ不可能！

俺は勝利を確信した。

「いくぜ！【静寂の雪・風花】！！」

巻き上げた雪化粧が激しく光りだしたと思わせた次の瞬間・・・

俺は姿を消したのであった。

日向side

「風のやついったいどういつつもりなんだよ？」

さっき真備が二つの部屋の境目になっている壁を破壊してくれたおかげで俺は風と刹那の戦闘を見ることができた。

だけど、さっきから風の様子がおかしい。

しかし、それは些細な違和感だ。

おそらくレリエルや水城、それに刹那も気付いてないと思うほどの違いだ。

でも、俺達には分かる。

凧の言動、行動、そして戦闘スタイル全てに対して違和感があるのだ。

「ヒナ君」

「なんだ、知恵理？」

「ナギちゃんの様子少しおかしくない？」

「・・・やっぱり知恵理もそう思うか？」

俺達の中で一番鈍い知恵理ですら気付いているんだ。

真備や輝喜が気付いてないはずがない。

・・・いったい何なんだ？この違和感は？

俺が思考の無限ループに入りかけていたそのとき・・・刹那が動いた。

「確実にしとめてやる!！」

何かを悟ったような刹那の眼差し……

まさか、風の違和感に気付いたのか？

いや、そんなはずはない……なんといっても風のあの違いは長年連れ添った俺達がやっとこさ気付けるほどの違いだ。

……ということはやつはいつたい何を悟ったんだ？

シユルシユル……

そのとき聞き慣れない音が俺達の耳に入ってくる。

……違う、正確にはつい最近まで聞き慣れなてなかった音だ。

何か布が擦れるような……この意外にも不快に感じる音……

間違いなかった!!

「まずい!あの構えは!」

「え？何ヒナ君！？」

知恵理は何が何だかわからないという顔で俺のほうを向く。

ただでさえ喧嘩慣れしていない知恵理ではさっき微妙に見えただけの構えで技を見抜くのは無理だった。

刹那はまるで勝ち誇ったような顔で凧を見つめている。

その顔はさっきまで泣いていたか弱い女の子のイメージは一切なく、ただ純粹に獲物を捕らえた肉食獣のような目だ。そしてこの部屋にいるもう一人の少女、凧……

凧はまるで表情が掴めない。

いや、水城のように無表情というわけじゃないんだ。

ただ、今の凧の表情……それが、

ゲームで遊んでいるときのような楽しげな表情になっていた。

「ヒナ君、ナギちゃんのあの顔っていつもゲームで勝ったときの顔だよな？」

「・・・そうだな、あの顔を見たときは必ず俺はゲームで負けている。」

「・・・たとえば、ライフが満タンでもあの顔をした風には一撃でやられてしまうんだ」

だから、あの顔をした風のことを俺達は敬意を持ってこう呼んだ。

【名策士・羽前風】と。

「来るなら来なさいよ刹那!!」

風はあの楽しげな笑顔を一切崩すことなく風神で扇いで風を巻き起こす。

しかし、風が巻き起こした風は刹那に傷一つつけることなくただ刹那の水色の長髪をなびかせるばかりだった。

・・・さっきのカマイタチの未遂といい、今の風といい風のやつい

つたい何考えてやがんだよ！

あいつらしくもない・・・風、お前は俺やレリエルと同じタイプの人間なんだ！

頭を使った戦闘を得意とする知略家だ！

なのになぜお前はそんなマヌケな行動を・・・

お前は何考えてんだよ？

刹那があの技を使ったら十中八九勝てないことは分かっているはずなのに・・・

なぜなんだ？

「いくぜ！【静寂の雪・風花】！！」

そして刹那は俺達の視界から姿を消したのであった……

刹那 side

……おかしい？

俺はたった今、目の前で起こっている現象に首を傾げるばかりだった。

現在の俺の状況、羽衣に包まれて姿を隠している状況だ。

しかもただ隠しているだけではない。

殺気、気配、足音でさえも俺はかき消している状況だった。

だけど！

しかし！

それでも！

どうしても！

凧に攻撃が当たらないのだ！！??

さっきから俺は隠れた状態から何度も凧に攻撃を仕掛けていた。

ただし凧に攻撃する瞬間は必ず姿を現さなければならぬ。

なぜなら雪化粧で攻撃しなければいけないから体に雪化粧を巻いたまま……つまり、姿を隠したまま攻撃できないのだ。

……でも、俺がいくら凧の死角をついても、凧は俺が姿を現す場所を確実に探り当てている。

俺の攻撃が全て見限られているのだ。

シュルシュル！！

「はあ〜〜!!!」

キンツ!!!

今は俺が凧の目の前で少し屈んだ状態で【風花】を解除、凧に飛びかかったのに凧はいとも簡単に俺の攻撃を弾き返しやがった。

そして、俺が雪化粧を使って完全に消える前に一振り風神で俺に風を送って終わり。

さっきからこの動作の繰り返しだ。

・・・いったいどうなっていやがんだよ!

俺の居場所は完全に分かってないはず・・・なのに凧はなんで俺が攻撃する場所を完全に当ててやがる!?

本当に何が起こってるんだ!?!?

俺は頭をフル回転させて状況を考えるがまったくわからなかった。

だけど、何だか風の手の平の上で踊らされている……

そう思っってはばからなかった。

「お困りではありませんか？刹那さん？」

凧が話しかけてきたのはそのときだった。

しかし、【風花】は姿を消す技……不本意に言葉を出して凧に場所を知られるわけにはいかいのだ。

だから、俺は凧の言葉を軽く無視して凧の近くに身構える。

「……そっちが無視するならこっちが勝手に喋るわよ、刹那」

ここからは種明かしということか？

……なめやがって。

「まず最初に謝るわ・・・あたしの今までの言動はほぼ嘘なの」

なっ!？

「あたしは魂狩の性質の一つ、【チューニング協調】を使いこなせるわよ。カマイタチみたいな殺傷能力を持った風は生憎とあたしの守備範囲外だったけどね」

どういうことなんだ？

「つまりはね・・・あたしの風神は攻撃用じゃなかったのよ!」

スー・・・!

そう言うと風は風神を一振り、すぐに風が巻き起こり部屋全体に吹き渡った。

だが、しかし、部屋の中にいる総勢八名には何も起こらない。

もちろん隠れている自分にもだ。

「見つけ！」

俺が考え込んだそのとき、いつの間にか俺のいる場所の目の前にいた凧が俺の頭をかき撫でた。

「なっ!?!」

思わず声を出してしまう。

だが、それも無理なかった。

なぜならいままでこの技を破ったことがあるのは特殊な力があるレリエルだけだったからだ。

でも、凧は俺の位置を簡単に……しかも、正確に当てたのである。

俺は最早隠れている意味がなくなったので体に巻きつけた雪化粧を剥がす。

シュルシュル……

布が擦れる音と一緒に俺は姿を現したのであった……

風side

「……どうしてわかったんだよ？」

姿を現した刹那はまるで拗ねた幼子のような顔をしていた。

この姿はあれね、イタズラがバレた後の子供みたいね。

本当、かわいいわ

「まず、あたしが協調を完全に掌握していて風を完全に操れるってことはわかったわよね？」

刹那はコクリと頷いた。

「……それで？どうして俺の居場所がわかったんだよ？」

「ふふふ・・・簡単な話よ、あんたは確かに姿、足音、気配、殺気、どれも消すことができるわよね？」

「・・・ああ」

「でも、それだけじゃたりないのよ・・・あたしはもう一つあるあんたが動いた証拠を捕らえてたのよ！」

「！」

鳩が豆鉄砲で撃たれたような顔ってまさにこんな顔かしら？

口をポカンと開かせて、目を見開いて・・・すごくマヌケに見えるわ。

「で、でも、今までもこの技は使ってきたけどそんな弱点はなかったような・・・」

「ええ、むしろこの技はほぼ完璧よ。まるで死角はないわ・・・だけど、その証拠はいつもくっきりと現れていたわ。何のことかわかる？」

「・・・ぜんぜん」

まあ、仕方ないわよね。

この弱点はあたしにしか分からないくらい分かりにくいもの……いや、実際、普通の人にはまったくわからないでしょうね。

これは、【風】の能力的であるあたしだからこそ分かる違い……

あたしが協調の完全掌握ができるようになったからこそ分かったことなのだ。

それは……

「あんたが動いたとき体が空気をきって発生した【風】よ」

「風？」

「そうよ、体は少し動かしただけでも微量の風を発生させるの。暑いときに手で扇ぐのがいい例でしょ？」

あたしはその微量の風を風神の力で察知していたということよ。だから、あたしはあんたの場所を正確に探り当てられたわけ」

最後にとびきりのウイंकをしてあたしは刹那への説明を終わらせ

た。

だけど、まだ話してないこともある。

むしろ、そっちのほう为本題だ。

・・・さて、いつになったら気付くのかしらね？

この戦いがすでに決着がついてるということに・・・

刹那 side

「つまり、もう【風花】はきかないということか・・・」

風の説明を聞いた俺はこの問題がどうしようもないことを知った。

長年の修行で俺は殺気、気配を完全に消す技術は身につけている。

でも、空気を震わせることなく移動する技術は持ち合わせてない。

つまり、もう風には【風花】はきかないということになるのだ。

「そういうことよあたしには【風花】はきかない・・・どうする刹那？」

「・・・どうするって言われても俺ができることはもう一つしかないじゃねーかよ」

そうだ。この俺にはあの技しかなかった。

だけど、【静寂の雪・風花】ができない今、できることはただ一つ！

正面突破だ！！！！

「ただ斬るのみ！」

俺はそう言つと雪化粧を構えなおした。

大丈夫、俺の格闘スキルは群を抜いて高いんだ。

必ず勝てる！！

「いくぜ！風！！！」

そして俺は風肉弾戦をするために立ち上がるうとした。

・・・でも、立ち上がれなかったのである。

カサカサ・・・

俺はその音を聞いた瞬間金縛りになってしまったのであった。

・・・そんなはずない。

頭の中でその言葉が何度もループする。

でも・・・頭ではそう考えても実際にその音は存在していた。

でも、なんで？

確かにこの洋館に初めて来たときは大量にいたけど・・・

あれは全部デモン特性【クラッシュ殺虫剤】で一匹残らず殲滅したはず！！

なのに！？どうして！？

恐怖のためか体はピクリとも動かない。

ましてや頭の中はオーバーヒート寸前だ。

「い、いや・・・」

虚ろな目をした俺の口から発せられる声はアリの声みたいに小さかった。

「・・・来たわね」

風の音がさっきよりかなり近くで聞こえるけど、今はそんなことが

まってられい。

迫り来る恐怖、ただそれを恐れていたのである。

カサカサ・・・カサカサ・・・

しかも、やってくるあれは一匹や二匹じゃない・・・無数だ。

「や、ややや、や、やめて・・・来ないで・・・」

「・・・どうした刹那？」

み、水城・・・お前は分からないのか？

あの・・・黒くて、テカテカしてて、醜い姿をした地球上で最も憎むべき存在が近くににいるけことが・・・

カサカサ・・・カサカサ・・・カサカサ・・・

辺りからどんどん俺に向かって迫ってくる。

・・・いや・・・やだ・・・やめて・・・近寄らないで・・・

俺は必死で悲願した。

・・・でも、やつらにはそんなこと関係なかったのである。

ブ~~~~ン

・・・高速で空気をきる音が俺の耳に入ってきたと感じたその瞬間
!?

ピトッ!!

・・・黒光りする物体Xは俺の足元に現れたのだった。

それを見たとき、俺は何か切れたように大声で叫んだ!!

「~~~~~~~~ゴキブリ~~~~~~~~!!???」

俺の大嫌いなものランキング堂々一位である【ゴキブリ】が現れたのである。

知恵理 s i d e

私はいきなり動かなくなったセツちゃんが突然叫んだ言葉に呆然となってしまいました。

いきなり座り込んだと思ったらいきなり【ゴキブリ】とさげんだからです。

「ヒナ君・・・セツちゃんが何ていったかわかった？」

「・・・信じたくない気持ちもわかるけど、刹那は確かに【ゴキブリ】と叫んだぞ」

はははは、やっぱり間違ってたんだ。

でも、なんでいきなりそんなこと叫んだのかな・・・？

だって・・・

セツちゃんの周りにはゴキブリなんて一匹もないんだよ？

「いったいどうしたんだ刹那のやつ？」

「うん・・・セツちゃん、何かに取り付かれたみたい・・・」

「・・・俺なら分かりますよご両人」

ここ数日で聞き慣れた無機質な声が私達の耳に入ってきました。

その声につられて下を見てみると・・・

座り込んで痛そうに背中をさすっているマキ君と・・・その隣で弓をしまつて壁の隙間からナギちゃんとセツちゃんの戦いを見ている・・・レリエルさんがいました。

「・・・レリエルさん？」

「ありがとうございます、知恵理・・・」

柔らかな口調を向けるレリエルさん・・・どうやら私がレリエルさんの本名を言わなかったことに対する御礼みたいですね。

「・・・何が分かった？」

「そうせかさないでください水城、今、説明します」その必要はないわよレリエル」・・・そうですか風？残念です」

レリエルさんの言葉を横から制したのはナギちゃんでした。

対してレリエルさんは少し残念そうにしています。

そんなに説明したかったんですか？

「まずあたしのさっきまでの行動・・・思い起こしてみなさい」

「行動・・・？」

「そうよ知恵理・・・ごめん、あなたには難しかったかもね」

む~~~~、ナギちゃんヒドいよ~~~~

まあ、実際分らないけど・・・

でも、あたしがむくれているうちに私達の中の一人が思い当たったようだった。

「・・・風おこしだな」

「・・・あなたに当てられるのは腑に落ちないけど、一応正解よ水城」

「・・・いいから早く話せ、羽前凧」

「・・・本当ム力つくわね」

はははは、水城さんってなんであんなにナギちゃんの神経逆撫でするのが得意なんだろう？

「ちっ！まあ、いいわ・・・あたしは刹那の攻撃を避けながら刹那に少しずつ風を送っていたのよ」

「ま、待て姉貴！なんで風を送ることで刹那があんな行動に出たんだ！？」

確かに、マキ君の言うとおりだね。

ナギちゃんが風を送るとセツちゃんが意味不明な行動をとるのは何か関係があるの？

「・・・！（日向）」

「・・・！（凧）」

「・・・！（輝喜）」

「あれ？どうしたの三人とも？」

「ち、知恵理は気づかないのか？」

「ヒナ君？」

「ええ、ビックリしたしたよ・・・」

「コウ君？」

「ビックリしたわゝ本当に！！」

「ナギちゃん？」

一人一人思い思いのことを言った私の親友達は三人で顔を見合わせると一斉に頷いた。

そして、みんなでマキ君を真剣な表情で見つめた。

「『マキ君』がまともなことを言った！？」

「お前ら失礼にもほどがあるぞ！！？」

うん、私もそう思うよマキ君・・・

否定はできないけど・・・

「あゝ面倒だからその話は終わりでもいいわ。」

「終わらせるな！姉貴！！」

「……いいから早く話せ」

若干あきれ口調の水城さんの言葉にマキ君は渋々と、ナギちゃんは当然といった感じで了承したのでした。

風side

「あたしが風を送り続けたにはある理由があったのよ」

……水城に言われたのが少し気に入らないけど確かにふざけすぎたわ。

ここからは真面目に話していきましょうか。

「理由ですか？」

輝喜の言葉にあたしは無言で頷く。

「まず、基本的にあたしの魂狩とあんたらの魂狩は違うのよ」

「……どういふことなのナギちゃん？」

「俺とお前の魂狩に違いなんてあるのか？」

「……上の二人が言うとおり見た目は他の魂狩と同じように武器の形をしてるわ……でもあたしの魂狩は殺傷には特化してないのよ」

「……つまり、ナギリンの魂狩は傷つけるための武器じゃないってことですか？」

「その通りよ輝喜！」

物わかりが早いから助かるわ、みんな。

「……うう、分からん」

分かってない馬鹿弟は無視しないと話が進まないからさっさと行くわよ。

「……それで、なぜ刹那が【ああ】なったんだ？」

「……いいわ水城、説明してあげる」

やっぱり、あの男は気に入らないわね……

「あれはあたしの風神の特性・・・【風声鶴唳^{ふうせいかくれい}】よ。日向なら分かるかしら？」

「どうなのヒナ君？」

「・・・分かん（涙）」

「・・・日向でも分かんないのね・・・まあ、いいわ。【風声鶴唳】
っていうのわね・・・」

【風声鶴唳】

おじけづいた人がちよつとしたことにも恐れおののくこと。

あたしの風は相手の恐怖するものの幻影を見せる力があるの。だから、多くの風を浴びた刹那は今恐怖の渦中にいるでしょうね」

あたしの魂狩、風神は殺傷するには優れてない。

その代わりに相手に幻覚を見せる能力があるってことよ。

「・・・ねえ、ナギちゃん」

「ん、何よ知恵理？」

「・・・セツちゃんはいつ解放されるの？」

「……あ!？」

そういえば刹那の存在を忘れてたわ……

でも無傷で刹那を倒すことができたから問題ないはずよ!

そして、あたしは刹那のほづを恐る恐る覗き見た……

「……ぐすっ、誰でも……ぐすっ、いいから……ぐすっ、助けてよ……」

そこには涙目で助けを求める最強に【きゃわいい】とびきりの美少女がいました。

「……ごめんね刹那、忘れてたわ」

「わ~~~~ん!~!~!」

あたしは学んだわ。

この攻撃が女の子にはきつすぎるといっしょと……

「泣きやんでよ」(涙)

第36話 幻影の風声鶴唳（後書き）

作「……」

チ「あの、作者さん？何も言わずに始めるのはどうかと……」

作「……」

マ「おーい、いったいどうしたんだよ？」

チ「作者さん熱でもあるのかな？」

マ「さあ……壊れたんじゃないか？」

知恵理と真備は作者を覗き見た。

作「……」

チ&マ（こわっ！？）

チ「さ、作者さん本当にどうしたんですか！？」

マ「まさか本当に壊れたのか！？ついに壊れたのか！？」

作「……ふふふ、暑中見舞い申し上げます（ニヤニヤ）」

チ&マ「訳わからないよ（んね）……！？」

作「風の出番は今後どんどん減らすよ」ニヤニヤ「

チ&マ「自殺行為だ（よ）〜〜!？」

ヒョンヒョン・・・ドカツ!!？

作「阿部氏ツ!？」

マ「そら見る、言わんこつちやない・・・」

作者は突然飛んできた科学の教科書で地面に沈められた。

チ「あははは・・・ナギちゃんヒドいと思うよ?」

ナ「ふん!課外授業が終わって今日(8月1日投稿作品です)から本格的な夏休みになるくらいで浮かれてるコイツを断罪してやった・け・よ」

チ&マ「作者おん浮かれてたんだね(な)?」

作「で、でも嬉しくないか?夏休みって?」

ナ「あんだね・・・宿題全部やってないし!あんたの高校の後期課外は8月20日には始まんしょ!さっさと宿題やれ〜〜!？」

作「はい！！すみませんっした〜！！！！」

ビュンツ！！？

作者は全力で家に帰りました。

チ「あ！帰っちゃった・・・」

マ「・・・次回予告どうすんだよ？」

ナ「心配ないわよ、あれを見なさい」

凧が指差した先には一枚の紙があった。

チ「えつと・・・次回は真備とレリエルの戦いが再開されます。

はたして真備はレリエルの光の矢に対応できるのか！？

では、次回のこの時間に会いましょうー！！」

ナ「ん？もう一つ紙があるわね・・・」

マ「今度は俺に読ませるよ・・・追伸・凧は次回からあまり出なくなるよ〜（ウインク）・・・」

ナ「・・・殺す!!」

チ&マ「作者さん逃げて!!!!!!!!」

次回に続く!!

第37話 光芒の包囲網（前書き）

最近、更新が遅くなってしまっているのでここで深く謝罪いたします。

まことに、申し訳ありませんでした。――

ちなみに今回から書き方も少し変えたのでよろしくお願いします。

第37話 光芒の包囲網

知恵理 side

「……………ぐすっ…ぐすっ……………風の……………イジワル……………ぐすっ……………」

「あゝもう！だから何回も謝ったでしょ！…！」

どうやらナギちゃんが出した「ユキブリ」？（のせいで泣いちゃったセツちゃん……………」

今は戦意喪失してしまったセツちゃんをナギちゃんが慰めている形です。

……………それにしてもセツちゃん、虫が苦手だったんだね？

ナギちゃんの側で可愛らしく泣きべそをかいているセツちゃんに私は本当に同情します。

……………だって、私も泣くほどじゃないけど虫は苦手だもん。

「……………知恵理、見てみるよ」

二人を見ていた私にヒナ君が声をかけてきました。

その顔はさつきまでの険しいものではありません。普段私達と一緒に遊んでいるときのような楽しい活き活きとした表情でした。

「何？ヒナ君？」

「風のやつ、自分で気付いてるかは分からないけど………今までで一番活き活きとしてるぞ」

ヒナ君に言われて私はまたナギちゃんの顔を見つめる。

………ホントだ。

泣き止まないセツちゃんにオロオロして対応しているナギちゃん………

だけど、その顔は………これ以上はないほど綻んでいました………

本当にうれしそうに………笑ってました。

「あいつはあいつで答えを見つけたのかもしれないな」

「……うん、そうかもしれないね」

ヒナ君の優しい声に私もつい顔が緩んでしまいました。

ふふふっ、自分ながら空気が読めてないですね

「楽しそうだな知恵理？」

「うん！ナギちゃんのおんな顔を見たら何だかとってもほんわかした気持ちになったよ」

あの二人はどうやら問題ないみたいね。

ナギちゃんの肩の傷が少し気になるけど……心配いらなみたい。

「見たところ風の肩の傷はふさがってるみたいだし、あの二人の雰囲気からは殺気は感じない……うん問題 nothing だな」

私が心の中で思っていたことを声に出して言ってくれるヒナ君。

だけど、その表情はすぐに強張ったものに変わってしまいました…

……

……そう、まだ戦いは終わってなかったのです。

「でも、こっちは問題 nothing というわけにはいってないよ
うだな」

「……………うん」

ヒナ君の言葉に私は同じ考えを持って私とヒナ君の真下を見下げました。

そして、そこには体つきがいい茶髪で長身な男の子と全身真っ黒な服を着込んで顔をフードで隠した人が対峙しています。

……マキ君とレリエルさんが……

レリエルside

俺は風の特性【風声鶴唳】に驚かされました。

その理由は以下の二つ。

一つ目は、風が初発動から1日で魂狩の特性と協調を使いこなせた
ところ です。

本来、魂狩は長い年月をかけて地道に精進させていくもの……

水城や刹那は昔から能力値を高めていってやっと現在の戦闘を可能
にしていると聞きました。

それほどまでに能力を持つ人間は大変なのです。

そして、二つ目……

それは風が【幻術師】だったこと。

基本的に能力者は俺達みたいに相手に直接ダメージを与える【戦士】
が多い……

ですが、まれに生まれてくる相手の精神攻撃を得意とする者達がい
ます。

それが【幻術師】です。

【幻術師】は【戦士】に比べると極端に数が減ります。
けれど、逆を言えば【幻術師】に対抗できる手段も極端に少ないの
です。

そして、その数少ない対抗手段のうち最も手っ取り早く、最も確実
な手段……

【幻術師】に対抗できるのは【幻術師】だけ。

このセオリーがあります。

つまり、能力者を求める人々にとって【幻術師】は最も欲するものなのです。

……今後、凧は狙われるかもしれませんね。

だけど、今はそれ以上に驚きと興味の対象が俺の目の前にいます。

それは……

「…俺はさきほどのあなたが見せた動きについて聞いてみたいのですが、真備？」

「ん？さっきの動きっていったいなんのことだ？」

やはり気付いてなかったみたいですね…

「さきほどあなたは常人を遙かにしのぐスピードで駆け出しました。

そして、そのスピードのまま【鏡の部屋】と【雪の部屋】の間の壁を打ち砕いたのですよ？」

まさかあれだけのことをしてお気付きにならなかったのです。

すか？」

「……………」

「あ……」

やってしまいました。

真備には少し長すぎる説明をしてしまいましたからどうぞやら処理落ちしてしまっただようですね。

反省、反省と。

そんなことを思っていると、俺は苦笑いしてしまいました。

……………やっぱり楽しんでますね俺は。

真備が処理落ちしたところ見ながら俺は今の自分の立場を考えてないような言葉が頭によぎりました。でも、今だけは楽しませていた

だきましようかな。

魂狩を発動させるそのときまでは……

そう考えた俺は処理落ちしてしまっている真備のもとに向かいます。

近づいて、近づいて……そして、真備の耳元に口をあて思いっきり息を吸い込み。

「帰ってきてくださ〜〜〜い！〜！！！」

「ぎゅ〜〜！？！？」

……思いっきり大声で叫び、真備を呼び戻しました。

「び、びっくりするじゃねーか！〜！！！」

「あれくらいで処理落ちするあなたが悪いと思いますか？」

「ぐう……だ、だが！耳元で叫ぶことはねーだろ！？」

「……さつきから呼んでたのにあれくらいまで大声で呼ばないと起きなかつたあなたが悪いです」

大嘘です。俺は一回だけ叫んだだけですな。

「……お前ら、いい加減にしるよ」

「ちっ！うっせーぞ水城！！」

……おっと、少しおふざけがすぎました。

真備……あなたと話してるととっても楽しいです。

楽しくて、楽しくて……すっかり自分の立場を忘れてしまいそうですな。

……でも、俺は俺でやらなければいけないことがあります。

「……細かい話はなしにしましょう。」

さきほどのあなたの動きはまさしく【電光石火】……

とても素晴らしいものでした」

「【電光石火】？」

「詳しく言っても分からないでしょうから、ようはすっごく速いという意味ですよ」

本当に短縮しすぎた説明ですね。

「だけど……」

「？」

……俺は、この瞬間に覚悟を決めました。

全身に流れてくる緊張、背中に感じる様々な視線、目の前にいる【真備（敵）】からくる少なめの殺気……

全てが俺の戦闘意欲を高めます。

そんなときに、ふと昨日の【街】でのやり取りを思い出しました。

思えば、あの瞬間が記憶がない俺が過ごした四年間で一番楽しい時間だったのかもしれないね。

……あのとき、一緒にぶざけて、楽しんで、いじって、共に笑った
【真備（友）】に俺は……

鏝やじりを向けました。

「……来い、洗穿」

フーーーーッ……!

俺のそのかけ声を出した次の瞬間、右手から激しいと言ってもおかしくないくらいの光が溢れ出す。

その光はとても美しいものです。

でも……俺には汚れた色を放っているようにしか見えませんでした。

真備 side

「……来い、洗穿弓」

レリエルの呟きと共にやつの体から大量の光が放出される。

……綺麗だ。

男の俺がここまで綺麗に感じさせる。

それほどまでに洗穿弓から放たれた光は魅力的だった。

と、そのとき……

「……神聖の槍!!!」
セイクレッド・スピア

パチンツ！シユンツ！

「な!?!」

洗穿弓を発動させたときの光を目くらましにしてレリエルは俺に大技を出してきやがった!!

「ま、まじかよ!?!」

俺はとっさにファイティングポーズをとる。

だが、光に混じってこっちに飛んでくる光の矢が二十数本……

避けきるけとはほぼ不可能だった。

「くそっ!!!」

「一瞬の油断が命取りだということですよ、真備」

光が消え、飛んでくる矢と一緒にぱつきりと見えたレリエルの顔はうつすらと笑みを浮かべているように見える。

ちくしょう!!!!

何なんだよ!!その顔は!!

まるで俺をあざ笑うようなその顔……

久々に気にいらねえ顔見せてくれんじゃねえかよ!!

「さて、抜けられますか？」

「……なめんじゃねーよ、こんなもん寝てても避けられるわ……」

精一杯の強がりをした俺は即座に矢の配置を確認した。

「三本!!」

さっきみたいに俺は飛んでくる矢の配置を瞬時に確認し、最も少ない場所に突撃する!!

上・下・右！！！

「それでは先ほどの二の前ですよ、真備？」

いちいちうるせー！！

分かってる……分かってるぞ……！！

お前の魂狩、洗穿弓の特性は【鏡写し】

全ての矢を警戒しないといけないんだということも分かってる！！！！

でもな……俺は……

科学が苦手なんだよ！？

だから、鏡に矢が当たってどう返ってくるかなんて分かりっこねー
だろ！？

寧ろ俺がこれを科学の問題だと分かっただけほめてほしーね!!!

と、いつの間にか一本目の目の前まで来てたな。

とにかく!!!他の矢は後だ!!!

「一本目!!!」

上………って言っても肩あたりに向かってくる矢をすばやく避ける。

「二本目!!!」

足を狙って飛んで来た矢は一気に一躍してかわす

「三本目!!!」

ラスト!!!右から俺の腹あたりを射ようとしている矢を掴み取った!!!

「うしっ!!!目標達成!!!」

「まだまだ真備!!」

部屋の上の方から日向の音が響いてきた。

「心配すんなよ日向!!ちゃんと分かってる!!」

そう、まだ奴の矢が死んでないことぐらい言われなくても分かってる!!

俺は左手に持つ光の矢を投げ捨てる。

そして、振り返ってみれば……

「なっ!?!」

「……言いましたよね?それでは先ほどの二の前だと……」

「くそっ!!」

俺は再びファイティングポーズをとる。

やってくる第二、第三の攻撃に備えて!!

「矢の数からその場所に行くことは目に見えてましたからね。

だから、その場所を跳ね返ったときに狙うように残りの矢を撃ち出しました。

これであなたは袋のネズミです」

長々しい説明だが、今度は処理落ちすることはなかった。

なぜなら、俺の目の前に広がっている光景……それを全て物語っていたのだ。

「……（じくじく）」

思わず唾を飲む。

なぜなら、前にある二十もの鏡に写し出された自分の姿を見たからだ。

……俺は鏡に囲まれていたのだった。

「言いましたよね？サジタリウスの矢は絶対外れませんと……

……
神聖の鏡セイクレット・ミラー」

レリエルはそう言つと指を鳴らした。

パチンッ！！

その音と共に俺を写し出している二十の鏡から同時に光の矢が飛び出した！！

シュンッ！！

「ちっ！位置確認……」

「全て均等ですから無駄ですよ」

位置を確認して一番避けやすいところを探すという今まで使ってきた手は使えなかった。

確かに飛んでくる矢は全て同じ感覚で飛んでくるから避けようがない。

……打つ手なしだ。

「じらー！！馬鹿弟！！」

耳にこだましてきたのは四六時中一緒にいてきた一番聞き慣れた声。

でも、俺は迫り来る矢への恐怖で答えることは出来なかった……

……すまんな姉貴。答えられる余裕ないわ……

そのとき、俺は薄く口元を歪ませた。

……笑ったのだ。

なぜ、この状況で笑うことができたのか？

俺には自分自身のことながらさっぱり理解できなかった……

……いや……俺には理解しなくていいことだった。

もしかしたら、姉貴の次の言葉を内心で分かっていたからかもしれない。

他ならぬ、産まれたときから一心同体だった【ナギねえ】のその言葉を聞いたかったからなのだろう。

…だから、俺はその言葉を理解するために頭で考えることを一時的に止めたのだった……

「死になさい」

第37話 光芒の包囲網（後書き）

真「俺は勉強は苦手だ〜〜！！！」

突然真備が叫んだ！？

作「あれてるね〜」

輝「マキビンは頭で考えるより先に体が動く人ですからね」

日「違うない」

知「ははは、それって誉めてるのかな………？」

メンバーはほとんど苦笑いしてしまった。

真「数学なんて大嫌いだ〜〜！！！」

凧「………」

真「英語なんて大嫌いだ〜〜！！！」

凧「………」

真「歴史なんて大嫌いだ~~~~!!!!」

凧「……………(ブチ)」

キンコンカンコーン!!

警戒警報!!!警戒警報!!!

凧「うるさ~~~~い!!!!!」

ドガ!!ドガ!!ドガシャン!!

真「アラブ~~~~!!!」

知「アラブ首長国連邦……アラビア半島にある7つの国から出来た国だから覚えてね」

日「知恵理、何か言ったか？」

知「ヒナ君は気にしないでいいよ

ただの独り言だから

それよりも……………」

凧「あんた！！本編でも馬鹿丸出しだったでしょ！？」

真「な、何のことだよ！！！」

凧「鏡のときよ！！反射の問題はぶーっーり！！物理なんだからね！！！」

真「で、でもよ前に化学反応で光が出たあれは化学だっただろ？

だったら、光を使った今回も化学に……」

スパーンツ！！！！

凧「あんたの頭には蟹味噌でも入ってるの！！？」

……

輝「ナギリン、どこからハリセン出したんでしようね？」

日「……問題nothing……世の中、知らないほうがいいこともあるのさ」

知「ヒナ君、何か悟ったんだね」

作「あつちで漫才やってる双子はほっというて次回予告します。

凧のまさかの拒絶する言葉……

その真意を真備は必死に考えようとする。

果たして、凧が言い放った言葉の先にあるものとは!?

次回、THUNDER NERVE

日「問題nothingだぜ!」

真「うお〜!!勝手に終わるな〜!!!」

凧「何言ってるの!!あなたの地獄はこれからよ!!!」

真「嫌だ〜!!!」

追伸・これを期に真備はやっと【九九の七の段】を言えるようになりました。

次回に続く!!

第38話 THUNDER NERVE (前書き)

……約1ヶ月ぶりの投稿になります。

本当にごめんなさい!!

さて、復帰第一話は真備が活躍する話です。

ここ最近、主人公の日向やヒロインの知恵理に出番がなくて申し訳ありません!!

でも、過去最長のこの話楽しんでってください!!

第38話 THUNDER NERVE

レリエルside

「死になさい」

……凧の口から放たれたその言葉に俺は思わず絶句してしまいました。

でも、それだけではありません。

俺には一瞬にしてその場が凍りついたように思いました。

「な、ナギちゃん？」

「……」

知恵理の恐る恐るといった感じの言葉。

俺と同じで絶句してしまっている日向。

見る必要がないくらい鮮明に様子が思い浮かんできます。

……ちょっと純粋な一人には少しきつすぎる言葉かもしれません。

と、その間にも真備には二十本近くの矢が迫っていつています。

でも、なぜ……。

なぜ、凧はあのような言葉をこんな状況で口に出したのでしょうか？

そう俺が疑問に思っているとさらに驚きの発言が飛び出してきました。

あの人の中から……。

「……解ったぜ」

『えっ！…?』

真備のその言葉に俺達（水城&凧以外）は言葉を揃え驚きました。

……一体何が起こってるのでしょうか？

凧
s i d e

目の前に広がる光景にあたしは恐怖心を感じてしまった。

真備を囲むようにずらりと並んだ大量の鏡。

それから放たれる二十近くの矢の数々……。

絶望的だ。

「……………」

真備の表情にも最早諦めてに似たものがある。

……もしかしたら、【あの力】を使ったらこの場を切り抜けられるかもしれない。

でも……【あの力】はあたしの予知夢とは違う……。

だから、あなたには絶対使ってほしくない!!

あたしはキリツと真備を睨み付けるように見据えた。

そして、思いっきり息を吸い込み……。

「ころー!!馬鹿弟!!」

真備を叫び呼んだ。

「……………」

相変わらずの焦せりの表情をみせる真備があたしのほうに顔を向け

る。

……まったく、あなたにその顔は似合わないわよ。

あなたはいつも通りみんなに馬鹿な所を見せてればいいんだから!!

……だからあなたを絶望に落とすわ。だって、そうしないと……。あたしと同じようにはならないでしょ？

あなたもあたしと同じように【あいつ】にもまれてくることね!!

きつと会えることを信じてるわ!!

そして、あたしは表面上で冷たい表情を作り上げ言い放った。

大事な弟を信じて……。

「死になさい」

真備 side

「死になさい」

姉貴の口から放たれた拒絶の言葉……。

この言葉を聞いた俺はまさしく絶望に落とされたのだと思う。

このときほど姉貴を憎んだことはないぜ。

なんせ、前を見れば二十近くの大量の矢。

後ろを見ればレリエルが新しい矢を構えている。

そして、俺の精神はヒビの入ったガラスみたいにバラバラと崩れさ
っている……。

……最悪だな、今の状況。

ここまでできたらもう、自暴自棄になってやる。

俺は精神的に傷ついた体をゆすり起こして立ち上がった。

未だにさつき受けた肩の傷や打ちつけた背中はずきずき痛む。

だけど、それが精神的に病んだ俺の心を起こす原動力にもなっていた。

そして、もうろつとする意識のなか、俺は姉貴の言葉に応えたのである。

「解ったぜ」

『えっ!?!?』

……なんか姉貴と水城のやる以外が驚きで叫んだみたいだがそんなのお構いなしだ。俺は黙って、迫り来る矢に体を向けて……自ら二十数本の矢を向かい入れる体制を作った。

これで、いいんだろ姉貴？

「なっ！？馬鹿な真似は止める真備！！！」

「ダメー！！！！マキ君！！！！」

「ふざけないでくださいマキビン！！！！」

日向、知恵理、輝喜の音が耳を貫く。

だけど、俺は聞く耳を持たない……。

ただ、目の前に迫ってくる矢を睨みつけた。

既に刺さる一歩手前だ。

だが、俺はそのまま乱れ飛んでくる矢に身を任せようとしたそのときだった！！

「真備！！！！！！！！！！」

……姉貴のあの小さな体のどこからそんな声を出せるのかというくらいの大声で……俺を呼んだ。

「……姉貴？」

唐突に呼ばれた俺は再び姉貴のほうを向く。

……姉貴は穏やかな顔をしていた。

それは、さっきまでの冷徹な【姉貴】の顔じゃなくて、優しい【ナギねえ】の顔……。

そして、次に来た言葉に俺は……いや、その場にいた俺達は全員啞然としてしまった。

「生きなさい、真備」

……俺の体を矢が貫いたのはそれから一秒も経たないときだった。

????side

当代の羽前の姫は拙者達の思っている以上に心が強い方なのかもしれぬな。

普通、大切に思っている実の弟に【死】を強要するような言葉はかけぬでござる。

しかし、当代の姫はそれを戸惑いなくやった。

これは拙者にも楓にも予想外でござったよ。

……さて、拙者としてここまでされたら動かないわけにはいかぬな。

羽前の姫の願いを叶えるため拙者は当代の羽前家当主、羽前真備殿のもとに行くでござる。

それが、翡翠様に仰せつかった拙者の役目でござるからな……。

真備 side

上空に広がる暗雲から激しい光が閃いた。

そして、その光は一直線に俺の右横にあった岩山に激突、崩れ落ちた。

ドカーーーン!!!!!!!!!!!!!!

「やっべー!!」

しかも狙ったように崩れてきた岩は俺を襲ってきやがった!!

それを見た俺は一気に走り出す。

ドカンッ!!ドカンッ!!ドカンッ!!ドカンッ!!

落ちてくる大量の岩を避ける、避ける、避ける!!

「くそっ!!なんでこんなところで死にかけなければいけねーんだよ!!!!!!!!!!

ていうか俺死んだんじゃないのかよ!!!!!!

訳わかんね〜！！！！！！」

俺は叫びながら必死に落ちてくる岩を避け続ける。

……だけど、いくら俺が三大陰陽師家の次期当主といえども人間には変わない。

油断は生まれてしまうものなのだ……。

ガラガラ……！！！！！！

「ま、まずい……！！」

本当に一瞬の油断だった。

落ちてくる岩にはかり目がいつていたばかりに俺は見落としていたのだ。

「くそっ……崖っぶちにいたなんて……！！！！！！」

ちくしょーっ！！俺の人生ここまでにしてたまるかよ！！

まだ死ぬわけにはいかねーんだ！！

ナギねえが最後に生きなさいって言ったんだから俺は生きる！！！！

でも、この状況……。

あーっ！！くそっ！！

……日向！！……知恵理！！……輝喜！！……ナギねえ！！

誰でもいい！！！！

「助けやがれ！！！！！！」

俺は必死になって助けを叫ぶ。

望みが薄いことは目に見えているにもかかわらず……最後の悪あがきという感じで必死に叫んだ。

そして……。

に身長や体格が少しばかり大きいだけ体重は一割り増しくらい重いのだ!!」

だがこの男は【軽々】と俺を【片手】で持ち上げやがった!?

「うぐっ!?!マジかよ!?!」

「少しの間だけ辛抱してくだされ主!!拙者が安全な所までお連れするでござるよ!?!」

まあ、それは一向に構わないし、むしろありがたいんだけど……。

一つ問題がある。

まず、男が掴んでいるのは俺の首元の襟首であること。

そして、やつはそのまま俺を抱え上げて上空に向かい大ジャンプをしているわけだ。

結果……。

「ギャー!!首が締まる!!締まっていますよ!!」

「心配いらぬでござるよ主!!もつ少しの辛抱でござる……」

いや、まじで俺死にそうなんですけど？

「ぐえっ……………もう……………無理っばい……………ん……………ですけ……………ど……………」

もしかして、この人、俺を殺しにきたんじゃないの？

それが俺の意識があるうちに思った最後の事だった……………。

「あ、主……………!!!!!!!!」

……………

……………

……………

…

「う、うん……………?」

妙に固く寝にくい地面の感触と首に感じる締め付けたような鈍い痛み
みに俺は目を覚まされる。

俺は寝ている状態から上半身だけを起こして辺りを見渡してみたが、生憎目が霞んでいてよくは周りの情景を見渡すことはできない。

しかし、目が見えないことははっきり言ってさほど問題ではなかった。

なんせ、355度（5度少ない！）・b y日向（どこを見渡しても見えているのは同じ茶色の物体だけだったからだ。

……そう、やはり俺はあの岩しかない空間の中にいることを再認識させられた。

「……夢じゃなかったんだな」

そんなことを少し自分を軽蔑するように俺は呟く。

現実逃避するように呟やく俺に返される言葉はないで思っていた。

……彼の存在を知るまでは。

「少なくとも主にとってはこれは夢じゃないわよ」

古風で尚且つ大人っぽいしゃべり方、さらには輝喜並みに話しやすそうな気のいいオッサンがいた。

……年は三十代の前半くらいだが、色黒で渋めにカッコいいから二十代でも十分通りそうだ。

背は俺より20センチは高く筋肉質の体。

そして格好……。

なんというか……野生児？というのが一番の印象だ。

分かりにくい方は【少年陰陽師】の【紅蓮】を思い浮かべてください。

さて、大方の容姿を説明したところで話を戻そうと思う。

「……俺にとっては夢？いや、それより主ってどっいじことだよ？」

「うむ、まずは順を追って説明するでござるか」

そう言つとオッサンは一息つく。

静かに目を閉じて深く深呼吸をし、目を閉じたまま再び口を動かした。始めた。

「まず、最初の言葉……主にとっては夢だということでしょうが……そのままの意味でしょう」

「……と、いうこと？」

「主は 殿の矢を受けたことは覚えていらっしゃるか？」

「……覚えているけどその名前は使わないでくれないか？」

「……承知しました。して、矢を受けたことは覚えていらっしゃると？」

「ああ、ちゃんと覚えてるぜ……それが？」

「つまり、主はあの時気絶してしまい、これは気絶した主が見ている夢だということでしょうよ」

「……なるほど」

それくらいなら俺の頭でも理解できた。

でも、癖ない所もある。

……まず、なんだこの夢のリアリティは？

さっきのシーンなんて本当に俺死ぬかと思っただぞ。

しかも、さっきから首締められたときの圧迫感もジンジン感じている。

マジでイテェよ。

それに目の前にいるオッサンもそうだ。

こいつは俺の夢の中にいるのに明らかに意志を持って行動している。

そして、オッサンの俺を呼ぶときの呼び方……。

なんで主なんだ？

「それについてもちゃんと説明するぞいぢやね。」

「読心術！？」

「うむ、主の考えていることは手取り足取り分かったぞいぢやねよ。」

「……俺にプライバシーねえじゃん。」

「……冗談でいぢやね。」

「冗談だったの!？」

やべー……やっぱりこのオッサン話やすいぜ。

「……本当に冗談はここまで、これからは真面目な話をするぞ」
「る」

そう言ったオッサンはいつの間にか開いていた目をまた静かに閉じた。

どつちやら真剣な話のときは目を閉じる癖があるようである。

「主は最後に風様が言ったお言葉を覚えておいでか？」

……ああ、あの言葉か。

俺にとってはレリエルに受けた傷より傷ついた言葉だったからしっかり覚えてる。

……すごく言い辛いかな。

「【死になさい】だろ？」

「……違うでいぢる」

え？違うのか？

「それは最後から二番目に言った言葉でいぢる。もっとよく思い出
すでいぢるよ」

……最後に言った言葉。

姉貴が最後に言った言葉は俺の耳には届かなかったということなの
か？

……でもいいや。

どうせ俺は姉貴に見捨てられたんだからどうせ最後の言葉は俺にと
って最悪の言葉なんだろうな。

だから、そんな言葉はつきり言って……。

……思い出したくない。

「……」

だから俺は黙秘することを選んだ。

これが、昔から俺が自己防衛をするときにやる行動である。

「……どうしたでござるか主？」

「……」

「……分からないでござるか？」

「……」

「……主？」

「……」

オッサンが俺の肩を掴んでガシガシと揺さぶってくる。

が、それでも俺は頑として口を開こうとしなかった……。

……それが俺の逃げ方であり、俺のやり方。

俺はこれまでこうしてその場をやり過ぎてきたんだ。

でも、このオッサンにこの手は通じなかったのだった。

「……主、ちよつと度が過ぎますぞ」

オッサンはさっきまでの気さくで話しやすそうな雰囲気から一転、怒りを孕んだ鋭い視線を俺に向けてくる。

その視線は今まで味わったどんな威圧よりも……怖かった。

「な、なんだよ？」

「……主」

オッサンが放つ言葉はその一言のみ、だが、その一言に俺は思わず肩を震わした。

……完全に気合い負けしたのだ。

俺の変化に気づいたのか気づいてないのか、オッサンは俺の肩に乗せた手をどかす。

俺はその動作一つ一つに怯えを覚えてしまっていた。

そして、オッサンが俺の正面に立ったそのとき……。

バキッ！！！！！！！

俺は激しい痛みを顔に感じたと思ったら、気づいたときには地面に倒れてしまっていた。

……そう、俺は殴られたのだ。

そのことに気がついた俺は勢いよく立ち上がりオッサンを睨みつける。

「てめー……何しやがっ……！」

バキッ！……！！！！！！

今度は反対側の頬を打たれる。

俺は再び地面にキスしてしまった。

「……イテー」

「痛いでござるか？」

地面に倒れたままの俺にオッサンは冷たい目で見下ろして言い放つ。

「拙者がなぜ主を殴ったか分かるでござるか？」

「………知るかよ」

無愛想に俺はオッサンの言葉に答える。

そんな俺にオッサンは深くため息をつき、地面に倒れたままの俺に向かつてしゃべりだした。

「……主は知らないかもしれぬが、拙者には親友とも呼べる女性がいるでござる。」

「……？」

「その女性とはある陰陽師の家にいる姫を保護しているでござるが……その女性はある事かその姫に恨まれているでござる。」

「……あれ？」

この話、どこかで聞いたことがあるような……？

「その女性は姫にとある力を授けているのでござるよ。」

「……え？」

それってまさか……。

「その力の名前は…… 未来予知、つまり【予知夢】でござる」

「ちよっ!! それってまさか!?!」

その言葉に驚いた俺は再び寝そべっていた地面から勢いよく立ち上がった。

それに気づいた様子でオッサンは真実を語る……。

「……そうでござる。その姫とは羽前家の長女であり、主の姉上である羽前凧、そして拙者の親友の名前は【楓】九尾の【楓】でござるよ」

俺はその名前を聞いた瞬間このオッサンの正体にも行き当たった。

……その名前は俺に最も関係ある名前、姉貴の九尾と同じように俺を守るために俺を守護している妖……そう。

「お前の名前は……!?!」

「【鋼弥】」

オッサンの静かな声に俺は確信を得る。

やはり、このオッサンは羽前家に代々仕えてきた守護妖……。

「……………【犬神】か」

俺の言葉にオッサン……………いや、犬神の鋼弥はゆっくりと頷いたのだ
った。

羽前家には未熟な時期当主を守護するために二匹の守護獣がいる。

一匹は姫、つまり女兒を守護している【九尾の楓】これから起こる
であろう不幸を見せる【予知夢】の力を女兒に与えて、危険を回避
させるのがその役目だ。

そして、もう一匹が時期当主となる男児を守護する【犬神の鋼弥】
つまり俺の目の前にいるこいつである。

残念ながら、姉貴の予知夢のように鋼弥の力は俺には教えてもらえ
なかった。

だけど、俺は昔一度だけ発動したことがある……らしい。

俺にはそのときの記憶はないけど姉貴は覚えてるそうさ。

教えてくれなかったけどな。

でも、今の問題はそんなことではない。

今は姉貴と九尾の話なぜしたかということだ。

そう思った俺は鋼弥の話に耳を傾ける。

「……主はさきほど風様がなぜいきなりチューニング協調を使えるようになったかわかるでござるか？」

「……わからん」

これは本心から来るものだ。

あのととき、姉貴の名前を日向と知恵理が呼んだとき……俺は何も考えられなくなった。

必死に姉貴の現状を探ろうと姉貴を呼び叫び、姉貴との部屋の境目を必死に殴った。

……でも、姉貴は無事にたったただけでなく、協調を使えるようになってその場にいたのだ。

これが、俺の知る姉貴が協調を使えるまでの動向……。

はっきり言って俺にとっては不思議でしかないのだ。

だから、俺はその話を真剣に聞き入る。

そこにはすでにさっきまでの俺はいなかった。

「あなたの姉上、つまり羽前の姫は姫の心の中にある空間で楓の出す試練を行い、無事協調を手に入れたのでござる」

「……え？」

「……主に分かりやすく言つと楓と修行したといつじやないぢやね」

さすがに羽前の守護妖でずっと俺の中にいた鋼弥だ。

俺が理解るかしてないということが分かっている。

「で、こじで冒頭にもぐるでいける」

「冒頭？」

「……姫が主に言った最後の言葉でいけるよ」

「!?!」

その一言で俺は顔を強ばらせる。

今の俺にしてみればそれは禁句^{タブー}

鋼弥もそれは分かっているようでさっきのことを言った言葉は今までで一番優しかった。

そして、今も……鋼弥は俺に優しく微笑みかけてくれている。

「……主、確かに主にとってみれば【死になさい】という言葉は厳しい言葉かもしれぬでござる。でも、本当によく思い出してみるのでござる。本当に、本当に最後に姫が言った言葉を……」

……鋼弥が言ったことがもしかしたら鍵だったのかもしれない。

そのとき、俺の頭の中に大量の映像がフラッシュバックしてきた……。

姉貴に【死になさい】と言われたときの絶望。

その言葉で自暴自棄になり矢に自ら飛び込む自分。

日向、知恵理、輝喜から来る叫び声。

そして……。

「……………」

「気づいたでござるか」

「……………あぁ」

「……………して、その言葉とはなんでござるか？」

……その言葉は明らかな矛盾。

その言葉を聞いた瞬間にその場にいた全員が啞然としたことを覚えている。

……だけでも、俺にしてみれば救いの言葉。

その言葉は今まで曇っていた俺の中を明るく照らすには十分すぎる言葉であった。

その言葉とは……。

「……【生きなさい】」

その言葉を口ずさんだ瞬間、俺の瞳から涙が溢れ出す。

鋼弥のほつも微笑みながら俺を眺めている。

……そして、俺は一つの決心に導かれたのだった。

「……死にたくない」

「……は？」

俺の呟きに鋼弥は聞き返してくる。

俺は今度は鋼弥にも聞こえるように簡潔かつ大声で叫んだ！！

「俺は生きたいんだ~~~~~!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

突然の笑い声に俺は呆然としてしまう。

だが、一向に笑い終わらない鋼弥に俺は？を浮かべるばかりだった。

「くくっ…姫の願いを…聞き入れるために…くくっ…せっかく
主を心の中まで…招待したのに…くくっ…主は自分で答えをだ
してしまったときた…くくっ…さすがは我が主と…言ったとこ
ろだな…くくっ」

……なぜだろう。

悪意がまったくないと分かっているのに無償に腹がたってくる。

俺は煮えてくる気持ちを必死に押さえ込み、鋼弥に話しかけた。

「……鋼弥、俺、何かしたか？」

すると、鋼弥はさっきまでの笑いをどこかに捨て、真面目な顔つきで話し始めた。

もちろん目はつむっている。

「……姫が【死にたくない】と言ったのは、主をこの世界に連れてくるためです」

「俺を？」

俺の質問に鋼弥は大きく頷く。

「姫はいままで二回【楓】に会っているのです。その二回とも、姫は気絶状態で会っているのですから、主も気絶状態になったら拙者に会えると思ったのです」

話が長すぎて何が何だか分からないが俺はとりあえず頷いた。

「……つまり、気絶させてここに來させるためにあの言葉をかけたというのです」

「簡略化してもらいすんません」

本当に申し訳ありません。

「で、ここに主がついたのはいいのですが、拙者がこれから教えるようにすることを教える前に主は気づいてしまったのです」

「……しまじ？」

「しまじ……。」

【生きたい】という意志を持つじよでじよる」

俺の決心は確信へと変わった瞬間だった。

「……時間でじよるな」

「えっ!？」

鋼弥の声に俺は慌てて鋼弥のほうを向く。

……しかし、顔を正面に向けたときにはすでに鋼弥の顔は霞んでしまっていた。

すでに時間がないということだ。

「……最後にこれだけは言っておくでござる。生存本能のままに行動するでござる。さすれば主の新しい力が現れるでござる」

……目がかすんでいてうまく見ることができない。

だけど、これだけは言える……。

鋼弥の顔はどこかうれしそうな顔をしているということだ。

だから、俺は鋼弥生にこの言葉を贈る。

今の俺の気持ち……そして、ナギねえの気持ちを全部詰め込んで……。

「ありがとう」

……感謝を込めたその言葉に鋼弥は何も答えない。

ただ、遠くを仰ぎ見る鋼弥の姿に俺はあの男……【水城】の姿を合
わせて見てしまう。

そして、鋼弥は再び目を瞑り……静に眩くだった。

「……目覚めの時間です羽前真備……幸運を……」

ここに送り込んだときのナギねえの最後の言葉のように、再びあそ
こに行く俺に送った鋼弥の最後の言葉は……。

最高のものだった。

レリエルside

俺の目の前では自ら矢にあたりにいった真備が倒れています。

その光景は見ただけでも痛々しい……。

なぜなら、それぞれの肩に一本ずつ、お腹に二本、脚と腕にも最低一本ずつ刺さり……心臓がある左胸にも一本刺さっていました。

そして、それはあきらかな致命傷……真備は今死にかけているのだ。

「……風、どういづつもりですか？」

俺はこの状況の二番目の原因に話しかけます。

あの風の言葉、あの言葉を聞いた後から真備は確実に自暴自棄になっていました。

直接的ではないとはいえ【死になさい】という言葉は確実に真備を絶望へと追い込んだと思います。

……いや、そんなことは言い訳でしかありませんね。

だって、この状況の一番の原因は……。

「……加害者のあんに言われたくないわよ……レリエル」

その通り、彼を……真備を倒したのはこの……俺なんですから。

「……でも、勘違いしないでよね」

「……え？」

勘違い……とは、何のことでしょうか？

「……ナギちゃんが最後に言った【生きなさい】って言葉のこと？」

俺と同様のことを思ったのか、知恵理が上からそう聞いてきます。

しかし、凧は優しい感じで首を横に振りました。

「……違うわよ知恵理、あたしが言いたいのは……」

スック……。

…… 凧が最後まで言い切る前より先に俺はある光景で凧の言葉どころではなくなりました。

でも、それに関係なく凧の言葉は俺の耳を貫くのでした。

「あたしの馬鹿弟はここでくたばったただの馬鹿に戻ってしまう
ということよ」

…… 凧が言うこと確かにありました。

だって、目の前の光景……。

全身に矢が刺さった状態の真備が立ち上がったことが何よりの証拠
でしたから……。

ズツ！！ズツ！！ズツ！！

立ち上がった真備は俺が撃ち込んだ矢を次々と抜いていきます。

もちろん、致命傷となっているであろう左胸に刺さった矢も……。

その場にいる俺達はその光景をただ、眺めることしかできませんでした。

カランツカランツ……。

全身の矢を抜いた真備は合計十本程度の矢を打ち捨てる。

そこまで、やった真備は起き上がってから初めてこちらを向きました。

「おい、レリエル」

「……なんでしょ」

「……人間はどうやって反射的に動けるか知ってるか？」

「……いきなり、生物の問題ですか？」

「……いったい、何を考えているのでしょうか……」。

「……通常は痛みを感じた瞬間に神経が脊髄にそして頭脳に信号を送り、同じ道を通して運動を行わせます。でも、反射の場合は神経は脊髄までしか伝えないので普通よりかなり早く動くことができます」

「ま、いつか」

この人、ぜんぜんわかってませんね。

「でもさ、その動きよりさらに早く動けるとしたら……どうする？」

「……何をバカなことを言ってるんですかそんなこと」できるよ……え？」

俺がそこまで言ったとき真備が俺の言葉を遮ってしまいます。

そして、次の瞬間には……真備は微塵の欠片もなく姿を消してしまっていました。

「なっ！……いつたいたいどこに……」

俺のこの疑問はすぐに解決しました。

そう、それは「あっ」と言う暇すら与えられないほど単純に。

「……脳からの信号を雷の力を使い、圧倒的スピードで伝え、一つ一つの動作を極限まで高める能力……これが雷神の特性……【雷光神経】だ!！」

その声に聞き間違いをすることはありません。

間違いなく真備の声でした。

けれども問題はその声が聞こえてくる方向……。

真備の声は俺から見てさっきまで真備がいた方向とは真逆の方向……つまり、俺の真後ろから聞こえてきたのです。

「!?!?」

慌てて俺は声がる真後ろに振り返りました。

でも、一足遅かったようでした……。

「これでさっきまで受けていた矢のぶんはチャラだぜ！！！！」

真備の叫び声に似た言葉を聞いたときには俺の目の前まで真備の拳が迫っていました。

そして……！！

バキッ！！！！

真備が放った渾身の拳は見事に俺の右頬にヒットして俺を地面に殴り倒しました。

バタッ！！

殴られた勢いで三メートル近く飛ばされ倒れる俺……。

しかし、俺の不幸はそれだけではありませんでした。

ファサッ……。

殴られたときに拳圧で巻き起こされた風。

そして、その風は見事に俺の【真実（正体）】を隠す【闇^{フート}】をはがしたのでした……。

「……………!！」

「……………!?!？」

俺の正体を知らなかった日向と凧の目が見開かれるのを感じます。

でも、それは当然のこと……。

なぜなら、俺は……。

「やっぱり、レリエルの正体はお前だったんだな……………」

俺は……あなた方を裏切っている……あなた方の【親友】……。

「……………輝喜……………」

【美濃輝言】 なんですから……。

第38話 THUNDER NERVE (後書き)

作「今回は宣伝をしたいと思えます!」

作以外「イエ〜〜イエ〜〜!」

……。

凧「じゃないわよ!」

作「うわっ!?!ビックリした」

知「ナギちゃんどうしたの?」

凧「知恵理……あなたはまだこの作品すら書き上げていないことが新しい小説を出したことをどうも思わないの!」

作「ザクっ!」

日「おまけに今回は1ヶ月も更新遅らすし」

作「グフっ!」

輝「はははは……しかも、まだ向こうは一話目なのにな……」

作「ドムっ!」

真「……さつきから作者の言うことガンダムになってるけど？」

作「……気にすんな、ガンダムは男の夢なんだから……」

真「……そうか」

……。

作「新連載!!!」

【†CROSS・ROAD†】!!

主人公は何でも屋を経営するお人好し!!

ヒロインは生徒会長にして学校のアイドル!!

主人公の親友は町で最強の不良!!

ヒロインの親友はオタクな情報屋!!

この4人を中心として彼ら4人が過ごす日常と非日常を描く話!!

【†CROSS・ROAD†】

もよろしくおねがいします!!! (´・`・´)

作以外『結局宣伝するんだ!?!』

作「まあ、いいじゃないですか。」

では、次回予告行きます!!

……ついに正体を表したレリエル、その姿は彼らがよく知るあいつ
だった!!

真備が特性を使いこなせるようになり全力で戦う親友達!!!!!!

その姿に……。

次回【墮天使な親友】

日「問題 nothingだぜ!!」

作「では、今後も【時の秒針】【TCROSS・ROAD】をよ
ろしくおねがいします!!」

作以外「おねがいします!!」

次回に続く!!

第39話 墮天使な親友（前書き）

今回は親友同士が戦う中の日向の心情を書きました。

真備と輝喜の全力での戦いもあります!!

では、どうぞ!!

あ！あと今日は俺の誕生日なんっすよ!!（これは9月29日の投稿作品です）

……すみません、ただ言いたかっただけです。

第39話 墮天使な親友

日向side

な、なんなんだよこの状況……。

俺は目の前に広がる光景にただ愕然としてしまった。

「ヒナ君……」

心配そうに知恵理が俺を見つめてくる。

でも、いつもなら知恵理に対して微笑みかけて安心させようとするけれど、今は下にいる二人の親友から目が離せない……。

「……俺は、いったいどうするばいいんだ？」

【問題nothing】と言えない俺は俺自身に歯がゆく思った……。

真備side

「よう輝喜、これはいつぶりの再会になるのかな？」

レリエル改めて、輝喜はいつも通りの笑顔を作り答える。

「いつつて、さっき一緒にこの部屋に入ったじゃありませんか」

「違う、俺が言いたいのは【本物の】お前と最後に会ったのはいつかって話だ」

俺の言葉に輝喜は少しニヒルな笑みを浮かべた。

その表情は輝喜とつるんできた三年間で一度も見たことない表情だ。

「……最後に本物の俺と会ったのは昨日の放課後……下水道であな
たを拾ったときですね」

「ぐっ!?!」

輝喜の言葉に俺は口を噤ってしまふ。

そんな俺を見た輝喜はしてやったりという感じで今度はいつも見せるいやらしい表情を浮かべる。

だが、俺はその顔を見ると未だに輝喜と殺り合っていたという自覚がなくなってしまった。

……あいつがどう思ってるか知らないがやっぱりあいつは俺の親友なんだから。

「……ねえコウ君」

そのとき、上のカゴから静かな声が響く。

だが、俺は……いや、俺と輝喜は声の主に罪悪感を感じてしまっ。

やはり、俺達のこの喧嘩を一番悲しく感じてるのはあいつだからな。

「何？知恵理？」

「……あのコウ君は誰なの？」

……確かに、普通に考えるとこの場に最初からいるあの輝喜は誰か？という事になると思っ。

だが、やつの正体は俺なら簡単に分かる。

いや、むしろこの場にいるメンバーなら俺がよくて姉貴が気付く可能性を持っているぐらいだ。

あとはよくて違和感を感じるくらいだろう。

……何故か？簡単な話だ。

だって、やつは……。

「【空蝉】……それがあいつの正体ですよ チェリン」

「【空蝉】ってまさか!？」

日向と姉貴が慌てて俺のほうを向く。

おそらく二人とも同じことを考えたんだろう。

……ま、二人とも考えていることは大方合ってる。

なんせ、この技は俺が今朝使ったしな……。

俺は日向と姉貴、二人の眼差しに答えるのであった。

「……身代わりの羽前流式紙術【空蝉】それがあそこにいる輝喜の
正体だ」

俺が呟いた瞬間、最初からいた輝喜はその姿をみるみるうちに小さくしていった。

そして、最後には手のひらサイズの一枚の紙となり、本物の輝喜のもとに舞い戻る。その一連の動作はこの式紙の術者が輝喜であることの最大の証拠であった。

「……なんで、輝喜が羽前流式紙術を使えんのよ？」

姉貴は口元を震わせながら呟く。

それに輝喜は一瞬……本当に一瞬だけ表情を暗くしたが、すぐにも俺達に見せる笑顔を造った。

「わかりません。俺には三年以上前の記憶はありませんから……」

『……………!?!?』

たかが一言、しかし、されど一言である。

その一言はその場にいる俺、日向、知恵理、姉貴の四人を動揺させるには充分すぎであった。

「そ、そんなことって……………」

……………特に知恵理の動揺の仕方は桁違いだ。

やはり、こいつにはちっとばかりキツすぎたかもしれない……………。

「……………記憶喪失」

「ええ、大雑把に言うとそのようになりますね」

日向の呟きに律儀に答えた輝喜はどこか遠くを見るような目で上を向く。

その姿は本当にさまになっていた。

「……あれは今から三年前、あなたや日向、知恵理に風と出会う三カ月前の出来事です……」

（三年と三カ月前）

その当時、俺はある組織に【能力者】として……売られました。

そのときすでに俺の記憶はなく、途方もなく歩いていたときに【能力者の狩人】アビリティーハンターに捕まったのです……。

その組織で過ごした一週間はまさに地獄でした。

食事は1日1食最低限のカロリーしか与えられない。

毎日三時間は訳の分からない機械に繋がれて。

昼の残りの時間はひたすら能力を使いこなす練習……。

俺は本気で自殺を考えたほどでした。

……でも、できませんでした。

その組織に入れられてちょうど一週間が過ぎたとき、俺に手を差し伸べた救世主がいました。

それは……。

ガチャッ!!

「だ、誰です!?!」

ここは俺専用の部屋……いや、牢獄と言ったほうがいいのかもかもしれません。

この扉が開くのは1日一回の食事が運ばれてくるときと、実験に連れ出されるとき、それに無理やり訓練に駆り出されるときのみしかありません。

しかし、今はどれにも当てはまらない……。

では、いったい誰が？

そして、ついに俺の部屋への扉が開きました。

ガチャン！！

「……大丈夫か？」

そこにいる人は俺が今まで一度も見ることがない人でした。

年は見た目二十代の後半、背は高く180は優に越えていて、顔立ちも悪くない。

でも、俺にとって一番印象に残ったのは男の深々とした深緑の髪である。

俺は男が出てきた瞬間あまりの出来事に言葉が出せませんでした。

「……しっ！しっ！静かに」

男は人差し指を口元に寄せて静かにするように言いました。

「お前は美濃輝喜で間違いないな？」

その言葉に俺は黙って頷く。

すると男はニコツと笑顔を見せて俺を抱上げたのでした。

「…………え？」

「…………黙って！！これから君をこの施設から出す、だから、もう少しだけ我慢しててね」

静かに、でも全力で走りながら男は俺に話しかける。

俺もこの施設から早くでればそれでよかったから必死に口を閉じました。

タッタッタッタ……。

抱えられながら走っている時間はかなり長く感じられました……。

しかし、それも光が見えたとたんに消し飛ぶ。

その光は俺にとって一週間ぶりの太陽の光だったからです。

バラバラバラバラ……。

光に気を取られているうちに俺は施設からだいぶ離れた場所に連れられてこられました。

そして、そこで待っていたのは一機のヘリコプター……その機体のボディーには時計の針で創られた十字架が描かれている。

男は迷いなくそのヘリコプターに近づいていきました。

「デモン！！デモン！！」

「聞こえてるよ【メモリー】そう叩かないでくれ」

ヘリコプターのコックピットから金髪の男が首を出す。

これが俺と【デモナン・カイハーツ・キルデ】との初対面である。

「……………それが例の子か？」

「ああ、日本人の少年で【ユニ………：ルー……ズ】の実験に利用させられていた」

「……そうか」

そのとき、辺りから人の気配が現れました。

追っ手がきたのです。

「ちっ！もう来やがった」

「いいから早くその子をへりに乗せて下さい！」

デモンの言葉を聞き終わる前に男は俺をヘリコプターに押し込みました。

……自分は乗らずに。

「行けっ！デモン！！」

「了解！！」

デモンはヘリコプターの操縦桿を一気に上げました。

それと同時にヘリコプターは上昇を開始しました。

「……じゃあな、坊主」

「あなたは誰ですか？」

男は俺の返しを予想していたのか、平然とした顔でゆっくりと口を開いたのだった……。

「俺は【メモリー・ワールドメッセンジャー】時の番人の情報局アトウムの局長さ……！」

それが、俺がその男と交わした最後の言葉でした。

でも、俺は信じています。

あの人は世界のどこかで必ず生きていると……。

だから……。

〈現在〉

「だから、俺はあの人への恩返しとあの人との再会のためにこの組織にいるのです」

……知らなかった。

輝喜に、あのいつも笑顔でハイテンションでみんなに幸せを振りまいていた輝喜にそんな過去があったなんてな。こんなんでよく【親友】と言えたもんだぜ……。

「さて、俺の過去の話をしたところで続きと行きましょつか、真備？」

その言葉に俺は現実に戻される。

……【親友】との死闘へと。

「……そうだな」

そして、輝喜は弓を、俺は拳を構えるのだった。

日向side

「神聖の槍^{セイクレッド・スピア}!!」

「へっ！バカの二つ覚えとはこのことだぜ？」

「少なくともマキビンにだけは言われたくありませんね!!」

ピュンッ!!…ピュンッ!!…ピュンッ!!…ピュンッ!!…

ブンッ!!…ブンッ!!…ブンッ!!…ブンッ!!…ブンッ!!…

……

……

……

…

輝喜の魂狩【恍穿弓】の光の矢と、真備の魂狩【雷神】の雷の拳が部屋中を明るく照らします。

お互いにかなりの手負いの状態……。

しかも、輝喜と真備は喧嘩の強いやつランキングの上位ランカー。

輝喜が三位で真備が二位、でも魂狩の扱いになれている輝喜と拳での喧嘩が最強（日向より上）の真備……。

つまり、二人の強さはまさしく同等。

はっきり言ってどちらかが勝負を諦めないかぎり勝負はつかない可能性が高かった。

しかし、輝喜も真備も勝負を譲る気はないようだ。

「ひびく……」

「……まったくだ」

知恵理が口元を手で抑えて涙ぐみながら呟く。

俺もそれに唇を噛み締めながら答えることしかできない。

なぜなら、目の前で俺の男の【親友】二人が殺りあっていて、俺はそれを上から見守ることしかできないからだ。

「……………【問題大あり】だよ、バカやるーども」

俺は兄貴が死んでからおそらく初めてその言葉を口にする。

……………ショックだった。

【親友】二人がお互いを敵とみなしているのがショックだったのだ。

「……………ヒナ君」

知恵理の完全に潤んだ目からは今にも滴が落ちそうだった。

でも、俺は知恵理の側に近づきその目の涙をすくってやることもできない……………。

……俺はこのとき自分の存在の小ささを知ったのだ。

「……あいつらに任せるしかない」

自分の口から出た言葉に俺は呆れることしかできなかった……。

真備 side

「神聖の斧セイクレッド・アックス!!」

パチンツ!!ヒュンツ!!

「ちっ!!この技嫌いだ!!」

俺は輝喜の弓から放たれた巨大な一本の矢を避ける。

だが、あいつの攻撃はこれだけでは終わらない。

輝喜が放った神聖の斧は俺の後ろにあった鏡に吸い込まれていった。

「……………神聖の鏡」
セイクレッド・ミラー

ヒュンツ！！

俺が後ろを振り返る間もなく、輝喜の一声で鏡から神聖の斧が放たれる！！

だが、ここがさっきまでの俺と違うところ。

俺は雷神から大量の電気を体内に流し込み、神経に頭を集中させた。

「……………【雷光神経】発動」

シュンツ！！

俺は雷光のごとき超スピードで動く。

そして、俺が動きだしてから3秒後（実際は1秒後）俺がいた位置を光の矢が通過するのだった。

「今度はこっちから……」

シュンッ!!

俺は再び【雷光神経】を使い高速移動する。

狙いはもちろん……輝喜だ。

「来ましたか」輝喜の声とともに俺は輝喜の目の前に現れ……。

「はぁー!!」

ブンッ!!

輝喜に向かって思いっきり拳を出した。

しかし、俺以外の誰かが話したかもしれないが、輝喜はあの華奢な体のわりには握力は俺達では一番ある。

そして、もう一つ。

輝喜の動体視力は飛んでくる矢を素手で掴み取る俺以上にあるのだ。

その結果、俺はさつきから拳を一撃もいれられないでいた。

そして、今回もおそらく……。

輝喜 side

「はぁー!!」

目で追っていた真備が俺の目の前に現れました。

最初は真備の動きに対して些か驚きで体が金縛りになってしまいま

した。

が、日向、知恵理、真備、凧の中で俺の動体視力はずば抜けています。

今回はそれがこうをなし、真備の拳をギリギリのところまで避けることができました。

だから、今回も避けられる。

そう思っていました。

しかし、俺が恐れていたことがついに起こったのです……。

ズキッ!!!??

「ぐっ……!!」

……お忘れかもしれませんが俺の体も、真備の体も既にボロボロ……。

だから、いつかは体が悲鳴をあげると思っていました。

そして、ここが一番の問題です。

俺も真備も実力的にはそう大差はありません。

いや、むしろ戦闘能力は均等していると言っても差し支えないと思います。

と、いうことは勝負を決めるものは何か？

それは……。

【相手の想像以上の何かを持っている】

【相手に隙を見せる】

この二つが勝負のさかえめになります。

では、ここで俺は何を言いたいのか？

簡単なことです。

つまり、お互いボロボロの体である今、怪我による痛みを気に取られることは【相手に隙を見せる】ことに繋がるのです。

しかし、それがどちらに早く来るのかは分かりません。

だから、俺は恐れていたのです。

俺の方に早く耐えられないほどの怪我の痛みが来ることを……。

「……しまった!」

「うおー!」

バキッ! ! ! ! !

……真備の拳による背中の痛みは、見事に俺を再び空中に浮かせる
のでした。

真備 side

「あ、当たった?」

俺は自分でやっておきながら、目の前の出来事に目を見開く。

「輝喜……」

「……コウ君」

「……輝喜」

上から聞こえてくる日向と知恵理、そして隣の部屋の姉貴から悲しそうな……切なさそうな……そんな声が聞こえてくる。

……だが、俺も日向や知恵理、姉貴の立場なら同じことをしたと思う。

なんと言っても【親友】と【親友】の戦いだ。

ある意味戦っている俺が一番楽なのかもしれないな。

「……しくじりました」

そのとき、俺の拳で飛ばされた輝言が立ち上がる。

おそらく口の中が切れたのか、口元から血が滴り落ちていた……。

「……輝言……」

輝言はゆらりと立ち戻す。

でも、その姿にはどこか威圧感があり、名前を呼ぶことすら戸惑わせた。

「……「こうく」皆さんは俺の目を見たことあませんでしたね？」

……俺がもう一度輝喜を呼ぼうとしたとき輝喜が話しはじめる。

「この目は俺が隠し続ける存在……そして、この目を解放することで俺の真の力が解放されるのです」

輝喜はそう言うといままで俺達ですら触れなかった右目の眼帯に手を触れた。

その瞬間、俺は理解する。

……俺達の共通認識の一つが今明かされると。

「……マキビン、あなたを倒すために俺は【あなたの想像】を超えます」

そして、輝喜は一気に右目の眼帯を取るのであった……。

「これを見て俺を軽蔑しないでくださいね……」

輝喜の眩きを俺は確かに聞いた。

だけど、それに答えることはできない。

別に輝喜の目を見て輝喜を軽蔑したわけではないのだ。

それは日向、知恵理、姉貴も同じだと思う……。

俺が……いや、俺達が声を出せないのはそんなくだらない理由ではない。

……ただ、純粹に輝喜の目を見て愕然としてしまったのだ。

まず、右目のまわりの血管が浮き上がっていてそれだけで痛そうだ。

普通の目の白い部分はどす黒く真っ黒に染まり、瞳は血が溢れ出たように真っ赤……。

例えるなら【悪魔の瞳】……。

俺達にはそう思えてしかたなかった。

「これが僕の右目に宿りし力……。

下ウローイング・フューチャー
【未来図】です」

第39話 墮天使な親友（後書き）

作「今日は俺の誕生日記念！！みんな祝ってくれー！！（これは9月29日の投稿作品です）」

作以外『おめでと〜！！』

作「アリガトー！！では一人一言お願いしたいと思います！では主人公日向から！！」

日「問題nothing まずはおめでと〜！！これからもがんばってくれよ？」

作「……なぜに疑問系？ま、いつか、次はヒロイン知恵理さんお願いします！！」

知「はい！！作者さんおめでと〜ございます！！最近私達に構ってくれなくて寂しかったのでこれを機会にもっと構ってください！！」

作「……たぶん、凧あたりに吹き込まれたんだな」

凧「なにが？」

作「知恵理のあれだ、あの知恵理が1ヶ月ほったらかしにしたことをあんなにネチネチ言うわけないだろ？」

凧「言い訳していいわけ！？」

作「……時間がないのでここまでにしたいと思いまーす。

さて、今回は輝喜のもう一つの秘密が明らかになります!!

輝喜の右目、ドゥローイング・フューチャー【未来図】に宿っている力とはなんなのか!?

その力は今後の戦闘をどう変えるのか?

次回【未来視の悪魔瞳】

日「問題nothingだぜ!!」

真「なあ、そっいえば俺達は祝なくてもいいのか?」

輝「1ヶ月ほっておいたやつには何も言わなくていいんだよ、マキ
ピン」

真「……お前も意外と引つ張るな?」

輝「なんせ【レリエル】ですから、皮肉もできるんですよ……
……」

真「だな」

真& amp; 輝「作者、誕生日おめでとう……!!」

次回に続く!!

第40話 未来視の悪魔瞳（前書き）

輝喜の右目に宿りし【未来図】の力とは何なのか！？

真備はその力に対抗することができるのか！！

真備と輝喜の戦いもいよいよクライマックス！！

それではどうぞ

第40話 未来視の悪魔瞳

真備 side

「これが俺の右目に宿りし力……。

ドローイング・フューチャー
未来図です」

輝喜の右目を見た瞬間から俺は放心状態になっていた。

でも、輝喜はただ呆然としてのことしかできない俺達に関係なく話を続ける……。

「この瞳は俺の最終手段……奥の手です……実際にこれを使うのは刹那以外では初めてのことなんですよ……」

「……刹那？」

意識を戻した俺は未だに部屋の端で恐怖に震えている刹那に顔を向ける。

それに気付いたのか、刹那は顔を上げることはないが、組んだ腕を

ギュツと強く結び直したのだった。

「…………なぜ、刹那には使ったの？」

刹那の横にいる姉貴が輝喜に聞く。

それに輝喜はあのニヒルな笑みを浮かべる…………。

その笑みと口から滴る血、そしてあの悪魔の瞳のような右目が全てミスマツチに思えた。

「…………この瞳の力は刹那のあの技にとって切り札になりうるのです」

「あの技って何よ？」

「…………風、あなたがその技に一番苦しめられたはずですよ？」

「……………あ！？」

輝喜の言葉に姉貴ははっとしたみたいだ。

そして、姉貴だけではない…………。

俺も日向も知恵理も輝喜の言葉で気づく。

「そうです、刹那の唯一にして絶対の技【静寂の雪・風花】です」

その言葉に俺はさらに愕然としてしまう。

なぜなら【風花】は雪化粧を体に巻くことで、姿、足音、気配、殺気の全てを消し去る技……。

さっきの戦いでは姉貴が風の力を使い破ったが、実際問題俺にはあの技をされたら勝てなかつたと思う。

でも、あの瞳は刹那のあの技を簡単に破れると言っているのだ。

俺にはそれだけでもあの瞳の恐ろしさが理解できた。

「さあ、始めましょうか真備？」

その声に俺は顔をしかめる。

なぜなら、さっきまでとは違い俺は今圧倒的に不利な状況だからだ。

でも、輝喜はそんな俺に弓を構えるのだった……。

「……………神聖の斧」
セイクレッド・アックス

パチンツ！！シユンツ！！

輝喜の恍穿弓から巨大な一本の矢が放たれる。

この【神聖の斧】は一本の巨大な矢を放つ、しかしその矢は当たったら強力な圧力がかかり、対象物を一気に粉々にする恐ろしい技……。

つまり、この矢は掴み取ることはできないから避けるしかないだ。

「くっ！！」

俺は迫ってきた矢を右に避ける。

ヒュンッ!!

それから一秒もしないうちに俺の左を神聖の斧が通過していった。

後ろには反射可能な鏡はない。

これで輝喜の攻撃は終わるはずだった……。

輝喜が右目を解放する前の話ならな……。

「……予定通りです」

「っ!?!」

輝喜の眩きに俺は輝喜のいる方に振り返った。

……そして、俺の目の前まで迫ってきている矢が目に入ってきてきので

ある。

「な、なに!?!」

俺は飛んでくる矢を見た瞬間に急いで神経を頭に集中させた。

少しでも早く、必ず避けられるように……!!

その結果、俺はいままでの中で一番早く【雷光神経】を発動させることができたのだった。

「発動!!」

シュンツ!!

俺は通常の三倍のスピードで動き輝喜のいる方に走り出す。

そのスピードは輝喜の光の矢のスピードには届かないにしろかなりのスピードだった。

少し予定が狂ったとはいえこれで今までの動きと同じ。

俺はさっきとあまり変わってない状況に安心しきっていたのだった

……。

そして、輝喜は呟く。

あの言葉を……。

「サジタリウス射手座の矢は必ず当たります」

……俺は【鏡写し】のときと同じ過ちを犯してしまったのだ。

しかし、その事実気づくのが遅すぎた。

輝喜は俺が目の前まで迫っているのにまったく動じず終始笑顔。

しかもその笑顔が悪魔の瞳【未来図】をもちき消していることに驚きだった。

輝喜は笑顔を崩すことなく再び口を開く……。

俺を貫く矢の正体を……。

「変幻自在の矢【神聖の鎌】セイクレッド・シッケル！！！」

ザシュツ！！

……俺は背中に鋭い痛みを感じるのだった。

日向side

ザシュツ！！

真備の背中を貫いた矢……神聖の鎌と名付けられたあの矢に俺は息を呑む。

神聖の鎌……その正体はこの一連の動作で真備に放たれた二本目の矢だ。

でも、なんでその矢が鎌やいしの向かう先とは真逆にいる真備に攻撃することができたのか？

答えは至極簡単。

……二本目の矢が孤を描いて旋回したのだ。

その動きはまるで鎌の刃みたいな動き、鎌の曲がった刃そのものだった。

でも、俺にとってはそんなことはあまり関係ない。

実際、輝喜の技はかなり多彩である。

その技のほとんどが真備を苦しめる原因となっていたから今更新しい技を出してきてもあまり驚かなかった……。

むしろ、俺が驚いたのは一本目【神聖の斧】と二本目【神聖の鎌】を放つまでのタイムラグ……そのスピードがあまりに早すぎたのだ。

【神聖の斧】を放ってから【神聖の鎌】を放つまでの時間差……およそ三秒。

つまり、一本目の矢を放ってから輝喜は迷いなく真備が避けたところに矢を放ったのだ。

……真備が避けるよりも早くに……。

「ぐっ!!」

真備は矢が刺さった背中を庇いながら輝喜の目の前に座り込む。

その行動に輝喜は構えていた弓を下ろした。

「……この技は普通の状態ではできません。【未来図】を発動させている今だからこそできるのです」

輝喜は真備を見下ろす形で話し始めた。

その間【未来図】が宿っている右目は閉じている。

「どづいつことだ輝喜？ いったい、その目の力は何なんだ？」

俺は心を落ち着かさせて輝喜に問う。

しかし、このとき実際の俺はこの意味を理解していたのであった。

輝喜の技、神聖の鎌の短所……。

だが、俺にとってみれば輝喜がその短所を長所にしてしまったことを知りたかったのだ。

だから、敢えて分からないフリをして輝喜に訪ねたのだった。

ま、輝喜にはバレバレみたいだな。

「……日向、あなたなら言わずとも分かっているではありませんか？」

俺の思惑を知ってか知らずか、輝喜は俺の心を完全によむ。

……でも問題 nothing、俺は動揺することはない。

輝喜の顔をしっかりと見据えて輝喜の問いに答えるのだった。

「……普通、神聖の鎌は動いている相手に当てることは不可能……
だろ？」

その言葉に輝喜は顔色一つ変えることなくニヒルな笑みを浮かべるのだった。

「確かに、神聖の鎌は動いている相手を射ることは不可能です……」

「……だが、実際は当たっている。しかも、【雷光神経】で高速移動している真備にだぞ？」

「ええ……大体この技は動かない相手への奇襲用の技……実際に戦闘では役にたたないでしょう」

そう言っつて輝喜は口を閉じる。

片方しか開いていない瞳は俺達の誰も見ていなかった。

だが、すぐに真備、凧、俺、そして知恵理を順番に見ていき全員を眺めたあと、閉じていた右目を指差しながら話し始める……。

その瞳は閉じられたまま。

悪魔の瞳【未来図】の正体を話し始めるのだった……。

「でも……相手が移動する場所を知っていたら話は別ですよ」

そして、輝喜は再び【未来図】の右目を開く。

「この目に宿りし力……その正体は……」

……未来を映し出すことです」

俺はその一言に呼吸を忘れる……。

だが、これで全ての謎が解くことができた。

未来を見る力……その力があれば今までのことに全て合点がいく。

まず、刹那の【静寂の雪・風花】あれの唯一とも言える弱点は【姿を消したまま攻撃できない】こと。

凧との戦いを見ていてそれは手に取るように分かった。

そして、攻撃するためには必ず風花を解かなければいけない。

しかし、輝喜の【未来図】の力をもってすれば刹那が現れるその場所を始めから分かっているということになる。

これでは隠密行動の意味がない……。

そして、さっきの【神聖の斧】と【神聖の鎌】の二連射……。

これは掴むことができない神聖の斧を放つことにより真備に矢を避けさせる。

さらに、真備が避けた場所をあらかじめ【未来図】で予想していた輝喜はその場所に神聖の鎌を放つ。

もしかしたら、真備が避けることも輝喜は知っていたのかも。

だから、神聖の鎌を反転させて【雷光神経】使用後の真備を射ることができたのかもしれない……。

つまり、三重の仕掛けがしてあったということだ。

そんな攻撃を真備が避けられるはずがない。

しかも、それを全て可能にしているということは……輝喜の話が本当だということを実証していた……。

真備の勝ち目が極端に減ったということだ。

俺は輝喜から目を反らし、倒れる真備に目を移した。

「ちっ、どうなってんのかさっぱりわかんねー」

「……ただ一言なのに分かりませんでしたか」

そのとき、背中に矢を刺したまま真備が立ち上がる。

輝喜も特に気にした様子もなく、手が触れそうな距離で立ち上がった真備を見つめていた。

「は……マキビン、つまりは……」

輝喜はおそらく、さっきの言葉よりさらに簡単な言葉を探そうと右目だけではなく、両目を瞑った。

だが、真備はそれを否定する。

「違うー!」

……真備の声が部屋を揺らした。

「……違う、とは？」

「お前が言っていることは理解してるっつーことだ。俺が言いたいのはまた別のこと……」

真備はそこまで言って言葉を止めた。

そして、俺はその真備がしている横顔に目を奪われてしまう。

真備の顔は今までにないほど……。

……怒っていた。

「てめーが何を考え、どんな力を使おうが勝つてだ……」

輝喜の顔が歪む。

輝喜の表情にはまた新しい顔があった。

俺（天使）と同じ【漆黑】と悪魔と同じ【紅蓮】の双瞳が……揺らいで見える。

残念ながら俺にはその表情が何なのか分からない。

……けど、輝喜の心情を何かが貫く。

これだけ言うことができた。

「……だが……」

そして、輝喜の心情にずいずいと侵入していく真備。

もしかしたらあいつ（真備）は誰よりも……。

「……自分の心にだけは嘘をつくな」

「!!!?」

人の心を読む力があるのかもしれない。

「お前が俺と殺り合うのは本意じゃない」

輝喜は真備の言葉にあきらかに動揺を見せる。

そして、俺はこの動作で輝喜の表情の謎が解けた。

あれは、俺達に自分の真意を知られるのに【恐怖】した顔だったのだ……。

輝喜は俺達を完全に裏切れていないことを知られなくなかったんだな。

まったく……あいつらしいといえばあいつらしいな……。

そして、真備にはもう一つ力がある……。

それは……。

「……………ひっく……………ヒナ君……………」

不意に俺を呼ぶ知恵理の声。

……………見なくても分かる。

知恵理が泣いていることに。

きつと、真備の言葉を聞いて耐えられなくなったんだ……。

俺も真備の言葉、知恵理の泣き顔を見て何かが弾け飛ぶのを感じた。

知恵理の泣き顔は俺が一番見たくないもの。

だから、俺は知恵理の顔を見ず咳いた。

「……………問題 nothing」

俺は立ち上がる。

真備のため……………。

輝喜のため……………。

何より、知恵理のために……………。

「……………ぐすつ……………ヒナ君？」

心配そうな知恵理の声。

だけど、俺が振り返ることはない。

俺が見つめるものは真備の言葉と知恵理の涙に気づかされたただ一つの思い。

【知恵理を泣かすやつだけはどんな理由があろうと許さない……！】

という決意だけだ！！

そして、俺は意を決して右手を前に差し出す。

……これが正しい答えだと信じて。

「来い……紅翼……」

ポーン！！

俺の声に反応して辺り一面が炎に包まれる。

知恵理だけじゃなく、真備、輝喜、凧に水城と刹那まで俺を見てい

た……。

だが、それも当たり前のこと。

この場面での紅翼の発動は予想外に違いなかった。

でも、俺はそんな中、自分の周りに燃えたぎる炎を紅翼で切り裂く
のだった！！

ザシュツ！！

「日本刀の魂狩【紅翼】」

俺は改めて真備と輝喜を見つめる。

その瞳が【深紅】だと気付かずに……。

……真備にもう一つ力がある。

誰よりも人の心を動かす力がな……。

第40話 未来視の悪魔瞳（後書き）

知「こんにちは！！姫ノ城知恵理です」

作「こんにちは！！作者の+HYUGA+です」

知「今回は作者さんにここ二回分くらいの説明をしてもらいます」

作「よろしく(^-^)/」

知「さて、さっそくなんですが前回出てきた【メモリー】さんについて説明お願いします」

作「本当に早いですね？」

知「時間ありませんから」

作「ま、いつか。あど時の番人についてはこの人から!!」

水「……時雨水城だ。メモリーは時の番人の情報局アトウムの局長だ。アトウムとはエジプトの創造神のこと。あと、作者が情報局と医療局につける名前を間違えた。以上、帰る。」

水城は突然現れてそれだけ話すとこれまた突然帰っていった……。

知「……風みたいな人でしたね」

作「ああ、しかもよくこのコーナーに出てくれたよな……」

知「ところでさっき興味深い話が……」

作「次行きましょー」

ちなみに本来は情報局が創造神の【ビシエヌ】で医療局は医療の神【アスクレーピオス】の予定でした。

知「むー……しかたないですね。次の質問行きたいと思います」

作「お願いします……といきたいところですが時間とネタ切れですね（笑）」

知「え〜〜!!!!???」

作「だって、今回説明すること何にもないも〜ん

では、次回予告!!

傷だらけの真備に異変を感じる輝喜……。

そんな二人に日向の決心はいったい何をもたらすのか!!

そして、ついに真備VS輝喜の闘いが決着!!

果たしてどちらが勝つのか!?

次回【雷光と閃光】

日「問題nothingだぜ!」

知「あ!ナギちゃん!」

作「えっ!」

凧「……あなた、変なところでうっかりやったわね」

作「あ、あの〜(^ - ^)」

凧「一応言っとくけど、あなたはF?teの赤い悪魔にはなれないからね(ニッコリ)」

作「× ㊦? / (声にならない叫び)」

その後、作者はすっかりミスをなくすようになった……。

……多分ね!?

次回に続く!!

第41話 雷光と閃光（前書き）

いよいよ真備VS輝喜の闘いに決着が！？

今回はさっさと行きます！！！！

では本編をどうぞ！！！！

第41話 雷光と閃光

知恵理 side

コウ君……。いえ、美濃輝喜……。

その名前は私にとって一生忘れられない名前。

ううん、違う。

それは、忘れてはいけない名前……。

私達と出会い、私達と過ごし、私達と仲を深め、私達と……。

……。

……私達と……敵対している存在……。

お互いに【親友】と呼び合ったマキ君とコウ君……。

そんな二人がお互いに拳と鋏やじりを向けあったとき、私は悲しみをかみ

殺した。

そして、たぶんヒナ君とナギちゃんも……。

でも、マキ君の言葉でコウ君が本当は私達に鏃を向けるのが本意じゃないと知ったあのときはたえられなくて泣いちゃいました。

コウ君が私達と本当は敵対したくないと思っていることにたいする喜びの涙……。

そして、それでも私達と敵対することを止めないコウ君にたいする悲しみの涙……。

だから、涙が止まらない……。

私は無意識のうちにヒナ君の名前を呼びました。

「……………ひつく…ヒナ君…」

私の声にヒナ君は肩を震るわせました。

たぶん私の泣き声を聞いたから……。

ヒナ君は私のほうへ振り返ることなく立ち上がりました。

その行動に私は不安を覚える。

……ヒナ君もあの二人みたいに私に恐怖を与えるかもしれない。

そう思った私は今度は自分の意志で恐る恐るヒナ君を呼んだ。

「……………ぐすっ……………ヒナ君？」

ヒナ君だけは私の側にいて！！

ヒナ君だけは私から離れていかないで！！

ヒナ君だけは……………私をずっと見つめていて……………。

そんな願いを込めてヒナ君を呼びました……………。

でも、ヒナ君にそんな心配しなくてよかったみたい。

……………だって、物心ついたときから私の隣に一緒にいてくれたヒナ君。

私には勿体無いくらいに私のことを思ってくれる幼馴染なんだから……。

「……問題 nothing」

私にはその一言だけで満足でした……。

真備 side

「発動……紅翼……」

ポーツ!!

日向がそう言つとあいつの周りが燃え上がる。

その映像に俺達はただただ驚愕の眼差しを向ける事しかできない。

なぜなら、ここでの日向の紅翼発動は完全なる予想外な出来事だったからだ。

ザシュッ!!

炎が消え去る前に日向が周りを囲んでいた炎をぶつたぎる。

前髪で隠れて表情はうまくうかがえない。

だが、日向のまとう雰囲気……

それは今までとは何か違うきがしてならなかった。

「輝喜!!」

日向のやつがさっきの俺の言葉に動揺している輝喜を呼ぶと、輝喜は動揺を隠せずビクッと体を震わした。

「真備!!」

今度は俺を叫び呼ぶ。

俺はその声に輝喜への怒りを一瞬忘れてしまう。

俺達は日向のいきなりのこの行動にただ呆然としてしまった。

だが、日向はそんなことお構いなしに俺と輝喜を睨みつける。
まるで今から鬪おつとする敵を見るような目つきで……。

……いや、違う。

あいつのあの目つきは自分の敵を見る目つきなんだ。

そしてもちろん、あの目つきを知っているのは俺だけじゃない。

真横にいる輝喜の顔をのぞいてみれば日向のあの目を見てすくんでしまっていた。

さっきの俺の言葉と合わせて気持ちの整理が追いついていないんだろつ。

「……日向？」

少し脅えをもった声で輝喜が日向を呼ぶ。

……だが、次の瞬間輝喜の体が強張った。

俺はその理由がまったく分からなかったが、その答えはすぐに返ってきた……。

……日向の刀から。

「……一式【飛炎】」

ポーーーーッ!!!!

日向の刀から炎の魂が数弾飛んでくる。

その弾は迷いなく俺と輝喜の1メートルもない間……つまり、今にも俺と輝喜に当たりそうな距離に飛んできたのだ。

「なっ!?!」

「……っ!?!」

輝喜は未来図の力で予想していたらしく飛んできた瞬間に後ろ跳びで【飛炎】を避ける。

俺は輝喜に遅れること三秒【雷光神経】を発動させて一気に避けた。

ダンッダンッダンッ!!!

輝喜と距離をとった場所に移動した俺が見たのは、木っ端みじんになったさつきまで俺と輝喜がいた場所だった。

「なにしゃがる日向!?!」

俺は日向の突然の行動に驚きつつ、怒りの言葉を日向に向けるために叫んだ。

しかし、日向は逆に静かな声で怒りの言葉を表すのだった……。

「……お前らこそ何やってんだよ?」

「な、何をだよ?」

その声に俺はたじろいでしまう。

大声とは違い、何か別の……威圧があった。

「……お前らが何しようとして勝手だ……。」「

日向の話は続く……。

その威圧感を保ちながら……。

「俺自身この闘いを止めることも止める勇氣もなかったさ……」

ああ、俺ももし同じ立場ならそうしたさ。

なぜなら目の前で闘っているのは【親友】……怖くて止めることができるわけない……。

「……でもな、これだけは言わせてくれ」

そして、日向の話は終盤になるにつれて哀愁が漂ってくる。

始めはその理由は分からなかった……。

次の言葉を聞くまではな。

「……知恵理が……泣いてたんだよ」

……その言葉は俺と輝喜の心を貫いた。

「……俺はお前たちに夢中で大事なことを忘れてたんだ……」

……それはお前だけじゃないさ、日向。

「……だけど、さっきの真備の言葉で思い出したんだ……俺がやらなきゃいけないことを……」

だな、俺も自分で言うておきながら自分自身忘れていたということか。

「……それはな」

「知恵理を傷つけるやつは絶対に許さない!!!」

……日向の決意、その強さに俺達はただただ静寂とした空間を作り出すことしかできなかった。

日向の決意が俺達の思いと同じだったからだ……。

でも、その決意が一番強いのはやっぱりあいつ……日向だ。

なんせ、日向にとって知恵理は孤児の施設にいた……いや、生まれ
たときからずっと大切に生きてきた存在だから……。
あいつにとっての中心は銀髪の彼女……そして、絶対に守るべき存
在なんだ。

日向の言葉に静寂してしまった中で俺はそう考えていた。

たぶん、あいつも……気付かされたらろう。

そして、予想通りにこの静寂を破ったのは……。

「……俺は何を迷っていたんでしょうね？」

静寂を破ったのははっきりとした輝喜の言葉だった。

その顔には脅えの表情はまったくくない。

明らかに何かを吹っ切った顔だった。

「確かに日向の言うとおりですね……どんな考えを持っていても……どんな力を持っていても……それが知恵理を傷つけていい理由にはなりませんからね」

その言葉に俺は驚きと喜びの顔で輝喜のほうを向く。

それと同時に知恵理がこれでもかというくらいの声を上げた。

「じゃ、じゃあもう闘いを止めてくれるの!？」

……でも、俺達はその願いを聞き入れることはない。

だが、知恵理……お前に悲しい思いは極力させないさ!!

なぜなら、そのための方法を俺達は知っているからな。

俺はすぐに日向に視線を送る。

その視線の意図を察したのか、日向は俺に……そして輝喜に視線を返し、知恵理に微笑みかけるのだった。

「……知恵理、もうすぐ終わるからな」

「ヒナ君？」

キョトンとした顔で日向を見る知恵理。

俺と輝喜はその様子を見ながらゆっくりと……。

拳と鏃を構えるのであった。

「え!？」

知恵理の顔が一瞬にして悲しみの顔に逆戻りする。

実際には見てないが、見なくてもそれくらいすぐに分かった。

「な、なんで？」

静かに、今にも消えちゃいそうな知恵理の言葉は俺と輝喜の心を揺

さぶる。

だが、そこで止めてしまったらいけない。

だってこれは俺と輝喜のケジメなんだから……。

「……俺達はあなたを悲しめるようなことはしたくありません」

輝喜の言葉を俺が継ぐ。

「ああ、そうだ……でもな一度始めた決闘には決着をつけなければいけない」

そして、輝喜に言葉を返す。

「生憎と真備は全身傷だらけ。俺もさつき顔に受けた真備の拳で脳を揺らされたみたいで意識が朦朧としてきました」

再び俺に返される。

「つまり、俺も輝喜ももう長時間闘える状態じゃない。俺も輝喜も知恵理が悲しむ顔は見たくない。そのためには長時間闘ってはいけ

ない」

そして最後は俺と輝喜同時に叫ぶ！

『だからこの一撃で決める（ます）！！！！』

さあ、最後のパーティーの始まりだぜ！！

どっちが勝っても恨みっこなしの真剣勝負を楽しもう輝喜！！

……おっと。その前にやっとなかないとな。

輝喜との決着を……。

「おい、輝喜！！！！」

「なんです？？」

輝喜の顔にはさっきまでの脅えの表情はない。

変わりにいい感じの緊張感を持った笑みを浮かべ恍穿弓の弦に手をかけている。

……これならいいかな。

「……さっき俺が【自分の心には嘘をつくな】って言ったけど……
やっぱりいいやー!」

そう、あいつが俺達のことを考えてくれていることは十分分かった。
でも、あいつは俺達に鎌を向ける。

たとえそれがあいつの望みじゃなくても……あいつの選んだ道なん
だから……。

だから、この一撃で決めさせてもらおう!……!

だっってお前は俺達の……。

「それにお前の顔を見ればお前に迷いが無いことも分かる。たとえ
心に嘘をついていてもそんな真っ直ぐな顔をされりゃ納得するしか
ないさー!」

俺達の大切な……。

「だから、行ってこい！！輝喜！！」

【親友】だからな。

「……ありがとうございます、真備」

輝喜の漆黒と紅蓮の双瞳から涙が溢れる。

それを見た俺はこみ上げてくる何かを抑えつけて日向を呼ぶ。

……最後の仕上げだ。

「日向！！！！！！」

俺は高々と右腕を掲げ、人差し指で天井を指差す。

突然呼ばれた日向だったがこの動きを見て感づいたらしく俺と同じように紅翼を天井に向かって掲げる。

これが俺と日向の決まり事だった。

指差しているのは天井。でも、実際はそのさらに上……俺と日向の合図ともなるこの動きが示す先には【天^{てん}】を意味するのだ。

「日向！……！」

これから俺はあの分からずやに一発見舞ってくる。

正直言つと怖いさ。だから日向、お前の力を貸してくれ……！」

「俺達がしなければいけないことは何だ!？」

「……問題 nothing、分かってるって」

そして、俺は雷神をつけた右手を、日向は紅翼を輝喜に向け、同時に叫んだ。

『天誅！……！』

……ありがとよ日向。

おかげで調子が戻ったぜ。

「行ってこい馬鹿弟」

「マキ君…コウ君を……お願い……」

知恵理と姉貴がそれぞれの思いを俺に託す。

だが、それに俺は声を出して答えることはない。

でもその思いにはしっかりと答えるのだった……。

(ああ、行ってくるぜ二人とも……俺自身の気持ちの清算にな……)

これから先は間違いなく俺と輝喜の1対1の闘いだ。

でも、しっかりこのパーティーを楽しむさ!!

なぜならそれが今の俺に出来る一番のことだからな……。

「……輝喜」

「なんです真備？」

「最後の一撃の前に俺は一点訂正するぜ」

「……………何をですか？」

これはほんの思いつきだ。

輝喜との闘いの前に俺は自分の技を何も持っていないことに気がついた。

だから、俺は全力で当たるために……。

「お前のアイデアを貰う」

その言葉に輝喜は何のことかさっぱり分かってないみたいだ。

だが、それでいい。

やっぱり技の名前は最後まで隠しておして、最後に全力で明かした
ものさ……！

……………お前みたいにな。

「……………発動【雷光神経】」

パチパチッ！！

俺は刻一刻と迫るその瞬間に備えて頭の神経に雷の力を回す。それと同時に右手にも雷の力を放出させ、攻撃に備える。

「……言っておきますけど、サジタリウス射手座の矢は外れることはありませんよ？」

対して輝言は最早おなじみのセリフと一緒に一本の巨大な矢を構えた。

【神聖の斧】セイクレッド・アックス……俺が最も苦手とする技だ。

これでお互いに準備完了。

あとはその瞬間を待つだけとなった。

『ふー』

俺達は最後のパーティーの前に同時に息を吐いてしまう。

それに気づいた俺達はお互いの行動にほんの少しだけ笑顔が漏れたのだった。

そして、俺は……いや、俺達はこのとき初めて気付いたのだ。

俺達は【雷光】と【閃光】……似たもの同士なんだと……。

「……【雷光】による裁き（【天誅】）か」

「……【閃光】による裁き（【肅正】）か」

お互いに相手から視線を離さない。

これが俺達の闘いだからな！！

そしてまたもや同時に俺達は叫ぶ。

最後のパーティーの幕開けだぜ！！

『いざ！！勝負！！』

シュンッ！！

俺は神経をフル稼働させて輝喜のもとに向かう!!

「無駄です!!」

しかし、輝喜は閉じていた右目を開き真っ赤に滲んだ【紅蓮】の瞳を開眼させた。

未来を見る力が宿る【未来図】だ!!

「この目はあなたの動きを確実に捕らえます!!」

輝喜の言つとおり、あの目には俺は完全に動きを読まれているだろう。

……でもそれは輝喜に対して【嘘】をつけないというだけ……。

つまり、輝喜に対して【嘘】をつかず【バカ正直】に行動すれば未
来図の力は何の意味もなくなるということになる!!

だったら……。

「なっ!?!」

……こうすれば何の意味もなくなるってことだよな?輝喜?

俺は走りながらニヤリとくちもとを歪ませた。

「……そう来ますか。まさか【真っ正面】から攻撃を仕掛けてきま
すとは……」

そこまで言うと輝喜は握っている弦に力を入れる。

その行動で全てが分かる。こいつは……。

「おもしろいです!!受けて立ちましょ!!!!」

最高にパーティーを楽しんでるんだとな。

「そつこなくつちやな!!」

そして俺は最高の言葉を叫んだ。

そつ。お前から貰った技の名前を……。

「くらえ!!俺のしびれる最速の拳【電光石火】!!!!」

輝喜は俺の技の名前の名付け親が自分だとわかり驚いた顔になる。

だが、輝喜はそれに惑わされることはない。

俺が【電光石火】で迫ってきていると分かるとすぐに力を込めている
恍穿弓の弦を放った!!

「セイクレッド・アックスいってください!!神聖の斧!!!!」

パチンッ!!シュンッ!!

今までだったらこの攻撃は避けなければいけなかった。

でも今回は避ける気なんてサラサラない!!

俺は飛んできた神聖の斧を見据え、思いっきり雷の力で強化された拳で殴りつけた!!

「うおー！ー！ー！ー！ー！」

「やはり正面から来ますか!!!!ならば俺も全力で行きます!!!!」
【解放】!!!!!!

ドンッ!!!!!!

神聖の斧の圧力が解放される。

それに合わせて光の矢も今日一番の輝きを放ちながら俺の拳に衝突した!!

ガキンッ!!!!!!!!

拳には矢が刺さる痛みはない。

しかしそのかわりにまるで大きなビルを殴っているような重たい感

覚が拳の行く手を拒んでいた!!

「くっ!? まだまだ……っ!!!!」

俺はさらに右腕に雷の力を集中させた!!

ピシャー……っ!!!!

「俺だって負けるわけにはいかないんです!! 圧力解放【第2フェイズ】……!!」

輝喜がそう言った瞬間、神聖の斧はその輝きを一段と増さして俺の雷の拳と渡り合う!!!!

ザンツ!!!!

譲れない闘い、それが最高のパーティーとなり俺達を楽しませる。

今にも倒れてしまいそうなこの状況……。

自分自身あまりの楽しさについていけてなかった。

ただど……終わりのときは段々と迫ってきていた……。

「うおー……っ……!!」

「はぁ……っ……!!」

俺達のほつこつが部屋中に響き渡る。

いつの間にか部屋の中は俺の【雷光】と輝喜の【閃光】で目も開けてられないほどの眩い光に包まれていた。

そして、その中心にいる俺達は……限界だった。

「ぐっ!!ちくしょー……」

「真備……!!」

辺りに兎玉する様々な雑音でよくは聞こえなかったが、輝喜は確かに俺を呼んだ。

はっとして輝喜のいたほうを向く。

光の空間の中、輝喜の姿はどこにも見えない。

でも、俺にはその姿はつきりと見えていた。

いつもの輝かんばかりの笑みを浮かべた……【美濃輝喜】の姿が……。

「ありがとうございます……マキビン」

ドカーーーンッ！……！！

そしてパーティーは誰もが予想もしなかった終わり方を迎えた……。

第41話 雷光と閃光（後書き）

作「今回は久しぶりに技の解説をしたいと思いまーす！ー！！」

輝「基本的に俺の技が主体になるんですよ？」

日「一応俺のもある」

真「俺のは？」

凧「心配しなくてもあんたも今回出てきたから滑り込みセーフよ」

「ー#」

知「……ナギちゃん何か機嫌悪くない？」

日「自分の技がないからだろう？」

凧「そこー！何かいった！？」

日&mp;知『何でもないです！ー！！』

作「はははは、では行きたいと思えます、どっぞー！！」

日向の技

【一式・飛炎】

日輪流炎術の一番目の技。炎弾を数個相手に飛ばす技である。

輝喜シリユルの技

【神聖の斧】

巨大な一本の矢を放つ技。それに加え対象に当たると圧力で粉々にする力もある。ちなみに圧力の度合いは現在【フェイズ2】まである。

【神聖の鏡】

特性の【鏡写し】を利用して鏡に光の矢を反射させる技。

【神聖の鎌】

光の矢にスピンをかけて鎌の刃みたいに弧を描かせて曲げる技。未
来図の力と合わせると動く敵に当てることも可能。

真備の技

【電光石火】

特性の【雷光神経】で相手に素早く迫り、雷を纏わせた拳で相手を
殴る技。

作「以上が新たに出てきた技ですね!!」

知「これからも増えるんですね?」

日「これから先は俺と水城の技が増えるだろうな!!」

作「まあ、そうですね!!」

では、次回予告をします。

突然の大爆発で真備と輝喜の闘いが終わった……。

果たして勝ち残ったのは真備か？輝喜か？

そしていよいよ日向VS水城の頂上決戦!!!

水城の部屋とはいったいどんな部屋なのか!?

次回【時雨の間】

日「問題nothingだぜ!!」

凧「はぁー……あたしにも早く技できないかな？」

真「お、おい姉貴が落ち込んでるぜ（ぼそぼそ）」

輝「な、何かよくないことがおこるのでは？（ぼそぼそ）」

日「問題nothing……たぶん大丈夫じゃね？（ぼそぼそ）」

知「ね、ねえ三人とも……後ろ……見て」

日&真&輝「へ?」

そこには風が仁王立ちしていた……。

風「あ〜ん〜た〜ら〜は〜!!!」

日&真&輝「……終わったな」

ちなみにこの後、知恵理が必死に救急箱を持ってきました。

第42話 時雨の間（前書き）

輝喜と真備、果たしてその勝負の行方とは？

水城の部屋とはいったい？

そして、彼らに近づくと影がもう一つ……。。

では、本編をどうぞー！

第42話 時雨の間

?????side

「……」

時は少し遡り、輝喜がまだ正体を明かしていないときに、一人の男が日向達がいる洋館の前に立っていた。

容姿は黒いフードに隠れているため伺うことはできない……。

だが、彼こそが昨日不良グループ【アンチチェーン】に知恵理と凧を襲うように依頼した張本人である人物だ。

「……時の番人も動き始めたと聞いたが所詮はたかだか東洋の島国にある弱小組織……【雨の死神】【破壊の旋律】そして【紅翼の天使】以外にこの組織には興味はない……」

男はフツと鼻で一回笑うと被っていたフードをとる。

そのとき露わになった顔はもし日向達が見ていたらおそらく輝喜のときと同じ反応をしたらろう……。

だが、この場に日向達はいない。

だから男は悠々とその容姿をさらけ出すのだった。

「【破壊の旋律】が組織を離れている今が絶好の機会、我らが計画のために早く【時の少女】を奪うことにしますか」

その男の容姿は黒い瞳に整った顔立ち……そして彼の長い髪の毛は後ろで一括りに縛られていた……。

そう、フードをとったこの男は昨日、桜時学園に転校してきた男……。

「それが我ら【ユニオンクルーズ】の目的であり【ユニオンナンバーズ】の存在意義なんだからな」

その男【李・悶】は着ていたコートを脱ぎ捨てる。

彼が下に来ているのは両肩を露出させた戦闘用のチャイナ服……。

そして彼の左肩には【?】の刺青が彫られていたのだった。

「地球という宇宙船の乗組員に選ばれし我らにご加護を……導師」

そう言うと彼は左手を前に出し力を込める。

そのときの悶の目つきはまさしく血に飢えた獣……今にも発狂しそ
うなくらい怖ろしい目となっていた。

だが、悶はそんなことお構いなしに左手の力を強くしていく。

叫びに似た咳きと共に……。

「発動！！！！！！」
【地獄の門】^{ヘル・ゲート}！！！！！！」

悶の左手周辺が赤く染まり金属の形に変形していく……。

爪は金属製の鋭く大きいものとなり、腕から肩にかけて刺々しい金
属が覆うように形を造っていき……最終的には左手全体が金属製の
武器となった。

（分かりにくい方はルルーシュのナイトメア【紅蓮】を参考にして
ください）

ジャキツ!!

重々しい金属音を出しながら悶は左手を構えなおした。

「戦闘義手の魂狩【地獄の門】^{ヘルゲート}!!!!!!」

ユニオンナンバーズの魔の手が日向達に迫ろうとしていた……。

日向side

ドカーーーンッ!!!!!!

目も開けられないほどの激しい【雷光】と【閃光】の中、とてつもない音が耳を貫く。

まるで飛行機のジェットエンジン。それが爆発音だと俺が気付くのはさして時間はかからなかった。

「くっ!!!!」

その爆発がもたらしたのは激しい狂音だけじゃない。

次に俺達に襲いかかってきたのは爆発による爆風……。

俺はその風に耐えるために地面に刀を突き刺した！！

「キヤーツ！！」

知恵理の叫び声が俺の耳にこだまする。

俺はこのときほど知恵理の側にいなかったことを後悔したことはなかった。

「ぐぐぐぐ……！！」

自分のことで精一杯だが、俺は必死に知恵理のいる鳥かごのほうを見る。

……そうだ！！

今のこの爆風に体を任せればもしかして……！！

頭をフル回転させてシミュレーションを行い俺は問題 nothing
だと確信した。

幸いこの部屋は狭いため風はあらゆる方向へと行ったり来たり。

それを確認した俺は……。

知恵理のいる鳥かごに思いっきり跳ぶのだった!!!

「はーっ!!!」

ガシャンッ!!

勢いよく跳んだ俺は鳥かごにぶつかる。

「!?!」

だけどぶつかつた衝撃に俺は気をとられてしまい鉄格子を掴めない
……!!

ガシッ!!

……まあ、鉄格子を掴む気はさらさらなかつたけどな。

「ひ、ひな君……!!」

「問題 n n t h i n g ……知恵理……」

俺の掴む目標はただ一つ。

最も大切な銀髪の少女だけだつたからな……。

「……安心しろ知恵理……俺がそばにいるから……」

「ありがとう……【日向】」

そう言つて俺達は鉄格子ごしに抱き合つた……。

……

.....

.....

...

.....どれくらいたったのか？爆風はいつの間にかやんでいた。

そのことに最初に気がついたのはたぶん俺.....。

いや、水城は気づいていたかもしれないがあいつの場合は例外。

たぶんあいつは気がついてても言葉一つ話さないだろうからな.....。

ま、ともかく爆発のせいで耳の感覚はさっぱりないんだけど.....抱き締めた腕の感覚があったことに俺は顔をほころばさせるのだった。

「.....知恵理？」

「はえ？」

知恵理はまだ爆発が終わったことに気づいてなかったみたいだな。

でも……無事でよかった……。

知恵理の無事に安心した俺は抱き締めた手を緩め、知恵理の頭を撫でる。

この動作は知恵理が最も好きな動作だから知恵理はそれだけで安心して、笑顔になった。

俺が一番好きな笑顔に……。

そして俺が頭を撫でたことで知恵理はある程度落ち着くことができたみたいだ。

……でも、本当は俺も知恵理も不安でいっぱいだった。

「……ひな君。コウ君とマキ君……」

「問題nothing。わかってるよ」

笑顔から一転、不安そうで悲しそうな顔を浮かべながら俺を見る知恵理。

そんな知恵理の言葉を俺は優しく遮り、変形の間を見渡すために鉄格子に掴まりながら体を回転させるのだった……。

振り返った先に真備と輝喜の姿はどこにも見あたらなかった……。

「は!？」

「嘘……!!!!」

その映像に俺は声を荒げ、知恵理は口元を手で抑え目を見開く。

「……すみません。俺はここにいます」

真上から輝喜の声が聞こえるまでの話だったけどな。

「イッテーーーーッ!!!!!!」

そのとき！！真備の声が部屋中に響き渡った！！

……隣の部屋。つまり【回復の間】からだ。

いったい何が起こってるんだよ！？

「はははは……ヒナタンの思ってることはだいたい想像つきますよ」

真上……つまり天井から鳥かごを吊り下げている鎖に輝喜掴まってる輝喜はそう言っつていつもの笑顔を見せるのだった。

「……で、なんで輝喜はそんなところにいるんだ？」

「ええ、簡単に言っつとただ爆発に吹っ飛ばされただけです」

本当に簡単かつ簡潔な説明をありがとう。

その説明だけで状況理解をすることができた。

大まかに言っつとさっきの爆発で輝喜はここまで、真備は隣の部屋ま

で吹っ飛ばされたってことか……。

……あそこに一人一人くらいの穴が壁にあいてるし。

ていうか、この部屋の壁って鋼鉄製じゃなかったっけ？

「ちなみにこの部屋の壁はデモンさんの【アマテラス】と同じ装甲になってるんですよ？」

「……知らない情報をありがとう輝喜……本当によく無事だったな……真備」

あれって俺の紅翼でも傷つけられなかったよな？

……どんだけの勢いで吹っ飛ばされたんだよ。

俺がそんな二人に呆れていたそのとき……。

ガラッ！！

「うっ……イテテテッ……」

隣の部屋との穴から人影……真備が現れたのだった。

全身の傷からはすでに血は流れていない。

どうやら心配はいらないようだな。

「……無事でしたか」

「……ああ、おかげさまでな」

二人はそう言って苦笑いを浮かべあった。

その姿にはすでにお互いに対する敵対意識はない。

本当に……いつもの二人の姿だった……。

「あゝあ！！結局決着つかなかったな！！」

「そうですね……真備の言う通りですね」

真備の言葉に輝喜が同意する。

ま、俺と知恵理との約束だからな。

だから……。

「……マキ君。……コウ君。……まだ闘うの？」

……知恵理、そんなに心配しなくてもいいって。

真備も輝喜も約束を破るやつじゃないし、二人とも優しい顔してる
だろ？

だから何も心配いらなよ……知恵理。

「……ふふっ、そんなに心配しないでくださいチエリン」

「だな。俺達の闘いはここまでだ……」

輝喜はいつもの口調に直して。真備は少し自重ぎみに知恵理を安心
させようとする。

そして、二人は苦笑いしながら真備は【雷神】を輝喜は【恍穿弓】
を上に掲げるのだった。

「このパーティーは……」

「俺達の闘いは……」

『引き分けだ（です）！！』

二人で合わせて答えた瞬間、二人の手にあつた【雷神】と【恍穿弓】が姿を消したのだった。

「はあー……まったくあんたたちは……」

今まで言葉を出してなかった凧が少し呆れながらも嬉しそうに言う。

「マキ君……コウ君……」

知恵理は若干目に涙を貯めながらも必死に笑顔を創っている。

今回はうれし涙だから特に止めるつもりはないさ。

「ま、問題 nothing ってことだな」

そして俺もちよつとクールぽくそう言うが……。

やっぱだめだ。嬉しすぎてどうやっても顔がにやけてしまう。

そんな俺を見た真備と輝喜もお互いに顔を合わせ、今度は真備は少し口元をにやけさせ、輝喜は溢れんばかりの笑顔を浮かべた。

「ああ、問題nothingってことだなー！」

「ええ、問題nothingですねー！」

「……おいコラ、俺の口癖勝手に使っんじゃねーよ……真備？輝喜？」

俺の口癖と口調を真似しやがった。

……別にいいけどな。

「……ヒナ君？」

「……今回は許してやるか（ボン）」

そう呟いて俺は知恵理のサラサラな銀髪を撫でる。

その顔に優しい笑みを浮かべながら……。

「ふふっ、ヒナタンとチエリンはいつも通りですね」

「はぁー……まったくよ、さっきはお互い抱き合ってたしね……」

「おっ！？マジかよ！？いやっやっぱりお前らただの幼なじみじゃないんじゃないのか？」

「えっ！？そ、そんな……私と……ヒナ君は……その……」

「問題 nothing……じゃねーよ！！てめーら、俺と知恵理で遊ぶんじゃない……！！……」

たくっ、何なんだよコイツらは……。

毎度毎度俺と知恵理をからかいやがって……。

……でも、やっぱり俺達はこうじゃなくっちゃな。

もしかしたら輝喜と笑いあえるのはこれが最後なのかもしれないし……。

.....

.....

.....

.....

「.....もういいのか？」

俺達が数分の間笑いあったころ、ついにあの男が口を開いてきた。

あいも変わらず無表情な顔で、口調も何も一定のままです。

「.....ああ、問題 nothing だ」

水城の言葉に俺達の顔は引き締まる。

だがそれも当たり前なこと.....。

.....なぜなら、この声はまた新たな闘いの始まりを告げるものだからだ。

「……次はお前の部屋か、水城？」

「……ああ、そうだ」

俺の言葉にも淡々と表情を崩さずに答える水城。

そして水城は真っ黒な服の腰あたりに手を突っ込むのだった。

「またそれかよ」

出てきたのは輝喜がこの部屋に入ったときに持っていたリモコンと同じものである。

そのリモコンで今からすること……。

考える必要がなくなかった。

「……では、これから私の部屋に案内させていただきます」

ポチッ

水城はそう言うとりモコンのボタンの一つを押したのだった……。

コトコトコト……！！！！

再び動き始める【変形の間】

白く大きなタイルが何枚も合わさったような壁は、一枚一枚裏返っていく。

その裏は今まで見えていた白い壁とは真逆、一枚一枚が真っ黒だった。

ガタンッ！！ガタンッ！！

その色は現すのなら漆黒の夜、今までの純白のタイルがまるで昏間のように明るかったからこの状況は本当に真逆である。

ザーーーーーッ！！！！！！

『……』

俺、知恵理、真備、凧は次に聞こえてきた音に思わずビクつく。

慌ててそっちのほうを向くとそこにはさっきまで偽物の輝喜がいたところ。

そこから大量の水が流れ落ちていた。

「な、なんだ!？」

ガタンッ!!

俺が水が溢れている場所を見て驚いていると次は俺、知恵理、輝喜がいる鳥かごが少しずつ下がりはじめた。

ザーーーーーッ!!!!!!

少しずつ鳥かごが降り続ける中、部屋の中では着々と水が溜まっていく。

気付けば元々下にいた真備はすねの半分くらい。尻に至っては膝のあたりにまで水が来ていた。

だけど、そこまで。

そこまで水が溜まると水のなだれ落ちる音がいつきになくなった。

ガチャンッ!!

……それと同時に俺達を乗せた鳥かごは地面へと到着する。

いつの間にかさっきまでの【静寂の間】【鏡の間】ね雰囲気とはかなり変わっていた。

壁が全部黒くなったため薄暗く、少しの明かりでやっと部屋全体を見渡せられるほど。

足元は膝、もしくはすねの辺りまで水で溢れかえってる。

しかも……。

ポツリッ……ポツリッ……。

頭上から水滴が落ちてきて俺達の頭を濡らす。

それはだんだんと大降りになり、やがて……。

ザーーーーーッ！……！！

やがて豪雨のごとく俺達をずぶ濡れにさせた。

そんな中でいつの間にか部屋の中央に立っていた水城は話し始めた。

「……この部屋は【夜の豪雨】をイメージして造られている」

キンッ！！

水城の手から光る物体が放たれる。

それは俺のほうに投げられた物……俺は迷わずにそれをキャッチした。

パシッ！！

「……鍵？」

それは知恵理の髪のように輝く純銀でできた鍵……。

だが、俺にはその使い道がすぐにわかった。

「……………いいのか？」

「……………構わない。寧ろこの部屋でその鳥かごの中にいるのは命を捨てるようなものだからな」

……………俺はその言葉を聞き、俺は迷うことなく知恵理がいる鳥かごに向かう。

目的はただ一つだ。

「……………ヒナ君どうしたの？」

「ちょっと待ってる。今出してやるから」

俺は知恵理が閉じこめられている鳥かごの鍵穴にさつき渡された鍵を差しす。

そしてそれをゆっくりと回すと……………。

カチャッ！！

鳥かごの鍵は何の抵抗もなく開け放たれるのだった。

「水城!？」

その光景を見ていた輝喜は驚きの声色で水城の名前を呼んだ。

でも、それを気にすることなく水城は話を続ける。

「……では、この部屋の説明をしよう」

そう言うと水城は水で満ちた地面を差す。

「……この部屋の特徴はこの水だ。この水は足場を悪くする働きと【俺の特性】を100パーセント発揮するためにある」

水城はそこまで言って今度は真上を指差した。

「……そしてもう一つの特徴は上から降り注ぐこの雨。この部屋はいわば水槽と同じ状況……ここまで言えば分かるだろ?」

……水城の言葉は俺にとってありがたいことであり……最悪な言葉だった。

「なるほど、だから知恵理を解放したのか……」

「……そうだ」

俺はこのとき少しだけ水城に感謝した。

水城の言う通りだったらこの部屋はいわば水が溜まっていくバケツ。

知恵理があんな鳥かごにいたら水が上がったら間違いなく助からないからな。

「……さて、そろそろ始めるか」

水城は右手を前に突き出す。

漆黒の服装に漆黒の髪、それにどこまでも無表情を崩さない顔。

部屋の中は真夜中みたいに真っ暗、さらに今上から降ってきているのは雨に似た大量の水。

「……【村鯨】……発動……」

ザーーーーッ！！！！！！

それに【村鯨（大鎌）】が加わるとまさしくその姿は……。

「……【雨の死神】」

ザシユツ！！

村鯨の発動により発生した滝のような水を水城が切り裂く。

そこから現れたのは大鎌を担いだ水城だ。

「……【時雨の間】にようこそ【紅翼の天使】」

……その表情を少しも緩めることなく無表情で言う水城。

だけど明らかにこの部屋は俺対策の部屋としか思えなかった。

まず、俺の能力は【炎】それだけでも不利なのに……。

水城、知ってるか？

……俺はな……。

……泳げないんだよ。

第42話 時雨の間（後書き）

作「ちわー！！今回は日向の秘密について教えちゃいます！！」

輝「と言っても一回出てきたことなんですけどね」

知「でもヒナ君の唯一とも言える弱点だし……みんなに覚えてもらうためにもう一回言ってたほうがいいんじゃないかな？」

日「……余計なお世話だ」

作「てなわけで日向の秘密を教えちゃいます！！」

日「え？俺の言葉無視！？」

作「ではその秘密とは……」

日「や、やめろー！！！！」

バサッ！！

【日向は実は泳げない！！】

作「……というわけです」

日「なんでばらすんだよ!?!」

作「問題nothingだ!?!」

日「ぜんぜん問題nothingじゃないからな!?!つつか俺の口癖勝手に使うな!?!」

ガツンッ!!

作「げふっ!?!」

日「……いつとき寝てる」

そして作者は だった……。

作「って俺どうなったの!?!」

輝「復活早いですね」

作「こんなじゃおちおち寝てもらえないよ……てなわけで次回予告!?!」

知「どうぞ） ^ - ^（ | 目」

作「次回はいよいよ本格的に日向VS水城の闘いが始まります!?!」

日向が圧倒的に不利な状況……。

そんな中で水城がついに特性を発動させる!!

次回【雨粒の結晶】

日「問題 nothing だぜ!!」

知「ところでヒナ君はなんで泳げないの？」

日（過去）「それは必要なかったからだよチエ」

知「え？」

日（過去）「ま、その理由もあと少しで分かるから……」

知「????」

追伸・実際にあと少ししたら日向が泳げない理由が明らかになります。

次回に続く!!

第43話 雨粒の結晶（前書き）

作「いえーい！！ただいまより第4回TOKIのSEKAI始まるよ〜！〜！！！！」

輝& amp p・刹『またか……』

最初からテンションアゲアゲな作者！！対してツツコミの二人は元気がなかった……。

だけど気にしない！！！！

輝& amp p・刹『気にしろよ！！！！！！』

作「まーまーその辺にしてコーナー行きましょ？」

刹「ちっ、覚えとけよ」

作「ではさっそくコーナー行きましょか……。人気コーナー【羽前の憂鬱】……………」

輝& amp p・刹『……………』

作「あれ？俺が言うのも何なんだけど……突っ込まないの？」

輝「……………いえ、なんというか」

刹「突っ込みたいのは山々なんだけど……」

輝&刹『マンネリ化してね（ないですか）？』

作「そこをついちゃダメ〜〜〜〜！！！！」

輝&刹『でもな〜？』

輝「第1回の放送からずっとあってるコーナーですし？」

刹「なんか毎回凧の言葉でとんでもない方向に行っちゃう……」

輝&刹『正直飽きたんだよ（ですよ）！！！！』

作「お前らが言っちゃ駄目だろう！！！！」

凧「……ねえ、あたしはいつまで待てばいいのかしら？」

いつの間にか凧はスタジオに入っていた。

作「……」

凧「……」

作「……」

凧「……」

作「はっはっはっ！！！！人がゴミのようだ〜！！！！」

刹「どのム？力大佐だ！！！！」

作「STANBY - READY？」

輝「あなたはレイジ？グハートではありません……」

作「……私、こうゆうときどうしたらいいのかわからないの」

凧「……死ねばいいと思うわ」

作「この〜手をは〜なすもんか！！」

輝& a m p ; 刹& a m p ; 凧『真っ赤な誓い〜！！！！』

凧「……って何ささんのよ！！いいから早くコーナー始めなさい！！！！」

作「……サーセン」

しばらくお待ちください

作「ではお便り行きたいと思いま〜す！！（あ〜頬が霜焼けだ〜）」

凧「いつでもいいわよ？（殴り足りなかったかしら？）」

輝「面と裏の会話が見事に噛み合ってますね……」

作「え〜では……ペンネーム【人生二択】さんからのお便りです！
」

刹「うちの小説でも結構難易度が高いペンネームだな……読者は分かるのか？」

作「こんにちはみなさん。私はデモンと言います」

刹「本名明かしちゃった!？」

輝「わかった人は何人いたんでしょーねー？」

作「実は私には一歳年下の妹がいるのです」

刹「エミリさんだな」

作「しかし最近エミリが……いえ、何でもありません」

輝「何を隠そうとしてるんですか!？」

作「中略」

刹「そんなに長かったのか？」

作「教えてください!!!私はどうしたらいいのでしょうか!!!」

輝& amp ;刹『中略しすぎだ(です)〜!!!』

輝「何なんですか!!!中略の部分でいったい何があったんですか!
」

刹「ていつか趣旨を中略してどうすんだよ……！趣旨を……！」

凧「お応えしましょう……！」

輝「分かるんですか……！」

凧「まず……質問考えてから出直してこい……！」

刹「わかってね……！」

凧「あとスキップはさりげなくね」

輝& a m p ;刹『何の話だ……！？』

作「はい……では次のコーナー行きたいと思いま……！」

刹「え！終わり……！」

輝「ついにコーナーを破棄しましたね……！」

作「うっせ……！」

刹「逆ギレ……！」

作「てなわけで凧は次のコーナーもよろしく……！」

凧「喜んで……！」

刹「へ？まだ続くの……！」

後書きに続く! ! ! ! !

第43話 雨粒の結晶

輝喜side

いよいよ最後の闘いが始まりました。

闘う……いや、闘えるのは日向と水城だけ……。

しかし、この【時雨の間】は明らかに日向に不利なように設計されています。

確かに今までも俺の【鏡の間】では俺の特性を活かせるように鏡を置いたりしました。

でも、それでも俺の部屋は真備も闘いやすい設計になっています。

だから、俺と真備は互角の闘いができたのです。

しかし、この【時雨の間】は最初から水城が日向に勝つために設計されていると言っていいほど日向に不利な設計となっているのです。

……これは当たり前前と言えば当たり前のことかもしれません。

なぜなら、日向……いや【紅翼の天使】は【雨の死神】より……強かったのですから……。

現在の日向は記憶を失い戦闘能力は大幅に落ちています。

それに加えこの部屋での闘い……。

はっきり言って日向にはそれほど勝ち目はありません。

でも、水城はこの闘い……【自分が負ける】と言っていました。

それに、始めの計画では知恵理を閉じ込めたまま闘いを始める予定でしたのに……。

あなたは知恵理を解放させて知恵理を死なせないようにしてみました。

水城？あなたは一体何を考えているんですか？

今のあなたはまるで……。

日向side

俺の目の前にいる水城はまるで俺を見定めるかのように一歩も動かない。

そして俺自身も一瞬の隙すら見せない水城の前に動けないでいた。

『……………』

自然と無言で向かい合う俺と水城。

辺りにはただ雨が打ちつける「ザーッ！」「という音しか聞こえなかった。

『……………』

そんな俺達を見守る知恵理、真備、凧、輝喜の四人……。

知恵理以外は全身傷だらけで闘うことはすでにできない状況だ。

つまり、この闘いは俺と水城の完全な一騎打ちということになる。

ザーーーッ!!

上から落ちてくる雨はただ下の水に吸い込まれ、その量を増やしていく。

その動作の一つ一つが確実に俺の命を削っていつていた。

バシヤッ!!

そのとき、水城がわざとらしく左足を動かし水音を響かせる。

これは水城なりの挑発だったのかもしれない。でも、もしかしたらただ深く村鮫を構えなおしたただけかもしれない。

しかし、迫り来る水の恐怖に俺は冷静な判断を見失っていた。

「!?!」

俺はその動作に完全に動揺してしまったのだ。

それに耐えられなかった俺は遂に……水城に斬りかかった……。

チャキンッ！

「うおーっ！！」

「……やはり水は苦手か」

バシャバシャ！！

そんな音を立てながら俺は水城に向かって走る！！

水城までの距離は約十メートル。俺の耳に水城の言葉が届くことはなかった。

……水城は俺が動揺していることに気付いてるらしく、冷静に……村鮫を振りかぶった。

「……水刃・天象」
すいじん・てんしょう

その単語には聞き覚えがある。

今朝水城が学校なやな来たときに真備を気絶させたあの技だった!!

ブンッ!!

その音と一緒に俺に迫ってくるのは水で出来た刃。

俺はそれを見た瞬間に失いかけていた冷静な判断を取り戻したのだ。
った。

バシャバシャ!!

俺は走っていた脚をに止めるために水の下にある滑りやすい床に
いた脚を精一杯踏ん張る。

「……………くっ!?!」

転けそうになりながらも何とか持ちこたえることができた俺はその
脚で濡れる覚悟の上、横っ飛びをするのだった。

バシャンッ!!!!!!

泳げない俺にとって水の中は未知の域……。

味わったことのない浮遊感が俺を包んだ。

……。

そして一瞬の沈黙……。

「……………ブクブク……………かはっ！！！！！」

水の中ではまったくと言っていいほど音が聞こえなかった。

俺の人生初の水中体験はこうして迎えたのだった。

「……………ほう。土壇場で冷静な頭を取り戻したか」

「はあ……はあ……………俺にとってみれば初めての素潜りだったんだけどな」

……………さつきよりも近くなった水城から発せられたのは賞賛の言葉。

上がった息を抑えながら俺はそれに少し皮肉を込めてそれに応える。

「……昔に比べてひねくれたな。日向」

「問題 nothing 最初からひねくれてるお前に言われたくね
ーよ」

そう言つと俺はびしょびしょの体に鞭打つて立ち上がり【紅翼】を
構え直す。

……しかし、水城は俺のその姿を見て……深く……あざ笑つような
声色で……無表情のまま……。

「……一刀流のお前は弱すぎる」

その言葉だけをかけたのだった……。

「……一刀流？」

それを言ったのは俺ではない。知恵理だ。

知恵理はいつの間にか水が当たらないように輝喜にかかあげられ鳥かごの上にあった。その体には輝喜が着ていた黒いフード付きのマントを着ている。

本当に輝喜には感謝しなければいけないな。

「知恵理。一刀流とは一本の刀で闘う人のことを指します。刀の数に合わせて二刀、三刀……と増えていくのです」

「……そう、だから俺が見たいのは一刀流じゃなくお前の……【三刀流】の剣術だ」

輝喜の説明を継いだ水城から発せられた言葉は俺にとって予想外なものだった。

俺は生まれてこの方三本の棒を持って喧嘩したことはない。

確かに相手の数が多いときに二本の棒を持って喧嘩したことはあった。

……でも、二本と三本には大きな壁がある。

【腕の数】という大きな壁が……。

「……生憎と俺はこっちの方が闘いやすいんだよ」

「……そうか」

俺は口元を少し歪ませながら水城を見る。

だが、相も変わらずに無表情を崩さない水城はそのクールなもの言い方で日向に応えるのだった。

……右手に構えた村鮫（大鎌）を振り上げながら……。

チャポン……。

水城は振り上げた村鯨を水面につける。

その音は雨みたいに水が降りしきるこの部屋においてみれば虫の声ほどねものだったと思う。

でも、俺の耳にはその音はこれ以上にならないほど鮮明に聞こえた。

……まるで俺にしか聞こえなかったかのように。

「……力が分からないと言つならば思い出させればいい……。

……【水流・天象】すいりゅうてんしやう」

ザバーンッ！！！！！！！！

水城が鎌で水を引き裂く。

それと同時に引き起こされたのは鋭く俺に向かってくる一筋の水の波だった。

「……………っ!!」

俺はとっさに立ち上がり回避行動に移る。

しかし……………。

ガシッ!!ガシッ!!

「なっ!?!」

……………俺は動くことができなかった。

水が動きを邪魔……………いや、封じたのだ!!

「な、なんだこれ!?!」

例えるなら両脚を人間の手によって掴まれた感覚。

これはすでに水だけの効果ではない!!水城が何かやったとすぐに分かった!!

ザーッ!!!

俺が脚を捕らえられているその間にも【水流・天象】は着々と迫ってくる。

その姿はまるで昔映画で見た人に鮫が迫ってくるシーンみたいだった。

「くっ!!」

俺は必死に水の足枷を外そうともがく。

だけど水は俺を離すまいと脚を固定して動かせないようにしている。

最早絶対絶命……そんな言葉がほぼ全員の頭の中に響いた……。

……もう一度言う。【ほぼ】全員の頭の中でだ。

「やっぱ外れないか」

俺は必死に足枷となっている水を外そうとした。

だけど、さっきまでの俺ならともかく冷静な判断ができている今の俺は慌てることなく落ち着いてそう言った。

「……………諦めたかった日向？」

「問題 nothing、俺をなめんなよ」

脚の固定を外すのを諦めたかった俺は紅翼（日本刀）を構える。

足枷となっている水……………確かにこのままだったら迫ってくる水流の餌食に俺はなるだろう。

……………でも、俺にとってみればそれは問題 nothing だった。

ザッ！！！！！

俺は目の前の地面に紅翼を突き立てる。

これで準備完了！！

「炎の壁の日輪流炎術……【二式・焰壁】！！！！！」

俺が叫んだ瞬間、真っ暗な部屋が一瞬にして明るく照らし出された。

ポーーーーッ！！！！

その原因となる光の源は俺の前で轟音と共に炎々と燃えたぎっている。

それは地面に刺した紅翼のすぐ目の前でまるで壁のように俺を守っている炎の塊……。

これが日輪流炎術の二つ目の技。

地面から大量の炎を出して自分を守る壁を作り出す【炎の壁】の日輪流炎術。

【焰壁】
ほむひんぎ

その燃えたぎる炎は如何なる攻撃をも燃やし尽くす！！！！

ザー……………シュー……………

もちろんそれは水だろうが例外ではない。

さっきまで勢いよく俺に迫ってきていた水城の波の技【水流・天象】も俺の【焰壁】の前に儂く蒸発してしまった。

』……………『

部屋にいたメンバーは例外なく【焰壁】の前に言葉を失う。

そんな中、俺はもう一度俺を捕らえて離さない水を振り切ろうともがいてみる。

しかし、水はなかなか俺を離そうとはしない。

……………仕方ないか。

そう思った俺は【焰壁】を出すために刺していた紅翼を地面から抜き、再度さっきよりもさらに俺に近いところに刺した。

シューー……

俺を離さない忌々しい水はそんな音をたてながら俺の体の周りに微量に発生した炎のおかげで蒸発される。

これにより俺は足場の確保に成功して自由に動けるようになった。

「……【焔壁】か」

「どうやらお前は知っていたみたいだな水城」

「……ふん。なにせ長い間一緒に仕事をした仲……。知っているのは当たり前だ」

相変わらずの無表情で淡々と告げる水城。

だが、その瞳の先にある何かを俺は見た気がする。

……そう。例えるなら俺が知恵理を見るときみたいなものが……。な。

「……ものついでに教えてやる」

唐突にそう言い出した水城は構えていた村鮫を地面に……。というよ
り水の中に降ろした。

そして静かに目をつむり……。両手をゆっくりと動かす……。

ザー……ッ！……！！

「なっ！？」

その瞬間、俺の周りに集結していた大量の水が波となり襲ってきた！！

……いや、違う……！！

あれは波なんてものに括ってほだめだ！

例えるなら……。

「【治癒結界】！？」

「……ゲイルの【執刀】の特性か。……まあ、似てないこともないがな」

そうそれはゲイル先生の魂狩【執刀】の特性【治癒結界】を半分の半分の半分くらいにしたような水の結晶だった。

それが何十個もの割合で俺を攻撃する！

「【焔壁】！！！」

ポーーーーッ！！！！！！

刺したままにしておいた紅翼の周りから大量の炎が壁となってそれを拒む。

……危なかった。

俺が内心でかなり焦っている……。

「……【水結晶】すいけつしょうりゅう」

水城が村鯨を完全に地面につけながら話し始めた。

「……【水結晶】は村鯨が触れた【液体】を全て操る特性だ」

水城はそう言うと再び目をつむり両手を動かし始める。

ザーッ！！！！

今度は大量の水が水城の周りに集まり始めた。

ただどよくよく見てみるとその大量の水の中にもいくつかの結晶が見える。

……このとき俺の中ではすでに答えまで結びついていた。

「なるほど。【水刃・天象】 【水流・天象】 はそれで操っていたのか……」

水城は無表情のままだったがなぜか勝ち誇ったかのような顔に見えた。

俺は少しずつ水城の無表情の中にある感情を読み取れるようになってきたような気がする……。

「……つまりこの部屋は地面も空中も水だらだということ」

「自分は完全な支配者とも言いたいのか？水城？」

「……………そのとおりだ」

いつもより少しばかり返事の前の間が多かった気がするが水城は俺の言葉を肯定する。

「……でも、確かに水だらけのこの部屋ではお前は完全なる支配者……」

その両手の指示しだいで俺の膝近くの半分くらいまで上がってきた水を操ることなんて容易いだろうな……」

でもな……」

「……だからどうした？」

俺は凜とした声を張り上げた。

【不知火日向】の存在を知らしめるために。

「……ほう。どうしたとはどういふことだ？」

「そのままの意味だよ。この部屋を完全支配しているからどうした？……残念ながら俺はお前の支配下にはなっていないんだよ……！！」

「……俺はこれ以上にはないと言っていいほど声を張り上げた。

全ては奴に俺の意志を伝えるために。」

ザー……ッ！！！！！！

俺の言葉は虚しくも部屋に響き渡る大量の雨音が俺の耳を雑音のオンパレードの一部となっただけだった。

そして、雑音と比例してどんどん高くなっていく水嵩……。

……俺の思惑とは違って時間はあまりなかった。

「……………ふん」

焦りに焦っている俺を見て水城は小馬鹿にしたように鼻で笑ってきやがる。

対して俺はそんな態度の水城と着々と増える水嵩に再び流されそうになっていた。

怒りと恐怖が体の中から溢れ出してくる……………。

ギリッ……!!

歯を食いしばる力が強くなっていく。

このままでは俺は感情のままに荒々しく攻撃してしまいだらう……。……。

「駄目だよヒナ君」

……正直、知恵理がいなかったら俺はただの屑やろうなんだろうな
)。。

まったく。いい安定剤だよ……知恵理は。

「……分かってる知恵理。……ありがとな」

「どういたしまして」

俺は敢えて振り返ることはない。

なぜなら知恵理の声を聴くだけで十分だから……。

なぜなら知恵理に怒りを孕んだ俺の顔を見てほしくないから……。……。

なぜなら……知恵理を守ると誓ったから……。

だから俺が振り返ることはない。

見るのは俺にとって大切な物を奪った者だけで充分だ。

「……変わったな」

「昔の俺がどうだったかは知らない。でも、俺は今幸せだから……俺の幸せを奪うお前を……倒すまで!!」

「……本当に変わった」

水城が言うとおり俺は変わった……いや、変えられたんだ。

知恵理という存在のおかげで……。

「……そろそろ」

「問題 nothing。いつでもいいぜ?」

さて、どうやら俺達の世間話はこのまでのようだな。

その証拠に水城は地面に降ろしていた大鎌を構え直す。

それを見た俺も地面に刺さったままにしていた日本刀を引き抜く。

その刀身は真つ暗な部屋の中でもキラキラと銀色に輝きを放つ。

その美しさはまるで白銀に輝く【知恵理の髪】のように見えた……。

「【桜】」

『…………え?』

…………俺の呟きは水城や知恵理だけでなくこの場にいる全ての人間を同時に反応させる。

だが…………俺の言葉は止まらない。

【不知火日向】があるのは【姫ノ城知恵理】のおかげだという思い。

そして知恵理が愛おしいと思う思いが俺の口を勝手に動かした。

「この刀は知恵理と同じ色をしている。だからこの刀は知恵理の代わりに俺と共に戦ってくれるもう一人の知恵理なんだと思うんだ……。だからこの刀の名前は【紅翼】であり【桜】…………俺と一緒に闘ってくれるか?」

……最後の言葉は俺が【桜】に対して言った言葉だった……。

……ただど……もう一人の【知恵理（桜）】がその思いに応えてくれた……。

「……ヒナ君……喜んで」

その一言が俺は欲しかったのかもしれない。

俺は孤独じゃないと教えてくれるその一言が……。

第43話 雨粒の結晶（後書き）

作「てなわけで新しいコーナー行きたいと思いまーす!」

刹「新コーナー?」

作「そうです!名付けて……【定められた一言】!」

輝「生徒会の一存!」

刹「パクリかよ!」

作「そしてこのコーナーで弄られるのはもちろんさつきから突っ込んでる2人でーす!」

輝&刹「やっぱりか(ですか)……!?!?!」

作「そして弄るのは時の秒針で一番頭が回るこの2人!」

凧「ちわー!!引き続き登場の羽前凧よ!」

日「問題nothing!!不知火日向だ!」

輝&刹『最悪だ……』

作「それでは輝喜と刹那にはヘッドホンとアイマスクをつけてもらいます」

輝& a m p ; 刹『不安だ(……』

輝喜と刹那は文句を言いつつもすっかり目と耳を塞ぐ。

作「 ……では日向と凧には今回の一言を …… つつてもいつも通りでいいですよ? 」

日「問題nothing」

凧「了解! ! 」

作「じゃあ2人を起こしますか… (^ ^) () O () 」

輝「はあ… ……絶対扱い非道いんでしょうね… ……」

日「問題nothingだ! ! 」

刹「問題大有りだよ! ? 」

凧「言い訳していいわけ! ? 」

輝& a m p ; 刹『えー! ! ! ? ? ? 』

作「あ! ! 言い忘れてたけど始まつてるよ? 」

刹「いつの間に! ? 」

輝「 …… 確実に俺達は生け贄なんですな 」

凧「言い訳していいわけ!？」

刹「拒否権ないのかよ!？基本的人権を守りやがれ!?!?!?!?!」

日「問題nothingだ!?!」

輝「俺達は人間ですらないのですか……」

日&凧「問題niしていいわけ!？（合体技発動）」

刹「議論の余地すら与えてくれないのかよ!?!?!?!」

日&凧「言い訳だ!!（合体技発動）」

輝「何のですか!?!」

刹「てかいつまで続けんだよこれ!?!」

日&凧「……消していいんだ?（合体技発動）」

輝&刹「何か怖いから止めて!?!?!?!?!」

作「……はいカッ!?!?!お疲れ様でした」

日&凧「お疲れ様でした」

輝&刹「……勘弁して」

作「さあ、いい感じで2人が壊れたところで次回予告行きます!?!」

……水城によって支配された部屋……。雨により着々と増えていく
水嵩……。

そんな中日向は【桜】と共に立ち上がる!!

その日向に水城の激動的な反撃が待ち受ける!!

次回【雨の死神】

日「問題nothingだぜ!!」

作「次回放送はいつになるのかな？」

凧「言い訳していいわけ!？」

作「へ?でも次回の予定も一応組まないと……」

日「問題nothingだ!!」

作「……………」

次回に続く!!

第44話 雨の死神（前書き）

今回は水城の真の正体。そして水城の秘密が明かされます。

果たして水城の正体とはだれなのか？

では本編へ……。

第44話 雨の死神

?????side

……やっぱりあいつは根本的なところで変わってしまったな。

昔のあいつはいつもどこか【聖空の騎士】こと知恵理の兄【姫ノ城空】に頼り切っていたところがあった……。

それが今ではその妹である【姫ノ城知恵理】を守るために強くなるうとしている……。

……本当に……変わったよ。

……でも、運命ってのはなんでこうもあいつを苦しめるんだ？

初めはあいつを見つけたらそのままほっておこうと思っていた。

様々な苦しみに堪え忍んできたあいつには平和に過ごす権利があったからな……。

だからあいつを見つけた瞬間は楽しそうに笑っているあいつを見るだけで満足して帰ろうとしたさ……。

彼の隣にいる銀髪の少女を見るそのときまでは。

なあ、神を一切信じてない俺が言うのもなんだけど神よ……。

お前はなぜあの兄妹を……そして本来はあんに仕えるべき天使を苦しめるんだ？

……俺の苦しみだけで足りないのか？

あいつらは……俺みたいにはなってほしくないんだよ……。

……いいぜ、神。

そこまであいつらを苦しめたいんなら俺がその役を変わろっつじやないか。

俺が悪役になってあいつらを強くしてやるよ。

だからもう、あいつらを傷つけないでくれ。

時の番人【時雨水城】の名において……。

日向side

「じゃあ行きますか」

俺は右手に持つ桜を構えなおして水城を見据える。

水城は相も変わらず無表情だが、その表情の中に俺は俺に向けてくる殺気を見た。

「……………【水刃・天象】」

ザンツ!!!

水城が刃を振りかぶりそのままの勢いで振り下ろすと水でできた刃【水刃・天象】すいじん・てんしやうが俺を襲ってくる。

キンツ!!!

「【二式・焰壁】！！」

それに対して俺は桜を地面に突き立てて炎の壁【焰壁^{ほむびへき}】を作り出し
対抗した。

シューー

水の塊と炎の塊が衝突したことにより大量の水蒸気が発生する。俺
はこのチャンスを見逃さない……！！

ジャバジャバ！！

白いもやがかつた水蒸気が俺を前に進ませるのを拒む。

その中で俺は記憶とかんだけで突き進んでいった。

最早膝をも超えようとしている水に脚を取られながらも全力疾走す
る。

ただ速く水城の気配だけに集中しながら……。

そして俺は……やつを捕らえた。

「【一式・飛炎】！！！」

紅翼を振り下ろした先にはやつが……水城がいる。

俺が放った炎の塊はその水城目掛けて真っ直ぐに飛んでいった！！

「いつけーっ！！！！！」

距離は充分。炎の塊【飛炎^{ひえん}】も問題なく最大威力をもって放たれた。

俺の作戦は完璧。ここまでだったら俺は迷いなく水城に勝ったと確信を持っていた。

「……………詰めがあまい」

「なっ！？」

……………真後ろから水城の聲がこだまするまではな。

シュツ！！シュツ！！シュツ！！

そんな音をたてながら炎の塊【飛炎】は目の前にいた水城に直撃する。

いや、それは直撃とはほど遠いものだった。

なぜなら【飛炎】は目の前にいた水城をすり抜けそのまま水城の先の壁に当たったからである。

ダーン！！ダーン！！ダーン！！

……部屋中に響き渡る壁に着弾した【飛炎】の爆発音。

それと同時に俺と水城を囲んでいた水蒸気は晴れていった……。

「……マジかよ」

まず聞こえてきたのは真備の驚愕の声。

「あたしと同じ……」

「ええ。水城は風、あなたと同じです。でもあの人はそれだけではありません……」

凧は水城の行動に唇を震わせながらそう呟く。

逆にこのことを知っていたらしい輝喜は冷静にその場の状況を把握していた。

「……水城さんが」

そして最後の一人。知恵理は水城のその姿にただただ口を開くだけだった。

「……水城さんが5人に増える」

そう。水城は自分の姿をした男を5人その場に出していた。

ここまでくれば大体のことは分かる。

凧の言葉。輝喜の説明。そのことを踏まえたうえでの結論……。

水城は【戦士】であると同時に【幻術師】でもあったのだ……。

「……………【霧雨・天象】どれが本物の俺か当ててみる日向？」

【霧雨・天象】で増えた5人の水城が同時に言うその姿はまさに爽快だった……。

水城 side

【霧雨・天象】

この技は俺の雨の能力で発生した霧で俺自身の体を塵気楼のようにして相手に見せる技。

おそらく今の日向ではこの技を破ることは不可能だろう。

さて、ここからは賭だ。

今の状況でこの技を使ったのは俺の【ノルマ】を達成するため……。

日向に自分に与えられた使命を自覚してもらったため……。

そしてそのノルマを達成して日向が自分の使命を自覚したときこそ……たぶん俺の最後だろうな……。

……だが、さっきも言ったとおりこれは賭。

もしこの賭に失敗したときは俺達も日向達も終わりだ。

だからこの作戦は絶対に成功させなければならない。

賭だろうが運命だろうがこの作戦を成功させなければ日向と知恵理は報われない……!!

だから俺は【天使】を傷つけて【時の少女】を目覚めさせ……使命を知った【天使】に倒されないと……。

チルドレン計画の被験者名NO・4【雨の死神】の名のもとに……。

日向side

ゴクリ……

唾を飲み込む音が俺の緊張感を高めていた。手に持つ紅翼を握る力もそれに合わせて強くなる。

一瞬でも油断したら水城の策略に引き吊り込まれそうだった……。

「分身とはまた厄介なことをしてくれるな」

『……問題nothingとは言わないのか？』

「それは嫌みにしか聞こえないよ水城【達】」

嫌みには嫌みで返す。5人の水城もそれがわかっていているらしく無表情を崩さぬまま「ふっ」と鼻で笑ってきた。

5人の水城が同時に鼻で笑う。なかなかシユールな光景だ。

ザーーッ!!

雨音はなおも鳴り続ける。

その中で無表情を崩さない全身が漆黒の5人の【雨の死神】達。

彼らが見ているのはただ1人だけ……。

……俺だ。

だけど俺にとってみればこの事態は問題 *nothing* だった。

まず水城が見ているのは知恵理達じゃなく俺だということ。

さすがに俺でも知恵理達を守りながら闘えるきはしない。

でも知恵理達を攻撃したら我が身を引き裂いても守るつもりだ。

だから水城がそのあたりのクズじゃなかったことに安心した。

そしてお忘れかもしれないが俺は桜時学園の【喧嘩の強いやつランキング】の第一位だ。

そのあたりの喧嘩技術はそれなりに上だと思う。

多人数の喧嘩も慣れっこだった。だから水城の分身といえどこの人数までは何とかなる。

以上の二点からこの闘いにもまだまだ勝機があった。

『…………葛藤は終わったか？』

まるで俺の心の中を覗き見ていたようなタイミングで5人の水城が
そう言い放つ。

「問題 nothing。全然OKだぜ？」

『……………そうか』

俺の返答を聞いて水城達は顔を伏せる。

どうやら水城の方も何かしらの葛藤があったようだが、すぐに顔を
上げて村鮫を構えた。

『……だったら【桜】を構えろ。それがお前の最後だ。』

「ああ。問題nothingだぜ水城!!！」

5人の水城が【紅翼】のことを【桜】という単語で言う。

それはある意味水城が俺の言葉を認めたということかもしれない。

もしくは……俺に対するたむけの言葉なのかもな……。

チャキツ!!

水城の言つとおり紅翼の【桜】を構える。

刀身に炎を灯し、水城の出方をうかがう……。

……なんてことをするのは自分が不利になるだけだった!!

つまり【先手必勝】!!

俺は決断即行動でそう決めた瞬間には一番近くにいた水城に向かって駆け出した！！

「……………【水刃・天象】」

「【二式・焰壁】！！」

ポーンッ！！ザンッ！！

水城の大鎌から放たれた水の刃と俺の日本刀から放たれた炎の壁とが衝突する。

さっきとまったく同じ状況。しかし、俺はさっきとはまったく違う行動を起こした。

「【一式・飛炎】！！」

ポーンッ！！

俺は最初に攻撃してきた水城とは反対方向にいる水城に【飛炎】を放つ。

さっきと同じように水蒸気が俺の周りを漂っているがそれには関係なく俺は記憶通りに二番目の水城を攻撃する。

「ヒナ君!!!!」

そのとき知恵理の声がこだましてくる。

水蒸気が晴れたことにより視界もよくなってきたから知恵理が叫んでいた理由も分かった。

「……油断大敵」

「問題nothingだぜ水城」

突如として現れたのは俺が最初に攻撃した一番目の水城。

一番目の水城は水蒸気が上がっている間に俺の真後ろまで来ていたらしく水蒸気が晴れた瞬間にはすでに俺に村鮫できりかかってくるところだった。

だが、俺は慌てずにそれに対処する。

後ろすら振り向かなかった。

「キャッ!!!!!!」

「なに考えてやがる……!!」

「何してんのよ……!!」

知恵理が悲鳴をあげ、真備と凧が叫んでくる。

対して輝喜だけはこの状況を理解しているらしく無言で事の次第をうかがう。

知恵理達のそれぞれの対応を確認していたそのとき、不意に一番目の水城が口を開いた。

「……バレてたか」

「ああ。バレバレだ」

俺が少し微笑んだ瞬間水城の大鎌が俺に向かって振り下ろされる。

「あれもか？」

「……そのとおりだ」

ダーン!!ダーン!!ダーン!!

それと同時に俺が二番目の水城に放った【飛炎】が壁に当たって爆発する音が鳴り響く。

さっきと同じように二番目の水城の体をすり抜けたのである。

ホオンツ!!

そして一番目の水城が振り下ろした村鯨も俺の刀が放った【飛炎】と同じように俺の体をすり抜ける。

もちろん俺はその後何事もなかったように立ち続けていた。

「……………正解だ」

無表情を崩さないまま一番目の水城がそう言いながら消えていった。

「当たり前だろ」

知恵理達は何が起こったのか分からないようだ。

だがそれも少しのことだろう。

なぜならあいつらの近くには下手をすれば俺より頭がいい俺の【親友】がいるんだからな。

「そっちの説明はたのんだぞ輝喜!!」

「はい。任せてください」

その言葉に俺は頷きニッコリいつもの笑顔を浮かべる輝喜を見るのだった……。

輝喜 side

「では説明をさせていただきます」

俺の言葉に近くにいた刹那以外の知恵理、真備、凧の3人が頷きました。

というより刹那はまだ戻ってこないのでしょうか？

それほどまでに虫が苦手なんでしょうね……。

……おっと話がずれてしまいました。

俺を見つめている3人にしっかり説明しませんと……。

「輝喜。まずなんで日向は水城の攻撃をよけなかったの？」

「むしろそれしか疑問はないぜ姉貴」

上から聞こえてくる風の声に真備は言葉を入れました。

ちなみになぜ上からなのかと言うと、現在風が真備におぶられているからです。

本人曰わく姉を気遣うのは当然！！だそうですが実際は真備が背が低い（死語）うえミニスカート風の体が冷えないように水から上げているんです。

背が低いとそのぶん水に浸かる割合が増えますからね。

「……何よ輝喜その目？」

「いえ、なんでもありません。それより説明ですが……」

俺はとつさに話題を変えました。なぜか寒気を感じましたから……。

「水城が使っているのは蜃気楼なんです」

「蜃気楼……確か大気の温度差とかで光が異常屈折する現象よね？」

知恵理と真備はチンプンカンプンのようですがさすがは才女の凧です
ね。

的を射ています。

「つまりどういうこと？」

考えるのを止めたのか知恵理が首を傾げながらそう尋ねてきました。
なるほど。確かに日向がその仕草が好きになるのも頷けますね。

「……つまり日向の炎と水城の雨が衝突したことにより光の異常屈
折が発生、今の現状ということですよ」

「でもそれとヒナ君が避けなかったのとどんな関係があるの？」

さすがに日向のことになると食いついてきますね。

「……結局あれはないものがあるものになっている状態。実際にな
いものには攻撃できないということですよ」

「だけどあいつが放った水の刃は実体なかった？」

今度は風が食いついてきました。

確かにないものからあるものが生まれることはありません。

ですがみなさんお忘れではありませんか？

この部屋は……。

「この部屋は水城の魂狩である村鯨の特性【水結晶】により支配されています。水を操るくらい水城にとって容易いんですよ」

そこまで話すと皆さん納得したようです。

それと同時に改めて日向が不利な状況のほうも理解したようですが……。

「……やっぱりあいつには厳しい闘いだってことか。クソッ！！なんで俺の体はボロボロなんだよ！！」

「やめなさい真備！！一番きついのは誰だと思ってんのよ！！……
あなたの隣にいる知恵理なのよ……」

真備にそう言うてはいるが風も唇を噛み締めて悔しさを滲み出している。

かくうえ一応は水城の味方である俺も頭がボーっとしてうまく立つことができません。

敵であるはずの俺でさえこんなに悔しく思っているのですから闘えない存在……そして日向のことを誰よりも想っている知恵理の悔しさは計り知れませんかね……。

「……すまない。知恵理」

「うんうん気にしなくていいよマキ君。私は大丈夫だから……」

無理しているのが見え見えですよ知恵理。

大丈夫です。結果がどうなろうと俺はあなたの……味方ですから……。

俺は何度もこの言葉をかけようとして何度も止めました。

だって俺達は敵同士なんですから……。

日向side

「さて、そろそろ本気出してくれるか？」

俺の言葉に水城達（1人減って4人）は再び「ふっ」と鼻で笑う。

しかし、その瞬間4人の水城は全員両手を上に掲げる。

その動きに俺は背中に冷や汗が流れるのを感じた。

『……そこまで言うなら俺の本気を見せよう』

4人の水城が同時にそう言った瞬間俺は自分が軽率な言葉を言ったことを悟った。

……やつは【水結晶】を使ってくる。

そう感じたのは明らかに自分の感だったけど妙な確信を得ていた。

『……【紅翼の天使】お前に俺の本気を見せよう』

「問題nothing……いつでも来な……!!」

それはおれが最後の悪あがきで言った強がりだった。

『……では遠慮せずにいかせてもらおう……俺の力を見せにな……』

ドカーーンッ！！！！！

水城の言葉が終わったそなとき圧倒的破壊音と合わせて大量の水が吹き上がった。

「ちっ！！！」

舌打ちをしつつも俺はその立ち上る大量の水に圧倒されてしまう。

だけどそこであきらめてしまったら……だめだ。

そう覚悟を決めた俺はもう膝を越えてしまった水の中を必死に走り出した！！

ジャバジャバ！！！！

必死に走りながら俺は考える。

生憎と諦めは脳内には一切なかった。

そして結論。

ポツ！！ポツ！！ポツ！！

水城の攻撃を受ける前に水城を倒す！！

「【一式・飛炎】！！」

俺が一番近くにいた二番目の水城を無視して炎弾をその先にいた三番目の水城に放った。

「……………無視してもらっては困る【水刃・天象】」

ザンツ！！

そのとき二番目の水城が至近距離で【水刃・天象】を放ってくる。

近すぎたため【焰壁】を発動する時間すらない。

だから俺はとっさに桜を身構えた……………！！

ギンツ……………！！

実際に受ける【水刃・天象】は重く鋭い。

その凄まじい威力に俺の脚の踏ん張りは脆く倒れた……。

「ぐっ!!」

踏ん張りを失った俺は簡単にぶっ飛ばされてしまう。

そこに来たのはさらなる追撃。四番目と五番目の水城の攻撃がきた。

『……………【水刃・天象】』

ザンッ!!ザンッ!!

2人の水城は同時に俺に向かって水の斬撃を放ってくる。

ダーン!!ダーン!!ダーン!!

向こうを見れば俺が三番目の水城に放った【飛炎】が三番目の水城の体をすり抜けて壁に当たっていた。

どうやらあの水城も偽物みたいだ。

……つまり俺に今攻撃してきている残った四番目と五番目の水城の
いずれかが本物か！！

ガッ！！

そうと分かった俺はぶっ飛ばされて地面に落ちるときに桜を地面に
突き立てる。

自分でも不思議だったが予想以上に空中での対応がうまくいったか
ら問題なく桜を地面に刺すことができた。

「【二式・焰壁】！！」

ポーンッ！！！！！！

そして俺が今出来る最大質力で【焰壁】を繰り出す！！

ザバンッ！！

地面に脚をつけても桜を離すことはない。

その間も俺は能力を桜に込め続けた。

ザンッ！！ザンッ！！

2つの引き裂いた音が俺の耳にこだまする。

しかし、それも一瞬ことだった。

シュー……

次に聞こえてきたのは俺の【焔壁】が四番目と五番目の水城の【水刃・天象】を相殺して水蒸気を発生させた音だった。

「よし！！！」

その音を聞き俺は【焔壁】が崩れる前に桜を地面から抜く。

これからはさつきみたいに本物の水城を見抜かなければいけないのだが……。

水蒸気で周りはよく見えない。

しかもバランスと方向感覚を空中で失ったから水城達の位置も分からない。

この状況ではさっきまでみたいに狙って【飛炎】を放つことは無理だ。

……仕方がない。

ここに来るまで日輪流炎術は時間がなかったから三式までしか練習できなかったけど……。

やってやるよ日輪流炎術四式!!

俺は桜を両手に構え能力を込める。

ポーン!!!

すると桜の刀身で燃えたぎっていた炎が今までで一番の熱を放つ。

その熱は俺の足元にある水を離れた位置からでも蒸発させるほど。

そして燃えたぎる桜を右に構える。

目をつむり集中力をじっくりと高めて気を待った。

「フー……」

大きく深呼吸をして桜から溢れ出てくる能力でできた不安定な巨大な炎を操る。

水蒸気が辺りを隠す中で俺は一心不乱に集中力を高めた。

「日輪流炎術……」

そして呟く。その技の名前を……！！

「【四式・斬炎】！！」

ザンツ！！

右に構えていた桜を左方向に向かって振り下ろした。

すると水城の【水刃・天象】のような炎の斬撃が水城に向かって放

たれる!!

これが日輪流炎術の4つ目の型【四式・斬炎】ざんえん!!

一式から四式までの型の中で一番威力が高い技だ!!!!!!

『…………なに!?!』

4人の水城達が同時にそう言うが時すでに遅し【斬炎】は4人の水城達を見事に直撃したのだった……。

「日向!!!!!!危ない!!!!!!」

…………輝喜?

ザクツ!!

輝喜の叫び声が終わる前に俺は胸に鋭い痛みを受けた。

それはまるで刃に貫かれたような鋭い痛み……。

「ヒ……ナ……くん？」

顔を右に向けてみると知恵理が虚ろな顔をしていてその右隣では輝喜が悪魔の目【ドゥローイング・フューチャー未来図】を見開いて崩れ落ちている。

「おい。嘘だろ？」

「な、何の冗談よ日向？」

知恵理の左隣では真備と真備に背負われた凧が茫然突っ立っていた。

みんながみんなまったく違う顔で茫然としている。

だけど目線だけはみんな同じだった。

その視線は全て俺の胸に……。

そこで俺はやっと自分の状況を悟った。

俺の胸元に視線が行った瞬間に……。

「……だから言っただろう。詰めがあまりと」

「み……ず……き？」

耳元で呟くのは無表情を貫き通す雨の死神。

そして俺の右胸を貫いているのは水城の魂狩。大鎌デスサイスの魂狩である【
村鯨】……。

……やっぱりそうか。

俺は……刺されたのか……。

「……分身したのが5人だけだと思っよ？」

「しほっ……！……最初から……6人……だったって……ことかよ……」

吐血をしながらも水城を睨みつける。

その無表情の顔を見てるとやはりお前のことが死神にしか見えなかった……。

シュツ……

水城が村鯨を俺の体から抜き去る。

俺はその瞬間に体の感覚が全て抜けてフーと体が軽くなった気がした。

……俺が覚えているのはここまでである。

水城 side

「ヒナ君!!!!!!」

日向は俺が日向の胸から村鯨の刃を抜くと何かが切れたように倒れた。

それを見てられなかったのか知恵理が日向のもとに駆け寄ってくる。

……これでいい。これでいいんだ。

後は知恵理が目覚めて俺のノルマを達成させるだけ……。

「ヒナ君！！ヒナ君！！」

ほら日向。お前のお姫様が呼んでるぞ？

早く目を覚ませよ……。

いや、お前は目覚めなければいけないんだよ。

早く目覚めて……俺の千年の歴史を終わらせてくれ……。

俺は【不老】なだけで【不死】ではないんだからな……。

……大丈夫だ。お前と時の少女は俺が守ってやるよ。

お前のその生涯はこんなもんで終わらないんだから。

なんせ俺が保証するんだからな……。

お前達は俺が過ごしてきた千年を犠牲にして確実に守ってやるよ。

陰陽師羽前家初代当主である【羽前時雨】の名にかけて……な。

第44話 雨の死神（後書き）

作「今回は水城の秘密を書きました」

水「……全員が予想外の展開だったろ？」

作「ええ。何せ【不老】のふせんなんて一切ありませんでしたからね」

水「……当然だ。初期設定から一応設定してあったが設定を出すのは今回が初めてだから」

作「はい。でも【羽前家初代当主】って設定はふせんありましたよね？」

水「……風の中にいる九尾の【楓】が最初あたりに俺のことを言っていたことだ。楓や鋼弥は俺のことを知っている」

作「ちなみになんで【不老】になったんですか？」

水「……それは後ほど番外編で告げられるから待て。それよりそろそろ次回予告をしる作者」

作「そうですね。では次回予告……」。

水城の策略にはまり倒れてしまう日向。

そして彼のもとに駆け寄ってくるのは彼が守りたかった存在である

知恵理。

だが、彼女が彼女の名前を持つ日向の刀に触れたとき奇跡が巻き起こる!!

知恵理の力……一体それは……？

次回【時のDESTINY】

日「問題nothingだぜ!!」

作「ところで水城さんは今何歳なんですか？」

水「……997歳だ」

作「え？まだ1000歳じゃないんですか？」

水「……気にするな」

次回に続く!!

第45話 時のDESTINY（前書き）

“時の秒針”その正体とはいったい何か？

そして今回は知恵理が、日向が大活躍！！

では本編へ）．．（つ

第45話 時のDESTINY

[unknown] side

「……舞台は調った」

水城がその千年の生涯を犠牲にしてとある黒髪の天使に刃を突き立てていた同時刻。

謎の転校生【李・悶】はとある分厚い鋼鉄製の扉の前に立っていた。

そして、その左手にはトゲトゲにく機械的に戦闘能力に特化した彼の魂狩ソウルテイカー

【地獄の門】ヘルゲート

その存在は華奢な体の彼には異端ともいえるものであった……。

コッソ…コッソ…

扉の先は完全なる防音状態で外にいては中の様子はまったく探れない。

そんな【時雨の間】へと続く扉の前に立つ彼の耳に届いてきたのは静寂を破る一つの足音……。

その前にここで一つ説明しておかなければいけないことがある。

もともとこの洋館は奥へと進むために一本の道しかない。

洋館自体も桜時市の山奥に造られたため（誰が造ったんだか……）正面の入り口以外に洋館の中に入るすべはないのだ。

そしてその洋館を改造してデモンが今回の闘いのために【女神の間】
【治癒の間】 【変型の間】の3つの部屋を造ったの……。

回りくどいのは止めよう。

つまり何が言いたいのかというと、この扉の前に来るまでには日向達と同じルートをたどるしかない。

しかし【女神の間】の主であるデモン・カイハーツ・キルデは主戦力の兵器【アマテラス】を破壊されてしまっているため、現時刻は外にてある機械の整備をしていた。

つまり【女神の間】は何の問題もなく通り過ぎれるのだ。

しかし、現在彼がいるこの【治癒の間】は違う。

ここの部屋の主はもともと能力者であるゲイル・ハルトマン。

しかも彼が使役する魂狩【執刀】の特性である【治癒結界】の力を
使えば彼の負傷は負傷ではなくなる。

これが意味するのは……。

コッソ…コッソ…

「コノヘヤニヨウジデスカ？ ……ユニオンクルーズの暗殺者さん
？」

……日向達と闘ったときとは違う。

真剣な顔をした【時の番人医療局】の局長がいるのである。

「……kill-me（殺されたいの）？」

「悪ふざけにしては度が過ぎてるな。俺が言つのもなんだが言葉遣いはきつちり守れよ?」

ゲイルはその言葉とともにナイフに似た刃物……メスの魂狩【執刀】を構える。

それは今宵誰にも知られることのないもう一つの闘いの始まりを告げるものだった……。

知恵理 s i d e

「ひ、ヒナ君……?」

真っ暗な部屋の中、私は恐怖する。ヒナ君の胸元から出てきている白銀の刃、その後ろで無表情を崩さない水城さんを……。

降り続ける雨に似せた水に混じって見える純血が私の思考を奪う。

でも私の中で占めるのはたった一つの思い……。

今まで様々な者を失ってきた私にとって最後ともいえる者を失うこ

とへの恐怖でした。

それは私の最後の希望であり、最後の過去。

私と同じ時を歩んできた最後の道標……。そして私にとってまさしく天使の存在の幼なじみ……。

【不知火日向】

もし彼が消えたら私は……。私は……。

(ヒナ君？私を置いていかないで……)

ふらつく体に残された力を振り絞って私は立ち上がる。

……うんうん。立ち上がったことすらもしかしたら私の幻想だったのかもしれない。

ゆらゆらと視界が揺れ始める。

思考が停止した頭は激しい頭痛に変わった。

（私は一体何をしてるんだらう？）

そう思った瞬間、私の視界は今まで感じたことのない【紅】へと誘われるのでした……。

私気がついたとき。目の前にいたのは胸から赤い血を滴らせているヒナ君。

そんな彼を私は抱きしめている状態でした。

「ひ……な……くん？」

いつの間に移動したのか。いつの間に抱きしめていたのかなんて関係ありませんでした。

ただヒナ君を胸に抱きかかえて目にたまった雫をそっとヒナ君の頭

に落とす……。

そんな私は……無力でしかありませんでした……。

(私も……力が欲しい……)

それは私の心からの思い。切実な願いでした。

そんな私の目に留まったのは……ヒナ君の右手……。

正確にはヒナ君の右手に握られている私と同じ色のヒナ君の魂でした。

私と同じ名前がつけられた日本刀【桜】

その輝きに魅せられたかのように私は紅翼に……手をかけました。

これが私の人生を根本的に変わる出来事だと知らずに……。

……そう。私の人生はヒナ君の魂に触れた瞬間に全てが変わったの
でした。

それはまさしくターニングポイントと言える地点。

もしこの地点で私がヒナ君の魂に触れていなかったら……私は私の
隣にいる幼なじみと私の人生を失っていたかもしれない……。

でも、私はこのときヒナ君の魂に触れた……。

私をいつも大事に包んでくれる私の天使様の魂に触れたから……。

《……問題 nothing。俺がお前をおいていくわけないだろ?》

私は奇跡という言葉信じることができたのです。

《俺はお前を絶対悲しませない。俺がお前を絶対離さない。俺がお前を絶対守ってやる。……だからお前の【時】を俺に貸してくれ……
…チエ》

頭に響いてきたのは決して忘れることのない私の天使様の声でした。

そしてその安心感を与えてくれる彼の言葉は……私の力を解く鍵……。

……私の【時】を動かす魔法の言葉だったのです。

「……うん。私の力全部貸してあげるよヒナ君。……だから私を絶対一人にしないでね？」

その言葉を言いながら私はつい笑顔をこぼしました。

そして、ヒナ君の魂【桜】私の銀色の髪の毛を思わせるその輝きの先にはいつもの眠そうなヒナ君の顔……でもいつも私に見せてくれる微笑みを私を見ました……。

《ふふふつ。問題 nothingだぜチエ……俺の魂はいつもお前と共に……》

「私の魂はいつもヒナ君と一緒に……」

キンッ

《「同じ【時】を生きよう……！！」》

謀ったようにヒナ君の右手から離れる【桜】。

それはまるで自分の意志のように私の両手に渡ってきました……。

【桜】私は白銀の刃であるあなたと同じ人を守る白銀の時となります。
す。

私はヒナ君を守りたい……。ヒナ君が私を守ってくれるように私も
ヒナ君を守りたい……。

だって私は……。

ヒナ君を愛してるんだから……。

「時を動かししは白銀の歯車……」

私は昔からこの銀色の髪の毛に疑問と嫌悪を抱いていた。

「時を震わししは白銀の振り子……」

フラッシュバックしてくるのはいつも同じ映像。

「時を組み立てしは白銀のぜんまい……」

この髪の毛のせいで孤児院で異端だった私はいつも泣いていた。

「時を示ししは白銀の時刻判……」

そんな中でお兄ちゃん以外で初めて私に声をかけてくれた黒髪の男の子。

「時を止めししは白銀の刃……」

……今思えば私はあのときから分かっていたのかもしれない。

「そして、全ての時を導きしは白銀の秒針……」

……あなたを好きになるって。

「……【時】を操りし少女の名のもとに命ずる」

だから私の髪の毛を銀色に染めたこの能力はあなたのために……。

「……………来て……………」

そして私の【時】はあなたと一緒に……………だからヒナ君……………。

「……………【時の秒針】……………」

私のそばにずっといてね……………。

水城 s i d e

「……………俺のノルマ達成だな」

まるで全てを包み込むように光り輝く空間に閉じこめられた日向と
知恵理。

それを見た俺は静かにそう呟くのだった。

「何んだよこの光……」

「ま、まぶしい」

この強烈な光に驚愕の色を見せて声をあげる真備と凧。

「……………!!」

対して輝喜のやつは別の意味でこの光に驚愕の色を見せ声を上げることもできないようだ。

……………だが、それも当然のことか。

なんせあいつはこの光の正体を知っている。

そしてこの光が示す意味も……………な。

ヴォーン!!

「今度は何!?!」

風の叫びにも似た声が部屋に響き渡った。

風の目の先にあるのは日向と知恵理が閉じこめられた光のオーブ……。

その真上には今までなかった魔法陣にも似た紋様が浮かび上がっていた。

……【能力陣】だ。

その光景はとても神々しく眩しかった……。

「……さすがは世界が誇る【10導能力者】の能力の一つだな。……まったく空といい知恵理といいあの兄妹はなんで【10導能力者】なんだ？……その力が2人を苦しめるとは考えなかったのか……神？」

俺がこんなに長くしゃべることは梅雨に雨が降らないくらいに珍しいのだが……。

残念ながらこの言葉を聞いている人物は1人もいなかった……。

日向side

……温かい。

それがまず俺が感じた感覚だった……。

まるで母に抱かれているような感覚。

日和に照らされたような温かみ。

真備や凧、輝喜と談笑しているような心の温かさ……。

そのどれもが当てはまって……どれもが当てはまらない温かさ……。

言っている意味が分からないかもしれないけど俺にも分からないから仕方がない。

……いや、分からないんじゃない。説明できないんだ。

この温かみは味わったことがある。でもそれを言葉にすることができない……。

何なんだ？このモヤモヤは……？

……俺はいつたい何を忘れているんだ？

誰か……誰か……。

……教えてくれ……！

《教えるもなにもお前はもう分かってんだろ？》

……その声は紛れもない俺自身の声だった。

「【紅翼の天使】」

《ま、同じ名前だったら呼びにくいだろうからな。その呼び方でいいよ》

頭の中に響いてくる俺自身の声はそう言って少し声に出して苦笑いをした。

……間違いない。この声は昨日と今日の朝に俺を導いた【4年前の

俺だ。

でも……。

「……お前。いつとき出てこないんじゃないのか？」

そう。4年前の俺は今朝俺に【日輪流炎術】の一式〜四式を託したときにいつときは出てこないって言っていたはず……。

だが実際は1日もたたないうちに俺の目の前に現れているのだ。

そしてその答えは4年前の俺自信の口から語られるのだった。

《……俺もそのつもりだったんだけどな》

「え？」

4年前の俺の口から言われた予想外の言葉に俺は一瞬呆然としてしまっ。

もし、その言葉が本当だったとして……誰がここに4年前の俺を乗り越したんだ？

そして……俺と4年前の俺にいった何をさせたいんだ？

そんな疑問が頭の中をグルグルと巡回し続ける。

だけど、これも4年前の俺の口から語られるのだった……。

《俺をここに連れてきたのは……チエだ》

それは俺にとって衝撃以外の何者でもなかった。

そして、4年前の俺はそれを知ってか知らずかさらに言葉を繋ぐ。

俺にとってインパクトでしかない言葉を……。

《……実を言うとチエも能力者なんだよ》

「知恵理が能力者？」

《ああ、その能力とチエ自身の思いが俺をここへ召喚したんだ》

4年前の俺はそこまで言うといったん言葉をつむぐ。

こうして直接話しているとはいえ、4年前の俺の声は頭に響いているだけで実際に俺の目には何も映っていなかった。

そのため、今どんな気持ちでこの話を止めているのかは表情から受け取ることはいできないでいる。

だが、それも一瞬のこと。

そして、4年前の俺は「よし」と声を出すと再び話し始めるのだった。

《チエの能力は特別なものなんだ……》

「特別？何が特別なんだ？」

俺がそう聞き返すと4年前の俺は深く深呼吸（俺の口で）をする。

その動作だけで俺は察することができた。

……これからする話はとても重要なことだと。

そう思った俺は4年前の俺が深呼吸をしている間に決意を固めた。

……これから来る話をきっちり受け止めると。

そして4年前の俺は語り出した。

本当に重く。俺の意志を聞くための話を……。

《……チ工の能力。それは【10導能力者】の一つ【時】を操る能力だ》

4年前の俺が語った中には俺が気になる言葉がいくつもあった。

だが、まずは何より……。

「【10導能力者】ってなんだ？」

この聞き慣れない単語について聞くことにした。

《【10導能力者】……世界を生み出したとされる10の能力を扱う10人の能力者を総称して言う言葉だ。……そしてその中で“最も強い力”を持ち“最も弱い力”を持つとされるのが能力【時】……チ工の能力だ》

「“最も強い力”と“最も弱い力”を持つ……？」

その単語の矛盾は誰が見ても明らかだった。

「……どういう意味なんだ？」

必然的に出てきた俺の疑問に4年前の俺は順を追って話始めた。

《まず“最も弱い力”だけど……これは簡単だ。ただ単に攻撃手段がないんだよ》

「攻撃手段がない？つまり能力で攻撃したり魂狩での攻撃ができないってことなのか？」

《そういうことだ》

4年前の俺はそう肯定するとさらに話を続けた。

《通常の能力者は【戦士】もしくは【幻術師】にわけられる。これは知ってるよな？》

俺はそれに黙って頷く。

《だけど……チエの【時】の能力はそのどちらにも属さない。いわば異端の能力なんだ》

「なるほど……でもそれならそれでいいんじゃないか？攻撃でき

ないんならできないんで争いになることはないし……」

《……そういうわけにもいかないんだな》

4年前の俺が言ったその言葉にはどこか哀愁が漂っていた……。

そう。彼は知っているのだ。【時】の能力者が辿る運命を……。

《言っただろ。【時】の能力者は“最も弱い力”を持ち“最も強い力”を持つって……》

「最も強い力」？」

ひどく重みのある言葉。その一言だけで俺はその運命の酷さを思い知るのだった……。

《……【時渡し】》

「……それが“最も強い力”と言われる能力？」

《ああ、【時】の能力者が持つ魂狩の特性だ。内容は……読んで字のごとく……時を渡る力だ》

……なるほど。そりゃ“最も強い力”と言われるわけだ。

「タイムスリップか？」

《そうだ。チエにはタイムスリップする力があるってこと……そしてこれが意味すること……分かるか？》

4年前の俺はそう言う唇（俺の唇）を強く噛んだ。

その動作に俺は気付く。いや、気付かされた。

【時】の能力者が辿る残酷な運命を……。

《気付いたみたいだな？》

「……！！」

今度は俺が唇を噛み締める番だった。

その瞳に移るのは悔しさや悲しみではない。純粹な怒りである。

「でも、正体を隠せばそんな事には……」

《【時】の能力者はどの民族でも珍しい銀髪になってしまったんだ。

……見つけやすいうえに攻撃手段がないから捕らえやすい。そしてそれだけで時を渡る力が手にはいるんだ。これを狙わないで何を狙うんだって話だよ……》

……4年前の俺から聞いたこと。それは避けては通れない知恵理の運命だった。

一生狙われ続けるというあまりに残酷な……運命だったのだ。

「くそっ!!」

ダンッ!!

俺はその場の床を思わず殴りつけてしまう。

それはさっきまでの純粹な怒りとは訳が違う。ただやりたいままに出てくる憤怒の感情だった。

そうだ、俺は思いつきり憤怒していた。

しかし、それは知恵理の運命やそれを決めた神になんかじゃない。

……無力な自分に対してだ。

《…………》

ガンッ！！ガンッ！！ガンッ！！

4年前の俺ですら声を出せないくらいに俺は必死に床を殴り続ける。
まるで自分への戒めのように……。

ガンッ！！ガンッ！！ガンッ！！

《……力が欲しいか？》

……もし、人生に置ける分岐点があるとしたらここだったのかも
れない。

4年前の俺がもう少し小さい声で呟いていたら、俺がそのまま冷静
さを失っていたままだったら……。

たぶん俺は隣にいる幼なじみを失い暗い未来を迎えていたに違いな
い。

「……欲しい」

《……それは何のためにだ？》

……その答えに詰まるほど俺は愚か者ではないぞ。

「決まってるんだろ!!」

そう。これは誓いの言葉なんだ。

この言葉を発して瞬間に俺の人生は根本的に変わってしまっただろう。

だけど……だからこそ俺は過去の俺に誓うのだ。

例えばこの先何があっても知恵理とならすばらしい未来が待っている
と信じて……!!

「俺が力を求めるのは……これから先も知恵理を守り続けて、ずっと
知恵理の側に居続けるため!!そして知恵理と一緒に明るい未来
を手に入れるためだ!!」

……これでいい。これでいいんだ。

例え間違っけていてもいい。だけど俺はこの言葉に満足している。

未来がどうなるかなんて知ったことじゃない。

重要なのは知恵理と共に未来を歩んでいるかということだ。

だって俺は……。

……知恵理を愛してるんだから。

《そのセリフを待っていたんだよ4年後の俺》

4年前の俺はそう言つとパチンツと指（俺の指）を鳴らす。

その瞬間に入り込んできたのはさっきまで以上に温かな光の束だった。

そして俺はこの光の温かみの正体に気付く。

それは母親に抱かれる感覚ではない。

それは日和に照らされて感じる感情でもない。

一番近かったのがこの真備や凧、輝喜と話しているときの心の温かみを感じる感覚だったが……これも違う。

……この光の温かみはまさしく俺が知恵理に感じる温かみ……知恵

理を愛しいと感じる温かみだったのだ……。

「……思えば俺も長く生きたものだ。14歳だけど……本当に濃厚な14年間だった……それに……」

そう言いながら俺はこの温かな光の向こうを見つめる。

そして見つめる先にいるのは俺にとって愛しい銀髪の少女……知恵理だ。

「……本当に綺麗になったよな知恵理は。外見だけじゃなくて心も本当に綺麗になった……」

そんなことを思っていると知恵理は俺の右手に持つ【桜】をゆっくりと……包み込むように自身の両手に納めるのだった。……

「時を動かししは白銀の歯車……」

そういえば孤児院にいたころの知恵理はいつも泣いてばかりいたな

……。

「時を震わししは白銀の振り子……」

俺はそんな知恵理の銀色の髪に触れたくて近づいていったんだっけ。

「時を組み立てしは白銀のぜんまい……」

……でももしかしたら俺は気付いてたのかもな。

「時を示ししは白銀の時刻判……」

この銀髪の女の子に俺は惹かれる運命だったって……。

「時を止めししは白銀の刃……」。

……だから知恵理。

「そして、全ての時を導きしは白銀の秒針……」

俺はいつもお前のそばにいるからな……。

「……………【時】を操りし少女の名のもとに命ずる」

お前は俺に……………。

「……………来て……………」

いつも笑顔を見せてくれよ……………。

「……………【時の秒針】……………」

それだけで俺は問題^{ハッピー}nothingになるんだから！！

「……………【銀時計】の魂狩……………【時の秒針】」

知恵理が【時の秒針】を発動したそのとき。その場にいる全ての人はみんな同じことを考えていた。

“なんて綺麗な笑顔なんだ……………”と。

第45話 時のDESTINY（後書き）

作「今回はまた新しい単語が出てきました」

日「【10導能力者】だな」

知「それに私の魂狩の【時の秒針】も出てきたよ」

作「ではさっそく解説していきたいと思います。では特別講師さんお願いしまーす!!」

輝「はあー……みなさんめんどくさいだけでしょ?」

日&作「うん」

輝「……否定くらいはしてください」

日「ん〜でもな〜たぶん水城並みに話の流れが分かってるのは輝喜だけだからな〜」

輝「くっ!ー!否定できないのが悔しい……!!」

知「コウ君……（涙目上目遣い）」

輝「うつ……わかりましたやればいいんでしょ!ー!」

日&作「ありがとう」

輝「はあー……では僭越ながら時間がないので【10導能力者】だけ……」

日& amp; 知& amp; 作「えー!!」

輝「ギロツ（未来凶解放状態での睨み）」

日& amp; 知& amp; 作「な、なんでもありません……」

輝「おほん。では気を取り直して……【10導能力者】とは地球を構成する最も重要な10の能力、そしてその能力者を指す言葉です。この能力者達は通常の能力者よりも卓越した能力を持っておりその存在は各組織で重宝されています。ちなみに知恵理の【時】もそれに含まれ知恵理の兄の能力も【10導能力者】に含まれます」

作「ありがとうございます。ではいきなりで悪いですが次回予告します。」

ついに【時】の力に目覚めた知恵理。

だけど、肝心の日向は未だに目覚めない……。

そんな日向に知恵理は【時】の力を使う!!

そして日向は真の力に目覚める!!

次回【天使の象徴】

日「問題 nothingだぜ!!」

知「ねーねーヒナ君。【10導能力者】ってどっかできたことない？妖精の尻尾とかd……」

日&輝『それを言っちゃだめだ（ですよ）！？』

作「ちなみに実際はまったく関係ないんだ。むしろこれ作ってから妖精の尻尾の存在知ったしさ」

日&輝『誤解を招くことはするな（しないでください）！……！』

知「2人とも何に怒ってるんだろう？」

次回に続く！！

第46話 天使の象徴（前書き）

日向と知恵理…… 2人の絆が試される！！

第四六話【天使の象徴】

日向の紅翼がその真の力を現す！！

第46話 天使の象徴

「Unknown」side

「…………まさか俺の結界が外から破られるとはな」

刺された腹を庇いながらゲイルはそう呟く。

彼の職業の象徴とも呼べる純白の白衣は腹の辺りを中心に赤黒く染まり今現在も大量の血が流れ出ていた。

その出血の量はもし治癒結界の中にいなかったら間違いなく出血死するほどだ。

…………そう、ゲイルは敗れたのだ。

ユニオンクルーズという組織に所属している謎の転校生、李・悶に…………。

「俺も…………イヤ、ワタシモ…………ツイテ…………マセンネ…………」

ゲイルはいつもの片言の日本語に言葉遣いを直しその場に倒れてしまふ。

そしてゲイルが倒れている治癒結界の外。そこにはいとも簡単にゲイルの治癒結界を破り、ゲイルに勝利したユニオンクルーズの暗殺者、李・悶が立っていた。

その左手にたつぷりとゲイルの血をつけて……。

悶はその鋭く残忍な目でゲイルを睨み付けながら顔についた返り血を拭う。

その行為は明らかに常人の行動ではない。

……ゲイルはこのとき察したのだった。

今日の前にいるこの少年は……。

「……ユニオンナンバーズの【？】の刺青持ちである俺をなめるな」

……人殺しに慣れてると。

「ハアー……ハアー……アナタハ……イツタイ？」

ゲイルは最後の力を振り絞ってそう問う。

その瞳に映る暗殺者の少年へと……。

しかし少年はその問いに笑みをこぼすのだった。

まるで狂気に震えるような……人殺しを楽しむような……そんな。

“狂った笑顔”を。

奇しくも同時刻、中でそれとは正反対の綺麗な笑顔を知恵理が浮かべていたことをゲイルが知るはずもなかった……。

「くくくっ、俺が誰かって？教えてやるよ……」

悶は「冥土の土産だ」と言いながら魂狩【地獄の門】^{ヘルゲート}を装着しているその左手を突っ込んだ。

……何も無い空間へと。

「グハツ!!」

その瞬間にゲイルの断末魔が部屋中に響き渡る。

そしてゲイルの胸から突き出ているのは間違いなく人の手の形をした機会仕掛けの義手……。

【地獄の門】だった。

「俺はユニオンクルーズが集めた【チルドレン計画】の被験者の一人で……。。【空間】の能力者だ」

……悶が発した2つの単語はゲイルの頭に刺された時以上の衝撃を与えるのだった。

「【チルドレン計画】……………【空間】の能力者……………!？」

今にも閉じかけていたゲイルの両目蓋が一気に見開く。

悶の方もそれを察したのか空間を引き裂いて治癒結界内部のゲイルの胸へと空間を繋いだ左手を抜き去る。

抜き去った直後に溢れ出てくる致死量の血。それを狂った笑みを浮かべながら見る悶はゲイルに問うのだった。

「それは【チルドレン計画】という単語に反応したのか……………?それとも……………」

カランカラン……………

ゲイルの右手からメスの魂狩【執刀】が滑り落ちた音が鳴り響く。

まるで何かを知らせる鐘の音のよう……………。

「俺が【10導能力者】の一人であることへの驚きか？」

それがゲイルの聞いた悶の最後の言葉だった。

輝喜side

「……日向？……知恵理？」

真っ暗だった時雨の間は今やその影を見ることがすら出来ないくらいに輝いています。

そしてその光の源である光の塊……。

そこに向かって風は小さな声で吹きました。

……そうです。風の吹きのとおり車の大きさくらいのあの光の中には2人……日向と知恵理がいます。

いったい中の2人はどうなっているのか？

そんなことは今の俺達に知るすべはありません。

……でも言えることもあります。

あの光が解放されたとき……。

「……日向の真の姿が現れる」

それは決定事項の事柄。おそらく水城はこの状況を想定していたの
でしょう。

その想定の上で水城は「自分は負ける」と言っていました。

……それはつまり。

「日向の勝利ってことですね……」

「お前はさっきから何を呟いてるんだ？」

未だに現実に戻ってきていない尻。

その尻を後ろに背負っている俺の呟きに答えてきた男はの前の光景

をしつかり見据えていました。

「簡単ですよ真備。あなたは日向の名前に疑問を抱きませんでしたか？」

「……………名前？」

俺は遠まわしにそんな質問を真備に与えます。

とはいえこんな質問を真備が答えられるわけがない。

真備がこの質問の真意に気付くわけがない。

……………そう思っていたんですけどね。

「……………【天使】」

真備はしつかりとその単語を呟いてくれました。

まだ日向の名前の名前という言葉が【紅翼の天使】だと言ったことすら言っていないのに……………。

それなのに……………あの真備が答えを導いてしまいました……………。

「ん？不思議そうな顔してるな“何で真備に分かったのか？”って顔に書いてあるぜ？」

呆然としてしまっている俺には真備の言葉はあまり耳に入ってきてきませんでした。

そんな俺を見て真備は一回深くため息をついて……。

「……おいいつまで寝てんだよ輝喜！！」

「は、はい！？」

強く、しかし優しく俺を呼び起こしました。

そして慌てて目覚めた俺が見たのは真備の強い意志が宿っている両瞳。

俺はその瞳の奥に俺の未来図とはまた違う何か特別な力を感じました。

「わりーけど今回は真面目に話がしたいんだ」

真備の話す言葉一つ一つに宿る強い意志。

その言葉の羅列はとても重いものでした。

「わかりました」

だから俺もそれ相応の態度で真備の強い意志に答えなければいけません。

そうしなければこれは親友ともである真備。それに日向と知恵理に対する冒涇となりますから……。

……でも、もう俺はあなた方を親友ともとは呼べませんけどね。

「……俺はあなたのことを甘く見ていたのかもしれない」

「バーカ。俺はこう見えてもやるときはやる男なんだよ」

ええ、まったくその通りです。

あなたは俺達5人の中で一番……。

……大人ですよ。

日向 side

「……」

そこはただ赤く、黒く、永遠と焦げ臭い血のおいが充満した所だった……。

その酷く醜い場所で俺はただ立ちすくむ。

さっきまでとは違うこの場所で俺はただ嫌悪感を抱いた。

知恵理が……愛しい少女が与えてくれた温かな光すら相殺させるこの空間に……。

「……どこだ？」

俺、不知火日向はいつの間にかいたこの場所に疑問を持った。

辺りを見渡せば崩れ落ち炎上している多くの建物。

上を見れば蒼いはずの空は血が飛び散ったように紅い……。

俺はこの状況の全てを頭に入れた上で答えを探し、導き出す。

ここは……【戦場】？

誰も答えてくれないその中で、俺はそう答えを出した。

そしてすぐに俺の答えが華丸だと肯定される。

ドーンッ！……！

……戦火の音によって。

「やっぱりここは戦場……」

突如として響き渡ってきたのは爆撃の音。

その証拠に近くにあった建物は粉碎され炎上する。そしてその上には爆弾を落としたと思わしき黒い物体……戦闘機だ。

「……」

俺は見上げた先にいた戦闘機の数に沈黙してしまう。

その数は例えなしに数えられないほど。

……俺はこの景色に見覚えがあった。

不思議と頭の中に流れ込んでくる映像。その全てにこんな戦場が映し出されている……。

まるで体験したかのように。

「いったいこれは？」

「よっ！ー！」

……その声はまさしく不意に聞こえてきた。

そしてこの声は忘れるはずもない。忘れるわけのない声。

……俺自身の声だ。

「【紅翼の天使】」

「んー。正解ではあるんだけど……ちょっと違うかな？」

振り返った先には予想通り片手を上げた4年前の俺がいた。

……背中に時計の針でできた十字架のマークがついた白い服を着て。

「違っつてどっいうことだ？」

「簡単な話だよ。俺は紅翼の天使と同時に不知火日向。つまりお前
つてことになるのさ」

そう言うと4年前の俺は腰にさしていた日本刀の魂狩【紅翼】を抜く。

4年前……9才の俺が持つにはあまりに大きすぎるその銀の輝きは
4年前の俺にはあまりにも不釣り合い甚だしい。

……それを目の当たりにしてみた俺はただ呆然としてしまった。

「……いいか4年後の俺？」

そう言ったとき4年前の俺の瞳はすでに刃のごとく鋭くなっていた。

「これから見せる映像は過去のお前が経験した記憶を一時的にチエの力でみせているだけだ」

4年前の俺が刀に入れる力を強くする。

「……これが終わったら全てを忘れると思え」

……そして4年前の俺はそのまま空を滑空し続けている大量の戦闘機を見据えた。

見据えた目の奥に激しい炎を灯しながら。

「……でもこれだけは覚えとけ。」

……“お前は人を殺したことはない。

ただの一度も”……。

……絶対覚えとけよ」

それは願いではなく命令形。絶対的なる強制力を持った言葉だった。

「んじゃちよっくらお仕置きにいけますか」

シュンッ！……！

4年前の俺はそう言つと空へと旅立っていく。

目にも留まらぬ速さで……。

ドカーーンッ！！！！！

次の瞬間に聞こえてきたのは一機目の戦闘機が破壊される音だった。

そして俺はその先に……。

……………天使を見た……………。

赤い閃光となって高速で戦闘機を斬りつける赤く神々しい……………。

【紅翼の天使】を……………。

真備 side

「……真備。あなたはなぜ日向が【紅翼の天使】なんて呼ばれるようになったと思います?」

輝喜の質問にある程度答えを予想していた俺はかんぱつ入れずにすく答える。

「あいつが幼かったから……だろ?」

俺の答えに輝喜は今日何度目か分からない驚愕の表情を浮かべた。

……おいおい。いくら何でもそんなに何度も驚くなんてひどくね?

「……ま、まさかマキビンの答えが道理に合っているなんて」

「……その言い方。俺が普段は道理に合っていないみたいだぞ?」

この扱いには慣れたとはいえこのままじゃ話が進まないだろ……。

俺がそう思った瞬間。輝喜も同じことを思ったのかコホンと咳払いをする。

その後の顔は真剣なものへと変わった。

「失礼しました。では話を続けていききたいと思います」

口調を真面目なものにした輝喜はさらに語り出した。

「……確かに真備の言うとおり当時の日向が幼かったというのも原因の一因だったと思います。……ですがそれだけでは決定的なものにはなりません」

「……どういうことだ？」

俺が聞き返すと輝喜はうーんとうねり始める。

「……定理がないわ」

それを遮るように俺の耳元に入ってきたのは姉貴の声だった。

「姉貴？」

「証明するためには定理となる事柄が少なすぎる……違う？」

完全に復活したらしい姉貴はさすがに才女と呼ばれるだけはある。

一瞬にして俺が悩んでいた内容を理解したようだ。

「そのとおりです」

輝喜はそう言つと肩をすくめた。

そして輝喜の黒い天使の瞳と赤い悪魔の瞳は日向と知恵理がいる光の塊を一直線に射る。

まるで光の中で何が起こっているのかが見えているように……。

「真備は……日向に足りないものが何か分かりますか？」

「……足りないもの？」

「ええ、日向は幼いころから強大な力を持って戦場を駆けていたと聞きました……」

サラツと言つたつもりだろうがその言葉は俺と姉貴には驚きだった。

なんせいつも一緒に笑い合っている親友がそんな状況になることが想像つかなかったからだ。

輝喜の話は続く。俺達の想像を遥かに超えた天使の話を……。

「まだ10にも満たない子供が日本刀を持って……圧倒的力を見せつける。それこそ……」

そこまで言ったところで俺は気付いた。

輝喜の瞳がゆらゆらと揺らいでいることに……。

そしてその理由は次の言葉で分かった。

輝喜の動揺の理由が……日向が戦場においてどんな存在だったかというところが……。

「【悪魔】と呼ばれてもおかしくありませんでした……」

……その一言は昔の日向を完結に表していた。

日向の恐ろしさを含めて……。

「あ、悪魔？」

無意識のうちに出てしまった声に輝喜は無言で頷いた。

「【悪魔】……天の使いである【天使】と相対する地獄の化身……
戦場で多くの者を斬る日向はまさしく悪魔でしたでしょうね」

輝喜はそこまで言うと一息つく。そして再び日向と知恵理がいる光の塊に目を向け話を続けた。

「……ではなぜ日向が戦場で悪魔ではなく天使と呼ばれていたか……
…それには2つの理由があるんです」

「さっきあたしが言った定理のことね」

輝喜は凧の言葉に頷くと視線は光の塊に向けたまま俺達に見えるように人差し指を立てた。

「まず最初の理由ですが……。日向は決して戦場で人を殺めなかったからです」

「人を殺さない？」

戦場において矛盾しているその言葉に俺は疑問符を浮かべる。

だが、それと同時に俺はその言葉にあんちよの心を思った。

「……そこはやはり日向でしたよ。……やはり彼は昔から優しかったみたいですね」

輝喜のその言葉がさらに俺の心に潤いをもたらす。

どうやら俺は日向を軽蔑せずすみそつだ。

……ま、人を殺してようが殺してなかるうが日向を軽蔑するなんてありえないんだけどな。

「まだよ……」

そのとき。姉貴の声が小さく響いた。

だけど俺も輝喜もその言葉の意味は言わずとも分かる。

だから俺も姉貴の言葉で輝喜の方を向く。

対して輝喜は俺達の方を向くことはない。その瞳の先はずっと同じ、日向と知恵理がいる光の塊のままだった。

そして輝喜はその状態のまま唇を震わす。

「確かに……優しいだけでは天使と呼ばれる定理にはなりません」

そのとき輝喜の赤い瞳……【未来図】が見開かれた。

未来にあるものに驚いたように……。

しかし輝喜の話は止まることはない。

むしろ今の未来図を見開いた後に見せる輝喜のニヒルな笑みによりさらに饒舌じょうじつとなっていた。

「……真備。さっきのあなたへの質問の答えは分かりましたか？」

いつも以上の優しい口調に俺も笑みを浮かべる。

瞳を日向と知恵理のいる光の塊に向けながら……。

「足りないもの……か。人間としてのあいつにはそんなものないな」

俺は臆することなくどつどつとそう言う。

姉貴は一瞬驚いたような顔を見せるもすぐに俺の意図を察したらしく深く頷くのがだった。

輝喜の方も……俺の意図を察したようだ。

その証拠に……。

「……では天使としての日向に足りないものは？」

そう俺に聞き返してきたからな。

そしてその言葉に俺は胸を張って答えるのだった。

「決まってるんだろ……」

俺の言葉と同時に俺達の見る先にあつた光の塊がなおいつその輝きを放ち始める。

しかし俺は慌てることはない。

その先にいる日向と知恵理を信じているから……。

だから俺は言葉を続けた。

日向が天使と呼ばれる最大の定理を……。

「……天使の象徴さ」

知恵理 side

「チエ……」

光に包まれた空間の中。ヒナ君は私の名前を呟いてまぶたを開けました。

でも私はその呼び方が引つかかる。

なぜなら今私を【チエ】と呼ぶ人間はいないからだ。

もちろんヒナ君ももう3年くらい前から【知恵理】呼び捨てで呼んでいる。

……つまり目の前にいるのは過去のヒナ君ということになるのだ。

「チエ……」

でも私の思惑は私の頬を優しく撫でてくるヒナ君の手により崩れるのだった。

その温かみは……いつも私を安心させてくれる温かみだったのです。

「……ヒナ君？」

私は目の前にいる幼馴染の男の子を呼びかけました。

そしてヒナ君も私の呼びかけに……。

「……ただいま……」

ただ微笑みながらそう言ってくれました。

「……おかえりなさい……」

私は彼が私が普段から知っている彼だと確信した瞬間、胸に銀時計

を抱き締めながらそう言って微笑みかけたのです。

.....

.....

.....

...

「.....あれ？そういえばなんで俺生きてんの？」

ヒナ君は自分の服が真っ赤になっていることに気付きそんなすっとなきょんな声を出して自分の胸を押さえました。

そんなヒナ君に私はつい笑みをこぼしてしまふ。

なぜなら水城さんと闘っているときの凜々しいヒナ君やさっきまでの優しいヒナ君とのギャップがあったからだ。

「ふふふ」

「.....おいチエ。何笑ってやがんだよ」

あら？ヒナ君たらちよつと拗ねちゃったかな？

唇を少し尖らせたヒナ君は普段のカッコイイヒナ君の面影はまったくありませんでした。

むしろ可愛いく思ってしまう私がいる。

そう考えた私はいつの間にかヒナ君の頭を撫でていました。

「な！！お前は何がしたいんだよ！？」

「ふふふ ヒナ君可愛い」

慌てるふかめくヒナ君。

でも私はヒナ君の頭を撫でながらも満更じゃなさそうなヒナ君の表情を見ました。

……ヒナ君になでてもらっているときの私もこんな感じなのかな？

私がそんなことを考えていると不意にめまいが私の頭を襲ってきた。

バサッ

「チエー!!」

ヒナ君の方に倒れ込んでしまった私をヒナ君は慌てて抱きかかえる。

そのせいで見上げる形で見たヒナ君の瞳はあまり見ない動揺の色がありました。

……ごめんね、ヒナ君。

「チエー!!どうしたんだよ!!」

慌てるヒナ君に私は無理やり微笑みを見せながら言いました。

「……ごめんねヒナ君。私、ヒナ…君の傷を治……すのに…かなり力……使っちゃったみたい……」

「ち……か……ら?」

ヒナ君はかなり動揺してるみたいだった。

だから私はヒナ君を安心させる意味も含めて言葉を紡いでいく。

「……………ヒナ君の…傷の時間を……………戻したの」

ヒナ君は私の言葉にはっとしたみたい。

……………うん。確かに私がこんな状態なのはヒナ君が原因だよ？

……………でもこれはヒナ君のせいじゃない。

私が……………望んだことだから……………。

私はヒナ君にそれを伝えるためになおいつそう頑張って笑みを浮かべ、ヒナ君に尋ねた。

「私は……………ヒナ君の…役にたてたかな？」

簡単な……………でも複雑な質問。

だけどヒナ君は私の言いたいことをしっかりと理解してくれた。

最高の笑みを浮かべて……………。

「チエ。お前は最高だよ」

そう言って私を抱き締めてくれました。

そしてヒナ君は私を抱き締めたままゆっくりと一言呟きます。

それと同時に現れたのは私を優しく包み込む。

私の……すべてを……。

「炎舞せよ【不死鳥】」

そしてそれと同時に私の時の能力で現れていた光は崩れ始める。

ただ私には外の様子を見ることはできませんでした。

私を包み込むように折り畳まれている天使の象徴によって……。

バサッ！！！！！！！！！

一気にそれを広げたヒナ君の周りにはまるで桜吹雪のように数枚の
それが舞い散る。

私はこのときやっとヒナ君の全てを見ることができました。

ヒラヒラと舞い散る赤いそれを何千枚も背中につけたヒナ君を……。

天使の象徴【紅い翼】を広げた大好きな幼なじみの男の子を……。

私を抱き締めたままヒナ君は私の左手から日本刀を優しく奪い取る。

あまり力が入らない私もされるがままに日本刀を……私（桜）を渡しました。

そしてそのままヒナ君は桜を水城さんに向かって突きつけ……。

「第2ラウンドといこうぜ水城……。もちろん問題 nothing だろ？」

そう言ったヒナ君は今までにないほど神々しく美しかったです。

その神々しい姿に私は……見惚れてしまいました。

紅い翼を持つ【紅翼の天使】に……。

第46話 天使の象徴（後書き）

作「こんにちは作者のHYUGAです」

日「こんにちは主人公不知火日向です」

真「こんにちは日向の親友？羽前真備です」

輝「……なんですかこの始まり方は？」

作「というわけで今回はこの4人で話を見直していききたいと思いま
す！！」

日& amp ;真「イエイー！！」

輝「俺の言葉は無視ですか！？」

作「それがお前の運命さ……」

輝「くっ！最近は刹那もあまり出てきませんし……ずっと俺だけ
損な役回りじゃないですか……」

作「それがツツコミの役割さ（キラン）」

輝「……この扱いに慣れてきた自分が怖いです」

作「さてツツコミが諦めたところで話を進めたいと思います……！」

日「問題nothing いつでもいぜー!」

真「ドーンと来い!.....!」

輝「俺は.....いえ何でもないです」

作「では最初の疑問に行きます。最初の疑問は日向についてです!」

日「俺?」

作「はい。日向が目覚めたあたりから知恵理への呼び方が変わったのはなんですか?ってお便りが来てました」

輝「お便りなんですか!?」

作「ん?何か聞こえたような気がしましたが気にせず日向お願いします!」

輝「.....俺って空気なんですか?」

日「そうだな.....ま、一番の理由は心境の変化だな」

真「心境の変化?」

日「そ 俺がチエへの呼び方を変えたのは自分の気持ちに気付いたからだな」

輝「なるほど.....」

日「でも恥ずかしい話チエに告る勇氣なんてとてもじゃないから……」

真&輝『お前なら問題ないだろ（でしょう）』（ボソボソ）
あなた

日「だからチエへの気持ちの現れとして親愛がこもった幼いころの呼び方に戻したんです」

輝「そうですか（優しい笑顔）」

真「へ！！それでこそ我が親友だな！！」

日「恥ずいからチエには黙っといってくれよ？」

真「ああ！！」

輝「もちろんです！！」

作「いやーすばらしい話でしたー」

輝「……何もしなければいいんですが。いやな予感が……」

作「知恵理への気持ちをうまく伝えられない日向……いいです！！」

輝「やな予感、やな予感！！」

作「以上ペンネーム【天然娘】さんからでした」

輝「やな予感、やな予感……って！！それ本人からじゃないですか！！」

作「へ？」

輝「へ？じゃありません！！日向の気持ちを踏みにじる気ですかあなただは！？」

真「何言っつてんだ輝喜？これは【天然娘】さんからだろ？」

輝「あなたは黙っていてください！！！」

真「……ひでー」

作「さていつもながら時間が無くなってきたので次回予告行きたいと思いまーす！！！」

真& amp ;輝「2人揃って無視された！？」

作「では次回予告……」。

紅翼の天使としてついに背中の子紅い翼を羽ばたかせた日向。

その日向に對峙してくるのは時の番人の雨の死神水城。

そしてゲイルを倒した謎の組織の？の刺青を持つ男、悶……。

彼らの思惑は全員がそれぞれの予期する未来通りにたどり着けることとはない……。

しかし3人は闘いを続ける。

その先に自分の信じた未来があると信じて……。

次回【不死鳥と桜】

日「問題nothingだぜ!!」

日「そういえば真備って実はバカじゃないのか？」

輝「いえ……バカでしょう？」

真「そんなことないぜ!？」

日「……7×3は？」

真「24!!!!!!」

日& amp; 輝「こいつはバカだ(です)!!」

次回に続く!!

第47話 不死鳥と桜（前書き）

紅翼の天使。

彼の持つ最強の剣術が今開花する……。

日向、水城、悶、三人の思惑が衝突する怒涛の47話！！

では本編にござ……！！

第47話 不死鳥と桜

日向side

「第2ラウンドと行くこうぜ水城……もちろん問題nothingだろ？」

知恵理から受け取った俺の魂、日本刀の魂狩“紅翼”【桜】を水城に突きつけながら俺は唇を震わせる。

左腕に抱きしめるのは俺の守りたい【桜】

右手に握りしめるのは守りたい者を守るための【桜】

そして……背中で羽ばたせるのは天使の象徴であり俺を兄貴（空）のもとへと送り届けてくれる紅い翼……。

そう、この紅い翼こそ俺を天使へと昇華させる紅翼の特性……。

「……【不死鳥】か」

「そつだ水城【雨の死神】であるお前ならこいつを知ってるだろ？」

「……ああ【紅翼の天使】を知る者なら誰でも知っている」

水城は相変わらずの無表情で静かにそう呟くと今まで降ろしていた村鯨の刃を構えなおす。

だがやつにとってみればこれは予想通りだったのかもしれない。

村鯨を直していなかったのがその何よりの証拠……。

やつはこうなることを知っていたのだ。

「……貴様はそれを使いこなせるのか？」

水城はそう言いながらさつきと同じように俺を挑発してくる。

これ以上にならないほどの安い挑発だが水への恐怖が俺の頭を溶かしてぐちゃぐちゃにしていた。

……さつきまでの俺ならな。

だけど俺はさつきまでの俺じゃない。

俺は水城の言葉に深く息を吐くと水城に知恵理を抱きしめたままの左手の親指を突き立て……。

「問題 nothingだ死神!!」

地面に向かって振り下ろすのだった。

水城は俺の行動に少しだけ無表情な顔を下げると俺達にも分かるように深くため息をする。

「……貴様には最早この類は効かないか」

「残念ながらそういうことだ死神……俺は泳げない理由は泳げないんじゃない。泳ぐ必要がなかったってことだ」

「……そうだな貴様には“ヒレ”はなくても“翼”がある」

「そして例え泳げなくても飛べれば水なんて無きに等しい!!」

知恵理を抱き締める腕を緩めないようにきつく結びながら俺は水城にそう叫ぶ。

挑発に乗らなくなった俺に次に水城がどんな行動を起こすか分かっていたからだ。

「……何を警戒している？」

「とぼけんなよ水城。お前が次に起こすことくらい端っからわかっているさ」

「……ふっ、そういえばお前は天才だったな」

「そういうことだ」

水城はもう一度鼻で笑うと村鯨の刃を水面に浸透させる。

村鯨の刃が触れたところから水の波紋が徐々に広がっていくでも戦闘可能な臨戦態勢となった。

そして俺はこの技にはかなり見覚えがある。

俺【紅翼の天使】VS時雨水城【雨の死神】のこの闘いを始めたときと同じパターン……どうやら水城は同じシーンを再現しようとしているようだった。

「……ヒナ君……？」

ふと周りの雨音で消えてしまいそんな声に反応した俺が腕に目を落とすと今にも閉じてしまいそんな目で俺を見上げる知恵理がいた。

「どうやら知恵理を離さないようにきつく絞った腕に疑問と不安を覚えたいだな。」

「……だったら俺がすること。それは……。」

「ふあさ……」

「大丈夫だ知恵理。俺はお前の【守護者】として最期まで護る……！！」

知恵理の頭を撫でながら俺の決意を吐き出すだけさ。

「……余裕だな不知火日向」

「生憎と優先順位は知恵理が堂々の一位なんで」

頭を撫でられて少し上機嫌な知恵理。

それを見た俺も和やかな心情になったが……どうやらこの闘いからは逃げられないようだ……。

「知恵理はできるだけ巻き込みたくないんだが？」

「……ああ、そうだな。だったら……」

水城は俺の訴えに少し肩の力を緩めたが……。

「……自分でどうにかするんだな」

そう言ってすぐカ一杯に村鯨で水面を引き裂いた。

「……【水流・天象】」

引き裂いた部分から殺傷能力を持った涙が一気に押し寄せてくる。

迫り来るそれはまるで海の中で獲物を追う鯨のように一直線に俺と

知恵理に向かってきた。

……だから俺もそれに合わせるとしよう。

あのとときと同じように。

「日輪流炎術二式！」

知恵理を抱き締める腕にさらに力を加える。

だがそれとは逆の右手に握る紅翼には少し力を抜いて軽く握るようにし……。

ガキンッ！！！！

地面に向かって思いっきり紅翼を突き立てるのだった。

……そう、これはあのとときとまったく同じ状況。

だがそれだけではない、それだけではさっきの二の舞になるのは日
をみるより明らかだからだ。

……ではどうするか？……簡単な話だ。

つまり、俺はさっきまでなかった背中で羽ばたく紅い翼を思いっきり広げ……！！

「【焔壁】……！！」

ポーーーーッ……！！

地面から炎の壁を出して波と対峙するのだった。

真備 side

「日向……！！」

俺は今できるだけだけの精一杯の声を日向に向かって吐き出した。

頭の悪い俺でも分かる。

この攻撃パターンがさっきまでの戦闘とまったく同じだということに。

「姉貴！？日向のやつ何考えてんだよ！？」

「うっさいわね！？あたしに分かるわけないでしょ！？」

俺は背中で唇を噛みしめている姉貴に強い口調で問いかける。

だが姉貴は噛みしめている唇を解放すると俺以上の叫び声で俺に返してきた。

「2人とも静かにしてください」

そんな中、俺達の中で一番落ち着いている輝喜が冷静にそう切り返してくる。

その瞳……未来図に映る映像は俺には分からない。

しかし輝喜の様子には一切の焦りは見えなかった。

むしろ……。

『輝喜、お前あんた………』

偶然にも同じことを思ったのか姉貴と声がかぶってしまっ。

だけど俺と姉貴はお互いに気にすることなく言葉を続けるのだった。

『興奮……してるのか？』

そう、輝喜の瞳には焦りは一切見えなかった。

そこにあるのは……興奮。

口元を微妙に歪ませ目をめいっばい見開いたその様子は興奮して

いるようにしか見えなかった。

「ええ、俺は興奮していますよ……」

そして輝喜自身もそれを認めていた。

「ど、どうしてそんなに興奮してるんだ？」

「ど、どうして……ですか？」

輝喜の様子に少し動揺を見せるも俺がそう問いかけるて輝喜は日向と知恵理から目を離すことなくそう返してくる。

だがやはりその瞳は相も変わらずに目を見開き 分からないですか？ と問いかけてきていた。

「……お前はいつたいどんな未来を見たんだよ？」

残念なことに俺の眩きは輝喜には届かなかった。

輝喜は興奮した様子のまま彼にしか見えない未来を見続ける。

輝喜はいつたい何を見て、何を思ったのか？

その答えは近い未来……それこそ数秒後に明かされた。

彼……不知火日向のあまりに美しすぎる闘いに……。

「炎舞せよ【不死鳥】」

俺達は見惚れてしまっただった。

「じりゃ……興奮もするわな」

それは例外なく俺もその姿に動きを止めてしまう。

【紅翼の天使】の真の闘い方に……。

悶side

「……こいつは」

ゲイルの胸を一突きしたとき俺はある違和感を感じる。

それは簡単な違和感。それこそ注意しなければ気付けないほどの果てしなく細かい感覚だ。

だが、それもゲイルが持つメスの魂狩【執刀】がゲイルの手から滑り落ちたそのときに明らかになった。

「ちっ！！してやられた！！」

俺は思わず舌打ちする。

そして俺の目の前にあるのは……。

ヒラヒラ……

ゲイル【だった】ものの変わり果てた姿。

一枚の破れた紙だった。

どうやら俺は時の番人医療局の局長にしてやられてしまったようだ。

」【空蝉】かつ!？」

そう、そこにあつたのは胸から血を流して絶命したゲイルの死体ではなく……一枚の破れた紙。

その正体は【空蝉】

変わり身を置く羽前流式紙術【空蝉】だった。

「いったい何のつもりで……!？」

俺はさらに毒づこうと思ったそのとき式紙に何か書いてあることに気がつく。

すでに式紙に宿っていたゲイルの能力と魂狩がなくなったためゲイルの治癒結界は消え去っている。

だから俺は楽々その式紙を読むことができるのだった。

《ユニオンクルーズの暗殺者へ……俺は自分の実力を量れない愚か者ではありませーん。

それに私は天使と約束しました【もう一度会う】と……。

だから私はあなたを足止めするだけを仕事としました。

……さすがのあなたでも中にいるのは私と違って一流の能力者6人……勝てないでしょう？

だから私は諦めて立ち去ることをお勧めしまーす。

時の番人医療局局长

【ゲイル・ハルトマン】《

俺はその書き置きを読んだ瞬間に思った。

くそつたれ!!!!と……。

そして俺はゲイルが書き置きしたそれを木っ端みじんに破き目の前の分厚い鋼鉄の扉を睨みつける。

その先には……。

時の番人の2人の能力者。

世界屈指の陰陽師羽前家の2人の子息。

そして【紅翼の天使】 【雨の死神】 の世界で有数の一流能力者……。

確かにこんなメンツの全てに俺1人で勝つことなんて不可能だ。

だが……。

「俺の力をもつてすれば時の少女だけを攫うなんて造作もない」

なぜなら俺の能力は時の少女と同じ【10導能力者】の1つ【空間】

“完全なる空間制御”を可能とする能力だからだ。

水城side

「【焔壁】！！！！」

日向がそう告げた瞬間日向の前に焔で形作られる壁が現れる。

【焔壁】でこちら側からは日向と知恵理の姿は確認できなくなるもこの状態はさつきとまったく同じ展開だった。

「……………学ばないやつだ」

俺はそう呟くと【水流・天象】を放ったそのままの動きで村鮫を振り上げる。

日向達は見えなかったが焔壁がある場所で大体の位置は掴めることができた。

だから俺はさらに日向に追い討ちをしたのだ。

「……………【水刃・天象】！！」

ザンツ！！！

確実に仕留めるために俺はさらに水の刃を繰り返す。

「……………【水刃・天象】乱れうち！！！！！！」

ザンツ！！！！ザンツ！！！！ザンツ！！！！ザンツ！！！！ザンツ！！！！

振り降ろせば放ち、放てば振り上げる。

その動作を繰り返すことで俺はやつの力を試していた。

「……………最後だ！！！！」

ザンツ！！！！

そして最後の水の刃を飛ばしたときには 辺り一面白い水蒸気に
より真っ白になっていた。

「……………はー……………はー……………」

珍しく息を荒げる俺は俺が放った大量の水の刃と日向が放った焰の壁で発生したその霧の先を見つめる。

その先にやつ　不知火日向がいるかを確認するために。

だが、俺は無意識に確信を持っていた。

やつは……………【紅翼の天使】は……………。

「そんなに探さなくても俺達は問題nothingだぜ」

必ず俺の予想の斜め上に行くことを……………。

「……!!どっだ!？」

不意に日向の声が聞こえてきたため俺は少し声を荒げて辺りを見渡す。

しかし日向の姿はまったく見当たらない。

だけど俺は肝心なことを忘れていた。

今の日向はさっきまでの日向じゃないこと。

「お前の目の前……正確には75°くらい斜め上かな？」

その声に俺ははっとする。

そう今の日向には彼の人間としての限界を無くす紅い翼があることを。

バサッ!!!バサッ!!!!

日向が今は【紅翼の天使】であることに。

「問題 nothing だろ？」

2翼の羽音が俺の耳をつんざくのと同時に俺の視界を塞いでいた真っ白な霧は一気に俺の視界から消え失せた。

「……………くっ!!」

そして俺の目に飛び込んできたのは言葉の通り俺の正面に75。くらい上で翼を羽ばたかす。

「俺は【紅翼の天使】だ!!」

姫ノ城知恵理を抱きかかえた天使の姿だった。

その姿は神々しく雅やかで　これ以上はないほどの美しさ持つ。

彼の背中にある2翼の翼と日向が握る1振りの刀。

これこそが日向の最も得意とする剣術……。

“二翼一刀”

(にふよくいっとう)

またの名を……。

【三刀流“不知火”】

紅翼の特性【不死鳥】を使った剣術であり、日向の技
術の力を最大限に引き出す日向の使う……。日輪流炎

最強の剣術である。

第47話 不死鳥と桜（後書き）

作「こんにちはは〜最近更新が遅れてること……」

一同『大変申し訳ありません!!!』

凧「……って!!なんであたしたちまで謝ってんのよ!？」

知「まーまーナギちゃん落ち着いて?」

日「そうだぞー基本俺達は連帯責任なんだからー」

輝「でも俺達は実際のところあまり関係ありませんよね?」

真「ま、なんていうか……ノリじゃないのか?」

刹「そうだな〜……しかも俺は最近本編にでてねーし」

水「……帰っていいか?」

凧「KYはほっておいて確かに最近この小説やばいわよね?」

輝「ええ……なぜか後書きのクオリティーも下がってきてますし」

真「しかも最初の設定と変わってるところもあるしなー!」

知「コウ君と水城さんだね」

輝「俺は最初一人称僕でしたし……」

ちなみにそれは設定あり

水「……俺がしゃべるときに最初は【……】はついてなかった」

それは……ま、諦める

日「まあー問題 nothing じゃないってことだな」

知「ホント ホント しかもこの小説誰が誰だかわかりにくいし」

凧「ちなみに最初の設定はあたしは“小さな姉御肌”……なんか自分で言ってるムカつくわ？」

輝「ははは……俺は“不思議な少年”だったんですけど……いつの間にか一番の常識人になってしまいましたね」

真「俺は“友情に熱い男”だったな……なんか俺だけ何も変わって

なくね？」

凧「あんたは馬鹿って設定あるしね……ちなみにあたしも何も変わってないわよ？」

知「あ！私も」

日「俺もだな」

刹「ちなみに俺もだ」

凧「じゃあおさらいもかねて設定を確認しましょ」

不知火日向

“寝てばかりの天才”

姫ノ城知恵理

“天然美少女幼馴染”

羽前真備

“友情に熱い熱血馬鹿”

羽前凧

“小さな姉御肌”

美濃輝喜

“不思議な眼帯少年”

刹那

“男勝りな超絶美少女”

時雨水城

“無表情な冷酷男”

作「落ちもなく次回予告行きまーす。

ついに真の力を手に入れた日向はついに水城に挑む！！

【紅翼の天使】と【雨の死神】の闘いよいよ決着！！

果たして勝つのはどっちなのか！？

次回【紅翼の天使】

日「問題nothingだぜ！！」

日「なーなーこの後書きって何のためにあつたんだ？」

一同『やあっ？』

次回に続く！！

第48話 紅翼の天使（前書き）

明けましておめでとうございませう。^・^（v

今年も【時の秒針】および【+CROSS・ROAD+】をよろしく
お願いします。

では本編をどうぞ

第48話 紅翼の天使

「紅の天使の翼が折れたとき日本国は滅びるだろう」

かつて日本と戦争をした世界最強国家　ギオン帝国が日本国との
和平を結んだときにギオン帝国の王が語った言葉である。

だがこの言葉から僅か10日後【紅翼の天使】はその姿を消してしま
うのだった。

彼の記憶と背中に栄える紅蓮の翼と共に……。

それから4年の月日が流れ

紅蓮の翼は再び彼の背中に舞い戻ってきた。

桜が咲き誇るこの桜時市に。

今度こそ決して折れることのない不死の翼を羽ばたかせながら。

その神々しい姿は全ての人間を虜にし、全ての人間の救世主となる
だろう。

【時の少女】を守る紅翼の天使として

凧side

あたしは目の前に広がる光景に目を丸くして思わず見惚れてしまった。

颯爽と空中を舞う紅翼の天使 不知火日向に。

「……………舐められたものだ」

そのとき水城が静かにそれだけを言い放つと再び大鎌の魂狩【村鯨】を構え直す。

だが、水城は未だに息づかいは荒くなっており肩で息をしている。

その姿にあたしは水城の必死さを感じた。

「来いよ……………水城」

それに対して今度は日向が水城を挑発する。

紅蓮の翼を羽ばたかせ知恵理をいわゆるお姫様抱っこする日向はかなり余裕を見せていた。

「……貴様……俺を挑発するか？」

「それがどうした……これくらいで崩れる死神じゃないだろ？」

「……ほざくな天使」

一触即発なムードが辺りに波紋のように広がる。

あたしを初めとするあたし、真備、輝喜はその空気にゴクリと嫌な唾を呑み込む。

圧倒されてしまったのだ。

あの2人が織りなす異様な空気と空間にあたし達はついていけなかった。

そしてその空気は一瞬にして弾け飛ぶのだった。

「……………水刃・天象！！！！」

ザンッ！！！！！！！！！！

一触即発の空気をぶち抜いたのはこれまで見てきた水の刃の中でも最も巨大なもの。

三日月のような形状をした透明な刃が日向に襲いかかる音だ。

しかもそれだけではない。

水城が放った桁違いの攻撃の恐ろしさはそれだけではなかった。

その水の刃はとてつもなく速かったのだ……！！

それこそ真備の雷神の特性【雷光神経】くらいのスピードがないと避けきれないくらいに。

「日向……！！」

あたしは我慢できずに日向の名前を叫びながら目をつむってしまっ。

それと同時に真備の背中に掴まる手に精一杯力を入れて抱きしめた。

「姉貴……」

真備の心配するような声があたしの耳に届く。

目を開けてなくてもあたしには見えた……心配そうな目をしてあたしを心配する真備。

でもその目はあたしではなく日向と知恵理のほうを向いているあたしの片割れの姿が。

ザーーンッ！！！！！！！

そしてその瞬間に聞こえてくる破壊音はあたしの耳を容赦なくつつんざく。

あたしはその音に絶望してしまった。

「日向！！！！！！」

真備があたしに呼びかけたときとは違う怒涛の声で日向の名前を叫ぶ。

歯を噛み締めてギリギリとする音もすぐ後に真備の口元から流れてきた。

しかし、その次の言葉はあたしの予想を見事に……いい方に裏切る言葉だった。

真備の言葉、それは……。

「お前大丈夫か？」

まるで目の前にいる人物に話しかけるような声で発せられたそんな言葉だったからだ。

その言葉にあたしは　おそろおそろ目を開ける。

「……！！」

そしてその先で見たのはあたしの頭を混乱させるには十分すぎるものだった。

「輝喜……チエを頼んでいいか？」

「ええ、構いませんよ」

そこには日向がいたのだ。

さっきまで数十メートル離れた場所で翼を広げて飛翔していた日向が十秒もかからないうちにこの場にいたのだった。

あたしはその映像に愕然とし頭がこんがらがってしまふ。

チラッと真備のほうを見てみると真備も口を開けてポカンとした表情になっていた。

「頼んだぞ？」

「……はい」

しかし、日向はそんなあたし達に目をくれることなく輝喜にダラリ

としてしまっている知恵理を渡している。

その瞳は漆黒に輝き光を失ってはいなかった。

そしてその瞳が見る先には……。

「……………」

ただ無言でこちらを無表情のまま睨みつける水城の姿があった。

バサッ！！バサッ！！

その視線を一身に受けていた日向は知恵理を輝喜に預けると再び栄える紅蓮の翼を広げる。

その瞬間、大分頭が冷えてきたあたしには分かった。

この闘いが次の一手で決着が着くことを。

次に日向が飛びたつた瞬間にこの闘いの終止符が打たれることに……！！

「そう睨むなよ水城」

日向は【桜】を鞘におさめながら声を発する。

だけどそのときあたしには疑問が浮かんだ。

疑問の対象は他でもない　あたしの目に映る漆黒の鞘だった。

あたしはさっきまで存在しなかったその鞘に目を向けながら日向に聞いた。

「日向？」

「ん？風、どうかしたか？」

「そんな鞘さっきまであったっけ？」

日向はあたしが指差したところにある漆黒の鞘に「瞬目を移すと」「ああ」と言って前に突き出した。

「この鞘は今俺に出来る一番の炎術に必要なものなんだ」

「一番の炎術……？」

一番の炎術……その言葉に反応したのはあたしをおぶっている真備だ。

だが、あたしには一番の炎術という言葉に1つだけ心当たりがあった。

それは日向が使う技の数々“日輪流炎術”

炎弾の【一式“飛炎”】

炎壁の【二式“焰壁”】

斬撃の【四式“斬炎”】

日向が今まで使ってきた“日輪流炎術”はこの3つだけ……。

そう、足りないのだ。

日向が今まで使ってきた“日輪流炎術”には1つ技が足りないのだ。
日輪流炎術の3つ目の技が。

「んじゃ見せてくるか」

「な、なにをだ？」

日向の言葉に真備が少しどもりながらそう聞き返す。

すると日向は少しだけ口元に笑みを浮かべると真備の言葉に応えるのだった。

あたしの予測通りの応えを……。

「日輪流炎術三式”を……だよ」

そう応えたときの日向の目は鋭く、口元にはさっき以上の笑みが浮かんでいた。

そして次の瞬間には……。

バサッ！！バサッ！！

日向はあたし達の前から飛び立つのだった。

真備の【雷光神経】以上のスピードで……。

輝喜 side

「日輪流炎術三式」を……だよ」

そう言って日向は俺達の目の前から飛び立ちました。

そのスピードは真備の雷神の特性【雷光神経】以上を誇っており、俺達の目では追いつくのもやっとなほどです。

しかしこれこそが日向の紅翼の特性【不死鳥】

名前の通り紅蓮の翼を日向が纏う特性なのです。

真備の【雷光神経】も確かに自身の身体能力の限界まで高める能力ですが 【雷光神経】は真備の雷神の破壊力を増加させるためのもの。

つまり補助みたいなものです。

ですが日向の【不死鳥】は違います。

日向の【不死鳥】は純粹に速さだけを求めたいわゆるスピード重視の特性。さらにただでさえ高い日向の俊敏性と機動力を高めるものです。

それが【不死鳥】の醍醐味 ですけど。

水城が言うには【不死鳥】の真の力 神髄はまた別のものらしいのです。

【不死鳥】の神髄　それは……。

水城 side

日向が飛び立った瞬間、俺は覚悟を決めた。

なぜなら日向が紅翼を鞘に入れてから飛び立ったからだ。

やつの最強の武器はやはりあのスピード、俊敏性、機動力だ。

あの素早さに榮える紅蓮の美しい翼と銀色の刀身は視るもの全てが見入ってしまうのと同時に恐怖を覚える。

だが日向の一番恐ろしいのは刀を抜いているときではない。刀をおさめているときである。

もし戦場で刀をおさめた日向に会ったならば……。

瞬きをする間にそいつは斬られているだろう。

それが“日輪流炎術”の三式にしてスピード重視の日向が最も得意とする剣術……。

そして俺は今からそれに挑もうとしているのだ。

「……来い日向。俺の生きた千年全てを使って俺はお前を迎え撃つ」

誰にも聞こえないように俺はそう呟いた。

バサッ！！バサッ！！

日向の紅蓮の翼の羽音が聞こえてくる。

その音はここ日向が紅翼の天使だった2年間で聞き慣れた音　し
かしここ4年聞いたことなかったためとても懐かしく感じた。

「決着つけようぜ……【雨の死神】時雨水城!!」

そしてあの頃より少しだけ低くなった日向の声。

だがあの頃とはちつとも変わらないその喋り方はやはり俺を懐かしく感じさせた。

千年生きてきた俺には4年なんて時間は瞬きほどにしか感じない。

だけどそれだからこそ俺には人の成長を一番身近で感じてきたのだ。

だから　最後に日向の成長を見れてよかったと思う。

無二の天才と呼ばれた俺以上の天才である天使の成長を……。

同じ【時】を司どる女を愛した者として。

「……勝負だ……【紅翼の天使】不知火日向!!」

俺はそんな日向に最後を飾らってもらいたい。

俺に一番似たあいつに……。

「行くぜ水城！！！！！」

「……来い！！！」

村鯨を深く握り締めながら真上に構える俺。

対して日向は背中に栄える大きな紅い輝きを放つ不死の翼を広げた。

バサッ！！バサッ！！

「……【水針・天象】！！！」

(すいしん・てんしょう)

俺は翼を広げた日向に村鯨で水をすくい上げるようにして地面の水を浴びせる。

するとすくい上げられた水は村鯨の特性【水結晶】によりその形状

をみるみるうちに変えていく。

何千何億にもなる水の針の形状へと……！！

「広範囲攻撃……！！」

「……その通りだ日向。……この技は威力こそ小さいが億の刃となりて貴様を襲う！！」

何千何億もの水の針は日向の闘争心を刈り取るには十分すぎるもの。

しかし日向はそこでめげる男ではない。

近くで日向の闘う姿を見てきた俺が言うのだ。

もう一度だけ言う。

日向は決してそこでめげる男ではない！！

バサッ！！バサッ！！

俺の予測通り日向はそこで諦めなかった。

自分の背中にある翼で自身を包み込み【水針・天象】の襲撃に備える。

「……それでいい」

日向の行動の速さとの確ささに俺はそう呟く。

口元に笑みを浮かべながら。

ザシユッ!!

最初の針が日向の翼に刺さった。

ザシユッ!!ザシユッ!!ザシユッ!!ザシユッ!!ザシユッ!!ザシユッ!!
ザシユッ!!ザシユッ!!ザシユッ!!ザシユッ!!ザシユッ!!

引き続き紅蓮の翼に身を隠した日向に何千何億もの水の針が襲いかかる。

しかし【不死鳥】により守られた日向はその身に一針も貫かれることなく防ぎきるのだった。

『日向!!!!!!!!!!』

羽前姉弟の大声が時雨の間に響き渡る。

「……………日向」

続けてポツリと輝喜の声が聞こえてくる。

だが、その声は羽前姉弟とは別物　心配の声ではなく未来の日向へと向けたものだった。

「……………ヒ…ナ君？」

そして最後に知恵理の今にも消え入りそうな声が木霊する。

その瞳は輝喜の【未来図】のように未来を覗き見る力はない。

だけど……知恵理の瞳には一切の迷いは見あたらなかった。

薄く今にも閉じてしまいそうな知恵理のまぶただがそのまぶたの先にある知恵理の迷いなき真実の瞳には描かれていた。

“ 天使の降臨する姿 ” が。

ポーーーーーッ！！！！！

そしてその瞳の中の真実は現実へと変わる。

熱く燃えたぎりながら羽ばたく紅蓮の翼【不死鳥】によって。

ポーンッ！！バサッ！！

「これくらいじゃ俺は倒せないぞ？」

燃えたぎる翼の先から不知火日向が姿を現す。

知恵理の【時】の力により完全に回復した日向の体には傷一つ見あたらぬ。

紅翼の【不死鳥】に村鯨の【水結晶】が負けた瞬間だった。

「お前なら……知ってるだろ？」

知ってるだろ？だと。

当たり前だろ。俺達は共に助け合い共に闘ってきた戦友だ。

貴様の紅翼の【不死鳥】の真の力 神髄を知らないわけないだろ？

ポーンッ！！バサッ！！

その燃えたぎりながら羽ばたき続ける紅蓮の翼が何よりの証拠だろ？

【不死鳥】の神髄　それは……。

バサッ！！バサッ！！

日向が大きく翼を広げると日向の【不死鳥】の翼に纏っていた燃えたぎる炎は完全に姿を消し……。

『驚異的“再生能力”』

最初と何ら変わらない美しく神々しい紅蓮の翼があったのだった。

偶々俺と日向から同時に発せられた声の通り日向の紅翼の特性【不死鳥】が持つ真の力は。

“驚異的再生能力”

日向の翼はその名前の通り不死鳥のごとく翼が傷つくと炎を上げて復活する。

その証拠に【水針・天象】が当たったという証拠の傷は一つもなく最初と同じように美しく神々しい紅蓮の翼が現れたのだ。

「……やはりその翼には遠距離攻撃は効かぬか」

「肉を切らして骨を絶つ”この翼にはそんな言葉が一番似合いだ

からな」

そう、これこそ日向が戦場で誰よりも素早く動けた理由だ。

その“スピード”と“再生能力”により恐れを知らずに誰よりも速く敵のもとに飛翔できる日向はその幼い体で戦場を駆け回った。

その姿からつけられた異名こそが戦場を飛翔する幼き天使……。

” 紅翼の天使 ”

……なのである。

「……………そろそろ決めるぞ」

完全復活を遂げた日向に俺はそう告げると村鯨を真横に構えていつ

でも斬り裂ける体制をつくる。

「OK・問題nothingだぜ」

日向も上空にて紅翼を鞘におさめたまま鞘ごとジーンズのベルトに差していつでも紅翼を抜ける体制を作る。
どうやら決着のときが来たようだ。

「……最後はやはり真っ向勝負になるか」

「当たり前だろ。苦難には正面から突き当たる。それが人間の美德だ」

「……違うない」

日向の言葉に俺は口元に笑みを浮かべながらそれを肯定する。

しかし、俺のこの行動は日向だけではなくこの場にいる全ての人間にとっては予想外のようなだった。

先程笑みを浮かべたときには視線は全て日向に集まっていた。

だけど今回は違う。全ての視線は俺へと集まっていたのだ。

それはつまり今まで一瞬たりとも無表情を崩さなかった俺が初めて他人に表情を見せた瞬間だった。

「お前が笑うところなんて初めて見たよ」

「……生憎俺が貴様の前で笑うのはこれが最初で最後だろうがな」

むしろ俺が人前で表情を見せるのはこれが最後だろうがな……。

ジャブツ！！

俺は決意を新たに水の中へと村鯨を入れる。

そしてこれが俺が放つ最後の技　だから俺は自分にでくる最高の技で貴様を迎え撃つ！！

「……【水牙・天象】！！」
(すいが・てんしょう)

ザバーッ！！

俺がそう技の名前を唱えてから村鯨を引き上げると村鯨の刃は今までとはまったく違う形状で現れる。

まず全体的に村鯨が大きくなっているのだ。だが当然ながらそれは刃自体が大きくなったのではない。

村鯨の特性【水結晶】で刃の周りを固めたのである。

そして刃の斬れる部分　そこが一番の違いだ。

なぜならただ刃が大きくなっただけではそれほど威力が上がらないと思っただ俺なりの工夫　数十本の水で出来た刃がまるで鯨の歯のように並んでいるのだ。

これが今の俺にできる最高の技【水牙・天象】である。

「そうこなくっちゃ」

そして日向は腰に鞘ごと差した紅翼　【桜】の持ち手（柄）に手をかける。

その構え方は日本刀にのみ存在する独特の構え方。

”居合い切り”

最も速く最も日向の闘い方にマッチした剣術。

故に日向が最も得意とする剣術なのである。

「日輪流炎術三式」

バサッ！！バサッ！！

日向の背中に栄えている紅い【不死鳥】の羽音がこの場にいる全ての人間の耳をつんざく。

『……………』

そして訪れる一時の静寂。

この闘いが始まったときと同じように聞こえてくるのは「ザーッ」という雨音と日向の羽音のみ。

だがそれはとても心地よい静寂だった。

「……………ゴクリ」

誰かが唾を飲み込む音が俺の耳に届く。

それはこの場にいる人間全てがそれなりの緊張感を持っている証拠であった。

ザーッ……

バサッ！バサッ！

常に聞こえてくる2つの音はまさしく俺達の象徴ともいえる音。

【雨の死神】が奏でる鎮魂歌の雨音。

【紅翼の天使】が羽ばたかせる紅蓮の翼の羽音。

そのどちらもがこの空間を支配していた。

だけどこの空間に支配者は2人もいわない。

2人の支配者など不要なのだ。

だったらどうするか？

それこそ簡単な話である。

“天使”と“死神”生を司る者と死を司る者との勝負を決すればいいのだ。

俺達はそのゴングが……この空間響き渡るのを待っているのだ。

闘いの終幕フィナーレの開始の合図となるゴングを……。

……キンッ

そしてその静寂を打ち破る音が木霊する。

終幕フィナーレへのゴングだった。

「うおおおおおー！ー！ー！」

バサッ！ーバサッ！ー！

日向が鞘から少しだけ桜を抜いた音と共に日向の紅蓮の翼が俺に向かつて飛翔し始める。

それに対して俺は臨戦態勢を取るのだった。

「……………【水柱・天象】！！」
(すいちゆう・てんしょう)

ザンツ！！！！！！

日向の飛んでる所の真下から【水結晶】の力で固めた水の柱が飛び出してくる。

だが日向はそれを持ち前の俊敏性と機動力で翼をつまき使いながらかわす。

バサッー……………

紅蓮の翼で日向が滑空する音が俺の耳に届く。
しかし俺は攻撃の手を緩めることはなかった。

「……………【水柱・天象】！！」

ザンッ！！ザンッ！！ザンッ！！

続けざまに俺は日向に向かって水の柱を浴びせようとする。

だがそれでも日向に攻撃が当たることはない。

日向の“スピード”はある意味最大の防御となっているのだ。

《問題 nothing だぜ！！》

俺の頭の中で日向のそんな声が響く。

それは俺のただの妄想なのかそれとも実際に日向が発した言葉なのかは分からない。

ただと確かに俺の頭の中にその言葉は響いてきたのだった。

「……………【水刃・天象】！！」

ザンッ！！ザンッ！！ザンッ！！ザンッ！！ザンッ！！ザンッ！！

ただと俺もここでむざむざと負けるわけにはいかない。

どうせ負けるなら最後までしっかりあがかせてもらおう！！

バサッ！！バサッ！！

俺が放った無数の水の刃おも日向はその背中に栄える翼を使い【桜】を抜くことかなくよけ続ける。

その舞う姿は見る者全てを虜ことし恐怖へと陥れる。

それは俺とて例外ではない。

その姿はとても神々しく雅やかで 敵になった今とても恐ろしかった。

すでに日向は目の前まで迫っていた。

だから俺は最後の攻撃を仕掛けるために村鯨の刃を掲げる。

その刃はいつもより倍近い大きさになっており無数の水の刃がまるで鯨の歯のように並ぶ。

「……………【水刃・天象】！！」

これが近距離線において俺の最高の技。

俺の切り札だ。

「……………来い！！不知火日向！！」

「問題 nothing！！行くぜ！！時雨水城！！」

バサッ！！バサッ！！

日向の【不死鳥】の羽音も日向自身もすでに目の前にいた。

俺の攻撃範囲内にすでに迫るくらいにいたのだった。

「……勝負！！」

俺は攻撃範囲内に入ってきた日向に向かって【水牙・天象】で威力増加をした村鯨の刃を振り下ろした。

「望どころ！！」

そして日向も俺に向かって飛翔しながら腰に差した【桜】をいつでも抜ける体制をつくる。

その瞬間 全ての時間がスローに感じた。

目の前から迫る口向の動きも俺自身の動きも
ように流れ行く……。

そして……。

ザシュッ！！！！

俺は確かな感触と共に斬り裂いた感覚を味あつた。

だけど　それは俺の敗北を知らせる刃の音だった。

なぞなら俺が斬ったのは……。

ポーツ！！バサツ！！

紅く燃えたぎる……。

紅蓮の翼だったからだ。

日向は俺が【水牙・天象】で斬り裂く前に右翼だけを自身の体の前

に持ってきていた。

それにより俺の攻撃は日向の【不死鳥】により塞がれたのだ。

ポーツ！！バサツ！！

俺に見えているのは燃えたぎりながら日向の姿を隠す紅蓮の右翼のみ。

だけど俺には見えていた。

燃えたぎる翼の先にある日向の鋭い瞳を……。

右手に持つ漆黒の鞘におさめられた銀色の刀身を……。

「……………“肉を切らして骨を絶つ”か」

“敗北”を目の前にしてみても俺はなぜか落ち着いていた。

いや、俺はこうなることを望んでいたのだ。

日向に 【紅翼の天使】に最後を飾ってもらつて……。。

バサッ！！バサッ！！

紅蓮の翼が大きく開くと同時に日向の姿が現れる。

右手からはシャーと漆黒の鞘から現れる銀色の刀身。

シャキンッ！！

その刹那、俺の目の前から日向の姿がなくなる。

はっきり言って瞬きする時間すらないほどのスピードだった。

そのスピードが俺にもたらしたのは……。

「日輪流炎術三式」

俺の望んだ結末……。

俺の“敗北”で 俺の千年の歴史の終幕で始まる新しき未来の開
門だった。

キンッ！！

背後から日向が刀を鞘におさめる音が聞こえる。

“日輪流炎術”の3つ目の技が決まったことを知らせる音だ。

そして日向は言葉を発する。

その技の名前を 日向が最も得意とする切り札の名前を……。

“日輪流炎術三式”居合い切りの日輪流炎術。その名前は……。

「 【瞬陽】 」

(しゅんやう)

その言葉を聞いた瞬間に俺の意識は遠のいていった。

体に走る痛み　目の前は霞んでいき　村鮫を握る手は弱まっていく。

「問題 nothing。俺の勝利だ【雨の死神】」

それが意識のあるうちに俺の聞いた最後の言葉だった……。

……ああ、そして俺の敗北だ【紅翼の天使】

悶side

「俺は……間違っていたのかもしれない」

誰もいない部屋　回復の間　で俺はそう呟いてみる。

目の前には高く厚い鋼鉄の扉。この先には強力な能力者が全部で6人いる。

そして【時の少女】姫ノ城知恵理も……。

俺の能力は空間から空間を移動できる。

そして目の前の部屋は完全なる密室で出入りできるのはこの鋼鉄の扉のみ……。

これから導かれる答えはただ1つ。

そう、俺はまず前提条件を間違っていたのだ。

この先にいる6人の強力な能力者を相手にするよりも目の前にある鋼鉄の扉を破壊して6人を出れなくすればいいんだ！！

そしてその後俺の能力を使って【時の少女】を攫えば T H A

E N D

ジャキッ……

そう思った瞬間俺は左手の戦闘義手の魂狩を鋼鉄の扉に向ける。

あの鋼鉄の扉を塞いで中に6人を閉じ込めるために！！

「修羅道の扉【開門】！！」

ガコーンッ！！！！

その音とともに戦闘義手の魂狩【地獄の門】の手の平の部分が開く。

ただ純粹に戦闘に特化した技　それがこれだ。

その名前は……。

「【羅生門】」

ジャキッ！！キューーン！！

俺がそう唱えた瞬間に戦闘義手の手の平の開いた部分が紅い光を放ち始める。

その光は妖しく妖美でとてつもなく危険な色をしていた。

その刹那！！

ドカーーーーーンッ！！！！！！！！！！

【地獄の門】から紅い光がまるで閃光のように放たれる。

その威力はまさしく破壊光線と呼ぶに相応しいもの……。

紅き稲妻だった。

「これであいつらはこの部屋を出ることはできまい……」

その言葉を最後に俺はこの部屋を後にする。

激しく歪んだ鋼鉄の扉を残して……。

そして舞台は 最終局面へと向かっていく。

第48話 紅翼の天使（後書き）

作「新年明けましておめでと〜ございます」

日「おめでと〜さん」

知「おめでと〜」

凧「あけおめ」

真「軽っ!?!?……明けましておめでと〜」

輝「あけましておめでと〜ございます。今年も末永くよろしく願
いいたします」

輝以外『丁寧だな!?!?』

作「ま、まあそれはさておき改めて明けましておめでと〜ございま
す」

輝「ちなみにまともな人間が俺しかいないんで俺が挨拶させていた
だきました」

輝以外『なんかせみません』

輝「ふふふふっ」

輝以外『へっ?』

輝「ふふふつ、そうですね俺が美濃輝喜です」

凧「いや……知ってるわよ？」

真「いったいどうしたんだ？」

輝「そして……新な新世界の王になる男です！！！！！」

輝以外『新年早々輝喜がぶつ壊れたー！！！！？？？』

知「え？なに？え？どうかしたの？あ！コウ君が新しい王様？はは
ー」

日「ももも問題 notice!？」

凧「慌てすぎよ日向に知恵理！！まず知恵理！！輝喜にお辞儀しな
い！！次に日向！！あんたそれじゃあ問題通知って意味よ！！？」

輝「我にひざまずきなさい愚民共！！！！！」

作「……えらく丁寧な征服者ですね。ま、それはさておき次回予告
！！」

遂に水城を倒した日向。だがそんな日向の前に新たな問題が起こる
！！

悶により閉ざされた外への脱出口　そして知恵理に迫りよる機械
仕掛けの手……。

そんな中で日向、凧、輝喜の3人は脱出への糸口を見つける!!

次回【魔の手と大脱出】

日「問題nothingだぜ!!」

輝「はっはっはっ!!我を尊え!!我に貢げ!!我に従え!!」

真「だ、だめだ!!完全にいかれてやがる!!」

知「どどどどうしよう!!?」

日「きつと何か溜まってたんだな……」

凧「あーもう!!めんどくさい!!」

ゴキッ!!メキッ!!グチャ!!

輝「ぐえ……………(カク)」

輝以外「あ……………」

……………!!?

日「……輝喜?」

真「さ、さすがは最終兵器」

知「コココウ君」（涙）

凧「……あたし知らない」

作「後書きで登場人物を殺すな——！！！！！！」

次回に続く！！

第49話 魔の手と大脱出（前書き）

知恵理に迫る絶対絶命の危機！！

日向はその翼を再び羽ばたかせ飛翔する！！

最大のピンチを迎える日向とその親友達！！彼らが助かるための方法とは？

第49話【大脱出】

それでは本編へ！！！！！！！！

第49話 魔の手と大脱出

日向side

「問題nothing。俺の勝利だ【雨の死神】」

俺は日本刀【桜】を鞘におさめると同時に真後ろにいるだろう死神にそう言い放つ。

……ああ、そして俺の敗北だ【紅翼の天使】

水城の声が頭に響いてきたのはそう言い放った後すぐだった。

水城が実際にそう言ったかは信じられなかったが俺はハツとして後ろを振り向こうとする。

バシヤッ！！！！

しかし俺が後ろを振り向く前に何かが水面に落ちる音が俺の耳に届

く。

その音の正体は振り返らずとも分かっている。

だけど俺は振り返らずにはいらなかった。

彼……【雨の死神】こと時の番人の時雨水城の姿を確認するために……。

「……………」

そして俺が振り向いた先には漆黒の長髪がまるで花のように水面に広がっていた。

水城だ。

彼はまるで事切れたかのように水面を漂う。

その姿に俺は改めて自分の勝利を確認するのだった。

『日向……！』

不意に俺の耳を2つの聞き慣れた声がつんざく。

まったく……あの姉弟は仲がいいのか悪いのか……。

その声には俺は普段はお互いをこれ以上なくくらいに罵り合うも蓋を開けてみれば誰よりもお互いの事を思い合ってる双子の姿が脳裏に浮かんだ。

「日向……」

次に聞こえてきたのはこれまた聞き慣れた声……だけどいつものあいつに比べると幾分元気がないシビアな声だった。

複雑なんだろうな……あいつにとってこの状況は……。

そう思いつつ俺は声の主であるいつもは太陽のような笑顔を見せる少年　だけど実は誰よりも冷静な頭を持つ眼帯の親友を思い浮かべる。

そして……。

「……………ヒナ君」

最後に俺が一番聞き慣れた声　俺が守りたかった幼馴染の声が俺に届いてきた。

大丈夫だよ……お前は俺が絶対守るから……。

そして俺が思い浮かべるのは俺の大切な銀色の髪をした幼馴染の姿
　　普段はドがつく天然なのに誰よりも俺を心配してくれる大切な存在だ……。

4人の声が混ざり合う中俺はつい嬉しくなり微笑みを浮かべる。

右手の人差し指と中指を立てるとそれを高く掲げて声の主達の方へ振り返った。

「問題 nothing。心配かけて悪かったな」

すると4人は俺の微笑みを見たからか一瞬にして明るい笑顔となつて俺を出迎えてくれた。

「まったく……ヒヤヒヤしたじゃねーかよ!」

わりーな真備。お前は本当にいい奴だよ。

「べべべ別に心配なんかしてなかったんだから!」

その割には嬉しそつだな風。ツンデレ乙だ。

「日向……」

大丈夫だよ輝喜。お前の思いは察してるから。

「ヒナ君……お疲れ様」

ああ、お前の声を聞くだけで俺は安心できるよチエ。

それぞれの思いを俺は笑顔で聞き入れる。

今ここで俺達と時の番人との闘いは終結したのだった。

俺達に近づいてくる新たな脅威にも気付かずに。

物事の始まりは唐突に訪れる。

これは今回の事件で学んだことの1つ 現に今回の事件も昨日の
夜唐突に訪れていた。

では俺は何が言いたいのか？

それは俺達が水城との勝負に勝ったことで安心しきっていたということ。

“最悪の出来事”は唐突に訪れたということだ。

そう……“最悪の出来事”は唐突に訪れたのだった。

ドカーーーーーンッ！……！！！！！！

不意に耳の中をぶっ壊すような激動の破壊音が俺の耳をつんざいた。

その波状の音波は全身を貫き通し俺の平衡感覚を失わせる。

「な………なんだ!？」

唐突に訪れたその爆発音は真備と輝喜が衝突したときと同等なほど。

明らかなる“異変”だった。

「日向！！」

そのとき俺の頭に風の叫びにも似た声が響く。

その叫び声が異変だと気付いた俺は風の方に急いで振り向いた。

「日向！！上だ！！」

振り向いたと同時に今度は真備が俺に叫ぶ。

真備と風はあの激動の爆発音でバランスを崩したらしく水の中に腰からどつぶりつかっていた。

そして俺はそんな2人の顔の形相に危機感を感じた俺は真備の言葉に従い上を見上げる。

「……………！？」

その瞬間俺は理解した。

なぜ真備や凧が必死になって俺に呼びかけていたのかを……。

「くっ！！マジかよ！！」

俺は目の前の光景に顔を歪めた。

なぜなら俺の真上……つまり天井にひびが入り天井のコンクリートが落ちてきているのだ。

ガラガラッ……！！

すでに落石に似た感じで落ちてくるコンクリートの塊は目と鼻の先までできていた。

だけど 俺の不死鳥の力をもってすれば十二分に間に合う。

そう思ったら決断即行動で俺は紅蓮の翼を広げるのだった。

バサッ！バサッ！

「……………！」

だけど飛び立とうとした瞬間に俺の中で何かが弾け飛んだ。

いや何かを忘れている気がしたのだ。

ギリギリ残っていた冷静な頭にインプットされた情報全てを使い答えを求める。

すると俺の頭はすぐに答えを求められた。

「……………そうかそういうことか」

そうやって俺は目の前に広がる漆黒の花を俺は見つめるのだった…。

知恵理 side

「日向!」

私の近くでナギちゃんの叫ぶ声が木霊してきました。

でもその声は私の朦朧とした意識を一気に覚醒させるには十分すぎるもの。

私は“ヒナ君の名前”だけで敏感になっていたのです。

「ヒナ君!」

「知恵理!」

慌ててヒナ君の名前を呼び起き上がろうとしたけど私は激しい頭痛に襲われました。

それと同時にコウ君の声がすぐ近くから聞こえてきて私は心配そうに名前を呼ばれます。

それに私は頭を抑えながら薄く目蓋を開き。

「大丈夫ですか？」

目の前に現れたコウ君の笑顔を見つめました。

そして私は気付きます。私はコウ君にお姫様だっこされていていました。でも私はそんなこと気にもとめません。なぜならもっと大切なものがあつたからです。

「コウ君！！ヒナ君どうかしたの!？」

私は痛む頭を我慢せずにコウ君に大声でそう聞きました。

するとコウ君はただ無言で視線を私から外して別の方向を見ました。

その瞬間……。

ドカッ！！ドカッ！！ドカン！！

耳を塞ぎたくなるような激しい音が私を襲います。

その音に従って音のした方向を見てみると……。

ザパ

ン!!!!!!!!!!!!!!

その場所では白い大きな水しぶきが天高くに舞い上がっていました。

竜巻のように水が激しく舞うその光景はまるで竜が暴れまわるかのように激動しています。

シュンツ!!!!!!!!!!!!!!

そして次の瞬間水しぶきの中から紅く弾丸のように何かが弾け飛んできました。

丸く丸まった紅い塊。

ふと気付いたらその紅い塊は回転しながらこっちに向かってきます。

私がそう思って紅い塊を見たその瞬間……。

バサッ！！バサッ！！！！

塊を包んでいた紅い翼が閃いて幼馴染の天使が現れました。

腕に“雨の死神”を抱えながら……。

「……日向！！」

私を抱えるコウ君の顔が驚きに変わりました。

なぜなら今は未来を見る右目【未来図】の力を閉じているからです。

おそらく いえ、たぶんコウ君もナギちゃんもマキ君もヒナ君が
水城さんを助けるなんて考えていなかったと思います。

ただど私はヒナ君は水城さんを助けると確信してました。

だってヒナ君は誰よりも優しいんですから。

「コウ君……私……もう立て……る……よ？」

「え？」

私は顔に笑顔を作りながらコウ君にそう言います。

始めコウ君は驚いた顔で私を見ましたが私を見たコウ君はすぐに悟ってました。

そういうことは長い付き合いなので私にはすぐに分かります。

私達はそんな関係なんですから。

「……すみません知恵理」

「気に……しない……で」

そう言いながらコウ君私を水の溜まった地面に降ろすとヒナ君と水城さんのもとへ駆け寄っていきました。

コウ君はもともとあっちとの繋がりがあるから水城さんのことも心配になったんだと思います。

私達の関係はそのあたりのことはよく分かっていますからね。

バサッ！！！！バサッ！！！！

ヒナ君は水城さんを抱えながらゆっくりと降りてきました。

その下ではコウ君が水城さんを受け取るために立ち今か今かとそれを待っているような気がしました。

「ふー……」

そしてその光景を私はまだ少しふらつく体を私が閉じ込められていた鳥籠に預けながら眺めています。

頭はまだフラフラするけどだいぶ落ち着いてきたかな？

とにかく私はまだ本調子じゃないけどだいぶ体が回復しました。

ふと気付くと水城さんをコウ君に預けたヒナ君が私に微笑みながら手を振ってるのが見えた。

少し子供っぽいその仕草は私の顔をつい笑顔にしてしまう。

ヒナ君の笑顔は私にとってそれくらいの力がある特效薬になります。

「もうヒナ君たら……」

ヒナ君の笑顔に応えようと私は右手を軽く挙げて笑顔を作る。

ヒナ君も私の笑顔を見たからかささらに増して満面の笑みを作り私の方へ駆け寄ってきます。

それにマキ君とナギちゃんも呆れた顔をしながらも微笑ましそうに私達を温かく見てきてそれに気付いたのかコウ君もこちらを振り返りました。

その瞬間コウ君の右目が赤黒く光り輝いた。

「知恵理！……！！！！！！！！」

コウ君の叫び声が部屋全体を震わせる。

それに合わせて発せられた言葉は　私の名前。

コウ君の声は確かに私の名前を叫んだ。

え……？コウ君なんで必死に私の名前を呼ぶの？

私は頭が混乱しそうになりました。

目の前ではコウ君が必死になって叫びマキ君とナギちゃんはそのようなコウ君の異常を察知してグローブの“雷神”と鉄扇の“風神”を出す。

そしてヒナ君は……。

「日向！！急いで飛んで知恵理を救出してください！！」

「輝喜……………！？まさか“未来図”か！！」

ヒナ君はコウ君の赤い悪魔の瞳“未来図”を見て何かを察したかのように私に向かって飛翔してきます。

いったい何が起きてるの！？

混乱して私の頭がパンクしそうになりました。

みんながみんな私の知らないところで何かに慌ててる。

それだけは分かりましたけど私はただただこの成り行きを分からないまま見ることしかできません。

私がこの中心であるにも関わらず……。

「……！？チエー！！逃げろ！！」

「え……？」

未だにうまく体を動かせない私に突然ヒナ君は叫ぶ。

その瞬間だった。

ゾクッ……！！！！

後ろからとてつもない威圧感を感じたのは。

ヒナ君みたいな温かく包み込むとは違う。例えるなら水城さんみたいな冷たく大きい威圧感。

うんうん。たぶんそれも違う。

水城さんはあの冷たい心の中に何か別

それこそヒナ君に似た何

か　　のものがあつた。

でもこの威圧感にはそんなものは一切ない。

ただ純粹に私を恐怖に陥れることしか考えないそんな感じがした。

シャ　　ッ！！！！！！！！！！

後ろから何かが切り裂かれたような音が私を襲う。

聞いたことない音でした。

「……………」

だけど私はその音の正体を確かめるためにゆっくりと首を後ろに回していきます。

後ろを向くのが　相手の顔を見ることがこれほど怖いと思うことはこれまでありませんでした。

だけど私にできることはただ後ろを振り向いてどうやってたらこの威圧感から逃げられるか考えるだけです。

だから私は振り返りました。

その先にある恐怖が一体何なのかを確かめるために……。

「……………！！！」

振り向いた私を待っていたのは鉄でできた腕。それだけでした。

そうそれだけ。脚もお腹も胸も背中も首も頭すらなくただ引き裂かれた【空間】から鉄の腕がただ飛び出しているだけ。

それだけ……でした。

「い……いやっ……！」

だけどたったそれだけでも私を恐怖に陥れるには十分すぎる何かがあった。

私を恐怖に陥れる威圧的な【空間】が……。

日向side

「くそっ！！あれが輝喜の未来図で見たものかよ！！」

俺は突如として現れた鉄の腕から手を助け出すために滑空する。

今の俺はただ手工に向かって飛翔することしか考えられなかった。

しかし水城との闘いで傷つき疲れきったこの体があまり思うように動いてくれない。

そんな状態に俺はかなり焦っていた。

バサッ！！バサッ！！！！

翼を羽ばたかせることしか考えず見つめる先の少女に迫る鉄の腕を引き裂くことだけを考えて俺は飛翔し続ける。

チ工を失いたくなかった。

もう俺の目の前で大切なものを奪わせてたまるか！！

頭の中に描かれたのは記憶にある“兄貴”が最後に笑顔を見せた場面。

俺の記憶の中から薄れていくあの笑顔だった。

ガシャンッ……！！！！！！！！

チ工を襲う金属の腕が鳴らした音が俺の耳を通じて頭に鳴り響く。

それと同時に俺の頭の中の映像も切り替わった。

チ工……。

変わって頭に流れ込んできたのはいつも俺に見せてくれるチ工の笑

顔だった。

毎日毎日……俺を温かく包み込んでくれる“太陽”のような微笑みを。

俺は……俺は……あの温もりを失いたくない。

あの幸せを……安らぎを……あの愛しさを……失いたくない。

「うあああああ……！！！！！！！！」

キンッ！！！！！！！！

そう思った俺はただ闇雲に桜を鞘におさめた。

日輪の炎【飛炎】 【斬炎】 は効果範囲が大きすぎてチエにまで当たっ
ちまう。

逆に【焰壁】 は効果範囲が狭すぎるうえ飛んだまま使役できない。

だったら俺にできることはただ1つ。

「【日輪流炎術】」

俺の“速さ”をもってあの腕を切り落とす……！！

「【三式】……！！」

シュンッ……！！……！！

チエの顔を俺の体で霞めながら通り過ぎる。

1秒にも満たないその瞬間後ろの腕に振り返っていたチエの顔が驚きと喜びになっていた。

「ヒ……ナ……く……ん」

その声は確かに俺の耳に届き俺を導いた。

そして俺は手を助けるために銀色に輝く刀身を漆黒の鞘から抜き去る。

間に合え……！！！！

刀を鞘から抜き出すその勢いそのまま相手を切り裂く神速の技。

それは俺が最も得意で最も俺の魂にあった戦闘術。

神速の居合い切りで鞘から刀を抜刀する瞬間に発火させる瞬炎。

その真なる力は……。

「【瞬陽】……………！！」

ガンツ!!!!!!!!!!!!!!

「燃え尽きる!!!!!!!!!!」

切り裂いた敵をそのまま火葬まで導く力なり。

「そして地獄に堕ちる」

俺は神速の勢いで滑空しギリギリのところまで鉄の腕に居合い切りを放ち手工に届かせる前にそれを阻止した。

水城のときは違う。水城のときのように日本刀の刃の“峰”ではなく“刃”で受け止めた。

なぜなら俺は本気でこの腕を切り落とす勢いだったからだ。

居合い切りは確かに俺が最も得意とし最も俺の魂にあった戦闘術である。

だけどそれは同時に俺の日輪流炎術で最も相手を殺しやすい技でもあるのだ。

だから真の力は水城には使わず今回は使う。

あれは“敵”だからだ。

ポ ツ！！！！！！！！！！

そして鉄の腕は発火する。

その炎は腕から肩へとつたいやがて全身を焼き尽くす。

過去の俺から流れてきた記憶ではこの技を使い人を殺したことはないし今も殺す気持ちはない。

すぐにこいつを引っ張り出してなぜチエを襲ったかを聞き出すつもりだった。

でもそれが俺とチエにとっての命取りとなった。

「地獄道の扉【開門】」

その声は突如として時雨の間全体に響き渡る。

しかしそれは引き裂かれた空間から燃え盛りながら伸びる鉄の腕から発せられた言葉ではなかった。

どこから発せられているのか。はたまたどのようにして発せられているのか。

それすらも分からなかった。

「拒絶門」

”きよぜつのもん”

静かに　しかしはつきりと放たれたその言葉。

それは俺達を虚構へと連れて行く悪魔の呟きだった。

シャ　　ツ
……………

シャ　　ツ
……………

シャ　　ツ
……………

シャ　　ツ
……………

次々と鳴り響いてくる空間を切り裂く音。

それと同時に俺とチエの周りの空間が次々と引き裂かれあの鉄の腕が大量に出てきた。

「幻術師……」

呆然とした口調で俺はそう呟く。

目に見えるのはこっちに延びてくる数十本の鉄の腕。それは間違いなく俺を絶望へと追い詰める。

手に持つ“桜”を握る手は弱まり目の焦点を合わせられず体が硬直してしまいうまく動かせることができなくなった。

そこで俺は全てを失う覚悟を持ったのである。

だけど俺はそれでもチエだけは離すつもりはなかった。

ギョッ……！！

「……………ヒナ君？」

硬直してしまいうまく動かせない体を無理やり動かして俺はチエを抱きしめる。

そしてチエに一度微笑みを見せると目の前から飛び出してくる数十本の鉄の腕を睨みつけた。

「チエは……………渡さない！！」

俺はさらにチエを強く抱きしめて体を盾にするようにしてチエの前へと回りそう叫んだ。

そうしている間にチエはその綺麗に輝く双瞳からハラハラと涙が流れ落ちてきていた。

サラッ……………

「チエ俺はお前と一緒にいる。問題nothingだろ？」

最後にチエのサラサラとした銀色の髪の毛を撫でながらそう呟いた。
チエの涙を見た俺はこれがチエの一番好きな行為だと知っているか
らなるべく安心させたかったのだ。

そして俺は ゆっくりと目蓋を閉じた。

ガシャンッ！！！！！！！！！！

鉄の腕を動かしたときに鳴っていた金属音が部屋中に鳴り響く。

その音は俺に対しての最後の猶予だったのかもしれない。

「くそっ！！日向！！知恵理！！待ってる！！」

「諦めんじやないわよ！！このっ…………馬鹿！！」

見なくても分かる。

真備と凧が俺達を助けるためにこっちに走ってきていることが…………。

だけどたとえ能力者の利益“驚異的身体能力”を持つ2人でも飛翔

できる俺とは違って部屋に溜まった水の抵抗を受けながらこっちに
来るにはかなりの時間がかかる。

ほぼ確実に俺達のところに来るのは無理だろう。

でもそれでも 2人のその声は嬉しかった。

そして……。

ザンッ！…ザンッ！…ザンッ！…

俺の耳に何か突き刺さる音が聞こえた。

それは終わりを告げる音なのか　それとも俺の死を告げる音なのか？

分からない。俺には何も分からなかった。

一体俺はどうなったのか？チ工は無事なのか？今日を開けたら目の前はどうなってるのか？なぜ体に痛みがないのか？

様々な疑問が俺の頭をぐるぐると周りながら葛藤する。

でも一番の疑問は……。

なぜ　抱きしめたチ工の温かさを感じるんだ？

と……体に全くといっていいほど痛みがないことだった。

「ヒナ君……」

「えっ!？」

唐突にチエの声が聞こえてきたのはそのときだ。

すでに自分は死んだものだと思っていた俺は少し切なげなチエの声に驚きの声を出した。

「俺……生きてるのか?」

「うん……ヒナ君はちゃんと生きてるし私もちゃんと生きてるよ」

その言葉を言われた俺は始め何を言われたのか分からなかった。

だが冷静な頭が俺のもとに帰ってくるとすぐに状況を理解してまた新たな疑問を持った。

「でも俺はあの腕に貫かれたんじゃないか……」

「ヒナ君目を開けてみて」

新たな疑問に対するチエの返答はそんな優しい言葉。

そんなチエの言葉だからこそ俺は信頼してチエの言われたとおり瞑っていた両瞳を開く。

「……………!!……………!!」

そして最初に　いや飛び込んできた全ての映像が俺の疑問の答えとなっていた。

「これが……………私達が今も生きている答えだよヒナ君」

「……………やってくれるじゃないか」

ハハハッと乾いた笑みを浮かべながら俺は目の前に広がる光景を目

の当たりにする。

それはとても美しい光景だった。

周りには何も見えずただ青い青いブルーのみが映し出される世界。

銀世界ならぬ蒼世界であった。

間違いなく“あいつ”の仕業だな……まったくどついう風の吹き回しなんだか……。

俺がチ工を離さないと思った思いは実を結び現実となりて現れる。

辺り一面の蒼世界……。

村鯨の【水結晶】でできた俺達を囲むように舞い上がる渦潮によって。

「【渦潮・天象】」

それは今朝学校で見せられた渦潮でできた水城の防御用に用いられた技。

それは竜巻に似た水の渦となって舞い上がり全ての技を飲み込み破壊する。

これは今朝レリエルこと俺の親友美濃輝喜が語ったことである。

そして俺は今日の前でそれを実感していた。

巻き込まれては流されていき渦の中心へと運ばれて粉々に粉碎される幻術でできたの鉄の腕。

それはあまりに残酷であまりに頼りがいのありすぎる水のシールドだった。

……こいつらには手出しはさせない。

それは現実にあった言葉なのかはたまた俺のただの妄想なのか……。

俺はそこで水城の声を聞いたような気がした。

ザッパーンツ!!!!!!!!!!!!!!

波が押し寄せてくるような音が響き渡ると同時に俺達の周りの蒼世界は時雨の間の薄暗さへと早変わりする。

そんな頃にはこの部屋に存在する【空間】はすべて元通りになっていた……。

水城 side

目覚めた瞬間に目にした光景。それは日向と知恵理の2人が大量の鉄の腕に囲まれた映像だった。

それを見た俺はなぜ自分が生きているのかという疑問はどつでもよくなり村鯨を反射的に振るっていた。

「……………【渦潮・天象】」

ザッパーンッ！！！！！！！！！！

俺の声とともに日向と知恵理の周りの水が彼らを囲むように舞い上がり2人の身体を包み込む。

村鯨の特性は【水結晶】俺が触れた水ならどこにあっても自由に好きな形に固められる能力だ。

だからこんなことは造作もない。

だから問題はそこではなかった。問題は日向と知恵理をあの腕は傷つけようとしたということ。

それだけの一瞬の光景で俺の頭はすぐに沸点に達していた。

「……………いつらには手出しはさせない」

キツと鉄の腕を睨みつけた俺は村鯨のタクトを揮い舞い上がり竜巻のような渦潮を操る。

あれが幻術なのは一目みただけで分かった。

だがもちろんあの技にはそれを見分ける力もないし俺だって基本的には“戦士”だから本物を掴むことは不可能。

しかしあの技にはそんなこと必要ない。ただ飛び込んできたものすべてを破壊すればそのうち1つが本物。

それだけで充分だ。

「……鎮静しろ」

そして最後に大鎌“村鮫”で遠くの物を斬るように渦潮を一刀両断する。

すると渦潮だった水は一気に弾け飛びその姿を自ら破壊させる。これでさっきまでの静寂な空間へと早変わりするのだった。

「……ザコがいきがるな」

「……どついつ風の吹き回しですか水城？」

俺を支えていた輝喜肥えをかけたのはそのときだ。

しかし俺はそんな輝喜の質問に対して馬鹿にしたようにフツと鼻で1回笑うと目を瞑り独り言ねように呟いた。

「……………時の少女”を護る。それが“時の番人”の仕事だ」

俺は再び目蓋を開かせるとどこを見ることもなく視線を上へと上げた。

そして誰にも聞こえないように 誰にも聞かせないように俺は心の中で呟くのだった。

……………そうだろ“空”？

知恵理 side

「水城…いつたいどういつつもりだ？」

みんなで1度集合して話し合おうとしたとき始めに出てきた言葉はヒナ君から水城さんに向けてのその1言でした。

まだうまく歩けない私に手を貸しながらも少し睨みながら水城さんにそう問いたヒナ君。

でも水城さんはヒナ君の言葉を聞くと逆にあの無表情な目でヒナ君を見つめながら問いかけました。

「…………それはこっちのセリフだ」

「なに…………」

水城さんの言葉にヒナ君は少しだけ不思議そうな顔を見ると再び水城さんを睨みつける。

それに負けじと水城さんも無表情のままヒナ君を見ていました。

『……………』

一触即発。この2人なら戸惑いなく第2ラウンドをしそうです。

でも私はそうしてほしくありません。だから私はこの危険な空気を壊しました。

パシッ！！

「いたっ！？」

「ヒナ君！！助けてもらったら助けくれた人に必ずお礼を言わなきゃだめ！！これは人としての最低限のマナーなんだからね！！めっ！！」

ヒナ君の頭を軽く叩いた私は少しだけ痛そうな顔をするヒナ君を少し叱りつけます。

するとみんな予想外だったのかセツちゃんと無表情な水城さん以外のみんなは私の顔を見てポカンとしてました。

『……………』

そして再び沈黙が流れます。

でも今度の沈黙は一触即発な空気は一切なくただみんな呆然として
いるだけでした。

だけどそんな誰もが呆然とした沈黙を破ったのは……。

「はあー俺はガキかよ」

沈黙を破った人物。私が叱りつけたヒナ君は少し自嘲ぎみになりな
がらそう呟いて水城さんの方に向き直り。

「助かった。ありがとう」

そう言って水城さんに頭を下げました。

「私からもお礼をいわせてください。ありがとうございました」

それに続いて私も水城さんに頭を下げお礼の気持ちを述べます。

それが人としての最低限のマナーでありこの場の空気を変えることであり水城さんへの感謝の気持ちを表す行為であるからです。

そして私達の行為に対して水城さんは僅かに手を挙げて。

「……礼には及ばない」

とそれだけ語るといつも通りの無表情な顔でそう言いました。

そして少しだけ間を取って今度は水城さんから話し始めました。

「……では聞かせる。なぜ貴様は俺を殺さなかった？」

常に情に流されない水城さんらしい言い回し。

だけどヒナ君も水城さんの無表情に対抗するくらいに顔を歪ませてそっと呟きました。

「ただの気まぐれ」という名前の弱さだよ」

その言葉に私達は納得して水城さんは少し驚いたような雰囲気になります。

相変わらずの無表情ですが水城さんは少し顔を伏せるとため息を出し。

「……そういえばお前はそういう奴だったな」

とそれだけ呟いて黙り込んでしまいました。

それを見た私達は誰も何も言うことなくこの話を終わらせ新しい話題を出します。

でもこれからは本題とも言つべき大問題……ヒナ君達の顔は誰もが真剣な顔つきになった。

「……輝喜現在の状況を説明してくれ」

「ええ、分かりました」

マキ君がコウ君にそう促してコウ君もそれに頷くとポケットからあのリモコンを出して私達に見せるように掲げる。

そして私達の現在の状況を話し始めました。

「このリモコンはこの部屋の操作全体をするためのもの。これは今まで皆さん見てきましたから分かりますよね？」

全員が黙って頷く。

「……そしてここにある赤いボタンがこの変形の中の鋼鉄の扉を開くためのボタンです。ですが……」

コウ君はリモコンの一番右上の端にある大きな赤いボタンをポチッと押す。

ただど部屋は何も変化は現れません。

「コウ君…どうして？」

マキ君以外薄暗いこの部屋の中でも分かるくらいに顔が青くなっている中私はコウ君にそう聞いた。

するとそれに答えてくれたのはヒナ君でした。

「いいかチエ？俺達はこの部屋の中にいる。この部屋の入り口はあの鋼鉄の馬鹿でかい扉しかない。そしてその馬鹿でかい鋼鉄の扉は開かない。ここまで言えば分かるだろ？」

「マジかよ……」

マキ君が何か分かったみたいにそう呟く。

そしてかくうえ私もヒナ君の言葉で現在の私達の状況を改めて知りました。

私達は今この部屋に……。

「閉じこめられたの？」

「……そういうことだ」

少し悔しそうにヒナ君は言つと齒をかみしめながら目を伏せました。

その姿を見た私は支えてもらつてる右腕に力を入れてヒナ君の腕に抱きつき少し目を閉じてヒナ君を感じる。

このとき私は自分の非力さを改めて感じました。

ヒナ君みないに頭がいいわけじゃなくマキ君みないに運動ができるわけでもない。そんな私にできることは……。

きっとヒナ君はどうしたら無事に脱出できるか考えてくれる。

私はそう信じることだけでした。

日向side

くそっ!! 何も思いかねえ!!

俺は 俺達は内心かなり焦っていた。

現状はかなり最悪な展開へと激動的に突き進み俺達を追いつめていく。

そもそもこの部屋“時雨の間”は水を入れるバケツのような状態の部屋。

天井から降ってくる雨に似せた水はすでに地上で俺達の脚を覆い隠さんとするくらいまで上がってきている。

それに付け加えて部屋の入り口が塞がれたとなるとかなり絶望的だ。

そんな状態に俺達は追い込まれていた。

ギュツ………！！

俺の腕には水で身体が冷えて震えてしまっているチエがギュツと抱きついている。

周りを見渡せば水城は無表情を崩さないままただ目を伏せているが他のメンバーは真備は凧を輝喜は刹那をそれぞれ抱きかかえながら寒さに耐えている。

特に風と刹那はミニスカートだから脚が完全に露出しているためかなり寒そうだ。

「くそっ!!」

そんな状況を見て冷静さを保っていられるわけなく俺は脚下の水を殴りつけた。

バシヤッ!!

強く叩いた水は弾けるように空中を舞い俺とチエに降りかかった。

その結果。結構な量が俺とチエの身体にかかり全身をびしょ濡れにしたのだった。

「ごめん!!チエ!!」

少し気が動転してしまっていた俺は慌ててチエに謝罪する。

すると今まで俺の腕に抱きついていたチエはその両方の眼をゆっくりと開くと俺にニッコリと笑みを浮かべてくれた。

「大丈夫だよヒナ君」

優しくかけられるその言葉に俺は 俺達はただ聞きほれてしまう。

こんな状況だからこそチエの温かい言葉は俺達の身体の冷えをゆっくりと温めてくれた。

「みんなも……大丈夫。私達は必ず助かるよ」

今度は俺だけではなくみんなにかけられた言葉。

それだけで俺はこいつの凄さを改めて実感することができる。

どんな状況でも言葉一つで全員を救ってしまうチエのことが……。

「ふうー……」

チ工の言葉を聞いた俺は一度大きく深呼吸をすともう一度辺りを見渡した。

まず見えてきたのはすぐ目の前で周りにいる俺達を見渡している俺の親友で友達思いの“真備”能力は【雷】

そしてその真備に背負われながら俺と同じように心を落ち着かせるために目をつむっているのは“凧”能力は【風】だ。

次に見えたのはその隣で刹那をお姫様抱っこしながら何か考えている親友の1人“輝喜”能力は【光】で右目には未来を見る力がやどる【未来図】の力がある。

彼にお姫様抱っこされている刹那は未だにあの恐怖が抜けないのか意識が朦朧としていた。

そしてそれから少し離れた場所に1人で立っている黒の長髪の男は“水城”能力は【雨】

上を見上げれば高いところに天井がありそこから大量の水が雨みたいにふっってきている。

下を見れ溜まりに溜まった水が脚を覆い隠さんとしていた。

これが現在俺にある情報の全て。すなわちこれを使ってこの部屋を

……！！

『あつた！！！！！！』

俺が叫んだと同時にもう1人俺よりも高い声があがる。 凧だ。

「凧…方法があつたのか？」

「ええ…たぶんあたしの考えていることはあんたの考えてることと一緒に」

だとしたら…この問題点も分かっているはずだな。

そしてその解決策も。

「タイミングの問題は？」

「輝喜が“未来図”で何とかしてくれるでしょ」

「俺達に被害が来ないためには？」

「その問題はきつと彼が解決してくれると思いますよ」

そこに第3の声加わってくる。輝喜だ。

輝喜は何かを含むような言い方をするとクスリと笑いながら後ろを振り返った。

「ですよね水城？」

「……俺に指図するな」

ぶつきらぼつに水城はそう言つと手に持った村鯨を肩に担ぎこちら
を無表情のまましっかり見た。

「……俺は何をすればいい？」

その言葉を聞いた俺は条件が完璧に揃ったことを確認した。

隣で不思議そうに首を傾げるチ工。俺は彼女の頭にポンと片手を置

くと微笑んだ。

「ありがとよチエ。お前のおかげで問題 nothing だぜ」

「……ほえ？」

ポカンと可愛らしく口を開けたチエに俺はもう一度微笑むと全員のほうを向く。

凧と輝喜と目を合わせて頷きあつた俺はこの作戦のキーポイントとなる真備と水城に説明するため最初に口を開いた。

「【電気分解】を使う」

その単語に真備は首を傾げるのだった。

第49話 魔の手と大脱出（後書き）

作「次回予告！！！！！！！！」

真&輝「早っ！？」

輝「ちよつとすみません作者！！いきなり次回予告なんていくらな
んでも早すぎですよ！？」

真「ていつかなんで今回は俺と輝喜しかいないんだよ！！」

作「……………」

真&輝「作者？」

作「……………（・。・）zzz」

真&輝「寝てるっ！！！？？」

真「ちよっ！！……どういことだよ！？作者が寝るなんて！？」

輝「それによく見たら俺達以外もちゃんと居ました」

真「マジで！？」

輝「ええ……………寝てますけど」

真「……はい？」

知「すやすや（10時寝）」

凧「くーくー…（寝る子は育つ）」

日「すぴー…（こいつはいつも通り）」

作「ちなみに今は深夜3時だから俺も眠いんだよ」

真「あ。作者起きた」

輝「つまり起きてる俺達のほうが異常なんですね」

作「だから俺もさっさと次回予告してさっさと寝る。

さて次回はいよいよ第一章最終回！！

日向は新たな一步を踏み出すために翼を広げ知恵理は未来のために決意する。

2人の新たなスタートに凧は笑顔を見せ真備は拳を固める。

そして“時の番人”に輝喜は選択させられ新たな恋も巻き起す。

次回【時の守護者】

日「問題nothinzzz……」

真「だめだこりゃ」

輝「しまりがありませんね」

作「まあそついうことだから俺は寝る。おやすみ」

真&輝「おやすみなさい」

次回に続く!!

第50話 時の守護者（前書き）

いよいよ第1章最終回！！

なんか頑張りすぎてかなりページ数が多くなってしまいました。

では第五十話どうぞ！！

第50話 時の守護者

?????side

ザ ツ!!!!!!

薄暗く視界が悪い巨大な部屋“時雨の間”に雨音のごとく水が降り注ぐ音がこだまする。

そんな中この部屋の中にいる7人はそれぞれ思い思いの場所にて待機していた。

ある者は部屋の端で地面の水を操り水のない空間を作り出し。

「……………」

ある者はその水のない空間にて鉄扇を構えて心を落ち着かせる。

「ふー……頼んだわよ真備。あんたに懸かってるんだからね」

ある者はその横で右目を瞑り精神を統一させながら鋼鉄の扉に目を向け。

「大丈夫ですよ風。真備は必ずやり遂げます」

ある者は彼らの中で部屋の中央と上空を見上げながら祈り続ける。

(お願いマキ君……。頑張ってヒナ君……)

彼らがそれぞれの胸のうちに秘める思いは異なり散らばり
そして集結する。

その先にあるのは彼らが信じる2人の少年。

拳を突き抜ける“雷”を持つ【作り出す者】

刃を焼き付ける“炎”を持つ【破壊する者】

この作戦において2人の少年はそれぞれこの2つの役割を持ち全てを破壊する。

それは“この部屋”でしかできなく“あの2人”でしかできないことなのだ。

ある者は部屋の中央にて唯一水に浸かり拳を握りしめる。

「頼んだぞ日向。俺が作り出す物をしっかり燃やせ」

……そしてある者は部屋の上空にて紅の翼を羽ばたかせながら時を待つ。

「問題 nothing 真備。お前なら必ずやり遂げられる」

2人の少年もまたお互いの成功を祈りながら自分の仕事に集中する。

言葉はいらない。相手を見る必要もない。

ただお互いが信頼する親友がそこにいると知っているだけで2人は心を落ち着かせられるのだ。

それが日向と真備 いや知恵理や凧。そしてもちろん輝喜を含めた日向達の関係なのだ。

「…………準備はいい？」

緊張したた感じで凧は部屋の中央と上空に向かって語りかける。

「問題 nothing」

「パーティーはいつでも始められるぜ」

対して声をかけられた側の2人は内心こそ緊張しているも外面的には緊張した雰囲気は一切感じさせないように応えた。

だがその嘘は彼らの仲にはないに等しい。

緊張するなと言うほうがおかしいこの状況。一歩間違えばそのまま命を落としかねないこの状況。

緊張するなと言う方がおかしいこと。

ましてや彼らは先に言った通り“語らずとも通じあえる”関係。

感情や心情などプライベートなことこそ分からなくともそれくらいは彼らにとってさして問題ではないのだ。

「……………最後にみんなであれやっとうぜ?」

そしてそんな彼らの決まり事を真備は提案する。

喧嘩をする前には必ずこれなしにはやっていけないことだ。

「……そうですね。じゃあ誰のにしますか？」

「真備…のがいいんじゃない？破壊っていうとあたし達よりむしろ真備の分野なんだし？」

真備の提案に凧と輝喜の2人が同意する。

そして“誰”のをやるか決めると凧と輝喜の2人は上を見上げる。

それに吊られて真備と知恵理。それに水城が上を見上げた。

するとそこには……。

「……」

「ふふっ そうでしたね。それでこそヒナタンだ」

ニツコリと優しい笑顔を浮かべながら人差し指を天高く高らかと掲げた日向がいたのだった。

「遅いぞお前ら。俺は既に問題 nothing だぜ」

優しい笑顔が一変。ニヤリとニヒルな笑顔を浮かべ上空から日向が見下ろす。

普通の人ならムカついたりするかもしれない状況だが誰もが日向のその様に怒りを見せることはない。

むしろ彼らは日向のその言葉に安心感すら覚えられたのだった。

「まったく……あんたはなんでそうなのよ？」

「それが日向……いやヒナタンなんですからね」

「やれるだけやる。それが俺らのパーティーだな」

凧、輝喜、真備の3人がそれぞれ言葉を出す。

3人は右手の人差し指を立てて今回の闘いでボロボロになったそれぞれの腕を上に向かってピンと伸ばし日向と同じ体制になる。

そのときの3人の顔は日向と同じようにニヒルに笑顔になっていた。

「……さすがは我が親愛なる親友達だよ」

それを見た日向はニヒルな笑顔を少し緩めて喜びの表情を出した。

そしてそのまま日向の顔は真備、凧、輝喜の順に目を移すと最後にある一点を見る。

彼女は日向達のその姿に嬉しそうな表情を見せながら俺にニッコリと笑いかけてきていた。

だが俺達は知っている。彼女は今まで守られる立場。おそらくこれから彼女はその立場からは逃れられないと思う。

だからこそ彼女はそのことに後ろめたさを感じているのだ。

(そんな笑顔じゃ俺達……特に俺は騙されねーよ)

確かに彼女には闘う力はない。普通の人から見たら彼女は情けなくか弱い存在なのかもしれない。

だが 彼らはそんなことは一切思っていない。

彼らにとって彼女は太陽のような存在。

言葉に例えるなら“絶対にして不可侵”それくらい彼女は彼らにとって大切な存在なのだ。

そして彼らは彼女を守り彼女の笑顔に救われる彼女のための“守護者”

大切な人を守るのに対価は必要ない。

なぜなら彼女を守るのは彼らの誇りであり彼らの喜びなのだから。

(だけどそんなことお前は知らないんだよな……)

彼らはその思いを1度も彼女に明かしたことはないのだ。

先に言った通り彼女は今日向にニッコリと笑いかけている。

しかし彼らには彼女の瞳の奥にある後ろめたさ。それと“寂しさ”がしっかりと見えていた。

そんな彼女に彼らは今まで声をかけてあげられなかった。

彼女の気持ちを知りつつも彼女にどう声をかけてあげたらいいか分からなくて声をかけてあげられなかったのだ。

だけど状況は変わった。

彼らは“力”を手に入れて彼女は“運命”を押し付けられる。

そんな彼らに彼女の気持ちは最早無視できないものになってきたのだ。

彼らは変わらなければいけない。今まで背けてきていた真実に目を向けなければいけなくなったのだ。

だから彼らは背けてきていた真実の方を向き1歩前に進み出て手を差し出すのだった。

「チエ……」

「ほえ……?」

日向の声に嬉しそうな笑顔を浮かべていた知恵理の顔が崩れる。

そんな知恵理に日向はニヒルな笑顔を完全に崩すと再びニッコリと

笑顔を見せ。

「さっさと右手挙げないと終わらせちまうぞ?」

日向の言葉に知恵理の思考はフリーズしてしまう。

だが知恵理はすぐにその言葉を理解するとさっきまでの偽りの嬉し
笑いではない。

常に日向達に見せる 時の秒針を発動させたときと同じ真正正銘
の笑顔を見せながら……。

「……うんっー!!」

力強くそう頷き祈るように合わせていた右手を天に突き出した。

その笑顔な瞳に涙を輝かせながら。

「……それでこそ俺が惚れた幼馴染だよ」

知恵理のその様子を見た日向は誰にも聞こえないようにそう呟く。

そして再び彼は顔を上げるとこの部屋全てに響きわたるように息を大きくすい上げた。

そのときの彼　　日向の顔はとても輝いていた。

「真備!! 凧!! 輝喜!! それから……知恵理!!」

密閉された空間に日向の声が響くと同時に日向に名前を呼ばれた4

人は掲げた右腕に力を入れる。

その先にあるのは“天”全てを破壊する神の天罰を表すのだ。

「俺達がしなければいけないことはなんだ！！！！！」

「あんたバカ！？そんなの決まってるでしょ！！！」

「ヒナタン。そんな当たり前な事聞かないで下さい」

「んなの決まってるだろーが日向？」

「ふふふつ。そんなの決まってるよね？ヒナ君？」

すると4人はほぼ同時にそれぞれの言葉で日向の言葉に応えたと示し合わせたわけではないが日向を含めた5人は同時に息を吸い込んで……。

『天誅！！！！！！』

ほぼ同時にそう叫んだ。

そしてその瞬間。その場にいる人全員が動き出した。

この部屋から脱出するために。生きて太陽の光を見るために……。

日向side

俺達親友の間で声を揃え真備と俺と共闘のときの決めゼリフ“天誅”を叫ぶ。

するとまるで時が動き出したように全員の様子が鋭くなりそれぞれの動きを開始した。

「やってやるぜ……!!」

バシヤッ!!!!!!バシヤッ!!!!!!

そう言つて動きを見せたのは唯一水に浸かっている真備だ。

真備は強い意志を持った目で鋼鉄の扉を睨みつけながら両手を一気に真下にある水に拳を突っ込む。

水上を殴り。水に流動させ。分子に分解して。新たな原子を創り出す。

それが真備に与えられた仕事。真備自身はそのことを理解してはいないだろう。

だがそれでも真備は疑うことなく自身に与えられた仕事を完遂させる。

なぜなら“頭が悪い”あいつに出来ることは親友を信じて行動することのみ。

いままでもそうやってあいつは人生と言う名のパーティーを勝ち抜いてきたのだ。

親友の中で誰よりも友情を大切にする真備にはそんなこと容易いんだよ。

「今夜最後のパーティーの始まりだ……」

そして今夜もあいつは親友達の言葉を信じて行動する。

それがあいつの生き方でありプライドなんだ。

あいつはそのプライドのために全てをなげうつてるそんな男。だからあいつは俺の大切な親友なんだよ。

普段は恥ずかしくて言えない言葉を心の中でそう呟きながら俺は真備からなるべく距離を取る。

下で水城の力で出来た水に触れない空間にいる他の5人も同様だ。

なぜならあいつがこれからやることは……。

「雷の力！！！！全開！！！！！！！！」

ピシヤ

ツ！！！！！！！！

リミッターなし正真正銘全力での能力解放だったからだ。

ブクブク……！！

両拳を水中に入れたまま雷の能力を完全解放することにより地面に溜まった大量の水はまるで沸騰したように音をたてる。

その力は水を伝い反応して周りに行き届く。

真備は自分の役割を十分すぎるほど果たしたのだった。

真備。お前は雷の力を全力で水に打ち込め。

俺達が真備に指示したのはただそれだけ。

だがこの指示は俺達の脱出には必ずかかせないことであり最も重要な事なのだ。

それは真備が持つ雷の力がもたらす化学の力に関係がある。

それは……。

“電気分解”

それがこの作戦で利用する化学現象である。

もともと“電気分解”とは電解質溶液に2個の電極板を入れ電流を通して両電極の表面に化学変化を起こさせ物質を分解することと定義されている。

つまり今の真備の状態こそが“電気分解”を体で体現している状態なのだ。

両電極は水中に突っ込んだ真備の両拳。電流は真備の拳から出される雷の力。

そして電解質物質であるこの部屋に溜まった大量の水が分解されて発生する物質とは……。

【酸素】と【水素】

この2つの物質こそが俺達が求めていた物質なのだ。

「うおおおおお……！！！！！！」

ブクブクブクブク……！！！！！！

雄叫びにも似た叫び声をあげながら雷の力を水中に流し込む真備。

その力を流し込むたびに真備の周りからは水が分解されて“酸素”と“水素”が発生し続けていた。

「もういいわ真備。あんたの仕事はお終い」

ピリッ……！！ピリッ……！！

突然真備にかけられた男性よりもかなり高い凧の言葉に真備は動きを止める。

拳に入っていた力は抜けていき能力を全開で使ったせいとその顔に真備元来の瑞々しさはあまり感じられなかった。

だけでその顔にあつたのは落胆の顔ではない。何かをやり遂げたよ
うな嬉れ嬉れとした顔がそこにはあつた。

「さすがはあたしの双子の馬鹿弟ね……完璧よ！！！！」

「へへっ……サンキューな俺の双子の姉貴……」

力なく凧のそう応える真備。そしてそのまま力なく立ち構えるとフ
ラフラと凧達の元へと歩き出すのだった。

「さてと……」

ヴォ ンッ！！！！！！！！

真備が大方こちら側に近づいたのを確認した凧は真剣な面もちで咳くと手に持った鉄扇の魂狩“風神”で一閃させる。

すると凧が振るった鉄扇からはまるで突風が駆け抜けたような激しい音と一緒に風が駆け抜けた。

「……ここからはあたし達の仕事よ輝喜」

「ええ。俺が持つ全ての力を使ってあなたをサポートします」

凧の言葉に応えた輝喜は風神を構える凧のすぐ後ろにつく。

そして輝喜は凧と共に先にある鋼鉄の扉を見据えると輝喜にしかない輝喜だけの力を解放させた。

「凧！！俺があなたを未来へと誘います！！！！！！」

「頼んだわ！！あたしに予知夢の中みたいないな絶望を見せないでよ！！！！！！」

凧の言葉を聞いた輝喜は妖しく赤に光り輝く右目を見開いた。

「凧。最初に右30度くらいに向かつて強い風を一振りしてください。次に扉の方向。つまり正面約5度くらいに3回巻き上げるような風を送り出してそこから再び右斜め65度くらいに突風みたいな風をお願いします。さらに左に片寄った酸素と水素の割合を右と同じにするために左斜め45度くらいに台風並の大きな風を送って終わりです！！！！！！」

一呼吸も置かない間に出されたそれらの指示を出した輝喜。

未来図の力を使ってどこに風を送れば好都合なのかを図ったのだ。

「突風よ靡け！！！！！！！！！！」

ヴォ ンッ!!!!!!!!!!!!!!

ヴォ ンッ!!!!!!!!!!!!!!

ヴォ ンッ!!!!!!!!!!!!!!

そして凧は輝喜の指示通りに風神を振るわせると凧の“風”の能力により何本もの風が踊るように舞い散っていった。

それは俺の“炎”や真備の“雷”輝喜の“光”のように目に見える能力ではない。

だがそのときの凧が振るった何本もの風は空のようにとても澄み切った綺麗な色に見えた。

「あたし達の仕事も終わったわ」

「後は任せましたよ日向」

凧と輝喜はそう言うと俺に視線を送ってくるそのときにはすでに凧達の元へと辿り着いた真備。それにずっと俺を信じて見上げていた

チエが俺に全てを託したと送ってきた。

「……こっちは任せておけ」

俺が全員が集まった水のないあの空間に目を向けていると水城の静かな声が木霊してくる。

敵であった者　それも親友の輝喜や信頼できる刹那とは違つ。

あいつ“時雨水城”の言葉に俺は少したじろぐ。だが俺はその言葉に嫌悪感を感じることはなかった。

むしろ……。

「俺の大事な親友だ。傷付けたらぶっ殺してやる」

「……肝に命じておく」

あいつの言葉。死闘をしたあいつの言葉だからこそ俺は信じた。

刃と刃。文字通り魂と魂をぶつけ合った俺達だからこそお互いに信用ができた。

「……………【渦潮・天象】」

ザパ ンッ！！！！！！！！！！

水城がそう呟くとあいつらの周りに竜巻のように渦潮が立ち上る。

それはつまり俺とチ工達とを完全に遮絶することになった。

お願いヒナ君。

完全に渦潮チ工達を覆う前。チ工と目があつたときアイコンタクトでチ工からそのメッセージが送られてきた。

こういうときは幼馴染はとても便利だと思つ。

「問題 nothingだ」

そして俺は手工見えなくなると誰もいなくなった空間で1人呟くのがあった。

ボ
ツ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

誰もいないただ暗く薄気味悪い空間に赤く燃えたぎる銀色の刀を構える。そこにあるのは立ち上る渦潮の柱と鉄の扉の2つだけ。

だがそれは目が見える範囲という限定条件があった場合での話だ。

実際にはあの扉の前には真備と凧。そして輝喜が作り出してくれた希望がある。

まず真備に水を電気分解させたのは水を分解して火をつけると燃える水素と燃えるのを助ける酸素を作り出すため。その際水を通して感電しないために水城に水のない空間を作らせた。

次に凧と輝喜が風を使って大気を動かしてなるべく水素と酸素を扉の周りに動かした。その際輝喜の未来図を使ってなるべく安全かつ扉を破壊できる場所へと動かした。

最後に水城の“渦潮・天象”これは扉を破壊した瞬間に手工達に被害が及ばないようにする防衛手段のため。なぜなら……。

俺が今から扉の前にあるあの水素と酸素に発火するからだ。

「日輪流炎術“四式”！！」

俺は日本刀に灯した炎を最大にまで巨大化させる。

真備はその身体の中にあつた全ての能力を使って俺のために水素と酸素を作り出してくれた。

だったら俺もそれにしっから応える。身体の中に残つた全ての能力を使って俺は必ずあの扉を破壊する。

ポ ツ！！！！！！！！！！

日本刀に灯され炎は十分すぎるほどだ。

そして俺はここにいる全てを救うために刀で空間を切り裂いた！！

そして部屋に大爆発を知らせる破壊音がすべてを震えさせるのだった。

知恵理 s i d e

ドカ ンッ！！！！！！！

「ヒナ君！！！！？？？？」

私の周りを囲む渦潮の先から私の耳に爆発音が木霊してきました。

それに私は思わずヒナ君の名前を叫ぶ。

それはナギちゃんやマキ君。それにコウ君にも衝撃的でした。

「そ……そんな……だって！！日向は……！！！」

「くそっ！！あいつ間に合わなかったのか！！！！」

ナギちゃんの瞳にはうつすらと涙が浮かび上がりマキ君は悔しそつに地面を殴りつけました。

そしてコウ君は……。

「……離して下さい水城」

「……この“渦潮・天象”からは出られない。お前も分かってるだろっ」

無理やりにも渦潮の外に出ようとして水城さんに腕を掴まれて制止させられていました。

ただど止める水城さんの無表情も少しだけひきつっているように見えます。

私はここにいる全員がヒナ君を心配しているのを感じました。

「水城。早く渦潮を止めなさい！！！！！！」

周りを見てみると他の全員が水城さんを睨みつけています。

「ちょっと知恵理！！！！あんたも何か言いなさい！！！！」

そんな中で唯一水城さんを睨みつけることなくまた怒りを見せることになった私にナギちゃんが水城さんを睨みつけながら言いました。

「…………みんな」

だけど私はナギちゃんの言葉に優しく語りかけました。

だって私はたとえヒナ君が作戦通りに渦潮の中に飛び込んでこなかつたとしても。

たとえヒナ君がああ爆発に巻き込まれてもしても。

「ヒナ君は大丈夫。絶対に問題 nothing だって」

私はヒナ君を信じてる。

絶対ヒナ君は生きてまた私に笑顔を見せてくれる。

だから私は水城さんを責めないし水城さんの言葉なんて眼中にありませんでした。

『……………』

私の言葉に水城さんを含めた全員が啞然とした目で私を見てきました。

たぶんみんな私が一番水城さんに怒りを見せてると思ったと思います。

だけど私はそんなみんなにニツコリと笑顔を見せると……………。

「ヒナ君を心配するのなんてもう慣れちゃった」

そう言ってみんな見えるようにベツと舌を出しました。

そんな私を見たみんなは今まで怒りに満ちた目を納めると今度は私と同じように静かに立ちすくみ……。

「ゴメンね知恵理……あたし…あんたの気持ち考えなかった」

謝ってきたのはナギちゃんだけ。マキ君とコウ君は私の行動に何も言えなくなっていました。

でも仕方ないかな？だってこんな気持ち女の子にしか分からないから……ね。

私はナギちゃんの言葉を聞くと再びみんなにニッコリと微笑み最後にヒナ君とアイコンタクトをとった辺りに目を向ける。

あるとき私はヒナ君を信じてお願いという言葉を送りました。

だから今回も信じてるからねヒナ君。

問題 nothingだ。

あのとほ渦潮でヒナ君が消えた後に聞こえてきた言葉を私は再び聞いたよつな気がしました。

「……もうそろそろいいだろう」

あれから何分たったかは分かりません。その間私はずっと手を組み合せて祈っていましたたが水城さんの言葉に閉じていた目を見開きました。

「水城さん!!」

「……慌てるな。もう少し鎮静している」

私の言葉に水城さんは静かにそう告げると大鎌の村鮫を振るう。

すると私達を囲んでいた渦潮は静かに崩壊して今まで青一色だった世界は暗い漆黒と爆発で起きた赤い炎が見えてきました。

そしてもう一つ……。

「よおお前ら。だいぶ遅かったじゃねーか？」

その声は私が聞きたくて聞きたくてずっと待ち望んでいた声。

ヒナ君は私達がいた場所から3メートルも離れていない場所で翼を折りたたんで崩れてきた瓦礫の上に座りながら私達に手を振っていました。

「ヒナ君！……！」

そんなヒナ君の無事な姿を見た私はいてもたってもいられずに。

ガバツ！……！！

「うわっ！……！！……？……？……？」

ヒナ君のもとに駆け出してそのままの勢いでヒナ君に抱きつきました。

最初こそは驚いたヒナ君でしたがいつときすると慣れたのか優しく私の髪を撫でてくれる。

ヒナ君はズルい。だって私がどうやったら喜ぶのか全部知ってるんだもん。

私はヒナ君に抱きしめられて髪を撫でられながらそう思いました。

でもだからこそ私はそんなヒナ君が大好きなんです。

「心配かけたみたいだな」

「そんなのもう慣れちゃったよ」

そう言いながらも私の瞳には涙が溢れ出ていました。

日向side

「おいおいマジで生きてやがったよ」

チエが俺に抱きついてきて驚きながらも最早情景反射でチエの髪を撫でているとまるで呆れたような真備の声が聞こえてくる。

そして辺りを見渡してみるとやはりというか俺達を見て真備、凧、輝喜の3人がニヤニヤとした顔で俺とチエを見ていた。

「真備。それじゃあまるで俺に死んでほしかったみたいない方だぜ？」

「んだよ冗談が通じねーやろーだな」

そう言うと真備はガハハハと豪快に笑いながら近くの輝喜の背中をバシバシ叩く。

「真備。ものすつごく痛いのですが？」

「気にすんなって輝喜!!」

ガハハハと輝喜の言葉を無視してさらに叩く真備。

そんな真備に輝喜もヤレヤレといった感じ疲れた表情をしていた。

だけど　その顔をよく見てみると輝喜は笑っていた。

ただし楽しそうにニコニコといった感じの笑いではなく寂しげに
そうまるで別れを惜しむような悲しげな笑いを……。

「あーもう！！！！黙りなさいこんの馬鹿弟！！！！」

輝喜の表情を眺めているとついに堪忍袋の尾が切れたのか尻が真備を怒鳴りつけた。

手を使わない辺り弟のことを気遣ってはいるがな。

俺が尻と真備の微笑ましくもシユールな姉弟喧嘩を見ていると今度は2人から離れた輝喜が俺に話しかけてきた。

「それで？」

「ん？それでって何のこと言ってるんだ？」

俺の言葉に輝喜は大きいため息をつく。

その顔は俺の言葉にさらに呆れ顔が増していた。

「何言ってるのはこちらのセリフですよ。であなたはどっちらってあの爆風に耐えたのですか？」

輝喜の言葉に俺はあゝと頷くとチエを抱きしめた腕を離す。

チエの方もどうして俺が無事だったのかが知りたいらしく黙って俺の方を見つめながら涙を拭っていた。

よく見ると真備と凧も喧嘩を止めて水城も刺すような目で俺を見て
いる。

そんな空気の中俺は……。

「俺が無事だった理由。それはこいつのおかげだ」

バサッ！……バサッ！……！！

背中折り畳んでいた紅蓮の翼。紅翼の特性でもある翼【不死鳥】
を開いた。

「……そういつことか」

水城は分かっただらしく静かに呟いた声が俺の耳に届いた。

他のみんなも チエや真備ですら黙って頷いている。

俺はそんなみんなに応えるようにして再び背中の翼を納めると語り出した。

「不死鳥の神髄は“驚異的再生能力”つまり俺は水素と酸素に発火させるために“斬炎”を放った後間に合わないと思っただ瞬間に不死鳥で全身を覆い隠して難を逃れたというわけさ」

俺がみんなに応えるようにそう説明した瞬間。

バサッ!!!!!!

俺の背中に栄えていた紅蓮の翼はその役目を終えたとばかりに桜吹雪ねように俺の背中から舞い散った。

そんな光景に少し驚いたチエ、真備、凧、輝喜の4人。

水城の方は見たことあるのかはたまたまいつも無表情だからかただ黙

つてこの光景を見ていた。

「え？ヒナ…君？」

「ああ。心配しなくてもいいよチ工。全力で放った“斬炎”と爆発を防いだことで能力がきれて翼が消えたただけだから」

俺の言葉を聞いてチ工達4人は安心した顔になる。

そのとき部屋の中に一筋の光がさしてきた。

「んだ？この光？」

「バカね真備。これは爆発で穴があいたところからさしてきた光よ。つまりこれは……」

「はあー。昨日もあんまし寝れてねーのにまさか今日は徹夜かよ…」

凧の言葉に俺は深い深い溜め息をつきながらそう呟いた。

そんな俺の言葉にチ工達4人は苦笑いを浮かべた後真備が吹き出し

たのを境に全員で笑い出す。

それで今回の事件は終わりでもよかった。

そうだったらどれだけよかったのだが……。

ガラッ！！！！！！！

朝日が差し込む時雨の間に嫌な音が響く。

俺はその音にすぐさま反応して辺りを見渡した。

「……あれほどの爆発だ。もともとが古い洋館のここが崩れないわけないだろ」

だが水城のその言葉により俺達は自分達のいる状態を再確認できた。

つまりは俺達は再び死の危険性に直面しているということだ。

「問題 nothingじゃねーよ」

翼を失った俺は背中に冷や汗が流れるのを感じすぐさまチエの手を握る。

その手はさっきまでの嬉々とした感じではなく恐怖で震えていた。

「さっさと逃げるぞ」

そして俺はその場にいる全員にさう声をかける。

その言葉にその場にいる全員が強く頷くとダメージを負った体を氣遣いながら駆け出さうとした。

1人を除いて。

刹那 side

暗くて寒くて怖い。そんな感情が永遠と俺の中をグルグルと渦巻いていた。

寒い。暗い。寂しい。出てくるのはそんな負の感情だけ……。

俺は永遠の闇に捕らわれていた。

「【……】任せた！！！！」

周りの音すらどうでもいい空間。そんな空間にいたら俺は他のことなんてどうでもよくなる。

こんな空間に落とされたのは確かに始まりは風が俺に見せたあの大量のGのせいではある。

だが今俺の中で渦巻いているのはあんな甘いものではない。

これまで生きてきた13年間のうち12年間を過ごしてきたあの生活を思い出してしまったのだ。

小さな負の感情から大きな負の感情へと繋がっていく。

輝喜みたいに過去を覚えていないから苦しむんじゃない。過去を知

っているからこそ俺は苦しんでいた。

「……いつまで現実逃避をしているつもりだ？」

真っ暗な空間に静かな声が響いてきた。

俺はその喋り方。声の音程に聞き覚えがある。

それはいつも俺と行動を共にし俺を“この世界”で拾ってくれた男
水城の声だ。

「ほっといてくれ」

だが俺は水城声にそれだけ言うと再び暗黒の世界へと入っていく。

そんな俺を見て水城は深く溜め息をつくと黙って俺に近づいてきた。

このとき俺は知らなかった。これこそが俺の暗闇にさす光だという
ことだ……。

バキツ!!!!!!!!!!

「ぐっ!!!!!!!!」

俺は頬に鋭い感覚を感じるとその場に倒れ込んでしまう。

今までの水城なら俺に話しかけてくることはあれど殴られることなんてなかった。

だから俺はその行動に驚き顔をあげる。

するとそこにいたのは黒髪のロングヘアで死神のような漆黒のコートを纏い無表情な顔をした男ではなく。

「わりーな。俺は姉貴みたいに手加減できないんだよ」

鋭い眼光を俺に向けながらグローブをつけた手を握りしめる茶髪の男。

【羽前真備】だった。

俺は予想外な真備の登場に驚き目を見開く。

言葉はでなかった。

だけど真備は俺が何を言いたいのか分かったらしくもう一度深く溜め息をつく。

「…………お前。俺より頭悪いんじゃないか？」

真備の言葉に俺は鋭く目を吊り上げる。

「どっぴいっ意味だよ」

「そのままの意味だ。俺達の話聞いてなかったのか？この屋敷はじきに倒壊するんだよ。なのにお前は動きもせず……………」

頭を抑えて心底呆れたようにそう言つと真備はこれまでで一番強い
眼光を俺に浴びせた。

「お前……死にたいのか？」

「……………！？」

低く恐怖に値するそんなテノール声が俺の耳を貫いた。

見なくても分かる。やつは 真備は今怒っている。

「な、なんだよ……………」

「お前がとるべき行動は2択に1択。俺と今から全力で逃げるか。
この場に残つて生涯を終わらせるか……………さっさと選べ」

普段から水城の冷たい声を聞いているから聞き慣れたと思っていた。

だけど真備の声はそれとはまた別物。

真備の声は俺の心まで届く絶対零度な冷たさを秘めていた。

有無を言わさないような声に俺は恐れをいだきながら応えるのだった。

「……生きたいです」

「あゝ？聞こえねーぞ!？」

小さな声で言った俺に怒ったのかはたまた本当に聞こえなかったのか真備の怒号が響き渡った。

一瞬ビクついてしまった俺。だけど負けじと息を大きく吸い上げて今できる精一杯の声で叫んだ。

「生きたいです!?!?!?!?!」

俺は目をつむり真備の反応を待った。

両手は叫んだときに強く握りしめたまま脚は真備への恐怖で震えてしまっている。

ただ俺に待ち受けていたのは……。

ファサ……

頭を感じる温かく大きな手の感覚。それを感じた俺はすぐに目を開けた。

「それでいいんだよ」

するとそこにあつたのはさっきまでの恐怖を感じる鋭い眼光でも低いテノール声でもなかった。

そこにあつたのは屈強のない温かい笑顔とさっきまでの恐怖がぬけたテノール声。

「俺は生きたい。そして誰にも死んでほしくない……もちろんお前にも」

そして再び屈強のない温かい笑顔を俺に向けてくる。

俺はその温かい笑顔に見惚れてしまった。

「あ……／／／う……／／／え……／／／」

恥ずかしくてつい目を逸らしてしまう。

だがそんな俺を無視して真備は俺の腕を掴んで立ち上がらせた。

「はうー／／／」

手を握られた瞬間に俺の顔は真っ赤に沸騰してしまった。

「つつてもこいつはさっきある犬っころに気付かされたんだけどな
！……！！……ん？どうしたんだ！？」

もうダメ。俺はこの人の笑顔と考え方にやられちゃったみたいだ。

「ほら！…さっさと行くぞ！！」

「え？あ…はい……」

俺は真備に手を引かれて走り出した。

顔を真っ赤にしながら……。

俺の暗闇に光が訪れた気がした。力強く刹那的な輝きを放つ光。

“雷”のような光を……。

日向side

「あいつはまだ来ないの!？」

俺達が洋館を脱出してから数分がたつ。

だがいつこうに姿をあらわさない真備に尻は苛立ちを高めていた。

「ヒナ君……マキ君とセツちゃん来ないよー」

俺の横ではチエが俺の袖を引きながら泣きそうな顔で俺に言うてる。

そんなチエを安心させるために俺はチエの頭を撫でながら微笑みかけた。

「大丈夫だよチエ。絶対に問題 nothing だから」

「ヒナくん……」

泣きそうな瞳で俺に訴えかけてくるチエに俺はそう言うことしかできない。

翼を失った俺は無力だった。

「あーっ!!もっっ!!さっさと来なさい馬鹿弟!!!!」

「凧も落ち着け。何のために真備に行かせたと思ってるんだ?」

「でも……」

「大丈夫。あいつの魂はまだ死んでない。だからきつと使えるはずだ」

凧に言い聞かせるように俺は言う。

だが実際問題俺自身も洋館から出てこない2人が心配で仕方なかった。

おそらくもうこの洋館は数分ともたない。

その前に……早く出てこい!!真備!!

ピリッ……!!

俺が心の中で真備の名前を呼んだ瞬間。俺は確かにその音を聞いた。

それと同時に何かがすぐ真横を駆け抜けるような感覚を俺は味あつた。
それを感じた俺は笑顔をこぼすのだった。

ドガ　　ンツ！……！ドガ　　ンツ！……！ダ　　ンツ！……！
ンツ！……！ダ　　ンツ！……！

そのとき激しく激動的な音と共に目の前の洋館が一気に崩れ去った。

そんな様子を見ながら俺はもしあの中にいたら……と考えてしまい
冷や汗をかいてしまう。

だけど……誰も巻き込まれずにすんだからいいけどな。

「危なかつたな真備」

「はあ……はあ……ギリギリの方が面白いじゃねーか」

俺の後ろで息をきらしながらきつそうに話す真備の声に真備が出てきたことに気付いていなかったらしいチエと凧は急いで振り返った。

「真備!!!!!!!!!!」

「マキ君!!!!!!!!!!」

後ろを振り返ったチエと凧は嬉しそうな声を出して真備を見つめている。

俺もその声に振り返るとそこには息を絶え絶えにしながらも真つ赤に顔を赤くした刹那をお姫様だっこする真備が優しく微笑んでいた。

「さすがは“雷光神経”速かったな」

「はあ……はあ……お前に言われても……嫌みにしか聞こえねー……つーの」

真つ赤な刹那を地面に降ろしながら律儀に俺の言葉に応える真備。
そんな姿に俺はやっと安心して紅翼をしまうのだった。

「終わったんだな……」

「うん。終わったんだよヒナ君」

俺の呟きにチエが応えてくれる。

その声を聞いた瞬間。俺は全身の力が全部抜け落ちたように感じた。

ドサツ！！！！！

「あれ？おかしいな……」

足元の力がほぼ皆無になり脚は完全に自立できなくなった俺はその場に座り込んでしまう。

よく見るとどうやら俺にくっついていたチエも俺に巻き込まれて座り込んでしまったみたいだ。

「はははは。ヒナ君私も腰が抜けちゃったみたい」

俺に苦笑いを見せながらチエがそう言うと俺も苦笑いをしてしまった。

そんな俺達に一本ずつ手が差し伸べられる。

だが俺達に手を差し出した本人に俺達は少し驚きの表情を浮かべるのだった。

「……どうした。遠慮はいらない」

「……あ、ああ。ありがとな」

「ありがとうございます」

呆然となりつつも俺とチエはその言葉に甘えて手を掴んだ。

雨の死神【時雨水城】の手を。

俺達が手をつかんだのを確認すると水城はいつきに俺達を立ち上げらせる。

相変わらず無表情だったけどな。

「……気にするな。俺はお前と真備。それに凧に言いたいことがあるただけだ」

そして無表情のまま水城は俺達全員を見るように辺りを見渡した。

その視線に気がついたのか真備と凧。それに輝喜と刹那も水城の方を向く。

全員に注目された水城。だが次に水城が取った行動は誰彼関わらず全員が驚愕した。

シャキンッ！！！！

「……………」

気付いたときには水城が無言で俺の首筋に村鯨の刃をあてていた。

「くっ！！ “風神”！！！！」

「来い“洗穿弓”！！！」

「発動“雪化粧”！！！」

その瞬間。すでに雷神を発動させている真備以外の3人が魂狩を発動させる。

普通ならあちら側のはずの輝喜や刹那ですら発動させていた。

そんな一触即発の空気の中。刃を当てられた張本人である俺とチエはなぜか落ち着いていた。

「水城さん。どういっつもりですか？」

「……話があると言ったはずだ」

いつものほんとした声じゃない凜とした格好良さのあるチエの声。空気を震わした。

それに応える水城はいつも通り冷たい声のままだがその無表情の先に真剣な表情を俺は見る。

そんな近づきがたい空気の中でも関係なく俺はその中に脚を踏み入

れた。

「話ってなんだ？」

刃を当てられている状態だから俺の口調は強くなる。

睨みをきかせながら少し声を低くしてそう問いかけると水城は少し目を鋭くしながら応えた。

「……なに簡単な話だ。俺はお前たちに1つ問いかけるだけだ」

水城はそう言うと俺のすぐ横へと視線を移す。

そこにいたのはさつきからずっと俺の袖を掴んでいるチエ。

水城は彼女を見ると今度はこの場にいる全員に聞こえるように声を大きめに語り出した。

「……この少女は“時”の力を持っている。それが何を現すか……」

「世界の人間がチ工を求めてくる。そう言いたいんだろ？」

水城が語り出した瞬間俺は水城に睨みをきかせながらそう言った。

周りにいる水城以外の5人 いや表情に出てないだけでおそらく水城自身も俺の言葉に驚きを見せていた。

そんな中今度は俺がみんなに聞こえるように少し大きな声で語り始める。

「チ工の能力“時”これは“10導能力者”と呼ばれる世界を創り出したとされる10の能力の1つ。だけどチ工が持つ時の能力は時を渡る“時渡し”の力を持っているから世界で最も強い能力。また戦士にも幻術師にも分類されず攻撃能力を持たないため最も弱い能力とも言われている……お前が言いたいのはこんな所か？」

あんな衝撃的なことを俺は言われたから俺は一言一句間違っことなくそう言い切る。

俺の謎の言葉を交えた発言に真備どころか輝喜や凧、刹那も首を傾げていたが俺が言いたいことは理解したみたいだ。

そしてさすがの水城も俺のこの言葉の羅列には驚いたみたいで少し表情を固くするもすぐに元通りの無表情に戻すと話し始めた。

「……どこでそのことを知った？」

俺は水城の鋭い眼光に当てられながら睨み返すと同時に言い放った。

「そんなの決まってるんだろ？ “過去の俺” だよ……」

俺の言葉にチエは息をのむ。他のみんなもそれなりに驚きの表情を見せていた。

だがそんな中。1人だけ冷静で冷たい瞳を俺に向ける人物がいる。

目の前にいる時雨水城だ。

水城はゆっくりと目をつむると一度深く息を吐き出す。

そして瞳を開くと俺に突きつける村鮫を持つ手に力を入れると俺をしっかりと見据えながら口を開いた。

「……そこまで分かっているなら話は簡単だ」

俺を睨みつけるとはまた違う。少しだけ鋭くなった瞳の中に俺を写しながら水城はそう言つと今度は瞳を右にずらす。

そこにいたのは。

「……………“羽前凧”」

「え？な…何？」

いきなりフルネームで呼ばれて慌てた様子の凧。

そして水城の瞳は左方向に移すと瞳の中にある人物も変わる。

「……………“羽前真備”」

「お……………おっ……………」

真備の方も水城にいきなりフルネームで呼ばれて少し翻弄する。

そんな真備と凧の反応を確認した水城は再び俺。つまり最後の人物へと瞳が向けられた。

「……………“不知火日向”」

「……………」

真備達とは違い刃を突きつけられた俺は冷静に無言で水城だけを見る。

だが水城は俺達の行動に興味を示すことなく話を進めた。

話の核心部分へと……………。

「……………さっき日向が言った通り知恵理はこれからも狙われる」

チエが俺の袖をギュッと握りしめるのを感じる。

そんなチエに俺は少しだけ微笑みかけると再び水城を睨みつけた。

「で？何が言いたいんだ？」

「……俺は今から貴様ら3人に命令する」

命令という言葉に俺は嫌悪感を持つ。

だがここは敢えてその感情を抑えて水城の話に耳を傾ける。

そして水城の口から出てきた言葉は今までの水城からは想像できない。だが俺達には……。

“当たり前”の言葉だった。

「……貴様ら3人は時の少女を守る“守護者”となれ」

はつきりとしかし曖昧にその言葉が耳に入ってきた。

それはこの場にいる人全員に当てはまったことで全員が全員水城が何を言ったのか分からなかった。

だけどそれも数秒のこと。数秒したら水城の言葉を全員が理解し俺達は真剣な面持ちでそれに応えるのだった。

「問題 nothing。そんなの当たり前だ」

「当たり前でしょ！！知恵理はあたし達が守る！！」

「親友は見捨てない。それが俺のポリシーだ」

3人の意志。3人の勇氣。3人の祈り……言い方こそ違えど言えることは同じである。

それは大切な親友であり大切な女の子として1人の少女を守りたいという意志。

その屈強な意志はこれから決して折れることはない。

「……………それでいい」

シャキン……………

俺達の意志を確認にした水城は俺の首筋から刃を外す。

そしてその様子を見ている2つの瞳。

いや違う片目はすでに眼帯で塞いでいるため1つの目が俺達を見ていた。

その瞳が現すのは怒りなのか悲しみなのかはたまたお願いなのか……………。

しかしこれだけは言える。

彼“美濃輝喜”は俺達のことを優しく寂しげな瞳で見ているということだ。

それが少しだけ輝喜の瞳を見た俺の見解である。

彼の “美濃輝喜” の親友である “不知火日向” としての見解なのである。

第50話 時の守護者（後書き）

作「第五十話いかがでしたか？」

凧「久しぶりに刹那の登場かと思った何？あいつまさか馬鹿弟に惚れちゃった!？」

輝「意外な展開ですね〜」

作「でもこれは最初からこれは計画してたんですよ」

凧&輝「そうなんだ」

凧「ちなみに今計画している他のカップリングはあるの?」

輝「……凧?その質問は今しちゃいけないんじゃないありませんか?」

凧「何だよ?別にいいじゃない?」

作「……ちなみに凧。気付いてるのか?」

凧「ん?何をよ?」

輝「いいですか凧?今回の話で刹那は真備に惚れちゃいましたよね?」

凧「ええそうね」

作「そんなもって知恵理はどう見たって日向のことが大好きだろ？」

凧「うん確かにあれは見てて焦れたいわよね」

輝「……どうやら本当に気づいてないみたいですね」

凧「……？あんた達さっきから何が言いたいのよ？」

作「はあー……凧。どうして今回お前と輝喜を呼んだと思ってるんだ？」

凧「そりゃ……たまたまでしょ」

輝「いえ違います。俺とあなただけカップリングがないからです」

凧「………！？」

作「……気付いたみたいだな」

凧「な！！な！！な！！？？」

輝「そうです。あなたの思っている通り現在好きな人がいない“女性キャラ”はあなた1人なんです！！」

作「で。さっきみたいに計画しているカップリングを話すとなると必須的に凧のことを話さなきゃいけないわけ？」

凧「あ！？え？え？え！！！？？」

輝「この重大性にごここまで気付かないなんて……」

作「ある意味凧も鈍感だということだな。てなわけで次回予告行きますすー!!」

背中合わせで共に闘ってきた親友。

太陽のような笑顔で心を温めてくれた親友。

激しくぶつかり合いそれでも笑いあった親友……。

そんな親友“美濃輝喜”との……。

次回【エピソード 別れ】「

日「俺達はいつまでも親友だからな……」

輝「……何かこの日向のセリフの後で言うのはかなり引けるのですが……実際問題凧のカップリングの予定はあるんですか？」

作「ああ。実は第n……」

凧「言うなー!!!!!!この【検問消去】がー!!!!!!」

バコーンッ!!!!!!

作「くへっ!?!?!?」

輝「……首つて殴ったら本当に180度曲がるんですね」

凧「な!!!に!!!か!!!?!!」

輝「……次回に続く」

次回に続く!!

第1章 “時の番人編” エピローグ【光との別れ】（前書き）

親友との別れが日向達を悲しみへと誘う。

彼らに待ち受ける未来とはいったい……？

エピローグ【別れ】

では本編へどうぞ……。

第1章 “時の番人編” エピローグ【光との別れ】

“親友”

慣れたしんだ友達という意味を持つこの言葉……。

だが実際にこんな友達を持っている人はなかなかいないものである。

しかし彼ら 日向達5人には“親友”と呼び合える友達がお互いに4人もいる。

それは今も これまでも これからも 変わることのない関係だと誰も疑いはしなかった。

今のこの関係をいつまでも続けられると誰もが信じ続けていた。

ただ1人。関係を創った眼帯の少年以外は……。

創られた関係でも良かった。

創られた関係でも楽しかった。

創られた関係でも 幸せだった。

記憶を持たない眼帯の彼にはそんな関係でも幸せで幸せで幸せで…
…何よりも温もりを持った場所だったのだ……。

だが彼はそんな関係を決別しなければいけない。

本当は彼もいつまでも彼らと一緒に笑いあいたい。

例え偽りの関係であっても彼はこの関係をいつまでも続けていたかった。

しかし騙し続けていたという【罪悪感】はそんな大切な気持ちをも打ち消してしまう。

だから彼は……。

「みなさんお別れです……。大好きでしたよ……」

“親友達”の前から消えていくのであった……。

第1章 “エピソード”

【 “別れ” 】

日向side

「みんな……」

俺達の言葉を聞いたチ工は涙ぐみながらそう呟く。

だけどその顔は輝きを放つ優しい笑顔。日常よりもほんの少しだけ綺麗な笑顔がそこにあった。

そんなチ工の笑顔を守っていききたいと俺達は改めて感じたのだった。

「……」

そしてそんなチエの笑顔と俺達を見ながらただ寂しげな表情を浮かべている人物が1人……。

俺達の親友　輝喜だ。

輝喜は俺達とは数メートル離れた場所でまるで空気のようにその場に馴染んでいる。

その姿に俺はすでに何かを感じていた。

手を伸ばしても届かないような暗闇の世界に輝喜が落ちていくような　そんな闇を感じた。

その刹那。

バラバラバラバラ　！！！！

突如として機械的な耳をつんざくような音と激しい旋風が俺達の間を駆け抜けた。

「な、なんだ!!??」

「きゃ　　っ!!!!」

真備の驚きの声。チエの叫び声が耳に届く。

そんな中俺は脚を踏ん張りながら吹き飛ばされないようにチエの腕をしっかり掴んだ。

「くっ!! 一体何が……!?!」

大分状況に慣れた俺がそう言いながら前を向く。

だがそこにはさっきまでの光景はなかった。

しかしそこには俺達の知っている人物が片手を挙げながら優しく微笑みかけていたのである。

俺は突風に靡くその人の金色の髪の毛がとても綺麗に感じていた…

…。

「Hey!! サッキブリデスネミナサン!!」

聞こえてきたのは片言で陽気な日本語。

それは俺達にとってはとても安心感を持てるものだった。

「ゲイル先生!!??」

「THAT RIGHT!! ソノトオリデス“マキビ”!!」

真備がいきなり目の前に現れた人物　ゲイル先生の名前を呼ぶと
ゲイル先生はそれに応えてさらなる笑顔を見せる。

そしてそのとき俺達はやっと気がついた。

ゲイル先生の後ろにある文明が作り上げた“空飛ぶ”鉄の塊を……。

「ヘリコプター……」

誰が呟いたのかはヘリの放つ轟音によりよく分からない。

ただと俺がいるこの位置からはゲイル先生の蒼い瞳。水城の乱れる長髪。刹那の少し切なげな表情。輝喜の闇に似た眼帯。

そして　ヘリコプターのボディに刻まれた時計の針でできた十字架とコックピットに乗る“デモナン”カイハーツ“キルデ”通称【デモン】の姿までしっかりと見ることができた。

「なんでヘリなんか……」

「バカね。そんなの決まってるでしょ……」

未だに状況をうまくのみこめていない真備が独り言のように呟く。

だが真備よりも大分頭が落ち着いている風によって真備の独り言は遮断された。

バラバラバラバラ ……！！！！

朝焼けとヘリコプターを背景に水城を筆頭とするデモン以外の4人がまるで映画の1シーンのようにこちらを見ている。

今回の闘いでお互いに傷ついた。

だがそれとは別に俺達と彼ら【時の番人】はまた別の繋がりを持っている。

特に目の前にいる“恩人”と顔を伏せている“親友”は俺のいや俺達の人生に新たな色を付け加えてくれた大切な人。

ただどさっきの真備の言葉を遮るように言った凧の言葉通り俺達は気付いていた。

1日中闘いにくれ徹夜明けの濛々とした頭でもそれくらいは気付いていた。

彼ら”時の番人”との……。

” 別れの時は近い ”

とつぶとを……。

「 ……日向 」

「 なんだ水城？ 」

水城は俺達に背中を見せるように後ろを向く。

そして問いかけるように語り始めた。

「……………貴様は俺の命令を守れるのか？」

それは誰に問いかけたのか？

いや。おそらく俺に対して言ったのには間違いはないと思う。

だけど俺にはその言葉は俺だけに問いかけたものではない気がした。

そして俺から見た後ろを向いた水城が見つめていたのは“朝焼け”
と“空”だった……………。

「そんなの決まってるだろ。……………問題 nothingだ」

だから俺は口に馴染んだそのセリフを言うのに少しだけ戸惑う。

でもそんなこと関係なく水城は俺の解答に満足したようにふつと鼻
で1回笑うとそのままへりに乗り込んでいった。

「あ……………あのつ……………真備／＼／」

次にゲイル先生の金色の髪の毛とはまた違う水色の綺麗な長髪が摩く。

「どうかしたか刹那？」

顔を真つ赤にした刹那は真備から2メートルくらい離れた場所から真備に呼びかける。

対して真備はそんな刹那の様子を若干不思議そうにしながらも普通に返答した。

「いや……あの……なんていうか……／＼／」

「なんだよ。はっきり言えよ？」

手と手を後ろで組んでちよっともじもじとする刹那。

その姿はまさしく可愛らしい1人の女の子だった。

「……もしかして」

「セツちゃんそうなんだ」

何かに感づいた感じで風が吹きチエは本当に嬉しそうに目を輝かせる。

そんな2人と目の前の刹那の姿を見て俺は首を傾げるのだった。

女の子ってよくわからないな……。

俺の女の子に対する疑問は尽きることはなかった。

そして刹那は真備と顔を合わせることもなくもじもじ喋り出す。

「お、俺は……体を動かすのは得意だけど……唇をふふふ震わせるのは苦手分野なんだ……／＼／」

「……それで？」

2人の目と目が合うことはない。

真備が合わせようとしても刹那は目を自分から反らしている。

「そ、それで……つまり……俺は口下手なんだ。だ、だけどこれだけは……言わせてくれ……／＼／」

「？」

つまり詰まりで話す刹那に不思議そうに首をひねる真備。

だが刹那の少し違う雰囲気にもまれて真備は黙って頷いた。

それを見た刹那は大きく深呼吸をする。なぜかしら頬の赤みが増しているように感じた。

刹那はもじもじするのを止めるとその場に直立する。

だけどそれでも真備の顔は見れずそのまま顔を合わせることなく咳くように言った。

「その……ありがとな」

「へ？」

聞こえなかったのか。はたまた本気で分からなかったのか真備はそんなすつとんきよんな声を出した。

だが刹那は聞こえなかった方に受け取ったのか今度は顔全部を真っ赤にして真備の顔を直視し叫ぶように言い放った。

「助けてくれてありがとって言ったんだよ……！！！！！！！！！！」

「うっ！？」

突然の刹那の叫び声に真備は驚いてのけぞる。

そして言い放った刹那の方はといえば……。

「じゃっ……じゃあそういうことだからな……！」

やけくそのように真備にそう言つと逃げるようにへりへと乗り込ん

で行った。

1人また1人とへりの中へと姿を消していく中俺達の瞳はある一点へと注がれる。

時間がすぎ大分朝焼けも高くなつたからか背景をそれにしている彼の顔は上手く見れなくなっていた。

だけど俺達にははっきりと見える。

いや見えなくても分かるのだ。

長年“親友”をやってきた俺達には……。

「輝喜……」

「はい。なんですか？」

声を低めて俺は彼の名前を呼ぶ。

すると彼は日常では見せてくれなかった素の彼の丁寧な口調で応えた。

「コウ君……」

俺のすぐ隣から切なげな涙ぐんだ声が俺の耳に届く。

それは水城に見せた凜としたカツコイい彼女とはまた違う儂げで壊れそうな少女の声だった。

「知恵理……」

今度は前のほうから切なげな声が聞こえてくる。

それはチエとは違う勝手に俺達のもとから離れていくという罪悪感からきたものだと思われる輝喜の声。

そんな中俺は我慢しきれずに輝喜に問いかけた。

「……輝喜。俺達と一緒に来ないか？」

それは輝喜への誘惑の一言。そして俺達の願望の一言だった。

俺の問いかけに輝喜は表情こそ見えないが動揺したように感じた。

「そうよ輝喜。あたし達は何も気にしてないから」

「お前は俺達の親友。俺達と一緒にいるのは当たり前だろ」

さらに俺の言葉に便乗するように凧と真備が輝喜に追加攻撃を与える。

俺の目には輝喜の動揺が増したように見えた。

そして……。

「コウ君。あの楽しかった場所に帰る。ね？」

俺の隣からチエの最高の笑顔と一緒に何か力強い言葉がかけられる。

普通ならばここまで言われれば堕ちてしまっただろう。

それは輝喜も例外ではないらしく輝喜の出す雰囲気は動揺の色一色のみ。

俺達はその雰囲気になんか安心しきっていた。

だけども……。

「……俺はもうあなた方と一緒にはいられません」

輝喜の口から出てきたのははっきりとした拒絶の言葉だった。

「え？コウ……君？」

チエの信じられないという驚きの声がへりの轟音の中こだまする。

だがチエの心情は俺達全員の心情でもあった。

「……な、なに言っただよ……輝喜？」

苦笑いの表情がひしゃげてしまっている真備。

だが輝喜はそんなチエや真備や俺達を無視するとへりに向かって歩き出した。

「ま……待てよ輝喜……！」

「行かせないわよ……！」

それを見た俺はチエが握りしめる袖を少しだけ無理やりはがし尻は唇を噛み締めて輝喜の方へと駆け出す。

俺達は輝言のその頬に一発いれないと気が済まなかった。

シュツ！！！シュツ！！！

だが俺達の願いは叶うことはなかった。

空気を引き裂いて何かが飛んでくる音。

それと同時に俺達は何か目に見えない何かに閉じこめられる。

俺はこの何か いやこの“結界”を身を持って知っていた。

そしてこれを作り出した人物のことも……。

「ゲイル先生……！！」

「何すんのおゲイル先生！！」

俺達はゲイル先生の放ったメスの魂狩“執刀”が造り出して【治癒結界】に閉じ込められたのだ。

「……イッテクダサイ」

「……すみません。ありがとうございますゲイル先生」

ゲイル先生は苦虫を噛むような表情でそう言い輝喜は後ろを向いて表情は掴めないが苦しそうな声でそれに返していた。

そして輝喜はついにへりに歩き出す。

「ふざけんな輝喜！……！」

「あんだ…許さないわよ……！」

「コウ君…どうして……！」

真備が怒りで叫び尻が目を腫らしながら言い放ちチエが涙を流しながら呟く。

治癒境界から出れないそんな俺達に輝喜はへりに乗り込む前に振り返った。

「凧…真備…知恵理…日向」

1人1人俺達の名前を呼ぶ輝喜……。

そんな輝喜の表情はへりの日陰により朝焼けで見えなかったが今はしっかりと見えていた。

「みなさんお別れです……。大好きでしたよ……」

そう言った輝喜は切なげな笑顔で涙を流していた。

そしてそんな輝喜がそのままへりに乗り込むと彼と水城と刹那を乗せたへりは天高くへと飛翔していった……。

「問題 exist」だ。このバカやるーが……」

歯をかみしめながら俺はその場へと崩れ落ちる。

そして頬を何か温かいものが流れ落ちるのを感じるのだった……。

悶side

「はい。すみません今回は捕らえることができませんでした……」

ユニオンクルーズの本部へと連絡する俺は少し小高い丘の頂上から朝焼けを眺めている。

腕には鉄でできた義手の魂狩“地獄の門”そしてそんな俺の頭上を一機のへりが通り過ぎていった。

「……今“時の番人”の生存を確認しました」

へりが通りすぎる瞬間こちらを睨みつける黒の長髪の男を見た気もするがおそらく気のせいだろう。

そう思いながら俺はふつと鼻で笑う。

そして俺に新たな指示が下った。

「【？(クインティ)】をこちらにですか……」

その指示は俺達ユニオンクルーズそれに日向達には大きな意味を持つ。

そして 時の番人にも同等のことが言えた。

「【？）クマトロ）】了解しました……」

少しだけあくまで少しだけ俺はため息を吐くと手に持った携帯の電源を切る。

そして上がったばかりの朝焼けを眺めながら俺は少し楽な格好になりその場に腰を下ろした。

「まさかこんなに早いとはな……」

一言呟き俺は目を閉じる。

「二人目の“チルドレン”投入だな……」

目を閉じることで朝焼けの光を遮断し闇へと自らを誘つと俺は呟く。
そんな俺の左手にはキラキラと輝く“戦闘義手” 肩まであるその機械の下には……。

【？】の刺青が刻まれていた。

第1章【時の番人編】完

全員『任せろ(てください)』

作「よっしゃー!!じゃあ頑張っていくか!!」

じゃあ次回予告っていうか次章予告!!!!!!

謎の言葉を残す悶に悲しみにくれる日向達!!

そんな日向達の前に新たなる敵が現れる!!

果たして彼らの正体とは……??

次章【異端者編】

日「問題nothingだぜ!!」

作「じゃあこれからも……」

日「時の秒針……」

凧「異端者編を……」

真「よろしく……」

輝「お願いします!!」

知「待ってまーす」

次回に続く!!!!!!

予告話 異端者編

あの事件から2週間後

「 守護者となれ ” か ……」

「 ヒナ君 どうしたの? 」

日向と知恵理の2人に

「……いや。問題 nothing だよチエ」

「……心配させないでね」

新たなる脅威が迫ろうとしていた

時の秒針”第二章”

【異端者編】

舞台は時の番人との知恵理奪還作戦から半月後。

日向達はあの日を忘れることなく平穏な日々を送っていた。

太陽のような笑顔を持つ少年のことを忘れることができずに……。

「へ〜ここが桜時市か〜」

「……あんまりはしゃぐんじゃないよ【瑠奈】」

そんな彼らに……。

「分かってますって。あなた方の“復讐”は必ず成功させてみせますよ」

……偽りの平和な世界をぶち壊す。

新たな“敵”が迫ろうとした……。

「貴様等への復讐……それが俺達の存在意義だ!!」

それを迎え撃つのは……。

「てめーら……俺の親友に手を出したらどうなるのかわかってんのか?」

「あたし達を敵にしたこと……後悔させてあげるわ」

「チエを傷つける者……それは俺達の敵だ!! 異端者!!」

時の少女の守護者であると誓った3人の戦士。

「さあパーティーの始まりだ!!」

「あなた達はあたしが断罪する!!」

「問題 nothing……地獄に堕ちろ!!」

彼らは護る

大切な親友を

愛しい人を

大切な人を守るために紅の翼を広げ飛翔する紅翼の天使“不知火日向”

「問題 nothing。お前は俺が絶対守るから」

世界の命運を握る時をつかさりし心強き日向の幼馴染“姫ノ城知恵理”

「私はいつでもヒナ君を信じてるから」

大切な親友を護るために戦う“凧”と“真備”の双子陰陽師

「まったく……あなた達はあたしの大事な親友なのよ？」

「俺達の友情は決して崩れない……そうだろう？」

知恵理の時の力を狙う謎の転校生“李悶”

「ユニオンナンバーズの名のもとに必ず時の少女を手に入れる……」

「！」

新たなる因子転校生の“奈玖瑠”と“剛”

「転校してきた“佳那岸奈玖瑠”です」

「“羽柴剛”だ」

『……誰だっけ？』

そして失踪した日向の親友“美濃輝喜”

「……俺はもうあなた方と一緒にはいられません」

キーポイントは明かされる輝喜との出会いの物語。

” 下克上事件 ”

日向の過去を導くとされる謎の3つの言葉。

” 過去の家族 ”

” 現在の家族 ”

” 未来の家族 ”

重要人物の1人で日向達に近づいてくる赤髪美少女下級生
“天野うづめ”

「こんにちはわっす先輩方 “天野うづめ”と申しますっす」

そして失踪した親友の美濃輝喜と【時の番人】

「……不知火日向……奴は俺の言葉を守れるか」

「大丈夫ですよ水城。ヒナタンは必ずやるときはやる男ですよ……」

そしてそんな彼らに近付いてくるのは謎の組織……。

” 異端者 ”

「僕は今は攻めどきではないと思います……ギリギリで」

異端者を導く謎の知略の持ち主である少年。

“ 玖珂未 〓 瑠奈 〓 セイレン ”

「……………あんた誰よ？」

「んー僕としては僕の上にいる君が誰だっ
て思うんだけど……
ギリギリで」

出会ってはならない出会いをする“凧”と謎の少年“瑠奈”

その出会いがもたらすのは悲しみか？怒りか？はたまた

愛か？

「やっぱりこの位置が俺には一番落ち着きます」

「だろ輝言？じゃあ、久しぶりにあれ行こうぜ！」

そして“敵”を倒すために再び2人があいまみえる

「輝喜！！俺達がしなければいけないことは何だー！！」

「そんなの決まってますよね？ヒナタン」

時の少女を護るために……

『 肅正！！！！！！ 』

「 問題 nothingだ！！！！ 」

「 サジタリウス 射手座の矢は決して外しません！！！！ 」

過去を探す日向達

過去に捕らわれる異端者

2つの勢力が衝突したときにもたらされるものとはいったい………？

時の秒針“異端者編”

近日公開!!!

+++++

番外第巻話【曙】（前書き）

今回の番外編は次の章。つまり【異端者編】において重要なものでございます。

でも“前編”のこちらでは出てきません。

ただと過去中心のこの話では大量のキャラや設定が明かせるのでお楽しみください。

では本編へ（ ^ - ^ ）――旦

番外第壱話【曙】

あけほの
曙

意味は夜がほのぼのと明け始めること。

または夜明けの空が明るんできた時を現す言葉。

今回は“時の秒針”の過去の話を少しだけ明かそうと思う。

本編より少し外れた話と思うかもしれない。

かと言って日向の壮絶な過去とはあまり関係ない話かもしれない。

しかしこの話はまさしく時の秒針の“曙”と言ってもおかしくない話である。

時の秒針を語る上で通らなければいけない“道”

それを今回は特別に垣間見せましょう……。

舞台は 6年前の桜時市へ

??? side

チュンチュン

小鳥のさえずりが響き渡る朝。

その声を聞きながらとある少年が枕を抱きしめて布団にくるまりながら惰眠を貪っていた。

「（・・）zzz」

手入れ要らずの綺麗な黒髪にまるで雪のような白い肌。

「（・・）zzz」

少し小顔だが顔のパーツが綺麗に纏まった繊細な顔立ちに少し鋭い目。

「（・・）zzz」

その姿はまさしくカッコイイを地でいくような美少年　その姿はまさしく神に愛されたと言っても過言ではない。

そう、彼こそこの番外編かつ数年後には“時の秒針”の主人公になる少年。

不知火日向である。

「（・・）zzz」

だが、そんな完璧容姿の持ち主にも弱点がある。

それが朝。不知火日向が朝の早起きが苦手なのは数年前からまったく同じなのだ。

「（・・）zzz」

さてはて、今もぐっすりとふかーいふかーい眠りについている日向。

しかし、そんな日向に近づくと一つの影があった。

ギシ……ギシ……

「（・・）zzz」

ちなみに上の音は近づくと影の忍び足の音なので悪しからず。

変な想像をした人は　　「ごめんね？」

「（・・）zzz」

ていうかこの絵文字そろそろウザくなってきたでしょ？

でも再びごめんね　　この絵文字どうやったかは知らないけど日向の口から発せられてるんだよ。

だけど安心してな？そろそろ寝坊助ヒナタンを“あの人”が起こしますから。

「（・・）zzz」

ギシ……ギシ……

この小説においての最重要人物の1人で日向の兄貴分。

ギシ……ギシ……バツ!!!

ドシンッ!!!

「な、な、なんだ!？」

突如として布団を剥ぎ取られた日向はなす統べなく部屋の床に叩きつけられた。

そして驚きに満ち溢れた顔で辺りを見渡すと……。

「おい我が弟よ!!!そんなぜ ガメみたいな顔してないで目を覚ませ!!!」

日向の兄貴分で知恵理の兄である【姫ノ城空】が壮大に手を広げて人をポケ ン扱いしていた。

つか何で【ゼニメ】をチョイスしたんだよ。

「それは作者が水タイプを愛してるからだ!!」

さいですか。

話は変わりますが普段日向は現在のように知恵理に起こされてい
ますが……。

どうやら今回は空の嫌がらせで早めに起こされたようです。

ちなみに今日は、休!日!

これ以上に日向に対する嫌がらせはありませんね。

さて、そんな話はさておき話を戻しましょう。

「ふざけんなよ兄貴!!!!!!」

「かにははは！！そう怒こりなすんなって！！」

日向は休日昼飯が朝飯になるまで寝ている自分があまりに早く起こされたことに大爆発！！！

しかし、対して空はそれを見事に受け流していた。

世界広しと言えど日向をこう簡単にいなせるのは空だけである。

ん？風？この時点ではまだ出会ってないぞ。

その話は次回の話になるからまだ教えないよ〜だ。

「……………なあ兄貴、さっきから何自分でナレーション入れてんだよ？」

「禁則事項です」

「……………なんで俺この人慕ってるのかな？」

そう言いながら日向は額に手をおいて頭を抱えた。

ふっ、弟分よ精進しろよ。

ということと改めて自己紹介するぜ。

俺の名前は【姫ノ城空】現在の年齢は12歳、中学一年生だ。

で、知ってると思うけど現在は時の番人でチルドレン計画のNO.1【聖空の騎士】をやっている。

はっきり言ってこれ以上にならないほどバカげた計画だけど 俺はこいつと知恵理を守るために強くなるてはならない。

誰よりも 強く!!!!!!!!!!!!!!

「で、兄貴。今朝はなんでこんなに早く俺を起こしてきたんだ？」

「おっ!!! そうだそうだ」

未だに起こされたことを根に持っているのか日向が若干機嫌悪そうにそう尋ねてくる。

その声で俺は本来の目的を思い出すのだった。

「脱げ日向」

「……………は？」

俺の一言に固まる日向。

ん？服着替えるんならまずは服を脱ぐのは一般常識だよな？

「あ、兄貴……………お、俺はちょっと……………そういうことは……………」

「？」

なぜかしどろもどろになってそういう言葉を放つ日向に俺は首を傾げる。

こいつは何言ってるんだ？

「あーもう……………いいから脱げよ……………」

「ひっ……………兄貴……………ちょっとマジで勘弁して……………」

あまりに行動が遅い日向に痺れを切らした俺は日向がいつも着ているパジャマ（知恵理のプレゼント）に手をかけるが日向は頑になつてそれを拒んでくる。

この悪ガキ……いい加減にしろよ。

「いいから脱げ!!」

「止めてくれ兄貴!! 誰にも言わないから!!」

「つべこべ言わずに脱げばいいんだよ!」

「無理やりなんてダメだろ!?! いやっ!! 合法でもダメなんだけど!?!」

「お前が何で合法なんて言葉を知っているかなんて聞かないからとりあえず脱げ!!」

「だから兄貴は俺に何をさせたいんだよ!」

「んなもん（着替えて）外に行くためだろ」

「はっ!?! 真っ昼間から何させようとしてんだよ!?!」

「いいから脱げ!!」

「いっやだ〜!〜!」

トントン、ガチャッ

「ヒナ君起き……」

ナイスタイミングというかバッドタイミングというか。

ちょうどそのとき日向の部屋のドア律儀にノックしてから1人の少女が部屋に入ってきた。

日向同様に天か神に愛されたとしか思えない容姿に銀色の長髪。

そう、我が妹にして今作品のヒロイン【姫ノ城知恵理】である。

さてここが問題です。

只今俺は日向のベッド絡み合いながら日向の服を脱がそうとしている。

日向が暴れ出したせいで只今2人とも頬をつつすら紅くさせて息づかいも荒れ荒れ。

さらにお互いの服をはだけさせ俺が今は日向を押し倒している状態。

これを我が麗しの妹君に見せたらどうなるか？

そう、答えは簡単。

「……………ぐすっ」

泣きながら部屋を立ち去るのだ。

それも猛烈ダッシュで。

『じ、誤解だ〜！……………！』

そしてそれを追う俺と日向という図式が成り立つのであった。

この何気ない平凡(?)で平和すぎる朝。

この朝から始まる1日がこの物語の 曙 と言える1日の始まりだった。

世界すら巻き込むある少年の闘いの物語の……。

「あゝチエ? 機嫌直せよー?」

「そ、そつだぜ知恵理。日向なら問題nothingだから?」

あの後すぐに知恵理を追いかけた俺と日向は今不機嫌な知恵理の前で正座させられていた。

それは明らかにおかしい映像だった。

言うなればハムスターの威嚇にライオンが怖じ気づいたのと同じである。

食物連鎖無視ですね。

「あ、あの〜知恵理さん？」

「……なんでヒナ君なの？」

さらなる言い訳をしようとしたときいつものとは違う知恵理の凜とした声が響き渡ってきた。

「それはどういう意味で？」

「お兄ちゃんのごとは別に何も言わないよ？男の子が好きでも私の大好きなお兄ちゃんだから……」

「って！！まだ誤解してんのかよ!?!？」

「あ…兄貴…俺もどちらかと言うと兄貴のことは大好きだけど…
…やっぱり俺は女の子の方が好きだから…その…やっぱり…」

「ブルータスお前もか!？」

ていうかこの2人何なんだ!？会話の内容明らかに小2のものじゃないだろ!？

最近の小学生はそんなにマせてやがんのか!？

「……………で結局お前たちは何が言いたいんだ？」

『だから……ヒナ君（俺）は襲わないで（くれ）!!』

「襲つか——!!!!!!!!!!」

ちなみにこれから2人の誤解を解くのにさらに小1時間使用してしまっただけ……。

日向side

「兄貴？兄貴が同性愛者じゃないのは分かった」

「……その話まだひっぱるのかよ」

兄貴は未だに落ち込んでいるらしくそう言って地面に四つん這いになって落ち込んだ。

俺なんで本当にこの人を慕ってんのかな？

「なあ、兄貴落ち込んでないでまずは俺の質問に答えてくれよ？」

「喜んで!!」

俺の言葉にJapanese土下座みたいな格好をしていた兄貴は一気に立ち直った。

立ち上がった瞬間全身からキラキラオーラを出して白い歯をキラリと輝かせながら……。

そんな兄貴の行動にはツッコミどころ満載だけど。

「……………俺達はなんで街に来てるんだ？」

俺は敢えてスルーさせてもらうことにした。

「ん？そんなの決まってるじゃないか」

「……………理由は？」

俺は少し呆れ顔になりながらキラキラした兄貴にそう問いかける。

そして兄貴はさも当然のようにニヤリとした顔になって答えたのだ。
った。

「何となくだ」

「アホがこのクソ兄貴！！」

ドグシッ！！！！！！！

ふざけたことを言った兄貴に俺は思いつきりハイキックしたのだった。

皆さんお気づきでしょうが現在俺達は桜時市の繁華街いわゆる【街】と呼ばれる場所にいる。

チ工に対する誤解が解けた俺達はそのまま兄貴に着替えさせられかつ攫われて現在にいたる。

でもって着てみたのはいいがその理由が……まあ上記の通りだ。

ちなみに“お前小2のわりに大人びすぎだろ！？”という質問は却下する。

そんなもん“俺だから”としか答えられないからな。

「ヒナ君！！ヒナ君！！あそこの喫茶店のチーズケーキが美味しいって春姫お姉ちゃんが言ってたんだ」

「おー！それは俺も春姫から聞いたぞ。確かあそこのココアは絶品だつて……行くか！！」

このころからド天然なチエのKY発言に乗っかる兄貴。

だが俺は全力でそれを阻止した。

「はいストップ！！2人共落ち着け！！」

「どうした日向？お前甘いもの好きだろ？」

「そつだよヒナ君？この間のバレンタインデーも貰つこチョコ全力で食べてたよね？」

いや確かにこの間のバレンタインデーは酷かった。

家を出ると近所のお姉さんという名前のおばちゃんズに捕まって入れ食い状態（？）

学校に行ったらクラスの女の子からチョコレートの雨霰……。

そんで家に帰えつたら帰つたで口の中甘々なのにチエにあぐんでチョコを食べさせられるし。

それでもって春姫姉ちゃんが段ボールでチョコ贈ってきたときはマジで死ぬかと思った。

ん“春姫姉ちゃん”？

いけね！！そんな話してる場合じゃなかった！！

確かに俺は甘いもの大好きさ！！それは間違いない。

だけど問題は……。

「あそこはランジェリーショップだ！！」

あまりにバカバカしいかつ天然（1人はただの馬鹿）な2人に俺は無理やり行く手を阻んだ。

ていうか喫茶店とランジェリーショップを間違えるってどういふことだよ！？

《あらあら。ワタクシは何も知りませんわよ？》

一瞬にして頭の中に出てきた俺と兄貴のバイト先のお嬢様先輩（悪戯好き）

そうかあの人か！！！！

偶にふらっと遊びに来てはチエを連れ出して何をしてるのかと思ったら……あの人チエで遊んでやがったな！？

いや……むしろ俺で遊んでやがるのかあの方は！！

くそっ！！ただでさえ天然ホニヤニヤなチエだけでも俺の気苦労は絶えないのにあの妹あってあの兄ありって感じのただの馬鹿兄貴シスコをも焚きつけやがって！！

あの方は俺を過労死させるつもりか！？

《まあまあ。日向もそんな年で過労死だなんて……》

頼む……誰か俺の頭の中に響いてくる謀略お嬢様の声を止めてくれ……。

「どうしたのヒナ君？顔色が悪いよ？」

「そつだぜ日向？いったいどうしたというんだ？」

「頼むからそつちの天然ボケ兄妹……口を開かないでくれ……」

俺の気持ちを察しない天然兄妹はただ悶えることしかできない俺に普通の言葉をかけてくるのだった。

俺はこれからもこいつらに振り回されるんだろうな……。

日向の考え……それは平和という何よりも幸せなことである。

だが日向はこのとき気付いていなかった。

数年後。その幸せが最悪の形で崩れさることを……。

だがそんなことを微塵も思っていなかった日向の1日はゆるり過ぎ
ていくのだった……。

空 side

「日向。俺ちょっとあそこにあるマッ で昼飯買ってくるから」
のベンチで待っていてくれ」

街の探索を始めて早数時間たったころ昼飯どきなので俺は知恵理
を日向に任して ツクに昼飯を買いに行くことにした。

ちなみに誘拐の心配はしていない。なぜなら日向はそこいらの誘拐
犯よりも遥かに強いからだ。

「兄貴……いくら俺でもチエを護りながら喧嘩で勝てるか分からね
ーぞ?」

「大丈夫だって。いざとなったら飛んで逃げればいいだろ【紅翼の
天使】様?」

「……街中でその名前を出すなよ」

知恵理には聞こえないようにこそこそと話す俺達。

だけど本当に俺は日向のことを信頼している。

日向のやつは俺のことをシスコンと呼びやがるがそれは違う。

俺はシスコンでありブラコンなのだ。

「……いいか日向？俺はお前のことを信頼しかつ大好きだからお前に俺の大切な妹を託すんだ。お前が強いことは知っている。お前がやるときはやる奴であることも知っている。だから俺はお前だからこそ知恵理を頼めるんだ。お前も俺のことを信頼してくれ」

俺は俺より20センチ近く身長が低い日向の両肩に正面から両手を置いていつも以上に真剣な思いでそう伝える。

すると日向の方も俺の言葉を真剣に聞いてくれて何か決意したような顔になった。

「分かったよ兄貴……俺も兄貴の信頼を全力でこの身に受けるよ……」

自分の思いが詰まったその言葉を言い放った日向は最後に片目を瞑って右手の親指を立てる。

「問題 nothing だろ？」

そして最後に日向の口から放たれたのは俺が普段から使っている口癖。

それを見た俺は嬉しく鼻で1回笑うと日向を習って片目を瞑り右手の親指を立てた。

「ああ。問題 nothing」

そして最後にお互い親指を立てた右手の拳と拳を合わせて笑みを浮かべる。

「むー2人だけズルいー！！知恵理もやるー！！」

……どうやら我らがお姫様の機嫌を損ねてしまったみたいだ。

知恵理の声に俺達が振り返るとそこには頬を風船のように膨らませた我らがお姫様がいた。

だがその姿は容姿的にも仕草的にもただただキュートでしかない。

さすがは我が銀髪の麗しい妹……末恐ろしいぜ。

「日向……どうやらあの人間核兵器には俺は力不足のようだ……」

「は？まさか兄貴俺を見捨てるのか！？」

「言ったはずだ。俺はお前を信頼していると」

「それちょっと違うね！？」

「問題 nothingだ！！」

俺は最後にそう言つと全力疾走で駆け出した。

「ズリーゾー！！兄貴ー！！」

「あばよー！！とっつぁーん！！」

そう言いながら全力疾走を緩めることなく駆け続ける俺だが油断はできない。

なんせ日向の足の速さはバイト先でも群を抜いて速く素早しっこいからだ。

「兄貴！！覚えとけよ！！」

あらかた走った俺の耳にどうやら諦めたらしい日向の音が響く。

それを聞いた俺は走りながら首だけ後ろに向けた。

「ねーねーヒナ君！！さっきお兄ちゃんとやってた遊びはな〜に？」

「あれは遊びじゃなくて男同士の約束だ！！だから女のチエには出
来ないんだよ！！」

「むー……じゃあ朝お兄ちゃんとやりかけてたあの遊びしょ」

「もっとダメだ！……！」

そこには知恵理に抱きつかれて何とも羨ましい状態になっている日向がいた。

ていつかあの年でリア充って将来はどうなるんだ？

できれば女ったらしにならないことを祈るぜ。

《俺も兄貴の信頼を全力でこの身に受けるよ》

そのとき日向のさっきの言葉が頭に浮かんできて俺の頭に浮かんだ将来女ったらしになった日向の姿が打ち消される。

あの真っ直ぐで素直で純粋な日向からはどうしても将来そんなふうになるとは思えなくなったのだ。

「強く……真っ直ぐに育てよ……日向」

走りながら俺は俺が認めた最高の少年にそう語りかける。

それは俺の願いであり望みだった。

「あいつはどうしてるのかな？」

それと同時に俺の頭の中には俺が認めたもう1人の最高の少年の顔が思い浮かぶ。

孤児院にいたころに日向と知恵理の2人をいつも引っ張っていたアルピノで全身真っ白の少年。

俺を兄貴と慕ってくるたもう1人の少年の姿が……。

「【大和】お前は今幸せに過ごせているか？」

それも俺の願いであり望みだった。

「いらっしゃいませ」

マクに入った瞬間に俺はマック（あーもう面倒い）の店員さんに
そう挨拶される。

ドラ エ風に言うとモンスター《マックの店員》が現れたってこ
ろか。

だったらこっちには選択権が現れるってわけだな。

「こっげき（攻撃）」

「まほう（魔法）」

「へんとう（返答）」

「どぶぐ（道具）」

「にげる（逃げる）」

うん……こんなところかな。

とりあえずこの中から一番安全なのは「へんとう」だけど。それじゃああんまし面白くない。

俺は常にユニークを求める人間だからこれはだめだ。

というわけで「へんとう」は却下。

次に安全なのは「にげる」だな。

だけどこれを使用すると同時にこの店の俺に対する好感度は火星あたりまで吹っ飛ぶから却下。

てわけで残ったのは「こっげき」「まほう」「どつぐ」だけど……。

まず「まほう」は使えないから却下。

……魔法っぽいことならできるけどそれを使ったらこの店が潰れち

まう。

そして「こっげき」も同じ理由で却下。

俺がこの人を攻撃しちまうとこの人の人生 - T H A E N D - な上
俺は一生日向と知恵理に会えなくなっちまう。

そんなの俺が淋しすぎて死んじゃまうわ！！

さて最後に残ったのは「どっぐ」だな。

ちなみに今俺が持っているのは「さいふ」 o n l y

つまり「さいふ」でできることそれは……。

そう【買い物】だ。

てなわけですっそくレジに行ってハアンバーガーを買いにいかせていたどころ。

ん？なんで買い物するだけでここまで長々と話を延ばしたがって？

そんなのノリに決まってるだろ！！

いつもは日向が俺にハイキックするけど今はその日向もない！！

だから今この物語は俺の天下なんだ！！

「あんださっきから邪魔なんだけど？」

突如として俺の真後ろからかかった可愛らしい声に俺の心は深く傷ついた。

だけどそんなことを知らない声の主はさらなる追撃を開始してきた。

「ちょっとあんた聞いてんの！？あたしは邪魔って言うてんのよ！」

「そして俺は新たな境地に至りそうになった」

さてなぜ俺は声の主の言葉を無視してこんなことを言ったかって？

それは声の主を確かめるために振り返ったら幼稚園児くらいの茶髪ショートカットで知恵理並みに可愛い少女がいたからだ。

はつきり言っけてロリに目覚めそうなくらいに激可愛いから新たな境地に至りそうになった。

「な、何見てんのよ……」

そしてこの目の前の少女はなんと言っけても……。

「べ、別にあんたが全部悪いなんて言っけてないのよ！…ただあたしの目の前にあんたがいたから……だからただちよつと横にずれてほしかっただけなのよ！…」

「ツンデレだな」

そうツンデレなのだ。

目の前の少女は世にも珍しい見た目少女のツンデレなのだ。

これほど珍しい少女は今までいただろうか？

答えは否！！！！

これほどまでの破壊力を持つ少女は俺の知る限り2人しかいない。

お嬢様キャラの雲雀春姫と天然妹キャラの知恵理の2人だ。

まさかあの2人並みの破壊力を持つ少女がこんなところにいたなんて……。

でもとりあえずこれだけは言っておこう。

「萌だな」

「そうだな」

そのとき俺の真横から俺の意見に同伴してくれる声が現れた。

現すとしたら大人の女性の声。高くなくすこしだけ低めの声といっ

ていい。

俺はその声の主を確かめるために横を向いた。

「どうもこんにちは格好いい兄ちゃん」

するとそこには茶色の髪をスポーツガリにした見た目小学校4年ぐらいのがたいのいい少年がいた。

若干髪の色とかが目の前にいる幼女と似ている気もするな。

「あ！！真備！！あんたどこ行ってたのよ！？」

「はあ！？迷子になってたのはそっちだろ！？」

突然目の前で喧嘩を始める見た目幼女の可愛らしい少女とがたいのいい格好いい少年。

やっぱり2人は知り合いみたいだ。

ていつかマツクの入り口なんかで喧嘩すんなよ。

喧嘩を止めなくては！！

あまりにヤバい状況だったので俺はそう決意した。

「まあまあ落ち着けて。こんなところで喧嘩すんなよな？」

『よけいなお世話だ！！！！』

……俺は喧嘩を止めようとしただけなのに。

なんだこの扱いは！？

あまりの扱いのひどさにへこたれてしまいそうな俺……。

だが次に聞こえてきた言葉は俺の精神をこちら側に戻したただけでなくこの場にいる全てを驚愕におとしいれた。

「あゝ！！もう！！なんであなたは分からないのよこの……【馬鹿弟】……！！」

「んだと！？ナギねえこそ少しは【姉】らしくしゃがねってんだ！
」

その場が静まり返った気がした。

比喩でも例えでもなくまさしく静まり返ったというに相応しい。

俺も最初に挨拶してきて下さった店員さんもあんぐりと口を開ける
ことしかできなかった。

「だいたいなんでこんなマツクなんかにあんたいんのよ!？」

「え!?!ここは図書館じゃなかったのか!？」

そんな空気の中でも未だにあーだこーだと言い争いを続ける2人…
…。

いや今の発言にも充分ツツコムところあったんだけどここは敢えて
スルーの方向でいく。

てなわけで俺がこの場にいる皆さんの気持ちを代表して聞くことに
する。

まさか本当に姉弟じゃないだろうし……大丈夫だよな？

「あのつかぬことお聞きしたいのですが……」

『何よ(だ)！?』

異口同音で返してくる2人に俺は口を開いた。

「あなた方のご関係は？」

俺がそう聞いた瞬間。2人は一瞬キョトンとした顔になったがすぐに少年の方はニヤニヤと少女の方はかなり綺麗な笑顔で迫ってきた。そのただならぬ空気に俺はゴクリと唾をのみこんだ。

「あらら〜？それはもしかしてあたしの身長が平均より《か！！な
！！り！！》小さいことを言ってるのかしら？」

「えっと……とりあえず質問を質問で返されたこととか《かなり》
の部分が強調されすぎとかそもそも答えになってないとかいろいろ

言いたいことがあるんですが……？」

「あははは 別にあたしは気にしてないわよ？ただあんたが……あたしを怒らせたっただけよ！……！」

次の瞬間。目の前にいた少女の姿が消える。

そして気付いたときには……。

「死に腐れ！……！！！」

ドグシッ！……！！！！！！

俺は可愛らしい幼女の空中回し蹴りを顔面にくらっていた。

その威力は能力者で驚異的身体能力を持つ日向のハイキック並みかそれ以上の威力。

残念ながら俺の意識があつたのはここまでだった。

日向 side

「ヒナ君！！こっちこっち」

「へいへい分かったからそんな慌てんなってチエ」

こんにちは皆さん不知火日向です。

兄貴がマツクに俺達の昼飯を買いに行ってから数分たちましたが…
…。

ただいまチエに手を引かれながら街を走っています。

で、なんでこんなことになったかと言いますと……。

「ヒナ君 さっき見たネコちゃん本当に可愛かったんだよ」

「そうなんだー（棒読み）」

まあ……チエの言葉の通りチエが何か超可愛い猫を見つけたらしく
それを探しているってわけだ。

いったい俺は何をやってるんだろっな？

だいたい男の俺はそんな可愛いものなんて興味ないしそれにチエが猫が好きな理由がまた……。

《寝ているときのヒナ君でネコちゃんみたいだね？》

そう言われたのは桜時学園に入学したての去年4月。初めてチエが朝起こしにきてくれたときだった。

そんな感じでそれ以降チエは猫に対して異様なまでの執着をみせるようになったのだ。

だからこの状態は俺にとってかなり微妙な状態なのである。

「はあー……」

それに付け加えて俺の悩みはもう1つあった。

それは後ろから感じる気配と不穏な動きをする1人の人物……。

初めてではない。むしろこれで何回目になるか分からないくらいだ。
なぜならまだほんの若い少女とはいえチエはまるで天か神に愛され
たとしか思えない容姿を持った美少女。

よからぬことを考える人は何人もいた。

ただどそのたびに俺もしくは兄貴がチエに気付かれないように処理
してきたのだ。

「ヒナ君どうしたの？」

「あー！あそこにネコちゃんがいるー！」

「えー！どこどこー！？」

だからこのことはチエに気付かれないように処理しなければいけな
いけど……。

チエのやつ俺の手を離そうとしないんだよ。

「すまんチエ。どうやら見間違いのようだ」

「ええー」

んーどうしたもんか……。

そのとき運良く俺とチエの歩く先から1人の人物が歩いてきた。

俺のバイト先の先輩の1人だ。

「ラッキー」

俺はチエに聞こえないように小さくそう呟くと率先してチエの手を引いて彼に近付いていく。

そしてチエの手を引いて彼とすれ違う瞬間に……。

「問題 exist (存在する)」

そう呟いたのだった。

????side

「はあ…はあ…あの子可愛いなあ／／」

あのくりくりとしたつぶらな瞳。

白百合のように真っ白に透き通るような肌。

サラサラとした可憐な銀色の髪の毛。

あんな可愛い子なかないよな／／

しかも周りにはまだ小学校低学年くらいのナヨナヨしたひ弱そうな男の子だけで保護者らしき大人はいない。

これは攫ってくれと言ってるようなものだろ。

いひひひっだったらお望み通り僕が攫ってあげるよ。

そして攫った上でいろいろな服に着替えさせて…グフフッ／／

「待っててね僕のお人形ちゃん／＼／」

ウヒヒヒヒヒヒッ！！！！！！！

ガンッ！！

「うっ！？」

突如として変態の首筋の頸動脈に後ろから手刀が打ち込まれる。

「……これは問題の域を越えているだろう」

そして呆れた声を出しながら1人の男が気絶した変態を真上から見下ろす。

男にしては長い黒髪に黒を主体とした服。

そして変態を見下ろす彼の顔　無表情なその顔は異常なほど特異だった。

漆黒の服と漆黒の髪を靡かせながら無表情で敵を斬り裂くその姿。

それに彼の能力を合わせて戦場の人々は恐怖と異見の念を持って彼をこう呼ぶ。

番外第弐話【暁】に続く。

番外第貳話【暁】（前書き）

すみません。今回は書き上げるのにだいぶ時間がかかってしまいました。

しかも最近では番外編の

【時の秒針 万葉集】

の方に時間をかけてしまいました。――

あと一つだけこの話を読む上での注意を。

本編中の【問題 nothing】は日向のセリフではなく空のセリフなのでご注意ください。

では本編へ（＾・＾）――旦々

番外第貳話【暁】

空 side

「で！！あたしと真備は双子の姉弟で2人とも桜時学園の小等部2年！！分かったかしら！？」

「い、イエスマム」

俺は何故かは分からないが現在見た目幼女の少女に説教されている。そして俺の横では彼女の双子の弟である見た目小学4年ぐらいの少年がこのシニールな光景に苦笑いしていた。

正直なんだこれは！？って状況だ。

「ふうーお腹もすいたしこんなもんでいいかしらね」どつやらお説教は終わりみたいだ。

そのまま少女はハンバーガーの注文をしにカウンターに向かっていた。

「なあ？」

「どうかしたっすか？」

少女にお許しを貰った俺は隣でずっと立ちすくんでいた少女の弟に話しかけた。

「お前いつもあんな攻撃受けたり説教されたりで肩身が狭いと感じたことはないか？」

「……………」

俺がそう問いかけると少年は黙ってしまふ。

だがその瞳は鋭く尖ったナイフのように俺を見る
いや寧ろ俺を睨んでいる。

だけど俺は言葉を続けた。

「俺にも妹と弟みたいな奴がいるんだけど…………お前の姉ちゃんみた
いなあそこまでバイオレンスじゃないぜ」

「……………」

少年の拳を握る力が強くなっていく。

もうここまでくれば目の前の少年の感情を読み取ることは簡単だった。

会って数十分のこの姉弟だが俺はこの2人に尊敬心すら湧いてきていた。

そして遂に少年は限界突破に達する。

「ふざけんなよ……………！！俺はお前の言っていることは全然分からねえがナギねえのことを馬鹿にしているのだけは分かる……………！！だけでも生憎と俺はお前の弟や妹よりナギねえの方が何倍もいい兄弟だと思っただよ……………！！□出しすんな……………！！！」

本当に……………本当に俺はこの双子の姉弟を尊敬するよ。

その言葉を聞いた俺は暖かい笑みを浮かべるとくしゃっと少年の頭をかき撫でた。

その行動に少年は呆然としてすまうもすぐに照れくさそうな顔を
して頬を赤く染めながら俺の手をはねのける。

「なななな何すんだよ!？」

慌てすぎて呂律が回ってない少年に俺は微笑ましさを感ぜられた。

「お前いい奴だな」

そして自然とそんな言葉が俺の口から発せられていたのだった。

「なななな何言っただやがんだよ!？」

「ん?そうだな……俺はお前が好きだったことだ。もちろんお前の
姉貴もな」

ニッコリと微笑みながら俺は少年に語りかける。

それは正真正銘の俺の本心だった。

俺はこの少年を気に入った　俺は真っ直ぐなこの少年のことを尊敬し日向と知恵理にもこんなふうに着けてもらいたいと思ったのだ。

「お前……俺のこと兄貴と呼ぶ気はないか？」

さらに饒舌になった俺は自然な流れでそう言う。

さらなる爆弾発言に少年は再び固まるもすぐに嬉しそうに鼻で笑って陽気な口調で口を開いた。

「残念だな兄ちゃん。俺の兄弟は今も昔もこれからもナギねえ１人だけだぜ！！」

それは俺にとつてはちよっぴり残念な返答で目の前の少年のまた新たな一面を見たかなりうれしい返答だった。

「そうか本心から残念だよ……俺はお前のその真っ直ぐなところを気に入ったんだけどな……」

「俺はさっきまであんたのことだい嫌いだった。だけど……今のあんたの不思議なところは案外好きだぜ？」

「ありがとな。もしかしたらお前達姉弟と俺の妹と弟分は同学年だから学校で会うかもしれない。そのときは仲良くしてくれよ？」

「ああ……さっきはあんなこと言って悪かったな」

「気にすんなくて……！」

俺のその言葉をきっかけに俺達はお互い笑いあう。

それは桜時市で日向達と笑いあったとき以外で初めてだったかもしれない……。

「それじゃあ元気に過ごせよ少年」

お互い笑いがおさまると俺は少年にそう笑いかけながら言う。

それに少年はしっかりと頷きながらニッシシと今日最高の笑顔をしてくれた。

そしてその笑顔を見ながら俺はその場を立ち去っていったのだった。

「あれ……もう帰えっちゃうんだ？」

マツクを出ようと入り口に向かっている最中に手にハンバーガーが乗ったお盆を持つ少女と会った。

俺は彼女の小さな肩に手をおくと彼女にしか聞こえないようにそつと呟いた。

「お前は俺と同じでいい弟を持つてるな」

すると彼女も俺の言葉にニヤリと笑みを浮かべると当たり前のように俺の言葉に返答をするのだった。

「当たり前でしょ。自慢の弟なんだから馬鹿にしたらはっ倒してたわ」

本当にこの双子に出会えて良かった。

その言葉が頭に浮かんできたのは必然なんだろうな。

「じゃあ元気でな」

「あんたもね」

そうやって俺は素晴らしい出会いをしたマツクを立ち去るのだった……。

風side

あたしはあのお兄さんに別れを告げた後すぐに真備のいるマツクの奥へと進んだ。

するとそこにはどこか嬉しそうな表情を浮かべながら頬杖をついている真備が椅子に座っていた。

あたしはその表情を見て真備の笑顔を久し振りに見た気がした。

「あんだうれしそうな顔してるわね。何かあった？」

あたしがそう問いかけると真備は満面の笑みを浮かべながら右手でピースを作り嬉しそうに語り出した。

「おうナギねえ！！実はさっきのカッコイい兄ちゃんが言ったんだけどさ！！あの兄ちゃんの妹と弟がなんと俺らと同じ年らしいんだ！！だから兄ちゃんがもしかしたら友達になれるかもって言うてくれただよ！！」

その純粹無垢な笑顔であたしに報告する真備を見ていたらあたしも自然に笑顔になる。

本当に馬鹿みたいに明るい奴なんだから……。

「そうね……あのお兄さんの妹と弟ならあたし達にも気軽に接してくれそうね」

「だろ？あー早く会いたいなそいつらに！！」

「ふふふ。そうね」

あたしと真備はそう言いながらハンバーガーを手に取る。

だけどあたし達はその間学校での生活が頭の中に入り込んできた。

【陰陽師】という家系を気味悪がり忌み嫌ってあたし達に誰も近付いてこない孤独な学校生活を……。

あたし達は孤独。 だけどあたし達だって友達が欲しい。

親友と呼びあえる友達を作って一緒に楽しい学園生活を謳歌したい。

されが今のあたし達の唯一にして絶対の望みだった。

「あー!!」

「ど、どうしたのよ真備？いきなり大声だして？」

突然大声で一言そう言った真備が椅子から立ち上がる。

いったいどうしたのよ!？

だけど真備の言葉はあたしにも衝動を与える衝撃の一言だった。

「あの兄ちゃんの名前聞くの忘れてた……」

「……………あっ!」

そういえばそうだったと今更思い出したあたしだが時すでに遅し。

あのお兄さんはマックを出て何処へと消えてしまっていた……。

「手遅れか……」

「そうね……しかもお兄さんの名前が分からないと妹さんや弟さんの名前も分からないわ……」

「マジかよ……」

まさかの事態にあたしと真備は呆然としてしまう。

あたしともあろうものがとんだ失態だったわ。

「はあー……どうやら友達ができるのはまだまだ先みたいね……」

「友達……」

どこか哀愁を漂わせながら呟く風にさっきまでの笑顔がなくなって悲しそうな表情を浮かべる真備。

その瞳には普通の小2の子供にはない孤独があった。

だが皆さんもご存知の通りこの日より約1年後彼ら双子と日向&知恵理は出会い様々な葛藤の上で親友と呼び合う中になる。

しかしこれより空が亡くなるまでの2年間。空は彼ら双子に会うことは1度もなかった。

ただどその話はまた別の機会ですとしよう。

「あっ……」

「今度は何!？」

落ち込んでいた2人だったが再び真備が何かを思い出し立ち上がる。
ただど真備の口から出た言葉はまたしても間抜けな話だった。

「あの兄ちゃん……何も買わずに出て行かなかったか……?」

「……あつ!？」

昔から変わらない羽前姉弟でした。

知恵理 s i d e

「そう落ち込むなってチエ。そろそろ兄貴も戻って来ると思うしな
?」

「……ぐすっ」

こんにちは知恵理です。現在私は可愛かったらしい猫を見つけれなかったためヒナ君に慰められながら手を引かれてもいた場所に帰っている途中です。

ヒナ君の手はとても温かくて私の悲しい気持ちを癒やしてくれました。

「ヒナ君……」

「分かってるって。だから泣かないでくれよ。な？」

言葉を交わさずともヒナ君は私が言いたいことがわかるみたい。

やっぱりヒナ君はすごい。

私を優しく包み込むヒナ君の手から伝わる手の温もりもヒナ君の心の温もりも私を安心させてくれるんだから……。

「うーん。どっちかな？」

さらに少しヒナ君に手を引かれて歩いたとき。だいぶ涙と一緒に悲

しい気持ちも薄れた私はヒナ君の声に立ち止まった。

どうやら道に迷ったみたい。

うう〜……ごめんなさいヒナ君……。

私達がこうして道に迷ってしまったのは完全に私のせいだ。

私がネコちゃんを追いかけなんてしなければな。

そう思うと私は少しシユンとした気持ちになって凹んでしまいました。

「……そんな落ち込むなってチエ」

落ち込んでしまった私にヒナ君は頭を撫でながらそう言うってくれる。

私はその暖かさに大きな安心感が生まれました。

髪を撫でられることってこんなに気持ち良かったんだと私はこのとき初めて思います。そしてそのときでした。

「よお！お前らこんなとこにいたのかよ！！」

『……………！！』

聞き覚えのあるその声に私とヒナ君は振り返る。

そこには私達の予想通りといえる人物にして私達のお兄ちゃん。

姫ノ城空がいました。

「お兄ちゃん！！」

「まったく……………お前らどこ行ってたんだよ」

ガバツ

お兄ちゃんは少し息を切らしながら私達のもとに駆け寄ってくると私とヒナ君を強く抱きしめる。

ヒナ君は少し戸惑ってるけど私はお兄ちゃんのその強くなく弱くもない抱きしめられ方に温かい温もりを感じました。

「あんまり心配かけせんよ……2人とも」

「……心配ないって兄貴。俺がついてたんだから」

「馬鹿だな日向。それでも心配するのが兄貴つてもんなんだよ」

ギョッ

ヒナ君の言葉にお兄ちゃんは少しだけ抱きしめる力を強くする。

街中に流れる人達の中。私達のそんな光景は異常だったかもしれませんが。

だけど私はこの時間が永遠に続けばいいと思いました。

永遠に……。

空 side

「兄貴……さすがに恥ずかしいからもう止めてくれ」

2人を抱きしめること数分そう言って日向が俺の抱き締める手を叩いてきた。

そんな日向の行動に俺はついついここが往来のど真ん中だということを忘れていたらしくこっぴどくかしくなり慌てて腕を放した。

「はははは……わりーな2人とも」

「はあー兄貴ともあるつものが何やってんだよ」

顔を少しだけ赤くした俺の言葉に日向はあきれながらもどこか満更じゃなさそうにそう応える。

だがそれに対して俺の妹である知恵理の方は少し残念そうな顔で俺の方を見つめていた。

「ん？どうかしたかチエ？」

「……あ。お兄ちゃん……うんうん何でもないよ」

いつもよりちょっと元気のない声に俺と日向は首を傾げる。

いつものチエなら日向と同じように顔を赤くして恥じらいながら俯いてしまうという何とも可愛らしい行動をすと思うんだが。

「お……おいチエ？どうかしたのか？」

「もう……。大丈夫だってヒナ君。心配し過ぎだよ？私は……大丈夫。……大丈夫……だから……」

少しずつ……少しずつ掠れていくチエの弱々しい声に日向は言葉を失ってしまう。

そしてその時のチエの表情。その表情はなぜかは分からないが。

涙を流しながら切なげに笑っていた。

「何もないって……何もないならなんでそんなに泣くんだよ……」

「……ぐすっ」

日向がチエの背中をさすりながら優しく問いかけるがチエは涙を拭うだけで何も応えない。

そんなチエにだんだん日向も俺とチエを交互に見ておろおろし始める。

たぶん俺に助けを求めていると思うんだけど。

すまん日向。俺もどうしたら分からないんだ。

日向同様。俺もいつもとは違うチエの様子におろおろするしかない。つた。

辺りに人が集まってくる。だが俺達はその場から動くことができない。

俺はこの場を切り抜けるために様々な考えを巡らせるも何も思い浮かばなかった。

だがそのとき。

「はあー……何やってんだよお前ら……」

「あらあら？何の大道芸かと思いましたがあなたの方でしたか……納得です」

俺達を助けてくれるありがたい救世主が現れたのだった。

「音弥”！！”春姫”！！」

そこにいた2人　少し長めの茶髪に綺麗な瞳を持つ格好いい（少年陰陽師の六合を小さくした感じ）少年と長髪の黒髪をポニーテールにした可愛い（同じく少女陰陽師の風音を小さくした感じ）少女の名前を俺が呼ぶと2人は俺達にニッコリと笑顔を見せてくれた。

「どじっしてお前らが？」

「……まあ。なんていうか……あれだ。あの……いわゆる……えっと
……その……」

「【デート】です」

「ううー……／／／」

歯切れの悪い音弥にさらにニッコリと笑顔を深めながらトドメをさす春姫。

だが実はこの2人は日向とチエと同じく”幼なじみ”でそれに付け加えて”恋人”関係なのだ。

「ばっ……!!お前なあーもうちょっとオブラートに包めよな!!」

「あらあら。わたくしは真実を告げただけですよ？」

「くっ……／／／でもな……／／／」

「……それともわたくしとデートだと知られるのが嫌だったのですか？」

涙目上目遣いで音弥を見上げる春姫。

その威力はまさしく核弾頭にも匹敵する。俺の知る限りチエと今日会った羽前の嬢ちゃん。そして彼女 ” 雲雀春姫 ” だけである。

そしてそんな核弾頭級の威力を持つ涙目上目遣いをまともにくらった音弥はというと 。

「……………」

あまりの出来事にフリーズしてしまっていた。

「あらあら」

「はぁー…あまり音弥を虐めんなよ春姫。音弥は俺の【親友】なんだから」

「ふふふ それ以前に音弥さんはわたくしの幼なじみで恋人なんですよ？」

「……………」【下S】が

ジト目で春姫を見つめながら俺は春姫の核心部分を突く。そしてそれに春姫は少し妖美な笑みを浮かべ音弥を見つめていた。

こんな奴に好かれちまった音弥も大変だな。

だが音弥を見つめながら妖美な笑みを浮かべる春姫。俺は彼女の瞳の先にとても深い愛情を見た気がした。

頬を綻ばせながら2人を見ていると。

「なあーチ工。俺が何かしたんなら謝るからさ？どうしたのかを教えてくださいませんか？」

「ぐすっ…ぐすっ…何も……ないもん……」

あの2人の未来を見てる気がした。

少し違う気もするがな。

「……………」

「あらあら。どうしたものでしょう……あは」

さらに数秒後。春姫は音弥を見つめた後何かを思いついたのかうれしそうにたずらつ子のような表情を浮かべた。そして未だに固まっ
つてしまっている音弥へと近づいていくと。

「いただきます」

「むぐっ!?!」

そのままの勢いで音弥の唇に口づけるのだった。

『ン…レロ…チュ…クチュ…クチュ…チュパ…チュパ…レロ…
』

音弥と春姫の繋がった口から官能的な音が辺り一面に木霊していく。

ていつかおいおい。こいつらわかってないのか?今俺達がいるこ
って。

『ヒューー』
『やるねー姉ちゃん』
『キヤーキヤーすつごおい!!』
『……くそ!!リア充なんて!!リア充なんて!!』
『トイレはいつたいたいどこなんだ!?!』
『……(ブシャアアア)!!』

街のだ真ん中。一番人が多い所なんだけど……。

あと突っ込みどころ満点なお前ら!!まず三番目のやつ。リア充は仕方ない諦めるんだ!!俺の身近にもいるからその気持ちはよくわかる!!だがここは抑えてくれ!!頼む!!さて次に四番目のやつ。トイレで何をする気だ?あまりこの小説でそんな発言は自重してもらいたい!!こっちはシリアスを多めにしたんだよ!?!そして最後五番目のやつ。と見せかけてその周りのやつら!!さっさと救急車呼べ!!そこに鼻血という名の出血多量で死にそうなやつがいるぞー!!……!!?????

『チュ……レロ……チュパ……キュポン』

「ぶはあ……ご馳走さま」

そしてカオスと化したこの場を創りあげた2人組はお互いの唇を離すのだった。

「っ……… / / / ! ? っ …… / / / ! ? 」

「あらあら」

唇が離れた瞬間音弥のほうは真っ赤に染まった顔がさらにリンゴのような綺麗な赤い色に染まりあがり春姫のほうはそれを見て再びいたずらっ子のような瞳で音弥を見つめていた。

思ったがお前ら本当に俺と同じ年の中1かよ？

なんかいろいろと 特に春姫の方マセすぎじゃないか？

俺は12歳らしからぬ行動をとる2人に若干呆れながらそう思った。そしてそのときようやく音弥の自我が戻ってきたらしく口を開くのだった。

「ひ…」ヒメ”？何をやってるんだ……？」

「ふふふ キ・ス」

「ぐはっ／＼／＼!?!?」

春姫の言葉に吐血する勢いで音弥は顔を真っ赤にさせながら崩落ちる。

ちなみに”ヒメ”ってのは音弥が春姫を呼ぶときの呼称である。春姫の姫からとったそうさだ。

「な…何てことするんだ…大体ここを何処だと…!?!?」

「ん…街中?」

「よし正解だヒメ。あとよく考えてみような? TPOという言葉
を?」

「…音弥さん。どついついことですか?」

「…ん」

周りを見回しながらそこまで言つと音弥は顎である一点を指す。

そこにはいたのは。

『『うう／＼……………／／／』』

顔を真っ赤に染め上げた日向とチエのまだ少し実際はかなり大人になっ
ていない2人だった。

その愛らしく可愛らしいまたウブで恥ずかしがる姿は思わず抱きしめ
たくなる程の破壊力をその身に宿していた。

「……………空」

「……………空さん」

と。そんな2人の姿に癒されていた俺に音弥と春姫の2人から声がか
かる。

その声に気づいた俺は声の主がいる方向へと振り返る。だがそこには
さっきまでとは違う。少し真剣な顔をした音弥と春姫がいた。

「……………え？」

そんな2人の急変ぶりに俺はポカんと呆然とした表情になってしま
うも2人の表情はそれでも変わることはなかった。

そして2人はまだまだ顔が真っ赤な染まりあがっている音弥が日向
の春姫がチエの手をそれぞれ握ると口を開く。

そこから出てきた言葉は俺の想像を上回る俺には思い付かない言葉
だった。

「……………まあ。少し強引だったけどな」

「ふふふ どうです空さん。これで知恵理さんも元気がでたのでは
ないでしょうか？」

「……………っ!？」

日向とチエには聞こえないように俺にだけそう呟くと2人は再び笑
顔を見せる。

その表情に俺はこの2人の凄さを改めて実感した。

「お前ら……………。チエを元気づけるためにわざわざ街中でキスマでし
てくれたのか……………」

「…………え／／／！？あーうん！！そんなだよ！！ははは…はははははは…………／／／」

「くすくす…………」

たぶん……。俺は2人を尊敬したと思う。

「うー／／／とにかく！！ヒメ！！知恵理ちゃんのこと頼んだよ／／／！？」

「ふふふ はいはいわかってましたよ」

顔を真っ赤にしながら音弥は日向の手を引き春姫にそう言って離れていく。

「少しだけ可愛らしいその姿に俺は親友であるこの少年」響理「音弥「オペリア」について行くのだった。」

「……ここまで来ればいいかしらね」

「お姉ちゃん？」

私はヒメお姉ちゃんと音弥お兄ちゃんの……あの……キキキ……キスシーンにヒナ君と一緒に頭が真っ白になっていたんだけど。

「……ほえ？……」

「あらあら」

気付いたら私は見たことない場所。

周りは住宅街だけど人の気配があまりない場所にいました。

突然のことに私は呆然とする私。

ただヒメお姉ちゃんはそんな私の両肩に手を置くと視線をまだ小さい私の体に合わせるように屈み込んで私にニッコリと笑いかけてました。

でもそんな笑みも一瞬のこと。

「知恵理さん」

笑顔はすぐにヒメお姉ちゃんは真面目な顔になり私の名前を呼びました。

その瞳はいつもとは違いお兄ちゃんやヒナ君が時々　最近は特によく　見る真剣なあ表情にそっくり。

私はその表情に体が固まってしまいそうでした。

「……一つ。お尋ねしてもよろしいですか？」

ヒメお姉ちゃんの声に私はただコクコクと首を縦に振る。

それを確認したらヒメお姉ちゃんは息を深く吐き出して「では……」と前置きを置くと。

「知恵理さん。あなたは空さんや日向さんに不満を感じてる……そうではありますか？」

私の今の心情の核心を突いてきました。

「ふえ！？な…なんでヒメお姉ちゃん？」

「あらあら やっぱりいつでも知恵理さんは可愛いですね で
も…質問に答えてもらってもよろしいですか？」

有無を言わせないという感じのヒメお姉ちゃんの言葉に私はたじたじになってしまう。

だから私はついに口を開いてしまいました。

ヒナ君とお兄ちゃん。2人に持つ思いを……。

「……ヒメお姉ちゃん」

「はい」

「ヒナ君とお兄ちゃん…私に隠れて何してるのか……知ってる？」

それは“疑問”じゃなくて“確認”のための言葉でした。

日向side

「兄貴？音弥さん？」

気がついたら俺はなぜか音弥さんと手をつないだ状態で”街”の中心である噴水の前にいた。

そして目の前では俺の手を引く音弥さんと兄貴が真剣な表情で何かを聞いている。

そんな2人に俺はそう声をかける。すると2人はこっちを振り返り俺の目線に合わせるように身を屈め俺と肩を組むようにして語りかけてきた。

「起きたか日向」

「よお日向。調子はもちろん問題nothingだろ？」

「……まあ大丈夫かな。それより2人して何やってんだよ？」

俺の言葉に兄貴と音弥さんは一度顔を見合わせると何やら黒い物体を俺に見せてくる。

それはつい先日技術局の局長である“デモンさん”が俺達に見せてくれたものとまったく同じものだった。だが俺は兄貴と音弥さんが取り出したそれに顔ひきつらせてしまう。

「……兄貴。音弥さん。なんで【盗聴器】なんて代物を持つてるのかな？」

『『盗聴のため』』

さすがはお互いを親友と呼び合うだけに兄貴と音弥さんの2人は寸分狂わぬ形でそう言ってくる。

そんな2人に俺は頭を抱えねのだった。

うん分かってる。そりゃ盗聴器なんだから盗聴するためにあることくらい分かってるぞ。

「兄貴…音弥さん…盗聴は世間一般ではどついう行為か知ってるか？」

『『……さあ？』』

再びシンクロした2人の言葉に俺は「はあ……」と深い溜め息をついた。

「……さあ？」
「じゃねーよ2人も！！いいか？盗聴はは・ん・ざ・いだー!？」

あまりの2人の非常識ぶりに俺は声を荒げてしまう。

だが2人　　といつか兄貴にはちよつと違つように解釈されてしまつたようだ。

「……なあ音弥。最近日向が俺にキツイこと言ってくるんだけど……これは所謂【反抗期】ってやつなのかな？」

「いや違うと思うぞ空。これは反抗期じゃない。そもそも時期も違うし……そうかあれだー！【ツン期】だー！」

「【ツン期】？聞いたことないな……音弥。それは問題 nothing なのか？」

「ああ問題 nothing だ。いいか空？ツン期ってのは所謂【ツンデレ】のツンの部分だ」

「なんとー！あの最近噂のあれですか！？……ということはこの後は……」

「その通りだ空。この後は来るぜ……【デレ期】が」

「日向のデレ期か！？それは何とも……

……いいー……！
「！……」

「だろ？だからそれまでの辛抱だ相棒！……！」

「分かった相棒！……！俺は日向のデレ期が来るまで待ち続けるぜ
！……！……」

「おう頑張れよ！……！……！」

「おう頑張るぜ！……！……！」

すみませんが先輩方。そろそろ突っ込ませてもらってもよろしいですか!?

「ええい!!突っ込みどころが多すぎて何から言ったら分からないけどとりあえずこれだけは言わせてもらっぜ!!　ち・が・う!!」

『『ええー!?!』』

「驚き方がオーバーリアクションすぎだ!?!つかいい加減に話を戻しやがれ!?!」

『『……それもそつだ』』

「忘れるな!!?!?!?!」

2人のシンクロしたボケに俺はゼーハーと息を荒げながら怒涛の突っ込みを繰り出した。

そして本来の目的を思い出した2人はというと俺の言葉に目的を思い出したらしく真剣な表情に栄転する　そのときだった。

音弥さんの持つ盗聴器から普段から聞き覚えのある彼女の声が聞こえてきたのは。

俺はその声を聞いた瞬間内側に秘めた何かがいっきにはじきとんだ気がした。

彼女の声 千工の声を聞いた瞬間に 。

『……………ヒメお姉ちゃん』

『はい』

『ヒナ君とお兄ちゃん…私に隠れて何してるのか……………知ってる?』

俺は盗聴器から伝わってきたその声に口を閉ざしてしまつた。だがそんな事は関係なしに千工と春姫姉ちゃんの会話は続いた。

『……………あらあら。わたくしは何も知りませんわよ?』

『……………ヒメお姉ちゃん。嘘ついてる』

『……………っ!?!?』

その言葉はあまりにも唐突。だが春姫姉ちゃんや俺達が驚きで息を呑むには十分すぎる言葉だった。

『……あらあら。どうしてそんなことを言うのかしら知恵理さん？』

『……ヒメお姉ちゃん。私のこと天然な女の子って思ってるでしょ？』

逆に聞く。それ以外の何者でもないだろ？

俺達の心が1つになった瞬間だった。

『ふふふ まあそれで合ってるけどね』

『分かってましたの？』

『うん。だってヒナ君たら時々私のこと天然娘って呼ぶんだよ？いくら私でもそこまで言われたら自覚しちゃっよ……』

つまり自覚した原因は俺だということか。

うれしいのか悲しいのかなんだか複雑な気分だ。

『……でもね。つい最近。本当について最近だけど私気がついたことがあるんだよヒメお姉ちゃん』

『……と言いますと?』

チエはそこまで言うと口を閉じてしまう。だけどそれも一瞬だけのこと。

チエはすぐに再び口を開き語り続けた。

『私ね“ヒナ君”のことにだけは敏感みたいなんだ』

その言葉は俺にも兄貴にも音弥さんにも意外すぎることだった。

『……え?それはいったいどういう……』

『例えばね。この間ヒナ君が落ち込んだことがあったんだ』

春姫姉ちゃんの言葉を遮りチエは口を開く。だがその口調はとても饒舌でとても嬉しそうに俺は感じた。

『その原因をねヒナ君は誰にも言わなかったの。だけどあれは絶対女の子関係で何かあったんだよ』

その言葉に兄貴と音弥さんは俺の方に振り返ると確認のためかただじっと俺を見つめてくる。

そんな視線（死線？）に俺は耐えられず白状した。

「……バレンタインデーに学校でチエからチョコレートもらえなかったから落ち込んでたんだ」

『……大当たり』

俺の言葉に兄貴と音弥さんは苦笑いを浮かべる。ちなみにチョコレートは家に帰った後チエにアーンして食べさせてもらいました。

『……だから。私お兄ちゃんが隠し事しても分からないんだけど』

ナ君が隠し事してると分かったっちゃうんだよ……』

その言葉は俺の中の何かを狂わせた気がした。

端から見ればいいことなのかもしれない。だけど俺にとってみればそれは死活問題だった。

チエは俺が隠し事してたら分かるって言った。それはもしかしたら【あの事】も俺が所属している【組織】の事もわかってしまうかもしれない。

俺はあそこには絶対チエを関わらせたくないのだ。

『……知恵理さん』

『ヒメお姉ちゃん。ヒナ君の秘密を教えてなんて言わないよ？どうせ教えてくれないと思うし……でもこれだけは教えてほしいの』

『……何ですか？』

チエの言葉に俺達はゴクリと喉を鳴らす。

次の言葉はいつたい何なのか想像もつかなかった。

『……………』

次の言葉を待つために俺達は口をチャックを閉ざしたように閉ざす。数秒たって数分たって数時間たって　俺はこのチエの言葉を待つ僅かな時間がそれくらいに永く感じた。

『……………ヒメお姉ちゃん』

そしてチエが再び口を開いたとき出てきた言葉は俺達の心を貫くのだった。

彼女の　チエの寂しげで優しい心を一言で表した言葉だったのだ。

『……ヒナ君とお兄ちゃん。無茶してませんか？』

『……っ！？』

チエのその問いかけは普段突然いなくなる俺達2人と一緒に過ごせない寂しい気持ちとそれに伴い俺達を心配する彼女の優しい気持ちが現れている。

そんなチエの問いかけに俺達は知らぬうちに。

「はあー……まああんなの聞いちまったら当然だな」

「うん。チエの言葉は俺達にはちょっと刺激が強すぎたよ……なあ兄貴」

「ああまっただ。こいつは問題nothingとは言えないな……」

瞳から大粒の涙を流していた。

だけど悲しさなんて一切感じない。俺達を感じるのはただただ心地いいだけの快樂だった。ある意味では不謹慎かもしれない。だけど

俺達はチエが与えてくれたその快樂に溺れてしまいそうになる。

流れる涙はたぶんそんな熱い快樂を抑えるための保冷剤。俺は勝手にそう解釈していた。

『あの2人なら心配いりませんよ知恵理さん。それは誰よりもあなたが一番よく分かっているはずですよ』

だから春姫姉ちゃんその言葉が聞こえたときには俺と兄貴の目の前は涙で何も見えなかった。

噴き上がる快樂を抑えるための大量の涙によって。

空side

「……とまあ。こんな感じだが2人はこれからどうするんだ？」

俺と日向がそれなりに涙を収めて落ち着いたとき。我が親友である音弥はそう切り出してくる。

だが確かにそれは的をえた言葉だった。

「……まあな。いままでこんなことなかったしな」

「うん。兄貴の言うとおりこんなこと俺も兄貴も初めてだし……」

俺の言葉に同意するよつに日向はそう言うと頭をクシャクシャとかきむしる。

そしてそんな俺達の様子を溜め息混じりに眺めていた音弥は胸元から銀色の細長いものを取り出すと戸惑いなく口に加えた。

「……音弥さん？」

不思議そうにその様子を眺める日向。そんな日向の隣にいる音弥は俺達の視線を受けながら目を瞑ると。

「ではお聞きください……」。

”永六輔”作詞

”いずみたく”作曲

「見上げてごらん夜の星を」

..... It's showtime

） ）
） ）
） ）
） ）
） ）
） ）
） ）
） ）
） ）

かぷつと音弥が取り出した銀色の細長いもの　つまりハーモニカに唇を当てると辺り一面に美しいハーモニーが響き渡り始めた。

その音は彼の澄み渡る心を表したかのような清く美しくそしてたくましい音色。

旋律は俺達の心の汚れを洗い流すかのような浄化の力を持っている。そう思えてしまうほど音弥の奏でる曲は俺達を虜にした。

） ）
） ）
） ）
） ）
） ）
） ）
） ）
） ）
） ）

気付けばまるで時が止まったかのように辺りは静まり返っている。

道行く人々は例外なく立ち止まり音色を耳が受け入れ心を浄化する。
これが【音の能力者】にして音楽のスペシャリストの力。俺達はそ
んな彼をこっ呼んでいる。

【”破壊の旋律”】

と。それが彼。音弥のもつ最高の力なのだ。

〜
〜
〜
〜
〜
〜
〜
…

「皆さん」静聴。ありがとうございました」

パチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチ

一礼してその場にいる人全員にそう言つと辺りからは溢れんばかり

の拍手が鳴り響く。

それはまさしく大喝采の印であった。

「……空…日向」

大喝采の拍手に応えるようにもう一度礼をした音弥は真剣な面持ちで俺達の名前を呼ぶと旋律を奏でたハーモニカを胸元に収める。

拍手もまばらになり音弥の曲を聞き惚れていた人々もだんだんと姿を消していきいつのまにか最初と同じように音弥の側には俺と日向しかいなくなっていた。

そして辺りがいつもの平凡な世界へと変わったとき隣にいた日向がそっと口を開いた。

「音弥さん？どうしてこの曲を……？」

元来から音弥は言葉で言い表しにくいことは音楽を使って表すことが多いがある。

それすなわち今回もおそらくそのパターンだということなのだ。

そしてその予想は見事に当たっていた。

「……これは俺が元気なかったときにヒメが歌ってくれた曲なんだ」

そう言った音弥の顔はとてもカッコ良く幸せそうに見えた。

だがアイドルにスカウトされるほどの容姿と歌唱力を持つ春姫に自分の為だけに歌ってもらったんなら仕方のないことだな。

でも。今の状況とこの歌は何の関係が。

「……音弥さん。つまりどういいうことですか？」

「お前も鈍いな。日向!!」

俺が心の中で疑問に思ったことを口に出す前に日向が同じことを音弥に尋ねると音弥は豪快にそう言いながら日向の肩を叩いた。

それに日向は少し拗ねたように唇を尖らせながら音弥を見ているがさすがに痛くなったのか十発目くらいになるとその場から無理やり逃げ出していた。

「音弥さん。俺小学2年生ですよ？もう少し手加減考えてくださいよ……」

「ははは すまんすまん。それはそうと話の腰を折っちまったな……」

音弥は楽しそうに笑いながら日向の頭をクシャツと撫でながらそう言つと今度は視線を俺に向ける。

その視線は俺に応えを求めているようだがあいにく俺も分からなかった。

だからゆっくりと首を横に振ると音弥は「兄弟揃って鈍感だな……」と苦笑いしながら呟いた。

「まったく。これから先2人で何人の女の子を泣かすのかね……いいか？2人とも。俺が言いたいのはな」

ガチャ！！

「ただいまんとひひ」

「おかえりリカルなのは」

「……なんでこの天然兄妹はこんなにもレベルが低いんだよ」

こんばんは日向です。えーまずは状況を確認したほうがいいかな？

冒頭のセリフだけじゃ兄貴とチエのバカ兄弟ぶりしか分からないだろっし……。。

じゃあ少し回想させてもらいます。俺達　つまり俺。兄貴。音弥さんの3人はあの後少し用事が出来てしまったからチエを春姫姉ちゃんに任せてそのまま街に繰り出した。

だけど予想より永くかかっちゃまって遅くになってしまい音弥さんと春姫姉ちゃんと別れた後最終的には現在の時刻（夜の8時）になっちゃまったわけだ。

ちなみに冒頭のセリフは帰ってきた兄貴が玄関に入った一声目。チエが俺達を出迎えてくれた一声目。そしてそれに呆れた俺のボヤキになっている。

「もう……2人とも遅すぎだよ」

「いやゝ悪い悪い。ちょっとばっかし用事があったな……」

昼間とは違い涙のあとがいつさい見えないチ工はそう言いながら頬を膨らませた。

対して兄貴の方は頭をかきながら少し照れくさそうにそえ返す。

いつも通り。そういつも通りの和やかなその会話は俺の心を温かにさせる。

そんな空気の中俺はポケットに入った袋をギュツと握りしめた。

「……もう仕方ないなゝ早くご飯にしよう」

「チ工ー!!」

この時代から家の家事をやっていたチ工。

彼女の作る料理は絶品だが彼女の料理を食べるのはもう少し我慢しなけりゃいけない。

彼女の料理を食べる前にやることがあるんだ。

「ひよ？」

突然呼ばれたからか少し変な声を出してしながら俺達の方に振り返るチエ。

そんな少し可愛らしいチエに俺は今できる最高の笑顔を浮かべながら。

ガバツ！！

「ごめんなチエ」

「…………え？」

優しく抱きしめながら「ごめんと呟いた。

それに深い意味は込めない。チエへの謝罪の気持ちだけを込めて俺

は彼女にそう告げるのだった。

「どっしたのヒナ君？」

チエは俺の様子が変なことに気がついたのか抱きしめる俺の背中を優しくさすってくれる。

チエの銀色のサラサラヘアが首あたりにスルスルと触れてとても心地よかった。

「チエ……渡したいものがあるんだ」

自然とその言葉が出てくる。いつのまにか俺の目の前に移動していた兄貴と目が合い俺達は頷き合つとそつとチエを抱きしめる腕を解く。

背中からスルスルリとチエの細い腕が抜けるのを感じると目の前にはいつも俺を見ていてくれる彼女の綺麗な顔があった。

「ヒナ君？今日は何だかいつもより優しいね？」

「そうか？まあ……今の俺はいつもより優しさ六割増しだからな！」

「……それってすごいのか？」

俺とは違い普通の小学2年生と同じチエにはまだこの問題は早かったみたいだ。

だが難しそうな顔でうーんと頭を捻るそんな姿ですら愛おしい。

俺はまだまだガキだけどこれだけは確信していた。

俺はチエのことが好きなんだということ。

「ぷっ！！はははは！！そんな難しく考えなくたっていいってチエー！！」

「む〜」

「ほら日向も渡したいものがあるんじゃないかなかったのか？」

「………そういえば」

兄貴の言葉に再び俺達は和やかなムードへと誘われた。

そしてその空気の中俺は少しだけ低いチエの髪の毛を撫でるとポケットから紙袋を取り出す。

「ヒナ君。それなに？」

「うーん。そうだな……強いていうなら……」

不思議そうな顔で小首を傾げるチエ。俺は彼女にニッコリと笑いかけると紙袋から知恵理と同じ名前の花がついたそれを取り出した。

「……………“お前”かな」

ピンク色に輝く3枚の花びらがついたその髪留めを俺はチエのキラキラと輝く銀髪に授ける。

パチツと音をたてながらそれをつけたチエはまさしく“桜”と言ってもいいくらいに可愛かった。

「これは……」

「俺と兄貴の誓いだよ」

戸惑うチエに俺は間髪入れずにそう言うとチエは驚いたように顔を上げる。

そう。それは誓いの髪留めなのだ。彼女の髪にその髪留めが輝き続ける限り俺達が世界一綺麗な桜を守り続ける。

そしてその世界一綺麗な桜とずっと一緒に居続ける。それが俺の俺達のたてた誓いなのだ。

「俺達が絶対に“桜”を散らせない澄み渡る“空”を汚させないしそこにサンサンと輝く“太陽”も遮らせないだからお前は心配しなくていいよ」

「……それは違つぞ日向」

そのとき俺の言葉を凜とした声が遮断した。

澄み渡る“空”のような綺麗で汚れないその声に俺とチエは振り返る。

するとそこにはいつものおちゃらけた様子の兄貴とは違う。俺が慕い続ける最高の兄貴の姿があった。

「日向。心配する側に回ったことがないお前にはわからないかもしれないけど……心配しないなんて不可能なんだよ」

俺は衝撃を受けた。なぜなら俺の周りには心配する必要があるやつなんていないからだ。

今日チエを助けてくれた水城にばかり。俺達を導いてくれた音弥さんや春姫姉ちゃんにばかり。それに兄貴こと姫ノ城空にばかり。

だから俺は誰も心配することなんてない。仲間を信じていままでやり過ごしてきたのだ。

俺は考えさせられた。兄貴の言葉に俺は今まで考えたことのなかった第三者の目線を考えさせられたのだ。そして 学んだのだった。

兄貴の言葉に 。

「だから……俺達を信じてくれ。俺達を信じたうえで心配してくれ……」

その言葉は俺の深くまで行き届いた。これこそが俺の学んだ三箇条の一つ。

ゲイル先生曰わく

”大切な人を守るために拳をふるえ”

それと同じ価値を持つ言葉がこのときの言葉だった。

姫ノ城空曰わく

”心配しないなんて不可能。信じたうえで心配しろ”

この2つの言葉が俺を大きく成長させたのだ。

「うん分かったお兄ちゃん。この髪留めを私がつけている限り私はお兄ちゃんを……ヒナ君を信じたうえで心配するからね」

最後にそう言ったチエの笑顔は今も根強く記憶に残っていた。

兄貴の言葉も……音弥さんや春姫姉ちゃんのことも……桜の髪留めの誓いも全て忘れてしまった今も……。

「……ん……うん？」

あの事件から　輝喜が俺達の前から消えてから半月がたったこの日。俺は久しぶりに自分1人でベッドから起き上がった。

理由は分からない。だけどどこか清々しい朝に俺の頬は涙で濡れていた。

なんとなく俺は何か懐かしい夢を見たきがしたのだけは覚えている。だけど何の夢かは思い出せない。

そんな歯がゆい思いが俺を支配する中毎日の日課である彼女が俺の部屋に入ってきたのだった。

コンコン　ガチャ

「ヒナ君。朝だ……!？」

ドアの隙間から顔を覗かせたチエはベッドに起きた状態で座る俺を見て驚愕してるみたいだ。

だがそんなこと関係ない俺はチエにニッコリと笑いかけると唇を震わすのだった。

「おはよう……チエ」

「あ……うん……おはよう」

チエは少し驚きつつもそう返してくる。そんな様子に普段の朝の俺の不甲斐なさを改めて実感していた。

「……ほえ？ヒナ君今日はどうしたの？体調悪いの？熱あるの？それとも……あれの日なの？」

ショートしていた思考回路が戻ったチエは朝俺が起きていることに
対してそう聞いてくる。

さすがにそこまで言うのは酷くないかと思ったりあれの日は女の子
にしかこないだろとか思いながら苦笑いをしてしまう中俺は窓の外
を眺めて空を見上げる。

窓の外の”空”はどこまでも澄み渡り”太陽”はその中心でサンサ
ンと光り輝き家の前の”桜”はだいぶ葉桜になったとはいえ未だに
ピンク色の花びらがちらついていた。

全てが揃っている窓の外の風景。それを見ながら俺はまるで独り言
のようにそっと呟いた。

「……………夢を見たんだ」

「夢？」

不思議そうに小首を傾げるチエ。その姿も夢の中で見た気がする。

成長して銀色の髪は一層雅やかに美しく輝き彼女の笑顔はいつにな
っても俺を魅力し続ける。

……。

「あー！時間がないんだっ！ヒナ君。夢の話は通学途中で聞くから今は急いで準備して！！」

「……ん。分かった」

「急いでね！！」

タッタッタッタッタ

遠ざかっていくチエの足音。俺はその足音を聞きながら彼女の姿を思い浮かべていた。

彼女の銀色の髪。確かに昔に比べて美しく雅やかになった。だけど一つだけ足りないものがある。

それは。

「……あれをつける日はもうないのかな兄貴」

ずっと昔に俺と兄貴が贈った”桜の髪留め”もうそれはチエの髪にはない。

彼女があれをつける日。それはただ1日だけ。

姫ノ城空の命日だけであった。

意味はまだ夜が明けずにほのくらしいころ。

または夜が明けようとするときのことを表す言葉。

これは日向達の新たな戦いの幕開けとなる話。

だが戦いはまだ始まらない。なぜならこれはまさしく【暁】と呼べる話だからだ。

夜が明けようとするときと同じように 新たな戦いが今始まるう
としていた。

番外第貳話【暁】（後書き）

作「今回は新キャラと呼べるような呼べないようなお二人！！音弥と春姫に来てもらいました」

音「響理〓音弥〓オペリアだ。長いから音弥で頼む」

春「雲雀春姫と申します。春姫とお呼びください」

作「てなわけで今回はこの2人のキャラ設定を紹介したいと思いまーす！！」

音& amp ;春「イエーイ（です）！！」

作「では最初に簡単な春姫さんの方からいかせてもらいます。まず容姿についてですが本編の通り少年陰陽師の【風音】を思い浮かべてください」

春「あらあら わたくしはなかなかの美人なのですね」

作「はい。上記のセリフの通り一人称は”わたくし”で口癖は”あらあら”もしくは”ふふふ”それと性格は……」

春「いたずらっ子です」

作「……まあ性質を言葉に表すなら

”いたずらっ子なお嬢様”

ですかね。あと音弥とは幼馴染の恋人同士。歌が得意だそうです。あと能力は……まだ明かせません」

春「ふふふ わたくしの能力は”第3章”のキーポイントなのですわ」

作「というわけですね〜じゃあ最後に何かあればお願いします!!」

春「ふふふ 以後よろしくお願いいたしますわ」

作「はいありがとうございます。では引き続き音弥の設定にいかせてもらいまーす」

音「ういーす」

作「ではまず最初に音弥のキャラ設定ですが……みなさんは音弥の設定を見て何か思いませんか?」

音「ん?俺の設定だろ。幼馴染のアイドル顔負けの美少女が恋人で姫ノ城空の親友で……あ!？」

作「……気付きましたね。そう音弥のキャラ設定は主人公”不知火日向”に似せて作ってあります!!」

音「そうだったのか……」

作「ええ。じゃあ次は容姿ですがこれは本編に出た通り少年陰陽師の六合を思い浮かべてください。口癖は”It's show time”特技は音楽演奏で大半の楽器は弾けるそうです。ちなみに一

番得意なのは？」

音「ヴァイオリンだ。ていうか俺の場合ヴァイオリンが得意じゃないといけないんだよ」

作「ふむふむ意味深発言ですね〜じゃあ最後に能力と何か一言お願いします」

音「おう。俺の能力は名前の通り”音”だ。内容は言えないがな。あとは俺の応援頼むぜ！！It's show time！！」

作「はい。ありがとうございます。じゃあいよいよ【第2章”異端者編”】始動します！！次回もお楽しみに〜」

音&春「バイバーイ！！」

次回に続く！！

第2章 “ 異端者編 ” プロローグ【月の道標】（前書き）

第2章【異端者編】いよいよスタート……！！

問題 nothingだぜ……！！

第2章 “ 異端者編 ” プロローグ【月の道標】

????side

月明かりが神秘的に輝きを放ち闇夜を明るく照らす今宵の桜時市。

辺りを見渡せばビルに囲まれた普段は人々で賑やかなここ“街”に
すら人の姿は見当たらない……。

ヒュオ ンッ!!!!!!

だが次の瞬間。街全てを包み込むような突風がビルの間を駆け抜けていく。

葉桜となった妖美な桜を揺らし。夜空を舞う可憐な鳥をさらなる高みへと誘っていったその風は月に届くほどの天へと舞い上がっていた。

【花鳥風月】

天地自然の美しい景色を表す言葉にこのような言葉がある。

葉桜となりつつある桜の花びらをざわつかせる“風”と美しい鳥の翼を可憐に映し出す闇夜の希望“月”……今この瞬間月下のこの街は今まで類をみないほどの美しさを見せていた。

「へ〜ここが桜時市か〜」

そして風が止む。その透き通る美しい声と共に。

女性とも男性とも呼べないようなその高くもなく低くもない声。

そんな声がまるで風に運ばれてきたかのように鳴り響くのがあった。

「なかなかいい街じゃないですか……ギリギリで」

藍色の髪を靡かせるその声の主である少年はそう言いながらこちらを振り返りあたしに向かってニッコリと微笑んでくる。

月をバックにしたその姿はまるで“月そのもの”のように奇怪で怪しく　美しかった……。

「……ねえ。あなたもそう思いませんか【凧】？」

そんな彼を……あたしは【夢】に見たのだった。

第二章“プロローグ”

【月の道標】

瓜 side

「……………また…見ちゃった」

まだ真つ暗な夜中。あたしはそうポツリと呟いて目蓋を開くと重たい体に鞭をうってゆっくりと上半身だけを起こしあげる。

寝間着にしている白い浴衣は雨にうたれたかのようにびっしょりと汗で濡れていて気持ちが悪い。

伝統ある和室の畳に敷かれた布団もまた然りでその役目をまったく成し遂げていなかった。

半月ともなるとさすがに慣れるわね……………。

ただどあたしはそんな状況にまったく動じることなく心の中でそう思うと立ち上がりゆっくりと汗で濡れた浴衣に手をかけた。

シュルリ……

布が擦れる音がする。それと同時にあたしの白い肌が露わになり瞬く間にあたしは全身何も身にまとわない姿となった。

汗で全身濡れた体は4月のこの季節。部屋の中とはいえ肌寒い。

自分で言うのもなんだけど華奢で細いあたしの体にはかなり堪えるものがあつた。

だけどそれは当たり前のことである。

もともと大きく伝統的なこの畳だけの部屋は所謂平安時代の”寢殿造り”という造りになっている。

寝ることだけを重視して防寒対策などが一切行われていないこの部屋。
。

でもあたしがこの部屋を寢床にしているのにはある理由がある。

それはいい感じに古い畳を摺り足で歩きながら布団から遠ざかりすだれ簾をくぐり抜け襖を開け放つた先にある夜が怖いあたしの希望の光。
。

「……いい【月】ね」

4月の寒々とした綺麗な夜空を明るく照らし出している 【月】。

今宵は見れば見るほどあたしの病んだ心を落ち着かせてくれる【満月】だった。

あたしがこの部屋を寢床にしている理由。

それは夜に恐怖するあたしを慰めてくれるこの【月】に早く逢えるからである。

あたしはここ最近ずっと同じような夢を毎夜のように見続けていた。

あたしの親友“美濃輝喜”が消えたこの半月ずっと 見続ける夢が。

「……………【予知夢】よね……………あの夢は……………」

内容は簡単。簡単すぎて最早一言一句間違ふことなくセリフも言えるし藍色の髪の彼の顔の特徴は全て覚え尽くしていた。

そして何回も 何回も 同じシーンを流し続けるあたしの夢にはある共通点。つまり全てが同じ結末を迎える。

現実に行き届くという結末を……………迎えるのだ。

「……………【瑠奈】か」

夜風が何も身にまとわないうあたしの体を優しく包み込みあたしは夢に出てきた少年の名前を呼んでみる。

あのあたしを救い出してくれる希望の【月】と同じ名前を持つ彼の

名前を……。

あたしを未来に導いてくれる【月の道標】を……。

??? side

「……この街に戻ってくるのも久しぶりっすね」

風が眠れずに夜空の満月を見上げているのと同時刻。

この桜時市全体を見渡せる半月前まで洋館があったこの丘でも1人の少女が風と同じように【満月】を見上げていた。

透き通るような雪のような白い肌。ルビーのような赤い瞳はは燃えるような炎のようではなく、まるで【血】のように綺麗な真紅の色で染まりあがり その瞳と同じような色をした紅の髪の毛をツインテールにした誰もが認める美少女。

「まさかウチがこの街に戻ってこれるなんて……」

【天野うずめ（あまの・）】という名前の美しい少女であった。

「ラッキーっす」

少女　天野うずめは少しほんわかとした喋り方をしながら楽しそうにそう笑うとスキップしそうな勢いで小高い丘の上をうれしそうに駆け回る。

初めて外に出た子犬のような彼女の行動に俺はクスリと微笑してしまった。

「まったく……うずめ。そんなに慌てて走ると転んでしまいますよ？」

「何言ってるっすか！ーこんな日に走らなくていつ走るっすか！ー隊長！ー！」

「……やれやれですね」

俺はまるでどこぞやのお姫様みたいな姿をした彼女のそんな姿に呆れて溜め息をもらします。

ですがそんな底抜けに明るいところが彼女の良いところなんだと改めて実感した瞬間でもありました。

「うずめ。いい加減あなたは分かってく下さい」

「みぎやっ!?!」

ドテ シッ!!!!!

自分が【ドジっ子】だと言うことに……。

そう俺が続けようとしたときにはすでに手遅れでした。

なぜなら走り回っていたうずめは自分が着ている水色のワンピースに脚をとられてしまい……。

「ううー……転んじゃったっすよ……」

13歳の少女とは思えないような顔面スライディングをしたからでした。

「だから言ったじゃないですか。人の話は最後まで聞いてください」

「そんなこと言われても遅いっすよ」

涙を紅蓮の双瞳から流すうずめ。そんな姿すら様になっています。

これだから美少女は得なんですよ……。

「はいはい。わかりました。わかりましたからそんなに泣かないでください」

「うう……分かったっす」

未だにボロボロと涙を流しているうずめに俺は手をさしのべながらそう言いました。

まるで小さな子供を見ているようですね……。

うずめの方も実はこの属性を抱えているからかこういうのには慣れっこなので素直に俺の手を握り返します。

そんな素直なうずめに俺は再びクスリと微笑してしまいました。

「……ありがとうございます」

「いえいえ。問題n.o…どういたしまして」

俺は【彼】の口癖を口走りかけてしまいました。がギリギリのところ
で踏みとどまりました。

俺にはこの口癖を使う権利なんてないのに……。頭の中ではそう理
解しきれているのに俺はこの言葉を心から離れさせることができま
せんでした……。

「……いけませんね」

「どうかしたっすか？」

「いえ。ただ【月の光】が綺麗だと思っただけです。ぜんぜん

「

無意識のうちに漏らした言葉の後始末。それを打ち消すための言葉も俺には決まっています。

記憶を失った俺が持つ楽しかった第2の過去を消し去る言葉として……。決別の印として……。

「【問題ありません】」

「……そうっすか」

今宵の月は【満月】そんな月の放つ綺麗な光に照らし出された桜時市を俺は見つめました。

【月の光】はあんなにも綺麗で美しく雅びなのになぜ俺の体に宿った光は……。

こんなにも黒く悪しく汚ないのでしょっね……。

俺は見渡す街に住む親友“だった”4人にそう問いかけました。だ
けど誰も応えてはくれません。

ですが俺はこの街に帰ってきました……。

「【輝喜】さん。そろそろ行きましょっす」

「……そうですね」

大事な大事な親友“だった”あなた方をこれから襲い来る敵から護
るために。

たとえこの身を犠牲にしても……。

日向side

月見れば千々に

物こそ悲しけれ

我が身ひとつの

秋にはあらぬど

ここ数日。寝ることが生きがいの俺が眠れない日々が続いていた。

理由は分かっている。

俺達の【親友】眼帯をつけた少年”美濃輝喜”だ。

あいつが俺達の前からいなくなって今日でぴったし半月がたつ。だが俺達は依然としてあいつのことで立ち直れていなかった。

凧は授業中にポーっとしているのをよく見かけるし真備は突然壁などに拳を打ちつけるのをよく見かける。

かくつえ俺自身も今こうして深夜にベランダで夜空の【月】を見るという普通ならありえない状況を作り出しているのだが……。

唯一チエだけはいつもと変わらないような笑顔をしている　　だけ
どそれも昼間だけの話だ。

こんな寝静まった夜に耳を澄ませば隣の家からチエのすすり泣く声
が聞こえてきたりする。俺が眠れない原因の1つでもあった。

「…月見れば千々に

物こそ悲しけれ 我が身ひとつの

秋にはあらねど」

ふと【月】を見上げていたそのとき頭の中に小等部のころ習った百
人一首の一文が思い浮かんできた。

あの頃は何でこんなのを覚えさせられるのか分からなかったが……。
この歌は今の俺の状況を見事に現してくれていると思った。

月を見ると心がさまざまに乱れて物悲しいことだ。自分一人だ
けに訪れてきた秋ではないけれども。

今の季節は秋じゃなく春だがそんなことは関係ない。俺は自分が見
上げるこの綺麗な【月】が嫌いなのだ。

あいつ “美濃輝喜”を思い出してしまうあの幻想的な【満月】
が……。

「明日も寝坊かな……」

【“不知火日向”】

【“羽前凧”】

【“美濃輝喜”】

【“天野うずめ”】

そして……。

【玖河未〓瑠奈〓セイレン】

奇しくもこのとき空に浮かぶ【満月】を思い思いに見上げていた5人こそが明日から始まる3日間の新たな闘いの中心となる人物であった。

彼らは何を思い何のために闘うから今はまだ謎に包まれている……。
ただ時間は待ってくれない。彼らを新たな闘いへと誘うための序
曲はすでに始まっていた。

今宵より3日間ここ桜時市で行われる“戦争”の序曲が……。

そして夜が明ける。新たな闘いが今始まった。

第2章 “ 異端者編 ” プロローグ【月の道標】（後書き）

作「お久しぶりですみなさん！！！！作者の†HYUGA†です！
！！！！」

知「こんにちは〜ヒロインの姫ノ城知恵理です」

真「双子陰陽師の片割れの羽前真備だ！！」

作「てなわけで今日はこの3人で後書きを続けていききたいと思いま
すす！！」

知&真「わ 　　いつ！！！！」

作「さてではさっそく始めていききたいと思います」

知「はいはいはい 　　作者さん。質問してもいいですか？」

作「OK 　　じゃあ質問どうぞ知恵理！！」

知「うん。じゃあね〜どうして今回のタイトルは【月の道標】なの
？」

作「お答えしましょう。今回は【月】をテーマにしているのと少し
失礼ながらステレオポニーの曲からとらせて頂きました」

真「【ツキアカリのミチシルベ】か？」

作「まあそうなりますね。ちなみになぜ【月】なのか……それは皆さんも気付いてるかもしれませんが【あの人】と関係があります」

知& amp; 真「あの人？」

作「……ですがそれはまた後日ということで次回予告行きたいと思いまーす!!」

1人の親友を失ってから半月がたった。

悲しみに暮れる親友と幼なじみに日向は唇を噛み締める。

だがそんな日向達の前に1人の少年が現れる。

果たして彼の目的とは？正体とは何なのか？

次回【ABILITY零】

日「問題nothingだぜ!!」

真「ところで今回は日向の博識なところがあったよな……？」

知「うん。私なんてあんなの覚えてもいなかったよー」

作「ちなみに【電子辞書】使って調べました」

知& amp; 真「まさかのカミングアウト!？」

次回に続く！！

第51話 ABILITY零（前書き）

この度の震災では多くの方々が大変な思いをされていることをお悔やみ申し上げます。

ですがこんなときだからこそ明るい話題をやっていききたいと思いません。

つっても今回の話はシリアスなんですけどね。ですがぜひ見てみてくださいください。

作者 THYUGA+

ついでに今回から後書きには次回予告に付け加えて敵キャラ情報を載せていきたいと思えます。

では本編に) ^ - ^ (ー 旦

第51話 ABILITY零

” 4月23日 ”

この日新たな闘いが始まることを日向たちはまだ知らない。

だが”彼ら”は知っていた。

いや。正確には“彼ら”はそのことを企てていたと言った方が正しいかもしれない。

なぜならこれは“彼ら”の復讐であり“彼ら”から始まる戦争なのだから。

異端者アノロイヤルと呼ばれる“彼ら”の。

???side

ここは桜時市の中心街である”街”の一角に存在するバー【CHERRY】

普段そこには昼間人が入ることはないがこの日は少しだけ違った。

バーにはまだバーに入るには少しだけ幼いようだが大人な表情を浮かべた4人の男たちがたむろしているのだった。

ガチャ

だがそのときバーの扉が開き1人の男 いや少年が入ってくる。

藍色の長い髪の毛を後ろで括ったその少年はこの場にいるどのメンバーよりも若く瑞々しい。

まさしく美少年と呼ぶに相応しいその少年の美貌がさらに少年を異端なものへとしていた。

「……………ついにこのときがきた」

そしてその少年が入ってきたのを確認した1人の男が今まで沈黙していたこの空間の空気を壊す。

茶髪の髪の毛をモヒカンにしたその男はまるで呪文のようにその言葉を唱えてみんなの注目を浴びた。

「キヤツキヤツキヤツ。あちき達には待ちわびた展開だけどな!!」

「ふんっ!!別に俺は待つてなんかいなかったがな!!」

茶髪モヒカンの男の言葉ににんえたのは少しだけ小柄でピンク色の髪をした男と男たちの中で一番大柄で黒髪の男の2人。

バーの机に腰掛けた小柄な男はまるで嘲笑うかのごとき笑い声をあげ一番大柄な男は少しそっぽを向いてんえていた。

「……喚くな」

そんな騒がしい2人の声に今まで黙っていた最後の男が静かにそう呟く。

その瞬間注目は一気にその男のもとへと集まった。ヘッドホンを首から下げ髪の毛で右目が塞がったその男のもとへと。

「……”来栖””的場”静かにしろ。”黒羽”の言ってることが聴こえない」

「キヤツキヤツキヤツ。別に”南雲”なら問題ねーんじゃないですか？」

「……確かに。だが今日は客人がいることを忘れるな”来栖”」

「キヤツキヤツキヤツ。そうでした……」

来栖と呼ばれたピンク色の髪の毛の小柄な男の言葉に視線は最初の男のもとへと注がれた。いや。正確にはその茶髪の毛のモヒカンの隣の隣で優雅に紅茶を飲みながら本を読んでいる少年へと。

話は聞いていたようでその少年は話の話題が自分に向いたのを確認すると読んでいた本をパタリと閉じて顔を男たちのもとへと向けた。

「やっと僕に話を振ってもらえましたね」

「……そう拗ねないでください。別にあなたを無視していたわけはありませんから」

「ん〜。じゃあ南雲さんの言うことを信じましょうか……ギリギリで」

少年はニツコリと微笑んで手に持つティーカップをゆっくり口につける。その1つ1つの動作が優雅で雅やかで美しいとこの場にいる人全員が考えていた。

「……………それで？あなたはどついつ考えをお持ちなんですか」瑠奈さん？」

「……………」

南雲と呼ばれる男の言葉にその少年　瑠奈は飲んでいたティーカップを机に置いて何やら考えこむように手を顎にやる。

黒革の分厚い手袋に隠された彼の肌色の手。ライダーグローブに似たその手袋を何故つけているかは誰もが疑問に思っても誰も何も言わなかった。

そしてそんな疑問を全員が思っている中それからさらに数秒後　。

「僕はまだ攻めどきじゃないと思います……………ギリギリで」

顎からゆっくりと手を離れた瑠奈がポツリとそう呟いた。

それに南雲と呼ばれたヘッドホンに前髪で右目が隠れた男と最初に話していた黒羽と呼ばれた茶髪にモヒカンの男が驚いた顔をあげた。

「……それはどうしてですか？ 明確な理由を知りたいのですが？」

「それなりの考えがあるのですよね？ ルーナ？」

瑠奈の言葉に食ってかかる黒羽と南雲の2人。それに瑠奈はまーまーと手で2人を制した。

「落ち着いてください。僕が何も考えないでこんなことを言っているとでも思っているんですか？」

「キヤツキヤツキヤツ。だがあちき達はこの街に帰ってくる日を2年も待ったんだぜ？ 今すぐにも奴らをギタギタにしたいんだ」

ピンク髪に小柄な男。来栖の言葉が瑠奈の言葉を遮る。

だがよくよく見てみれば彼の拳は強く握りしめられており彼の憤怒

を強く表しているのがよく分かった。

そんな来栖の様子に瑠奈は少しだけ息を吐くと再びまーまーと落ち着かせるように手で来栖を制すると口を開いた。

「まあまあ落ち着いてください。あなたの気持ちも分かります来栖さん。だけでももう少しだけ……あと半日だけ待ってください」

「…………半日だと？」

来栖に向けた言葉。だがそれに反応したのは瑠奈から一番遠い位置にいたヘッドホンを首から下げた男。南雲だ。

自分の言葉に反応した南雲に瑠奈は視線をそっちに向けるとゆつくりと頷く。その目はまるでゲームを楽しむ子供のような目だった。

そしてそんな中次に口を開いたのは瑠奈のすぐ隣にて身構える茶髪モヒカンの男。黒羽だった。

「ルーナ。どうして半日なんだ？別に今から行っても問題ないんじゃないか？」

「ん〜別に良いんですけどあまりお勧めはしませんね…………ギリギリで」

黒羽の言葉を真つ正面から否定すると瑠奈はニコニコと笑いながら机に肘をつくとその上に顔を載せる。

ふとそのとき瑠奈は何かに気がついたのかニコニコさせた顔をさらにニコリと微笑ませると机の上にあつた茶色い小さな箱を手に取り取る。

瑠奈のそんな行動に？マークを浮かべる異端者メンバーだったが誰も気にすることなく瑠奈は語り続けた。

「……みなさん。今の時刻は何時か分かりますか？」

「……朝の8時47分だ」

「んゝさすがは南雲さん。あなたには僕の考えていることなんてお見通しですね……ギリギリで」

「……当たり前だ。俺には全てが“聞こえている”からな」

南雲は誰よりも早く。それも時計も何も水に瑠奈が欲しがっていた言葉を返す。瑠奈の方もそれに満足したらしく机に置かれた小箱を指でクルクルと回しながら満足そうに頷く。

ここで1つ種明かしのためのヒントを出そう。

実は南雲は時計を見たのではたまた自分で時間を予測して呟いたのでもない。南雲は瑠奈が心の中で思ったことを“聞いた”のだ。……っと。これ以上のことはまだ明かせない。もう少しだけ待っていてください。

話を戻そう。

瑠奈と南雲。2人のそんな会話はこの場にいた他のものにはチンプンカンプンだった。だからそれを確認するためにリーダー的存在のこの男が口を開いた。

「ルーナ。ナグーモ。2人だけで話されても俺達にはさっぱり分からない」

「んゝすみません。少しだけ話が脱線してしまいましたね。えゝとつまり今は朝のかなり早い段階だということを言っているのです。ここまでわかりましたか？」

瑠奈の言葉に異端者は誰1人狂うことなく同時に頷く。それを見て瑠奈はさらに話を続けた。

「で。今回みなさんが狙うターゲットをよく考えてみてください。

そうすれば自ずと答えは現れると思えますよ？……ギリギリで」

「……ああ！！そういうことか！！」

瑠奈の言葉に異端者の中でのリーダー的存在の茶髪にモヒカンの男。黒羽が納得した感じで両手を叩く。

それを境に他のメンバーも分かったみたいで1人1人が大きく目をしばたかせたりうんうんと頷いたりする。そして異端者の1人であるピンク髪に小柄な男である来栖が少し下品な笑い方と共に瑠奈が何を言いたかったのかを叫んだ。

「キヤツキヤツキヤツ。なるほど学校か」

つまりそういうことごとである。つまり彼ら異端者がターゲットとしているのはまだ学生なのだ。だからこの時間学校にいるターゲットにむやみやたらに攻撃ができないということである。

来栖の言葉はそんな言葉は今手を出せない状況を一言で表しているといっても過言ではなかった。もちろんそこまでなら瑠奈も何も言わなかったし何の指図もしなかったと思う。……だけどこのとき来栖はやってしまったのだ。

来栖はその言葉を口にしてしまったのだった。瑠奈の前　今この

場で一番敵にはいけない少年の前で。彼は禁句を放ってしまっただった……。

「キヤツキヤツキヤツ。でもあちき達には例の少女なんて関係ないから今学校に攻め込んでも問題ないと思うんだよね」

その言葉に最初瑠奈は慌てることなくゆっくりと再び紅茶のティーカップを唇につけ余裕の表情を保ち続けていた。

その姿はあたかも怒ってないと態度で示しているかのようにゆったりとしている。だが次の瞬間だった。

瑠奈の優雅に紅茶を飲むために瞑られていた瞳がバツと見開く。その瞳には先程までの余裕な表情など見当たらない。

そこにあつたのは厳しい顔だった。だが憤怒や苛立ちといった顔ではない。そこにあつたのは目の前にいる彼らに向けられた見下した目であった。

「……勘違いをしないでください。“僕達”とあなた達は違います。僕達は僕達の目的があつて動いているんですよ」

「……まったく。暴力に訴える気ですか？ 低脳ですね……。あなた方と僕の実力差まさか分からないらけではありませんよね？」

「ふん！！やってみないと分からないこともあるぞ」

完全に見下した瑠奈。そんな瑠奈に的場は両拳を固めながらギロリと瑠奈を睨みつける。

そこにあつたのは協力者という関係ではない。瑠奈の方はおそらく目の前にいる“犬”が威嚇しているくらいにしか思っていないかもしれないが的場の方は瑠奈に敵意を向けていた。

『……………』

バー“CHERRY”に不穏な空気が漂う。椅子から立ち上がりずただ不適に見下した目のまま笑う瑠奈と感情を剥き出しにさせ椅子から立ち上がり怒りのオーラを出す的場。

この空気は危険度100%の危ないものだ。だがこの空気 さし
ては一触即発な2人の間は意外な形で決着が着くのだった。

なぜなら2人の間に入り込む勇氣ある人物がいたからだ。

「まあまあ2人と落ちくけ。ルーナもマトーバも」

「黒羽さん」

「ちっ！！邪魔しないでくれよ黒羽！！！！」

一触即発な2人の間に入り込んだのは茶髪にモヒカンの男。男たちの中でリーダー的立場の男。黒羽だった。

「止めるマトーバ。今のお前がやっていることは負け犬の遠吠え。見苦しいぞ」

「だ…だけど黒羽！！こいつは俺達のことをバカにしやがったんだぞ！！」

止められたことが不満なのかなおも間に入ってきた黒羽に食ってかかる的場。対して瑠奈の方は邪魔がいなくなったとばかりに再びゆっくりと紅茶を口に運び始めていた。

「それでもだマトーバ。俺達“異端者”があいつに勝てないのは事実なんだ。そもそも俺達は“能力者”ですらない。その辺を肝に銘

じておけ」

「くっ……!!」

優雅に紅茶を飲む瑠奈の横での場的場が齒をかみしめる。だが悔しいのはみんな一緒だ。なぜならこの場にいる人間は全て異端者。アピリティーゼロと呼ばれる存在。しかしながら瑠奈は体も魂も完全なる純粹なる能力者。

黒羽や的場たちでは手も足も出ない存在なのだ。

「落ち着きましたか？」

「くっ!? 別に落ち着いてなんていないんだからな!!」

「……じゅあさっさと落ち着いてくださいよ」

瑠奈とて現代のことを知らないわけではない。だから的場のそれも素直になれない“それ”だということには気付いている。

だがやはり的場がやるそれには違和感を瑠奈は感じていた。しかし瑠奈はそれを無視すると手に持った小箱で再びクルクルと戯れながら話し始めた。

「……すみません。少し感情的になってしまったみたいです。ですがこのことは分かっておいてください」

瑠奈はそこまで言うと手に持った小箱 【CHERRY】と書かれたそのマッチ箱を指先でクルクルと回し始めた。

なかなか常人にはできないような器用なことをやってのけている瑠奈に異端者達は少しだけ観賞しながらも真剣な面もちで話を聞く準備をする。

そしてその刹那。瑠奈は持っていたマッチ箱を遠くへと投げやり。

「発動【Flash-Gun】」

カチャ……ターン!!!!!!

発音が良すぎて完全なる英語で聞こえた瑠奈の言葉と同時に突然現れた幻想的な光。さらに瑠奈の右手から放たれた何かがマッチ箱を貫くのだった。

幻想的な光が止む。するとこの現象を引き起こした張本人であろう少年。瑠奈は何事もなかったかのようにティーカップに残っていた紅茶を飲み干すと読みかけの本を手に取り出口に向かって歩き始めていた。

そして後ろ手に手を振ると異端者のメンバーには見えはしないが唇を震わすのだった。

「その少女は“僕達”が頂きますので……」

「……相変わらずのいい腕だな。さすがだ」

バー【CHERRY】から立ち去っていく瑠奈を見つめながらヘッドホンの男。南雲がそうポツリと呟く。

その瞳にはニヤリとしたいやらしい表情が見え隠れしておりどこか彼に頼りがいを持った。または憧れの眼差しを向けていた。

そんな南雲の足下にはさっきまで瑠奈が戯れていた小箱が転がっている。

【CHERRY〜チェリー〜】

と書かれたマッチ箱。その前半分と後ろの文字が刈り取られ。

【 チェリ 】

とだけ残されたマッチ箱が落ちていたのだった。

必ずこの少女を手に入れるという意志が働いたそのマッチ箱が。

bedside

「……完全に遅刻ね」

そう呟きながらあたしは街のかなりはずれのあたりを歩いていた。
ちなみに他のメンバー　つまり日向達はいない。

今頃はたぶん朝の調べ学習の時間に出てたぶん3人が3人揃ってボ
ーッとしていると思う。

輝喜がいなくなっただけからこの半月あたしを含めた全員がそんな感じだった。けどたぶん一番ポーツとしているのはあたしだったと思う。

なぜならあたしの場合には輝喜のこと以外にもう一つ頭を悩ませていることがあるからである。

あたしはそのことを考えるとハアアと深いため息を吐いてしまうのだった。

「……あたしにどうしろって言うのよ“楓”」

ふとあたしはこの悪夢を見せ続ける金髪の美女を頭に思い浮かべるために歩みを止めることなく目をそつと瞑る。

でもどうしてもそこにはあたしを守護する妖怪“九尾”の姿をした楓しか思い浮かんでこなかった。

憎むことしかできない彼女の妖怪時の姿しか。

コシコシコシ……

だけど時間とは待つてはくれないものであたしはこのときあたしに近づいてくる影に気がつかなかった。

あたしの運命を変える少年の存在に。

「……………っ!？」

「うわっつと!？」

あたしが彼の存在に気がついたときにはすでに手遅れだった。道の角を曲がってきた彼は目を瞑ったままのあたしに気付くことなくある意味ありがちすぎる展開となった。

ドガシャンツ!!!!!!!!

そんな今時少年マンガにも存在しないようなある種の衝突音があたしの耳に届いてくる。

その音と同時にあたしの世界はいつきに反転し自分でもどうなったのか分からないようなグルグルとした新たな世界へとおちいったのだった。

『……………』

そしてあたしたちは出会ってしまったのだ。”風”であるあたしと”月”である彼”玖珂未”瑠奈”セイレン”という名のこれからあたしたちの”最大の敵”となる少年が。

もしあたしが予知夢にしたがって彼に会わないようにしていれば。

もしあたしが目を瞑って周りの注意に気をつけていれば。

もしあたしがこの日。輝喜や予知夢のことに頭を悩ませつつもちやんと学校に入っていれば。

あたしは彼に出会わなかったかもしれない。

ただどこのときそんなことを露ほども考えていなかったあたしは突

如としてぶつかった彼に話しかける。

予知夢に出てきたあたしの厄災となりつると楓に判断された少年に。

「……あんた誰よ？」

「んー僕としては僕の上にいる君が誰だって思っただけどな？……
ギリギリで」

それはこれからこの2人に訪れる悲しき終幕への前奏曲であった。

第51話 ABILITY零（後書き）

作「じゃあ前書きにあったとおり今回からは敵キャラ情報を載せていきたいと思いまーす！！！！！」

知「今回の話の中にいーぱい出てきたよね〜 最初は誰ですか？」

作「はい。今回紹介するのはおそらくみなさんの中では一番印象強かった小柄なこの人から！！」

来「キャッキャッキャッ。みなさん初めまして。あちきの名前は”来栖針”っていいやつす！！今後よろしくお願いしやつす！！」

作「よろしくお願いします来栖さん。ちなみに来栖針と書いて

”来栖針”
くるすしと

と読みます。ちなみに容姿のほうはピンク髪の小柄な男。例えるならアニメ版Bleachの擬人化したザビマルの蛇のほうを思い浮かべてみてください」

来「キャッキャッキャッ。あちきは所謂生意気系のシヨタってことさー！！」

知「はいはいはい！！私からも質問いいですか？」

作「」どづどづどづどづ〜」

知「はい。じゃあ来栖さんはどうしてそんな笑い方するんですか？あと一人称も変わってませんか？どうしてですか？」

来「キャツキャツキャツ。いいぜ教えてやるよ。まず俺の笑い方だけど最初のイメージはこの小説の作者の別小説”CROSS-ROAD”の敵キャラ”谷口浩”からきてるんだ」

知「でも笑い方違いませんか？」

来「キャツキャツキャツ。そこはあれだ。仕様ってやつだよ」

知「うん。よくわかんないよ？」

来「キャツキャツキャツ。気にすることはないさ。ちなみにあちきの一人称である”あちき”は作者が読んだ小説から来たもんだぜ」

知「ふん。何かいろいろなことが混ざってるんだね？」

来「キャツキャツキャツ。そういうことさ！！……おっと。そろそろ時間が無くなってきたから次回予告頼むぜ！！作者！！」

作「はいはい。わかりましたよ……てなわけで次回予告いきたいと思えます！！」

出会ってはいけない出会いをしてしまう2人。

少年の方は”時の少女”を奪うために桜時市にやってきた”月”の少年。

少女の方は”時の少女”と日常を護るために闘う双子陰陽師の片割

れ。

そんな2人が何も知らないまま出会ってしまったとき一体何が起るのか？

次回【禁断の出会い】」

日「問題nothingだぜ!!」

作「ところで今回の後書き後半の部分俺空気じゃなかった？」

来「キャツキャツキャツ。あちきが次出るのは大分後なんだぜ？」

知「そうなんだ」

作「……やっぱり俺空気？」

次回に続く!!

第52話 禁断の出会い（前書き）

今回の話は恋愛要素が含まれています。ちなみに自分BLとかダメな人なのでよろしくお願いします。

新たな始まりとなる

第52話【禁断の出会い】

瑠奈の正体とはいったいなんなのかな？

では本編に） ^ - ^（ ー旦

第52話 禁断の出会い

それは“禁断の出会い”と呼ぶに相応しい運命的な出会いであった。

あまりに唐突で、あまりに必然的な出会い。

そしてそんな2人はこの世の中で最も美しいとされる属性をそれぞれ持っていた。

音が美しく幻想的な【風】

光が美しく幻想的な【月】

という【花鳥風月】と呼ばれる美しいを敢えて言の葉はにした言葉に含まれる2つの属性を。

全てのヒトは美しい物に惹かれるものである。それはお互いに美しい物を持っているこの2人もしかりであった。

惹かれてはいけない。決して2人は惹かれてはいけないのに。

2人は出会ったその瞬間に惹かれてしまうのだった。

その運命的な出会いはまさしく“禁断の出会い”と呼ぶに相応しいもの。

彼らはこれから最大の敵となる2人　だからこそ2人が出会うのは闘うこと以外考えられない戦場だけでよかった。

だが禁断の出会いをした今。彼らの悲しき物語がスタートしたのだ。
った。

凧side

「……………あんた誰よ？」

「んー僕としては僕の上にいる君が誰だって思うんだけど……………
ギリギリで」

あたしは転んでしまった衝撃からか未だに少しフラフラする頭で簡潔な一言の文章を構築し呟いた。

するとあたしが馬乗りしてしまっている彼の方は苦笑いのようなどびっきりの笑顔のようなそんな曖昧な顔をしながら鏡のようにそう聞き返す。

ただどあたしは彼の言葉を聴いた後少しだけ睨みつけるように彼を見下ろすと鬼気迫るように口を尖らせてさっきあたしが言った言葉をもう一度目の前であたしが乗っかっている彼に問うた。

「……あんだ誰よ？」

「……確認のために問いますけど。あなたちゃんと人の話聴いてましたか？」

「ふん。何よその言い方？まさかあんだあたしの耳がイカレテルとでも言いたいわけ？はっ！！お生憎様ね。この天才少女“凧様”は言っとくけど生まれてこの方1度も耳から入ってきた人の話“は”聴きそびれたことなんてないわよ！！残念でした〜！！」

あたしのまくしたてるように繋いだ言葉に彼は呆れたように深く息を吐き出す。

「……つまり聴いてはいたけど話を聴くのとその話の内容を記憶するのは別物ということですね？」

「何よ？文句あんの？」

「逆に聞きますけど文句以外に何かありますか？」

「ないわ！……！！」

「サラッとマニフェストを守れない国会議員並みに聞き直りました

ね

「あたしをあんなのと一緒にするんじゃないわよ!」

それぞれが言いたいことを軽口混じりで怒涛のごとく言い合ったあたし達はそこまで言つと「ぷっ」と笑いを堪えられず吹き出した。

『『あははははは!!--!--!!--!』』

あたしと彼の澄んだ笑い声が辺りに見玉する。

だけどそんな細かいことを気にすることはなくあたし達は笑い続けた。

「な...何よ...ぷっ... あんた... 吹き出すなんで... ぷっ... 失礼よ?」

「くくっ!!--それは...お互い...ぷっ... さまと... いつものです...
ギリギリで」

楽しいと思える一時。それは輝喜のことも時の番人のことも忘れて
久しぶりに本気で笑った瞬間であった。

日向や知恵理それに真備といるときにはどうしても輝喜達のことを
思い出してしまう。だけど目の前の彼はそんなことは何も知らない。

だから私は本気で笑うことができたのだった。

「……あははは。なんか久しぶりに笑ったわ。こんなに笑うのが楽
しいなんて気づかなかった」

「ふふふ……。当然ですよ。笑いは“日常”には欠かせないもの。
謂わば酸素や水みたいなものですからね……。ギリギリで」

笑いすぎて少しだけ涙目になった瞳の雫を指で拭いたしはニッコ
リと微笑むと最近ではめっきり減ってしまった優しい口調でそう口
を動かす。

すると彼のほうは少し頬が赤くなりあたしから目を反らしながらさ
つきよりも少し小さな声で呟くようにそう言ってくる。

その動作が可愛くてあたしはクスリと笑みを漏らす。そして馬乗り
状態で下敷きにした彼の頬に手をかけ無理やりあたしのほうに向か
せた。

「ふふ…そんなに恥ずかしがらなくてもいいじゃない。もっとあたしのほうを見ていいのよ？」

「……………//!!?」

あたしの言葉に驚いたのか彼の顔は一気に燃え上がったように真っ赤になる。だけどその数秒後。あたしはあたしのしていることに気が付き逆に頬を真っ赤に染めあげることになった。

……………あれ？あたしは何やってるの？

冷静になった頭にその言葉が何度もリピートする。だけど考えれば考えるほどあたしの頬は火照っていき見れないけどあたしは目の前の彼以上に真っ赤になっていた。

そしてついにそれも限界となった。

「な……………////」

「な？」

「な……………なにすんのよー////!!……………!!」

「へ?...へブツ!?!?!?」

そして気付いたときにはあたしは馬乗りした目の前の彼の鳩尾に容赦なく当て身を放っていたのだった。

とりあえずごめんなさい。

「ぐふっ...」

「だ...大丈夫?」

放った本人が言うのもあれだけど　今は絶対に痛いよね?

あたしは未だに下敷きになっている彼のむせてしまっている姿に少し慌てるようにそう問いかける。

でも目の前の彼はまだちょっと話せないようであたしの方を見ずに少し顎を上げて呼吸を整えようとしていた。

だけどそれから数秒するとだいぶ呼吸が整ったのか片手を上げてあたしに大丈夫と伝える。

あたしはそれを見てホッと安心したように息を吐いた。

あたしは異常なほどに顔を赤らめるのだった。

「ふふふ。可愛い人ですね……本当に」

「ふにゃ!?」

「あはははは」

恥ずかしすぎて顔を真っ赤にしたあたしに彼はさっきのあたしみたいに革手袋で覆われた手をあたしの頬に添える。

ただどさっきのあたしとは違い頬に手を添えるときのその優しい動作にあたしはドキドキと心臓が高鳴るのを感じた。

「にゃにゃ……にゃにをするんですにゃ……／／／」

顔に熱があるからか頭がフラフラしてうまく呂律がまわらないあたし。

そんなあたしに彼は今までずっと地面につけていた上半身をゆつくりと上げるとそのままの勢いであたしの耳元にそっと唇を近づけると。

「ネコちゃんの真似ですか？可愛いですよ」

「じゃ／＼／＼！！！！」

からかうようにそう口ずさんだ。そしてあたしの方はその甘めの澄んだ声とあたしのすぐ横にある彼の横顔に最早頭の中がオーバーヒート寸前。あたしはへたり込んでしまった。

「あらら こんなことでへたへたになるなんて案外ウブなんですネ

」

「う……うるにゃい／＼／」

主導権は完全にあちらのものであった。あたしはマリオネットのようにあちらの思惑通りに操られ頭を骨抜きにさせられてしまった。

なんかいつものあたしらしくなくて悔しい！！

そんなことを思いつつもやはり体は彼の思うがままで言うことをきいてくれない。

そしてあたしの様子になぜか満足そうに微笑んでいる彼は自分の体に馬乗りしたあたしを抱え上げるように立ち上がらせると自分の背中の埃をパンパンと叩き再び笑顔であたしに見せる。

その瞬間。あたしは馬乗りという行為自体も恥ずかしいものだったと改めて思い直してしまつて立つてはいるけど頭の中は朝の眠りかけの日向と知恵理が合わさつたくらいにポーツとしてしまった。

それでもなおあたしに笑顔を見せつけてくるあいつに負け惜しみかもしれないけれどもキツと睨みつけるよう見つめ返していた。

「っ!?!?.....//」

ちなみに知つてると思つけどあたしの身長は148cm自分で言いたくないけど所謂“ロリ”とかと呼ばれる人種なわけで。

あたしより彼は最低でも15?は身長が高くて。

そんな状態のあたしが至近距離で下から睨みつけるように見つめても怖くも何ともなく。

「……その上目使いは僕のことを誘ってるんですか？……ギリギリで／＼／」

むしろ可愛いとしかみえないのである。　不覚ながらね。

あたしは彼の言葉にクラクラになってしまった頭が反応しない。でもあたしはやっぱり陰陽師の女兒なわけで。

「な！？そんなわけないでしょ！！！！あんたはあたしを何だと思ってるのよ！？」

ブオオオオン！！！！

気がついたときには頭で考えるよりも先に防衛本能として陰陽師としての戦闘訓練で鍛えられた体が勝手に反応して再び彼の鳩尾目掛けて当て身を放っていた。

しまった！！！！？？？？

頭に冷静さが戻ったときにはすでに手遅れ。あたしの拳は彼の鳩尾

の一步手前くらいにあった。

もうここまで来てしまえば止めることなんてできない。あたしはこの当て身が最小限の被害で済むのを祈るしかない。

心の中で必死に彼に謝りながらあたしは情景反射で目をつむろうとした。

パシッ！！！！！！

でもあたしが目を瞑るよりも先にあたしは瞑りかけの目を見開くほどの驚きに苛まれる。

なぜなら……。

「おいたは……だめですよ？……ギリギリで」

「うそ……」

なぜなら……戦闘訓練を受け常人なら絶対に受けきれない　うん　うん　違う。おそらく今のあたしと彼との距離感を考えるとまず“人

間という種族”なら受けきれないあたしの高速で打ち出された拳を……。

彼はいとも簡単に掌で受け止めていたのだった。

「ふー危ない危ない」

「あ…あんたいったい？」

あたしの当て身を軽く受け止め涼しげにそう言う彼。あたしはさっきまでの真っ赤な顔とは真逆に顔を青ざめさせながらポツリとそう口にした。

ただどあたしを待っていたのは変わらない彼の綺麗な微笑み。けどよくよく見てみればどこか冷たく冷ややかで妖美な美しさをもつ冷淡な笑顔。

「んー名前を聴いているならこうお答えしましょう」

そう。それはまるであたしを夜の世界から救い出してくれる救

世主で妖美な光を放つ……。

「僕の名前は“瑠奈” 本名【玖珂未＝瑠奈＝セイレン】と言います。
以後お見知りおきを……ギリギリで」

まるで【月】のような笑顔だった。

「る……な……？」

そしてあたしの方はその聞き覚えのある名前に呆然と目を見開いて
しまう。なぜならあたしは彼の名前を 彼の顔を毎晩のように見
ていたからだ。

目が覚めたときにはぼやけてうまく思い出せなかった“予知夢”で
見た1人の少年の素顔。

だけどその顔もたった今。彼の名前を聞いたその瞬間に頭にまるで
電流のように流れてきた。

目の前の彼と瓜二つなその顔が 。

「どっかしましたか？」

「……いや。何でもないわ」

心配そうにあたしの顔をのぞき込んでくる彼　瑠奈にあたしは何でもないとしり自重ぎみに笑いながら片手を上げてみせる。

そして深く深呼吸を1回しバクバクと高鳴る心を落ち着かせた。

「ふー…まさかあんたがそうだったなんてね」

「え？」

「うんうん気にしないで。こっちの話だから」

このときあたしは表面上冷静なあたしを演じているが頭の中はとてもしゃないけど穏かとはいいいがたいものであった。

あたしを守るためにあたしに未来の夢を見せ続ける守護妖“九尾の楓”その彼女が危険と判断しあたしに近付けさせようとしなかった少年“瑠奈”

その少年が今まさにあたしの目の前にいるのだ。こんな状況で心穏

やかなわけがない。

だけど　あたしはどうしても目の前の彼にどうしても敵対心を向けられなかった。

今どき漫画でもありえないほどのベタすぎる出会い方をしてそれから今まで十数分間あたしが心を許して話をし笑った目の前の相手をあたしはどうしても悪い奴とは思えなかったのだ。

なぜならあたしはこの十数分間のあいだに彼を受け入れてしまったのだ。

だからあたしは　。

「……よろしく“瑠奈”あたしの名前は“凧”フルネームで“羽前凧”よ。絶対に覚えなさい！！」

「……羽前凧」

何の疑いもせずに彼のことを受け入れてしまっていた。あたしのすべてを受け入れてしまうこの包容力によって　。

あたしが名乗った後すぐ瑠奈はあたしの名前をポツリと復唱する。その真意は分からない。分からないがあたしには彼があたしの名前を聞いてどうしていいのか分からなくなっているように思えた。

P i r i P i r i P i r i P i r i

そしてそのときあたしと瑠奈。2人を裂くように携帯電話が鳴り響いた。

「……すみません。どうやらお別れの時間みたいです……ギリギリで」

その瞬間。おそらく電話の持ち主であろう瑠奈は申し訳なさそうにそう言つとあたしにニッコリと微笑む。あたしの頭に手を置いてポンポンと数回軽く叩くと颯爽とたちさろうとした。

「あ」

ただど立ち去るその途中で何かを思い出したようにそう一語呟くと再び振り返る。あたしはそこまです黙って見守っていた。

そんなあたしを気にすることもなく瑠奈は親指と人差し指を立て所謂ピストルの形を型どりあたしに向ける。そして片目を軽く瞑るとこれまでで一番の笑顔をあたしに向け。

「またお会いしましょう。“風の妖精”さん」

そう言つて「パンツ」と軽い口調で銃声の音を口から放ち歩き出す。

その仕草をあたしはただ見つめることしかできない。でも瑠奈のその仕草には冷たく見えない新月ではなく暖かい満月のように感じる。だからあたしは彼の言葉に小さく応えるのだった。

「Good bye Full moon . See you
again .」

さよなら満月さん また会いましょう

この瞬間。あたしと瑠奈の切っても切れぬ因縁が始まった。

瑠奈 side

「……まさか彼女がそうでしたとは」

彼女 羽前凧と別れた僕はそう呟きながら街の中心街から少し離れた路地裏へと脚を進めていた。

そしてその中の一角。巨大なビルを背に影へと姿を潜めると先程からずっと鳴り響く携帯電話を取り出すためにポケットへと手を入れる。

「……これは邪魔ですね」

でもその途中僕はポケットに入れようとした自分の手を覆うようにつけている革手袋が邪魔でうまく携帯電話を使えないことに気がつきました。これは予想外です。

ただ僕は慌てることなくこの事態に一度深くため息を吐き手にはめた革手袋を外しました。

「……やっぱりこれだけはいっ見ても気に入りませんね」

僕はこの革手袋を購入した本当の理由である右手の甲のそれを見て
嫌悪感に苛まれます。

しかしそれは仕方のないこと。これは僕の運命だと受け入れるしか
ありません。

僕はこの呪いたくなる自分の運命にただ齒ぎしりするしかありません
でした。

P i r r i P i r r i …… P i

「……はい。こちら桜時市。遅れてすみません」

先程からずっと鳴り響いていた携帯電話のその音に僕はやっとピリ
オドをつたせます。

そしてなるべく冷静になるべく心を落ち着かせながら電話の向こう

から放たれる無機質な命令を下すだけの声に耳を傾けました。

本当は今すぐにもぶちぎって携帯自体を壊してやりたいのに……。

「ええ。何も問題ありません“異端者”の方も容易いものでした…

…」

感情など見せない無情なそのやり取り。だけどそれでも仕方ありません。

なぜなら僕はあの組織にとって命令を聞いて遂行しいらなくなったら捨てられる。そんな使い捨て可能な“道具”でしかありませんから。

ですがずっとこのままというわけにはいけない。僕はいつか必ずやつらに目にも見せてやる。

“日常”に絶望した僕の復讐心をいつか絶対に燃えたぎらせてやる。

だからその日が来るまでならあなたがたの使い捨ての駒になってあげますよ。この僕。

「【？(クインティ)】了解しました」

ユニオンナンバーズの5番目の能力者にしてチルドレン計画の第3
被験者

“ 玖珂未 || 瑠奈 || セイレン ”

“ 日常 ” に絶望したユニオンナンバーズの能力者であるこの僕がね
。

そう心の中で誓う瑠奈。 悪しき復讐心に駆られる彼の未来に待ち受
けるものとは何なのか？

復讐に成功して迎える希望に満ち溢れた世界なのか？

はたまた彼の人生そのものを踏みにじられる絶望しかない世界なのか？

その真相は未だ闇の中に潜んでいる。

「……羽前凧。また会えるといいですね」

だがこのとき復讐しかなかった彼の心の中に新たな世界が生まれたのもまた真実。瑠奈と凧。2人が出会ったことで瑠奈の復讐がねじれはじめていた。

禁断の出会いをしてしまった2人。これがこの先どう動くのかもまた闇の中。

「……あなたとはもっと清い世界で会いたかった」

そしてその2人の関係にひびを入れるかのように彼の右手の甲には

大きく刺青が描かれていた。

【？】と描かれた悪しき色の刺青が
。

第52話 禁断の出会い（後書き）

作「はいこんにちは〜てなわけで今回も敵キャラ情報載せてくよ〜」

知「いえーい！！」

作「さあ今週も始まりました敵キャラ情報のお時間です。今週の敵キャラはいつたい誰なのか？ではさっそく登場していただきましょー！！」

的「ふん！！別に待ってなんかいなかったからな！！」

知「わお これまた大きな人ですね〜 ガン ムみたい」

的「っ！？そんなこと言われても全然うれしくな〜んかないんだからな！！」

作「はい。てなわけで今回呼びしたのは大きなツンデレ君こと”
的場一”さんです！！」

的「ふん。まあお前らが知りたそうにしてるから教えてやる。俺の名前は^{オノノ}的場一。的場一と書いて

”^{オノノ}的場一”

と読むからしつかり覚えろよ！！」

知「うん。覚えたよ〜何か今回の敵キャラさん達ってキャラが濃い

から覚えやすいね」

的「そ…そうかありがとよ。ところで何か質問とかはないか？」

知「はいはいはい！！じゃあ質問です！！的場さんのキャラクターはガンダ みたいなのもあるけど他のゲームでも見たことある気がするんだ〜教えてくださーい！！」

的「そ…そんなに聞きだいのか？」

知「うん聞きたーい」

的「うっ…そこまで言うなら仕方ないな！！お前だけに特別に教えてやろう！！」

知「ありがとうございます」

的「こほん。俺のキャラクターの外見設定はゲームの”薄桜鬼”に登場するキャラクター“天霧九寿”がもとになってるんだ。かと言ってあつちと俺はまったくの別物。自分で言うのもなんだが俺は素直じゃないんでその辺よろしく頼む」

知「はい（＾Ｏ＾）／」

作「えーではこのあたりで次回予告を入れていきたいと思います。だって俺空気だもん！…こほん。さて次回の時の秒針は

禁断の出会いを果たした凧と瑠奈。だがその日もう1つの出会いが待っていた。

禁断の出会いとは違いこの運命の出会いには偶然か？それとも必然か？

そして日向達の目の前に現れた彼女さいったい何者なのか？

次回【RED HAIR】「

日「問題nothingだぜ!!」

知「ツンツン〜 デレツン〜 デレツンツン〜」

的「その町歌は別の桜の街のものだからな!!」

知「ひよ？そうだったけ？」

作「やっぱり俺空気だ」

次回に続く!!

第53話 "RED HAIR";

????side

学校の通学路。ヒラヒラと桜並木の桜が舞い散る中俺はまるで熟したリンゴのような【赤】を見つけた。

いや。その言葉は不適切だったかもしれない。

なぜならその【あか】が纏う空気はリンゴのように甘い【赤】ではなく寧ろ日向の魂である“紅翼”のような鋭い【紅】のように感じたからだ。

だけどそれでもまだ俺は違和感を感じずにはいられなかった。

風が舞い桜吹雪が通り過ぎる中その【紅】の持ち主である彼女は。

「The desire to be happy is common to all of us.....」

あなたは本当の幸せを知っているっすか？」

俺にそう語りながらニッコリと笑いかけるのだった。

その笑顔は今まで見たことのない笑顔。姉貴みたいな自信に満ちた笑顔ではなく知恵理みたいな明い太陽のような笑顔でもない。

その笑顔はまるで今にも消えてなくなってしまうかのような儂く切ない弱々しい笑顔であった。

いくら追いかけても　いくら手を伸ばしても　届くことのない空のような存在。俺にはとてもじゃないが手を出すことはできなかった。

そして俺は気付いた。彼女の桜吹雪に靡く艶やかな髪の毛がどんな色をしているのかを。

彼女の【あか】い髪の毛はおそらく天然のものだ。なぜかここには確かな確証がある。

だがその【あか】はリンゴのような甘い【赤】なんかではない。だけれど日向の魂である日本刀”紅翼”のような鋭い尖った【紅】でもない。

なぜならあの【あか】はそんな生易しいものなんかではない。あの【あか】の正体。それは。

風のような風に俺は目を開けることができなかった。

だがそれも一時的なもの。それから数秒もしないうちに体に打ち付けてきた風はやみ俺は自らの瞳を開く。

しかしそこには俺の求めていたものは見当たらない。あの”血”のような【朱】はどこにもなかった。

俺は最初今までのことがすべてもしかしたら俺自身が見ていた”幻想”や”幻”もしくは”夢”なのではないかと思った。

それは輝喜を失ってから俺自身が時たまに輝喜の幻を見たりしてしまっていたこともあるから今回もそれだと考えてしまう。

でもその考えはすぐに打ち消された。

なぜならヒラヒラとピンク色の桜の花びらが散りゆく中で俺はそれとは別の色のものを握りしめていたからだ。

どうして握りしめているのかはわからない。だけどそれは確かに【朱】い色をした長い髪の毛だった。

「本当の幸せか……」

俺は【朱】の彼女の言葉を思い出し無意識のうちにそう呟く。最初に呟かれた外国語の意味はさっぱりだけど後に呟かれた日本語のほ

うは理解できていた。

そして彼女の言葉に今の俺の境遇を合わせ俺は1つの言葉を得る。
それは俺の願いが込められた言葉だった。

「俺の幸せ。それは昔みたいに日向や知恵理、それに姉貴　ナギ
ねえとあのバカ輝喜と一緒に笑いあうことだな……」

それこそが俺こと羽前真備が考えた願いだった。

真備 side

「やあ。どうかしたのかい羽前のついてるほう？」

「……その呼び方やめろっていつも言ってるだろ」

昼休みの食事時。我が学園は基本的に弁当持参のためクラスメート
はそれぞれ思い思いの場所へ行って食事をとる。だが俺そのクラス
から出て行く1人の女子生徒を引き止める。

茶眼にポニーテールにした黒髪の長髪。典型的な日本人の容姿をした彼女は首から一台のカメラをかけ急に引き止めた俺に懐疑そうにしながらこちらを見てくる。

俺はそんな彼女こと我が桜時学園新聞部部长にして桜時学園ランキングの製作者である【須藤百合すどうひゃくごう】に「ちょっと教えてほしいことがあるんだけど」と話を切り出し今朝の出来事を話し始めた。

今朝は何かがおかしかった。いや正確にはあのバカこと”輝喜”がいなくなっただけだが今朝はいつにもましておかしかった気がする。その理由は至極簡単。我が姉【羽前凧】が原因だ。

なぜおかしいと思ったのかは今朝の姉貴の様子でだ。姉貴はああ見えてうちの家族の中では一番起きるのが遅い。その理由は簡単。【逃れられない】からだ。

姉貴の力【予知夢】これによって姉貴は夜に恐怖し眠ることに恐怖するようになった。だから姉貴は夜遅くまで部屋を明るくして起き朝はなるべく早起して夜が明けるまで布団から出ないようになっている。だから姉貴は比較的早起きの俺ら家族の中じゃ一番遅く起きてくる。だが今朝は違った。

今朝。姉貴は俺が起きた瞬間には家を出ようとしていた。さすがの俺もあれには焦った。なんせ夜に恐怖している姉貴が夜も明けていないのに制服に着替えて鞆を持ち学校に行こうとしていたのだ。焦るに決まっている。

俺はあまりの出来事に一瞬金縛りにあうもその後すぐ姉貴を追いかけるために玄関を出る。だが姉貴はすでにそこにはいなかった。

俺はこの事態にショックを受けた。なぜなら姉貴の異常行動。それは姉貴自身が何か悩んでいることの現れだと思ったからである。でも姉貴はまた俺に相談することなく1人で抱え込んでいる。だから俺は呆然としてしまったのだった。

そして、そんな朝に俺こと”真備”はあの美少女と出会った。桜吹雪が散る中その少女は血のような【朱】い髪を持ち何かを知っているかのように俺に微笑みかけてくる。

そんな少女の事が気になって俺は午前の授業中ずっと彼女のことばかりを考えていた。

だから俺は彼女に声をかけたのだ。この学園で一番の情報通である彼女に。

「なるほど。朱い髪をした少女か。それは興味深い情報だ」

「なんだ。その様子ならお前でも知らないみたいだな……珍しい」

「いや。そういうわけではないんだが……私が興味深いのは彼女の容姿でも彼女の言葉でもない。彼女がこの学園にいるということなんだ」

「……といつとっ」

る。黒髪に優しそうな笑顔。そして眼帯をつけミステリアスな雰囲気
を漂わせつつも常に美しい容姿持つ少年。その少年　もとい俺
の親友の名前は

「【美濃輝喜】お前や不知火の大親友にして謎の失踪をした少年か
…」

「……すまん。今その話をされると本気で止まらなくなりそうなん
だ」

そう。その少年の名前は”美濃輝喜”俺と姉貴。それに日向と
知恵理の大親友にして　時の番人で随一の力を持つ【光】の能力
者。

俺はここ最近この名前を聞くたびに何かに当たりたい衝動にかけら
れる。なぜならあいつは俺達とはもういられないと言いやがったか
らだ。

俺はもうあなた方と一緒にはいられません。

あのと輝喜から言われた言葉が何度も頭の中でループする。俺は
この言葉が頭に響くたびに何度も　何度も　何度も　激しく
自身を嫌悪し「なぜ気付かなかったんだ」と後悔の念が溢れてきた。

まったく。こんなんでよく友情が大事なんて言えたもんだな。

そしてそれと同時に俺はあいつにも 輝喜にも同じ気持ちかわいていた。確かに気付かなかった俺も悪かったかもしれない。だが俺はあいつの態度が気に入らなかった。

今回の事件 半月前の事件については事が事だけに別に相談してこなくてもよかった。そこはバカな俺にだって相談できないことくらい分かる。分かるけれども

俺はあいつのその姿勢が気に入らなかった。隠し事をしていたというのもある。だが俺が一番気に入らなかったのはそんなことじゃない。

あいつが【偽りの姿】を俺達に見せていたということだ。

隠し事なんていっぱいある。現に姉貴だって俺がしゃべっちゃまったとはいえ予知夢のことを日向たちには話していなかったし、日向や知恵理だって兄貴がいたことを俺達には話してくれていなかった。

そして 俺自身も話していないことがある。俺の右肩にある【蓮華の花】の刺青についてとか。

だけど互いに隠し事を持っていたそんな俺達でも友達になれた。親友になれた。思いのまま自らの真の姿をさらけ出せていた。だから俺はあいつが気に入らない。

自らの真の姿を隠し、親友である俺達を騙し、自分自身を騙し続け

ていたあの男が。だからまず会ったら一発ぶん殴る！！

俺はそう決意して拳を固めるのだった。そしてその足掛かりを俺は偶然とはいえやっと見つけることができた。

儂げに 切なさしげに笑顔を見せる血のような朱い少女を

「……………で？百合。この女の名前はなんていうんだ？」

「そうだな。ではいい加減気になるようだから彼女の名前を教える
としよう」

そこまで言うと百合はいったん息を置き机からある物品を取り出す。全体的に真っ黒で大きな画面を持ち持ち運びができる最新ハイテク機械。

くしくもそれは俺がお金を貯めて買おうとしたところ「機械音痴のマキビンが使えるわけありません」と輝喜に力強く止められた物品。アイパッドだった。

その 아이폰 をピッピッと操作する百合。そしてある一覽を開くと俺に見えるようにこちらに画面を向けてきた。

「……………羽前弟。これが君が探している少女の情報だ。そして私がこ

れから彼女の情報を一カ所上書きするが……たぶん君が一番疑問に思っているところだろうな」

「……どういうことだ？」

俺は彼女の言葉に首を傾げつつも一番上に書いてある名前、その下にある身長に体重。挙げ句の果てにはスリーサイズまで記してある場所を無視して一番下にあるその場所を凝視する。

それは【桜時学園美女ランキング】で姉貴と同点2位（ちなみに1位は知恵理）という情報の下に書いてあるある一文の説明。それに彼女はさらにピツピツと文字盤を操作してもう一文書き加える。俺の強張った視線を気にすることもなく

「なっ！？マジかこれ！？」

「ああ。君の情報が正しいのならこの記述は間違いないよ……」

その情報は俺の期待にさらに応えてくれる希望の情報。まさしく天からの贈り物だった。

「いいかい？君の探している彼女。彼女はこれまで学園を休学して

いた。それも”ある少年”がいなくなった時と同じ時期からな」

「…やっぱりこいつはあいつと関係あるってことか」

俺の目の前にある画面。そこに表示されていたのは1人の少女。

年齢は13歳。容姿は血のような朱い髪に桜時学園の美女ランキングで姉貴と同じ2位になるくらいに端麗と言える美少女。

そして あいつが消えた”2週間前”から学園を休学していた少女。その彼女の名前は

「【”天野うずめ”】」

我が親友である”輝喜”とおそらく何らかの関係があるであろう少女。

それに 今朝のあの出来事もあってか俺自身が今現在最も気になっている人間である。

????side

真備まきびが少女の名前を知ったのと同時刻。同じ学園内のある建物の影に1人の少女がいた。

彼女の名前は”天野うずめ”真備が追い求めている少女である。

「……………はい。……………はい。……………了解したっす」

人通りの少ないその場所。そこで水色の携帯電話を片耳にあてながら言葉を発する彼女の表情は真剣そのもの。

桜が舞い散る桜並木にて儂げに笑う彼女も様になっていたがこんな日陰にて真剣な表情をする彼女もまた様になっていた。

そしてその彼女の電話の相手はというと

「……………じゃあ任務を続行するっす【水城】さん」

《……………分かった。くれぐれも”ヤツら”にはバレないようにしろ》

「もちろんっす!!!!!!絶対に【ユニオン・クルーズ】にはバレないよつにするっすよ!!!!!!」

《……俺もあと少ししたらそっちに向かう。それまで輝喜と【3人】で頼んだ》

「了解したっすよ」

そこまで話すと水城は” pi ”と携帯を切る。

そして残されたうずめの方はというと”プープー”と無機質な音が流れる電話を耳にあてたまま深く息を吐き出した。

その瞬間。まるで嵐のような風が吹き荒れ彼女の血のような髪を吹き飛ばすかのように大きく靡かせる。

そのとき彼女はその風に全てを乗せるかのようにそっと呟く。今朝彼女が最も気になる存在である彼に放った言葉と同じ言葉を

「The desire to be happy is
com
mon to all of us……」

幸せでありたい
と願うのは

誰でも同じだ

それは彼女自身も　そしてこの世の中にいる全ての人間の永遠の

願いである。

しかし彼女はその願いを叶えられることはなかった。彼女自身の体に存在する【能力】と彼女の中に流れる【血】によって

「……ねえ。あんさんはどう思うっすか？こんなうち いや【うち達】が幸せを願うのは滑稽だと思っすか？」

彼女 うずめは誰もいない自分自身の影を見ながらそう問いかける。だが当たり前だがその眩きに応えてくれる人は誰もいない。

でもうずめはその眩きを眩いた影を見ながら満足そうに笑いきびすを切り歩き出した。その応えと共に

「【未来】は誰にも分からないっすか……。あんさんらしい応えっすね」

そして彼女はその名前を呼ぶ。彼女自身を導いてくれる【彼女】の名前を

「ありがとうです。いつも後ろ向きなうちと一緒にいてくれて……」
【刹那】

誰もいない彼女の隣。だが彼女がその名前を呟いた瞬間。彼女の目の前には確かにその少女が微笑んでいた。

水色の綺麗な長髪をポニーテールに括った美少女と呼べる少女

【天野刹那】が。

第53話 "RED HAIR" (後書き)

作「今回はちよつと敵キャラ情報はお休み!!今回出てきた新キャラについて紹介したいと思います!!」

知「はい!!作者さん!!質問です!!最近私の出番が少ないような気がします!!」

作「ぐつ!?そこを言われると……でも次回はちゃんと出るから我慢して!!」

知「本当ですか?」

作「本当です!!あと時間が押してるのでそろそろ登場して貰いましょう!!今回の新キャラ【須藤百合】さんです!!」

百「ふむ。私なんか紹介してくれるとはありがたい」

知「あ。ユリちゃんだ」

作「というわけで改めて今回の新キャラ【須藤百合】さんです。容姿は黒い長髪をポニーテールにした茶眼の典型的な日本人の容姿をしております」

知「いいな。私なんて純粋な日本人なのに髪の毛銀色なんだよ」

作「まあ……その辺ははつきり言っただけ……今回はいいです。じゃあさらに付け加えます。彼女は桜時学園の新聞部長で例のランキングの編集者です。ちなみに彼女自身も【桜時学園

美女ランキング】の第8位でもあります」

百「ちなみにこれは投票性だから公平に選んである」

知「でもそれで私が1位なのが信じられないんだけどね……」

百「気にするなチーちゃん。これも公平なる審議の結果。民主主義万歳だ」

知「そうなのかな？じゃあユリちゃんが【喧嘩の強い奴ランキング】の18位なのも？」

百「ぐっ！？それを言われるとな……。でも君の周りにもいっぱいいるじゃないか。主に上のランキングの1位とか2位とか3位とか4位の化け物が」

知「……ユリちゃん。あの4人と比べるとはダメだよ？だって人間じゃないもん……」

作「はい！！てなわけで次回予告行きます！！だっていつもながら俺空気だもん！！さて次回は

【朱の少女】と【白の少年】の情報を知った真備は彼の親友達のもへと向かう。

そして真備の情報を知った3人はさっそく彼女を探そうと決意するもその瞬間彼らに影が差す。

それはこれから彼らが探そうとしていた【朱の少女】の影だった……

作「結局俺空気!!」

次回に続く!!

第54話 天より野に舞う(前書き)

人気投票。

投票者現在 1名

悲しいっす。お願い誰でもいいからいれてくれ!!

では本編へ(^ - ^) | 旦

第54話 天より野に舞う

????side

「相変わらずこの国の学校は騒がしいな……」

俺は自らの目から入ってくる情報に鬱陶しさを感じながらポツリとそう呟く。

だが相変わらずうるさいこの【空間】にいるザコどもに俺の言葉は届いてない。寧ろ俺の呟きの後からさらに騒がしくなった気がする。なぜなら俺は日本語で呟いたからではない【中国語】で呟いたからだ。周りの奴らは「マジで中国語だぜ!」「やら」「やっぱりカッコいいよね!」「とか「今何て言ったんだろ?」「などざわめきが増す一方。

俺はこの【空間】にぶんざりとしていた。

「……虫けらが」

俺は今度は上級の笑顔を浮かべながらこの場の声援にも似たざわめきに応えるようにはつきりとそう口にする。もちろん中国語で。

意味が分からないこいつらにはきつと自分達の都合のいいように受け取られたと思う。これだから人間は滑稽なんだ

先入観に捕らわれあたかもそれが自分自身の力だと信じ続けている。

全て【地球】の意志だと言うのに

「……虫けらっすか」

「!?!」

だが次の瞬間。俺は目の前にいる虫けらどもとは明らかに違う臭いがするやつが目の前にいることに気がついた。

それは最初【血】かと思うくらいに鮮やかな朱い髪を持つ少女。だが彼女の瞳は笑ってなどいない。言わなくても分かる。こいつは他のやつらとは違つと。

言葉云々の前に虫けらどもとはその身に纏う空気が違つた。そう

この国では珍しい血の雰囲気が出たのだ。

「……言葉。分かるんですか??」

「ふふふ。それはどうっすかね??もしかしたら偶々口にした言葉が当たっただけかもしれないっすよ??」

「……そうですね。どうやら僕の勘違いみたいです。忘れてください」

俺はこの目の前の少女がどうも気に入らない。確かに”俺達”と同じ臭いはするがこいつは【血】を嫌ってるように思える。

それが気に入らない。力があるのに力を使わないその姿勢が気に入らなかった。

「……そう殺気立たせないでくださいっすよ。空気が悪いっす」

「え……ええ。申し訳ありません」

このとき彼女の言葉に俺はある種の確信を得た。確かに俺は彼女に対して無意識に殺気を出してしまっていたようだ。

だがこちらとしても紛いなりにもユニオンナンバーズの一員。チルドレン計画の第2被験者でもある。無意識とはいえ出す殺気は戦闘のプロでも感じ取れないくらいに抑えられているはず。

でもこの女はその僅かな殺気を受け取り感じたのだ。これだけで俺は確信した。この女は”敵”だと

「…実は僕。この学校に来て間もないんです。ここで出会えたのも何かの縁。よろしければお名前をお教えしてもらっても構いませんか??」

俺は今できる最高の営業スマイルを浮かべると冷静に周りには談笑をしようにしか思わせないように女に尋ねる。すると女のほうもそれに応えるようにこれ以上にならない営業スマイルを浮かべた。

そして知るのだ。これから敵になるもの同士。お互いの名前を

「いっすよ　うちの名前は【天野うずめ】この学園の中等部2年
っす」

「ありがとうございます。僕は【李・悶】この学園には2週間前にやってきました。学年は3年です」

ここに新たな宿命が始まった。

日向side

「……………【天野うずめ】か」

昼休み。俺。チエ。凧の3人は普段なら立ち入り禁止のはずの屋上にて昼食を取っていた。

人が落ちないために張られたフェンスにもたれ掛かり屋上全体を見渡してみる。

するとそこには未だにあの日の傷跡が何カ所も残っており俺達の心をブルーにさせる。

だけどそれでいい。

あの日の事は忘れることはないと思うが心に深く刻まなければいけない。そう思った俺達はわざわざここで昼を過ごすのだ。

だがそんな気持ちにひびを入れるかのように屋上の扉が勢いよく開く。

そこから現れたのはいうまでもない。あの夜以降始めてみる真剣な面持ちをしま真備だ。

そして彼の口から託された言葉。それがこの名前だった

「なるほどねえ。その子と輝喜があたし達の前からいなくなる前に謎の密会をしていた……と。確かにこれは100%と断言しているほど怪しいわね」

「コウ君が私達に言わないで単独行動するなんてそうそうなかったからその……うずめちゃん？はもしかしたらコウ君の秘密を知ってたかもしれないってこと？」

「ああ。たぶんそれで問題nothingだと思っよチエ。俺もだいたい同じ考えだ」

その名前と彼女の大まかなプロフィールを聞いた俺達は三者三様にそう返しお互いに頷き合う。

太陽の高さと校庭に広がる校舎の影の形から見ておそらく今は1時少し前くらい。

真備は弁当に手を着けていないし女のチエと凧は食べるのが遅くまだ弁当が残っている。たぶん食べ終わるのを待ったらそれで昼休みは終わってしまう。

さらに俺達は良くも悪くも学園で目立つ存在だ。それこそ他学年の教室に顔なんかだしたら 考えたくもない。

”そして何より ”とそこまで考えて俺はチラリと横目である部分を見る。白くて綺麗なある部分を だから結論。

「……この【天野うずめ】を尋ねるのは放課後にしないか??」

俺は全員を見渡し少し思考した上でそう結論を出して皆に提案をした。

「どうしてだ日向??俺のことなら気にするな。3分で飯を胃に入れる自信があるから」

「いや…違つでしょ」

真備の食事を冒流したような言葉にすかさずツッコミを入れる風。さすがは双子だと賞賛を贈りたいよ。

俺はそんな一見アホみたいなやり取りに苦笑いしつつその質問に応えるため弁当の包みを横に置いた。

「うん。考えてもみたら俺達は揃いも揃って言いたくないがこの学園の有名人だろ??」

俺の問いかけに凧は頷き真備は「ああ」と相槌をうつ。ちなみに千工はさつきから俺のことをジト目で見てるが　なんで??

まあ。気にした所でどうでもないか。と俺は話を続ける。

「　で。そんな俺達が生徒が溢れ出る昼休みにしかも他学年の教室にでも行ってみる??どう考えても問題 nothingじゃないだろ??」

「　分かった。それ以上は何も言わなくてもいい。寧ろ言わないでくれ」

俺の話聞いててどうやら真備は想像したらしい。それで頭の中で考えた結果。あのおぞましい映像が流れたのだろう。

そう。言うなれば海外スターが来日したときの空港のような映像を

「てなわけで。俺はわざわざそんなことせずに放課後彼女を校門で待ってる方がいいと思う。放課後なら下校指導の先生が校門に立ってるから用事がない生徒は真っ直ぐ帰らなきゃいけないーしな。飯もまだ食ってないし」

「……そうだな。そうさせてもらうかな」

俺の意見を素直に聞いた真備はおとなしく弁当のナプキンをとき始める。

さすがに日本古来からある陰陽師の家らしく純和風の風呂敷のような模様をしたナプキン。その下から現れたこれまた純和風の弁当箱を開け真備は焦ることなくゆっくりと中のだし巻き卵を口にした。

それを確認した俺はその犬のような姿にクスリと笑みを漏らしチエの方に体を振ろうとして

「ふふふ ヒナ君 私嘘つきは嫌いだよ??」

「すみませんでしたー!!??」

怖いくらいに楽しそうな笑顔をつくりながらわざわざパンパンと自身の膝を叩くチエがおり。その後光がさすような姿に反射的に土下座していた。

さて。なぜこんなことになったでしょう？？実は答えは分かっていたりします。

「ねえヒナ君？？さっきヒナ君の瞳はどこを見てたのかな？」

「……問題nothing。全力で黙秘します」

「私…ね。ヒナ君の事なら勘が良くなるんだよ？？怒らないから正直に言おうね？？」

「くっ……！？だっ…だがチエの問いは明らかに自供の強要。裁判では俺が勝利できる！！」

「……今日から一週間。朝のお迎えと三食の食事抜き」

「すみません。ごめんなさい。俺が悪かったです。だからそれだけはどうかご勘弁を……！！！！！！」

結局俺は俺自身の財政を預かれている目の前の銀髪幼馴染には勝てなかった。

これが【HINATA KILLER】と呼ばれる俺専用最終兵器【姫ノ城知恵理】だ。

「ふふふ じゃあヒナ君 ど・こ・み・て・た・の・かな?？」

「……なあチエ。本当に言わなきゃいけ」

「ヒナ君… 幼馴染の私にも言えないことなの……??？」

「うっ……… / / / 言うっ!! 言うっ!! そのウルウルは止めてくれ……!!」

俺の魂からの叫びにチエはさっきまでの涙目から一変。男殺し(寧ろ俺殺し)の微笑みを浮かべあからさまに自らの一部分をペチペチ叩いて俺の応えを待つ。

その行動に逆らう気はなかった。俺は火照る顔を逸らし拳を握りしめ

「……ふ……もです」

「ふふふ ヒナ君 聞こえないからもう一回」

「あーもう!! お前の”ふともも” つつたんだよ!! これで問題 nothing だろ!？」

正直に言う。何だこの羞恥プレイ！？俺は全力でこの場から逃げ去りたいんだが！？」

「……何をラブコメってんだか」

「ん。まあこんなのも輝喜がいなくなっってから初めてだよな??俺の話聞いて安心したんじゃないか??」

「……それもそうね。あの2人もだいぶ参ってたってことか」

「違うない。今はこのままにしとくか。もういつときこの久々の平和なひと時を……な？」

「分かったわ。このまま2人を見守りましょ」

真備と凧のそんな会話が俺の耳に入る。端からいい人みたいな空気だがつまりを言うと俺達を放置すると言ってるのだ。

この薄情者!!

「はあゝ。なんか自分で言うのもなんだが今の俺って変態じゃないか??」

「ん??確かにヒナ君は変態さんかな?理由つけてまで温かい屋

上。しかも私の膝枕で寝るためにあんなに頭を働かせたんだから」

「……………本当に何でもお見通しだな」

詰まるところを言えばそういうことだ。俺は変態だからチエのふとももを見てたわけではない。

寝たいからチエに膝枕してもらいにたかっただけだ。

だから俺は決して変態なんかではない！！

「わお ヒナ君肯定しちゃったね 大胆発言」

「……………俺は寝る！！！！」

あまりに不利な状況下。俺は照れ隠しに手を頭に敷いてゴロンと横になる。そして周りの声はすべてシャットアウトし脱兎のごとくという言葉みたいに素早く逃げるように瞳を閉じた。

「て…照れ隠しに寝るなんて…ヒナ君可愛い」

なにか聞こえたような気がしたが俺はそれを盛大に無視してゆっくりと頭の思考を止めていく。

背中に当たる暖まった地面の妙な暖かさ。吹き抜けるまだちよつと冷たい風の心地よさ。そして照りつける太陽の適度な陽光。その全てが俺を眠りへと誘った。

昨夜あまり寝てないのもまた眠りを増長させる特效薬となっている。

春の揚々としたこの感じ。俺はとても好きだ。

寝やすいのもさることながら口から息を吸い込むたびに流れ込んでくるこの甘い空気も俺はとても気に入っている。

この空間がずっと続けばどれだけ幸せか。そう思ってしまう。あの日のことを一瞬でも忘れられるこの空間が

だがそれは本当に一瞬のこと。俺はこの暗闇に閉ざされたこの空間の中でどうしても思い出さなければいけない。

あの日のことを　　輝喜がいなくなったあの日のことを。

みなさんお別れです……。大好きでしたよ……。

はっと目を開けると瞳の中にはあの日と同じような青い空が飛び込

「……問題 exist?」

俺はそんなみんなの様子にポカーンと口を開けてそうポツリと呟く。けどそれでもみんな動かなかった。

「The desire to be happy is common to all of us……」

そして次の瞬間。俺の光は何者がの手によって遮られてしまう。俺に乗るのは人の形をした漆黒の影。

俺はその影の正体を知るためにゆっくりと顔をもとの場所まで持ち上げていく。

だが結局寝ころんだままの俺。顔をさっきの位置に戻すのにそこまで時間はかからなかったためその姿を見るのは簡単だった。朱い髪をしたその姿を

「こんにちわっす」

その鈴のような声に俺は反応できない。なぜならばその声の主の姿

を見て俺自身もほかのみんなと同様に固まってしまったからだ。

俺の顔を真上からのぞき込むように見るその少女。

その姿はあのとときの輝喜と同じように太陽の逆行によって神聖なものに思える。

言うなれば”天から野原に舞い降りてきた天女” と言えるくらいだ。

「だ…れ…??」

そのとき遂に固まりが解けたのかこれまた鈴のような声が響く。ずっと隣で聞いてきた声。チエの声であった。

そして俺達は知る。【天】から【野】舞い降りたようなその少女の名前を

「こんにちはつす先輩方 ”天野うずめ” と申しますっす」

第54話 天より野に舞う（後書き）

作「はい。てなわけでみなさんこんにちは。前回はお休みでしたが今回からまたいつもと同じく敵キャラ情報を載せていきたいと思えます」

知「よろしくお願いします」

作「じゃあいつもながら時間がなかったのでさっそく敵キャラさんに来てもらいましょう。今回の敵キャラさんはこの人です」

黒「黒羽だ。よろしく頼む」

作「はいよろしくお願いします。今日の敵キャラはこの人黒羽さん。ちなみに本名は

”黒羽一樹くろはねいつき”

と言います。さらに言わせていただくと一応異端者のリーダー的な人です」

黒「ツンデレのマトーバや生意気なクルースがいるから纏めるのが大変だ」

知「あははは……確かに2人ともキャラこゆかったもんね……」

作「いつもいつも空気にされてたまるかー！！てなわけで黒羽の詳細を述べていきたいと思います。まずは容姿ですがイメキャラはバ

カテスの【常村】なのでモヒカンが特徴。ちなみに常村をもうちよつと格好良くした感じですよ。で人の呼び方に特徴があります」

知「あ！ー！そういえばさつきも私と作者さん呼ぶときおかしかったよね？？」

黒「俺は名前を呼ぶとき人の名前を伸ばす癖があるんだ。例えば来栖ならクルース。的場ならマトーバみたいにな」

知「ふ〜ん。ちなみにちなみに私は何て呼ぶの？？」

黒「ん〜。ヒメーノジヨウじゃないか？？」

知「……呼びにくくありません？？」

黒「気にするな。俺は一切気にしないから」

作「はい。止め止め！！次回予告行きます！！

ついに邂逅した日向達と天野うずめ。彼女の目的とは何なのか？？

その目的を掴むため日向達が彼女に問い詰める。

同じ頃。瑠奈は異端者の2人にある指示を下す。彼らの目的とは一体？？

次回【三つ巴の思惑】

日「問題 nothingだぜー！！」

知「そういえば何で今日は黒羽さんが来たんですか??普通リーダー
—なんかは最後だと思っんですけど??」

黒「……作者が最後の一人の名前を忘れたからだ」

知「ひよ??」

作「いつもながら俺空気!?!いい加減構って!!」

次回に続く!!

第55話 三つ巴の思惑(前書き)

すみません。ここ数日テスト期間中だったので更新できませんでした。

そのことを心からお詫び申し上げます。

ちなみに人気投票ですがいまだに1人だけです。このままでは本当に俺が可哀想な人になりそうなのでぜひ投票お願いします。

それでは本編に

(^ - ^) | 目了

第55話 三つ巴の思惑

日向side

「こんにちはつす先輩方”天野うずめ”と申しますっす」

天から野に降りてきたような美しさ。

彼女を例えるならそれくらい言っても過言ではない。

真備の言った通りの朱い髪。雪を思わせるような白い肌。そしてルビーのように朱い輝きを放つ深紅の瞳。それら全てが彼女の雰囲気を高めていた。

「ただどそんな明らかなる欧米人の風貌をした彼女だが名前は”天野うずめ”という日本人の名前。」

それも相成って俺は彼女を見た瞬間体を硬直させてしまったのだ。

「どうかしたっすかみなさん??固まってるっすよ」

『……………』

心配したかのような彼女の甘い声。だけどその声に反応できる人間はこの場にはいなかった。

圧倒されたのだ。彼女のその雰囲気。

あははは 変わった喋り方ですね

そのとき俺は再び聞こえるはずがない声を聞いた気がした。あの屈曲のない純粹そうな笑みを浮かべた輝喜の声を。

あいつが居てくれれば いや。あいつが居なければ俺達は俺達でなくなる。偽物でもあいつのあのハイテンションな性格は俺達の支えだったと改めて感じた瞬間だった。

おそらくあいつならばまこんなとき顔をひきつらせながらもさっきみたいに俺達が話をしやすくするための言葉を言っていただろう。そして俺達はきつとあいつにおんぶに抱っこでいたかもしれない。絶対にそうだ。

それが俺達とあいつとの完全に出来上がってしまった関係なんだからな。

でも。あいつはいない。俺達を陰ながら支えてくれたあの眼帯の少年はいなくなった。

だから俺達は進まなければならぬのだ。あいつなしの俺達を見つ

けるためではなくあいつを含めた俺達が笑いあえる未来を目指すために。

だから俺達はいっつを見つげ出し取りあえず一発ぶちのめしたい。そのため俺達は

「……天野うづめ。桜時学園の中等部2年の天野うづめで合ってるか??」

「そうっす!!その通りっす!!うちはあんさん達言う天野うづめで間違いないっす!!先輩方」

俺達は。今いるこの現状から一歩前進するために彼女と出会ったのだ。

美濃輝喜について何かを知っているであろう彼女に。

「……ちょうどよかったわ。あたし達もあなたに聞きたいことがあったから」

「ふふふん そう言うだろうと思ってうちも来たっす どうやらうちのことを聞き回ってた先輩がいたって話だったっすから」

「…それは俺のことなのか??天野うづめ??」

「違つつか？？それとつづめでいいつすよ 羽前真備先輩」

「……じゃあさすがはつづめだな正解だ。さすがはあいつ 輝喜の知り合いなだけはある」

俺はニヤリと口元を歪ませる真備を横目にほくそ笑む。今までの真備では考えられないほどの確かな言葉のジャブだったからだ。

さりげなく加えられた輝喜という単語。俺は真備のその軽いジャブに目の前の少女 天野つづめには見えないようにグッと親指を突き立てる。

「……輝喜さんつすか」

そして真備の放った単語は確かに彼女に動揺を誘う。

その証拠に俺の位置からは太陽の逆光で見えない彼女の表情。だがその表情は一瞬強張り口調も乱れたような気がした。

やはり彼女には”輝喜”という単語が何かしらの意味を持つようだ。

「……………」

今度は俺達じゃなくつづめの方が固まってしまつ。だけど俺はここで手を抜く気はなかった。

太陽の逆光で見えない彼女から寝ころんだままの俺は少しだけ顔を横にずらしついこの間のことを思い出してみる。

あれは約2ヶ月前のことだ。あの日俺とチエは大雨の中傘を忘れたためズブ濡れになって帰宅した。

だからかズブ濡れになった彼女は風邪をひかないように制服の上着を脱ぐ。そしてこのときチエの一日一善ならぬ一日一恥が発動したのだ。

そう。彼女は気づかなかつたのだ。ずぶ濡れになった体。それを守っていた最後の砦を彼女は自らの手で武装解除したことに。

「…………… / / /」

今思い出しただけでも顔が赤くなってしまつ。制服の上着を脱いだ先にあつた透け透けのシャツ。

それにさらに包まれたピンク色の???。あれは俺には刺激が強す

きた。

それ故俺はあれから2ヶ月たった今でもあれを思い出すだけで赤面してしまうのだ。

なんせ好意を抱いてる女の子の????な姿だったから。

「ひょ???どうかしたのヒナ君。顔赤いよ??」

「……問題e x i s tだ」

だが今はこれでいい。いやこれのほうがいいのだ。

今の俺の状態はうづめの横にて寝転がっている。それに顔を微妙にずらして目を泳がせ顔を真っ赤に染め上げているのだ。

ここまで来れば分かると思う。俺のこの行動。これは俺自身が引き起こしてしまったという設定である緊急事態を想定しての行動なのだ。

それは

「あーうづめさん???なんとというか……ひっじょくに言いにくいん

「ただど……あなたのパンツ見えてるよ」

「……………へ??？」

俺の言葉にさっきまで呆然としてしまっていたうづめはそんなスットンキョんな声を上げ燃えるような深紅の瞳を思考停止した状態で約2回ほど可愛らしくパチクリとさせる。

ただどすぐに俺の言葉の真意を理解したのか彼女は瞬く間に即興で赤面を演じた俺よりもさらに顔を真っ赤に染め上げるのだった。

「な……な……なあ!!??？」

それよりさらに数秒。ついに彼女は耳の奥まで響くような鈴のような声を全身から発する。

それにより彼女より一番近くにいた俺はダイレクトにその声を耳に受け耳鳴りが起こってしまった。

まあわざととは言えこれは俺が悪いから謹んでなおかつ甘んじてこれを受けよう。

それにたぶんこれで俺の思惑通りにこの場が乗り進むと思うし

「姫ノ城先輩！！羽前凧先輩！！ここに女の子の敵がいるっすよ！！！！」

「ふふふ……いつかやるとは思ってたけどまさかあたしと知恵理の目の前でやるなんていい度胸してるわね日向……」

「……ヒナ君。ちょっとお話があるけどいいかな？？ちなみにヒナ君には拒否権も人権も発言権もないからね？？」

思うし……。あれ！？なんか俺の予想してた状況とは違うのはなんで！？

俺が気付いたときには時すでに遅し。いつの間にか凧に抱きついてエンエンと泣いた振り（ここ重要）をするうづめ。

そんなうづめを抱きしめて俺のことをゴミを見るような目で見てくる凧はなぜか手に持ったマジックをへし折っている。

そして最後にチエだが。チエに到ってはなぜか見惚れるぐらい綺麗な笑顔をしながら俺の頬に優しく手を添えていた。

端から見ればまるで俺を誘惑しようとしているお姉様にも見えてしまふ。だが俺は知っている。

彼女のこの見惚れるぐらいの綺麗な笑顔はブチキレしまっている証だということを

「ヒナ君 後でじっくりお話ししようね」

「はい」

結局俺は彼女には勝てないという結論に至ってしまう。俺は自分の弱さに溜め息をついてしまった。

だけど向こうの2人 凧とうづめをチラッと見てみるとどうやら俺の計算通りな展開になっていた。

2人でうんうんと頷き合い語り合っているその姿は何より仲良さげである。

俺は難なく2人を仲良くさせることに成功させたのだ。

共通の敵（俺）を持たせるということで。

人間。共通の敵や共通の嫌いな人などについての会話は弾むものだ。

だから俺はそれに漬け込んで自らを女の敵になろうと一芝居打って出たのだが俺はどうやら1つの過ちを犯したらしい。

それは俺並みに頭がいい凧と俺のことに關してのみ鋭いチエの2人

が本当に俺を変態だとみとめてしまったことだ。

あれ???俺ってそんなに信用なかったわけ??

「……日向。俺はお前が“そういう奴”でもずっと友達でいるからな」

そのとき。不意に今まで俺達の蚊帳の外にいた真備が何やら真剣な面持ちで俺にそう言う。

だが今の俺は真備のその優しい言葉が涙が出るほどに嬉しかった

2030

????side

「……いいですかお2人とも。僕の方で彼らをここに誘い込みますのでそこを強襲してください」

ここは桜時市の繁華街”街”の路地裏の一つ。そこに2人の青年と1人の少年が真剣な面持ちで何か話し合っていた。

青年の1人はうづめとは違い染め上げたような廃れた赤髪の短髪に大柄な体格。そして一見したら酷く強面な青年“まじははじめ的場一”。

もう1人は首にヘッドフォンをかけ垂れた前髪で片目を隠した色白の一見すると女にも見えてしまう美青年“なぐもつまつま南雲当摩”

この2人こそが今回の戦争の弾丸とも呼べるアビリティーゼロ異端者の一員である。

そしてそんな2人の間で指示を出す少年。綺麗な藍色の髪を持ち手には革手袋を付けた2人より小柄な彼はどう見ても2人とは世代も人種も違う。

だがこの少年こそがこれから起こる戦争の引き金としての場と南雲の2人を打ち出す人物。

” 玖珂未〓 瑠奈〓 セイレン ”

その人であった。2人は瑠奈の言葉に強く頷く。なぜならそれは2人にとって待ちに待った言葉だったからである。

「べべべ…べつに楽しみなんかじゃないからな!」

「……落ち着け的場。興奮するのも分かるがいつも以上に素直じゃないぞ」

「ふん！！お前に俺の何が分かるっていうんだ！？」

「……分かるさ。なぜなら俺には全てが聞こえているからな……」

目を閉じてゆっくり深呼吸しながら南雲はゆっくりとそう呟く。的場の方も南雲の“全て聞こえる”その力を知ってる故その言葉を聞いた瞬間何も言えなくなってしまった。

だがそれでも的場の考えていることは目の前にいる南雲には筒抜けであったようであるが

そんな2人の様子に瑠奈は思わずクスリと笑みを零した。例えこれが仕事の関係でも彼らとは自分がユニオンナンバーズになってからずっと共に過ごしてきた人達。

だからこそ瑠奈は彼らの願いが叶うことを切に願っていた。なぜなら彼らは自分と似ているから

「さて。お2人共。そろそろ時間ですから指定の場所へ行ってください。お2人の五分運をお祈りしています……ギリギリで」

そのとき不意に瑠奈の脳裏に今朝出会った1人の少女の記憶が蘇ってくる。だが瑠奈はその映像をすぐに取り払う。

「いけませんね……」

瑠奈はユニオンナンバーズ。最強の能力戦闘部隊の1人に復讐者でもある。だから彼は彼女のことを忘れなければならない。

なぜなら彼女は今回彼らの狙う標的ターゲットの1人だから

???side

「…そう。そうだったの」

所変わってここは日向達がいる桜時学園の屋上。そこには先程までとは違いどこか悲しい顔をした知恵理と凧が話を聞いていた。

その目の先には 涙を流すうづめが顔を手で覆っている。

「あははは、そうなんすよ。うちがあの日あの日に美濃先輩と体育館裏に

いたのは所謂“告白”ってやつとすよ……まあ見事に振られたっすけどね」

対してうづめの方は健気にも涙をボロボロ流しながらもそう笑顔で伝える。その姿に2人は感動していたのだ。

結果から言うと日向達というか知恵理と凧の2人はうづめが輝喜の件には関係ないと判断していた。

何よりそれを裏付けるための証拠はそれこそ今までの彼女と出会っ
てからの行動。それに日向達が信頼している情報通の新聞部部长で
ある“須藤百合”からの情報など山のようにあったからである。

まず輝喜と体育館裏にいた写真。これは明らかに告白現場だったの
だろう。

それで基本的に優しい性格の輝喜は新聞に載せられるその写真によ
りうづめが傷つかないように百合に取り計らって新聞に載せないよ
うにしたのだと予想できた。

それがおそらく百合が撮った本人　つまり輝喜に懐柔されたと言
ったことなのだろうと思う。

次に輝喜がいなくなったのと同時期から現在までの2週間学校を休
学していた件。これは本人曰く“中等部に入学してから長年思い続
けていた美濃先輩に振られてショックだった”かららしい。

だがそれも納得ができる。輝喜のことだからきつと酷い振り方はし

てないだろっけど長年思い続けてきた好意を抱いていた人に降られたらそれはショックだと思っから。

そして最後にさっき真備が輝喜の名前を出したときに動揺したこと。

これについては日向と真備自身も反省していた。なぜならずっと好きだった人に振られてそのショックで2週間も休学していた少女にあの言葉は酷すぎたからである。

だから日向も真備も知恵理と凧に無理やり頭を下げさせられ自らもちゃんと反省していた。

「いっすよ先輩　うちはもう吹っ切れたっすから」

直接にかけられた彼女の言葉は日向と真備をも感動させたのであった。

以上が日向達4人が出したうづめと輝喜についての見解である。それを踏まえた上で4人はうづめと輝喜の关系到結論づけるのであった。

結論。彼女と裏の輝喜との関係は一切ない。それと天野うづめは健気でとてもいい子ということに。

勘違いだと判断した日向達は深く反省して4人揃って頭を下げた。美少女後輩に頭を下げる先輩達。なかなかシユールな光景だ。

「あははは〜 気にしないでくださいっす うちは大丈夫っすから
」

「うんうん。本当にいい子だなうづめは」

「ええ。しゃくだけど今回はバカ弟の意見に同感ね」

「ふふふ うづめちゃん可愛い〜」

「こらチエ。勢い余って抱きつこうとするな」

日向達4人 いやうづめを含めた5人はここに新たな絆を得た気がした。

確かに日向達4人に比べてうづめは一学年下。年下だが日向達はそんな事は気にしない。彼らにとってみればこれこそが普通的情景なのである。

P i r r i P i r r i P i r r i P i r r i

そのとき和やかな空間に一本のメロディーが流れ出す。その機械的な歌声は明らかに携帯電話のもの。

だがその電話のメロディーは誰も聞いたことがない音。日向は困惑した。

だがそれも束の間。日向の動揺とは裏にうづめはポケットから水色の携帯電話を出しパカリと開くのが目に入ってきたからだ。

だがその直後。うづめの表情は目に見えて固まった。目は見開き唇は震えそれこそ超特急な勢いでパタンと携帯電話を閉じる。

「すみませんっす先輩!!! ちょっと急ぎの用事を思い出したのでこれにて失礼するっちゅ!!!」

そして早口言葉のようにスラスラ言葉を口から並べ見事に噛んだ。

その慌てっぷりは見ていて可愛らしく日向達もニッコリと微笑む。

「問題nothing。気にすんなづづめ。じゃあまたな」

「ウーちゃん。今度はゆっくりお話しようね」

「んじゃあな！俺としてはお前のことをもつと知りたい！！だからまた会おうぜ！！」

「……………あんだ。それ聞き方によればただのナンパ男よ??まったく……………ああそれとづづめ」

皆思い思いに別れの言葉を告げる中。凧は去り行くづづめの背中を見ながら呼び止める。

だがづづめは凧の声が聞こえなかったのかはたまた無視してるのか背を向けたまま走り続ける。

そんなづづめの姿に凧は一度クスリとほくそ笑むと彼女の背中に向かって叫ぶのだった。

「 You are fortunate in having
good friend! 」

あんたはいい友達

を持って幸せね

その言葉は彼女の耳に届いていたか分からない。だが彼女は風のその言葉を聞いた瞬間にタイルの淵に足をかけ転んだことをここに記しておこう。

「まさかドジっ子だったとは予想外だな…」

「ヒナ君どうかしたの??もしかしてウーちゃんに萌えちゃったの??」

「ああ…萌えたさ。でも俺はあれをも超えるドジを通り越した天然な幼馴染を知ってるからな…」

「………それってもしかして私のこと??私ってそう思われてたんだ」

日向は自分の言葉でシヨボーンとしてしまった知恵理に何を今更と苦笑いしてしまう。だがそこは幼馴染の2人。日向は次に何を言えればいいか心得ていた。

普段なら恥ずかしくて言えないその言葉を

「チエ。眠いから膝枕してくれないか??」

日向のその言葉に知恵理は最初キョトンと呆気にとられた表情を
するもすぐに日向の真意を読み取り「うん!!」と嬉しそうに頷く。

ゆっくりと地面についた知恵理のそれは白く柔らかそうに日向を誘
う。そこに日向は戸惑いなく頭を埋めていった。

ゆっくりと流れ行く雲は太陽の光を遮る。その自然の摂理を見て頭
に柔らかい物を感じながら日向は思うのだった。

「…… You are fortunate in havin
g good friend . それは一体誰に向けて言った
言葉なんだ風??」

光と風。それに太陽。見上げた先に見えるそれは1つも欠けてはな
らない昔の俺達の関係のようだった。

風のあの言葉。それは俺達にも言えるのだ。真備や知恵理。それに
俺や風。そしてあいつ。美濃輝喜にも

うづめside

「…最悪なタイミングですよ」

あの後うちはすぐに屋上から遠く離れ今はさっきまでいた校舎裏の影にいたつす。

なぜうちがこんなことになっているか。その原因はこの電話の相手にあるつす。

P i r r i P i r r i …… P i

「…もしもし??」

「遅いですよつづめ。まあどうせ携帯電話が鳴った瞬間にいた場所が気まずかったので急いで出れる場所まで行ったといった所でしようか。ちなみに最低1回は転けましたよね??」

「うう…大正解つす」

うちが電話に出た瞬間。うちの電話にでるまでの行動をまるで見ていたかのように正確に言い当てた電話の相手。

それはあの場所の特にあの4人には聞かせてはいけない声でしたつす。

その声の正体は優しくして罪深い眼帯をつけたミステリアスで。だけど穏やかな笑みを浮かべる少年

「輝喜さん」

「……どうしましたつづめ。声の上擦ってますよ??」

さっきまでのうちと日向さん達との会話の主軸にしてうちの“思い人役”の美濃輝喜さんでしたっすから。

そう。うちは日向さんや知恵理さんに嘘をついてたっす。そして勿論うちを友達と言ってくれた凧さんも。

ただどうちはあの人たちに出会い。あの人たちの温かさに触れたからなんでこの人が 輝喜さんがこだわるのかを理解したっす。

あんないい人達。そうそういないっすからね。

でも輝喜さんはもう決して日向さん達と接触することはないと誓ってるっす。絶対に日向さん達を守ると言ってるっすのに

「どうしましたつづめ??黙ってたら何もわかりませんよ??」

「……輝喜さん。さっきまでうち。日向さん達に会ってたっす」

そして気がついたときにはうちは自然とそう言ってたっす。何を考えたのか何を思ったのかは分からないっすけどうちの口はいつのまにかそう動いていたっす。

「……っ!？」

電話の先の輝喜さんが動揺したのを感じたっす。でもそこはさすがに輝喜さん。動揺を声色に出すことはなかったっす。

でもうちはそこで話を止める気はないっす。だってあんな悲しい顔をした輝喜さんを見たくないっすから。

「……皆さんとてもいい人達だったっす。最初はうちのこと疑ってたみたいっすけど疑いが晴れたらとても優しかったっす」

「……」

輝喜さんはうちの言葉にただただ押し黙ったままっす。でもピリピ

りとした動揺は電話越しのうちに怖いくらいに伝わって来てる
す。

ただどうちはその威圧に挫けそうになりつつもさらなる追い討ちを
かけたつす。

「 You are fortunate in having
good friends. 」

「 ……！？ その言葉はもしかして…… 」

「 風さんがうちにかけてくれた言葉つす。うちの質問にも そし
てあんさんのことも含めた言葉だとうちは思っつす 」

そこまでした。輝喜さんが電話に耳をつけていられたのは

うちのその言葉を聞いた瞬間。輝喜さんはまるで耳を塞ぐ勢いで電
話を切りうちが気付いたときには「プープー」という機械音が残っ
ていただけでした。

輝喜さんの気持ちもわからないことはないつす。でも輝喜さん

「 輝喜さん。あなたは本当に“レリエル”になるつもりつすか

……」

夜の天使“レリエル”。そして輝喜さん自身から名乗るようになったコードネームでもあるその名前にうちは今恐怖を覚えてるっす。

心の支えを失った輝喜さんがいつか本当に夜の 闇になってしまわないかということに。

「 あなたに必要なもの。それはたぶんあなたを照らしてくれる “光” だとうちは思ってますよ……」

でもそれは“光”を体で現したような光の能力者である彼には一番難しいことのように思えましたっす。

?????side

「はあ……はあ……はあ……はあ……はあ……はあ……はあ……はあ……はあ……」

桜時市の海辺。そこに海の輝かんばかりの陽光とは不釣り合いな黒いフードで顔を覆った1人の少年がいた。

黒いその姿は彼の名前と完全に合っていない。

だが彼のコードネームにとってすればその姿はまさしくピッタリといいくらいの姿であった。光の力を持つ漆黒の姿をした天使。まさしくレリエル。

夜の天使“レリエル”それこそが今の彼の名前であり彼の姿であった。

親友と呼び合った紅翼の 真昼の太陽の天使“不知火日向”とは真逆のその姿。それこそが彼

”美濃輝喜”の姿であった。

「はあ……はあ……はあ……はあ……はあ……はあ……まさかあの程度の言葉で……ここまで動揺してしまいますとは……まだまだですね」

輝喜は額から流れる冷や汗をゆっくりと右手で拭い去る。

だが輝喜自身その動作で気付いてしまった。自身の右手が激しく痙攣してしまっているということに

輝喜はその右手を正面から真っ直ぐ見る。それは自らにまだまだ彼らとの 日向や知恵理。真備に凧の4人に未練があるということの何よりの証拠であった。

それを見て輝喜は強く唇を結び噛み締める。

「未だに俺はあの生活に未練を感じてるのですね」

ギリツと噛み締めた歯の音が鳴り響く。それはある種の離別の証だったのかもしれない。

だが輝喜は厳しい顔にはなることはない。どこまでも行ってもどこまで心が荒れても輝喜の顔は穏やかな顔のままだった。

「日向。どうやら俺はどこまで行ってもあなた方から離れられないようです。だからせめてものであなた方の生活を守り抜いてみせますよ」

そこまで眩くと輝喜は唇を緩ませ歯にかけていた圧力を軽くする。

そして優しく口元をほころばせ。やがて小さく眩くのだった。

「だから“問題 nothing”です。あなたはただ知恵理を護ることだけを考えてください……」

それは輝喜が自らの心に封じ込めた偽りの願いであった。

第55話 三つ巴の思惑（後書き）

作「おひさしぶりですみなさん！！今回はここ最近続いた敵キャラ情報の最終回！！今回は俺の空気が戻ることを切に願います！！」

知「こんにちは 姫ノ城知恵理です 今回は異端者編最後の敵キャラ南雲さんの紹介です」

南「……よろしく頼む」

作「さっそく俺なしでコーナー始まった！！！！？？？」

知「はい ではさっそく紹介していきたいと思いまーす！！最初に南雲さんの本名は

”南雲当摩”
（南雲当摩）

いつもヘッドフォンをかけて前髪で片目を隠したちよつとクールと
いうか物静かな方です！！ちなみにイメキャラはBleachの”
キラいづる”だそうです」

南「……ちなみに名前の由来はとある魔術の禁書目録の”上条当麻”
だ」

知「わお 南雲さんのイメキャラって統一性一切ありませんね」

南「……そうだな」

知「ふふふ 南雲さんってどこか水城さんに似てますね。じゃあ次は口癖なんかりあつたら教えてください」

南「……“俺にはすべて聞こえている”これが俺の口癖だ。さらに言うとこれは俺の能力が関係している」

知「ふゝんそうなんだゝ」

南「……そしてこの設定は“FAIRY TAIL”のコブラの設定を頂いている」

知「あはははゝなんかもうごちゃ混ぜだねゝ」

作「だー！！！！？？？いい加減俺の空気を解消しろー！！！！てなわけで次回予告！！」

衝撃的出会いが訪れた1日が終わる。そんなとこ日向達4人は久しぶりに街に繰り出した。

だがこの街でも新たな出会いが4人を待ち受けていた。

そこにいたのは ？？

そしてそんな中日向の前から知恵理が自らの意志で失踪する。

果たしてその真意とは???

次回【知恵理失踪事件】

日「問題nothingだぜー！！」

南「……知ってるか??もうすぐ俺の出番は終わるんだぜ??」

知「ひょ??それってどっしり……」

次回に続く!!

作「最後に一言くらいは言わせて……!!……??」

第56話 知恵理失踪事件（前書き）

人気投票現在 1名

それはそうとタイトルが変わったことは気にしないでください。

あと今回の後書きには前々から出てきたユニオンナンバーズについてちょっと触れたいと思います。

詳しいことはこの章の最後に本編で証したいと思うので今は大まかなことだけを証します。

それでは本編（ ^ - ^ ） 一日了

第56話 知恵理失踪事件

日向 side (20分前)

「ん？なんだあれ？」

衝撃的出会いが訪れた学校が終わり俺達は久し振りに桜時市の繁華街”街”に来ていた。

だが着いて早々真備が駅前の広場にて人だかりができている場所を発見し指を指す。

そんな真備の指先に誘われるように瞳を上げていくとそこには確かに人だかりができていた 2カ所も。

ただの人だかりならさして珍しくない。俺達もどうせ喧嘩だろうと無視するのだが今回は違った。人だかりができている場所が2カ所あるのもそうだが今回はその人のその量が半端ないのだ。そんな尋常ならぬ騒ぎにはさすがの俺達も黙ってはられない。

いや。性格には俺とチエではなくバカとロリの双子陰陽師の方だが……な。

新しいものやら珍しいものに目がない単純な思考の真備と気になることはとことん調べたがる知識欲のの塊な凧のコンビ。

さらに付け加えると2人は一切認めてないが双子ならではの思考の類似が2人にはある。それ故に

「よし真備！！あなたは右の人ばかりを見てきなさい！！あたしは左に行くから！！」

「へ！！合点承知の助だぜ！！」

2人は時々いきぴったりになったりするときがあるのだ。傍迷惑なことにも。

俺はそんな2人の奇想天外な行動に思わず溜め息をついてしまった。

「…たくあの2人は。いつにも増して元気だな」

「あははは〜まあそれがマキ君とナギちゃんの好いところだからね〜」

呆れ顔で苦笑いを浮かべた千工を横目に見つつ俺はもう一度溜め息を吐き出し真備と凧の動向を見守る。2人ともどこか危なっかしい所があるからな。

最早気分はやんちゃな子供を持った親の気分だ。

俺はもう一度チラリと千工を覗き見る。表情こそはさっきとまったく変わってないがその顔にはどこか穏やかさが見える。

それこそ親やお母さんと言ったそんな感じの顔に。もしかしたら親を知らない俺の思い違いかもしれない。でも俺にはそう思えたのだ。

「ヒナ君どうかしたの？」

俺の視線に気付いたのか千工が俺に視線を向け小首を傾げる。

俺のツボにドストライクなその仕草。

俺は可愛らしいその仕草を見て照れ隠しに頬を指でポリポリ掻きながら視線を別方向に反らしてしながら応えるのだった。

「問題 nothing だよ千工。俺は一切気にしないから」

「ヒナ君が気にしなくても私が気になるよ〜??」

そう言いながら頬をぷうーと膨らませたチエに俺は吹き出してしま
う。小首を傾げるのと同等の破壊力を持つその可愛らしい攻撃に俺
は我慢しきれなかったのだ。

「はは…子供みたいだな」

「むう…」

「くくつ…」と意地の悪い顔をして俺はチエの頬を人差し指でつつ
き空気を抜いていく。

そのときのチエの真っ白い頬はまさしくやみつきになりそうなくら
いに心地よい柔らかさであった。

「…ねえヒナ君。もう空気全部抜けちゃったよ？」

「ん？そうだな…」

チエのご忠告を軽く受け流し俺は気にすることなく頬をつつき続け

る。

するとチエも諦めたのかさっきの俺より深い溜め息を吐き出すとそれからは俺の指のなすがままになった。

『』
……………『』

フニフニと楽しげに頬を緩ませながらチエの頬をつつく俺。会話がなくなつたせいかさつきよりも辺りの声が大きく聞こえるような気がする。

愉快的な笑い声。悲哀な泣き声。ダルそうな唸り声に静かな叫び声。そして

「はあ!?!?ぶつぎけんじゃないわよ!!?!?!!?!?」

修羅場な怒鳴り声。ていつかなぜかお怒りモードなロリっ子の声。

俺とチエはその明らかなる風の怒鳴り声に思わず頭を抱えてしまう。心の中で思っていることはまったく同じであった。

はあー…今度は一体何があつたんだ？

それは最早諦めが入った心情。そしてあの2人に いや。あの2人にチ工と輝喜を加えた4人と付き合ってきた俺にとってみればもう慣れてしまったこと。

その2つの言葉に尽きる事態なのである。まあたぶん他の奴らから言わせるとそこに俺の名前も入ると思うけれども

何はともあれ俺とチ工は風の怒鳴り声が聞こえてきたであろう右の人だけに向けて脚を進めていく。

せめて喧嘩沙汰になっていなければいいのだが。そうだったら“相手側”のほうがない。

なぜなら風の芸術的な関節技が的確に。しかも確実に相手の意識を刈り取ってしまうかもしれないからだ。俺はそのときの映像を考えるだけで背筋に嫌な汗が流れてしまう。

だってあれに耐えられるのはそれなりに耐性ができた人だけなのでから 経験者は語る（俺＋真備＋輝喜）。

「…大変なことになる前にさっさとあいつを止めないとな」

俺は祈るような心境でそう呟き歩を進めていく。あいつを止めることは容易いことではないだろう。だがこっちは秘密兵器がある。それは輝喜を含めた俺達4人が絶対に傷つけない人物。そしてそれ故に俺達が絶対に逆らえない人物でもある。その名は

「チエ。後頼んだ…ぞ…」

そこまで言っただけ俺は言葉を失ってしまふ。

なぜならチエに凧のことを頼もうとした矢先。チエの姿がそこにはなかったからだ。

学校終わりの夕方。人混みが多い時間帯の繁華街のしかも中央通り。もしかしたらはぐれてしまふのは必然だったかもしれない。

でも俺はそれでも慌ててしまふ。だってあいつは1人でいたらナンパの絶好のカモだからだ。

「…！？…チエ！…！！」

俺は急いで辺りを見渡す。だけど俺の周りには誰もいなかった。

そこからはもう必死だった。俺はただ街へと脚を進めていく。チエを探し出すために

知恵理 s i d e

それはまったくの偶然でした。

私は荒れに荒れる人混みの中ただ必死にそれを掻き分け追いつがって行きます。

波のように流れる人…人…人…。それはあたかも私の行動を拒むようにも感じました。

「はあ…はあ…はあ…!!」

だけど私は息を荒くしながらもその試練を乗り越えていく。

だって私が偶然見つけたそれは夜のようになつ暗闇のような存在。

でも私自身がずつとずつと追い求めてきた漆黒がそこにあったのでした。

パシッ！！！！！

だけでも世の中そううまくいかないものでした。

なぜならひたすら闇を追い求めていた私は不意に強く手首を掴まれます。でもそれはヒナ君みないな優しい手でもお兄ちゃんみないな温かい手でもない。ただ冷たい氷のような手

「よお姉ちゃん。これから俺達面白いところに行くんだけどよかつたら一緒に行かないか？」

ただ私のことをそういつた目でしか見れない怖い冷たさのある手でした

「…え〜と〜ごめんなさい。私急いでるんでちょっと一緒には」

「そう言つなよ姉ちゃん」

私の遠まわしの拒絶の言葉にも男の人はニコニコと笑顔で対応してきます。

どうやらこの人。かなり手慣れているようです。ですが私もいつもいつもヒナ君達に守られているだけではいけない。

そういう決心とあの影を絶対捕まえる。そういう決意でここまで来ました。

だから私は負けない。あの日のようにヒナ君達に守られるだけじゃいけないんだと。その言葉の元私は動いていました。

「やめてください！！私はこれから行かなきゃ行けないところがあるんです！！だからあなたと一緒にはいけません！！！！」

大丈夫。私ならやれる。

いつもはヒナ君達に向ける柔らかい眼差しにしか使わない瞳を私は力一杯使つて男の人を睨みつけます。

だけど男の人は顔を赤らめてゆがんだ顔を広げるばかり。

もしかしたらこの人はナンパ目的ではなくて風邪を引いて今にも倒れそうな所を通りかかった私に助けを求めただけかもしれない。

その考えが頭に過ぎりもしそうだったらと今度は睨みつけた目を困惑したようにオロオロとさせさせます。

するとやっぱり男の人は顔を赤らめて歪みを広げていくばかり。私はもう我慢できませんでした。

「あ…あの。体調が悪いなら救急車呼びましょうか？それか別の人を…キヤ…！」

ここで私は大きな過ちを犯してしまいました。

そう言ったときにはすでに手遅れ。私は掴まれた手首を強く握られいきなり引っ張られたせいで思わず悲鳴をあげてしまいました。

「はあ…はあ…そんな上目遣いで俺を誘ってんのか？それともオロオロしたところといいやっぱり素人か？…まあどっちでもいいかなんせこれから」

「……っ！？」

私自身。こうなることは覚悟の上で自分からヒナ君のもとを離れた
がら助けの見込みもありません。

でも私だってヒナ君がいなくても1人でできる！！絶対できる！！
そう考えていました。

でも現実はその甘くない。その考えが浅はかでした。

やっぱり私は1人では何もできない…何もやれない…私は弱いんだ。
そんな感情が頭の中でぐるぐると暗雲のように渦巻いていきます。
だって私は何の力もないから

悔しさのあまり涙がポタポタと瞳から溢れ出てきます。どうしても
止められません。

私はもう自分の力だけじゃどうしようもないことを悟りました。

私がこんなにも弱いなんて　私はただただ涙を流すしかありませ
んでした

「やれやれ。不知火達は何をしている??チーちゃん1人をこの街
で歩かせるなんて…」

「知恵理様を傷つける者は何人たりと許さん!!!!!!」

ボコッ!!バコッ!!

そしていつでも私は誰かに助けられている。ヒナ君しかり。マキ君しかり。ナギちゃんしかり。それにコウ君にも

私にはそれがいつもうれしくてうれしくてたまらなかった。

こんな弱い私でも好きだと言ってくれる人がいてくれることが私にはこれ以上にならないほど幸せだったので。

あの日までは

「ユリちゃん…イズ君…」

「チーちゃん。大丈夫だったかい??」

「知恵理様!!お怪我はありませんか!??」

私を助けてくれた2人。それはカメラを首から下げた大和撫子な少女に全身ピアスだらけの少年。”須藤百合”と”幹出雲”の2人でした

???.?side

「…良いぐらいの騒ぎになってますね。ギリギリで」

人集りができてしまっている広場。それを真上から覗ける広場前のビルの二階にある喫茶店。

その窓近くの席にてジュースを飲みつつ外の騒ぎを眺める1人の少年がいた。

藍色の髪に店内にいるにも関わらず皮手袋で手首から先を完全に隠してしまっている少年。

そう。ユニオンナンバーズと呼ばれる組織の1人である”瑠奈”である。

そんな瑠奈のくすみのない瞳が見つめるのは多くの人集りの中でさらに小さく映る小柄な少女。

「…羽前風」

（ほむかぜ）

なぜか人集りの中心にて和服を着た金髪の女性（？）と一悶着起こしてしまつたらしい彼女だけを見つめていた。

それは無意識の行為。だけれども普通なら思春期真っ盛りな少年にとつてみればそれは当然の行為と言えよう。

でもそんな無意識のもと動かされ彼女を追いかける彼の心に正直な瞳とは裏腹に彼自身内心では別のことを考える。

少女　羽前凧を陥れるという自分の心とは真逆のことを

それがユニオンナンバーズ。自分の私情には絶対に捕らわれないプロの中のプロ。ユニオンナンバーズの仕事である。

p i p p i p p i p p i p p i

「……………あ。南雲さんですか？あと少しでターゲットの羽前凧がそっちに向かいますので用意しておいてください……………ギリギリで」

喫茶店という人が多い場所故に友達と談笑していると思わせるため携帯越しに笑顔でそう言う瑠奈。

だが実際には無感情で淡々と告げられているその言葉に喫茶店にいる客はもちろん。電話越しの南雲ですら気付いていない。

彼らユニオンナンバーズも人間。電話越しで南雲に淡々と告げている中で彼の瞳に変化があったことに

彼自身ですら驚愕しているその新たに芽生えた感情による自分の知らぬ心の苦しみを。

…… p.1

「……この息苦しさは一体何なのでしょう。僕は一体……どうしてしまったのでしょうか」

携帯を切りまるで他人事のようにそういふ瑠奈。だけどそれでもそう呟く彼の瞳が風から離れることはなかった

第56話 知恵理失踪事件（後書き）

日「なあなあそういえば前から気になってたんだけど”ユニオンナンバーズ”ってなんだ?？」

知「ん〜そういえば一章から時々出てきてたよね?何の意味があるのかな?？」

作「今の所はこの意味については言及できません。でも敢えて言うならメンバーは10人とだけ言っておきましょう」

日「10人…ちなみにこれはどこから来てるんだ?？」

作「元は”Blackcat”のクロノナンバーズ。体の一部にローマ数字があるところが共通点かな。ちなみに10人のうちの5人はチルドレン計画の被験者でもあります」

知「ふ〜んそういえば悶君と瑠奈君も確かにそんなこと言ってたね」

日「確か悶が【?>4<】で瑠奈が【?>5<】だったよね?強さとか関係あんの?」

作「いいえ強さは10人とも一緒くらいです。ちなみに2人が現在出ているユニオンナンバーズですが2人ともチルドレンと呼ばれるユニオンナンバーズです。さらに言うとチルドレンのナンバーズを

”チルドナンバーズ”

その他のユニオンナンバーズが

”ユニオンジャック”

と呼ばれています」

日「ふーんいろいろ考えてあるんだなー」

作「はい。ということで次回予告いきたいと思います。

少年は1人の少女と出会う。だが少女はただの少女ではない。少女は魔法少女だった。

謎の言葉使いと少女の言動に少年はたじろぐ。

次回【不思議な魔女】」

日「問題nothingだぜー!」

知「そういえば今回も新キャラが出てきたよね?」

日「……ああ。そういえば出てきたな……ゴミが」

出「それって俺のこと!?!」

日&mp;真&mp;凧&mp;輝』』黙れゴミくず!!--空気が腐る!!--』』

出「ちょっと待て!!--不知火はともかく凧様達はどこから出てきた

!？」

日& a m p・真& a m p・凧& a m p・輝『ウザイ…黙って消えろクズ』

出「…コンチクショー!!」

知「あははは…」

作「再び俺空気!？」

次回に続く!!

第57話 不思議な魔女（前書き）

この度。第57話〜第59話までのお話を変換させていただくことを御了承ください。

そしてこの変換に関してもしかしたら混乱される方もおられるかもいたしません。そのことを作者として深くお詫び申し上げます。

作者†HYUGA†

第57話 不思議な魔女

???side

「おい！！いったいどこに連れて行くんだよ！！??」

「…分からない。Iは言われたとおりに動くだけ。じゃないとお母様に誉めてもらえないから」

”街”の華やかな街並みが建ち並ぶ中央通り。だがそこから道一本外れた裏道は昼なのに薄暗く人通りなど見あたらなくなる。

そしてそこを歩く2人の影があつた。

1人は体格がよく見た目スポーツが得意そうな体育系少年 羽前真備。もう1人はなぜかトンガリ帽子に箒を持った所謂魔女っ子スタイルの少女である。

一見してみると何の接点もなさそうな2人。実際に約20分前までは真備自身こんな状況になってしまつとは予想だにしていなかった。今日はもう何も起こらない高をくくっていたのだ。

しかしそれでも真備は彼女と一緒に進んでいく。

なぜなら目の前にいる彼女は【寂しがりな魔女】だったからである

真備 side (20分前)

「…なんだこりゃ」

俺こと羽前真備は一気に突撃を繰り出した人混みの中にいた1人の女の子を見て思わず空言のようにそう言ってしまう。

なぜなら俺の目の前に突然姿を現したのはまさしく魔女っ子。

アニメやら漫画やら小説やら。とにかくそのへんのもんに出てきそうなのはつきり言っただけを着ている奴が普通の顔した奴ならかなり痛い格好なんだけど

なんでだろうな。こんなの一切興味ない俺が言つのもあれだがめっちゃくちや似合ってる!?

ぶっちゃけそのままテレビにいてもおかしくなさそうなのがなんか俺の前に出てきやがったのだ!?

「……………??…??…??…??…??…」

そいつは突然転がり込んできた俺を不思議そうな顔しながら見つめてくる。

少しだけ低めの身長故。おそらく一見すると俺と彼女は兄妹のようにも見えてしまいそうだ。

だが敢えて言おう。姉貴じゃなくこいつみたいな奴が妹ならよかった！！

俺は可愛らしい 所謂萌えというジャンルにおいてこれまで出会ってきた女の子の中でも上位に入る彼女を見ながらうんうんと頷いてしまう。

ちなみに姉貴はNOだ。シンデレにもロリにも興味はない。あとついでに血のつながった姉弟だし。

知恵理はありだがわざわざ振られにくくほど俺はバカでも鈍感でもない。こいつの場合はさっさと日向とくつついちまえばいいものを
なんでどつちも告白しねーんだ??

他の女子と言えば百合。だけど百合はどちらかって言うとお手数なタイプだ。あの男言葉と人の弱点を的確に突いてくる情報力。おそろしい。

うずめちゃんは今日会ったばかりだからまだ何とも言えないな。

最後に刹那だけど あいつに至ってははよく分からん。

最初は俺と姉貴を殺そうとしてきたけど、後から姉貴が言うには実は繊細で泣き虫らしいし。極めつけが別れ際のあれ。

なんで頬を赤くしてたんだあいつ?? 本当に不思議だな??

まあもしかするともう二度と会えないかもしれないから何とも言えないんだけどな

そこまで考えて俺の思考は再び現実に帰される。なぜなら俺の頬に何かが触れたからだ。

「…??…何か用か?」

俺はその手の主である目の前の魔女っ子に思考の中から目を移し尋ねる。

すると魔女っ子は逆にまるでなにも知らない幼子のように心底不思議そうな顔をしながら首を傾げるのであった。

「… You 誰?? You も I をいじめるの??」

だが俺は彼女の声を聴いた瞬間。それは俺自身の勘違いだと気付かされた。

何も知らない幼子のような顔　　どうやらそれは俺の勝手な妄想だったみたいだ。

実際に彼女の声を　今にも泣いてしまいそうな彼女のその声を聴いてしまった俺は今まで抱いていた感情を一気に開放されてしまった。

「いじめる…??何でそう思ったんだ??」

だから俺は怯えた目をしながら俺の頬に触れている彼女を安心させるために優しくそう語りかける。

「…ここにいる人はみんな　I　を写真に撮ったり触ったりして虐めるの…だから　Y o u　も　I　の事虐めちゃうかも…」って

「へえ〜そうなんだ…だってよ皆さん??」

そして彼女の口から出された言葉は明らかに犯罪まがいのバカどもがやらかしてきた”あれ””これ””それ”そのままサツ（警察）につきだして良さそうなものばかり。

俺は頭が痛くなるのを抑えながら周りにいるヤローどもを思いっきり睨みつけた。

『『……………っ!?!?』』

俺の睨み。さつきから「なんだこいつ??」みたいな目で見ていたバカどもの一部がそれだけで半歩後ろに下がってしまう。

しかも幸か不幸か。その殆どがうちの学園の制服を着た奴らだから俺の睨みに大半が怖じ気づきこの場から立ち去っていった。

「……………あんたらはどうする??まだここに居るか??」

だがそんな空気の中でも立ち去らない奴らがいる。はっきり言って血統書付きのバカどもだ。

話は変わるが。今俺が着ている制服は黒を主としたまあ一言で言うなら【学ラン】と呼ばれるものだ。基本的にラフな格好が好きな俺

は気に入ってないが今はこの話はいい。

問題はあっちの制服。あちらの制服は茶色を主としたブレザータイプのちよっとばっかし大人びた制服だが　1つだけ確認させてもらうとこの街に学園は1つしかない。

それはつまり。今日の前にいるこいつらが

「なんだこいつ。中等部の分際で俺たちのやることに口を挟むんじやねーよ」

「…どうもすみません先輩方。俺は不器用なんで」

桜時学園【高等部】の悪ガキどものおなーりーだということだ。まったくマジで胸糞わりー……

思わず心の中で悪態を突いちまう俺。だけどそれも致し方ないことだ。

「この子」を見るあいつらの目がむちゃくちゃ気にいらねえからな
！！

「……で？先輩方は一体何がお望みで？」

「そつだな。とりあえずおまえの後ろにいるその子を所望するかな。後は　今俺達の前にいる生意気な後輩が地にへばり付く姿を　」

おそらくリーダー格であろう男の声に周りにいるやつらはゲラゲラと下素な笑いを漏らす。

今までもこんな奴らは何度も見てきた。これでも伊達に超美少女の姉貴や知恵理とツルんでるわけじゃない。

だがこいつらはこれまで俺達に喧嘩をふっかけてきやがった奴らの中でも低底の奴らだ。

相手の力量を量り見ることもせず。総てにおいて自分こそが世界の中心だろうと勘違いしてやがる頭じゃなく躰から腐ってやがる糞つたれな奴ら。

でも。今まで俺達に喧嘩を売ってきたそいつらが最後にどうなっただか

俺はそれを思い出してついつい口元を悪人ばりに歪ませるのだった。

「……さてと。不本意だけど糞退屈なパーティーの始まりだ」

第57話 不思議な魔女（後書き）

作「今回は魔女っ娘の登場でした」

日「また。濃いキャラクターが出て来たな」

輝「ええ。一人称は英語で”私”を意味する”^{アイ}I”二人称は同じく英語であたなを意味する”^{ユー}YOU”それに付け加えてどうやらクーデレみたいですな」

日「ああ。ツンデレの風。クーデレの魔女っ娘。となると次はヤンデレあたりが来るんじゃないか（笑）」

輝「あはははあり得ますね。……ところで知ってますかヒナタ？実はヤンデレは主人公ともしっかりも親しい女性キャラに発生する可能性が高いんですよ？例えば 幼馴染とか」

日「は？」

輝「まあ。例えばの話ですけど 隣同士に住む幼馴染の男女。お互い一人暮らしの少年は自然に幼馴染の少女へと合い鍵を渡し家事全般を頼むようになる」

日「何か聞いたことがあるような設定だな……」

輝「そんなある日。少年は寝付きが悪かったのか丑三つ時の時間帯に目を覚ましてしまう。初めは眠い目をこすりながら体を起こした少年であったが…ふとある異変に気がついた」

日「まあ。俺はそんな時間に起きることはないけど…なあ輝喜。この設定ってやつぱり」

輝「話を折らないでくださいヒナタン。おほん ガザ…ガザ…と隣の部屋のから音がする。少年はその音に完全に目が覚めてしまい。恐怖を覚えながらもその音の正体を確かめるためにドアの隙間からそっと覗き込む。するとそこには」

日「ごくり…」

輝「続きはWebで」

日「つておーい！！そこまで伸ばしといた何じゃああい！！俺眠れないよ！？夜眠れなくなっちゃうよ！？」

輝「またまたヒナタンが夜眠れないなんてありえませんか！！」

作「そうだよな。で、空気なので次回予告！！」

少女は1人の少年と出会う。だが彼は いや。彼女はおかしかった。

和服金髪美人の彼。そんな彼に少女はたじろぐ。

次回【ヤンキー男の娘】

日「問題nothingだぜ！！」

知「ヒナくん。そろそろご飯だよ」

第58話 ヤンキー男の娘（前書き）

新しく作り上げた話です。いつもよりかなり短めになってますがよろしけお願いいたします。

それと人気投票の方もよろしくお願いいたします。

それでは本編に（ ^ - ^ ）

第58話 ヤンキー男の娘

bedside

「…ちよつとあんた。いつまであたしについてくるつもり??」

桜時市の繁華街”街”。その路地裏にてあたしは早足で歩きながら横の”男”にそう問いかける。

「あゝ あんなこと知るかよ。俺様の行く先にてめーが居るだけだろ??」

そしてさっきからあたしの横をまるでシンクロしたかのように歩くこの男 いや。男の娘はさっきからまったく同じ反応を繰り返すばかり。

いい加減あたしも頭が痛くなってきたわ…。

「はあー…あんたもしつこいわね？なんでそこまであたしにこだわるわけ？？」

「…ガキ。てめー、俺がてめーみたいな三下の小学生なんかに発情するとも思ってたのか？？あゝあ？？」

「うつさいわね。あんたこそ男のくせしてそんな格好してんじやないわよ。変態」

「あゝあ？俺のこの格好にケチつけんねかガキ？？…上等じゃねーか。ぶつ殺すぞ？？」

「ふん！…そんな女物の着物なんかを着たあんたにそんなこと言われても痛くもかゆくもないわ！…変態」

「…ガキ。俺達はもう我慢できねー。てめーの着てるそのオーダーメイドの制服ひんむいて路上に突き出すぞ？」

「あゝらご生憎様。あたしのこれは列記とした学校の売店に販売されていたSSサイズの制服よ？？オーダーメイドじゃないわ！！」

「ちっせー事に変わりはねーじゃねーか？？あゝあ？？」

「さつきからあゝあゝあとうつさいわね！…あんたこそ日本名物の【よいではないか？よいではないか？あーねー】されたくなきやさっさとあたしの前から消えなさい！！目障りだわ！！」

「上等じゃねーか！！面に出るやー！！！！！！」

はあー。なんであたしこんなことやってんだろ。確かさっきも今みたいな流れだったわよね…。

目の前の着物姿の彼。その姿を見てあたしはつい思い出してしまっ

この状況を作り出してしまったさっきのことを

風side(20分前)

「さて。一丁行きますか!」

そう宣言した後。あたしは迷うことなく人が押し倉饅頭状態のその空間へと突撃していく。

まるでサウナみたいに暑苦しいその空間。だけどあたしには関係ない。

なぜならあたしの小柄(ロリって言ったなら折檻よ?)な体はこういうときにこそ役に立つ。

そう。目の前にはギュウギギュウ詰めになった人の山。しかし抜け道は山というほどある。

あたしにとってみれば。

小柄な体はこんな人の山に潜り込むには最適。あたしは人の中をまるで蛇のようにスイスイ進んでいくのであった。

我ながらなんてすばらしい体に産まれたのかしら…。

もう一度言っけど小柄なだけ。決してロリなんかではないわ!!

そこを間違えたら死刑だからね!?

あたしは心の中でそう高らかと宣言するのだった。

「んぎゅぅ〜…わっ!」

そうこうしているうちにあたしはついに人だかりを抜け出していた。

だが最後の隙間を抜けるとき勢い余って人だかりの円の中心へと転がり込んでしまう。

「あいたたたあゝ……」

思わずそんな言葉が口から出てくる。だが次の瞬間。あたしの目の前に現れたのはあたしを気遣ったらしい優しい手

「んだあこのクソガキ。邪魔だ邪魔だ。てめーも俺の通行の邪魔するんなら……ガキだろつと容赦なくぶつ殺すぞ!?!」

ブンツッ!?!?!

ではなく。なぜがあたしに蹴りを繰り出してきた金髪の和服美人だった!?!

「あぶなっ!?!?」

「ちっ!?!避けんなクソガキ!?!大人しくのされてろ!?!?」

「はあ!?!ふっざけんじゃないわよ!?!?!?!?!?」

おそらくあたしと同一年くらい金の髪の和服美人。その一撃目の蹴りをあたしは本能的になんとか避ける。

だがなぜかさらに攻撃を仕掛けてくる彼女にあたしはバクテンしながらその攻撃を避け続けてまくった。

「あーもう！！なんだこのガキ！？イライラする！？」

そして遂に向こうが折れる。「ちっ！！」と大きく舌打ちした彼女はそう言うとき大きく肩を揺らしながら息を整える。

その様子を見ながらあたしも逆立ちのままの体を腕をバネのようにして使い。一気に元の体制に戻した。

こいつ。着物きてるくせになんて機動力？

あたしもゆっくりと息を大きく吸い込みながら息を整える。

だが目の前の彼女の運動能力にあたしは動揺してしまっていた。

『はあ…はあ…はあ』

牽制しあうようにお互いを睨むあたしたち。既にあたしたちの動きについてこれなかったのかさつきまでいた人だかりはまるつきり見えない。

よくよく周りを見てみるとさつき居た場所とはまったく別の場所。

すでに真備に任せた方の人混みすら見えない場所まで来てしまっていた。

そしてその景色の中あたしの心にあったのは最早人だかりへの興味なんかではない。

人だかりの中心にいた彼女の正体についてであった。

「…あんた誰よ？」

不本意ながら本日2回目そのセリフはあたしの目の前にて思いつきりあたしのことを睨んでいるそいつにはこれ以上はないほどの挑発となった。

「あゝあ？？なんだこのクソガキは…ぶっ殺すぞ」

「…あたしはあんたの事を聞いたただけなのになんで殺されなきゃいけないの。だいたいあんた。その格好でその言葉遣いって…」

「うっせーなクソガキ。俺がどう喋ろうが勝手だろ。マジでぶっ殺すぞ？」

「ならせめてその格好何とかしなさい。ギャップ萌どころの問題じゃないわよ」

そう。皆さんもDREAMしてみてください。

目の前には金髪の長い髪を腰まで伸ばした美少女。

しかもそんな容姿なのに格好がピンクを色の主体とした和服を着ているというギャップ萌サイコー！！！！なパツキンの美少女。

不覚にも女のあたしでもドキリとさせられてしまった彼女。

だがもしそんな彼女が

「あゝあ？何訳のわからねーこと言ってやがんだこのクソガキ？マ

ジでぶつ殺すぞ!？」

物凄く口が悪かったらどう?？」

あたしはギャップ萌を通り越してギャップ引きしてしまったわ…。

そしてこの一連の動作であたしはこいつがどんな奴か判断した。こいつは

【最低な“男”】。

「…ちつ。なんでこんな最低ヤローなんかと会っちゃったのかしら?？」

「んだとテメー。その舌打ち聞こえてないと思ってんのか?あゝあ?？」

「あゝはいはい。悪かったですね。ごめんなさい。この変態“女装男”」

「あゝあ?んだと…人のファッションに口出す前にまずはお前の体型なんとかしろよクソガキ!？」

「…っ!?!うっさいわね!?!人が気にしてることを…!?!?」

「見た目は大人ぶって中学の制服を着た幼稚園児だけだな。はあん
！！テメーなんか大人しくママのおっぱい吸ってお昼寝してな！！」

「…！？…上等じゃない！！表にでなさいこのヘンターイ！！！！」

こうしてあたしは1人の最低な”男の娘”と出会ったのだった。

「あ。よく考えてみればここが表じゃない」

「あゝあ？どこまでナメてんだこのクソガキ！！！！」

第58話 ヤンキー男の娘（後書き）

作「今回は男の娘キャラ。むしろ”おと娘”キャラの登場でした」

日「ふう〜…ヤンデレじゃなくてよかった…」

輝「すみませんヒナタン。前はちょっと調子にのりすぎちゃったみたいです。そこで今回は」

真「おっし！！今回は俺の話を聞いてくれ日向！！」

日「…真備か。まあ真備ならそうそう末恐ろしい話はしないだろうから安心だな…」

輝「ええ。そういうことです。というわけで今回のテーマは”ダルデレ”ということで行きます」

日「ダルデレか…すまん。俺は聞いたことないな」

真「大丈夫！！それを今から俺が例え話を元にしながらか話すからな！！
あるところに隣同士に暮らし幼馴染の男女がいました」

日「おい待て真備。それじゃあ前回と同じだろ？」

真「まあ待て日向。ここから話が分岐していくから お互いに一人暮らしの少年は自然に幼馴染の少女へと家事全般を任せるようになる」

日「うーん。あんまり変わってないような…」

真「ところが少女は家事は得意なのに全然働かず動こうとしなかった」

日「前言撤回。無茶苦茶変わってる!？」

真「そんな少女を見て少年は自ら家事をしようとする。だが少年はまったく家事ができなかった」

輝「あははは〜そう言えばヒナタンもそうですね〜」

真「そして家事ができない少年と家事をしない少女の生活は続き。ついに」

日「ごくり…」

真「続きはWebで!!!!!!」

日「お前もかー!!!!!!」

輝「いやーなかなかよかったですねマキビン。まるでヒナタンの将来を暗示しているような内容でした」

真「へへ!! まあ俺の手にかかれば朝飯前だぜ!!」

作「てなわけで空気の俺復活だぜ!!! 次回予告!!!」

守られ護られいつもいつもみんなに助けられる。

そして今回もまた助けられてしまい少女は涙を流した。

しかしそんな少女にも貫き通したい意地がある。これはか弱き少女がほんの少しだけ強くなるお話。

分岐点に立たされた少女はその瞳に勇気を灯し決意する。

次回【決意の桜】

日「問題nothingだぜ!!」

知「ヒナくん。そろそろご飯だよ?」

日「チエ!!これからも末永くお付き合いをお願いします!!毎日味噌汁作ってください!!」

知「へ?へ?ふえー//」

真「...なあ輝喜。日向は自分が何言ってるのか本当に理解してるのか?」

輝「いえ。たぶんしてませんね...これが餌付けの効果でしょうか?」

真「...ご飯食わせる代わりに人生食われてりゃ話にならねーよな」

輝「マキビンうまい!!座布団一枚どうぞ!!」

次回に続く!!

第59話 決意の桜（前書き）

今回の話はこれまで載せていた【決意する桜】の後半部分となります。

話的にはまったく変わってないですがもう一度呼んでいただくとありがたいです。

それと人気投票は継続中ですのでぜひよろしく御願いたします。

それでは本編へ。

第59話 決意の桜

????side

「ぐすっ…ひっく…ユリちゃん。怖かったよ…」

「うんよしよし。よく頑張ったなチーちゃん」

真備が上級生に対して暴れ出したのと同時刻。真備より数十メートルほど離れたこちらでは1つの闘いが終結していた。

地面にボコボコにされた状態で横たわっているのは先ほど無理やり知恵理を連れ去ろうとした変態ナンパ男。

そんな男の横で涙を流す知恵理を抱き締めながら優しく落ち着かせるように背中をさするのは学園一番の情報通にして中等部の新聞部部长である【須藤百合】

そしてさらにその横で男を見下したような目で見ながら1人の少年が男の顔を踏みつけていた。

全身にピアスをつけたその姿は最早。異形と呼んでも差し支えないほど。その姿にビシッと着こなされている中等部の制服　つまり学ランが完全にミスマツチなこの少年。

決して偶々転がっていた男を踏んでいるのではない。なぜなら彼こそが新聞部の副部長にして桜時学園喧嘩の強いヤツランキングの第7位の【幹出雲】だからである。

「…これに凝りたらこんな犯罪まがいの事は止めるんだな」

「くう…」

ゴミを見るような冷たい目。今の彼の眼差しを見たものは間違いなく彼の瞳をそう評するだろう。

そしてその瞳で睨まれる当事者からしてみればそれは間違いなく恐怖の象徴。

出雲自身もこのときの瞳は嫌いだった。見た目はピアスだらけで完全不良の自分。だけど出雲の中身は真面目　というよりは弄られキャラとしてその地位を確立している。

毎回毎回様々な方法で弄られる彼。でもその地位に彼自身に不満はない。

それが【幹出雲】ムードメーカーであり陽気な彼の現在の姿なのだから

「さつさと消えるカス!!」

「ひい…!!」

そんな出雲の普段は見せないキレがあった叱咤に男は腰を抜かしたま脱兎のごとく足早に逃げ出す。

そんな男の情けない姿を出雲は冷たい目のまま見えなくなるまで見つめ続けた。

そして2、3回転びかけながらも男は何とか彼の視界から消え去る。

それを確認した出雲は一回大きく息を吐き出すとパンッと両手で頬を叩き

「知恵理様!! 悪い奴はこの幹出雲が追い払いました!! ご安心ください!!」

「うるさいぞ幹。貴様はもう少し空気を読むという技術を学べ。それでも我が新聞部の副部長か??」

「須藤部長!! そうは言っても俺は幹出雲!! 俺からこのテンションを奪ったらただの生徒Aですぜ!!」

「そんなピアスだらけの体して何を言う人外?」

「あー！やっぱそう思います！？いや〜でもこのピアスだけは俺のポリスーだからどうしても外せないんすよね〜！！やっぱ俺はこの物語には欠かせない存在なんすよ〜！！」

「貴様は何を言っている人外。いや【みき科みき目の亜種】いずも”【ポリスーじゃないポリシーだ。貴様はついに人間の言葉すら忘れてしまったのか？？さつさと”ゴミくず星”に帰れ。地球の大气が腐ってしまう」

「それどういうこと！？」

「貴様が最近巷で噂の地球温暖化の真犯人だということだ未確認生命体」

「んなわけあるか〜！！？？」

いつも通りの弄られキャラへと自らのキャラを戻っていくのであった。

それは人の倍は元気だとアピールするかのごとく。

「…ふふふ…」

そんな弄られキャラの出雲。そして彼の相方とでも言うべきクラスメートの友人の掛け合い漫才に知恵理は思わず笑顔を浮かべる。

日向達に見せるものとは違う。空元気と言ってもいいかもしれないくらいにか細く。消え入りそうなほど小さな小さな微笑み。

ただ知恵理にはそれだけで十分だった。

今の彼女に足りないもの。それは”日向”という心の支えを切り離したために忘れてしまった【笑顔】

それを取り戻させてくれたのは他でもない。

目の前にいるクラスメートである。

知恵理は未だに街中で漫才を繰り広げている2人に向き直る。そして息を大きく吸い込み数秒だけ目を閉じ再び閃かせると。

「ユリちゃん。イズ君」

「そもそも地球温暖化というものはだな……ん??」

「どちらかって言うと俺はロリコンだけど……どうかしましたか知恵理様？」

2人に呼びかける。それに気付いた2人も知恵理に顔を向ける。

そしてそこに待っていたのは　いつもより少し元気が無さそうな笑顔。

だけれどもその元気の無さそうな笑顔だからこそ儂げな切ない笑顔となった知恵理の悲しげな微笑み。

その美しさは天使の微笑み　いや。”天使の涙”と言ってもいいくらいの美を司る1つの芸術品と言っても問題ないほど。

それくらい美しかった。

『 ……！！？？』

彼女のそんな笑顔。それはいつも日向達の前で彼女が見せる太陽のような笑顔しか見た事ない2人には衝撃であった。

でも知恵理はそんな2人の変化に気がつくことはない。そのとき知恵理は既に地面に向かって上半身を曲げていたため2人の表情を見れなかったからである。

『 『チーちゃん（知恵理様）？？』』

絶句な状態から一変。今度は唐突な知恵理の行動に戸惑いを隠せない2人は慌てたように知恵理の名前を呼ぶ。でも彼女はその声に反応することはない。

なぜなら彼女は気がついたのだ。これからの自分自身の在り方を

「…2人共。助けてくれて本当にありがとう」

ゆっくりと頭を上げた知恵理。彼女から発せられた言葉はどこか重みのあるものであった。

「…少しだけ私の話。聞いてもらいたんだけど……いいかな？」

『 …… 』

その切なく儂い微笑みの先にある真剣な眼差しを見た2人は頭で考えるより先に無言で頷く。

強制的なんかではない。彼女の瞳にはまるで魔法のように居心地のよい絶対力がある。2人もただその魔法に罹ってしまっただけだ。

知恵理はそんな2人に微笑みそのまま語り出した。

「私ね自分からヒナ君と離れて私は弱いつてことに気付いた。私は結局誰の助けもなしに満足に街を歩くこともできない子供と同じなんだって……」

『 …… 『 『

知恵理の口から出てきた言葉に2人は息を詰まらせてしまう。しかしそれでも知恵理の語りは止まらない。

「…でもね。そんな私でもヒナ君達の役に立ちたい。ヒナ君達に喜んで貰いたい。そんな願望があるんだ。だから……私は今回ヒナ君から離れたの」

『 …… 『 『

知恵理の真剣な話しぶりに2人は戸惑いの表情を捨て真剣に聴き入る。

「…そして結局また2人に助けられて…私は弱い存在。助けられなくちゃだめな存在だって気付かされたんだけどね」

「チーちゃん」

彼女の心情を読み取った百合は悲しげに彼女の名前を口ずさむ。それに対し出雲は終始無言であった。

「……でも今回の件ばかりは誰が何と言おうと引かない。例えヒナ君でも」

『……!?!』

「私の勝手な自己満足だという事も自分の事しか考えてない我が儘だっけことも分かってる。それでも……失いたくないの」

『……』

2人は突然語るときの変な雰囲気が変わった知恵理に驚く。だが2人が何よりも驚いているのは

知恵理が日向の言うことですら拒絶すると言った事であった。

「……チーちゃん。その考えを変える気持ちはないのかい??」

「うん。私は絶対にこの考えを曲げない……たとえ”日向君”に言われても…ね」

同じように似たセリフ。

ただ知恵理の口から出てきた日向の呼び名の分。後の方が2人には重く感じられた。

知恵理が日向の名前を正式に呼ぶ。そんなところ2人は今まで一度も聴いたことはなかった。

知恵理のあの独特の呼びかたはいわゆる親しい人にだけに使う”親愛表現”の現れと言える。

その親愛表現である呼び方を明らかに一番親しい 好意を抱いている人物である日向に使わない。

それはある種の彼女の決意を示した言葉だったのかもしれない。

それ故にその言葉はある人物の心を動かす結果になる。

今まで終始無言。彼女の真意を詠むために黙っていたその人物に

「……姫ノ城。お探しの”もの”はあちら方に向かいました　お
そらくは桜時デパートに向かった物かと思えます」

「…っ！？…出雲！！！？…？」

無表情。その言葉が似合う顔をした出雲が淡々とまるで独り言のよ
うにそう呟く。だが彼の言葉は確かに彼女に伝わるのだった。

「…イズ君。ありがとう」

知恵理は出雲の言葉に再び頭を下げるとそのままゆっくりと駆け出
す。

その後ろ姿にはどこか強さがはつきりと見えた。

その様子を無表情のまま見つめる出雲。そして百合はそんな出雲に
苦々しげな表情を向けるのだった。

「なぜチーちゃんにあの事を教えたんだい?」

ビルの門を曲がる知恵理。

そんな彼女が見えなくなるまで見送った百合はいつもなら考えられないほど無表情になっている少年にそう問いかけた。

すると少年　出雲の方もその質問を予想していたのか百合の方を振り向きもせずまるで用意されたセリフを言うように無表情のまま口を開くのであった。

すると少年　出雲の方もその質問を予想していたのか百合の方を振り向きもせずまるで用意されたセリフを言うように無表情のまま口を開くのであった。

「須藤部長。知恵理様の　姫ノ城のあの表情。どう思いました?」

「む?」

そう言われて百合は腕を組み考えるように目を閉じる。

そしてゆっくりと確かめるようにさっきの知恵理の表情を思い浮かべてみた。

「……うむ。確かにチーちゃんのあの時の表情は何か吹っ切れたような顔をしていたような」

「違う。確かに似ているけどそれとは違う」

「……だったらどんな表情だと言っんだい??」

自らの言葉を遮られてしまって少しイラつときたのか少し強めな百合の口調。

だがそんな百合の様子に出雲はなにも感じないのかずっと無表情のまま。

そしてそこに百合は何もないように感じた。友情も感情も知恵理に対する思いやりも心でさえも

「…そうだな。俺の見方から見るとあれは。あの表情は 分

岐点に立った人間の顔だ」

そして結局は無表情のまま淡々と業務のように語る彼。そこには感情などないようであった。

「分岐点に立った人間??」

「そのままの意味ですよ須藤部長。姫ノ城は今分岐点に立っている。そしておそらく自覚がないと思うけどこれからの姫ノ城の行動は色々なものを変えてしまふ。それほど大切な選択の分岐点に」

訳の分からないような難しい事を語る出雲。百合はその内容をよく理解できなかった。

だが百合はそれに文句も言う気にはならない。いやつけられないのだ。

なぜなら中学入学からもう3年近い付き合いになるこの少年。だが百合はこの少年について未だに有益不益関係なく何の情報も掴めていないからである。

それくらい彼は謎な存在なのだ。

それについて百合は思っていた。学校一の情報通が一番近く的人物

を掴めていない。これ以上にならない笑い話だと。

「…さて。じゃあそろそろ買い出しに戻りましょう須藤部長。学園で部員達が腹を空かしてまっていますから」

だが百合は彼について気付いていることが1つだけあった。

それは彼自身が進んでやっていること。それも分かっている。

3年間共に部活を切り盛りしてきたのだ。それくらい掴めてないとさすがに代々学校一の情報通と名乗ってきた新聞部の部長なんて恥ずかしくてとつくの昔に辞めている。

彼の行動で唯一理解している部分。それは弄られキャラを演じているということだ。

例えば知恵理達について。知恵理や凧には様付けをする彼だが別段彼女達がお気に入りなわけでもましてや彼女達を神仏化しているわけでもない。

むしろ幹出雲という男は極端に百合を含めた他の人との接触を避けたがる男である。

だから百合は確信を得ていた。出雲は自ら“弄られキャラ”になりきるためにわざとやっている”のだと。そして人との関係をあまり持とうとしていないのであろうと

その証拠におそらく素の状態である彼　無表情のときの彼は決して人を下の名前で呼ばない。

それはたとえ普段は様付けで呼ぶ知恵理だろうと凧だろうと。そして常に共に行動する百合であること。

「人との関係は広く浅く」か…」

ふと以前そのことを出雲自身に尋ねたときの答えを百合は呟いてみる。

普段の弄られキャラでフレンドリーな彼からは考えられないような言葉だが今の無表情の彼ならそのことも領けてしまっから不思議なものだ。

そう思った瞬間百合は思わず自嘲気味に溜め息を吐き出してしまったのだ。

「須藤部長！！何してるんですか置いていきますよ??」

「あ…ああすまない」

残念なことにこれから電話をかける相手の電話番号を本人からは聞いたことがない百合はその独自の情報網を頼りに手に入れた電話番号を記憶を頼りに押していった。

そして全てを終えた百合は携帯を耳に当て独り言のように呟くのだった。

「…まあ保険くらいかけといてもいいだろうな」

そして電話が繋がる。電話の相手は何か焦ってるのか息を荒げながらこれを間違い電話だと言う。その慌てっぷりは最早鳩が拳銃で撃たれたとき並だろう。

それにクスリと笑みをこぼした私はその電話の相手に真実を告げるために口を開くのだった。

「やあ。最初に言っておくけどこれは間違い電話じゃない。どちらかって言うと悪戯電話の部類に入るかな?？」

『はあ?』

「…つまんねーな。まさかもう終わりか?？」

『…ぐう…』

桜時市おつじの繁華街である街。しかも中心の広場一面にまるでゴミのよ
うに打ち捨てられた傷だらけの高校生の不良達。

俺はこいつらに向かって少しいらいらっきの気持ちを含めてそう告
げる。

気付けばさつきまでいた野次馬とはまた別の野次馬が俺と不良。そ
して魔女っ娘の少女の周りにグルリと円になるように集まってきて
いた。

こいつらの目的はバカな俺にだって分かる。中学生が高校生にリン
チされるのを見にきたんだて。

「がはっ！！くそっ！？な…なんだこいつ。化け物かよ」

「化け物??言ってくれるじゃねーか。まあ否定はしないけどな…」

高校生の不良グループのリーダーらしき男の言葉はたぶん転がって
る不良だけじゃなく。この場にいる人間全ての総意だろう。

だが俺はこいつらの言うことを否定はしない。

「ガハツ！！ガハツ！！…お前。一体何もんだ！？」 『……』

辺りが静まり返るのを俺は体全体で感じる。それは俺の言葉を待つ
ために訪れた静寂。けどはつきり言って俺はこの手を 俺の
名前を使いたくはなかった。

俺達5人は確かに目立つ。それは容姿しかり能力しかり喧嘩の腕し
かりだが 実はもう1つだけ大きな理由があるのだ。それは

「…さつさと言え化け物！！お前一体何もん」

「…【羽前真備】。桜時学園中等部3年の羽前真備。それが俺がこ
れまで名乗ってきた名前…。高等部のお前らにはこの意味分かるだ
ろ？」

俺の決して大きくない声は辺りに転がる高校生の不良共。そしてその場にいた学生。特に高校生の奴らには衝撃的な一撃だった。

『羽前：真備：だと』

『マジか！？嘘だろ。なんであいつがまだうちの学園にいるんだよ！？』

『ねえ…もしかしてあの子が？？』

『バカ！！何も言っちゃだめよ！？眼も合わせちゃだめ！！』

『……とつくの昔に転校しちまったと思ってた』

『あの眼。あの喧嘩の強さ。やっぱりあいつは化け物だな』

『ああ。間違いなく化け物だよ。【あの事件】を起こした張本人だし』

『【あの事件】の関係者がまだこの学園にいたんだ。さつさと居なくなってくれた方がよかったのに』

『化け物だ。化け物だ！！』

『…化け物。そしてあいつは あいつらは…』

そして周りにいるこいつらは俺に いや俺達に対してトドメの言葉をさす。

桜時学園喧嘩の強い奴ランキングの上位ランカーである俺達。

第1位【不知火日向】

第2位【羽前真備】

第3位【美濃輝喜】

第4位【羽前風】

この4人が抱えてしまっている傷跡をえぐる言葉を。

人殺し

…その言葉に俺は目を瞑り無言となってしまう。

だけど俺はこの言葉を否定する気にもなれない。なぜなら本当のことだから。

俺達は【人殺し】その楔はこれまでも。そしておそらくこれから俺達を戒め続ける。たとえ今回みたいに人助けをするためとは言え喧嘩をすることになっても俺達はそのたびにこの事を思い出してしまうだろう。

これが俺が名前を名乗りたくない理由。中等部の奴は俺達を直にみてるから俺達には自然な付き合いをしてくれる。

だが高等部の奴らは違う。あいつらはあの事件から俺達4人を恐れ蔑む。それが人殺しという罪を背負う俺達の罰だと言わんばかりに。

これが3年前【下克上事件】と呼ばれる事件の結末。

俺達は　あの事件から常に十字架を背負っているのだ。

第59話 決意の桜（後書き）

知「ヒナ君 はいあ〜ん」

日「あ〜ん…パクツもぐもぐ…。ん？つい情景反射で食っちゃまったけど…これって」

知「ポツキーだよ」

日「ポツキー？？なんでまたポツキーなんて」

輝「え〜ヒナタン知らないの？？11月11日はポツキーの日なんだよ〜 製菓会社の陰謀を感じるね〜」

日「なるほど…。つまりバレンタインデーの亜種みたいなものか…」

輝「あはは…それはちよつと違うかな〜」

凧「よし日向！…これで勝負よ！！」

日「いきなり出てきてそりやないだろ凧…んで？ポツキーなんかくわえて…なんで勝負だった？」

凧「あら？あんたまさかポツキーゲームを知らないの？今時珍しいわね…」

日「ポツキーゲーム？それはブロック崩しの別名のことじゃ」

凧「違うわよ！？いや、合ってるけどそれとはまた別物よ！？あのね…ポッキーゲームってのはね」

日「…なるほど。チキンレースの一種か。つまりどれだけポッキーを短くなるまで食べたかが勝負のゲームなわけだな」

凧「That Right!」

真「へへへ！！確かにてめーらは幼なじみだから一緒にいた時間は長いかもしれねーけど俺達はさらにその上をいくぜ！！生まれる前から一緒に俺達に勝てるのか！？いや！！無理だね！！」

凧「おほほほ！！さあやるの！？やらないの！？」

日「…上等じゃねーかてめーら。後悔すんなよ！？」

知「ふふふ ナギちゃんにマキ君 覚悟してね」

作「はい！！じゃあそろそろ次回予告いきまーす。

少女は寂しがり魔だった。彼女の思い。彼女の姿の理由に真備は思わず立ち尽くす。

そしてそんな真備の前から彼女が消えたとき 新たな敵が姿を現す。

次回【寂しがりな魔女】

日「問題 nothingだぜ！！」

凧(身長141?)「あゝもう!!あんなんでそんなにデカいのよ!?!これじゃ届かないじゃない!!」

真(身長175?)「うっせー!!仕方ねーだろ!?!だいたい姉貴が小さすぎんだよ!?!どう考えても中坊の背じゃねーだろ!?!」

凧「あんた喧嘩売ってんの!?!」

輝「あははは〜これはまさかの盲点でしたね〜。それにしてもヒナタンとチエリンもよくやる気になりましたね〜。恥ずかしくなかったんですか?」

日「いゝ!?!いや…それは…まあな…」

知「そそそそ、そうだよ…ね??ヒナ君。うん。そうだよね…うん」

輝「…???」

日《言えない…昔、マンガみたいな展開でキスしたことあるなんて…絶対に言えない…!!》

次回に続く!!

第60話 寂しがりな魔女（前書き）

すみません。自分でもかなりローペースになってるのは分かってるんですけど。

ちなみに人気投票の方もまだやってます。ぜひよろしくお願ひします。

それでは本編へ〜

第60話 寂しがりな魔女

????side

『 ”人殺し” 』

誰が言ったのかは分からないその言葉。酷く邪悪で嫌悪感が漂ってしまつその言葉はまるで血の色をした鎖のようだった。

だがその言葉は確実に1人の少年の いや。5人の少年少女の心に巨大な十字架となって重くのしかかっている。

ひたすら前を向いて歩こうとしても、彼らにはその言葉がある限り、後ろを振り返らないことを許さない。

それが彼らの心を覆ってしまった”罪”。そして”罰”の証なのだから

「…そうさ。俺を誰だと思ってるんだ？俺は罪人。俺は許されざる者。それくらい分かってるぞ」

そんな真っ黒な渦が飛び交う中。その中心にいる少年が呟くように語る。

自らの罪を分かっているからこそ少年　真備は口を開くのであった。無表情に。淡々とした口振りで。

「…だけどなあ。俺をどう言おうが構いはしない。事実“俺があの男を殺した”のは間違いないからな」

「…ひいひいひい…」

ゆっくりとゆっくりと口から出てくるその言葉は真備自身、気づかぬうちに殺気を孕んでいた。

なぜこうなってしまったのだろうか？

なぜこうなってしまったのだろうか？なぜこうなってしまったのだろうか？なぜこうなってしまったのだろうか？なぜこうなってしまったのだろうか？なぜこうなってしまったのだろうか？

なぜこうなってしまったのだろうか？なぜこうなってしまったのだろうか？なぜこうなってしまったのだろうか？

真備の頭の中で何度も何度も その言葉がループする。

真備自身。今日1日でこれほどまでに劇的なことが立て続けに続くとは思っていなかった。これまで起こったことを何もかも忘れて今日1日久しぶりに楽しもう。そう考えていた。

だけどその結果がこれである。結果的に真備は自らの体に染み付いたそれを拭えなかった。

彼自身の隅々まで染み渡ったその罪と優しさから

「…でもな。今のこの状況ではそれとこれとは話は別だ。俺はな…俺はな…今猛烈に苛立ってたんだよ…!!」

『……………』

真備の口から出てきた地の底を割るようなその叱咤に散々悪口を言っていた周りが一気に押し黙る。

それはまるで覇気のように周りの者は感じたのだ。

「……………」

『……………』

それ以降も真備の睨みは続く。それに思わず周りにいた者は一步後ろへと下がってしまった。

尋常ではない覇気。そして殺気が彼らのすべてを支配している。

今、この場を支配しているのは群民と化してしまったギャラリイではない。もちろんその視線の先にいる倒れた不良たちでもない。

彼らを　この空間を支配しているのは完全に視線の中心にいる真備であった。

ギリギリ…ッ!!!!

その音は何の音なのか。

いやその場にいる人は全員がわかっていた。

この音は真備が強く歯を噛み締めたために起こった音。もしくは不良の返り血が付いてしまった拳を強く握りしめた音。

様々な憶測がそれぞれの頭に過ぎる。だが結局全員行き着いた結論は一緒であった。

あれは。爆発までのカウントダウンだと。

「…ああゝあ。姉貴はさつきどっかに行っちゃったのが見えたし。ここまでの騒ぎになってるのに日向と知恵理が来ないってことは少なくともこの近くにはいないってことだよな…‥‥はあ！。もう本当に俺はどうなっても知らないからな…‥‥」

前髪が掛かり、目に影が射したような真備の姿。その状態でそう独り言を呟く。

その呟きは他の人にもしつかりと聞こえている。しかし彼らには真備の言わんとしていることはまったく分からない。

だがそれも一瞬のこと。いや一瞬にしてその考えが崩れ去る。真備がその顔をあげた瞬間に　その病んだような瞳を見た瞬間に

「…おいお前ら。今この場には俺を止められる奴は誰もいない…どつなっても知らないからな…！！」

『『（ピシッ）…‥‥』』

このとき周りにいたギャラリーはやっと自らが侵した過ちに気がつ

にいた女生徒の耳にも届いていた。

《……どうやら羽前の血。それと真備自身の性格が原因なのだろう》

そして彼女が耳に当てる携帯電話の先にも。

そこは真備達がいる広場がすべて見渡すことができる広場前のビルの二階にある喫茶店。そこには紅髪の少女 ”天野うずめ” が携帯を耳に当てながら真備の様子を見ていた。

「羽前の血…それはどういう意味ですか？」

《……羽前の血。陰陽師羽前家の人間の役割は人を護ること。おそらく真備はその血のせいだ》

「あの少女を守りたい。そしてその延長で自分と自分の仲間の危険になるものを取り除きたい。こんなところですか？」

《……そうだ》

うずめの言葉に電話の相手である男 ”時雨水城” は是だと答える。

電話越しでもわかるくらいに彼は無感情だということが伝わってくる。そしてその声はうずめにとって最早聞き慣れた声。

だからうずめに与えられた仕事はただ1つ。機械に入力するかのように彼に真備達の状況を伝えるだけなのである。

「……どうやら状況が変わったみたいす」

《……報告を続ける》

「はいっす!!」

そしてうずめが電話に集中している十数秒の間に外の様子　真備を取り囲む状況が劇的な変化を迎えていた。

うずめはその様子を事細かに電話越しの相手、水城に伝えていく。淡々と告げられるうずめの言葉に水城は終始無言であった。

店員を含めたこの喫茶店にいるすべての人物は大半、興味本位で外の情景を観察している。

そんな空気の中、珍しいもの見たさではない目で見て、尚且つ淡々と電話をし続けるうずめは異様だったかもしれない。

だがその場にいる人はほぼすべて外の珍しい光景を観ることに夢中

になっており、彼女のそんな様子を気にするものは1人もいない。

うずめ自身もそれが分かっている様子で堂々と水城との電話を続けていた。

でも彼女は気付いていない。同じ店内、しかも背中合わせに座ったところにつずめと同じく異様な雰囲気を出している少年がいることに。

「と、こんなところっすかな。他に知りたい情報はあつすか？」

《……いや、理解した。だからこれからお前にやってもらいたいことがある》

水城という機械に対する入力を終えたうずめ。その結果、入力された数字をもとに計算を終えた水城はその答えを提示する。

「分かったつす。うちは真備さんのことを見張っていればいいつすね？」

《……ああ。頼んだぞ》

水城からの指示。【羽前真備から目を離すな】この指示に対してう
ずめは肯定の意を表す。

そしてもう一つ

《……それとうずめ。分かっていると思うが》

「心配皆無つす。ちゃんと分かっているつすよ……」

それはうずめがもう一度この街へと来る前に指示されていた内容。
どんな理由でかは定かではない。

だがうずめはその内容を絶対に破ろうとは思っていなかった。その
内容とは

【水城の指示があるまで絶対に戦闘行為に手を出してはならない】
ということ。

「……じゃあ水城さん。うちもそろそろ動き始めるつす」

《……分かった。俺も明後日には行く。それまであいつらを頼んだ
ぞ》

「はいっす。任せてくださいっす水城さん…」

……Pi

ゆっくりと携帯を閉じるうずめ。その朱い髪とは裏腹に水色のその携帯電話に映る自らの姿はまるでこの携帯を買った彼女のようにであった。

それにうずめは嬉しい気持ちになる。朱い髪が水色に見えるその姿は彼女の憧れだったからだ。

「…ん？あ…ああ、すみませんっす。ここに映る自分を見てるとつい嬉しくなっちゃいますっすから」

慌てたように弁解をするうずめ。だけど彼女の前には誰もいなかった…。

だがうずめはそんなことは気にしない。寧ろさらに嬉しそうに頬を綻ばせると飲みかけのジュースを一気に飲み干した。

それは2人だけの秘め事。2人だけの空間。2人だけの世界…。

それはほかの誰にも理解されたことがない関係。

だけど2人の関係について触れるのはもう少しだけ後の話である

真備 side

「…なぜ邪魔する??」

桜時市の繁華街”街”その中心にて俺は1人の少女に手を掴まれていた。

辺りが静まるのが分かる。俺の中に猛る荒々しい感情を含めて。

「…だめ。…もうこれ以上。…傷つけないで」

「…お前はそれでいいのか?こいつらはお前を傷つけようとした奴らだぞ?」

ゆっくりと途切れ途切れに伝えられた彼女の言葉に、俺は彼女を見ることがなく逆にそう問いかけた。

掴まれた手から彼女の温かさが伝わってくる。

「お前じゃない。… I の名前は。」

【ミーシャⅡイヴファニカⅡアイゼンドール】

呼ぶときは”イヴ”と呼んでほしい…父様と母様はそう呼ぶから…」

「…分かった”イヴ”。じゃあ改めて聞くが本当にお前はいいんだな？」

俺は俺の腕を掴んだ彼女の小さい手を握り返し彼女を正面から見るように体を向け、彼女に再度問いかける。

でもイヴはゆっくりとはつきりと頷く。しかもイヴの瞳に濁りはまったく言っていないほどない。

俺はその瞳を見た瞬間、身体中の力が一気に抜けていった…。そう、俺の完全なる敗北だった。

「…分かった。お前がそこまで言うならパーティーは中止だな」

「…!!…本当?」

俺の言葉に笑顔を見せながら万弁の笑みを浮かべるイヴ。俺はそんな彼女を安心させるように優しく頭を撫でた。そしてその俺は既にいつも通りの俺へと戻っていた。

あいつらといるときの俺とまったく同じ、穏やかな顔をした俺へとなんでだろうな。こいつを見ると、なんか知恵理や姉貴とは違う感情が湧いてくるな。

恋愛感情とかそんなんじゃない。どこか”妹”の世話をしているような…そんな温かくて心地がいい感じが…。

そう思いつつ、俺は顔を緩めていくのであった。

「…スキだらけだぜ!!社会のゴミいいいい!!」

『…!?!?』

そんなとき、俺の周りにあった和やかな雰囲気をぶち壊す叫び

が上がる。

それは俺の真後ろにいた不良の1人であった……！！

『きゃああああ！！』

『あいつ！！喧嘩にナイフを使う気かよ！？』

『お願い！！逃げてえええ！！』

辺りにそんな声が響き渡る。それは明らかに俺への危険を知らせる赤信号だった。

「くそっ！！」

気づかないうちに俺は叫び散らす。周りの声を聞く限り、どうやら不良の1人がナイフを取り出したらしい。

後ろから走ってくる音が聞こえてくる。敵はすぐそこまで迫っていやがる！！

くそ！！イヴの顔を見るために体を反転させたのがミスった原因が！！

「ヤメ口おおおおお!!」

それは俺自身がイヴの壁となり盾となるということ。

荒々しく握られたイヴの手を振りほどいた俺は羽前家の血筋に備わる。人間を護るといふ防衛本能の名のもとにイヴの前へと立ちはだかった。

振り返った俺が見たのは俺に向かってくる1人の男。手には10? くらいの折りたたみ式のナイフを持ち俺に向かって走ってきていた。

それを見守るギャラリーの奴らは見てられないのか大半が目を瞑って何かを一生懸命叫んでる。

俺が見たのはそこまでだ。そこからはもう俺自身目を開けてられなかった。最後の最後になってどうやら恐怖心が勝つちまったみたいだな…。

ああ…あれで刺されたら痛いんだろうな…。

最後にみた情景がわずか数秒間に何度も何度もビデオみたいに流れていく。

だが結局、俺の目にはつきりと残っているのはこれから俺を刺すのであるうあのナイフの輝きだけ。それを思うと思わず笑みが漏れちまった…。

あゝ最初に言つとくがこれは別に、洒落や冗談なんかではない。俺の目の前には確かに倒れた不良といちご牛乳の紙パックがあった。ちなみに不良のほうは飛び出したいちご牛乳の中身によって全身が赤白い液体で覆われている。

うん。キモイな。

なんか知らんがマジでこの不良に同情しちまった。

「…やれやれ。街で何か騒ぎが起こっているから着てみれば…お前だったか羽前真備」

「…げえええ」

そのとき、このいちご牛乳の射手であろう声が辺りに轟く。もう一度言つが声が轟いたのだ。

オペラ歌手にでもなりたいのか？と聴きたくなるようなその声。

俺はその声の主を見て思いつきり隠すつもりもなく顔をしかめた。

まあ【いちご牛乳】が飛んできた時点であらかたの予想はついていたけどまさかマジでこんな街中で会うとは思ってもいなかったぜ…。

ああ…本当に今日は厄日だな俺…。こうなるんだつたら朝の正座占
い見てくるんだつたぜ…。俺は思いつきりため息を吐き呼ぶ。彼の
名前を

「【政宗】なんでお前がここにいるんだよ」

「うぬ。そんな事決まっておろう…。我は暇つぶしにここへ訪れたの
だよ」

「…せめてそこは嘘でもお前を助けにきたくらい言ってほしかった
…」

「たわけ。我がなぜ貴様のような輩を助けなければならぬのだ？笑
わせるな！！ハッハッハッハッ！！」

「あんたはそれでも中等部の【生徒会長】かあああああああ！
！！！！」

不本意だが。今日一番の叫び声を上げた瞬間であった。

さて、とりあえずこいつの紹介をする。こいつの名前は【周防政宗^{すまふつまむね}】
さっきも言ったがうちの学校の生徒会長だ。

容姿はとにかく偉そうな男（メガネは忘れるな）を思い描いてほし

い。おそらくそれが奴の姿だ。

しゃべり方もとにかく偉そう、とにかく何かにつけて偉そうな態度を取りたがるのがこいつなんだ。

ちなみに隠してるつもりだが実は【いちご牛乳】が好物でいつも持ち歩いてるらしい…。

「…うむ65点と言ったところか。勢いはあるが如何せん捻りがたりぬツツコミだったな…ちゅー」

「なんだよお前!？何なんだよお前!？何ツツコミに点数点けてんだよ!？あとしゃべりながらいちご牛乳飲むのやめーい!？」

怒涛のツツコミ三連発。だが目の前のこいつは涼しい顔しながら相変わらずいちご牛乳を飲んでやがる。

このシリアスパートからいきなりぶち壊こわされたこの空気どうすんだよ…

後ろのギャラリーもこのいきなりの展開に口ポカーンじゃねーかよ。何か今更ながら俺なにやってんだらうな…。

おまけにあのいちご牛乳という名前の白濁液を浴びた不良も起き上がって来て あ、もしかしてヤバい？

「キ〜サ〜マ〜!!! その社会のゴミ共々中等部の癖に何しやがる!？」

地獄の底から舞い戻ってきたかのような声。その声の主はしっかりとナイフを持ち俺とイヴ、それに政宗をしっかりと見据えていた。

やっぱりあんな紙パックごときじゃあ気絶させるまでには至らなかったということだな

「… THAT MAN (あの男) また I を虐めるの？」

「… ああ。でも安心しろイヴ。こっちはあの男がいるからな」

脅えているのかプルプルと肩を震わすイヴに俺は安心させるための意味を込めて、彼女の手をギュツと握り締める。

でも俺は今度は特に慌てることはない。なぜなら頼もしい味方政宗が俺の前にいるからだ。

そして俺の頼もしい味方。政宗の方は相変わらず余裕そうにいちご牛乳を飲み続けている。もちろんその表情に慌てた様子は皆無であ

った。

「ちゅー…よくもめんどくさいこと巻き込んでくれたな”羽前真備”」

「気にすんなって政宗。去年のクラスメートだろ？」

「ふははは。よくもぬけぬけとそんなことを言えるな羽前真備。貴様、去年の11月まで我の名前を知らなかったではないか」

「それはそれ。これはこれだ。あのころは関係ない…大事なのは今だろ？」

「ふ……違うない」

そこまで語り合つと俺たちは「ははははは!!」と高らかに笑いあう。

さて、俺達のそんな様子に今度は逆に不良のほう慌て始める。武器を持ったという圧倒的に有利な状況。

ただど相手はひるむどころか高らかと笑い出す始末だ。これは混乱もするだろう。そして不良はこの場で最もしてはいけないことをしてしまうのであった。

「な…何笑ってやがんだこの中坊がああああああ！！」

俺達の 政宗の前にて無計画に突撃するという大きな過ちを

「…なあ政宗。これはあれだよな？向こうから切りかかってきてるから正当防衛だよな？」

「うむ。そうだな…だけど羽前真備。お前は手を出すな」

「それやまたなんで？」

「無論。決まっているであろう」

そこまで言った瞬間。俺とイヴの前から政宗が消える…。人が立ち去った後の風ってこんなに気持ちがいいものなんだな…。

頭の中、ゆっくりとそう思った俺はイヴの手をしっかりと握りしめていた。

ドガ ツン！！！！！！！！

刹那、俺達の耳に有り得ないくらいの衝撃音が伝わってくる。…あ
ーあ、こんな街中でよくもどろどろとぶっ放したぜ…。

「ぐっ…な、なんだそれ…：…なんで中坊がそんなものを…」

「…出直してこい愚民。貴様などでは話にならぬわ」

護身用のバズーカを。

人間、生きていくためには自らを武装しなくちゃいけないと言っ
とだ。

それが中等部の生徒会長にして大手【周防グループ】の会長の息子。
そして何より

「桜時学園：高等部2年5組【中原元太】桜時学園の【理事長の孫】
として貴様に退学を言い渡す」

理事長の孫であるこいつに逆らおうものなら即座に退学になっちま

うからな。

「うむ。悪は滅びた…これにて一件落着！！アツハツハツハツハツ
ハ―！！」

「ジャパネーズお奉行？」

「俺からしてみればお前も十分な悪役なような気がするんだけどな
…」

「ほら、飲むがいい」

あの後すぐに政宗が理事長の孫だと高らかに宣言してから俺達の周りにいたギャラリーは散り散りになっていった。

まあ義務教育じゃない高等部は誰だって退学にはなりたくないだろうからな…。

「お。サンキュー政宗」

「…ありがとう。 YOU はとってもいい人」

だから俺達はこうして街の一角にあるベンチに腰を下ろしてくつろぐことができていた。

「ちゅー…うん。 偶には甘いものもいいな…」

「ちゅー」

俺とイヴは政宗から受け取ったいちご牛乳のパックのストローに口をつける。

うん。 運動後の甘いものはやっぱりおいしいな。

「…ところで政宗。お前なんでバズーカなんかぶっ放したんだよ？」

そこにきて俺はふと疑問に思ったことを政宗に聞いてみる。なぜならあのとき政宗はバズーカを使わなくても”あれ程度”の不良なら簡単に倒せることができたからだ。

だってこいつは

「…うむ。貴様に言われるのは少々癪だが確かに我ならあの程度の男。簡単にのすこともできただろう」

「…じゃあなんでやらなかったんだよ。桜時学園喧嘩の強いやつラシキング第5位【周防政宗】？」

「我もお前らと同じくらいその称号が嫌いなのをお前は知らぬのか…？それと貴様は我よりもランクは上である…」

そつだ。こいつは桜時学園で日向、俺、輝喜、姉貴の次に喧嘩が強い男。

こいつの場合は護身術として学んだ【サバット】という蹴り技主体の攻撃を得意とする武術の使い手。たぶんマジでやったら俺達もヤバいくらいのやり手だ。

だから俺はこいつがなんでさっきそれを使わなかったのが疑問なのだった…のだが。

「…まあそれはいい。うむ。なぜ我が蹴り技を使わなかったのかということだが　こちらの方が派手だと思ったからだ!！」

「そんな理由かあああああああ!!!!!」

使わなかったあまりのくだらなさすぎる理由に俺は思いつきり叫んでいた。

「… I 始めてみた。これが MANZAI なんだ。お父様とお母様にも見せてあげたい」

「なあ羽前真備。それはそうと彼女の服装はいつたいなんなのだ？」

あの。お2人様、俺の叫びは無視ですか？

俺はただただ顔をひきつらせてしまっただけだった。

「…でも確かにな」

「…???」

ポツリと呟く俺。それが聞こえたのかイヴは首を傾げる。

確かに政宗の意見には同感だ。イヴはただでさえ目立つ容姿をしている。そんな女の子がなぜ街中でこんな格好を…？

もう一度だけチラリとイヴの格好を見てみる。黒い制服に似たミニスカート状の服にトンガリ帽子、そして箒を持った右手。

どこからどう見ても魔女っ娘にしか見えない。なんでイヴはこんな格好でこの街に来たんだ…？

「もしイヴファニカとやら。お前はなぜそのような格好をしている？」

いい加減気になったのか政宗が尋ねる。だが

「…この格好。お父様とお母様が”最後”に可愛いと言ってくれた格好だから」

なぜか現実はとてつもないほど重たい話へとこじれていっていた。

「…それはすまなかった。我はどつやら軽率なことを言ってしまったらしい」

「大丈夫。I は気にしない。だってお父様とお母様、それに兄様達も遠い遠い空の上の国に行っただけだから」

俺はかつてその言葉を聞いたことがあった。

『なあ日向…知恵理…。お前ら家族はいないのか？』

『…いるよマキ君。私達にも大事な大事な家族が…』

『…問題nothing。そうだな知恵理。俺達には確かにいるな…大事な大事な家族が…』

『『遠い遠い…空の上の国に…な(ね)』』

あの子の日向と知恵理の顔は今でも忘れられない。

その後、姉貴にこのことを話したとき「あんた！何てこと聞いてんのよ！？」と怒られたのもいい思い出だ。だからこの言葉の意味は俺にも分かった。

「…別に同情はいらない。 I は今までも1人で生きてきたから…だから同情なんてしないで…」

そしてあの2人を間近で見てきた俺だからこそ、こいつの思いを感じ取ることもできた。

でも…俺は結局そこまで。俺には彼女には何もしてあげられない。

家族を失い、心のより所を失った【寂しがりな魔女】にはな

?????side

「いた。やっと見つけたぞ羽前真備」

真備達3人よりも離れた場所。そこにその男はいた。

普通の人に比べたらかなり大柄で染めたような濁った赤い髪をした
1人の青年。

「ふん！！別に探してなんかいなかったんだからな！！」

【的場一】が。

第60話 寂しがりな魔女（後書き）

作「今回もまた新キャラが登場しました」

真「なんか最近新キャラの登場率高くないか？」

作「そんなことはきにしない！ぶつちやけ第3章への布石だったりするんですけど…まあきにしない！」

真「いいのかな…？」

作「じゃあそろそろ新キャラさんの登場です！！今回の新キャラ！
！【周防政宗】さんです！！どうぞ〜！！」

政「ふむ。来てやったぞ愚民ども！！」

真「相変わらず偉そうだなーお前。もつと謙虚に生きるよなー」

政「黙れ羽前真備。貴様を退学にするぞ？」

真「へーへー。すみませんでしたー」

作「はい。では今回の新キャラさんの紹介です。名前は【周防政宗】
中等部の生徒会長であります。

特技はサバットという蹴り技主体の武術で実は桜時学園：喧嘩の強
いやつランキングの第5位！！

ちなみに実家は周防グループという大企業で桜時学園の理事長の孫でもありまーす!！」

政「うむ。私の輝かしい経歴だな…ちゅー」

真「でも意外なこともあるんだよね〜案外可愛いところとか〜」

作「はい。実はいちご牛乳が好物で毎日のように飲んでいるのが確認されています」

政「む…バカなことを言うな愚民ども。我がそんな甘いものを飲むとでも思ってるのか？嘆かわしい…ちゅー」

真「…よし。それはとりあえずその手に持ったいちご牛乳を置いてから言おうな…説得力皆無だぞ」

作「はい。じゃあそろそろ次回予告行きたいと思いま〜す!！」

それは一本の電話から始まった。続いていく伝等の連鎖。そして、そのすべての始まりは意外な人物だった。

次回【その声、誰の声?】」

日「問題 nothing だぜ!！」

真「だ〜か〜ら〜!！」それはどこからどう見てもいちご牛乳だろ!?! いい加減認めろよ!?!」

政「いや。これはブラック珈琲であって決まってるいちご牛乳などではない!！」

真「じゃあパックに付いたその可愛いらしい苺のプリントは何だよ！？」

政「これはさきほど我が貼ったアップリケだ！！」

真「いや！？無理あるから！？？」

次回に続く！！

第61話 その声、誰の声？（前書き）

こんにちは（＾・＾）ノ

お久しぶりです。これまで更新を中断していたことを深くお詫び申し上げます。

そしてもう1つ。今回の作品はかなり中途半端なことになっておりますので、そこのお詫びを申し上げます。

大事なことなのでもう一度言います。今回の作品はかなり中途半端なことになっております。よって過度な期待はしないでください。後悔するだけです。

それでも進みたいという方のみこの先へはおすすめ願います。それでは中途半端な本編へ（＾・＾）――旦々

第61話 その声、誰の声？

彼は“孤独”だった。

世界を恨み、憎しみを人にぶつけても、決して潤すことができない“孤独”という喉の渴きを生まれたときから、彼は宿命づけられていた。

数年前。“あの世界戦争”ですべてを失った少年は真つ暗で雨が降りそうな空を見上げ、涙を流す。だが、そんな彼を気にかけるものは誰もいなかった…。生まれたときから“孤独”誰一人として彼に優しくするものはいなかった。

それから彼は何でもやってきた。ただひたすらに金持ちから金を盗み、容姿を活かしてバカな男を騙し、憂さ晴らしに弱い女に暴力を振るう。そんな毎日を淡々と過ごしてきた。

そんな生活の中、彼はこう思うようになる。自分は人からの“愛”に絶望したのだと

?????side

「…ちょっとあんた。いつまであたしについてくるつもり??」

桜時市の繁華街”街”。その路地裏にて俺は早足で歩きながら横のガキにそう問いかけられる。

チツ…メンドクセー黙つときゃいいものを…。俺がどこ行こうがテメーの知ったこっちゃねーだろ。

俺は内心で滅茶苦茶悪態をつきながら横のガキを睨みつけた。

「あゝあんなこと知るかよ。俺様の行く先にてめーが居るだけだろ??」

「はあ…あんたもしつこいわね?なんでそこまであたしにこだわる

わけ??」

はん!!別にテメーなんかこだわっちゃいねーよ!!自画自賛なんて痛いやつだ。…まあ目的はあるけどな。

「…ガキ。てめー、俺がてめーみたいな三下の小学生なんかに発情するんでも思ってたのか??あゝあ??」

「うっさいわね。あんたこそ男のくせしてそんな格好してんじゃないわよ。変態」

「あゝあ?俺のこの格好にケチつけんねかガキ??…上等じゃねーか。ぶっ殺すぞ??」

「ふん!!そんな女物の着物なんかを着たあんたにそんなこと言われても痛くもかゆくもないわ!!変態」

「…ガキ。俺達はもう我慢できねー。てめーの着てるそのオーダーメイドの制服ひんむいて路上に突き出すぞ?」

「あゝらご生憎様。あたしのこれは列記とした学校の売店に販売されていたSSサイズの制服よ??オーダーメイドじゃないわ!!」

「ちっせー事に変わりはねーじゃねーか??あゝあ??」

「さっきからあゝあゝあとうっさいわね!!あんたこそ日本名物

の【よいではないか？よいではないか？あーねー】されたくなきや
さっさとあたしの前から消えなさい！！目障りだわ！！」

「上等じゃねーか！！面に出ろやー！！！！！！」

思わず叫んだ俺に文句を言わうなよ？いい加減、この女がうざすぎ
たんだ。これだから女は嫌いなんだよ…。

俺はもう一度舌打ちをしてこいつを睨み続けた。

「はあ…何であたし、こんなやつにつき合ってたんだろ…」

おい。テメー聞こえてないとも思ってたのか？犯すぞクソヤロー
…！！！！

俺だって“言われなきや”テメーみたいなガキに付き合わねーって
の！！だから黙れ！！消えろ！！俺の前に姿を見せるな！！

「テメーみたいなガキに付き合わねーっての！！だから黙れ！！消
えろ！！俺の前に姿を見せるな！！犯すぞクソヤロー！！！！！！？
？？」

「はいはい。本音が口にでてるわよ。そんなことより、いい加減どつか行きなさいよ?? 風払うわよ??」

「あゝあ?死ぬのか?死にたいのか?それとも犯されたいのか? あゝあ?」

P i r r i P i r r i P i r r i P i r r i P i r r i P
i r r i P i r r i

睨み合い。額がくっつくかというくらいまで顔を近づけてる。だがそのとき、俺様たちは実に耳障りなその音に動きを止めた。

ウゼー…マジでウゼー。何でこんな持たなきゃいけねーんだよ。はあ…。

…でも。まあいい。このガキから解放されるならこれくらい我慢してやるーじゃねーかよ。

P i r r i P i r r i … P i

「…何。誰だか知らないけど今取り込んでんのよ。死にたいの? 風払われない? 寧ろ風払うわよ??」

「あゝあ？おつせーんだよテメー！！俺がどれだけ待ったと思ってやがんだ???ぶち殺すぞ!?!」

お互いに睨み合いを止め、顔を離す俺様たちはそれぞれ舌打ちをしながらケータイを取り出す。

だが、ムシヤクシャしていた俺様たちがケータイに出て初めて口にしたのはそんな八つ当たりの言葉だった。

『… I 。時間通りに…電話…した。だから… I は…悪くない…もん』

真備 side (少し前)

「…ふう。上手かった…。正宗!?!ごっつおさん!?!」

「ありがとう… You」

町の騒ぎもだいぶ収まりつつあるころ。俺とイヴと呼ばれた魔女っ娘はそれぞれ空になったいちご牛乳のパックを潰しながらそう礼を言った。

「ふむ。いやはや貴様ら2人ともよい飲みっぷりであったぞ。我も見ていて気持ちよかった」

「大げさだの正宗…。酒を飲み交わしたわけじゃないんだからもうちよい別の言葉があんだろ？」

「…そうだな。では述べておこつ。どういたしましてだ」

「おう！！サンキューな！！」

俺たちの言葉にも堅物らしく表情を揺るがせない正宗。俺はそんなこいつと笑みを浮かべあうのだった。

「…」

そんな俺達の様子を影からこつそりと、静かに見つめる彼女。イヴ。

その視線に気がついた俺は、彼女のその視線にニコリとほほえみ返

し、俺より10?ばかり低い彼女な頭をポンポンと撫でるのだった。

「…ん。Y o u…くすぐりたい…よ…」

「んあ。あ、ああ…すまねーな。なんかお前を見てるとなんでか知らねーけど…姉貴を思い出しちまってな…つい」

「…セクハラ…だよ？」

無表情で、そう告げるイヴ。俺は、彼女のその言葉に苦笑いしながら手を離すのだった。ああ…本当になんでだろーな…。なぜだか、知らないけど俺は彼女のことを姉貴と被らせてしまう。

性格はまったくと言っていいほど違う。容姿も姉貴のロリ体型（あれ？なんか寒気が…）とは反対のグラマーな体型。だけど…それでも…。

「ふむ。羽前。どうしてこの物静かな不思議娘が貴様の姉であるあの羽前風に似ているというのだ？容姿はともかくとしても、性格は月とすっぽんではないか？」

「…正宗。事実だとしてもそれを口にするのは、相当の覚悟がいることだぞ。下手をすれば…今すぐにでも姉貴から電話が…」

P i r i P i r i P i r i P i r i P i r i P
i r i P i r i

あゝあ…言ってるそばから、ほら。来たぞ。（ある意味）死の着信あり、が…。

突如として鳴りだした携帯電話の音。残念ながら、機械音痴らしい俺は持たせてもらえないが、姉貴や日向や知恵理。それに輝喜は持っていたはずだ。

ちなみに、輝喜の携帯は今に通じない。日向たちの話じゃ、機種変更はされていないが、着信拒否とか何とかというやつをされているらしく、通じないらしい。

まあ、今はどうでもいい話だけだな…。

「おい。噂をすればナントやらというやつだぜ？政宗。さっさと出るよ」

「ふ…ふん。これがまだ貴様の姉からとは限らない。ほら見る。番号は知らない番号からだ。きっとたちの悪いイタズラか何かだろう…」

そう言うと、政宗は携帯の数字の1の上にあるボタンを押し、耳に当てる。どうやら、着信ボタンを押したのだろう。

そう思った俺は、イヴと共に口を閉ざし静かに政宗の電話口の声に聞き耳を立てるのであった。

「…ああ。確かにそれは俺様だ。貴様、何故俺様の名前を知っている？ 新手のストーカーか何かか!？」

…「どうやら、電話の相手は姉貴じゃなかったらしい。正直、関係ないけどかなりドキドキしていた。」

政宗と謎の人物との電話口の会話は続く。

「…なに？ 去年のクラスメイトだと？ そんなこととうに知っておるわ。俺様はなぜ貴様が俺様の携帯の番号を知っているのかと聞いておるのだ」

元クラスメイト。と、いうことはうちの学園の生徒ということか…。

でも、うちの学園の生徒で政宗に直接電話するなんて… いったいど

んな強者なん

「ふう…さて。どういふことか説明してもらおうか…【須藤百合】」

そのとき、突然出てきた名前は、えらく聞き覚えがある名前だった。

ああ、お前だったのか…。そりゃあ…政宗に突撃電話するやつなんてお前ぐらいだろうから…。まあとりあえず政宗。

「…ドンマイ」

「…百合。今、羽前真備が貴様と電話する俺様を哀れんだ目できておるが…どうするっ？」

『問題ない。吊しておく』

「…って…！おい…！」

いつの間にかスピーカーにしたのか、ニヤリと顔をゆがませた政宗と携帯から聞こえてくる百合の声に俺は戦慄する。別に百合自身が怖い訳じゃない。

確かに百合も桜時学園喧嘩の強いやつランキングの末端とはいえ、名前を連ねるだけの強者であることは間違いない。

だけど、それでは上位を連ねる俺達には何の驚異にもならなかった。まあ…俺も日向も輝喜も、女に手を出すほど落ちぶれちゃいけないけどな…。それでも、百合ぐらいからは簡単に逃げ切ることができる。

…じゃあ、いったい何が恐ろしいかって？ふ。お前ら何もわかつちゃいねーな？百合はな…百合はな…百合は…【姉貴】と仲がいいだよ！…！こんちくしょー！！

P i r i P i r i P i r i P i r i P i r i P i r i P
i r i P i r i

…おい。なんで今日は何度も縦続きに電話がかかってくるんだよ。俺がでることはないけどな！！

自分が機械音痴なことを沸々と思いき知らされる。なんで…なんで…俺には携帯を買ってくれないんだよ。親父とお袋は…。コツコツ貯めた金で買おうとしたときも、日向や輝喜に止められたし…。はあ…。

機械音痴。直したいなあ…。切実にそんなことを願う俺。そのとき、ケータイの持ち主が電話に出る。と、言っても政宗が既に電話に出てるから、それに該当する人物はただ1人。

… P i

「もしもし。… I だよ？」

俺の隣で大人しく二本目のいちご牛乳を飲んでいた魔女っ娘。イヴだけである。

はい。じゃあここからは俺、空気なんで政宗とイヴの電話の会話をダイジェストにご覧ください。はい。じゃあスタート！！

「…ところで、忘れるところだったが、なぜ貴様は俺に電話をかけたきた？まさか、嫌がらせだとかは言うまい？」

「ん。… You 酷い。… I そんな悪いこと…しないもん」

「ふ。そうか。そうだな貴様がそんなことするわけがないな。すまない。だが、もし嫌がらせだった場合は貴様には退学という処分がまっていたがな」

「…分かった。… You の…言うこと正しい。… I 反省…する。…もう…知らない人には…ついて…行かない」

「うむ。よろしい。では、本題に入ろう」

「…分かった。… I は…何すれば…いいの？…“ルーン”に…電話…しろ？」

「…なに？羽前風に電話をかけるだと？うつけものが、なにうえ俺達があのようなじゃじゃ馬娘に電話などせねばならぬ。ほかを当たれ」

「…そんなこと…言っちゃ…や。…でも、任務の…ためだから…
I …ルーン…探…す…」

「ま…待て。落ち着け…！！冷静になれ…！！落ち着くんだ百合…。
平和的解決はいつの時代も必要だ…！！」

「…??…じゃ、どうするの？… I ルーンのことほっとく？…それとも… You が…なんとか…する？」

「…くっ！！分かった。俺様がなんとかしよう。地獄に堕ちる。須藤百合…！！」

「…うん。…そういえば… I 忘れてた。ごめんなさい…。じゃあ…」

「これから電話するからさっさと番号を教えろ…！！…ああ…ああ！
！ちゃんとメモした！！それと最後に1つ！！一生俺に電話するな…！！」

「…うん。…わかった。…これから。…ルーンに…電話するね？…サヨナラ」

… P i

「あゝあゝ！！イライラする！！あの女狐！！次会ったら出雲もろともぶつ殺す！！」

「…ルーン。…死ね」

…とりあえず、いろいろ突っ込みたい状況ではあったが、両者ともそうとうご立腹なため、小心者の俺には話しかける勇気など湧かなかった。

「…羽前真備」

「… You 」

まあ…一言だけ言えるとしたら…。これから俺は目の前の2人の憂さを晴らしにでも使われると思う。

その後。彼は2人に捕まり、放送を禁止せざるをいけないような姿にされるまでポコポコにされるのだった…。

恨むぞ…あね…き…。

「ぐええ…………お…お前…ら…少しは…手加減…ぐら…い…しろ…よ…」

そう言つて地面に横たわる俺は満身創痍。全身が蹴りに蹴られて痛い拳げ句、電気がでる携帯兵器のおかげで俺の体力はゼロ間近な状態だった。

それもこれも、俺の目の前にて、何食わぬ顔で佇んでいるこいつら

のせい…。

傷だらけとはいえ、立ち上がることは可能な体を必死に起動させ、俺は目の前の2人を睨みつけるのだった。

「ふむ。羽前真備。いや、ぼろ雑巾。いい加減に被害者面はやめろ。貴様が被害者なはずがないだろ？」

「いや！！俺、明らかに被害者だからな！？ちなみにおまえらが加害者な！？しかもさらっとお前、今、俺のことぼろ雑巾扱いしなかつたか！？」

「そんな昔のことなどとうに忘れたわ！！」

「3秒前のことだよ！？」

だが、いつの間にか再びいちご牛乳を取り出し、悪びれた様子なくそう言い切るこの男。政宗は、俺の睨みを軽く無視する。そして

「…??? You 不思議なこと…言う。… I は加害者…じやない…よ??」

バチッ！！バチバチッ！！

「よしイヴ。それはその手に持ったスタンガンを置いてから言おうか。そのせいで俺のHPは限りなくゼロにされたからな？」

「…これ。…スタンガン…じゃない…もん。…これ…ホット…ドック？」

「なぜに疑問系！？それより、そんな機械じみたホットドックがあったらぜひ拝んでみたいわ！！コンチクショー！！！！！！」

「…これの…ことだよ？」

バチバチバチッ！！！！！！

「だから！！それはスタンガンだああああああああああああああああああああああ！！！！！！」

そして　スタンガン片手に表情を変えることなく、そう言い切る魔女っ娘少女イヴはというと、俺の言葉を最早受け流してしまっていた。

そのアウェイ感に、俺は心のそこから叫ぶ。全身全霊。心の深いところから絞り出した叫びだった…。

だが、イヴは俺の予想を遥かに上回る存在であった…。いや、この場合。俺の予想通りだと言つべきなのだろうな…。

「クフフフ…クフフフ…クフフフ…ねえ。… You。 I
と一緒に…逝こ？…痛く…しないから…ね？ねえ？ You …ク
フフ…クフフフフフ」

「…なあ、政宗。俺、ようやく気付いたわ。なんでイヴが姉貴に似てるなんて言つたのか」

「…奇遇だな羽前真備。実は俺様も気がついた。こいつと貴様の姉との共通点をな」

不気味に笑みを浮かべるイヴ。その姿は本物の魔女だと偽っても問題ないくらいだった…。

そんなイヴの姿を見て、俺と政宗は顔を合わせる。そして、ついに結論へと達した。こいつは…こいつらは

「こいつら」

…最後に一言。これだけは言っておく…。女ってやつは…怖いぜ)
物理的に)？

ボタン…

「…おやすみ。…真備。… You の未来に…絶望が…あらんこ
とを…」

???side

「…ん。…重い」

「お…おい。何もわざわざ貴様が抱えなくともよいだろつ。俺様が
不知火あたりでも呼ぶから、そのままにしといて」

「 You ……じるねら」

「っ！？す、すまない…」

街の真ん中。スタンガンにて気絶した 気絶させられた、真備を細身の体。たった1つで抱えるイヴ。

その姿に近くにいた政宗はたまらずそう声をかける。だがしかし、イヴから返ってきた返答は、政宗が予想だにもしていなかったその一言。

さっき出会ったばかりとまったく同じ音質。高さのイヴの声。だが、政宗はその声に感じたことのない恐怖の感情が湧いてきていた。

まるで、目の前にいるイヴが今までとはまったく別の人になったような…。そんな感じが

「…ん。…じゃ、Y o u …いちご牛乳…ありがとう」

最後にイヴはそう言って、自分より明らかに体格がデカい真備を軽々と抱え上げ、去っていった。

魔女っ娘の服装を靡かせ、悩ましげで華奢な体を震わせるその姿を見つつ、政宗は解放されたように深いため息を吐き出すすでに中身が無くなっただけいちご牛乳のパックを一気に握りつぶすのだった…。

「…そういえば、羽前凧に電話しなければいけないんだっただ…たく、あいつらは俺様を誰だと思ってやがるのだから」

「ふうん。それであたしに電話してきたわけね…ホントつくづくついてないわねあんた…」

『ほつとけ。元はといえば貴様のせいなのだから、今の俺様は貴様を足蹴にしたくてたまらんのだよ』

時は戻って、ここは街の裏路地。薄暗いそこにて1人の少女が呆れた表情で電話に出ていた。凧である。

そしてもちろん電話の相手は桜時学園の生徒会長であり、さきほどまで真備とイヴと一緒にいちご牛乳を飲んでいた周防政宗その人であった。

「はいはい。分かった分かった。そんなことより結局なんの用なのよ？まさか何の用もなしに電話してきたわけじゃないんでしょ？」
『羽前凧。貴様、少しは俺様の話を……いや、やはりいい。貴様らはそういうやつらであつたな……』

「あら。お誉めいただき光荣だわ。生徒会長様」

『はあ……美濃輝喜がいなくなって少しは大人しくなると思つたのだがな……まあよい。それより用件であつたな。俺様直々に動くのだ。ありがたく思え』

「はいはい」

尊大な態度。上から目線。自分を一番だと考える自意識過剰。それが、この男。周防政宗なのである。

凧自身も去年のクラスメートであつた政宗のことを分かっていた。だからこそ、彼の語りは受け流すのが一番なのだを知っていたのである。

「……え？百合からの伝言って……いったいどうしたつていつのよ？」

『分からん。正直、俺にもよく意味は分からんから何とも言えんの

だ。だが、貴様には分かるらしいのだが…。それと、もう一つ。この伝言の大元は須藤百合ではないのだ』

「は???…百合からじゃないって…じゃあ誰からよ?」

『…貴様をよく知っている奴からだそうだ』

「だそうだって…あんたは知らないの?そいつのこと?」

『…ああ。よくは知らない名前だった。だが、これも貴様に伝えれば分かるそうだ』

「あたしなら…?」

その言葉に凧は懷疑そうに眉をひそめる。あたしのよく知っている奴…いつたい、誰? だがしかし、その応えはすぐに知ることとなった…。

「…もったいぶらないでさっさと言いなさい。あたしだって今イライラしてるんだから」

『…その者はこう名乗ったそうだ…“セツ”と』

「…いい加減にしなさい…って“セツ”?」

その瞬間。凧の頭の中で何かが駆け抜ける。“セツ”その名前は二週間。忘れるはずもない名前であった…。

「…っ！？政宗！！あんた！！百合からそいつの特徴とか聴いてないの！？」

『…？？あ、ああ。聞いている。確か、このことを俺様に伝えてきた須藤百合が言うには　鈴のような綺麗な女声なのに男言葉だったそうだ』

その言葉に、凧は確信を得た。“セツ”雪という意味を持つ言葉。そして彼女の名前の頭文字…。

そう、彼らが話す“セツ”とはきっと

「…“セツ”…“刹那”」

ポニーテールにした水色の髪に、まるで空のようなブルーアイ。そしてちよっぴり虫が苦手な彼女のことだと…。

『…??なんだ。やはり貴様の知り合いであったのか？本当に貴様らの知り合いには変わったやつらばかりが集まるものだ…』

「…それはあんたも含まれるってことに気付きなさいよ政宗？でもそうね…。いろいろあったんだけど、その子はあたしの知り合いよ。妹みたいなものかしら？…でもそっか、あの子。今、この町にいるんだ」

『1人で勝手に完結するでない。1人で。まったく…』

電話の向こうから聞こえてくる明らかに不機嫌な政宗の声。だが、今の凧はその声を気にすることはなかった…。いや、むしろ気にすることはできなかった…。

なぜなら…このとき、凧の心の中で、また別の可能性が浮かんだからだ。

「…まさかね。まさか」

もしかしたら…もしかしたら…といった希望が溢れ出てくる。だけど、それと同時に、それはあり得ない幻想なんだ。という言葉も出てくる。

その内容は…言わずもがなだろう。彼女がこの街にいるのなら…もしかしたら　そして、その幻想はすぐに現実となる。

新たに発せられた政宗の言葉。その言葉に…今にも泣き出しそうな表情だった凧は

『…で。その人物からの伝言なのだが　』

瞳にためた滴を抑えることができなくなるのだった…。

【美濃輝言は帰ってきた。ただし、本当のレリエルとなって　】

「…ふむ。ああ…ああ…すまない正宗。ふむ、それではな」

P i

「ふう…やれやれ、なぜ私がこんなことをしなくてはならないのか…電話した相手を間違えたな…」

「あっひゃっひゃっひゃっ…自分で電話しといてそりゃないっしょ！…須藤部長…！あっひゃっひゃっひゃっ…！」

凧がその言葉に涙を流してから数分。場所は変わってここは街の一角にある喫茶店。

そこには、桜時学園の制服を着たポニーテールの美少女と全身にピアスをつけた少年がその店内にある机の1つに腰掛けている。

お馴染み、桜時学園の新聞部の部長【須藤百合】と部員の【幹出雲】であつた。

「あゝもう…！…うるさい…！ゴキ虫…！踏みつぶされたくなければ、その心の底から不愉快にさせる笑いを止める。ついでに死ね」

「相変わらず俺ってひどい扱いだな!？」

「人類の常識だ」

「もはや生態系規模!？」

「ついでにその辺に転がってる石ころと同じくらいの存在だ」「いきなり超がつくほど規模が小さくなった!？」

「何を言う。石ころ1つ1つにもちゃんとした物語があるのだぞ？例えばその石ころは隕石かもしれないし、その石ころは賢者の石かもしれないぞ？それと同等に扱われるのだから、寧ろありがたく思わんかバカ者」

「う…それを言われるとあるあ　ねえよ!!危ねえ危うくだまされるそこだった…」

「…ちっ」

「舌打ちしやがった!？」

「ああゝあ。後少して石ころ程度の存在が本当に石ころと同等になるはずだったのに…」

「しかも本音がだだ漏れ!？」

「なんで断るかな　せつかく石ころと同格になるチャンスだったのに」

「しかも石ころの方が格上なのかよ!？」

『おい!いい加減にしるよお前ら!!!こつちとら緊急事態で、ぜんぜん問題nothingな状況じゃねーんだよ!!!少しは人の話を聞けや!!!』

そのとき、唐突に2人の声とは別の声が彼女たちの耳に届く。

これには、2人の会話のあまりのうるささに白い目を向けていた喫茶店の客全員がピクリと肩を震わした。

スピーカーモードにしていなくても関わらず、店内に響きわたった明らかに2人のものと違うその声。その主はもちろん。幹出雲が持っている携帯電話の向こうからの声であった。

「…ああ。そういえばお前とも通話中だった。いや、すっかり忘れてた」

「あゝそうだった!!そうだった!!そついや電話してたんだつたな!!俺つちたち!!きゃははは!!」

『お前ら1回死ね!!氏ねじゃなくてマジ死ね!!くそ…なんでこんな奴らに頼まなきゃいけないかったんだよ…はあ』

電話の向こうから漏れる溜め息。その溜め息に哀愁が漂っているのはおそろしく気のせいではないだろう。

このとき、彼らと同じ店内にいた他の人たちは彼らの電話の相手に対して、一重に同じことを思っていた。

「ご愁傷様…と。」

「…まあ、冗談はここまでにしてだ」

『…なあ？こんな言葉を知ってるか？イジめる方は冗談でも、イジメられる方はいつでも本気って言葉』

「知らん。それに言っただろう。冗談はここまでだと」

『…そうだったな』

喫茶店の客はこのとき、心底驚いていた。彼女の　百合の出す雰囲気がさっきまでのそれと、まったく別物だということに。

それは、電話の向こうの声の主も同じであった。そんな彼女の変わりように　電話の相手である彼は…。

『…ありがとうな、百合。経緯はどうあれ助かった。礼を言う』

「ふ。お前らしくもない。私に礼など不要だ。知恵理を見捨てたのも私であるからな…」

『…それでも、ありがとう。百合』

「…何。私は学園の情報屋の仕事をしたまでだ。それに、これはサービスだよ。知恵理が1つ大人になった記念のプレゼントだと思っ
ておいてくれ」

『…ん？ちよつと待て。知恵理が1つ大人になったって？』

「おつと。私としたことが口が滑らしてしまった。では、もう切る。

じゃあな 【不知火日向】」

『あつ！！ちよつと待て』

P i

電話が切れる音が、再び喫茶店の店内にこだまする。そして、電源まで切った携帯電話を机の端におくと百合はすでに冷え切ったコーヒーに口を付けた。

クールで知的臭が漂うその情景。それを出雲はニヤニヤと嫌らしげな笑みを浮かべながら同じく自分のぶんのコーヒーに口を付けるの

だった。

「ははは。やだなあ須藤部長。あんな言い方：まったく、人が悪い」

「ふ。貴様にそう言われる日が来るとは思ってもいなかったよ幹。それに私の言っていることは間違っではないなかったであろう?」

「…そうでした。間違いありません」

そう言っつて、彼らはコーヒーをすべて飲み干す。そのとき、2人の表情には笑みが見えていた…。

日向side

「…まったく、百合のやつ。切りやがった」

ガチャンッ! ! ! ! !

桜時市の繁華街である街。人がにぎやかに流れる歩道にポツンとあるその公衆電話にて、俺はいらだち気味に受話器を戻す。

はあ…携帯さえ。携帯電話さえ壊れてなければ…俺は直接、凧に電話できたのに。なんであんな面倒なことになったんだか…。

そう思った俺は、1人大きなため息をついたのであった…。

「ヒナ君。【傷】大丈夫？痛くない？」

そんな俺を心配そうに見つめる2つの瞳。それは、この数十分の間、ひたすら探し続けた瞳であった。

「ん？ああ。問題nothing。平気だよ…【知恵理】」

「本当に？本当に…大丈夫？ヒナ君。ゴメンね。私のせいであんなことになっちゃって…」

「…問題nothing。気にすんなって知恵理。それに…あれは

」

「ただ、まさか…まさかあんなことになるなんて…俺はあのとき想像もしていなかった…。」

俺はあのとき、運命の残酷さというものを再び思い知らされることとなった。貫かれた傷が痛い。血も…流れている。

でも俺は、そんなことより胸が痛かった。物理的にではなく。心理的な意味で…。くそ！！なんで…なんで

「あれは　あの分からず屋のせいだよ！！」

これより遡ること十数分前。日向は予想だにできなかった再会をしていた。

その内容こそ、百合、政宗を通して凧に伝えられた内容である。その内容に…日向は喜び。日向は…悲しんでいた…。

ゆるりと過ぎゆく時間。その時間の流れは、堕ちた彼の心を取り戻すことは…できなかつたのであつた…。

「…じゃあ、そろそろ説明して貰おうか。【美濃輝喜は帰ってきた。ただし、本当のレリエルとなって…】この言葉の意味を…なあ」

そして、日向の瞳は銀色の彼女のそのまた後ろへと向けられる。そこにいたのはもちろん

「 【刹那】？ 」

彼らの止まっていた2週間の時間が今 動き出した。

第62話 孤独のレリエル（前書き）

テスト期間につき更新できずすみません。

では第62話（ ^ - ^ ） | 旦

第62話 孤独のレリエル

日向side

「…【刹那】。あの言葉どついう意味なんだ？」

春も終わりに近づく夕方。まだ日はだいぶ高いのだが、それでも肌を刺す風はまるで氷のように冷たい。そんな空気を俺は学ランの上から感じていた。

そして、それはもしかしたら目の前に彼女がいるからかもしれない…。そう思う自分もいる。

なぜなら、彼女のその水色の美しい髪と、透き通るようなブルーアイ。

それがまるで、俺には降り積もった雪のような色に感じたからであつた…。

「…そのままの意味だよ。もう…輝喜のやつはオレにも、それに水城にもどうしようもできなくなってる。つまり…暴走してんだよ」

「暴走…」

オウム返しに返す俺の言葉に彼女はコクリと頷く。だが、彼女の言葉。それで俺はすべてを悟っていた。それは、十数分前。暴走するあいつの姿をこの目で見ていたからである。

【レリエル】となったあいつの姿を

知恵理 s i d e (十数分前)

薄暗い街の裏道。人が3人も横になれば通れなくなるようなその道。そんな普段なら絶対に入らないその道に、私はいた。

ユリちゃんとイズ君の新聞部コンビと別れた私は、2人から聞いた情報をもとにこの場所までたどり着いたのです。

そして、今、その機会が訪れていました。私のすぐ目の前。すぐそこに 【彼】がいます。

私はこの瞬間をこの半月、どれだけ夢に見たか分かりませんでした。でも…これは夢なんかじゃない。私が…うんうん。私達がずっとずっと探してきた【彼】は

「…来ると思っていましたよ…ここに。はあ…これでも、目立たないように行動していたつもりでしたが…まさか、あなたに見つかるとは…予想外でした」

「はあ…はあ…はあ…」

私の…すぐ目の前にいるのだから。

いったん見失ってしまい。【彼】を探すために走り回った私は、膝に手をつけて息を整えます。

でも…【彼】は私の様子を気にかけることなく1人で話を進めていっっちゃう…それは、半月前の【彼】にはあり得ないことでした…。

半月前までは、一緒に笑いあって、楽しんで、時には怒られたりするほどこんちゃんなことしかけど…。

それでも…永遠に続くと思っていた絆。途切れてしまった絆。その切れ端が

「はあ…はあ【コウ…君】…はあ…はあ…」

「…その呼び名で呼ばれるのも久し振りですね」

私の呼び方に本当に懐かしそうに微笑むコウ君。でも、長い付き合いの私には分かってました。

コウ君のその表情。それは…すごく悲しいときにする表情だということを

「…先ほど、あなたとご一緒に日向も見ました。一緒にいらっやいましたよね？すごく…安心しました」

「コウ…君？」

「俺は、あなた方4人を引き裂いてしまったかもしれない。その思いが…心残りでしたから…」

「……………」

…まるで、自らの罪を吐き出す懺悔のようなコウ君の言葉に、私は何も言えませんでした。

彼の出す雰囲気。それがまるで、違う誰かのように思えたからです。

でも、今までとまったく違う雰囲気でも、ただ1つ。分かったことがあります。それは

「…ですから、さきほどあなた方2人を見たときにはホツといたしました。俺がいなくても…みんなうまくやっていったみたいで…です」

それは　コウ君が、後悔している。と、いうことでした…。すごく…すごく…後悔してしまっているということでした…。

「…ねえ、コウ君。これから…どう…するの？」

「……」

私の言葉にコウ君は…何ともいえないような表情を見せる。それは私達でも見たことない表情でした。

でも、私には分かる。あれは…あの表情は

「…どうする…とは？知恵理。それはいったいどういう意味の言葉

…ですか？」

あの表情は　　コウ君自身が、まだ迷ってる…ということだと。

「…決まってるよ…コウ君。あの日…あのとき、私達は友達じゃなくなっただって…そう思ってるんでしょ？コウ君？」

「…何か、間違っていますか？」

最初にレリエルさんとして会ったときよりも、さらに冷たい声。昔の　　2週間前の私なら、たぶん逃げてたと思う。

だけど、私は変わりたい。うんうん…変わらなければいけないんです。ヒナ君やみんなみたいに…強く…変わらなければいけないんです。だから

「大間違いだよ…コウ君。だって私達　　」

だから　　私はその一步を踏み出します。私自身のため、そして何よりも大切な…【友達】のために…。

「だって私達　これから先もずっとずっと…ずっと…【友達】な
んだから…ね」

輝喜 side

「だって私達　これから先もずっとずっと…ずっと…【友達】な
んだから…ね」

「…っ！！」

あまりにも純真で、あまりにも無垢なその言葉。それは今の俺にと
つてみれば毒そのものでした。

正直、俺は知恵理に見つかってしまったことを後悔していました。
最初、知恵理に気付かれたとき、そのときは他の3人ではなく知恵
理に見つかったことに安直さえしてしまいました。

ですが、それは大きな間違いでした。なぜなら…俺の知らないこの
2週間。たった2週間で

「だからコウ君。私達は気にしてないから…ね。帰ろ。2週間前に」

彼女は…俺が知らない彼女になってしまっていたのです。大きいよ
うな、小さいような分かりにくい変化。

ただ1つ言えるのは、彼女は俺の知っていた姫乃城知恵理ではない
ということでした。

「…あなたは、何を言っているのですか？」

俺は内心に走る動揺を悟られないよう声の震えを止めるので精一杯
でした。いや、本当は震えていたのかもしれない。

ああ…そうです。本当は分かっていました。俺にとって、一番の敵
になるのは

「はははは…ホントに何も変わってませんね…変わらず…あなたは
ホントにバカです。あなたは、俺に戻れと言うのですか？あのとき
に…あの場所に…俺に戻れと…言うのですか？」

「…うん。そうだよコウ君。大切なことだからもう一度言うね？戻ろっ…コウ君。2週間前に」

一番の敵になるのは 日向でも真備でも凧でもなく…彼女。 姫乃ヒメノ 城知恵理ジョウチエリだということが…。

分かっていました。分かっていたはずなのに…なのに、なんで俺は

「ふざけないでください！…！！！！！！」

なんで俺は 彼女に会いたいと思ったのでしょうか。その理由が…俺には分かりませんでした。

恋などなんだのでは決してありません。ですが、俺は彼女に…並々ならぬ感情を抱いていました。

「コウ…君…」

「ふざけないでください…知恵理。あなたは…あなたは俺に何を言ってるのか本当に分かっているのですか？あの日々を壊した俺にど

うしろと言つのですか？それ以前に…俺はどう日向達に詫びればいいのかですか…あなただけじゃなく、あなた方全員の絆を裏切った俺に…どう謝ればいいのか！？さあ！！答えてください！
！知恵理！！」

記憶がない俺。ですが、俺はまだまだ14歳のガキ…。そんな俺が

「…気にすることなんて…ないんだよ…。気にすることなんて…無駄なんだよコウ君。私もみんなも…コウ君のことが…好きだから」
「…っ!？」

そんな俺が 周りにいた女性の方で、一番の温かさを持つ彼女に…
【母性愛】を感じたのは必然だったのかもしれない。

そう、俺は…ずっと俺は彼女を…母親のように慕っていました。温かく、皆を癒してくれる母親のように…。ですが、だからこそ俺は

ギリギリ…!…!

「…動かないでください、知恵理。動けば…必ずや俺の矢が…あなたを射抜きます」

「コウ君…」

俺は 孤独な存在になることを決意したのです。彼女を、俺に居場所を造ってくれたみんなを…守るために…。

孤独の【レリエル】となる決意を…。

「……………」

ギリギリと嫌な音をたてる恍閃弓の光の矢。自分自身、どうしようもない手の震えが矢にも伝わってしまったのです。自ら矢を彼女に向けるなど…俺自身が拒絶反応を示していました。

ですが、それでも俺は矢の鏃を彼女へと向けます。彼女でも分かるような 拒絶の証として。

「…それが、コウ君の答えなんだね？」

そんな悲しげな顔をしないでいただきたい…。俺に、その顔は苦し
みでしかありませんから。

俺は、その気持ちを悟られないように無言で矢を摘む指に力を入れ
ました。顔がこわばってるのが分かります。

こういうときだけは…右目の眼帯が有り難く思いました。少しでも、
歪な表情をした自分の顔を隠すことができましたから…。

「…はい。これが俺の答えです知恵理。俺はもう…あなた達とは違
います。そして俺は…“美濃輝喜”とも違うのです」

そうです。俺はもう…“美濃輝喜”ではないのです。あの楽しかつ
た日々との決別の意味を込めて、そして俺自身が闇にいきるとい
う思いを込めた名前。

それが今の俺

「今の俺は…“レリエル”あなた達の知る俺ではありません。です
からも…」

ザンツ!!!!!!!!!!

「…あなた方と、相容れることはないでしょうね」

「…コウ君」

加減することなく、放った光の矢。それは俺のいろいろな思いとの決別を乗せた矢でした。

美濃輝喜という名前。過去の楽しかった日々。知恵理からの脱却。昼に対する愛着…それら全てを乗せた光の矢。それを

ツウ…

それを俺は、知恵理の頼すれすれに放ち、かすらせたのでした。

ですが、知恵理は避けませんでした。気づいてなかったわけではありません。一歩間違えばきっと…彼女の頬に入ったかすり傷だけではすまなかったはずなのに…彼女は避けませんでした。

まるで、俺が矢を外すことを最初から分かっていたかのように。いえ、きつと最初から分かっていたのでしよう。

彼女は…最初から俺を信頼しきっていました。こんな状況でも…彼女は未だに俺を信じきっていたのです。

ああ…やはり、そうですね。このとき、俺は自らの最大の壁を再確認しました。今の俺にとって一番の敵は日向でも真備でも風でもなく。やはり

「…それでも、私はコウ君のこと大好きだよ」

やはり、彼女ちえりであるのだと。そう確信したのです…。

「ト…ト…ト…」

「…どういふつもりですか知恵理。なんなんですか。いったい…あなたは何なんですか!？」

ギリギリ…!!

狭い裏路地に響く足音と弓を構えるギリギリという音。迫り来る恐怖。死ぬかもしれないという状況ではなく、絶体絶命というわけでもありません。

ですが、俺にはこの状況はその2つとほぼ同じ意味を持つような状況でした。俺にとって…優しく微笑みながら近付いてくる彼女は…眩しすぎたのです。

【光】の能力者である俺でさえも…。

コト……コト……

「何です…その目は、その顔は、その表情は、あなたは…あなたは俺にどうしろというのですか!？」

「…うんうん。コウ君は、ただそこにいるだけでいいよ。今度は…私がコウ君を迎えに行くから」

どんどん迫り来る知恵理。その足取りは重くもなく、軽くもない。でも、その足音は俺の頭の中にて何度も何度も響きわたりました。

やめてください。こっちに…来ないでください。そんな…そんな優しい目で俺を見ないでください…!!

ですが、俺の願いは彼女には届かない。俺の決意は彼女には届かない。お願いです…お願いですから…もう、俺のことは放っておいてください…。お願い…ですから…。

知恵理 side

「何です…その目は、その顔は、その表情は、あなたは…あなたは俺にどうしろというのですか!？」

頭の奥へと届くコウ君の声。そんなコウ君が出す言葉一つ一つは、私にとって辛いもの以外の何でもなかった。

この2週間…うんうん、あの日。コウ君は変わってしまった…。あのいつも笑ってたコウ君じゃなくなっちゃったということは出会った瞬間から分かってました。

でも…それでも、私にはコウ君の言葉一つ一つが辛いものでした。

だけど、私にはどうしてもコウ君が本音を言ってるようには思えませんでした。だから私は　コウ君の構える恍閃弓に臆することな

く、前に進み続けます。

コウ君を…信じてるから。

「…うんうん。コウ君は、ただそこにいるだけでいいよ。今度は…私がコウ君を迎えにいくから」

ビクリと大きくコウ君の身体が震えるのが分かりました。動揺してるんだね…コウ君。だからこそ、私は前に進みました。コウ君を信じてるから。

「や、やめてください。来ないで…来ないでください…俺は、俺は」

「俺は…何？コウ君。その先は…何て言おうとしてるの？」

「っ！？そんなこと！！あなたには関係ありません！！俺にはもう…この道しかないんですから！！レリエルとなる道しか！！」

本当は分かっていた。俺は…の言葉の後、どんな言葉が来るのか。うんうん、違う。正確には分からない。だけどきっと

今出てきたコウ君の言葉とは真逆の言葉となつてたと思う。きっと
…きつと…コウ君はそう言ったと思ひました。

だから、私はコウ君にこの言葉を贈りました。一緒に…あの楽しか
った日々に 帰るために。

「私。姫乃城知恵理は、あなた。美濃輝喜の永遠の友達…変わる
ことのない親友です 来て【時の秒針】」

私は願う。思いを乗せて、そして呼ぶ。私自身があなたの味方であ
る証を…。私の魂を

「誓います。私の魂にかけて、この銀時計に…！」

現れた銀時計 時の秒針を両手で包むように胸に抱きしめ、私は
精一杯の力を込め誓いました。

そして、この誓いは私自身に向けた誓いでもありません。私自身…絶
対にコウ君を裏切らないという誓い。銀時計に込めた…願い。同じ
時を一緒に刻んでいこうという願いを。…だけど、私の願いは

なんで…どうして…？だけど…私はこれだけは…分かりました。私はまた…彼に救われたのだと。私はまた…彼に…頼ってしまったのだということ。

「あゝあ。…思わず投げちゃったから壊れちゃったかもな…ケータイ」

でも…それが私には…堪らなく嬉しかった。やっぱり私は…彼なしには生きられない。

なぜなら、私にとって彼は…すべてなのだから。

輝喜side

「あゝあ。…思わず投げちゃったから壊れちゃったかもな…ケータイ」

俺が激情に駆られたばかりに放ってしまった矢。それを切り裂いた

彼は、そう言いつつ日本刀の刃を俺へと向けていました。

その目には変わらない　いえ、変わらないように変わってしまった色がありません。漆黒に彩られたビー玉のような綺麗な瞳。俺も同じ色の瞳のはずですのに…俺なんかとは比べものにもならない純真な瞳がそこにはありました。

純真な…知恵理を守りたいと願う瞳が。俺が一度も見たことのない瞳が。

「…あなたは…だ、だれ…なん…ですか？」

「はあ？お前…たった2週間で親友の顔すら忘れちゃったのかよ…」

ですから、俺が思わずそう問いかけてしまったのには無理ありませんでした。

そんな俺の気持ちを察してか、初め疑いの眼で俺を見ていた彼は、深く息を吐き出します。ですがそれでも…彼は彼でした。

「はあ…分かった。問題 nothing。そういえば…レリエルと
してのお前にはまだ自己紹介したことなかったな…」

その顔に浮かんだのは今度こそあの頃と変わらない笑み。それは、知恵理と同じく敵ではなく、親友として俺を見ている目でした。

みんなを裏切った…俺を。

「で？俺が誰かって話だよな？」と、言ってもお前に対して改めて自己紹介すんのもあれだし…。んじゃまあ…今回はこう名乗らせてもらおうかな」

そして、日向は紅翼を俺へと向け言い放ちました。あの日…桜の木の上で…俺が言った言葉を

「誰って…俺だけど？」

それはあの日。あの運命の日。俺が初めてレリエルとして彼らと会ったときの別れ際の言葉とまったく同じ言葉でした

第62話 孤独のレリエル（後書き）

日「そういえば11月22日はいい夫婦の日らしいな。なんかこの間までポッキーの日とか言ってた気もするんだけどな…」

凧「なに？日向？あんたそれ…自分はいつでもいい夫婦なんだぜ？アピールなの？ヒューヒューさすがリア充は言うことが違うわね」

日「ばっ！？ち、ちげーよ！？第一俺とチエはまだ結婚してねえ！？」

凧「あら？別にあたしは知恵理とだなんて言っていないわよ？（…）」

真「しかもお前…今、まだって」

日「だあああああ！！はめやがったな凧！！！！」

凧「はまるあんたが悪いのよ。バーカバーカ鈍感」

日「ぐぬぬぬ…！！」

真「はあ…連載再開してもこいつらは変わらないな…はあ」

輝「は〜い！！やってきましたサプライズタイム！！」

日&真『…出たよ。一番めんどくさい奴が』

輝「あははは〜ひつど〜い。まあそれはさておきヒナタンへ夫婦度
チェックの質問タイムといきま〜す。それではれっつら〜い!」

日「はあ…だから夫婦じゃないって言ってるのに」

日「…はい。まあこんなもんかな。これで俺たちが夫婦じゃないつ
て立証されただろ?」

真& amp; 凧『んなわけあるかあああああ!!!』

日「は?何でだよ!?!これのどこが夫婦なんだよ!?!意味わかんね
ーよ!?!」

凧「それはこっちのセリフよ!?!なんなの!?!ねえあんた達なんな
の!?!はつきり言ってそこらの新婚夫婦よりたち悪いじゃない!?!」

真「毎日メシは手作り。疲れたときのマッサージはともかくとして
…膝枕で耳掻き。週1で一緒のベッドで寝て…果てはこのむむむ、

胸揉んだって何だよ!？」

日「いや…それはこう…こけた拍子に…むにと」

真&風『謝れ!! 全国の非リア充全員に謝れ!!』

作「謝れ!と、いうわけで次回予告。次回の時の秒針は

それは避けられない闘い。俺達は…どこで道を間違えたんだろうな…。

次回【天使VS墮天使】

日「問題nothingだぜ!」

知「あれ…みんなどうしたの?」

輝「…ああチエリン。いえ、ただお2人の夫婦っぷりを確かめてただけですよ。まったく…あなた方は…キスこそしてませんが、これではほとんど夫婦と変わらないじゃないですか…」

知「ひよ?キス?したことあるよ」

輝「……………え?」

次回に続く!!

第62話 ???秘密???

重大なお知らせです。

この小説を止めさせ 冗談です（笑）

この小説を読んでいただいている皆様には本当に感謝しております。
この場を借りてお礼を申し上げます。

さて、ではこのたび我が小説では小説の改正を行っておりますが、
それもそろそろ35話となろうとしております。

その過程におきまして、かなりストーリーが変わっておりますので
その注意を呼び掛けさせていただきます。

大まかな流れは変わっておりませんが、ぜひ、また読み直すことを
お勧めいたします。

特に、一番変わったのは輝喜についてです。輝喜の魂狩【恍閃】
この特性の設定を変えようと思えます。

詳しくは○○話を参照してください。

それでは皆様。これからも時の秒針をよろしくおねがいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1965m/>

時の秒針

2011年12月8日00時52分発行